Амир Хисамутдинов
Русский Нагасаки
или Последний причал
в Инасе
稲佐にて最
Владивосток • 2009

表紙

長崎のロシア人と稲佐にての最後の係留

アミール・ヒサムトデノフ
ウラジオストク　２００９年

紹介文　（本の裏表紙に掲載）

本書は、著者が日本の財団から研究助成を受けて、日本で１年間の実地研修（２００６年～７年）を行った際に収集した資料と、日本、ロシア、アメリカ等の図書館の所蔵資料から得た事実を基に執筆したものである。「日本のロシア人」研究書シリーズの第２作目である本書は、２００年以上に及ぶロシア人の長崎滞在の歴史を初めて記述し、長崎におけるロシア人コミュニティについて著している。日露の隣国友好関係に関する多くの情報は、時間が経過し喪失してしまっていたのだが、著者は、それらの失われていた情報を復興しようと試みたのである。１９世紀に出版された回顧録やアーカイブの資料を広く活用した結果、本書は、歴史学の業績たるに不可欠である真実性が付与されるものとなった。本の構成は、年代順に概説形式となっている。著者は、ニコライ・レザノフやエフイム・プチャーチンのような歴史上著名な人物だけではなく、多くの無名なロシア人についても語っている。長崎で日本人女性と結婚したロシア人もいる。長崎の地に終生留まった人々の名前が、この本には記されているのである。それ故、著者はこの本を、「ロシア人、長崎での愛と死」と題したい想いである。収集資料全てを綿密に分析しできあがった本書は、日本南部のロシア人の存在について扱った類いを見ない参考文献といえる。それに、資料収集の間に著者が綴った実地調査日誌も興味深い。稲佐（長崎市）のロシア村住民の詳細を明らかにした一冊である。

著者より

長崎港はロシア人にとって、長い間、日本への公的な玄関であった。ロシア船は碇泊や修理のために、この港に立ち寄った、船の乗組員達は長い航海の後、治療のために、ここに滞在した。ロシアの極東の住民達は温泉での休息のために、ここへやって来た。我々の同国人達がここに滞在したという最大の証拠は、日本にあるロシア人墓地である。この本は「長崎におけるロシア人の愛と死」と呼ぶことができる。

著者の長崎への最初の旅行は１９８０年代の末であった。ソ連邦地理学会の沿海州支部（現在、アムール地方研究学会）の研究管掌者としての私は屡々、極東海運会社の社長補佐メテレフと出会った。かって、彼は知り合いとなった、海軍大臣ユーリア・ミハイロビッチ・ボリメルと。彼（？　＊）は露日関係での私の研究に興味を持っていた、そして、提案した、代表団の科学上の相談員になることを、日本に派遣される、博覧会「長崎－旅行－９０」の組織化の交渉のために」。これは忘れられない旅行であった。その過程で、

組織の問題を解決しただけではなく、素晴らしい町を知れることになった、自分の地理的位置とウラジオストクを思い出させる。帰宅し、我々は展覧会の準備の仕事を継続した：モスクワとレニングラードに旅行した。クンストカメラ、海軍博物館、その他の保存館の展示物の提供について話し合った。それらの建物には、ロシア人の長崎訪問の歴史に関するユニークな資料があった。

その時から、大いに時は流れた。私は思った、もう二度と長崎へ行くことはないであろうと。が、諺がある、人が思えば、神はかなえてくれるという。極東技術大学の日本語講座で、私に書類を受け取るようにとの提案があった、日本財団の奨励金の：本当のところ、もらえるとは思っていなかった。日本研究の仕事において特別な貢献をしてはいなかったので。しかし、とにかく書くことにした、「極東ロシアにおける日本文化の影響」のテーマに従事した旨を書いた。言葉のないほど本当に驚いたのだが、ある時、日本の大使からの電話が鳴り響いた。彼は語った、私が日出国の日本で１年間、私のテーマで研究に従事できると。日本でロシア人が在住していた多くの場所を訪れることができると、その中に長崎も。

現代の読者は長崎のことを全く知っていない。ピクリの小説「Ｔｒｉ　ｖｏｚｒａｓｔａ　Ｏｋｉｎｉ－ｓａｎ」か、オペラ「蝶蝶婦人」を思い出すだけであろう。とにかく、長崎については多くの人が書いていた。著者はこの町におけるロシア人の生活に捧げられた沢山の文献を調べた。最も価値ある文献は「海軍選集」であった。すなわち、その頁の中に、ゴンチャロフの回想記が出た。そこに、初めてプチャーチンの報告が印刷された。良港である長崎に立ち寄った船の船長や将校達の数多くの復命書や記事。

単行本がある、特に、長崎を訪れた有名な活動家であるクルゼンシュテルンの。大公アレクサンドル・ミハイロビッチは一夜妻の日本人について話をしていた。現在ではほとんど忘れ去られているクレフトフスキーのジャーナル的なスケッチは価値が付けられない。ニコライ皇太子の訪問は画期的であった。それについてウフトムスキーが語っていた。

現代のロシア人研究者達は同じく、長崎のロシア人を避けては通れない。この町の歴史の中の若干の事実をグザノフが与えた、ロシア人墓地を部分的ながら紹介した。彼の本は日本で出版された、削除を伴って、「日本におけるロシア兵の墓地、１９０４年－１９０５年」の名称で。ボルグルチェフの伝記便覧は非常に価値があった。ロシア人の日本訪問については、グルズデフが情報を与えた。日本人の著作なる本も出版されている、長崎におけるロシア人の生活全般についての。残念ながら、ロシアの東方学者であるポダルコは自分の本で着目していなかった、日本における我々の外交官の活躍とロシア人社会の生活に。

最近、疑いなく、電子手段が重要となっている。特に、フリゲート艦アスコリド号についてのウイリアム・マコミの概説を、世界ネットで見つけた。この著者はいくつかの刊行物をプチャーチン艦隊の長崎訪問に献げていた。長崎の歴史と文化について、雑誌「十字路」で、アメリカ人達はこの町における自分らの社会についてだけではなく、ここに住んでいたロシア人についても詳しく書いていた。特に、長崎についての沢山の資料をブライアン・アアブルケ・ガフネイが公刊した。彼は古い葉書の素晴らしいアルバムも作っていた。これらの課題にレイン・エルンスが取り組んだ。この著者達は長崎の外人墓地について共同の本を公刊した、その本では、ロシア人の埋葬者についても書いていた。

長崎図書館と古文書館にロシア人の訪問についての沢山の資料がある。著者は、この町の１ヶ月の訪問でそれらの施設の世話になった。

この本を作るに当たって､長崎におけるロシア人滞在の全歴史を明らかにする目的はなかった。基本的な希望であったのは、日本の南部であるこの町のロシア人の頁について話をしたかったことである、我々民族と関係のあった。完全な分析をなすことは不可能であることを理解して、著者は最も特徴的な出来事で満足することにした。著者の視点で、できるだけ、より多くの伝記的で事実的証拠を与えることができる、稲佐のロシア人墓地の墓の一覧を含んで。第一に、この町は外国人が日本に入国するための玄関である。これに関係して、著者はこの町の外国人コロニーについての若干の情報を物語ることにした。本の最後で、著者は自分の旅行日程を書いておいた、長崎を訪問した時の。客観的な視点が若干の問題の答えを見出すことができることを期待して。

本には、間違いが紛れ込んでいる場合もある、特に、異なる暦法ゆえに。ロシアがまだユリウス暦を使用していた時、日本ではすでに新しいグリゴリ歴を使用していた。船乗りたちは２つの暦法をしばしば利用していた。問題が起こりうる、日本人の名と性の様々な表記ゆえに。著者は読者に感謝するであろう、それらを指摘してくれれば。

著者はメテレバとボリメラに心から感謝の意を表する、彼女らは長崎訪問を助けてくれた。日本における調査研究の可能性に対して日本基金に。沢辺和彦教授に、彼は長崎での部屋の借用において保証人となってくれた｡そこでは著者は素晴らしい一ヶ月を過ごせた。この学者は長年にわたって露日関係について研究している。国士舘大学の助教授であるヤコフ・ロマノビッチ・ジンベルグにも感謝する。ハワイ大学のユニークな図書館に長年通い詰めて、著者は非常に多くの事実を汲み取った。ロシアとＡＴＰ（？　＊）他国との相互関係の文献記録に極めて良く通じているパトリチア・ポランスキとの相談は極めて価値があったと思っている。

この本のための資料収集において、長崎に住んでいた人々が助けてくれた。例えば、リュボフ・セメノブナ・シベツ（旧姓はヤシコバ)。彼女の兄弟の仕事のおかげで、ロシア人墓地の歴史を復興することができた。手書きの原稿の校正をナタリア・ウラジミロブナ・ソロビエバがやってくれた。彼女の助けなしにはこの本は完成しなかった。特別な感謝を編集者タチヤナ・ウラジミロブナ・プルトコグリャドに、彼女はこの本の出版に大変な気遣いをしてくれた。

本物の研究書が本の続編となる、北海道におけるロシア人についての。シリーズ「日本におけるロシア人」の第３冊は「神戸とその近郊でのロシア人」、その後、「横浜－東京：ロシア人の頁」。これらの本を出版してから、著者はそのうちに一つの本に纏める予定である。著者は読者からの訂正や補足に対して感謝をする、以下の住所あてに送ってください：ロシア、６９００４１、ウラジオストク市、ポレタエバ通り、ドム４９。

Ｅｍａｉｌ：ａｍｉｒ．ｋｈｉｓａｍｕｔｄｉｎｏｖ＠ｖｖｓｕ．ｒｕ
または　ｋｈｉｓａｍｕｔ＠ｈａｗａｉｉ．ｅｄｕ

先史時代、オランダの勧告

長崎湾は、日本の最も南の湾のうちの一つであり、陸地に４マイル食い込み平均の湾の幅は１マイル。その入り口は小島群を思わせる小さい島々の間にある。岸の幾つかには古い堡塁が建っている、自然石を積み上げた。湾の３面は、山の斜面によって良く風を防いでくれている。斜面は耕地、農場、庭園、森で覆われている。森には松、西洋杉、樫、シュロ、硬質木（黒炭など）、イチジク、クスノキが成長していた。豊かな植物相に覆われて、そこに漁師小屋、小さい仏教のお堂、がひっそりとたたずんでいた。山の頂上には大きな寺院。

進行途中で、湾は北に曲がっている、岩だらけの高鉾島（長崎湾の入り口にある　＊）がそびえ立っていた。その頂上を小さな針葉樹の森が飾っていた。この島はヨーロッパ人にはよく知られていた、パペンベルグの名で。この名前は１６２２年の事件（？　＊）の記憶として、オランダ人がこの島に与えたものであった。当時、日本人は島の崖から、教皇の使節団とその日本人信者達４０００人を、海へ投げ落とした。干潮時、崖の下の海岸は岩礁だらけであった。

１５４３年の最初のポルトガル人の日本到来と、ヨーロッパ文明との初めての日本人の知見の後、現地の大名は港に立ち寄り、貿易することを許可した。特に、ポルトガルの商人達には素晴らしい港として長崎が好まれた。大名大村純忠がこの岸を管轄していた。１５７０年、長い岬（いわゆる長崎）に６軒の家屋を建てた。１５８０年から始まって、長崎は外国貿易の主要港となった。しかし、同時に、これとともに長崎は重要性を獲得し、宗教活動の中心となった：町に、使節団はキリスト教団体を創り上げた、日本でキリスト教の宣伝をし始めた。

はじめは、日本の権力は使節団に特別の注意を向けなかった：日本の神道や仏教は他の宗教に寛容であった。時の経過とともに、日本人は気づいた、使節団は日本の伝統的宗教に対して次第に攻撃的に行動するようになっていくことに。これが反発を引き起こした。結局の所、キリスト教を恨んでいた豊臣秀吉は全ての布教者を追放するように命じた。１５８７年には長崎を直轄地とした。

これだけでは日本への外国人の影響が止まらないことに気がつき、１６３５年、幕府は日本沿岸に外国船が接近することを禁止し、日本人には国境外に出ることを禁じた。長年に渡る日本人との交易でよく知っていたポルトガルの商人には長崎に留まることを許した。しかし、地域住民と切り離された条件下で生活することで。裕福な２５人の長崎人達は、彼らのために、出島という名称の島を作れという命令を幕府から受け取った。

異国の影響に対する幕府の恐れは、１６３７年に長崎付近で起こった蜂起（島原の乱）で高まった。日本のキリスト教徒達が不満のはけ口としてそれを利用した。１６３９年、幕府は断固とした対策を講じた：全てのポルトガル人を追放し、国の完全な鎖国を宣言した。それ以降、日本人の誰も日本から出られなくなった。何かの理由で外国にいた日本人は、帰還すると死刑が待っていた。全てのキリスト教徒を牢獄に送るつもりであった。この際、キリスト司祭やその信徒達の何らかの情報を教えてくれたものに褒美を取らすとし

た。出島は空っぽとなった。実際にはしばらくの間。１６４１年に、日本国からポルトガル人とその家族の追放と日本の鎖国の宣言から２年を経て、東インド会社のオランダ人代表は出島の自分らの商館に住んで貿易が行える命令を受け取った。

オランダと日本の交易の歴史は１６００年に始まった。当時、オランダ船リフデ号が豊後（現在の大分県）の海岸に接近した。１６０９年に、オランダ人は日本に２隻の船を贈呈した、徳川家康将軍から、長崎に近い平戸に商館を開く許可をもらった。年に２回、商品を積んだ船を、ここへ派遣することを。オランダ人は圧迫を避けることができた、というのは、彼らの多くはプロテスタントであったから、その上､彼らの多くは宗教の布教より､貿易に興味を持っていたので。

１６４１年に､日本からの提案に従って､オランダ人は自分たちの商館を出島に移した。彼らは２１８年の長きにわたって、日本と独占的交易を維持した。出島の大凡の面積は１５３９５平方m。周が５６４mの扇型をしている。南側の長さは２３３m、北側の長さは１９０m、腹部は約７０m。島には、館長、副館長、商館の労働者（調理師、倉庫係、秘書、医師、大工、鍛冶、その他一全部で約１０人）の家屋、倉庫群が配置されていた。このように、ここには幕府の役人と通訳の家屋もあった。時の経過とともに､建物は建て替えられた、主として､火災によって。１本の橋で出島は町と繋がっていた。平民は居留地を訪ねる権利を持っていなかった。女性が出島にいることは禁止された、娼婦だけに例外が認められた。これらの法律を遵守させるために、橋を普段に置いて監視している番人は厳しく行っていた。

出島でのオランダ人の生活は捕虜の生活のようであったが、居留地の長は使者の役目を持っていた。居留地の彼、秘書、医者は、もちろん、日本の役人を同行して、京都や江戸への旅をすることができた、将軍や天皇に会うために。この旅の時に、彼らは土産品を渡したり、国への知見を得ることができた。祝日には、オランダ人は家畜を卜殺した、祖国から連れてきたり、地方の農民から買った。散歩を好んだ、それに日本人達を招待した。毎年春には、館長とその職員達はオランダ船に乗って出島を出港し、インドネシアに向かった。新しい接触と１年の貿易便の準備のために。オランダ人の秘書と医者は報告を行った。その報告のおかげで､ロシアを含んでヨーロッパは日本についての最新情報を得ていた。

１８世紀半ばには、日本は急速な発展を遂げた。この時期に、ロシア人は日本に接近した。日本人はオランダ人から北の隣人について少なくはないことを聞いていた。オランダ人は良くロシアを知っていた。ロシアが日本との独占的貿易を阻害しかねないことを認識し、オランダ人は全てのことをやった、ロシア人の都合の悪い面を見せるために。オランダ人は噂さえ広めた、ロシア人は日本の北部を占領するであろうとの。

１７８１年、江戸で、２巻の「赤蝦夷風説考」が出版された。本の中で、北での危険の接近が語られていた。作品の著者、工藤平助（１７３３年－１８００年）は武士階級の医者の家に生まれた、紀州の島で、現在の和歌山県で。他の医者、江戸で働いていた工藤ハセヨリ（安世　＊）が養子にして育て上げた。医学と一緒に､若者は漢文と儒教も勉強した。彼の先生は服部南郭であり、古文儒学派の代表であった。そこで、２つの相互結合の不可分の元の理論が発展した：物質的で理想的な。工藤の他の師として青木昆陽（１６９８年－１７６９年）がいた、古義学儒教の代表、経済の研究に大きな価値を与えた。彼は

オランダ語を知っていた、西洋についての本の翻訳者として有名であった、特に、「サツマイモの普及について」。この方法でもって、青木は提案した、日本における飢饉を解決することを、これにより彼はあだ名「サツマイモ先生」を付けられた。

工藤は一度ならず医師として長崎を訪れ、オランダ人と会った、彼らを通じてヨーロッパの文化に親しんだ。優れて、多方面に教養のある４０才の医者に気がつき、幕府は彼を税関の財務職員に採用した。この状況は彼に外部世界を研究する喜びを与えた。工藤は著名な作家林子平（１７３８年－１７９３年）と懇意となった、彼は１７７７年－１７８２年の間オランダ商館の代表と協働した。１７８６年に、「三国通覧」を出版した。林子平は積極的に自分の考えを宣伝した、日本への外国の予想される進入についての、幕府の暢気さを。１７８７年から１７９１年までに、彼は３巻の「海国兵談」を出版した。それらの本で、彼は提案していた、日本の全海岸に堡塁を建設し始めるようにと。著者のアイデアは幕府には気に入らなかった：幕府は彼を逮捕し、仙台送りとした（ここに彼の兄がいたので、ここでの蟄居処分）。本は禁止となった。これは１７９２年のことであった。そして、４ヶ月後、根室にラックスマン探検隊がやって来た。

工藤平助は自分の本で、ロシア人のことを赤蝦夷と呼んでいた。多分、北の隣人の髪や顔が彼には赤く見えたのであろう。多分、赤い上着や外国人の異常な振る舞いが日本人を怖がらせた。当時、北海道はどう呼ばれていたのかは、興味を引く。ロシアについての本の中では、隣国の言語、地理、歴史が開示されていた、その際、隣国との肯定的な関係に著者の目が向けられながら。工藤は提案していた、ロシア人と交易をするために、日本の北の港を開港するようにと。江戸の深川寺町地区の心行寺にある工藤平助の墓には銘文が掘られている：「彼の書き物で大事なこと－明白な考え、その中に気取りの場所はない」。

オランダ人によって北の隣人との関係に極めて否定的な感情を植え付けられていた日本人の危惧は１７７１年に実証された、ロシア船がアワ湾（現、徳島県）に立ち寄った時に。その船に乗って、カムチャッカからモリツ・アブグスト・ベネフスキーが逃げてきた。ポーランド蜂起に参加したことで、彼をシベリア流刑としていた。その後彼はボリシェレツクにいた。日本での５日間の停泊時、ベネフスキー－日本人は彼をフォン・ベンゴロと呼んでいた－は警告文を幕府に書いた：「ロシア政府はカムチャッカとクリールに要塞を作り、武力を集中する。翌年には、ロシアは松前島（北海道のこと＊）に接近するつもりである、そこへ船を派遣する。これ故、日本はそこへ船を派遣しなければならない、ロシアの侵害を許さないために。」　日本人の探検者中村が予想を述べた、この手紙はオランダ人の通訳によって訂正されよう。将来、この不安の種は隣人に対する日本人の無理解の多くの芽生えとなった。

ニコライ・レザノフの失敗、
イワン・クルゼンシテルンのナデジダ号

長崎はロシアの海岸からそれほど遠く離れていないにもかかわらず、日本とロシアの間の最初の公的接触の確立に関する、出来事がここで展開した。１７８７年に、トルコとの

戦争の勝利後、ロシアは日本に立ち寄り、世界一周航海を実現するつもりとなった。探検隊の指導者に、ムロフスキー船長が任命された。隊員に、若いイワン・フェドロビッチ・クルゼンシュテルンームロフスキーの教え子ーを入れる計画であった。当時、彼は海軍貴族幼年学校を修了したところであった。計画の実現を第２次トルコ戦争が邪魔をした：１７８７年１０月、エカテリーナ二世は海軍の移動を中止した。それにもかかわらず、数年後、クルゼンシュテルンに第一回ロシア世界一周探検隊を指導するように決済が降りた。

１７８８年、彼（クルゼンシュテルン？　＊）は幼年学校を修了した、イギリス海軍の船に乗り、素晴らしい実習を行った、大西洋以外に、太平洋、インド洋を訪れた。１７９８年３月２７日、クルゼンシュテルンに海軍大尉の称号を授けた。翌年には、パベル一世の名の下で、彼は「植民地貿易の発展について、ロシア・アメリカ植民地の充実した補給による、全ての必須の」という短い文書を書いた。クルゼンシュテルンは述べた、シベリアを経由して極東へのロシアの陸路での貿易経路は限界があり、他の経路を提案した：「クロンシュタットから西へ、ホーン岬（南米の南端　＊）を通り、太平洋を通りアラスカ、千島列島へ、そして、中国の広東の湾へ。」　最初は、提案は退けられた。しかし、１８０２年８月初めに、３２才の将校は商務兼交通大臣ルミャンチェフから、世界一周のために船を準備する許可を得た。その費用は、極東で商売に成功していたロシア・アメリカ会社（ＰＡＫ、露米会社　＊）が割り当てる。

当時、実質的に、侍従のニコライ・ペトロビッチ・レザノフがＰＡＫを主催していた。彼はクルゼンシュテルンより６才年上であった。家庭教育を受け、砲兵隊に勤務した。その後、イズマイロフ連隊の親衛隊に。彼は良く勤務した、海軍省参与会の事務長として。そして、ロシア・アメリカ会社の創業者の内の一人となった。クルゼンシュテルンとは関係なく、レザノフは最初の世界一周探検のプログラムに携わっていた、ＰＡＫをオランダの東インド会社に十分に対抗できる会社にしたくて。これ故、ルミャンチェフ大臣の机の上には、クルゼンシュテルンとＰＡＫからの２つの計画案が置かれた。

１８０３年６月１０日、立派な侍従として、レザノフに聖アンナ１等勲章を授与した。皇帝の命令には特記してあった：「貴君を偉業で選抜し、祖国に利益を約束する、二トンとの交易から、アメリカの地方の形勢の判断において。そこではそこの住民達は貴君を頼りとしている。私は官房長に委ねた、君に親書を渡すことを、私から日本の皇帝に宛てた、商務大臣には両方の場合に備えて、君に然るべき指示を与えること。私は予め確信している、私が知っているような貴君の能力と熱意で、仕事で素晴らしい成果を上げることを」。

最初のロシアの世界一周探検隊は外交的特徴も帯びていたが、ロシアは自分の極東の隣人との関係構築に何の興味も持っていなかった。レザノフへの指令は商務省が作り上げた、外務省の役割は限定された、官房長ボロンツェフによる皇帝の親書に、日本の皇帝当ての。レザノフに、省内に保管されていた古い文書を渡した：長崎にロシア船の寄港を許可するという、日本政府がラックスマンに１７９３年に交付した。

当時、ロシアは海洋船を持っていなかった、それ故、ルミャンチェフは船をイギリスから得るよう、クルゼンシュテルンに命令した。シュルップ艦ネバ号の船長にリシャンスクを任命し、ナデジダ号の指揮をクルゼンシュテルンに委ねた。探検隊の財政面はレザノフに委ねた、クルゼンシュテルンの役割は要するに操船することであった、レザノフ使節団のために。職務の極めて不明瞭な分け方が、その後、彼らの間に衝突を屡々引き起こした。

探検隊の科学プログラムの作成は同じくレザノフに任された。彼のおかげで、日本へのロシア使節団の団員に自然科学者ラングスドルフが入った、彼を７等文官に任命した、この地位は海軍中佐と対等であった。長崎の調査で重要な役割をしたゲオルグ・ゲンリフ（或いはグリゴリイ・イワノビッチ・ラングスドルフ　＊）は１７７４年４月６日、ドイツのベリシュテインで生まれた。彼は１７９７年に、ゲッチンゲン大学を修了した、公開審査にパスもしていた。科学について自分の見解を話していた、彼は真剣に医学を勉強した、５年以上、病院で研修した。彼は鉱物の採集が趣味でもあった、ポルトガルの海岸の動物相も研究した。

ロシアの世界一周探検へのドイツ人自然科学者の参加は極めて偶然であった。世界一周探検のペテルブルグでの準備について、若い自然科学者に、ロシアにいる同郷人達が伝えた。しかし、当時、探検隊の定員は充足されていた。ラングスドルフ（ドイツ人　＊）はクルゼンシュテルンの船を１８０３年８月に、コペンハーゲンで捕まえた。レザノフは航海にドイツ人を連れて行くことにあっという間に同意した。彼は医者として、また通訳としても、調査員としても、役に立つと予見して。ナデジダ号で、ラングスドルフは多くの困難に突き当たった。特に、うんざりし、同僚のヨーロッパ人の小競り合いに。彼らは同じ教育を受けていた、それ故、彼らの間で競争が激化した。直に、ラングスドルフは個人的な趣味を見つけたー魚類学と鉱物学。

日本への道中、ロシア船は南アメリカ、ハワイ島、カムチャッカに立ち寄らなければならなかった。さらなる航路は毛皮商品のために、ウナラシカ（？＊）島を通っていた。商品は広東やフィリピン運ぶものであった。１８０３年７月２６日、ナデジダ号とネバ号クロンシュタットと出港した。太平洋に到達し、２隻は分かれた：リシャンスキイはロシア領アメリカの海岸へネバ号を向けた、ナデジダ号はカムチャッカへの航路をとった。

ペテロパブロフスク・カムチャッカで、ナデジダ号の船員の中で変更が行われた：全員が日本には行かなかった。クルゼンシュテルンは１８０４年８月２７日、ペテロパブロフスクを出港し、南西に向かった。船長は注意していた、良好な海洋地図を持っていなかったので。船はゆっくりと進んだ。ナデジダ号には、普通ではない４人の日本人の乗客が乗っていた、１７９４年夏に難破してロシアに残った。１７９３年冬に、米と木材を積み込んだ１６人が乗り込んだ若宮丸が石巻港を出港して、大嵐に見舞われた。彼らは一月海を漂流し、アンドレヤノフスク諸島（どこ？　＊）の一つの島で、彼らはロシア人に出会った。日本人をイルクーツクに送った。そこで彼らは１０年を送った。この間に、６人の日本人が亡くなった。残りの船員達に日本への帰還が提示された時、仙台の住民である４人だけが同意した：チュダユ（６２才　光太夫？　＊）、義平（４４才）、佐平（４３才）、田重郎（３５才）。

１８０４年９月１５日、アレクサンドル一世の戴冠日に、船では大祭が行われた：公使は下級乗組員に銀貨を分け与え、世界一周旅行の参加者全員に特別メダルを与えた。彼が演説をした：「ロシア人の皆さん！　世界を回ってきて、ようやく我々は日本の海を見ることとなった。祖国愛、勇気、危険の軽視ー悪魔の本質、ロシア人水夫を演じている；美徳の本質、全てのロシア人に固有である。今や我々同郷人の感謝は君ら、熟練した案内人に属する！　君らは名誉を獲得した、最もうらやましがっている世界は元気ではない、君らから決して奪うことはない！　君らに、立派な私の同僚、かの賞賛に値する偉業の遂行

が差し迫っている、新しい富の源泉の発見が。君たち、海軍の国民軍の恐れを知らない子供達よ、熱心な君らの助力の成功に魅了される！　我々の心と精神を統一させる、君主の意思の遂行に向けて、我々に使わされた。君主だけが我々によって充実にあがめられている！皇帝に対す津感謝が、全ての我々の感覚を鼓舞する。今日、友人達よ、我が祖国で高名な；が、彼はより有名になろう、日本帝国内に初めて入り込んだ彼の息子より、ロシアの勝利の旗は長崎の水にざっと目を通す。我らが皇帝の代理人は君の偉業の証人となろう。私を褒め、君と体と危険を分かち合うことになろう、今、喜んで、君に謝意を厳かに表明する。愛すべき我々祖国の内部で我々全員が待っている。日本の水（日本海？　＊）で、皇帝の戴冠式の日を祝い、私は君の功労のために他の記念すべきことをする。ここで皇帝の肖像を見よ、そこに、君への謝礼を受け取れ、それを飾れ。果てのない労働による差と後天性の熱意でもって。記憶しているのは情けない、義務を厳しく守ることを君により強いることは、君の後継者の誰の名誉となるのか。名誉の歓喜の中で、帝政を祝福せよ、そのような功績において最後の下僕を世界の果てにおいて皇帝の座前で忘れ得ぬ！」。

２日後、天候が悪化した。レザノフが自分の日記に書き残していた：「気圧計は５時には全ての目盛りを下回った。そのようなことは今までの航海では一度もなかった。８時まで我々は水銀を見ることはできなかった。我々の救助は特徴付けられた、より悲惨な姿で。

８時、強風は突然に向きを変えた。高波は飼料庫に強い力で当たってきた。我々は思った、船が木っ端みじんになるのではないかと。この後に、更に大きな波が船に覆い被さってきた。海水はハッチに流れ込み、船尾の部屋を剥ぎ取った。あっという間に窓を壊した。我々は腰まで海水に浸った。船は横から波を受けて、船尾甲板から海水が流れた。その間に我々は窓に板をはめた、海水に耐えるために。

深夜まで我々はそのような悲惨な状況下にいた。その後、風が止み始めた。朝には全員がへとへとであった。船尾甲板に出た、我々は見た、ナデジダ号が瓦礫と化しているのを。索類がゴミの塊の山となっているのを＊＊＊＊＊＊＊＊、我々の船室はゴチャゴチャであった。

カムチャッカを出港してから１月後の１８０４年９月２５日、ようやくナデジダ号は長崎に接近した。ヤボ岬（？　＊）に配置されている観測所から、外国船を認めた。このことを直ぐに、長崎奉行の成瀬稲葉ノ守正定、飛騨豊後の守頼経に伝えた、彼らにはオランダ人が既に警告していた、ロシア人が日本の海域に入ってくる計画があることを。

９月２６日朝、長崎湾に入る前に、ナデジダ号は日本の漁船と出会った。クルゼンシテルンはナデジダ号に乗っている日本人に提案した、同郷人に呼びかけ、ロシア船に招待するようにと。驚いた漁民は同意した。彼らを快くもてなし、ウオッカと乾パンをごちそうした。漁民達は教えてくれた、長崎港は直ぐ近くである、奉行所は既に４日間にわたって船の接近について狼煙で知らせている、沿岸の住民は気づいていた。これ故、ロシア船ナデジダ号に対して役人が派遣されるであろう。漁民から既に知ることとなった、長崎にはオランダ商船が２隻、中国船が数隻いることを。

昼の１２時、クルゼンシテルンは大砲を撃つように命令した。直ぐに、２人の役人と６人のこぎ手の乗った日本の船がやって来た。彼らは船に上がらないで、幾つかの質問をした：「どこの船？　どこから？　いつやって来た、何のために？」　ロシアから連れてきた日本人の一人を通じて、レザノフが答えた、船はロシアの軍艦であり、ペテルブルグか

らやって来た；船にいる者達は全てロシア人である；この船には、日本皇帝へのロシア皇帝派遣の臨時大使が乗っている、親書と貢ぎ物を持って；船には４人の日本国民が乗っている。彼らはロシア沿岸で不幸にも海難に遭ったものである；ロシア皇帝は彼らを祖国へ帰すことにした。この船の名前はナデジダ号である、長崎湾に向かってきた。

日本の役人は反論した：この湾には、誰も入港する権利を持っていない、日本の皇帝の特別命令なしでは。ここへの入港はただオランダ人にだけ許可されている。レザノフは伝えた、ロシア人は日本皇帝から許可をもらっていると、そして、日本人にその書類を渡した、オランダ語にしたメモと一緒に：「ロシアの偉大なる皇帝から、日本の偉大なる皇帝へ、＊＊＊＊＊＊＊、侍従レザノフを使節として派遣した、貢ぎ物を閣下に届け、４人の国民を帰還させるために。帝都ペテルブルグを去年の７月２６日に出発し、この年の９月２７日に日本の海に到着した。幕府にお願いをする、長崎湾へ船の案内のために水先案内人を遣わすことを。」。

日本の役人は、長崎の港外の停留地にナデジダ号を動かすよう指示した、そこで碇を下ろすようにと、大砲を撃たないこと、椀には入らないこと、町から全権の知事が到着するまでは。夕方７時に、ナデジダ号は指定された場所に碇を下ろした。当時ラックスマンに渡した書類のコピーを取り、日本の役人は当惑した、何故ロシア人が１２年経過した今許した許可を利用するのかと。そして伝えた、４年連続してロシア船の到来を待っていたと。夕方９時に、長崎の停留地が火で明るくなった：湾から多数の日本の小型船が現れた、それらの中には大型の船も、いろいろな灯火を灯していた。ナデジダ号の所に止まった。この船団に中に、全権奉行がいた、警備隊を伴って。

最初、ナデジダ号に３人の通訳が乗った：年配と若いのが２人。彼らは丁寧なお辞儀をして船長を歓迎した、跪き、日本式に座った。通訳をレザノフの所に連れて行っている間、彼らは好奇心を持って船を眺め回した。軍律と２人の立派な兵に驚いた、大使の部屋に続くタラップの所に歩哨として立っていた。レザノフを彼らはより慇懃に歓迎し、友好的来訪を祝った、そして伝えた、知事の代理の役人の訪問について、「偉大なる使節」に紹介したい旨を。

レザノフが返答した、代理人に合うのはうれしい、全権を特別な喜びで迎入れようと。通訳は日本の船に戻り、日本の高官、代理人、長崎奉行と一緒にロシア船に戻ってきた。ロシアから連れてきた日本人達は、彼の前に平伏した、甲板に広がって、甲板に額を打ち付けた。代理人は驚いたが、彼らが誰かを知って、威厳を持って何も語らなかった。代理人の到着に際しで、警備の擲弾兵が特別な銃の操作、名誉礼を行った、太鼓が打ち鳴らされた。高官は突然の事に驚いた、立ち止まり、当惑して問いただした。これは何なのかと。彼に説明をした：ロシア海軍の規則に従い、特別に高位の人に軍式敬礼を表していると。高官は明るくなり、感謝を表した。他の代理人に対しても同じような敬礼をするように願い出た、船にやってくる。希望は受け入れられた。

両方のバニオス（？　＊）の従者は３０人以上であった。オランダ語を知っている通訳は６人いた、が、年配の３人だけが会談の通訳をした。使者は客にソファーの席を勧めた、が、全権は床の上に座った、正座して。少しして、レザノフの船室へ、おのおのの全権の前に、細長の漆塗りの箱が置かれた、たばこと、赤い炭のある火鉢の入った、たばこに火を付ける。通訳には、豪華な漆塗りの箱が、紙と筆と墨と他の筆記用具付きの。全権と同

じように、彼らも床に座った。若い役人は手に巻紙を持っていた、それに聞いた事全てを書き残した。年配の通訳も同じ事をした。

交渉が始まった。アレクサンドル一世が日本の皇帝に送った親書に日本人達は興味を持った。ケースに収まった箱を大事そうに船室に運んできて、それを開いた時、バニオスは立ち上がり、机に忍び足で近づき、金襴を注意深く見つめた。彼らは非常にがっかりした、彼らには本物の親書でないものが見せられたので、その親書のコピーであった。が、レザノフが説明した、皇帝の署名のある本物の親書は、彼が日本皇帝に直々に渡すのであると。年配のバニオスがレザノフに質問した、偉大なる使節は日出づる国の習慣に服従する事に同意したのかと。それに答えた：

－同意した、もし彼らがロシアの偉大さにとってけしからなくなければ。

日本側は、ロシアから連れてきた同国人を呼び出すように願い出た。彼らに根掘り葉掘り質問をし、日本側は注意深く返答を書き留めた。

交渉の時、使節の船室へ、オランダの船長が入ってきて、彼は２時間ほど待機し、ついに決めた、自分の事を思い出させる事に。許可を得て、デフ（？　＊）は船室に現れた。フランス語で、彼は大使を歓迎した、その後、彼にオランダ船の指揮官パレト男爵と自分の秘書を紹介した。レザノフは挨拶に好意的に応じた。

デフはバニオスに義務の敬意を表さなかった、すぐに年配の通訳の内の一人の横腹を突いてこれを彼に催促した。

－デフさん、お辞儀をしなさい！

デフは即座にバニオスの方を向き、手を重ねて低くお辞儀をした、甲板にそれらが触れるほど。彼と一緒に来た人々も同じ事をした。オランダ人達はお辞儀をし続けた。面識のある年配のバニオスは彼らに姿勢を正す事を許さなかった間。ロシアの船乗りと使節団員は非常に驚いた、オランダ人の追従と盲従に。彼らの自尊心と思い上がりは全世界に知られていたので。東インドや太平洋の島々で、オランダ人は主人や領主のように振る舞っていた。が、ここ、日本では、奴隷の印象をもたらした。その後、ロシアの船乗り達は知る事となった、そのような振る舞い方は極東の国々ではありふれた事である事を。これを日本の高官の一人が証明した：

－大使殿！　貴方には我が国の習慣は不思議でしょう。が、どの国も自分なりの習慣を持っている。我々は昔からオランダ人を友人と見なしている。その証拠が我々に対する友好さである。貴方はこれに従いますか？

－嫌だ！　レザノフが答えた。

－なんとなれば、私が日本国民をあまりにも敬う事になる、我々に仕事を始めるために、些細な事で。が君らの習慣、それらは昔からオランダ人達は納得していたのか、私は大いに驚いた。が、我々の所の習慣は別である。その上、同じように、揺るぎなく保存されている。

全権代表が質問した時、ロシア人は日本人に船に持っている全ての武器、剣、火薬を渡す事に同意したのか、使節だけに１本の剣を残して。これについて、レザノフは喜んで同意した、実際において返答した、将校の剣は規則に従ったものであり、警備兵は武装しないでいる権利はないと。しかし、日本人は、そのような返答をかなえさせなかった。彼らはオランダ人の例を提示した。オランダ人は商館長デフだけが剣を携帯する、それも年に

１度だけである。彼が大使の立場で皇帝に面会する時に。レザノフは自分の主張に固執し、奉行に彼の論拠を伝えるよう頼んだ。日本人は３昼夜の内に返事をする事を約束した。が、大使は船を湾の他の位置に、他日に移動させる許可を願い出た。台風時、船が損傷したので、外海に長く停留する事ができなくなっているので。

奉行の全権代表と別れるに当たって、大使は彼に願い出た、生鮮の糧食を送ってくれるようにと。それは、翌日の朝にかなえられた。この際､奉行の指示で運ばれてきた食料品に対して、日本人はお金を受け取る事を拒否した。昼頃、湾に、大きな日本船が現れた、旗で飾られた。前日と同じように、船はナデジダ号に向かってきた、小舟の群れを伴って、これは、今後の交渉のために遣わされた奉行の全権代表であった。前もって現れた通訳が希望を表明した、使節が奉行の代表の前に出てくるようにと。しかし、レザノフは拒否した：

－私はそれをする事はできない。何となれば、私の官職は高いので、もし奉行自身に私がそのような名誉を示す事を決めたならば、彼に対する私の唯一の尊敬である、高い権力の全権に対するような。

通訳達はロシア船にいるのを、家にいるように感じた。奉行の代理と一緒にレザノフの船室に戻り、彼らが椅子を配置した、彼に場所を指示した。レザノフは慇懃に感謝した、が、声明した、彼の安楽椅子を誰にも使わせてはならないと。最初の応接の後、バニオスが伝えた、通訳を通して、奉行は時別な尊敬から、ロシアの使節に帯剣を、使節の衛兵には武器を許可すると。公使は奉行に感謝するよう頼んだ、そして付け加えた、「＊＊＊＊＊＊＊、彼は他の者を予想していなかった。」（？　＊）

大使の秘書の一人がレザノフにメモを持ってきた、幕府へのための、オランダ語に翻訳した。それで伝えていた：「今回の訪問は､以下の事に関係している。長い間、貴国とは尊敬し合う関係にあった。我々は期待している、公使を江戸に連れて行き、忠誠な露日関係の将来における設立に関する会議のための接見に招待する事を・・・・　数年前に海難に遭った日本人達を貴方へ渡す時、ラックスマン大使は詳細に伝えていた、貴方は我々の公使の関係に好意を表していたと。貴方の政府の思いやりに感謝する。今回は、海難に遭った４人の日本人を同じように連れてきた、貴方に渡す」。

公使は、敬意の印に頭の水準まで包みを持ち上げた、それを日本の代表に渡した。彼らはそれを丁寧な会釈をして受け取った。彼らは声明した、奉行は至急便で江戸にそれを送ると。その後、レザノフの所にオランダ人を招聘した、彼らは入る許可を待っていた。お辞儀を伴った儀礼が繰り返された。支配人デフ（オランダ人の商館長　＊）は今回は帯剣していた、大使に話した、出島から出る許可を彼は好意から頼まなければならない、しかし、その度に１６ターレル（当時のドイツの貨幣単位　＊）を支払う事になる。かって彼が町に船長と一緒に出た時、１日町を巡ったが、４００ターレルかかった：彼らは同行した警備隊の分も支払う羽目になった。

その後、日本人は船員達から火薬、弾丸、武器、剣を集めた。夕方、バニオスが去った後、ナデジダ号に、７０隻もの日本の小舟が近づいてきた。船を曳航し、パネンベルグ島（？　＊）へ船を運んだ。そこに錨を下ろした。ここは外海より、安全な停留場であった。日本人は船を更に町に接近させる事を許した、中国船が出港しているように：日本の法に従えば、２つの国民の船は同じ場所に碇を下ろす事は禁止されていた。

船から下りて、岸に渡る事は誰にも許されなかった。地域の住民から何も買う事を許されなかった。日本人はナデジダ号を警備船で取り囲んだ、船には５００人ほどの警備員がいた。その際、毎日ロシア船を訪れていた役人は断言した、この形式は江戸から急使が戻って来るまでであると。それはともかく、警備船の数は増えていった。１０月１６日、５０隻の帆船からなる艦隊がやって来た。その際、日本人は説明した、これは警部のためのものではなく、国威を示すためのものであると。ナデジダ号の停留地からは、船乗り達には町は見えなかった、船乗り達は点在しているあばら屋や村だけが見えていた。

夕方に、ナデジダ号に更に２人のバニオスがやって来た、彼らの内の一人が江戸からの重要な監査官であった、彼らは良く話し、陽気であった、先の者達より。新客達は突然にロシアの大きさ、ロシアが所有している大地、隣接している政府に興味を持った。船室に地図と地球儀を運んできた。それで、日本人に、アメリカ、カムチャッカ、中国と隣り合っている土地、ペルシア、トルコ、ヨーロッパの国々を示した。監査官は地球儀に日本の位置を見つけようとしばらく努力をした。それができなくて、彼は大使に助けを願い出た。その後、喜び、笑いはじめ、自分の同僚に日本列島を示しながら、叫び声を上げた：

－日本だ！　日本だ！　日本だ！

実際において、日本の詳細な位置を見て、日本人達は驚きを表した、自分たちの国の小ささに、他の国と比較して、特に、ロシアと中国と。彼らは質問さえした、地球儀に表示されている日本は本物なのかと。その後、内気になり、当惑しながら別れの挨拶をし、陸に戻っていった。

１０月１７日、中国船は外洋に出て行った、ナデジダ号をパペンベルグ島の向こうへ連れて行った。要塞まで至らない、町から７ｋｍのところで錨を下ろした。日本は約束した、オランダ船が退去した後、町に近いところまで船を移動させる事を。レザノフは病人達に話した、散歩のために上陸する許可をくれるよう願い出たと。日本は、このための場所の準備に取りかかっている旨を話した。直に船乗り達は気がついた、岸でそのような仕事が始まったのに。そこでは長さ５４ｍ、幅２１ｍの領域が囲われていた。そこには竹製の東屋が建てられ、衛兵が配置された。１０月２９日、ナデジダ号に役人がやって来た、彼らは仰々しい儀式を執り行い、公使を岸に迎えた、兵士の乗った２０隻あまりの船団のもとで。場所はレザノフには気に入らなかった：埃が多く、日当たりが良すぎて、散歩には全く相応しくなかった。公使は直ぐに、自分の企てを拒否し、船を去らなかった。

１１月８日、オランダ船は長崎を後にした。奉行の指示により、帝国の警備隊下でナデジダ号を曳航し、船は錨を下ろした。一方、公使は病の拡大を心配していた。奉行は陸に家屋を確保する事を約束した、その内装に取りかかるように指示した。オランダ商館に向かい合った家屋が選ばれた。そこにはメガサキ（？　＊）の魚市場があった。区画を湾が３面を取り囲み、３ｍほどの竹の矢来が残りの４面を取り囲んでいた。しかし、海は仕切られていなかった：家屋に対面している湾には２重の矢来がもうけられていた。どんな船もロシア船に近づけないようにするために。海に直接出られる門は、両側から鍵がかけられていた。公使と彼の随員の家屋は９つの部屋に別れていた、紙製の仕切りなどで分割して。広場には４つの店があった、更に２つは門外に。そこには番兵が立っていた：政治と軍事を兼ねた。それら以外に、ロシアの兵舎の上にそびえ立っている山頂には、監視台があった、上からだと簡単に下での出来事を見る事ができるので。

オランダ人が生活していた出島は、大使の領域と湾で別れていた。１２月初めに、大使館の内装の仕上げが完了した。１２月１７日、レザノフは盛大の中で岸に移った。この日は、朝早くから、長崎湾はお祝いムードに溢れていた。湾を沢山の小舟が満たした、旗で飾られた、岸には軍隊が整列した。正午頃、大きくて見事に着飾った日本船が出てきた、この地方の藩主の持ち船、二本帆の船。船室の仕切りは素晴らしい日本の漆で塗られていた、木製のタラップは鏡のように磨かれ、甲板は高価な絨毯が敷しめられていた。黄金の刺繍の紋と花入りの絹織物は、ドア、窓、船体を飾っていた。船の船尾には、随員を連れたロシア大使と日本の高官のためのパビリオンが設けられていた。華麗な刺繍の付いた高価な絨毯を敷き詰めた。船に入り、レザノフはパビリオンの入り口に２人の歩兵を立たせ、竜王に双頭の鷲を持った全権大使の旗を揚げるように命令した。

岸で大使はバニソフに迎えられた。彼らは奉行の名の下で、大使の日本への来行を祝し、早期の回復を願った。レザノフは注目と敬意で包まれた。どうにかこうにかして、彼と随員達は彼らに割り当てられた部屋に入った、が、ドアには鍵がかけられていた。陸地では、ロシアの使節は名誉ある捕虜の如くであった。日本人さえまずい状況と感じた：彼らはとにかく、隠したがった、古い伝統における異常な敬いと引き合いを。今回は、江戸から長崎に新しい奉行がやって来た。ロシア大使の到着は前の奉行を引き延ばした。未だ首都には出発していない、長崎には同時に２人の奉行が居る事になった。

ロシアの船乗り達はその時、船で待機していた。１２月２３日に、船は町近くに移動した。そこは５番停留場であった、長崎への入港待ちのための。　台風で、ナデジダ号は大きな損害を被った。これ故、船の修理が必要となっていた。この許可は、遅れる事なく認められた。日本がクルゼンシュテルンに必要な資材を調達してくれた、資材代の支払いを拒否して。船底の外板のための銅板さえ調達してくれた。クルゼンシュテルンは、船員に供給する結構な量の食料に注目した。しかし、使節としての外交の仕事は延び延びとなった：日本はロシア側と公的な接触に乗り出したくはなかった。

停留場にいた時、ナデジダ号の船乗り達は、自分の船を捨てる権利はなかった。クルゼンシュテルンが強調していた：「我々は陸に去る事はできなく、手こぎボートで若干の距離こぎ出す事さえ許されていない。６週間にわたる交渉は日本の役人を説き伏せることができた、ロシア人に岩だらけの土地の狭い帯を分配することを。」　使節がすんでいた陸には、天文士だけが行く事ができた、観察のために：レザノフの住居の中庭は長さ４０歩、幅３０歩、彼らは天文台に似たものを作った。日本人はいつも船乗り達や大使の後をつけ回した、手こぎボートがナデジダ号から離れ過ぎた時、天文台に船で行こうとして、１０隻から１５隻の日本の小舟が錨を上げ、ロシアの小舟を岸に導き、そして元へ戻した。自分の船に幽閉されているように居るロシアの船乗り達はオランダ人と交流したがった。しかしこれは彼らには許されなかった。希ではあったが、バタビアに去って行くオランダ船で祖国へ手紙を送る事も禁止された。大使にだけアレクサンドル１世に短い報告書を書く事が許された、恙なき航海について。その際、奉行が要求した、そのコピーを撮るために、報告書を前もって自分の所に送付するようにと。

直にナデジダ号に日本の役人がやって来た。皇帝と宮殿への贈り物のために、小舟で大きな鏡を移すために、２隻を繋ぎ、板製の敷物を作り、それをむしろ、ござ、綺麗なラシャで覆った。クルゼンシュテルンはじっくりと見て気がついた、鏡を江戸へ手で運ぶと。

このためには、１枚のガラスに６０人もの人足が要求された、彼らは絶えず入れ替わった。彼にはわかった、日本の皇帝には不可能な事は何もないと。これの確証として話されていた、２年ほど前に、中国の皇帝が日本の帝に生きた象を贈呈した、この贈り物を同じく長崎から江戸へ手で運んだと。

大使とともに彼の住まいには、８人ほどが住んでいた。日本人の通訳はロシア人との会談の前に、役人にしつこく調べられた。第３者を通じての科学機器の購入を禁じられていた、物の交換も。かって、ラングスドルフが板で囲われた竹矢来の隙間をのぞき込もうとした時、ラングスドルフは初めて破った、ロシア使節団の重ぐるしい雰囲気を。彼は日本人と仲良くなる事にした、科学－風船－で。薄くて単純な日本の紙から、直径３ｍ程の球を準備した。それには、ロシアの双頭の鷲を描いた。その後、ラングスドルフはそれに確りした糸を繋ぎ、燃やした藁からの煙を満たした。球は驚く日本人の目の前で上がっていった。少ししてから、博物学者は糸を巻いて、球をもとへ引き戻した。これは１８０５年１月２５日（２月６日）の出来事であった。成功が元気づけた、次の日、博物学者は再び球を放った。が、今回は、それを地面には戻さなかった、球は海に落下した、日本人達が拾い上げた。この出来事がナデジダ号の船員の気持ちを高揚させた。多くの将校達が自分の球を作った：エルモライ・フリデリチ、幼年学校仲間オットーとモリツ・コチェブ、副舵手ワシリイ・スポロホフ。彼らは球に籠を吊して空中に放った。ラングスドルフの３回目の放球はスキャンダルを引き起こした。その目撃者であり、他の博物学者であるレベンシテルンが自分の日記に書いていた：「朝１０時、球は一定の早さで上昇して行った、が突然に向こうに急速に落下していった、長崎の町に風で運ばれていった、そこで住居に落下した。屋根の上の球から、煙がもくもく立ち上がった。人々は思った、球と家が燃えていると。それらは大きな騒動を引き起こした。　奉行に苦情が持ち込まれた、「ロシア人が町を燃やしたがっている」と。しかし、長崎の奉行所の役人達は平静であった：何の発火もなかった。

空中浮遊の実験はロシア人との関係に変化をもたらした：暖かくなると、交渉への準備が始まった。ラングスドルフは許可を得た、思い立った時いつでも風船龍を放つ事の。彼は日本の番兵と自由に交際した。辞書も作った。これと並んで、彼はヨーロッパのために新しい科学－魚類学－に勤しんだ。彼は日本人の料理人の配置を確保する事ができ、長崎湾で上がる各種の魚を彼に持ってくるように話しをまとめ上げた。半年後、ラングスドルフはヨーロッパでは見かけない、４００種もの標本を採取した。疲れを知らない学者は、注意深い相談者でもあった、日本人から聞いた全ての事を覚え、書き残し、多くの事を描写した。

大使と彼の随員達は４ヶ月間の名誉の監禁生活を送った、日本を出立するまで。ニコライ・レザノフは頻繁にナデジダ号の船員やオランダ商館の館長と会った。その際、日本人は決して二人きりでわ合わせなかった。しかし、そのような条件下でも、レザノフは時間を無駄には過ごさなかった。日本への自分の到来から最大限の利益を取り出す事に努めた。彼は熱心に日本語に取り組んだ、通訳のへべ・キセレフと一緒に航海中を初めてとして。航海はまさにレザノフのためにあった、日本語を勉強し、語彙集を作らせた。共同の仕事の結果として、２つの草稿ができた：「簡易露日案内書」と辞書。５０００語以上単語のある。レザノフはそれらをイルクーツクの航海（ナビガツク）学校に送りたかった。

自分の著作の全文で、彼はアレクサンドル１世に対してメッセージを書いた：「偉大なる皇帝陛下に、辞書と案内所を贈呈する、日本語の文字と文法の知識の足しとして、私の世界一周航海中に書き上げた。私に同行した平民の日本人が、私に日本語を教えてくれた；抽象的な概念が表す単語、それらの理解は授業ではなかった。これ故私の著作は希望される完全性にはほど遠い；しかし、科学や商業のために少しは役に立つであろうならば、特別に報いられる。」　その後で、原稿は科学アカデミーによって印刷された。

３月３０日、江戸から役人がようやく到着した、この際、秘密の監視人として遠山金四郎景元。最初の接見が４月４日に決まった。この日、レザノフは自分の随員と一緒に、日本の船に乗って町へ移動した。岸では、奉行の代理人と名誉衛兵が彼を出迎えた。通りに沿って、軍隊が整列していた。しかし、民衆は居なかった：通りは誰も歩いては居なかった。岸への出口の所には大使のために豪華な籠が用意されていた、８人の担ぎ手がいる。大使の秘書と平の随員達は徒歩であった。レザノフは条件を出した：彼は皇帝の代理とヨーロッパ式で挨拶をしたいと。大変であったが合意しあった。

交渉が予定されている宮殿で、大使は沢山の通訳と会った。迎え入れる大使と彼の随員達に、お茶とタバコが提供された。その後、奉行所の役人が年配の通訳を連れてレザノフに移動するよう願い出た、会議の部屋に。秘書一人だけを連れ、他の随員全員を残すようにと。皇帝の親書を大使の後について運んでいる。

大使を縦列の部屋を通過させていく、各部屋には役人が並んで座っている、会見部屋ににたどり着くまで。その部屋には、彼は一人で入った、秘書の手から親書を取り上げて。会見場には既に江戸から到達した皇帝の全権代表が両側に長崎奉行を配置して座っていた。相互の礼と歓迎の後に、レザノフは彼に準備された場所に座った。高官が最初に発言した、レザノフが気がついた、頭を垂れてほとんど床にひれ伏している通訳が、時々彼を見ている事に、うれしそうに冷静に。高官の話が終わると、彼らはその言葉をざわついて翻訳した。皇帝から伝えられた返答は以下であった：「日本の支配者は、ロシア大使の到来をうれしく思う：帝国は大使を受け入れる事はできない、書簡の交換と交易は欲しないし、大使は日本を出て行く事を要請する」。

レザノフは顔色を変えた。彼が話した：

「私はそのような図々しさに驚いている。誰が私の陛下に書く事を禁止する事ができようか、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、陛下が待っているより。２人の陛下の内、どちらが強いか。ここでは決めかねる。その際、彼には我々の取引は必要がない、私の君主側からすると、日本とは穏便に関係したかった、彼らの不足の軽減に対する一つの博愛からの。しかし、彼らは思っていないであろうか、ロシアをポルトガルと同じように。

通訳がレザノフの返答を翻訳している間に、彼は注意して翻訳を見ていた、時折日本語を入れて。その後、一人の奉行、飛騨豊後の守が答えた：

「大使には語ってくれ、彼は今日気を病んでいるのか、他の日に会議を延ばしたら良いのではないかと。」

「大いに喜んで！」－レザノフは返答し、会談場から出て行った。

他日に、会議は平穏に行われた。高官が説明した：

「皇帝は大使と貢ぎ物を受け取る事はできない。というのは、日本の習慣に従って、これはできないと答えなければならないので。日本人がどこへも出て行かないと決めてから

既に２００年経っている；他国民と貿易を始める事は根本法が禁止している。一般的な法律が存在する、日本の港に他国の船がやってこないための。ロシア人だけに許されるものではない。日本の沿岸に接近する事は誰にも許しては居ない。」

レザノフは返答した、「日本の法律をロシアは知っている、ロシア皇帝は相互の外交関係を要求しては居ない、ロシアの海域で不幸に遭遇するでろう日本人を今後連れてやって来ることを許して欲しい。皇帝は可能性に興味を持っている、大時化の場合に、ロシア人の船乗り達のために日本の港に待避する事を。そのような場合に、友好的な援助を受け、ロシアの貨幣で供給を受ける事ができるのであろうか？」　この質問に答える事を、日本人は翌日すると約束した、しかし、３回目の会合では、全ての触れた質問に書面での返事を出す条件とした。そのうちに、ナデジダ号に、皇帝の命令で無料で、2ヶ月分の食料を供給した、それ以外に、船員のために２０００個の塩袋を提供した、６ヶ月半にわたる日本での訪問で、ナデジダ号の乗組員の休養と船の材料は、様々な入用で供与してもらった、皇帝のお金でなされた、日本人に示されたロシアの手厚いもてなしへの感謝として。それ以外に、彼の命令に従って、贈り物がなされた：将校には２０００枚の絹製の絨毯、船員には５０．５ｋｇ入の米俵１００個。

ようやく、4月１６日、レザノフは日本政府（＝幕府　＊）から返事の親書をもらった、その翻訳版も。そこに書かれていた：「昔は、全ての国民の船は自由に日本に立ち寄れた、日本人さえ他国を訪問していた、しかし、その後、皇帝の内の一人が自分の後継者に遺言した、帝国の日本人を外に出さない事、オランダ人だけを受け入れる事を。この時以来、多くの外国の町や国が、日本との友好関係を作ろうと努力をした。しかし、この提案は常に拒否された、だいぶ前に禁止されているとして、知らない大国と友好関係を持つことは非常に危険であるので。１３年前、ラックスマン指揮下のロシア船が日本を訪れた（１７９２年１０月）根室に来港　＊)。最近、ロシア皇帝の使者を乗せた他の船が日本を訪れた、最初は不信感のもとで出会い、２度目は友好のもとで。日本の幕府は全てをやってくれている、帝国の法律に矛盾しない限りで。万能の我らが皇帝は貴国に使者を使わし、高価な貢ぎ物を送っている。それらを受け入れ、幕府は普通の国々と同じように、ロシア皇帝に使者を送り、等価な貢ぎ物も送らなければならない。しかし、住民や船には日本に留まるべきであるという公的な禁止令が存在している。他面では、日本はそれほど富んではいない、等価な贈り物に答えられるほど。そのようなわけで、幕府は使者も贈り物も採用する可能性を持っては居ない。日本は大きな要求を持っては居ない、これ故、外交産物はあまり役には立たないであろう；あまりにも贅沢なものは励ましにはならないであろう・・・」

これ以外に、条件が置かれた、ロシア船が日本にやってこないために。が、もし日本船がロシアの沿岸で遭難したならば、救助した日本人を祖国に帰還させるために、オランダ人に引き渡す事。終わりに、皇帝は使者に頼んだ、「昔の法を敬う事から、国をそうしている、自分側から、日本人の送還に対して感謝を示す事で、日本は無償で糧食や出港前に必要な物資を受け取るように願い出た」。

最初の公式のロシアの大使の試みー日本人と交易に関する条約を結ぼうとするーは不成功に終わった：明らかに、幕府は以前からの鎖国を断固として守ろうとしていた。以前に、ラックスマンに渡した許可証については、日本は無視した。交易関係を創り上げる事の拒

否に関して、レザノフは日本側に外交メモを作成させた：「私、アレクサンドル１世の侍従で、勲章所持者であるニコライ・レザノフは日本の幕府に声明する：

１．長崎での私の滞在時に、私は我が偉大なる皇帝名で、交易についてお願いをした、１７９２年にラックスマンに遣わされた、日本の幕府が許可した。何故か､外交官の陰謀によって・・・言葉が変えられ、拒否した。

２．そのような行いは私に日本の幕府に対して示す事を強いた。ロシア皇帝にこの帝国にそれなりの手段が必要とされていることを権利として、それは尊敬を必要とする高官の善隣友好に対して、我が偉大なるロシア帝国の。

３．私にはわかる＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

４．

５．

６．

幕府代表との最後の会談で、レザノフはロシアから連れてきた４人の日本人を引き渡した。長い尋問の後、彼らは仙台藩の代表に引き渡された。代表は特別に自分らの領内の住民のためにやって来ていた。１２月に、日本人達は船団のもとで江戸に送られた、そこで、彼らの藩主の公邸に引き取られた。４日以上にわたって、学者の大槻玄沢が彼らを尋問した、尋問の結果は１８０７年に書「遠洋における驚きの話」としてまとめられた。これら日本人達のその後は知られていない。

長崎人と別れを告げた使節は､船に戻った、日本人とロシア人の間の友好的接触の設立の中で一歩も動く事はできなかった。ある者はレザノフの外交使節は失敗であったと評価した、情熱と高位高官の；他の者はオランダ商館館長のデフの陰謀に原因を見た。彼はロシアとの競争を危険視し、秘密に、全ての条件を利用した。ロシア人が日本と外交・交易関係を結ばないようにするために。交易に関しては確固たる証拠がある。後になって、オランダ商館からの手紙で、偶然にゴローブニンが知る事となった。その手紙に書いてあった、オランダの通訳はこの仕事をうまい具合にやった、レザノフを遣わしたロシアについての意見に日本人をなびかせた。日本人は彼に返答した、多分、ロシア人は日本に近づかないようにと｣。

交渉の否定的結果にもかかわらず、レザノフは印象を残していた、全てを失わないで。「それ以外に、不明瞭な用語や言い回しで、彼らはレザノフに助言をした、彼らの期待する早くて良好な援助をロシア人は遅れる事なく北から始めた、日本付近にある島、松前とサハリンで示した、何回かこれを主張した、もちろん日本人をはっきりと納得させて。サハリンから日本人を追い出さなければならない、日本人はその地の温和しい住民から強制

的にスッカリ巻き上げる、彼ら住民が狩猟した野獣の皮や魚を、日本の北部の全ての住民にとって唯一で必死の食べ物である。この行為の結果は皆の目に明らかとなっている、はじめは、久保は宗教権力の抵抗に反駁した、ロシアとの交易の仲間はずれに対して。多くの民族の食料がロシアに依存している」。

（解説　今日の北海道を、江戸末までは「松前」とロシア人は呼称していた。北海道の南端に松前藩があったので。またの日本で樺太という半島は、ロシアではサハリン　＊）

１８０５年４月１８日朝早く、７ヶ月に及ぶ長崎訪問を終えて、ナデジダ号は錨を上げ、外海に出港した、湾港まで、沢山の日本船が同行した、クルゼンシュテルンはカムチャッカに戻るつもりであった、よくわからない海を通って。日本海は日本人は好きではなかった。非常に嫌っていた。幕府の遣わした通訳はとにかく、ロシアの船長のこの意向を思いとどませようと努力した。彼らは知っていた、未知の日本海の航海は困難であり、非常に危険であると：日本島（本州　＊）と蝦夷島（北海道　＊）の間の狭いサンガルスキー（津軽　＊）海峡には暗礁が散らばっており、強い海流がひどく危険である、常時霧がかかっても居る、日本海の北部を支配している。長崎港からのナデジダ号の出港に先立って、奉行が使節に手紙を使わした。それでは通告していた、ロシア船に日本近海に接近する事を禁じると。これにもかかわらず、クルゼンシュテルンはその場所の調査に３ヶ月間を振り向ける事を決めた、それではラペルス（宗谷　*)海峡の調査に時間を割けなくなる。

彼は知っていた、ヨーロッパの海洋学者の誰も日本列島の正確な地図を作っていない事を。さらには、朝鮮の大部分、蝦夷島の西岸全部、サハリン島の南東、東方、北西海岸も。それら以外に、新しい、より正確な。詳細な海峡の記述が要求されていた、アニバ湾とテルペニア湾も：それらの発見から１６０年も過ぎ、多くの点で変化がある。これらの判断をもとに、クルゼンシュテルンは日本の沿岸の南西と北西部分、サンガルスク海峡を調査するつもりとなった。その幅は良好なヨーロッパの地図に一致しており、約９０マイル。が、日本人の言葉によれば、９マイルはない。それ以外に、クルゼンシュテルンは蝦夷島の西岸、サハリンの東岸と北西岸を調査する事を決めた。同じく、大陸から分離しているサハリン海域にボートを出す事も。確りと確認するために、サハリンと大陸の通行状況およびアムール河口の状況の。最後に、彼はクリル諸島の調査ももくろんだ。この膨大な計画の大部分は遂行された。が、完全に申し分なくはなかった。

長崎を出港して、ナデジダ号は朝鮮海峡に向かった、海岸の近くを維持し、顕著な点の地形状況を定めながら。船乗り達は日本と中間に位置する対馬の間の海峡部分を調査した、その部分の海峡をクルゼンシュテルンと呼称した。（クルゼンシュテルンが手紙に書いていた）「その後、松前島の西岸岸をヨーロッパ人の誰一人として調査していない事を知り。この機会を逃す事はないとして、この部分の地について確かな証拠を地図に書き入れる事にした。時間と天気は我々に好都合であった。松前島－私は自分の船の名称で呼んだ－の南端から、我々はその最北部まで岸一杯に進んだ、どんな物も調査で見逃さないようもして。松前でペルザに示した山は、松前から１０マイルの所にある極小さな島にある、山をＰｉｃ　ｄｅ　Ｌａｎｇｌｅと呼んだ。この小島を住民達はリシリ或いはリシェリ（利尻島　＊）と呼んでいる。私は思っている、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊、我々は松前とこの山頂の間を進んだ。松前の北部へ進んでいった。それと樺太島の間の海峡を探そうという我々の願望は無駄であった。 新しい地図が示している、何となれば樺太島は存在しない」。

更に、長崎では､クルゼンシュテルンは日本列島の北部の地図、或いはそれなりの証拠を探した。特に､彼の興味を引いたのは樺太島であった。日本人がサハリンの南部をそのように呼称していたようである。幾つかの地理上の対象物の名称についての正確なデータを手元に持っていないので、船乗り達はそれらにロシアの名前を授けた。、

この航海時、クルゼンシュテルンは函館に立ち寄らなかった。多分その時点では、函館はそれほど大きくはない村であった。航海者が書いていた、「蝦夷の南岸は大部分が日本に対面している、町である松前の近傍でさえ、我々は畑に気がつかなかった、日本の至る所にあった、日本では岩山の登場にまで畑があったのに。（当時、松前は函館より発展していた　＊）。」

一見して、長崎での数ヶ月にわたったナデジダ号の停泊は、不成功に終わり、ロシアには何ももたらさなかった。実際には､そうではなかった。話す事に無駄はない、肯定的な結果が達成されたと見なす事ができたと。ロシアと日本の政府レベルの代表者達が､初めて会合した。当時、２国間の国境線問題が起き上がっていた、この簡単ではない交渉時、ロシア側も日本側もお互いを良く理解し、少しは接近しあった。ロシアは日本とその国民の研究に良く努力した。

当時既に明らかであった、探検隊の課題と偉業の矛盾は小さくはないであろうことは。レザノフに敵意を持っていたクルゼンシュテルンは外交使節に肯定的評価を与えた、ロシアへの、２０年を経ての。レザノフの個人通訳であったラングスドルフが彼の反論者として発言した、クルゼンシュテルンは見なした、日本はヨーロッパとの話し合いの準備ができていない、が、レザノフとラングスドルフは見た、そのような可能性を、将来性を。

不成功の基本的原因となったのは、日本は全くロシアの寄与を期待していなかった事である。日本は要求していなかった、毛皮を、露米会社の他の商品を。他面では、経済の強化にもかかわらず、日本は余剰食物を持っていなかった。特に米、ロシアに分けてあげられそうな。

航海の直後に､航海記を探検隊参加者達が作成した。第１章がラングスドルフ、探検隊の資料を基に、ヨーロッパとロシアの雑誌に書いて投稿した、科学的で総括的論文を大量に。ドイツで出版された、「ロシアの世界一周旅行についてのメモ」で、彼は間違いを指摘した、総合評価についてのラックスマンの日本訪問（１７９２年根室に来港　＊）の。

ラングスドルフの意見に従えば、ロシアにとって、最恵国待遇の何の条件も、ラックスマンは得る事ができなかった。それ以外に、ラックスマンの探検隊を派遣したのはロシア政府ではなくイルクーツク知事イワン・ピリであった。従って、その探検隊には政府の立場が与えられていなかった、１８０３年の探検隊と異なって。

クルゼンシュテルンに任された探検隊の仕事の総括が１８０９年に公刊された、「１８０３年、０４年、０５年、１８０６年における世界一周旅行」として。これらの本で､彼は協同した学者の名前を挙げた、ロシアの地図制作者エルモライ・レベンシュテルン、レイプチングの自然科学者ビリゲルム・チレジウス・について記述しながら。クルゼンシュテルンはラングスドルフ博士についてはわずかしか書いていなかった。というのは、この

人は完全にレザノフにべったりであったから。世界一周旅行時行われた調査に対して、クルゼンシュテルンをペテルブルグ科学アカデミーの準会員（１８０３年)、名誉会員（１８０６年）に選抜していた。地理学上の発見に対して、彼にデミドワ勲章を授けた（１８３７年)。クルゼンシュテルンは１８４６年８月１２日、７５才で、レベル（最近のタリン）で亡くなった。

レザノフはクラスノヤルスクで、１８０７年３月１日に亡くなった、ペテルブルグへの途中で。日本に、彼に関する物が保存された、肯定的な事も否定的な事も：レザノフが出した命令によって、水兵がサハリン南部とキリル諸島に住んでいる日本人住民に襲いかかった。

ラングスドルフは世界一周旅行中、カムチャッカ、アレウートスク列島（アリューシャン　＊)、アラスカで貴重な標本を採集した。１８０８年７月に、彼は植物園の助手となった、１８０９年９月には、動物園の。１８１２年、彼を科学アカデミーの動物園に関する臨時会員に選出した。有能な学者は１８５２年６月１７日に亡くなった、ドイツのフレイブルグで。

フェートン号事件

日本人はロシア人に対して、自分の立場を貫いた、彼らの条件に屈することなく、隣接する国との公的な関係を始めるチャンスを利用することなく。それ故に、少し後に、日本人の自尊心が大いに失われることになった、５本マストで３８台の大砲を持ったフリゲート艦フェートン号事件の結果。この船は１８０８年に、リバプールで建造され、フランスの革命家達との小さい戦闘に参加した。その年に、イギリス人を太平洋に送り出した。その年に、ナポレオンはオランダの皇帝を味方にして、その財産をイギリスとの戦争に利用しようとした。フェートン号の船長はオランダ商館を襲撃することを考えた、そこには２隻のオランダ船の到着が予定されていた。

１８０８年、フェートン号はオランダ国旗をはためかせて長崎湾に立ち寄った。規則に従って、商館の館長は完全な信頼を持って、船にボートを出した。同国人が居るはずの。そして、イギリス人に捕縛された。フェートン号の船長は捕虜達に強いた、やって来た船に何の手出しもしないで、水や燃料や食料を供給するように、幕府に願い出るようにと。懇請は武器で強化された、町や港に停泊している日本船や中国船に向けられた。

招かざる客の専横に対する何の手段も幕府にはなかった、佐賀藩主は長崎の安全を保証したが、限られた可能性において、計画では千人であった内の百人しか動員できなかった。長崎主執政官である松平源平は直ぐにとなりの九州に援助を申し出た。そこで、８千人の武士を動員した、長崎へ行くには４０隻の船が必要となった、これには時間を要した。状況の袋小路を理解して、長崎奉行はイギリス人の要求をかなえることにした。イギリス船の船長は既に知っていた、この年にはオランダ人は来港しないことを。デフに手紙を残し、１０月１７日、日本軍の到達のだいぶ前に、イギリス人はフェートン号に乗って湾を去って行った。

事件の責任は長崎藩主松平がとった､儀礼的な切腹をした。だいぶ後になり、ベヌコフが特記していた：「彼が解決できない、彼の勤務実績を落とすような出来事について報告をする；報告しないことはできない、何となれば、その時には幕府の密偵が既に報告しているので。彼を避けて。どのような運命が彼を待っているのか良く知って、デフが語っている、事件の後半刻で奉行は家族を集め､皆の前で腹を切り裂いた。沿岸警備隊の長は船を湾に引き入れ、その後、湾内に隠した、彼の例にならった。」

フェートン号は１８１２年にイギリスに戻ってきた。１８７２年に売却された。この間、幕府は沿岸警備を再編成しただけではなく、イギリスとロシアの研究プログラムを立ち上げた。まず第一にかの国の言語の。１８１４年に、オランダ語の通訳本木正左衛門が最初の英日辞典を作成した。

オランダは１８１０年にフランスによって合併された。その植民地インドネシアはイギリスに占領された。出島だけに、オランダ国旗が翻り続けた。３年の間、オランダ船は長崎に寄港しなかった。イギリス人は商館の管理権を取り上げようと一度ならず試みたが、デフ館長はイギリス人の提案を勇敢にも撥ね付け、独立を保った。もちろん、これは簡単なことであった、日本の国力をバックにしていたので。オランダは１８１５年に独立を回復した。翌年には、インドネシアを取り戻した。後になって、オランダ政府はデフの勇気を称えた。

出島の最後の商館長ドンケル・ケルチウスは１８５２年に長崎にやって来た、その１年後に､江戸から遠くない浦賀にアメリカの司令官マシュー・ペリーがやって来た。日本に海港を要求して、他の国々との貿易のために。

この時、ケルチウスは東インド会社の長からの公的な手紙を長崎奉行に渡していた、手紙では､日本人に警告をしていた、アメリカ船が日本沿岸に近づき、要求していると、オランダと同じようにアメリカとの交易の条約を締結するようにと。しかし、手紙は幕府を当惑させた、が、次の年に、日本は連続した２件の事件を抱えることとなった：浦賀へのアメリカ船の来港、と長崎へのプチャーチン指揮下のロシア使節団の訪問。

エフイム･プチャーチンの成功

ペリー司令官の下のアメリカ艦隊の－１８５３年８月２２日、久里浜への上陸といういう日本への到着後－５週間後に、４隻のロシア船が、長崎に投錨した。彼ら（プチャーチンの船）は異なった港を出て、日本までの彼らの道は長かった。艦隊をエブゲニイ・ワシリエビッチ・プチャーチンが指揮していた。どのようにしたら経験のある船乗りが外交使節を首尾良く扱うことができるかを自分の例で示しながら。

プチャーチンは、海軍貴族学校へ海軍士官候補生として進み、３０歳の時に勤務に就いた。そして、素晴らしい栄達をした。１８２２年３月１日、彼は海軍少尉となり、１８２８年２月２２日は中尉に。ツアプス村占領におけるカフカス人との戦闘での功績で、１８３８年６月８日、海軍中佐に。１８３９年５月２３日、海軍大佐に、３年後の､１８４２年８月５日、ペルシャ湾岸におけるトルクメ人の略奪の中止に関する素晴らしい作戦に対

して、彼を海軍少将とした、海軍省関係の身分で。１８４９年４月３日、プチャーチンは皇帝の侍従武官長に任命された。２年後、勤務の功績により、中将の位が授与された。

一見して、彼の海軍での出世は外交とは直接な関係を持ってはいなかった。が、プチャーチンの性格はこの役には適していた、それ以上ないような：必要な時には彼はお人好しになれた、基本問題に厳しく、頑固さを残しながら。偶然ではなかった、外務省が彼を選んだのは、中国と日本で様々な仕事を遂行するために。その時期、将校には、フリゲート艦パラーダ号に乗ってイギリスから、１８５３年の出港が差し迫っていた。

パラーダ号－ロシア海軍の花でも自慢でもなかった－は１８５２年１０月に、東海への遠洋航海を前にして、イギリスに修理に訪れた。ポーツマスで、フリゲート艦は船体の検査のためにドック入りした。幸運なことに何も問題はなかった。が、近海航行以外には、この船はもう役に立たなかった：外板の銅板は多くの箇所で剥がれていた、船底は貝で覆われていた。が、何らかの理由で、海軍省はこの船に使節の役を割り当てた。

ブリストルでプチャーチンは成した。後でわかることであるが、極東のために極めて大事な物を手に入れたのである。彼は約２万千ルーブルで、スクリュー付きのスクーナ艦を買った、１８５１年に建造された、地中海での果物輸送のために。プチャーチンはそれをボストーク号と名付けた、祖国の名誉あるロシア船に敬意を称して。先に語っておかなければならない、新しいボストーク号は素晴らしい後継船であった、南極大陸を発見した、初めての鉄製のスクーナー船であっただけではなく、極東の海を航海した、素晴らしい地理学上の発見もした。このスクーナー船を指揮したのは海軍中尉ボイン・アンドレービッチ・リムスキイーコルサコフ。１８５３年初めに、パラーダ号の修理は完了した。１月６日、２隻は遠洋航海へと錨を上げた。

修理はパラーダ号の元の航海特性を部分的に復活したけれど、遠洋航海はプチャーチンの心配を証明した。彼は報告書に書いていた：「継続する航海に対する我々の古い船の弱さと恩知らずは反駁できない例で実証された：看板には至る所にシミ、吃水部分にも動きの不調が見られた」。水漏れはひどい、水は至る所に流れている、２台のポンプがどうにかこうにかやりこなしていた、プチャーチンの秘書であるゴンチャロフは、家に戻りたがっていた。これに関して、リムスキイーコルサコフ。が書いていた：「ゴンチャロフは全く人を引きつける魅力がなかった、真の雄弁を身につける他のどの人達も持っている。快楽主義の内の＊＊＊＊＊＊、うまい食事と食後の残飯で太った、応接の上手な人物、が、＊＊＊＊＊＊、彼をいろいろな恐怖で悩ませる、彼にため息をつかせ、全ての憂鬱に連れて行く。」

リムスキイーコルサコフの言葉を全く全部信用するわけにはいかない、彼は同じく困難な航海に疲れていたと見なさなければならない、未来の有名な作家を厳しく判断し。まさに、イワン・アレクサンドロビッチ・ゴンチャロフのお陰で、我々は今日、パラーダ号の歴史的航海について沢山の事を知っている。リムスキイーコルサコフは、皆の意見によれば、周りの者との関係において、極めて疑り深い性格を持っていた：彼はプチャーチン宛にメモを渡した。航海の準備の期間さえ、プチャーチンに対する不満を彼は感じていた：将軍は最初は彼に１００フントを支払うことを許可した、予想外の出費として。が、その後、自分の命令を廃止した、将校の意見によれば、国庫の金は十分にあったにも関わらず。が、予想以外の出費に、それらはいつも割かれていた。ボイン・アンドレービッチは憤慨

した、「誰も行ったことのないような、かような辺地の勤務を指示されたスクーナー船は、素晴らしい商船より惨めに装備されて派遣される」。

ある時、Ｂ．Ａ．リムスキーーコルサコフがコンパスの調整をしていた時、プチャーチンが彼に命令をした、直ぐに錨地へ行くようにとの。が、素直でない中尉は命令を実行しなかった。始めている仕事が終わるまで。これに対して。ボイン・アンドレービッチは半の罰も受けなかった、戒告処分さえなかった。この事は彼に考えの基礎となった、とにかく、何の至急性もなかったということを。が、プチャーチンは自分の権力を悪用しただけであったと。船乗りは書いていた：「彼には組織能力がなかった、これについて、明らかに彼は見なした、他の将校達は他の管症なしに１つの仕事を最後まで行う信頼する状態にはない。これ故、不断において彼らを管理し､絶対服従の元においた。指揮官の最も重要な欠点の１つは部下への不信にあった、この不信は、彼においては不快まで成長した。誰も信用しないで、将軍は余りにも沢山の職務を背負いすぎ、結果として、彼は不断において自分の出した命令を忘れていた、矛盾する命令も出した、自分でも戸惑った。自分の部下を激励したがり、彼はしばしば非現実的な期間を設けた、その後、自分の命令に気がついた、その後、再び自分の命令の遂行を強いるために」。

この歴史的航海において、プチャーチンには多くの素晴らしい同伴者達がいた。日本人との交渉において大きな役割は、通訳のヨシフ・アナトノビッチ・ゴシケビッチがはたした。当時、ロシアには日本研究者は一人もいなかった。しかし、ペテルブルグ神学アカデミーを修了したゴシケビッチは、北京にあるロシア宗教使節団に１１年間勤務し、中国語を良く理解した。北京からサンクトペテルブルグに帰還した後、外務省のアジア局の通訳に任命された。１８５２年夏に、海軍中将プチャーチンはそこ（ペテルブルグ？　＊）へ向かった、彼の外交調査に２人の通訳を転任させるという要請を持って、選択はゴシケビッチに委された。彼は間違いをしなかった。フリゲート艦パラーダ号の指揮官になったのは､海軍中佐イワン・セメノビッチ・ウンコフスキイであった｡将校達は気がついていた、この大胆な船長は、７年に渡って有名な将軍ミハイル・ペトロビッチ・ラザレフの副官を務めていたことに。彼と一緒に３度世界一周航海を成し遂げていた、上品なナマーを持った人であり、良い性格の人であった。

１８５３年８月９日夕方、パラーダ号は長崎の泊地に接近した。既に暗くなっており、誰も泊地のフリゲート艦に気がつかなかった。これ故、朝まで浮遊して待機することに決めた。その間に、船乗り達は甲板に群がった、今まで見たことの無い国をよく観察しようとして。

ゴンチャロフが書いていた、「オー！　ナガサキだ！　どうしてナンガサキＨａｎｇａｓａｋｉでないのか？　本当の呼称がナガサキＨａｇａｓａｋｉだから、文字ｈは枠のために付け加えられている。若干の単語における他の文字のように。　「長崎は唯一の港である、オランダ人だけが入港することを許されている。」　地理に書かれていた、ここへは、付け加えなければならない、昔は許可無しに簡単にやってこれたと。つまり、誰にも特権はなかった、オランダ人側にもなかった、多くの関係において。「これが長崎か！」

回り全部から聞こえた、第２泊地に碇を下ろした時に。第３泊地がありそうである、先に進むと。その場所にいることに気がついた。長崎には３つの泊地がある：第１泊地は海洋に開けている、２つの側から保護されている。その左側に、掘り崩した丘の上に、砲台

が造られている、多分、我々の砲兵の発言によれば、確りしたものである。しかし、もちろん、町は全く見えない。我々は話した：これは、多分、全くの一部分、最も酷い、郊外；ほらあばら屋が！　建物、宮殿、寺院はどこ、ケンプフェルや他の者達が書いていた、特に、ケンプフェルが、彼は多数を数えたという？　更に先へ、岬の向こうへ進まなければならない。

回りは何という眺望であろうか、遠方まで！　第２泊地の入口に留まってみる、パッペンベルグ山（？　＊）のところ、海を見渡す。その後、長崎の様子を遮っている岬の外形を見る、狭い湾キバチ（？　＊）を見る、そして全てを。泊地の中間に進んでいく、海が見えなくなる、その後突然に、左に入り江が開く。カゲナ島、カタカシマ島、亀の島、入り江が見える。右側の岸は手の加えられたテラスとなっている、緑の階段のような、山の上に向かって、海から空へと。

我々は気分が良くなった。我々より３ベルスト奥に広がる大光景を描写する、高い丘が見える、殆ど山のような。その麓には白い石灰の壁のある密集した家屋。瓦や木の屋根を持った。そこは正に町である、半円形の湾岸にある。湾から海峡が伸びている、広くて、ネバ川に似た、緑濃く丘の多い岸をもった、あばら屋が点在している、砲兵陣地、村、ハイマツ、畑がある。

湾の粉飾、泊地の、多数の小舟のある、奇妙な町の、密集した灰色の家のある、丘のある海峡、近くは緑で明るい、遠方はどんよりしている。全ては調和している、生き生きとしている、現実のようではなく。疑う、この様相を描けないものかと、魔法のバレーからそっくりと得られないものかと。

沿岸の人々、一隅、慰みと倦怠の隠れ家にとって、海峡の岸の模様は何を形成しているのか！　あそこには、丘には深くて、暗くて、廊下のような峡谷が走っている、木々が育ち、狭い。いつも怯えさせている、そこに隠れている村を遠くへ押しつぶそうと。村々で囲われている小さな湾は、眠ったような静寂、そこはいつも暗くて寒い、そこでは強風が僅かにさざ波を立てる；そこでは暢気に岸に引き上げられた小舟が休んでいる、片側を水に突っ伏して、他端は砂の上に。

左側には、幅が広くて長い入り江、曲がって奥深い。その真ん中に、パッペンベルグとカメノシマ（？亀の島　＊）－オモチャのような２つの島、坂立った森に覆われている。もじゃもじゃの髪を持った２つの頭のような。ミニチュアのような海峡がそれらを全面で迂回して通っている。遠方に見えている、切り立った崖と海が。

右には、なだらかな岸を持った高い丘が続いている、それはそこに登るように手招きしているようである、緑色の階段状段丘に沿って。日本人の禁止にもかかわらず。それらの後ろには低くて気まぐれに散らばった丘が広がっている、そこから結構陰気で高い山々が見えている、少し後退して。子供の中の大人のように。海峡は更に伸びている；海峡の輝く表面に沿って。散らかっている石が黒く見えている。最後の光景ではノモ岬は青く見えている。

海峡はカゲナ島を長崎の海岸から分離している、それは今度は他の海峡でイボシマ島を分離している、そこは綺麗で、海原が広がっている。岩棚の至る所、岸から取り残された岬は草木で覆われた、大きな岩盤。絶壁の端には草木の塊が所々に張り付いている、正に花束のように。正に芸術家のような、良く考えられた気まぐれ！」

漸く夜が明け、プチャーチンは皇帝の全権を示す旗を揚げるように命令した、船はゆっくりと内湾の泊地に入っていった。べた凪で船は速くは動かなかった、パラーダ号は昼の４時に漸く岸に接岸した、夕方６時に、国歌を演奏しながら、碇を下ろした。日本人はロシアの艦隊の到来の目的について熟知していた。直ぐに乗船してきた。

交流は公的なものに限定された。交渉は行われなかった。将校達は気がついた、日本人は質問に対して返答を避け、簡単なことにも、何の情報も与えないようにしていることに。ロシア人を大いに驚かせたのは、日本へのペリー提督の来航を黙ってやり過ごしていることが。ゴンチャロフが日記に書いていた、「アメリカ人が彼らの江戸にやって来たことの素振りを見せようとしなかった。彼らは考えている、我々はペリーの件を知っていないと；一般にヨーロッパでは、彼らと同じように隠す、例えば、艦隊がどこへ行くのか、或いは、ある国は知らない、他の国が第３国と戦争をしているのかどうかを」。しかし、日本人達は明白な嘘を話さなかった：面目を失わないために、そのように船乗り達は理解した。

ロシア人の多くの質問に返答はなかった。この際、日本人は上司の名前を引用した：彼らならば質問に答えられると。が、生食品は遅延なく調達すると約束した。実際において、長崎に停泊中、船乗り達は食糧に不自由していなかった、食糧はパラーダ号とボストーク号に充分な量届けられた：オランダ人を通して岸から。或いは上海からの輸送船メンシコフ卿号で、上海から長崎まで３昼夜の航海かかった。天候は好天気続きであり、将校や船乗り達の健康は良好となった。ロシアの２隻では、毎日、演習が行われた：帆の出し入れ、砲術。１８５３年９月６日、演習時、不幸な出来事が起こった：２３歳の乗組員の水兵ボリソフが揚げ帆の時、不注意で帆桁から甲板に落下した。骨折し、脳震盪の兆候も現れ、数時間後に亡くなった。

将校達と士官候補生には自分のしきたりがあった。彼らは長崎港や海岸の防御施設の絵を描いた。彼らの毎日の職務に、外国語の読書と翻訳があった。それ以外に、彼らは手こぎボートの管理に完全となった、毎日長崎湾に親しみながら。日本人はこれに対して極めて批判的に対応した、自ら小舟を出してこれを邪魔した。船乗り達が海洋遠くに出て行ってしまうと、日本人は手を振って戻ってくるように呼びかけた。最後には、将校達は耐えられなくなった：日本人達に通告をした、もし日本人の小舟がロシア船に接近するようなことがあれば、小舟を力で遠くへ引っ込ませる。プチャーチンも通告を命令した。船乗り達は自分の習慣を実行しながら、多くの寛大的な態度に勤めている：岸には行かない；長崎に着いた、が、江戸ではない、これが出来た時には、何の評価もしない、＊＊＊＊＊＊＊」。

船乗り達には分かった、「長崎は海関係においては非常に有益な所であることが、広くて安全な泊地があり、船の停泊向きの静かな湾である、損傷全てを修理することが出来る。少しは教養のある国民の手の中にあり、沿海州の町の中ではトップの位置を占めている。短時間の判断ではあるが」。しかし、長崎の要塞の武器は、ロシア将校の意見によれば全く対応していなかった、現在の要求には、要塞技術の：「要塞を一見すると、そこに配置されている武器は有力な海軍量の反映には十分である；が、長崎の要塞を注意深く見ると分かる、日本人は理解していないことが、技術についても、大砲術についても」。

船乗り達は奉行の説得を試みた、彼らを場所に連れて行くようにと、クロノメーター調整のための、磁気観測のための、乗組員の散歩時に。が、成功しなかった。そのさい、彼

らは直ぐに理解した、長崎奉行は極めて限られた真実だけを持っていることを：ロシア人からのメッセージや贈り物を受け取るか受け取らないかという問題さえ、彼自身では決めないで、首都の権力が決めていることを。プチャーチンが奉行にロシア政府官房長ネセリロデの手紙、幕府宛ての、を渡した時、江戸から彼らによって得られた命令を読んだ。それには、手紙を受け取りることを許可し、ロシア人に通知をしていた、「その件に関しての返答は、直ぐには出来ない」。この件の少し前に、将軍が亡くなった。日本人の意見によれば、返事は極めて遅くなるであろう。ロシア政府の名前で哀悼の意を示して、プチャーチンは奉行に理解を求めた、もし手紙を得てから６週間内に、彼が返答を得なければ、彼に与えられた命令に従って行動するであろうと、日本の首都に自主的に向かうと。

パラード号が岸に接近する移動の許可を得るために、一月を要した。奉行は、漸く返答した、もしロシア人が希望するならば、内湾の泊地に泊まれる、が、岸にはそれほど近くはないが。桟橋にいる日本の小舟の通行の邪魔とならないために。この許可で、船乗り達は若干の企みに気がついた：「フリゲート艦が航路に入った時にだけ、日本人達はその後ろに小舟の列を作る、我々に第２泊地を遮った、そこを搭載ボートで走り回ってはならなかった；彼らはこれに成功していた。しかし、我々は分かっていて、同意しなかった。彼らは頼み込んだ、認めながら、彼らは奔走していることを、我々が平静であるように！”君達は我々の客である、－栄之介が話した、－考えてください、庭園に雨が降ってきた、旧友（フリゲート艦を考慮しながら）に傘を提供する。が、彼はそれを拒否する・・・”－”それを若い者（小さい船）に譲るために”、－ポシェットが付け加えた。

プチャーチンは欲した、ロシア人達がここに長居することを：コルベット艦は内の泊地の入口に泊まっていた。スクーナー艦と輸送船は航路中に止まっていた。フリゲート艦は第２泊地にいた。それらは自分で維持していなければならなかった。９月１９日、パラーダ号とボストーク号は新しい場所に移動した。船の曳航のために、１８０隻の日本の小舟が集合した、フリゲート艦に密接した。目撃者が記録していた、「漕ぎ手、例によって、裸で、雑で青色の半纏を着た者は多くはなかった。多数の少女ら（皆きちんと服を着ていた)、が女性は一人も。我々は窓から彼女らにパン、金などを投げた、小さいコップでラム酒を配った：彼女らはむさぼるようにそれらを取り合った。多くの者が大砲によじ登った、港では、叫び声、喧噪！」。

プチャーチンが自分の報告書に書いていた、「この３０日間、その後の２ヶ月間、我々が長崎の泊地に滞在した、中国での休息までの。私は奉行、彼の配下との友好関係を維持するように努めた。配下をフリゲート艦に招待し、彼らに出来るだけ我が政府の意向に関する信頼を吹き込んだ。そして、結構成功した。バニオス（官僚？　＊）や年配者が喜んで興味を持って我々の風習を観察した。通訳を通してヨーロッパの国々のシステム、生活の例等についての話に耳を傾けた、我々と極めて異とするものについて。通訳は一度ならず、秘密に希望をさらけ出した、ヨーロッパ人と少しでも懇意になりたいという。我々の目的の達成において成功が期待された。自分等の希望の確証として、我々は何気なく素晴らしい状況を導いた。すなわち、レザノフ領事時代に、幕府の６人の高官の中で、２人だけが、外国との交流の有効性を説明した、が残りは反対であった。今日と同じように。彼らの意見によれば、事は全く逆であった。すなわち、２人は外国の船に日本の門を開くという一般の意見に賛成しなかった。

ゴンチャロフが日記に書いていた、「大声で叫び立て、日本人達は群れて自分の監獄の門から逆り出る。喜んで新規の物に熱中する；彼らは、外国人とささやいた言葉、交わした視線を密貿易としてスパイを追跡しない。我々の船は今、何の国際条約無しに、全ての可能な商品で埋められた、将軍の助け無しに、彼は全てのもうけを自分のものとする、必要がない、日本は、権力の言葉では、国は貧しく、通商するには何もない。この無気力のもとで彼らの生活は隠れ、楽しみ、はしたない！　能力、才能の山、－これら全ては明らかに些細なこと、無毛な交渉で、が、同じく明か、内容だけがない、全ての個々の生活力は湧き過ぎた、燃えすぎた、新しい物、元気を回復する始まりを要求している。日本人は非常に生き生きとしており、自然のままである：彼らには馬鹿なような者達は少ない、中国のような；例えば、重く、杓子定規の、廃れた、無益な教養、それらで人々は馬鹿になる。例えば、彼らは全てを探り出し、全てについて詳しく尋ね、全てを書き残す。江戸にいたことのある全てのオランダ人の旅行家達が話している、彼らの所にわざと日本人の学者達を派遣した、何らかの新しく、興味を引く物・・・を借り出すために。もし日本人が古いものに愛着を持つならば、ただ新しい物に対する恐れから、新しい物が良いことを信じているのも関わらず」。

若干の日本人には、他国人に対する不信と恐れが残っていた。ある時、ポシエットとナジモフが２隻の搭載ボートをコルベット艦オリブツァ号に派遣した、それらの通路は日本のジャンク船の傍であった､そこからポシェットの搭載ボートに向かって薪を投げてきた、ナジモフのボートには水をかけてきた、が、当たらなかった。「平民の馬鹿な行為！」、この出来事をゴンチャロフは特徴付けた。

長崎でのプチャーチンの顧問にフィリップ・ジボリドがなった、彼は１８２３年にオランダ商館に医師の職務でやって来ていた。オランダ人の通訳との交流で、彼は日本を研究し始めた、最初のヨーロッパ人の一人となった。日本について様々な証拠を集めた：日本の地理、歴史、自然、文化、風俗、習慣、長崎の。これらの調査の結果は公刊された：１８３２年に、ジボリドの本「ニッポン」は日の目を見た。日本について初めてヨーロッパを紹介した。プチャーチンには、この本が日本についての基本的な情報源であった。この本を用いて、彼は友好関係を打ち立てるつもりであった。同時に、ジボリドは日本の近代化への寄与をもたらしていた、日本人に西洋医学を紹介して。

９月２５日で１年となった、パラーダ号が旗を揚げ、クロンシュタット泊地を出航してから。航海の１周年を記念して、祝祭が行われた、自分も入れて祈りと宴会を。日本人達が招待された：ハギワリ・マタサ、バニソフの年配者がやって来た、江戸から新しい奉行と一緒に到着しがけの、同じく江戸からの通訳栄之介。「日本人を再び褒めた：将官の部屋に呼び、果実酒やお茶でもてなした、岸での場所を質問した。彼らは話した、数日後には江戸から返答が期待されると。彼らに宣言した、我々はフリゲート艦を航路に簡単には出さない、彼らが小舟の鎖を外すならば、そこへ入ることを遮っている。彼らは最初は、例によって、法を引き合いに出した。その後に語った、小舟での警戒に雇われている人々はこれで生活費を稼いでいると。ポシェットは、将軍の命令に従って、答えた、法は永遠ではない、が、２００年存在している、外国人に窮屈な法が。それに気づく時である、状況が変わっていると。栄之介は非常に頭が良く、確りと答えた：”貴方は分かるでしょう、我々の所の法が何故その様なのかを（彼は手でそれを示した、それらはどのようなものか

窮屈な、しかし話すことは出来なかった)、疑いはない、それらを変えなければならないことは。彼は付け加えた、しかし、ヨーロッパの船が訪問し始めた、次々と、そして多数が。長崎は１０年に渡り、それ故、長崎には変更する必要がなかった。」

１０月に、長崎奉行が伝えてきた、プチャーチンに、指定先への彼の手紙の配達について。が、１１月７日、パラーダ号で奉行所の役人が手紙を持ってやってきた、江戸から長崎へ、ロシア人との交渉のために、重要な高官が直ぐにやって来るであろうと。プチャーチンは決めた、一月より早くは会見は行われることはない、その間長崎に残り続けるのは益がないと見なし、上海に出航することにした。この事を知った日本人は安心した。パラーダ号での会食終了後、奉行の代表団が進み出て伝えた、奉行は江戸からの許可を得ていないが、責任があり、ロシア人に岸での場所を割り当てると。夕方、キバチ湾に陣取るという具体的提案を持ってやって来た、以前に使節レザノフが占めていた所であった。将軍はペシュロフ、コルサコフ、ゴシケビッチを場所を見に行かせた。不機嫌に戻って来て、語った、場所は良くないと：何の植物も生えていない、砂もなく、岩も。拒否を受けて、日本人は直ぐに奉行の返事を持って戻って来た。全てを判断して、怒って伝えた、他の場所を提供することは出来ないと。

２日後の、１１月１１日、船乗り達は気がついた、キバチ湾岸（？　＊）に、日本人達が立っていることに、それ達の間にバニオスが群れ集まっていた。彼らは何かを検討していた。計測をし、杭を打ち込んでいた：ロシア人達のために、他の場所を準備している事が明らかとなった。そこは前より少し良かった、緑があったが、稲や野菜が植えられていた。そこに落ち着くことは出来なかった。奉行は、この場所は拒否されることを知って、返答した、彼らにはこれ以上何の権利もないと。ロシア人の場所と指定した場所は大村藩のものであった、そこを侵害することは出来なかった。パラーダ号とボストーク号での会食の後、コルベット艦オリブツ号を伴い、３隻は上海に向けて碇を揚げた。長崎での滞在は３ヶ月に及んだ。出発の前に、プチャーチンは奉行に声明した、長崎に戻ってきた時に、もし江戸からの全権代表と会えなければ、直ぐにそこ（江戸？　＊）へ向かうと。

上海で、プチャーチンは数ヶ月分の石炭と食糧を蓄えるつもりであった。同じく、船の修理も行うことも、特にボストーク号の、タタール（間宮　＊）海峡から１１月３日に戻ってきた。それ以外に、将軍は大事なことに気を向けた、ヨーロッパはどうなっているのかと、そこで戦争が始まっていないのかと。一月して、予定してたことが完遂された。修理作業はパラード号の技師の参加の下で、ドックで行われた。スクーナー艦はまるで新船のように見えた。１８６３年１２月１７日、ロシア艦隊は長崎への航路をとった、長崎に５日後に到着した。

長崎に到着して、将軍は江戸の代表者に会えなかった、離岸を準備するように命令を出した。手こぎボートを船体に引き上げた時、ロシア人の意向の真剣さに疑念を持つことを止め、彼らは説明した、全権は到着していると。交渉の時間と場所の審議はゆっくりと進み、数日後となった。プチャーチンは希望した、江戸からの高官がフリゲート艦にやって来ることを：彼は岸に既に上がり、自分の政府からの書類を渡している。そういうことで、今度は、日本人が返答で船に来なければならない。これ以外に、彼は説明した、もし会見が１月１日までに行われなければ、長崎にはもう留まらないと。首都からの全権は、今度は、プチャーチンを自分の所に招待した、道中での疲労を引き合いに出して。

最初の会談は１２月３１日が指定された、それには盛大な儀式が伴った。会談が行われる波止場と家屋には、兵士達が配備された。交渉には２人の高官が参加したにもかかわらず、日本の高官は多数の随員を伴っていた。ロシア人が判断したとおり、「より大事な重要性を仕事に与えるために」。日本人は主張を試みた、岸に止まっている自分たちの船にロシア代表を移動することに：国民に示したがっていると、ロシア人将校達は知解した通り、「我々が行くのではなく、我々を連れて行くのである、いうならば、日本においては他人の意志は通じないと」。しかし、この目論見は成功しなかった。プチャーチンは見なした、ちょっとした所での日本人の主張への譲歩は、大事な問題において、日本人に譲歩を要求されることになると。これ故、将軍は彼らに対して、彼らが採用したシステムに従うことにした：礼儀正しさと毅然さ、些細なことと同じように大事な仕事も、このようにして、紹介が始まった、彼は判断した、日本人はロシア人についての意見を取り纏めていると、それによって、今後の交渉のために態度を決めた。

日本人は、最大の礼服を着て、ロシア代表を迎えた。最初の会合は丁重さの交換で進んだ。無駄であった、プチャーチンが自分の到来の目的について試みたことは：日本人は声明した、彼らの国の慣習に従って、最初の出会い時は、両方とも自己紹介に限られる。仕事の話は他の時まで延期される。その後、彼らはロシア人将校達を日本式食事で歓待した。この際、ロシア人には不快な分離が行われた：２人の高官は彼らと食事をした、が、彼らの随員達－２人の長崎奉行を含んでーは他の部屋へと引き離された。

プチャーチンや将校達の意見によれば、名前がツツイヒゼノとコバジソイエモンノの年配の全権は、活発で健康な知性と優れた弁論術を持っており、教養のあるヨーロッパ人とほぼ変わらなかった。ロシア人達は納得した、極東の全ての国民の内で、最も教養があり礼儀正しい国民であると見なしていることは本当であると。長崎にロシア人が来た時、役人達は親切と客受けの良さを彼らに示そうと努力した、ロシアとの友好的な付き合いに出ることを表現しながら。船乗り達は気づいた、江戸からの高官達は、長崎の役人と違って、ロシア人に譲歩した、古い習慣から逸脱して。実際において、時折長い反論の後に。しかし、フリゲート艦訪問の招待を逆らわず受け入れただけではなく、明らかな喜びを持って。船乗り達は極めて驚き未曾有の出来事と見なした。

長崎奉行は江戸から同意を得た、ロシアからの贈呈品を受け取っても良いという。贈呈品を彼にあげただけではなく、年配の役人のバニオスにも、同じく奉行の部下にも。彼には長崎に来た時にロシア人船乗り達が世話になったので、食糧や水などの供給での職務で持って。２回目の出会いの時、今度は日本人達はロシア人を盛大な会食でもてなした、日本の政府の支配人である将軍の名の下で、、プチャーチンに、全ての将校に、下級役人に土産を渡した：絹材料、絹製真綿、陶器。船員のために１００個の米俵、大豆１０００袋、豚１０匹が渡された。同様の贈り物は全ての外国人に分けられたと言われている。が、日本の高官がフリゲート艦を訪問した時、プチャーチンに更に贈り物を持ってきていた：素晴らしく仕上げられた刃のある高価な刀や金の装飾のある漆物。この時、彼らは気がついた、刀の贈呈は最高の友好を現していると、そして理解した：彼らの紙布の訓戒に従って贈り物が交わされている故に、結論を出すことが出来る、ロシア人に対する日本政府の関係について。今度は、プチャーチンが全権としての上品な品物を与えるとして、彼らに将軍への贈呈のための土産を渡した：高価な金襴の束、大きな鏡、ブロンズ製置き時計、色

つきの花瓶、絨毯。

２回目の２人の高官の出会いの後、直ぐに、プチャーチンと日本の高官の間で交渉が始まった。彼らは、「幕府の家」と呼ばれる建物に集まった。そこにはロシア人達は既に立ち寄っていた、奉行と会うために。この会談に、プチャーチンは小型舟艇で出かけた、儀式は無かった。同行者は交渉に必要な最低限とし、４人。日本の全権は同じように多人数の随員ではなかった。この前交渉の結果を、プチャーチンは自分のメモに書いて、外務大臣に提出した。

ゴンチャロフは正確に生き生きと問題の本質を伝えた、彼は日記に書いていた、「問題：ヨーロッパ人を通すかそれとも通さないか、これは日本人にとっても同じ事、生きるかそれとも生きないか。通す、これでは客は再び自分の信仰、自分の思想、風習、規則、商品、悪徳を持ち込む。通さない、・・・　が、彼らは４隻の船、１０基の長い大砲を持っている。未だ火縄銃を持っている、刀、各人腰に２つの。素晴らしい・・・　これらのオモチャで何をするのか？　通すか、通さないか、語るのは簡単だ！　通すーその時、彼らは静かで、安心、よく眠り、食べる。通さない、・・・客自身が進み出る。奉行は許可を与えることが出来ないのか？誰と相談するのか？　誰に問い合わせるのか？　奉行は決定できない。

彼らは見ている、彼らの閉鎖と疎遠の体制、その１つで、彼らは救いを探している、彼らに何も教えなかった、彼らの位置だけを残した。学校の遊びのように、それは教師の出現であっという間に駄目になる。彼らは１つ、援助無し；彼らにはそれ以上波も残らない、どっと泣き出す、語る：”悪かった、我々は子供だ！”ーそして、子供のように、古い指導部に身を委ねる。

この老人は誰か？　ずるく、せかせかした企業家ーアメリカ人、ここに一握りのロシア人：ロシアの銃剣、さらに平和で罪のないにもかかわらず、未だ客として、が、日本の太陽の光線下で光り輝いた。日本の海岸に向けて”前進！”の声が響いた Avis au Japon ！（フランス語　＊）

もし我々ではなく、アメリカ人、もしアメリカ人ではなく、彼らに続く者、誰でも、が、直ぐに判断される、日本の血管に健康なジュースを再び注ぎ込むと。それらは自分の体の中の血と一緒に自殺するかのように吹き出した。哀れな幼児期の無力と闇の中で老いぼれた」。

プチャーチンが外交使節の仕事に取り組んでいる間、ロシア船の将校達は、自由時間には、劇の演出に取り組んだ：コルベット艦オリブツ号でゴーゴリの「ジェニチバ」と「テヤジバ」を演じた。クルドネル男爵が全てを指導した、企ては成功した。特に、観客達はセリョンヌイ海軍少尉が気に入った、彼は天然のユーモアセンスを持っていた、明らかに、劇場文化に大きな馴染みを持っていた。

ゴンチャロフが後になって日記に書いていた、「コルベット艦からの帰りに、３つの絵の内の一つを見た、絵と認めるが、信じられない：平らな水の上で月を、静かに揺れるフリゲート艦のシルエットを、周りは暗い、眠っている丘とボートと山の上に火。私はアイバゾフスキーの絵を思い出した。」　ロマンチックな雰囲気であった。しかし、夕方遅く、パラード号の上で耳にした、海からメロデーのある歌が届いてきていた。以下の事であった、これはコルベット艦オリブツ号の将校達がカムチャダール人の歌手と一緒に、ロシア

とジプシーの歌から考え出したメロデーであることが。彼らは長い間フリゲート艦の回りを月光のもとで浮遊していた、歌い、狼煙をともして、パラーダ号にいた全員が船尾最上甲板に集まり、黙ってそれに耳を傾けた。歌が終わった時、将軍は歌手達に感謝を述べ、将校達にお茶を勧めた、歌手達にお茶を飲ませた。湾に停泊している日本船でも、歌に耳を傾けていた：１隻が他から離れて、フリゲート艦に近づいてきた。しかし、船に近づくことは決してしなかった。立ち止まり、長い間一カ所で揺られていた。

ロシアの船乗り達は興味を引かれた、日本のボートの構造に、ぎこちない高さの舵と理解出来ない船尾の構造に、波が打ち当たる。「日本の帆はよく紙製であり、いつも白色である。２本の帆桁を持ち。上と下に、それらの間にむしろや布地３枚から５枚を張っている、それらの幅は約１０ベルショーク（約５０ｃｍ　＊）。これらのむしろの縦の内部の端は、それらの間を確りした太い紐で綴じている。中間の或いは布地の端の一方の上の部分に、時折、何か数字、紋章或いはシンボルのような記号が表示されている。しばしば、黒いキャラコの帯びが縫い付けられている、幅が約４ベルショーク、長さが約１１－１２ベルショークの；それらはどんな意味を持っているのか、私はには理解出来なかった。日本船に於ける漕艇システムは例外的にせわしない（櫓をしきりに漕ぐので　＊）、船尾で、その上、他でもない、立ったままで」。

船乗り達は１人の日本人に興味を引かれた、彼らに食糧を運んできていた、そのために彼にはその様な船があった。そして、頭を振りながら、ひきあいにだした。日本にとって最近の状況は悪くなっている、とその後付け加えながら。直ぐなる変化を待つ必要があると。ロシア人を驚かした、平民さえそのように感じていることが。

江戸からの全権とプチャーチンの交渉は１月継続した。この時期、世界では火薬の匂いが上がっていた：クリミア戦争が始まった。軍事行動の主会場は黒海であった。プチャーチンは予想した、極東も戦闘が避けられないであろうと。これ故、彼は決めた、交渉での休憩を利用して、朝鮮海岸と沿海州海岸を調査することに、それらの付近はロシア海軍が不測事態を避けるために必要なことがあるとして。将来、会見を継続すること、国境の画定の協議を始めることが決められた。プチャーチンが書いていた：「１８５４年１月末に、長崎でのフリゲート艦での別れの食事会と相互の友好の表明の後、私は全権と別れた、彼に春での再会を指定して、更なる交渉のために、アニバ湾での、サハリン島の南端にある」。

１８５４年、幕府は合衆国と通商条約を結んだ、その後に、ロシア、イギリスフランスと。１８５５年、同じく、オランダとも通商条約を結んだ、この条約はオランダ人を出島に閉じ込めることを終わらせた。日本人には島への出入りを許した。ロシアと日本の公的な関係の最初の段階は成功裏に終わった・・・。

１８５５年１２月６日、元老院に与えた皇帝の命令によって、プチャーチンに伯爵の称号を与えた。１８５７年、プチャーチンを中国に派遣した、彼は全権代表の非常使節の立場であった。１８５７年１２月２４日、プチャーチンはオペレーター・コミッサールの肩書きで、東洋艦隊指揮官に任命された。

アスコリド号の墓、お寺での碇泊

将軍プチャーチンは、ロシア兵の建物のために恒常的なた場所を分け与えてくれるように長崎奉行に繰り返し要請した。日本側は長く拒否し続けた、或いは、不適当な場所を提案した。町から極めて離れている、例えば、梅香崎を、長崎湾の入口の岬にある。当時そこにはニコライ・レザノフが住んでいた。１８５４年１月、長崎を発って、プチャーチンはこの問題に取りかかった。ゴンチャロフがこれについて書いていた：「昨日、日本人が予告した、我々に良い場所を割り当てなければならないと。しかし、彼らが以前に示した、その内の一つでもなかった。彼らにはその説明の準備が出来ていた。萩原は懐から計画を引き出し、話した、そこが割り当てられる場所となろう：町に近い。彼は付け加えた、「そこには礼拝堂がある。坊主をその時には追い出す」。それ以外に、家屋が１，２軒ある、そこから役人を追い出す。翌日、将軍の命令で、ポシェットは視察に出かける。奉行達は、多分、我々を喜ばすために全力を要求する、或いは、少なくとも、喜ばす様子を見せている。３ヶ月前に全く矛盾することがあった！　我々の到来で江戸で起こった印象、そこへの指定地、我々との交渉のための、高官、遂には、多分、奉行によって与えられた司令書、我々をどのように扱うかの。これら全ては彼らの優越性において尊大さを減じた」。

最初の時期は、日本人は地域の住民からロシア人を離れて置くように努めた。出島のオランダ人の原理が彼らを完全に満足させた。その基本には、外国人を隔離するだけではなく、彼らの生活を完全に管理することにもあった。ロシアの船乗り達には長崎湾の西の沿岸の仏教寺院である悟真寺（ごしんじ　＊））に残ることを提案した。その寺は稲佐山の浦上縁（うらかみふち　＊）村にあった。寺院中の船乗り達の部屋は、外国人を理想的に管理できるものであった：日本人の僧侶は毎日報告しなければならなかった、外国人の内情や移動を。この時期、寺院の周りには蘇我家の村が置かれた、その首長は何世代にもわたって村の長であった。彼らには岸壁があった。

直に、日本の役人達がパラード号にやって来た、土産でもてなし、稲佐の案を示した、ロシア人に現地の視察を提案した。日本人を伴って、そこをポシェット、リムスキイーコルサコフ、フルゼリム、ロセフが訪れた。注意深い視察の後、彼らは稲佐に兵舎を建てることに同意し、幕府にパラーダ号をこの場所の近くに移動させる許可を求めた。が、日本側は、いつも通り、返答を自制した：上司の同意を得なければならなかった。漸く、公式の許可が解決した時、船乗り達は提案された場所を借用することを考え直した：遠くの・・・。

もちろん、プチャーチン将軍はこの寺の歴史を知っていなかった、この寺はキリスト教に対抗させるために創建されていた。最初のヨーロッパ人のキリスト教使節－彼らを南蛮人と日本人は呼称した－の活動は、１６世紀の最後の４分の１に（１５７０年－１５９２年）、長崎で始まった。新しい宗教の信奉者は急速に拡大した、日本人の伝統的宗教に対して：寺院と礼拝用建物の破壊が始まった。神道と仏教の司祭達の襲撃が起こることが希では無くなった。これを知って、１５９６年に筑後（現在の福岡県）から長崎へ、善導寺の僧侶ゲンコウ和尚（１５５２年－１６２６年）がやって来た。司祭で苦行者は横暴を終わらせ、仏教の価値の復興を欲していた。仏教の伝統に従って、稲佐山に登り、彼はそこに寺を造ることにした。この時期、長崎には、中国から僧侶達がやって来た、彼らはゲンコウ和尚の信用できる後継者となった：村の長老山里一徳の助けを借りて、彼らは１５９

８年に剛心寺を建立した。それは「良心の寺」を意味している。この寺の最初の信者に中国人がなった。この理念に従って、初めは寺に中国人の墓が出現した、その後、それにポルトガル人とオランダ人の墓が付け加わった。

ロシア人は、再び、１８５５年４月に長崎を訪れた。しかし、今回は剛心寺敷地内を利用しなかった。それにもかかわらず、彼らはそこに自分等の基地を造ることに同意した。町から遠方であることで、彼らは以前には不適当と見なしていた所である。今では、彼らには満足であった：自分等の生活をすることが出来る、自分等がしたいように、外国人の目から遠方であるが。大事なのは、外国人を極端に嫌っている日本人との軋轢を逃れることが出来ることであった。その様なことは少なくは無かったので。乗組員の中の規律を、町から遠方にあることで、容易に維持することが出来た。

プチャーチンの指揮下で、１８５７年にやって来たフリゲート艦アスコリド号を、アスコリド号の元船長で３５歳のイワン・セメノビッチ・ウンコフスキイが指揮していた。彼が長崎にやって来た時には、国際協定は既に締結されていた。この時期、アメリカ人は日本との新しい協約に署名していた。ロシア人は自分の海洋の同盟国に遅れをとりたくはなかった、エブゲニイ・ワシリエビッチ・プチャーチンは決めた、彼には交渉を再開することが必要であると。イギリスとフランスの代表がこれについて既に日本で急いでいることを知って、プチャーチンは遅れをとらないことにした。彼は長崎で石炭を手に入れ、直ちに江戸に向けて出帆した。長崎の奉行との合意のもとで、プチャーチンは、剛心寺付近に２５人の病気の船乗りと将校を残した。出島のオランダ人医師ポンペ・バン・メルデルブルトが見てくれることに同意した。彼は最初のヨーロッパ人医師達の内の一人であった。オランダ商館で勤務するためにやって来た。日本人だけではなく長崎の他の外国人に大いなる貢献をした。パサードニック号の船長が彼について書いていた：「この医師は、ロシア人に対する彼の親切さと愛情において、素晴らしい医者の名誉を持っていた、既に１２年ここの海にいた；９年間は彼はインドと中国でいろいろな船で仕事をしていた、私は提案した、彼は我々には非常な助けとなると；彼は現在日本人の医者に医療の講義をしている、特別に設置されたアカデミーで。幕府のために大きなヨーロッパ式の病院を造っている」。

ヨーロッパの商人のために、１８５５年の協約によって開かれた日本の全ての港を訪れ、上海へ。フリゲート艦アスコリド号は１８５８年、長崎に戻ってきた、そこでは船の修理が安く済んだ。航海時、船では数人が亡くなった。１９５８年９月、状況は全く危機的となった。乗組員の半数がマラリア、赤痢にかかった。船の勤務を継続することがフリゲート艦には必須であった、が、その様な条件下では殆ど不可能であった。必要な処置を執らざるを得なかった。そして、アスコリド号はラッフェル島（？　＊）近傍で碇を下ろした。

長崎は船乗り達には約束の地となった。接近中は一時的に雨や霧の悪天候であった、が、注文通り、静かで快晴の日となった。波静かな湾の様子、回りの綺麗な森、素晴らしい休息を約束した。岩だらけの岸に広がっている町の様子に、船乗り達の心は喜んだ。「もちろん、この様子は最も壮大で驚きの一つであった、地中海の絵で描かれた岸のようであった、そこには、芸術と人間の要求がまだ自然の美にうわまっていなかった。我々は未だ一度もこの湾に入っていなかった、それにもかかわらず、我々はその景色が気に入った。景色は我々になした、最大限に、同じ事を。もし未だより大きな印象がなければ、初回にお

いてより」。

この文章は２１歳のコンスタンチン・フェドロビッチ・リトケ伯爵が書いた。有名な航海者Φ．П．リトケの息子である。若いにもかかわらず、彼は極東へ何回も航海していた。１８５３年秋には、フリゲート艦アブローラ号に乗って、クロンシュタットからカムチャッカへ向かった。１８５４年に、ここへ到着して直ぐに、ペトロパブロフスクの防衛に参加することとなった。貢献に対して海軍少尉の位を得た。バルチックで何年間か過ごした後、К．Φ．リトケはフリゲート艦アスコリド号に乗って、１８５８年に再び極東にやって来た。１８６０年８月まで、日本海と中国海を航行した。

ロシアの船乗り達は慣れていた、ヤバ（？　＊）とシンガポールではその湾まで数マイルの所で、地域の住民達が小舟に乗って彼らを出迎えることに、果物、貝、猿、オウムや岸への移動を提案した。長崎では、特にロシア人の訪問の初年には、同じようなことを期待してはならなかった：ヨーロッパ人は火のように恐れられていた。時間とともに、状況は良い方向に変わっていった。ロシア人に対する警戒心と猜疑心、段々と友情でもってその場を譲るようになって行った。この多くの所で、日本人に対する将軍プチャーチンの大きな権威が関係していた。同時代人が書いていたように、「分別ある指示により、公正な要求により、愛想の良い控えめさにより、が、それらとともに、確りし粘り強さを持った応対でもって、伯爵は日本人の信頼と好意を得た；彼の部下全員が彼をまねるように努力した、出来るだけ」。

長崎の平民は長きにわたって、プチャーチンに関するザレ歌を歌っていた、「ブラーブラーブシ」（丸パンの歌）という題名の。プチャーチンは１８５３年－１８５４年の短い期間に、３回長崎を訪れた。当時は日本人は殆ど外国人を知らなかった。外国人は地域住民に大きな好奇心を引き起こした。プチャーチンもその肥満で日本人を驚かした、これは歌の題名と内容から明らかである。

奉行の援助をえたいというウンコフスキーと彼の将校達の期待は完全に的中した。長崎奉行はとにかくロシアの船乗り達を支えた、その責任者を任命して。まず第一に、病院の建設についての問題を解決しなければならなかった、岸に良い場所を探し出して。残りの船員達にも良い休息場が必要であった。最初の交渉の結果は、剛心寺に泊まる決定であった。この場所は、町から遠いにもかかわらず、余計な注意を避けれた、完全に疲れ切った船乗り達の。これ以外に、南面にある寺院の配置は健康を回復する場所としては理想的な場所であった。街の喧騒と悪い空気から離れ、ここは空気が綺麗であった、沿岸の村に常に伴っている霧は、山の中腹まで漂った。空は全く雲で覆われることはなかった、病人は一日中、日光浴をすることが出来た。

フリゲート艦のための場所が見つかった：南風を防御している小さい湾に。岸には平らな広場があった、倉庫と海軍工廠を造るのに適した。そこを２７ルーブルで購入した。移動の後には、船乗りたちにはフリゲート艦の清掃という大変な仕事が待ち構えていた。船医が書いていた、「船倉の底は、腐った沼地であった、むっとする匂いを出していた、すっかり腐った大麻、木片、油まみれの材料がこの沼の基本をなしていた、それらは航海中で段々増えていった」。

２週間にわたり、アスコリド号は丸腰となった、船体から大砲や弾薬を下ろして。この時期、剛心寺の部屋が準備された。船員をここへ荘厳に移した、隊列を組んで。ロシア人

たちは寺院に持参した、３台の大砲、ランチ用武器、上陸装置に提供した、２台の山砲、小銃、
カービン銃を。これは初めての出来事であった、外国人が武器を岸に運んだ。日本人の許可無しに。信頼は完全であった。これは初めての軍のパレードであった。パレードではロシア人は武器のデモだけではなく、民族の自尊心も示した。

号令の後、将校達は岸に引っ越した。幕府は船の船長に提案した、将校のために町に部屋を借りることを。これまで、外国の船長の誰もその様な提案を受けていなかった、が、ロシア人将校達は船員たちと離れて住みたくはなかった：その様な分離は船乗り達に悪く作用するものである。寺院には、直ぐに病院が造られた。そこに、２６人の重病人が入れられた。ポンペ医師と船医の配慮の御陰で、また船乗り達の健康な生活を回復した。良好な条件で。もう弔うしかない者まで回復した。

キリスト教のオランダ人墓地に、寺院の隣にあった、既に幾つかのロシア人の墓があった。オランダ人医者の努力にもかかわらず、プチャーチンにより彼の世話になっていた何人かの船乗りは、病気は慢性的なものであり、救い出すことが出来なかった。墓地の上部に、イグナト・コシキン（６月１７日死亡）、クレスチヤン・ガルネン（７月８日死亡）、セメン・ゴドビコフ（７月１９日）、ルク・シリン（７月２７日死亡）、エフィム・イワノフ（８月１８日死亡）を葬った。１８５８年末に、これらの墓に新しいのが付け加わった、同じくアスコリド号の乗組員が：グスタフ・ジチ（１０月７日死亡）、シドル・ポチンとアンドレイ・ボロジン（１０月９日死亡）、ビクトル・フェドロフとピョートル・ロデル（１０月１５日死亡）、フェドル・イワノフ（１０月２０日死亡）、パベル・ジョホフ（１２月８日死亡）、アレクセイ・ルダコフ（１２月１４日死亡）、ミハイル・パンクラトフ（１２月２７日死亡）、その他。全員が３０歳前後。１８５９年５月末には、チモフェイ・ナパルコフが亡くなった。

長崎での８ヶ月の停泊の間に、アスコリド号の多くの乗員たちがあの世に旅立った。船乗り達は稲佐を「アスコリド号の墓地」と呼んだ。オランダ人墓地はロシア人墓地に化した。少なくとも、休息と治療は、病人の拡大を抑えてくれた。そして救った、病気にかかった者が亡くならないことで。船医の報告書中に文章があった、そうでなかったならば、伝染病は全船員を抹殺することになったであろうと。船はロシアに戻ることは全く出来なかったろうと。オランダの医師が特記していた：（英文　＊）「船は遭難状態にあった。それで、ウンコフスキーは何もすることが出来なかった。しかし、日本人は船は上海に去るであろうと思っていた、修理を素早く行うので。・・・が、その費用が結構高い、１０倍（実際には６倍）、長崎での支払いの。これが日本を選択した正確な理由であった。また実験としても、日本がどのように反応するかを見る。当局が適地を見つける充分な時間持った後、－探査は不成功に終わった－ロシアの司令官は稲佐の谷に寺院を見つけた、長崎の小さい入り江にある、オランダの蒸気工場に近い、また彼の船に近い、簡単に言えば、非常に適した場所。それを非常に安い賃料で要求しなかった。最初、日本は弁解を見つける試みをした、しかし直に結論に至った、ロシアの軍人を粗末に扱うことは出来なかった、so they put the temple at his disposal」。

剛心寺には、山の上方に向かって、広い石の階段があった。上の踊り場には長い旗竿が立っていた、そこにロシアの国旗がはためいていた、近くの泊地からよく見える。その周

りには、武器を持った番兵が立っていた。門の向こう側に警察と通訳の建物があった、結構忙しそうであった。警察はロシア人に対しての仕事を任されていた、ロシア人と日本人の交流において手違いが起こらないようにしていた。警察は直ぐに船乗り達と打ち解けた、船長の特別な依頼の役人となった。

リトケが書いていた、「寺の片方の端には、２つの大きな部屋があった；それらの内の一つに、閉じた渡り廊下に囲まれ、個別の入口を持つ、船長が入っていた。他の部屋は将校用の食堂になっていた。我々はそれを将校集会室と呼んだ。寺院の他の場所に、全ての将校達が配置された、一つの部屋に２人。これらの部屋の唯一の欠点は明かりの不足であった。とにかく日本家屋には窓がない；冬の寒さは壁を開けたままでは我慢できない、明かりは壁の枠に張っている紙を通って届く。が、これは光の量を減少させるが、僅かの障害である。とにかく寒さの結果、特に夜に感ずる、我々は強いられた、我々の部屋の外枠を板や布で覆うことを。中庭にあったこれらの建物に、以前は僧侶たちが住んでいた、自分の部屋をロシア人に譲り、彼らは寺院の本堂に移った。

船長の部屋の入口には、ドアの両側に、山砲「一角獣」が置かれた。低い石垣で囲われた大きな中庭には、それでもって寺院の全ての建物が囲まれていた。船乗り達はランチの武器を配置した。１日に２回、正午と日暮れ時、兵士たちが銃を放った。長崎に停泊時、内規は船に則っていた、町へ出かけた時、船乗り達は日本人の習慣を守った。言語での齟齬が生じた、が、ジェスチャーや身振りなどで段々を交際は具合良くなっていった。

度重なるロシア人の船乗り達の懇請後、幕府は家畜を購入し、ロシア人に育てることを許可した。が、条件の下で、そのことを忘れることとの。直に、寺院に小さい家畜場が出現した。仏教の影響で、日本人は食事で牛の肉を用いない。牛は労働力として使用した、買った牛は非常に痩せていた。このため、ロシア人は牛を長く飼育することになった。時と共に、家畜場には３０頭の牛を数えるようになった。

このようにして、長崎に初めてのロシア人村が出現した。日本人にはある種の危惧があった、４００人の素晴らしく武装した者達が、市民の間の安全を維持できるのかという。疑念を吹き払うために、将校の移動の１週間後、盛大な夕食を催すことが決まった、それに町の有力者とオランダ人たちを招待して。パーテーは注意深く準備された、寺社を照明し、花火を打ち上げることが企画された。実際において、奉行の招待には手間がかかった、奉行は日暮れ後には自分の官邸を抜け出すことが許されていなかったので。が、この場合には、伝統を破ることに決まった。

リトケが書いていた、「こうして、２人の日本の奉行と２０人の年配の役人たちがロシア人船長の所で、ヨーロッパ式に食事をした。ロシアの皇帝と日本の皇帝の健康を祝っての乾杯の音頭をともなって、一角砲から祝砲を打ち上げた、小さい中庭に据え置いた。パーテーは長く続いた；客たちは楽しみ、夜遅くに散開した、少なくとも外見では忘れて、古い習慣を；５色花火（手持ちの小さい多色の花火　＊）が彼らを埠頭まで伴った」。

長崎でのアスコリド号の停泊は、多くの点で、市民と外国人の関係を変化させた。ロシア人に譲歩することから始めて、彼らは他人のためにこれをすることを強いた。まさにそれにより、以前より大きな自由を外国人に許して。もちろん、全員が幸福ではなかった、特に初日には。船員の若干名は、外国船船乗り達の例を信じて、「思い込んだ、岸では自分等の行動において、彼らはその様な規律に従い、その様な秩序を守る義務はないと、船

でのように。最初の時期は、岸における我々の船員の生活は、初めと同じように、日本人に乱暴に振る舞い、侮辱した。が、直ぐに若干の適宜な強力な手段が横暴の試みを終わりにし、秩序を復興した。」　罰として、営倉入り、臨時の当直、岸への外出禁止が適用された。初めての国際的スキャンダルの首謀者達をフリゲート艦の交替のない番兵とした、他の者達に対する良い勉強として。将校の行動は船乗り達に対して好印象をもたらした、日本人にと良い関係を築こうと努めている。不断においての付き合いがあったポンペ医師は特記していた：「・・・（英文）ロシア人クルーの間には模範的な規律があった。私は毎日これを証明することが出来たというのは、ロシア人船長（ウンコフスキー）の要請により、私はそこで患者の取り扱いの制御が出来なくなった；医者の頭が悪かった」（？＊）。

イギリス人のヘンリー・アーサー・チレイーリンダ号の将校に英語を教えていたーは１８５９年に稲佐のロシア人兵舎を訪れ、寺院におけるロシア人水兵達の生活、彼らの日本人との関係を、イギリス人とアメリカ人と比較して記述した：「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊英文＊＊＊＊＊＊省略＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

稲佐におけるロシア人社会についての意見はもう一つある、ラザフォード・アルコックが残した、イギリスの主領事、１８５９年６月に稲佐を訪れた。:「＊＊英文＊＊＊＊＊＊省略＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

船の修理が始まったがゆっくりと進んだ、人を集められなかったのかのように。新しい心配事ができた。今回は住民との友好関係を基にしたものであった、特に女性との：乗組員の４分の１以上が梅毒に罹った。全ての修理ー大工、マスト係、ボート係ーに将校達を引き込んだ。大工の仕事の大部分はフリゲート艦で行われた、マスト係は岸の小さい海軍工廠で、ボート係は寺院付近で。修理の最初から、次のような日程が組まれた：日の出とともに、早めの全員起床後、全員が仕事に向かった。１２時半から２時まで船員は食事をし休息した。その後、夕方６時まで仕事を継続した。その終了を大砲が告げた、約３００人が隊列を組んで帰宅した。リトケが書いていた、「仕事から戻るアスコリド号の船員達の楽しい歌が鳴り響かなかった日は希であった；ランチは先を争って波止場を目指した。時折、船長のランチに引いてもらった、矢のように早い。；その後ろを、将校を乗せた４人こぎ手の我々の亀のようなランチが進む、各自の顔には嬉しさが満ちあふれていた、良い仕事をやり遂げたという。」

この時期、長崎には、クリッパー艦ジギト号とストレロク号がやって来た。船乗り達はアスコリド号の乗組員達の歓待を受けた。彼らを羨むことが少なくは無かった、特に浴場の存在に。休日や祝日には、将校の大部分は岸にある将校会議室で食事をした。食事の後、寺院の前で、通常はいろいろな遊びをしたり、稲佐の回りや町の散歩に向かった。夜には、将校の部屋の一つにある暖炉の回りに集まり、話に興じた。新年の祝日は皆は静かに楽しく過ごした。１８６０年１月２日、アスコリド号の乗組員達は修理を再開した。長崎は彼らにとっては非常に好都合の港であった、天候だけではなく。：ここでの修理には費用は格安で済んだ、上海などと比較して。ジギト号は１月９日、函館に向けて出航した。

日本人とロシア人の関係は非常に仲が良いものであった。アスコリド号の乗組員は初めての外国の船員であった、その様な大人数で岸に住んだ。地域の住民達は彼らの行動を観察することができた、直接に付き合いをすることで。「彼らの最も古い知人のように、始

めて、長期にわたって岸に住んでいる者達は彼らと密接な交際に入った、我々は長崎の地域住民の大きな信頼と尊敬を利用した、幕府の役人と同じように。最初の関係において、我々はこれに気づくことが出来た、快く愛想の良い実例で、我々が良く出会った、その様な個人の家を我々は立ち寄ることが出来た；店では我々はいろいろな物を購入した、他の外国人の良質で安い；外国人との公開の商売では手に入らない物、我々の要望に従って、日本人が内密に寺院に運んできた、我々の知己のある外国人のために、様々な物を運んでくることが出来た。店でそれらを買おうと努力したことは無駄であった。」　このようにして、例えば、船乗り達は有名な日本刀も購入することが出来た。

最初は、日本の企業家達は理解していなかった、大量の商業についての、植物蝋のような高価な商品を売っていた、二束三文で。しかし、段々と彼らは世界での値段を集めるようになり、新しい製品を提供するようになった、ヨーロッパ人達が未だ知っていない。

外国の船乗り達はロシア人達を非常にねたんだ、ロシア人達が稲佐に自分たちの住居を建てることが出来たことで。そこには、沢山の茶屋が出現した。可愛い女性達がいる、そこでは気持ちよい時を過ごすことが出来た。チリイが書いていた：「＊＊＊＊＊＊英語文＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。」

長崎には、ロシア人以外にも、少なくない他の外国人達もいるようになった、彼らにはしばしばスキャンダルな出来事が関係していた。港に初めてやって来たアメリカの船がアヘンを積んでいた。それは協定に違反していた。他の船に乗っていた商人が偽札で勘定を済ませ、交換が暴露される前に、出航することが出来た。アメリカの軍艦ミシシッピ号とポウハタン号の水兵達は町で狼藉を働き、家を壊し、店で略奪をした。フランス人の商人の１人が女中を掠っていった、当時厳格に禁止されていた。船が長崎に戻ってきた時、船はスキャンダルの最中にいた。長い交渉の結果、衝突は下火となっていった、交渉にはアスコリド号の船長も参加した。彼は不快な状況にけりを付けることに取りかかった、オランダのコミッサールの秘書が日本の役人にビンタをくれた時に。外国人全てにとって極めて不幸な結果をもたしかねない。

１８５９年６月３日、コルベット艦リンダ号の搭載ボートが、オランダの帆船の脇を通りかかった時、そこから「助けてくれ！」という叫び声がした。その後、誰かが船から海に飛び込んだ。人を収容した。分かった、この水兵は２８歳の乗組員でレオンチイ・グラボフシキイであった、１年前にクリッパー艦プラスツン号から脱走した。ロシア軍艦での勤務は彼には厳しかったらしい。が、オランダ水兵の中で、彼は本当に奴隷となっていた。グラボフスキイが伝えた、この帆船には、もう１人の脱走兵がいると、水兵アニシム・ペトロフ。彼はオランダの領事の助けでだけ自由になることが出来た。もし１隻の外国船が、厳しい軍旗で秀でているならば、他に船では完全な無秩序が支配した。驚くには至らない、その様な船ではしばしば乗組員が足らなくなり、船長達は様々な方法で充足に努める、しばしば不法で。良くあった、港の居酒屋で、船乗り達が他の船に移ることを話していることが、そこで、少ない俸給を使い果たして。

しかし、時々あった、ロシア人の船乗りが自分の格言「自分の規則を持って、他の修道院へ行ってはならない」を忘れることが。その時には彼らの行動は地域の住民達に不満を引き起こした。アスコリド号の士官候補生に内の一人が、島の影響ある人の内の一人である九州の藩主筑前公の庭に入り込んだ。これは原則的に禁止されていた。彼を庭からつま

み出した。今回はアスコリド号の船長に無礼を申しつけた。両方の長い交渉がその後続いた、その結果として、藩主に詫びを入れることになった。当時アジアの港を訪れたヨーロッパ人全てが見習った、２つの基準の一目で分かる例である。

その様な国際紛争の不安に日々において、ロシア人乗員達は夜の長崎を一人で出歩かないように努めた。侍の一部は、ヨーロッパ人が日本にやって来ることを受け入れることに極めて反対していた。彼らは良く理解していた、以前に閉じていた長崎に初めてオランダ人を受け入れたことにどのように警告していたかを。日本との関係において、軽蔑と小馬鹿を新客に許さなかった。

状況の緩和と関係の改善は不幸な出来事が助けた。これは１８５９年３月８日の夜に起こった、出島のオランダ商館で。リトケが追想していた：「深夜当たりであった；我々の租界は昼の仕事から解放され、深い眠りに落ちていた。我々の寺院の僧侶達のすさまじい叫び声が突然響いた：

「火事だ！　火事だ！」

部屋から飛び出し、対岸に火事の巨大な照り返しを見て、我々は船員達を起こし、様々な器具を携えた、消火に有効そうな、桶、マット、小型ポンプを；一部の人々はフリゲート艦に乗って向かった、まさかりと残りの小型ポンプを持って。３０分後、最初のランチがオランダ商館の埠頭に到達した。

我々は目にした光景は酷く、滑稽であった。幾つかの家屋は既に焼け落ちていた；火は歯の立たぬ速さで広がっていた。哀れなオランダ人は慌てふためいていた、彼方此方動き回っていた。火を止める人も道具も待たないで；町から大人数でやって来た日本人達は近づくのを恐れていた；派手な着衣をし、長い棒に灯火、巨大な鳶口を持った消防隊は通りに沿って並んだ、その場所から動かず、騒ぎ立て叫声を上げていた。

その様な無秩序を見て、船長は指令を出した。最初の言葉で、未だ火にあっていない商品などを助けるために船員達は火に飛び込んだ。最初の３軒の家が燃え始め、ばらばらとなった、４軒目は未だ立っていた、しかし、炎の中に、５軒目が燃え始めた。我々はこれら３軒の家屋に取りかかった；包みに包み、箱、家具。雹のように窓から降りかかった、家屋の付近が危険となった；少しして、庭と通りは荷物で溢れた、仕事を止めた；その時、遠方で立ち尽くし、我々を見て驚愕している日本人達を私達は思い出した；我々は彼ら物を引っぱることを強いた、家屋の内部から岸へ。彼らは無意識に、口答えせず、我々の指示に服従した。

その時、我々は小型ポンプと桶で、最後に燃え上がった家屋に水をかけることに努めた。しかし、我々の努力は無意味であった；水が不足していた、水をかける場合には、遠方から運んでこなければならなかった、手早くそれをすることが出来なかった、小型ポンプの力も十分ではなかった。その時、日本人が我々に説明した、彼らの所には大きくて力強い小型ポンプがあると、もちろんそれを直ぐに調達した。その間に、火は燃え広がっていった；炎は既に家屋を包んでしまっていた、家の壁には黒いすすだらけの我々のシルエットが、陰のように、壊れた窓の脇でちらちらしていた、次の家屋を脅かしていた、そこからは既に同じように持ち出していた。

燃えた家屋を救うことはもう不可能であった、火の道を止めるために、家屋を壊すことになった、簡単な努力で基礎から。命の危険を持っても人々は、将校達の指示にもかかわ

らず、炎の中で動き回り、炎を浴びる危険を顧みず、オランダ人の財産を救い続けた。他の人達は梁を下から切り、様々な方向にケーブルを張り、１つは上に、他は下に。全てが完了した、が、それ以上に、炎が隣の建物に移っていた。部屋を半分に２本のケーブルをわたした。最後の人が震える家屋から出てきた時、なり響いた「エンヤコーラ」、家屋はペシャンコになった。

最も大変な仕事が続いた。危険は過ぎ去った、皆が安堵した。日本人さえ元気づいた、自主的に我々の船乗り達を助け始めた。仕事は今や変わった、燃えた所から残りの場所、被害のなかった家屋を保安すること。焼け出された場所の火の元を根絶することに。

一面で、我々が火を消火し、商品や財産の救い出しをしていた一方、我々にはこれらの品々を他の危険から守る必要があった。火事に専念し、多くの手を火事に取られていた時、我々が助け出し、岸に運んだ品々のことを忘れていた、監視無しにそれはそこに残されていた。泊地に停泊していた商船が、これらの状況を利用することを考えついた、多数の搭載ボートを遣わした、ボートは素早く助けた財産を積み込んだ、離岸したがっていた、我々が気づいた時には。我々が接近するのを見て、ボートでは舫い綱を切り、岸を突き放した；が、これは彼らを助けなかった。将校の指揮の下で、我々の船乗り達が海に飛び込み、泳いでボートに追いついた。漕ぎ手の反撃で命の危険にあいながら、ボートを岸に戻らせることをした。このようにして、財産を助けること２度目であった、まことに恥ずかしいことに、

長崎の人口の殆ど全員の目にヨーロッパ人による強盗。

以下の事に触れておく必要がある。ついでながら、焼けた家屋の中に、幾つかの大きな日本の商屋があった、２番目の危機から救われた中に、日本人の財産があった；これらの物資が主に、商船の船長や船乗りに強盗の誘惑を引き起こした」。

日本人の感謝に限界はなかった。町奉行は良く理解していた：ロシア人の船乗り達が助けに来なかったならば、長崎全部が焼失してしまったと。民衆はロシア人達の貢献に歓喜し、彼らの自己犠牲に驚いた。直に、出島の火災の様子が見れる図や歌が現れた。それらには、ロシア人船乗り達の火事との戦いが歓喜して描写されていた、火に打ち勝っている。歌には、将校の名前があった、歌の作者はその時知った。通りでは、住民達は船乗り達を呼び止めた、彼らに感謝の言葉をかけるために。招待に応じて日本家屋を訪れることが度々あった。それまではロシア人は長崎の住民のその様な尊敬と愛情を受けたことは決してなかった。今回の火災は多くのことを日本人に教えた。彼らは理解した、ロシア人の船乗り達の勇気だけが状況を救ったのではなく、能力も作用した、集団で整然と。火事での勝利は、長崎に居る全ての外国人と日本人との関係を良好なものとした。ロシア人の権威は大きくなり、語るには及ばない：火災後、外国船の船長は援助と復興で不断において注意を向けるようになった。

それにもかかわらず、出島のオランダ人船長であるファン・カッテンヅケは公式報告書で、消火におけるロシア人の英雄的行動をそれらしく特記していなかった。彼の報告書は極めて簡潔であった：「＊＊＊＊英文＊＊＊＊＊＊＊＊」。その後、日本人の努力を彼は極めて高く評価していた、リトケがしたより。

船乗り達が稲佐を訪れた時、寺院の周りに何人かの女性達がいた。列の最後尾には、様々な商品のある沢山の出店が出ていた。真っ先に食べ物。それらの店主は台所を用意する、

仕事から戻って来た船乗り達がたっぷりと食事をすることが出来るようにと。ロシア人の味覚を満たすように努力し、煮魚、鶏肉、卵を準備した。もちろんケーキも売っていた。その様な台所に設けた庇は段々と家屋になって行った。この賑やかな村は長さは１ベルストにも伸びていった。日本人の最初の疑いや不信は完全に消滅した。場所を熱烈に譲り、最大級の友情の感情を持ってさえ。稲佐の住民とロシア人船乗り達の相互の愛着は日増しに強くなっていった。目撃者が書いていた：「日本家屋の敷居に座っている船乗り達を夕方見かけることは珍しくなかった。がさつな手で赤ん坊をあやしている、その間母親はお茶やその他で彼らをもてなしていた。」　日本人が自分の家に船乗りを隠すこともあった、何らかの過失で罰を受けた。しかし、日本人自身が罪を犯したものを罰することもあった、その場合には、船乗りは不平を言うこともなかった。

ロシア人船乗り達が稲佐に長く住むにつれて、地域住民との共通語が出現することは簡単なことであった。同時代人が特記していた、それは非常に滑稽なことであった、ロシア人船乗りがロシア語と日本語をチャンポンに話しているのは。時折英語の助けに頼りながら。この際には、話し合いには顔の表情やパントマイムを伴っていた。日本人はロシア語をものにしようと努力していた。その際、顕著であった、ロシア人が日本語を理解するより早く、日本人がロシア語の会話を理解する方が。ロシア語を理解しようとする希望は幕府に支持されていた、幕府は寺院に勉強のために若者を遣わしていた。毎朝、この若者達とロシアの将校達は勉強をした、船での仕事に参加しないで。

当時、日本社会は身分で分かれていた。最大の特権クラスの内の一つが戦闘員（武士＊）階級であった。反対に、商人達は最下級の身分であった。これ故、幕府は海軍将校に敬意を持って接した、外国の企業家の前であからさまな贔屓を見せた。彼らは驚いた、長崎にやって来たロシア人の中に、全く商人がいないことに。接近を促したのは、ロシア人は他の外国人より素早く日本人の現状に順応したことである。ヨーロッパ人達は説明した、タタール・モンゴル襲来時の昔から、ロシアはアジアと密接な関係にあった、東の文化の価値を理解することが出来たと。

しかし、別れの時がやって来た、日本人とロシア人がどれだけ接近したかを示す。フリゲート艦への船員達の帰還の数日前、別れの訪問が始まった。ロシア人の船乗り達には至る所から土産が届いた。「女性も男性も、えりこのみせず、我々の船乗り達と抱擁し合った、接吻し、涙を流した；検査時（船への帰還時）、水兵達を整列させるのにもかかわらず、彼らはしばらく出かける手段を見つけていた、彼らを家毎に探し出すのは大変困難を伴う、そこに日本人が彼らを将校から隠している」。

長崎の重要な役人である中山－長崎へのロシア人の滞在に責任のある－はその日は病気で横たわっていた。フリゲート艦が碇を揚げたと知ると、駕籠で彼を岸まで運ぶように指示した。そしてボートに乗ってアスコリド号に到着した、個人的に船乗り達と別れを交わすために。泊地は小舟で一杯であった、それらはフリゲート艦を取り囲んでいた。船が動き始めた時、見送り人達は声をそろえて、ロシア語で叫んだ：

「さようなら、さようなら、もう会えない、我々を忘れずに！」

請負人達は港の出口まで船に同伴した。

長崎でのアスコリド号の歴史的停泊は、日出ずる国の住民の中の我々船乗り達にと同じように、ロシア人の中の日本人と同じように、沢山の驚きのことを明らかにした。その様

な総括をリトケがしていた：「我々は深くて気持ちの良い記憶を保っている、そこでの我々の越冬についての。それらは決して我々の記憶から消えることはない、また、信じている、日本人は直ぐには我々を忘れないこと；フリゲート艦アスコリド号は日本人民の口伝として生き続けるであろう。そして、長崎を訪れたロシア人は、剛心寺での生活について話をし、喜んで思い出すであろう、日本でロシア人はどれだけ自立し尊敬されていたかを」。

クロンシュタットへの航路をとるより先に、函館に立ち寄ったフリゲート艦アスコリド号は、ゴシケビッチ領事の依頼に従って、日本人から送られた土産をロシアに運んだ。

碇泊、ロシア病院の整備

１８６０年代初めの長崎は、小さい町であった。、地域の住民は４万人、外国人が２５０人から３００人の。ここは素晴らしい港であった、南西風から守られ、
山々で台風も。山々は、広い川に良く似ている細長い湾を全ての方面で囲っていた。初めての訪問者には、湾は「素晴らしい幻」であった、特にパペンベルグ島（？　＊）は輪郭は巨大な砂糖の塊であり、頂上にはふさふさした植物相を持っていた。実際、外国人の意見によれば、岸の片側に出来たロシアの村落は正にその姿を失った。（？　＊）

長崎は江戸から遠く離れていること、同じく、徳川幕府時代の末期における政権の弱体化が幕府の政治権力の衰退を後押しした。もし、鎖国時代に、出島に閉じ込められていたオランダ人が政府の全権代表の呼び出しにおとなしく応じていたならば、１８６３年に、イギリス領事は長崎副奉行を自分の所に呼び出していた。後になり、イギリス領事にも幕府の役人にも、真剣に交易事業を管理しようとする頭を持ってはいなかった。江戸の独占となったのはごく最近であった。１８６０年代には、幕府の役人達は密輸の出来事に目を閉じていた、そして汚職に晒されていた。これは明かである、船ユニオン号の購入についての協定から：そこには役人との関係において特別な点があった、そこでは支払いを水増しないことが提案されていた、彼ら（？　＊）の世話に対して。

港は中国に、特に世界貿易に参加していた上海に近接しているということで、賑わっていた。ここにやって来た商人達は日本を国際交易に引き入れただけではなく、威圧的で不法な形の交易関係を持ち込んだ、中国の沿岸に呼び寄せ。小さい町の長崎は、日本のヨーロッパの窓で、外国の交易者達、外交官、使節団を呼び寄せていた、同じく武士や領主である大名を、ヨーロッパの思想が彼らを惹きつけていた。１８６０年代は異常であった、国を変える心を惹きつける時代で。日本人と外国人はここで自由に交際した、稲佐を主要点として、日本と世界の文化的交流の。偶然ではない、稲佐出身の若者が英語を勉強しに出立した最初の日本人になったのは。

新しいリベラルな思想をここへ使節団が持ってきた。これに最も成功したのは、聖ガイド・ベルベックであった、アメリカからのオランダ宗教改革教会の代表である。彼の御陰で、１８７１年から１８７３年に、アメリカとヨーロッパの日本人による長旅が組織された。政治体制、軍力、教育への知見を得ること、岩倉使節団と呼称された。

港にアンドレイフスク旗のない船が港にいない日々はなかった。火山と岬の組み合わせ

は、長崎のロシア人船乗り達に、ウラジオストクを思わせた。特に彼らは、ここの暖かい気候を気に入った；大きくて平穏な湾は素晴らしい休息を与えてくれた、長い航海の後に。長い航海は乗組員の健康には否定的であった。多くの船には、熟練した医師が乗っていたにもかかわらず、彼らはいつも病気を見分けるとは限らなかった。長崎へのロシア船の定期的な寄港、そして長い停泊は司令部に、稲佐の海岸に病院を設置する考えを強いた。そこで、アスコリド号の例にならって、他のロシア船の船乗り達は場所を借用した。

極東の海を航海し続けていた、３４歳の太平洋艦隊指揮官であり、海軍大佐のイワン・フェドロビッチ・リハチェフは知っていた、船員の健康を維持することの重要性を。１８６０年6月１５日、フリゲート艦スベトラーナ号のベテラン船医メルツァロフを彼の命令で、長崎に居る全ロシア人船乗りの健康管理責任者に命じた。コルベット艦バヤリン号でここに到着し、病院長であるシンケビッチ医師に受け入れてもらい、メルツァロフは直ぐに、部屋を仕切ることに取りかかった。特に、彼は壁を暖め、幾つかの暖炉を設置することを指示した。この医師は要求の多い、責任感のある人であった、他の者達と違って、彼は長崎の美に全く惹かれなかった。段々と、長崎における病人のためのロシア人の生活は本物の病院の体を成していった。

何よりもまず、メルツァロフは、梅毒に罹っている船員を船から降ろし、入院させるように手配した。直に、他の病人達が追加された。長い航海時に、壊血病にかかった者は、果物や生野菜で非常に早く回帰した。長崎では船乗り達はそれらの不足にあうことは無かった。しかし、ナザル・シルヤノフを、助けることは出来なかった、果物でも、長崎での静かな停泊でも。彼はコルベット艦パサドニク号の乗組員で職人あった、１８６０年７月２９日に亡くなった。報告書で特記していた：「最後の４ヶ月間、彼はズッと患っていた、老人性のよぼよぼから回復した、彼は４５歳であった。この人物は蝋燭のように燃え尽きてしまった」。

１８６０年8月１９日、クリッパー艦ナエズドニク号が泊地に留まっている全ての船を回り、病院に３７人の患者を送り届けた。患者の内の幾人かは重病であった、彼らを救うことは出来なかった。最初、重病でコルベット艦ボエボダ号の水兵イワン・グロゾフが亡くなった。この船の他の水兵、グリゴリイ・ソコロフは9月２６日に亡くなった。1月後、クリッパー艦オプリチニク号の水兵ドミトリイ・ネクラソフが亡くなった、彼には潰瘍が見つかった。１８６０年１２月１０日、コルベット艦ボヤリン号の水兵ミハイル・ザガイノフが亡くなった。１２月１９日、クリッパー艦ジギト号の水兵ワシリイ・ボロニン。稲佐の墓地のアスコリド号船員の墓に並んで、新しい墓標群が現れた。

１８６０年１０月３０日、長崎に、フリゲート艦スベトラーナ号がやって来た、海軍中佐イワン・イワノビッチ・ブタコフの指揮下で。岸辺の病院は新しい患者で一杯となった。主な患者は胃や腸を病んでいた。１８６０年１１月から、病院には常時、約５０人ほどの患者がいた。病気の原因としては、コレラと天然痘の感染の勃発があった、長崎で１８６０年に見つかっていた。水兵は性病にも患っていた、しばしな中国でかかっていたが、日本でもかかった者も。

長崎は突出していた、ここでは、梅毒の病人数が極めて大きいことで。港に立ち寄る前に、船長達は下部船員との話し合いを必ず行った、梅毒に感染しないように警告しながら。岸に降りると殆ど全ての水兵は、最初の仕事として、港の居酒屋に行った。そこでは、綺

麗な女性と懇意になることを避けることは難しかった。ロシア人の医師が特記していた：「梅毒を日本人はそれほどの病気ではないと見なしている；梅毒に罹った者は、医療手段で、辛い発作の発現としてだけで済む。ヨーロッパ人に解放された日本の他の港と同じように、長崎でも売春は極めて根強くはびこっている」。

梅毒の感染を防ぎながら、船医は、ロシア人水兵にサービスを行っている全売春婦の定期的医療診察を要求した。売春屋の所有者達はこれを伝統の破壊と見なし、相変わらず拒否続けた。１８６０年に、ロシア人医師と有名な丸山歓楽街の女郎屋の主人達との間に妥協が達成しなかった。日本人医師松岡良順の御陰でこれは成り立った、彼は稲佐においてロシア人のために特殊な女郎屋の開設を提案した。そこで、売春婦と同じく水兵達も検査をするという。１８７６年に、日本政府は状況の緊急性を認識し、医療の警察管理をするという、地域の売春婦のために、漸く決断を下したにもかかわらず、この問題は水兵にとっては極めて切実であった。

停泊時には、決まりの役割を果たした、将校達は、特に船の船長は。３０歳のパサドニク号の船長ニコライ・アレクセービッチ・ビリレフは３人の将校のうちの一人であった。彼らに水兵達は喜んで従属していただけでなく、模範ともしていた。クリミア戦争での英雄的貢献に対して、ビリレフを海軍大尉に昇任させた、侍従武官使命を持つ。戦後に、彼はバルチック艦隊に勤め、１８５９年、コルベット艦パサドニク号を指揮し、日本と中国の沿岸へ遠洋航海をした、そこに１８８３年までいた。

週に２回行われた定期観察は、水兵達の梅毒感染を防ぐことは出来たが、完全には防げなかった。パサドニク号でそれらを目にして、ビリレフは指示した。小病院のために、ベットの部品、机、腰掛けを準備するように、同じくガウン、シャツ、ストッキング、他の病院用着衣の縫製を依頼することを。幸運にも、これら全ては日本では非常に安かった。ニコライ・アレクセービッチは手配した、他の医者との相談のために、外国語を知っている素晴らしい医者を連れてくるように。その様な専門家として、コルベット艦ボエボド号の船医であるシンケビッチがいた、ニコラエフスク港では優れた医者と見なされている。オランダ人のポンペはロシア人達を支援し続けた。

パサドニク号の船長が絶景の場所に将校達のための家を造った。更に、コミオアン寺に家を借りた、そこはゴウシンジから余り離れてはいなかった。それは少し狭かった、その代わり素晴らしい庭があった。寺院では間借り人から極めて僅かの料金を取った、それで寺院は十分であった。このように、ウンコフスキーは月に２０ドルを支払った、ゴウシンジでの住居に対して。

奉行はビリレフに極めて好意的であった、これ故、パサドニク号の水兵達は一度ならず日本人を助けたことがあった。台風のあったある時、海軍大尉セルコフは３人の日本人漁民を救った。それにより、船の船長は日本人から感謝を受けた。自分側から乗る組員へ勲章を申請した。ビリレフが書いていた：「日本人といえば、彼らは我々に良くしてくれた。昼に、私は奉行から招待された、軍の検閲に居合わせて、奉行がする；私は特性の天幕の下に奉行と並んで座った初めてのヨーロッパ人であった。得も言われぬ独特な日本人の謁見に居合わせた。その際、礼と行進と銃の操作におかしなところがあった；射撃はヨーロッパ人に劣るであろうか」。

１８６０年８月５日、パサドニク号の船長を長崎奉行が仕事で訪れた。接待は５時間以

上続いた、奉行はロシア船の訪問に歓喜した。気分の良い時を見計らって、水兵達はマストのない状態でいる元ロシアのスクーナー船ヘダ号について頼み込んだ。その倉庫から火薬と簡単な財産を下ろし、その後、５プード以上の硫黄を消費し、自分のコルベット艦で１２４匹のネズミの駆除を行った。

１８６０年１０月１５日、長崎にコルベット艦に乗って、太平洋艦隊司令官であるリハチェフがやって来た。泊地に留まっていたコルベット艦パサードニク号、クリッパー艦ナエズドニク号とジギト号の将校達との出会いの時に、リハチェフに稲佐からの移動を提案した、が、彼は同意しなかった。リハチェフが書いていた、「私は全ての家屋を我々のために残すことに決めた。というのは現在まで、良いデータを持っていなかったので、この場所で将来我々が必要とするするものを予見して。一面では、日本人を何かに説き伏せることは常に難しい、が、ある時、自分の言葉を与え、彼らは問題に希に戻り、我々が使用している建物の前で、彼らによって渡された、我々は新しい用件がある場合に全く以前の困難さに出会う、再びそれらを得るために。その上に、現在、長崎では、ヨーロッパ人の領事に土地を割り当てる事が進んでいる。もし我々が自分の場所を売却するならば、その場所は極めてあり得る、他のヨーロッパ人が占めることが。

近年、長崎のこの地区は、計りきれない恩恵をもたらしている。その御陰により、もちろん、艦隊の乗組員の健康と彼らの素晴らしい状態を維持することが出来た。将来において、我々にとってこの地区の重要性は、もちろん、我々の艦隊の構成と使命によって制限される、この海における、そして、多くの他の条件によって」。

リハチェフは沿岸の家屋の視察を行い、それらに非常に満足を示した。出立の前に、彼は冬に向けて家屋を整理するように委ねた。障子を確りした壁に変更し、床を暖めるように指示して。彼は同じように委ねた、士官候補生達のために別室を造るようにとも、そこでは冬に岸で理論的授業を行うつもりであった。士官候補生達の授業の指導は、素晴らしい教師であるクプレヤノフ少尉に委ねた。それ以外に、アメリカ人女性を家庭教師として雇った。１８６０年１１月２日、リハチェフはナエズドニク号に乗って長崎からポシェットに向かった、ノブゴロド哨所の視察に。１月後、彼は戻ってきた。そして確信した、全ての仕事は計画通り進んでいたと。彼は病院の新しい部屋、士官候補生用の教室に満足した、それは素晴らしいものであった：グリゴリエフ少尉の指導下で、彼らは海軍目録作成を学んだ。１８６０年１２月５日、ボエボド号に乗って、ゴシケビッチ領事が長崎を訪れた。艦隊の移動が差し迫ったので、稲佐のロシア人病院を閉鎖することにした。１８６１年３月１３日、メルツァロフは病気でスベトラーナ号に移された。

１８６２年の夏に、長崎に、再びコレラが荒れ狂った、その犠牲者の数の中に、ロシアの水兵も入った。コルベット艦パサドニク号にも何人かの犠牲者が出た。７月１１日、３０歳の火夫ステパン・ゴルボツォフが亡くなった。彼の同年者である水兵セメン・ピシメンニイは８月２０日に亡くなった、９月１３日には、３３歳の水兵カール・クレスネヤンソンが亡くなった。コルベット艦バガチリ号では乗組員の内の一人の数の違いの原因を突き止められなかった：水兵ニル・カザリンが１８６２年１１月１８日亡くなった。３６歳であった。

戦争の前触れ、対馬

もし、極東における最も重要な箇所の名を挙げるならば、選択の疑いなく、それは対馬である。この島は日本より少し朝鮮に近い所に位置している。対馬は古代から朝鮮と中国と日本の外交関係の橋の役割を担っていた。１８世紀半ばには、対馬は海を通して、日本側への大きな寄与を自認していた：多分、対馬の島民達は、国々の情報を集めていた。朝鮮との交易を通じて。幕府はこれを認識することが出来ていないで、島に財政的特権を提供していた。同じように、他の軍務からも解放されていた。

１８４０年代半ばから１８６０年代初めまで､島を沢山のヨーロッパの船が訪れていた、海岸線の防御を確りするように島に要求しながら。対馬は何度も何度もこれについて、徳川幕府に手段を問い合わせた。この要求は時とともに、日本の防衛における対馬の役割を根拠づけるようになった。島の偵察以外に、幕府はその意味を強化した、国境要塞として。そして、強力な武装を構築する事を要求した。明治維新まで、対馬にはこの新しい役目を負わせていた、幕府からの財政援助を与えて。日本の境界にあるこの小島は国の防衛の概念をじっくりと変えることを強いた。

ロシア政府は、クリミア戦争（１８５３年～１８５６年　ロシア対トルコ、イギリス、フランス　＊）における最近の敗戦を思い出し、極東におけるイギリスの立場の強化を懸念した。そして、これに対して徹底的に抵抗した。抵抗の手段の一つとして、日本海沿岸を手にしようと試みた。あり得る、イギリス人が対馬を占領するつもりであるという噂は、全く根拠のないものであったが。が、これに対する根拠は変わった。中村（？　＊）が書いている、「１８５９年に、イギリス船ヨールド号の船長ーイモサキ（？　＊）湾にやって来たーがイギリス船に対馬の湾を開くように要求した。当時、イギリス人と住民の間に衝突が起こっていた。その結果、日本人の役人に何人かの死傷者が出た。直に、うわさが広まった、イギリスとフランスが対馬占領計画を持っているとの・・・」。ロシアは、この報道を非常に真剣に取り扱った：この島に住みついている者は日本海だけではなく極東全体を完全に統制することが出来る。

１８６１年２月２０日、太平洋艦隊司令官リハチェフがコルベット艦パサドニク号に対馬に向けて函館を出航するように命令した。コルベット艦は大崎浦湾で碇を揚げ、その後、イモサキに移動した。そこへの到来について、コルベット艦船長ビリレフ海軍大尉は日本人達に説明した、イギリス人が襲撃の準備をしていると日本人に警告しにやって来たと。リハチェフの日記の４月４日の所には記述があった：「噂によると・・・イギリス人はこの島に目を付けている・・・我々は彼らに警告をしなければならない」。更に：「ナホトカは素晴らしい停泊所。対馬の長所は、日本海において、通年において不凍港である対馬は秀でていることである」。

大公コンスタンチン・ニコラエビッチは、出来事を知って、リハチェフに書き送った：「君は本当に若い、私は君を抱擁する、全霊を込めて！・・・　君の全ての手紙を、私は皇帝に読んでもらっている。皇帝は非常に満足している、君の命令と機知に・・・」。ムラビエフ・アムールスキーもリハチェフに手紙を送っていた。彼の大きな関心は対馬ではなくポシェット湾であった。ムラビエフ・アムールスキーが書いていた、「東海において

ロシアが所有しなければならない所が、３０年にも渡る私の関心事であった。私に若干の権利を与え、心から貴方に感謝する職務を私につかせること、ノブゴロド湾の建設に当たって」。

対馬を訪れて、ビリレフはあれやこれやして地域の藩主から土地の検査と島の一つに海軍基地の建設をする許可を得ることが出来た。それはロシア人に日本海の管理をさせてくれるものである。島にある収容所を壊し、パサドニク号の船長はそこに哨所を建て、地図と海路図の作成に取り組んだ。時と共に、状況は段々と先鋭化していった：日本人とロシア人の間の友好的な関係は敵対するようになって行った。日本人の歴史家が特記している、「４月１２日、ロシア兵が岸に上陸し始めた時、農民の安五郎の指導の下で住民達がこれを阻止しようと試みた。安五郎は殺され、日本人２人が捕虜となった、村の残りの住民達は隠れた。不安が島全体を襲った、緊張状態が形成された。この出来事は藩主の宗慶頼を不安にした。が、彼は住民を静め、話した、「この事件は国家的なものであり、幕府に伺いを立てなければならない。我々は急使を向かわせている。宗家の運命がかかっている故に。家の名を汚さぬように、努力するようお願いする」。

対馬藩主宗慶頼は直ちに江戸に知らせた、ロシア人の水兵達の到来を。幕府は島への彼らの滞在に極めて強く反対した。５月に、対馬に、幕府の全権小栗忠順が到着した。彼はロシア人に退去を要求した。ビリレフは要求を拒否し、声明した、「対馬の藩主の命令無しでは、退去はしない。」と。

この問題をゴシケビッチ領事が処理することになった。ゴシケビッチはロシア水兵に同調しなかった、日本の権力と争いにならないことに同意した。ロシア外務省の指令に従って、ゴシケビッチは幕府に説明した、対馬での海軍基地はリハチェフとビリレフによって造られた、ロシア政府の裁可無しに。日本はこの説明に納得を示し、紛争は消滅した。海軍基地は取り払われ、島の海図は対馬のロシア人による初めての地図となった。後になって、リハチェフ将軍が書いていた：「多分、我々だけがなしえた：この島をイギリスの占領されないことを」。

千島付近におけるロシア船の壊滅（１９０４年～１９０５年、対馬海戦でのバルチック艦隊に　＊）まで、４０年少しが残されていた、１世代の人生より短い。

繁華街を離れて

１１月１６日、長崎の泊地に、コルベット艦バリャグが碇を下ろした、香港からやって来た。船には、旗が掲げられていた、艦隊司令官エンドグルフ海軍少将の。この船は１８６４年に建造された新船であった、排水量が少し大きくなって２２１７トン、大砲が１７門、９１０馬力のエンジンの。古いアスコリド号の入れ替えであった、速度は１１ノット。バリャグ号の乗組員は将校が１８人、水兵が３２３人からなっていた。船長が報告書に書いた、「長崎での停泊時、素晴らしい天候の御陰で、乗組員の健康は素晴らしいものとなった。岸の病院に入っていたパトラケーフとペクトフスキイは快気する。」

乗組員の内の一人である幼年学校生ステパン・マカロフが、１８６５年８月１０日、艦

隊のコルベット艦に移った。エンドグロフが能力のある若者であることに気づき、彼を他から切り離し、彼の所で食事をともにし、彼に対して気にかけていることを話した。後になって、極東からバルチック海に戻り、将軍は実習生の将来の計画に興味を持った。

１８６６年の初めに、マカロフは再び長崎にやって来た、コルベット艦バリャグ号に乗って。日本の港とそこの住民と少し知り合いになり、マカロフは記録していた：「名誉を重んずる人民、活発で、喜びに富んでいる、歌いながら仕事をしている。」　彼は侍の掟に尊敬を持って接し、彼らの多くは将校の生活に移ることことが出来るであろうと見なした。１８６６年１１月に、マカロフはコルベット艦アスコリド号に移った。その船にはケルン海軍少将が旗を揚げていた、エンドグルフに替わって。彼の悲しみはどれだけのものであったろうか、一月後に将軍は乗組員に声明した、コルベット艦にロシアに行く命令が与えられたと。マカロフが日記に書いていた、「私は右往左往した、問題を解決しなければならなかった、シベリヤ艦隊に残るか、或いはバルチック艦隊に移動するか」。彼は後者を選んだ、が、バルチックへの長い航路は疑惑と無知で苦しむことはなかった：新しい場所での勤務はどのようなものであったのか、アカデミーへ入れる可能性があったのか、その他。

この時期の彼の日記の頁は、生き方についての少なくない考察が残されている、若いマカロフの精神的苦悩を物語っている。が、それと一緒に我々はそこにいる、艦隊勤務について充分に考えた塾考。マカロフが書いていた、「熱意の程度と命令の知識は、指揮官と将校に依存している、命令について心配をもっていつも達成する、食糧の良好な品質だけではなく、生活の快適さと自覚について。命令より悪いものは何もない、指導者ではない者に対する、これは指導部の不敬をならし、その後、不服従と怠けに」。

ステパン・マカロフはクリーパー艦アブレク号とバガチリ号で幼年学校生との実習を行った。将来の将軍ブランゲリの伝記作家が書いていた、「年配の将校チルトフとポポフの直接の影響下で、バガチリ号には誠実な心が形成された。言うことが出来る、海事の仕事に非常に真面目であり、若い将校や船の幹部候補生達の特性であると。その中で特に、自身の才能と個人的な知識欲に秀でていた。彼らの内の何人かは自分等を慕っている若い幼年学校生徒を受け入れた。軍事を教え、英語やフランス語、その他の授業を行った。」

１８６６年５月１０日、砲艦ソボリ号が長崎に碇を下ろした、海軍少将コンスタンチン・パブロビッチ・ピルキンの指揮下で。ホノルルからやって来た。少し遅れて、スクーナー艦アレウト号がやって来た、海軍大尉ロズリが指揮していた。船はバリパライソ（？＊）とホノルルに立ち寄っていた。航海中しばしば天候が変わった。到着の日、６人が深刻な風邪にかかった。が、停泊中に、全員健康になった。酷い状態となった、３人が「岸の病気（＝梅毒　＊）」に罹ってしまった。

訳があって、長崎は船乗り達には１つの楽園と見なされていた：ここへやって来た者達は休息ができ、健康を回復できると見なしていた。が、素晴らしい自然と全般的に暖かい気候が、ロシア人水兵の素晴らしい気分を助けてくれ、長い航海の後で力を回復させたにもかかわらず、偶々例外であった。水兵達は気がついていた、ここでは夏はしばしば酷く蒸し暑くなることを、が、冬には寒くて湿気の多い日があることを。それは肺病の病人にはこの町は不適格である。リューマチを患っている者にとって、温度の急変化は問題となっている、同じく、谷間からやって来る厚い霧も。それ以外に、干潮時に浅瀬に大量の海

藻が残った、それが腐敗し、マラリアの伝染を助けた。熱病に感染する他の原因として、ロシア人医師は田圃の灌漑用の人工水路を上げていた。

夏に長崎を支配する、暑さと高い湿度を誰も除けなかった。例えば、コルベット艦ボエボド号の水兵イワン・グラゾフはその様な日に心臓が止まった。夏の蒸し暑さを避けるために、水兵達は甲板で寝ることを好んだ、高まる空気の湿度と温度の上昇から、甲板は湿っぽくなっていった、水兵の服のように。これから風邪をひく者も出た、コルベット艦アルコリド号の水兵達と同じように。それに乗って若いステパン・マカロフが航行していた。そして、１８６６年に長崎に停泊したクリッパー艦イズムルド号の。アスコリド号の船長ワシリイ・アボニシャンは１８６６年９月１５日に亡くなった、１０月には、水兵フェドル・ルコシコフを葬った、アスコリド号の。イズムルド号からグリゴリイ・アファナシエフを。

この時期、フリゲート艦アスコリド号には、有能なロシア人の水路学者コンスタンチン・セルゲービッチ・スタリツキイが乗っていた、天体観測、磁気観測、水路図の作成の仕事を命じられた、バルチック海から太平洋、同時に極東への船の航路に沿って。航海の準備のために、１８６３年２月から１８６４年３月まで、スタリツキイは従事した、プルコフ天文台で、「予備の実践的旅行を行った、オストゼイスク海峡に沿って、科学的目的を持って。」バルチック海から日本海への移動は、結構平静であった、つまらなかった。水路学者の思いを占めた唯一のことは、装置の保全の確保であった、彼の船室一杯に詰め込まれていた。クロノメーターは規則正しくかちかち鳴っていた、検査のために船腹から特別に投射された新しい測程器がマイルを刻んだ、船倉には新しいブルク測鉛が１ダース寝ていた。

長崎－そこへ１８６６年春に、フリゲート艦アスコリド号がやって来たーは満開の桜で船乗り達を出迎えた。薄ピンク色の桜の花が全ての公園、並木道、小さな日本家屋の小さな庭園を見たした、オモチャのような。スタリツキイは日本が初めてであった。民族的特徴の出現に彼は興味を引かれた。日本の風習の小物のような、民族的な探検の時間は残されていなかった。彼は直ぐにフリゲート艦アスコリド号からコルベット艦バリャグ号に移乗した、この艦は露米電信会社の注文に従った仕事をしていた。

バリャグ号での各航海は限界まで大変であった。あり得ない困難な条件の下で、スタリツキイは時間の繰り上げの助けで結びつけることが出来た、１２－１５机上型クロノメーターで、日本海、オホーツク海、ベーリング海の９カ所の基本点を：ウラジオストク、デーカストリ、ニコラエフスク、ドエ、函館、長崎、そしてその他。基本点以外に、水路学者は大量の中間点を確定することが出来た。大量の数値と緊張で、いつも頭痛があった、間違いをするのではないかとの恐れが、スタリツキイに何度も何度も計算を仕直すことを強いた。これは継続した、１８６６年１０月中旬の航海の最後まで。その時は、スクリュウ・スクーナー艦アレウト号に乗って水路学者は長崎からウラジオストクへ向かった。

函館のロシア人病院の閉鎖後、そこへロシア人船員が越冬に立ち寄るようになった、１８６６年に長崎に再び病院を開設した。函館からここへ移ってきたゼレンスキイ医師が病院を運営した。クリッパー艦イズムルド号の船医の指示に従って、剛心寺からのボグダノフを今回は拒否した。ボグダノフはメルツアロフの助言を受け入れ、ヒロダゴヤ（？　＊）村に小さい家屋を造った。その村には、以前に海軍少将エンドグロフがいた、１８６４年

から１８６６年まで船団を指揮していた。移動の原因は歓楽街から遠くへ行きたいということであった、稲佐の回りに蔓延っていた。しかし、新しい場所では、指揮は不十分のままであった、とにかく、そこは低く沼地の多い場所であった、船乗り達の健康を回復させることが出来なかった。彼らは娯楽にふけった、ここで。

時と共に小屋は駄目になった、１８７０年代初めに、隊長である海軍大佐ピルキンは、その地に狭い区画を借用して、は風呂を造った。後になり、コルベット艦ビテヤズ号の船長ナジモフが新たにそれを作り直した、病人も入れるように。本物の病院の金は初めはなかった。資金はなかった、墓の整備用の金も。長崎に碇を下ろした船の船長達は、最初の仕事として、資金の調達に努力した。乗組員達に紙を回した、「稲佐のロシア人墓地の整備費として」と書かれた。船乗り達はお金を惜しまなかった。このお金が、病院とその他のロシア人用の建築に少なくない金額を分け与えてくれた。このようにして、ロシア人の乗組員達は不断において稲佐の環境整備に従事した。特に、彼らは石の階段を造った、剛心寺から食堂へ続く、稲佐の主埠頭に続く。

この石の階段の状態が不良となって来ており、
整頓と環境整備についての心配がロシア人の船乗り達の原因となった。状況は良く知られている。岸に散歩に出かけていた、フリゲート艦スベトラーナ号の乗組員の優秀な下士官の内の一人が、船に帰還してきた時、この階段で倒れ、重傷を負った。」　予想できる、船員の人気者が船に戻る時、階段でつまずいたと。が、この階段で躓いたのは一人ではなかった。艦隊では直ぐに階段の修理のためにお金が集められた。

長崎の状況は時折非常に不安定になった。稲佐ー人混みの町から遠く離れているーに留まっているロシア人船乗り達の希望は、全く明らかであった。アメリカ人の船乗りであるジョージ・ブンカーの殺害の事件を未だ忘れてはいなかった、ベレッタ号に勤めていた。１８６７年６月１４日、ある侍が彼に後ろから襲いかかった、御茶屋を出た時に。そして首に打撃を受けた。殺人者は見つけられなかった。２ヶ月後、２人のイギリス人船乗り達を誰かが刀で突き刺した、長崎の御茶屋の一つの入口で、酔っ払って寝込んでいた。この殺人ーイカルスの出来事として有名となった（２人のイギリス人は英国船イカルス号の船員であった　＊）ーが、日本とイギリスの間の戦争になることは辛くもなかった。国際的スキャンダルは明治維新後には沈静化した。

この時期、クロンシュタットを初めての日本の領事が訪れた。その代表団が日出づる国に行ったことのある船乗り達と会合した。新聞「クロンシュタット通報」が書いていた：「初めての使者小出大和之守は長い間函館奉行であった。沢山のロシア人船乗り達を知っていた。小出大和之守は３５歳以上ではなく、最も教養のある人物の内の一人である、日本の行政特権階級の；彼は非常に交際好きであり、異常に好奇心が強い。彼の友人、石川駿河之守もまた非常に若い、目で見て明らかに上流階級に属している。彼は付き合いが少ないが、言えるであろう、非常に素晴らしい外交官であり、極めて頭がさえている人物であると。若い通訳であるウー志賀（？　＊）は、函館と長崎で彼を知った９人の将校達に囲まれて、我々の海軍の会議で、自宅のように振る舞った。」

そうこうしている間に、ロシア人船乗り達が日本に立ち寄り続けた。１８６９年には、長崎にクリッパー艦ガイダマック号がいた。この停泊時、３０歳の水兵が亡くなった。１８７１年春、砲艦ソボリ号が、再び長崎に碇を下ろし、ドックに入った、船体検査を行う

ために。ロシア船の航行をオランダ電信会社の指導部が利用した、上海から長崎まで電信線の敷設に利用するために、その後、ウラジオストクへ。船長レオニド・コンスタノビッチ・コロゲラスは長崎港の南北の測量をすることを願い出た。手漕ぎ船に乗って船乗り達がその様な測量を行った、その後、ミザキ（？　＊）湾も。１８７１年3月２７日になる前に、ソボリ号は函館に向かった。

クリッパー艦イズムルド号はミハイル・ニコラエビッチ・クマニ指揮下で、１８７１年秋にホノルルから長崎にやって来た、外交の任務を果たす機会があった。船のホノルル停泊時に、日本にクリッパー艦が行くことをハワイ政府は知り、ロシアの副領事に外交文書を依頼した。政府はロシア船に３人の日本人を祖国へ運んでくれることを依頼した。当時、ハワイの国旗のもとで航海していたスクーナー艦グーシエ・フオウス号の船長が彼らを雇っていた、彼らの同意無しにホノルルに運んでいた。今、彼らには帰国が迫っていた。文書に記していた、日本人の送り出しをハワイ政府は、２国間の友好の証と見なしていると。書類では強調していた：「本政府はこれを友好の証と見なすであろう。」イズムルド号の船長は島の政府の依頼を実行することに同意し、日本人達を船に乗せた。

イズムルド号の船員達は全員元気で長崎に到着した。ホノルルでは、船員達は医者の診察を受けていた、上陸して休息する必要があるのは誰かを説明しながら。壊血病に罹っている２人の船員には、確りした糧食が与えられた、１日当たりビール半瓶分も。天国の島での停泊時には、簡素な地区は生野菜や果物で溢れていた。これ故、日本では船員の誰も医療の助けを必要としなかった。

約１年後の、１８７２年6月１１日クリッパー艦イズムルド号は、海軍中佐クマニの指揮下で、再び長崎に立ち寄った、ニューカレドニアから３５日間の航海を経て。今回は、船には、２人の病人がいた。１週間の停泊の後、クリッパー艦はウラジオストクに向けて出航した、小病院に水兵イオン・ロゴジンを残して。彼は１８７２年8月２６日に亡くなった、稲佐に最後の安息地を得た。

１８７０年から１８７２年に、長崎湾に、ゴルノスタイ号を見ることが出来た。しかし、越冬は乗組員にはそれほど良くはなかった：天候は湿気が多く、寒かった。快晴の日は少なかった。１１月末には雪さえ降った。この地では以前にはなかったことであった。

長崎での水兵達の日常は変哲がなかった。ある旅行家が書いていた、「御茶屋がヨーロッパ人クラブの役割を演じている。そこには全ての階層と年代の日本人がやって来る、日常の仕事から解放され、楽しむために。御茶屋では、ボーイの代わりに、お客を出迎える、日本人の若い娘達が愛想のある笑顔で。ここで、ヨーロッパ人達は初めて日本の踊り子、芸者と知り合いになれる。芸者の生活は余りあやかりたくはない。彼女らは放浪の歌手を思い出させる、昔、モスクワの通りで、竪琴の伴奏で歌っていた。それなりの企業家が若い娘を雇う、ある程度の期間、彼女らに楽器のもとでの歌、踊り、遊びを教える、生徒の能力を見ながら。必要な技量を身につけて、芸者は契約の終了まで勤める、自分の先生の奴隷ではないが、彼女の技能を搾取する、しばしば体さえ。」

１８７２年、バリパライソ（？　＊）とホノルルを経て、長崎にスクリュウ型スクーナー艦ツングス号がやって来た、海軍大尉イワン・マトベービッチ・グリゴラシの指揮下で。船にはマカロフがいた、１８７０年１月にツングス号への指命を受けて。その時には、スクーナー艦は太平洋への航海に向けてクロンシュタットで準備をしていた。準備と移行に

は時間がかかった。殆ど１年半かかった。自分の日記でマカロフは詳細に基本的に分析をしている、「何故、スクーナー艦ツングース号の移行がそんなに長引くのか、どのような根拠がスクーナー艦を海洋で７７日間維持することが出来るのか、他の船はこの移行を１５日から２０日で成し遂げているのに。」　日記の１２頁にわたってマカロフは一つ一つ調べ上げ、間違いを指摘した、装帆と帆の間切りにおける。これらの指摘は極めて教育的であり価値があった。もし、装帆の仕事－彼はそれが好きで綿密に研究していた－が海軍において自分の時代が終わらなかったならば。

日本でのミハイル・ベニュコフ

１８５７年の早春に、東シベリアの首都イルクーツクに、総参謀本部アカデミーの若い卒業生であるベニュコフがやって来た。総知事ムラビエフは直ぐに仕事熱心な若い将校に気がつき、彼に期限付きの仕事を委ねた：地形図の製作と軍事統計の分析、極東における政治状況の完全な評価のために。これらの資料は知事に必要であった、ペテルブルグへの報告書を創り上げようとしている。仕事を終えて、ベニュコフは地図を持って行かなければならなかった。

１８５７年１１月２３日、至急便トロイカがベニュコフをペテルブルグに運んだ、１２月９日の朝、彼はムラビエフに準備した書類を渡した。この時には、首都まで、情報が届いていた、蒸気型コルベット艦アメリカ号による、沿海州の東海岸の、２つの最新の湾－聖オリガと聖ウラジミルーの開港についての。直ぐに、ムラビエフはこれらの開港の重要性を評価した、理解して、ハバロフスクからこれらの湾へ陸上の経路の探ることは必要であることを。仕事は実行者のものとなった。ベニュコフは良い時に駆けつけた、ムラビエフの指命があった。

時間を失わないようにして、若い将校は沿海州の探検隊の組織にかかった。まず第一に、彼はラペルス（宗谷海峡　＊）とブラウトンの資料を詳細に研究した。もちろん、それらでは自分の問題に対する解答を見つけられなかった。彼を救い出したのは、当時年配の著名な将軍であるネベリスキイとの知己であった、彼は後になって、ベニュコフに書いている、「ペテルブルグの遠方にある家の地味な部屋に私を招き入れた。数日間の夕方、ニジネアムールスキーとウスリスキイ地方について話し合った。その地方については私は目撃者であり、沢山の情報を持っていた。時には、ギリヤーク人やナナイ人に聞くこともあった。伝え聞いた頃で私が何か忘れているのではないかと危惧し、換えは特別な紙に図を書いた、ウスリスクと日本海の間の国の。そして、紙に説明文も書いた。」　ロシア人は大きな価値を見いだしていた、新しい港から、日出ずる国へと素早くたどり着けることに。

ペテルブルグでの仕事を終えて、ベニュコフは、１８５８年２月に、イルクーツクに戻った。当時、函館には、初めてのロシア外交代表団が集合していた、それらをゴシケビッチが統括していた。その年の６月１日、ベニュコフは自分の小さい隊と一緒にカザケビチェボ駅（ハバロフスクの直ぐ南　＊）から道をとった。船曳人によって曳かれたり、或いは当時言われたように、引き綱で、彼らはウスリー川を上流へとゆっくりと遡っていった。

１月半後、シホテアリニン山脈を乗り越え、７月１７日、日本海沿岸に達した。１８５８年１０月２６日、探検者達はイルクーツクへ戻った。直ぐに、ベニュコフはムラビエフに詳細な報告書を出した、当時既に伯爵となっていた。

東シベリアに別れを告げて、ベニュコフは１８５９年１月３日、ペテルブルグに向かった。３月３日、彼はロシア地理学協会でウスリーに関する彼の旅行の報告を発表した。新聞「サンクト・ペテルブルグ報告」が、これについて読者に報道した、次のことを書きながら、旅行家は地図や図を示した、彼が造った、見たことも無い植物標本、特に、朝鮮人参、沿海州の河川の豊かさを教えてくれる。新聞はベニュコフの報告からの抜き書きをしていた：「・・・鉄道を施設することが人類の仕事となろう、この国を海に接近させる、そして、これを通じて全ての活動を発展させること、ヨーロッパ的市民意識に富んでいる」。

この仕事の後、長い間軍務は彼を縛っていた：彼はパミールやチャニ・シャネ（？　＊）を訪れた。イッシク・クリ湖を研究した。カフカスやトルコを旅行した。更に旅行家は極東も訪れた。：中国、その後、日の出国を。ロシア帝国は、ロシアの東の国の軍事の成長に注意を向けていた。この国を最初の訪問から初めて、水兵は報告書を作成した、見慣れていなかったこの国についての。総参謀本部は沢山の報告書を分析し、新しい情報を得るために自分の将校達を派遣した。総参謀本部の中佐ベニュコフの出張はこの目的を追求するものであった。

日本で、将校は１８７０年の春と夏を過ごした、長崎は初めての場所となった、そこに、彼は中国からやって来て、留まった。そこには、当時は、１万件の家屋を数えた、住民は、７万５千人から８万人。旅行家には次のように見えた：「長崎は日本の他の町とはは違って賑やかな町、特に、外国人との長期にわたる付き合いがその住民達に影響を及ぼした。住民は外国人に開放され、彼らに余り敵意を抱かない、他の地域よりは。そして、ヨーロッパの習慣により詳しい。町では、多くの者がオランダ語や英語を話している。数学や航海術、医学その他に詳しい人々が少なくない。何となれば、幕府はここに病院を設立している、若い医者の教育のためもかねた。長崎には中国人は希では無い、彼らは出島と大村の間の特別の家屋に住んでいる。現在では長崎港の商業的意義は二次的となり、横浜が飛び出してきている。；特に、神戸の開港以来それは減少している。

長崎の回りには、町の西に、２つの村がある、他の側には湾が。これらの内の一つの村が稲佐という、ここの住民達はロシア語を話す事で珍しい。この村に隣り合って、ロシア人用家屋がある。ロシア船が長崎にやって来た時、通常ここが泊地となる。他の、アコヌル（？　＊）に、幕府が蒸気船工場を有している。１８６９年からもっぱら日本人の指導者の下で創業している、その設立にはオランダ人技師が寄与したが。

公的情報と一緒に、ベニュコフは日本の歴史と文化に関する資料を集めることに努めた。日本では彼は結構大変であった、とにかく首都の役人が財政的援助を保証してくれなかったので。お金を全部使い切った将校は、自分の調査を縮小せざるを得なかった。旅行の結果としてベニュコフは本を出版した。序文に彼は書いていた：「特に寛大な配慮を読者にお願いする、日本の政府の構造と政府の外国人との関係についての章に関して、すなわち、必要ではなく、偶然の確信と視点。私は言い訳をする、これらの章に極僅か平行して最も富んだヨーロッパの文学の中で見いだすことが出来る、これは何か、多くの関係の中で、最初の体験。しかし、私はその様なやり方を避ける：私の書類鞄に、小さい行軍図書館に

充分なる印刷物がある、誰も公に反論できない飼料も、必要な場合に、然るべき引用で確認するために私の個々の立場を」。この作品は長年にわたり、日本の更なる研究のための基礎となった。

若干の期間、ベニュコフはポーランドで勤務した、ペテルブルグでロシア地理学会の書記でもあった。彼の研ぎ澄まされた知性、正直で非妥協な性格はどこでも平静ではなかった。ベニュコフは地位や名誉を求めなかった。その空しさを書いていたように、彼には明かであった、静かな人生のために、彼は平穏を全く求めなかった。実りある仕事のために、更に深い考察のために、この時代に見ること、知ることが出来た事の。１８７６年に退職し、ベニュコフはパリに去った。が、そこでは事実上移民状態にあった。彼が好きであった極東の辺地の運命を見守り続けた、特に、日本とロシアの関係の発展を。

帝との会見

１８７２年夏、歴史的な事件が起こった：ロシア皇帝の息子であるアレクセイ・アレクサンドロビッチ・ロマノフー海軍での軍務に着いていたーがフリゲート艦スベトラーナ号で世界一周航海を成して、長崎で日本の帝と会合した。大公の日本訪問は公式ではなかった、そこへの予定した訪問については新聞から知ることになった。長崎の知事は海軍少将フェドロフスキイから知ることとなった。彼はコルベット艦ビテヤジ号に乗って１８７２年６月２７日に長崎を訪れていた。ここで、侍従武官長ポシエットの艦隊の到着を待っていた。知事がフェドロフスキイを会食に招待した、長崎にロシア皇帝の息子が滞在する時に、息子のために家屋をどのように内装するかを聞き出すために。将校もまた訪問について公的な通知を得ていなかった、何の確かな情報の提案もしなかった。彼は個人的な見解を話した、もし大公が長崎に立ち寄り、帝の家に数日間滞在するするのは彼には良い、ヨーロッパ流に家を内装するのは良くない、逆に、日本流を強調しておいた方が良い、ロシア人の客には未知である。というのは、多分、彼はその方に興味があるので。

１８７２年７月７日、帝の艦隊の接近を知らせる２発の銃声が響いた．少し経て、砲艦テイボーカン（堤防艦？　＊）が現れた、その後ろに皇帝旗を掲げた装甲コルベット艦ジュイジョーカン（？　＊)、それらの後に更に５隻が進んでいた。帝の船がビテヤジ号に並ぶと、ロシア船の船長が命令した、２１発の礼砲を撃つようにと、帆船に命令が伝えられた、「ウラー（＝万歳　＊)」を三唱するようにと。フェドロフスキーが書いていた：「波止場で、群衆が帝を迎えた、大衆には、ひれ伏す事は禁じられ、低く頭を下げてお辞儀をするように命じられていた。しかしこれにもかかわらず、日本人の大半は地面にひれ伏した、頭を上げなかった。帝は乗馬して進んだ、馬は金糸の入った緑色の馬衣で覆われ、４人の馬丁が曳いていた。それらの後に、宮廷の役人が引き続いた、その様に、行列の両側から武士に守られた帝は、群衆の沈黙の中で、自分の家に到着した。

この時、長崎は極めて賑やかな様相をしていた：全ての家屋はいろいろな小旗や灯火で飾られた；明かであった、日本人は帝の訪問を極めて幸運な事と見なしていた（何人かの役人と僧侶は噂を熱心に広めた、これは本物の帝ではないと。本物の帝は誰も見ることは

出来ない、目がくらまないために)。この日の夕方、ビテヤジ号と日本の艦隊、ヨーロッパ風家屋の一部分と長崎の日本家屋の一部分がイルミネーションで飾られた。

長崎へ来ての２日目、帝は気分が悪くて自宅に留まった、ヨーロッパ人から知事が集めた様々な物品、日本の長崎産物、長崎湾に生息している生魚をよく見た。魚のために、庭に大きな木製の生け簀が造られた。この時、事件が起こった。帝を取り巻いていた人々の顔色が変わった、他の日本人達もヨーロッパ人達さえ。

帝はヨーロッパ人の薬屋へ薬のために遣わした、役人は薬を手に入れることを決めなかった、薬剤師がこの薬をサジ１５杯分を飲むより前に。この時、薬店に、スピチン海軍大尉がいた、彼は役人の要請により、この薬を飲んだ、そして、薬は毒を含んでいないと」。

その日の朝、ビテヤジ号を日本艦隊の司令官である中将ハバムラ（川村？　＊）が個人的に訪れた。食事後、彼は船を見たがった、彼は特に大砲に興味があった。視察の時、日本の司令官は自分の随員に命令を出した、ロシア水兵の語ったことを全て記録するようにと。

１８７２年１０月１５（２７）日、スベトラーナ号は長崎の泊地に碇を下ろした。ここに停泊していたビテヤジ号と砲艦モルジ号は、大公に対して１５発の祝砲を放った、直に、船に長崎の知事が乗船してきた、彼は日本にやって来たアレクセイ・アレクサンドロビッチを歓迎した。帝の意見に従い、宇和島藩主が高官を歓待し、東京までアレクセイ・アレクサンドロビッチの案内を委託された。

長崎で過ごした数日間に、町の視察、寺院の訪問、他の名所を訪れた。大公に海軍中将コンスタンチン・ニコラエビッチ・ポシエトがどこにでも同行した。彼以上の案内人を見つけるのは難しかった。２０年前に、ポシェットはプチャーチンから特命を受け、他の将校と一緒に、長崎にロシア人の初めての沿岸基地の場所の選択をし、稲佐を視察していた。

１８７２年１０月２５日（１１月５日)、スベトラーナ号とビテヤジ号は碇を揚げ、神戸への航路をとった。それらに、日本のコルベット艦ニシシンカン号が同行した。ロシア船の最高司令部は驚きを持って気づいた、日本の軍事技術が非常な成長を遂げていることに。海軍大佐ピルキンが報告書に書いていた：「夏に、函館と長崎を訪れ、私はこの５年間に日本で成された軍の巨大な進歩に非常に驚いた、かっては私が目にすることはなかった。今や、それを港で見られ、日本軍船の停泊地で出会える、ヨーロッパ式を装備した、ライフル式の大砲を装備し、最新の拳銃も。最新の手に持てる火器（針打ち銃と回転銃)。そのような装置の沿岸部隊は充分に装備され、イギリス兵を上まっているように見えた。イギリス部隊を例にして教練され、常に訓練をし続けていた。私は前の不揃いな日本人を覚えている。記憶が今やあやふやである。中将ポシェトはこれに気づいた。港では、アクノラ造船所が稼働していた、オランダ人技術者によって設計された。湾の上部にはドックがあった。この時、そのサービスを受けていたのはロシア船のガイダマック号、ソボリ号、エルマク号、その他。

２回目、大公は１８７３年４月２日長崎を訪れた。彼はビテヤジ号に乗って、ここへやって来た、コルベット艦バガチリ号を伴って。訪問に当たっての全ての取りなしは、３３歳の代理大使で４等文官エブゲニイ・カルロビッチ・ブーツォフの肩に掛かっていた。若いにもかかわらず、この人物は経験のある外交官であった。日本政府の依頼に従って、大公をサベル伯爵が出迎えた。４月中旬に、高位の客を乗せた船は碇を揚げ、沿海州の、ポ

シェット湾に向かった。

１８７０年から１８７４年の期間､ロシア船の乗組員には大きな損失は見られなかった。明らかに、これらの年は伝染病無しに済んだ。梅毒の犠牲者数は減少した。それにもかかわらず、ビテヤジ号では毎月水兵が亡くなった：ワシリイ・ドルゴポロフ－１８７２年８月１９日、フィリップ・ベルヒン－１８７２年９月３０日、パベル・コノノフ－１８７２年１０月１日、アブラム・パヌコフ－１８７２年１０月１５日。

バガチリ号、長崎を救う

水兵達は良く知っている、どんな火災も船に悲劇を招くことを。これ故、定期的に演習が行われている、火との戦いのための。水兵達が無意識にまでなって行動するように。ロシア人水兵の修練と勇気が、一度ならず、日本における火災の消化を助けた。この国では、大半の建物は木で造られている。が、消火の技術は極めて原始的であり、火災は小さい村でも灰まで焼き尽くす、況んや大きな町では。１８５８年に、アスコリド号の水兵達が日本人達にデモして見せた、出島における火災の消火において、足並みがそろい巧みな動作を。そして、１８７４年1月２５日、コルベット艦バガチリ号の乗組員達が海軍中佐シャフロフの指揮下で、更に示した、火災との戦いにおいて、ロシア人は尋常ではないことを。

多分、火災を止めることが出来なかった。家屋は密集しており、炎はあっという間に次々に新しい家屋を襲っていった。炎は狭い通りを飛び越えても行った。住民の小さい家は次々を炎に包まれていった。人々はもう炎と戦うことを止めてしまった、ただ避難した。命を守るために。炎に対する唯一の障壁は橋であった。バガチル号の船長は直ぐにこれを理解し、水兵達をその近くに配置した。人々は炎の強襲の前に狼狽えていた。しかし、水兵達は勇敢にその場所に留まった。もし彼らが撤退すると、町が灰燼に帰すことを理解して。人々は堪え忍んだ・・・　長崎知事は感謝の印として、バガチリ号に５００樽の酒を届けた。シャフロフは品を受け取ることを拒否した、乗組員の名の下でそれを市民に配るようにお願いした、火災で被災している。

この事件はバガチリ号の船員の珍事では終わらなかった。国際的紛争に参加することになった、日本政府の興味の保護の役割を持って。１８７４年、九州の肥前の佐賀地方で大暴動が起こった（佐賀の乱？　＊）。原因の一つは、日本が朝鮮と戦うことを拒否したことであった、民衆が起こした。地方の守備隊は制圧する力がなかった。雨散してしまった。１８７４年2月８日から９日の夜に、出港しようとしていたバガチリ号に、ドイツの領事がやって来た。彼は船長に伝えた、約５千の暴徒達は町から１７マイルの所にいると。領事はロシア人に助けを求めた、海岸に上陸部隊を上陸させて。シャフロフは同意した、船に長崎に居る外人を乗せることさえ提案した。この結論についてクロンシュタット通報が書いていた、「外国での我々の船の航行に移り、日本で起こった無秩序について、我々によって伝えた電報を再び我々は思い出す。その際、既に我々の読者に知られているように、ロシアの第８砲艦バガチリ号は長崎で電報局の守りを引き受けた。シベリア・日本電報局の北の電報局より大きな。」

ある朝、演習の口実で、バガチリ号の船長は岸に上陸部隊を上陸させた。ロシアの水兵達は隊列を組んで、ドイツ領事館まで進んだ。その後、船に戻って来た。数日経て、状況は危機的になった、長崎の知事はロシア水兵に４万ドルの町の財産を守ってくれるように要請した。危険な場合に、彼はそれをバガチリ号に隠すつもりであった。アメリカの砲艦の上海からの接近により、同じくアメリカと日本のコルベット艦の、長崎はほっと安堵の胸をなで下ろした。日本の守備隊は５００人に増員された：ここへ補足として大阪、東京、福岡から派兵が行われた。２月２５日に、バガチリ号の船長が通知を受けた時、蜂起が抑えられたという、船は出航した。

１８７３年秋に、クロンシュタットーキーループリムトーブエノスアイレスーマゼラン海峡ーバリパライソーホノルルー長崎－上海の経路で、世界一周航海を成し遂げ、長崎に再びコルベット艦アスコリド号が立ち寄った、海軍大尉パベル・ペトロビッチ・チルトフの指揮下で。今回は、アスコリド号の将校の中に、その後有名になった作家であるアレクサンドル・ヤコブレビッチ・マクシモフがいた、極東について興味を引く観察の後裔を残した。航海の事実と個人的な印象が彼の最初の本の基礎となった。それは最初は首都の出版物の頁の中で日の目を見たが、その後、独立本となった。非の打ち所のない勤務により、マクシモフは多数の勲章を受けた、その中には外国のも。が、将校にとっての最高の勲章は彼の文学作品の公認であった。ロシアの主要な新聞「サンクトペテルブルグ通報」、「声」、その他は極東に関する彼の評論や話を喜んで掲載した：海軍力の状況について、太平洋と原住民の生活と極東の自然について。

１８７０年代半ばに、太平洋部隊はクロンシュタットに戻って来た、長崎にクリッパー艦クレイセル号を残して。その仲間となってたのはここに立ち寄ったシベリア艦隊の船であった。このようにして、１８７６年４月１３日、ウラジオストクからスクーナー艦ボストーク号がやって来た。その艦長スタリックは、命令を実行し、船をドックに入れた、船員達を、稲佐の海岸に降ろした。

外国人居留地

外国との交易のために長崎の公式の開港までに、この港にやって来た外国の商人達は日本の南西部の封建領主との接触をとりたがった。外国人の移住地は、オランダ人の出島以外には当時はなかったので、彼らは日本家屋や寺院の中に部屋を借りた。日本の鎖国政策は１８５９年に停止され、日本は他の国々との交易を開始した。長崎に、アメリカ、イギリス、ロシア、その他の国の商人達が合流した。最初は、彼らの活動は大浦地区に集中していた、そこには沢山の交易会社、船具雑貨商代理店、セリ用家屋、外国人管理のいろいろな企業が出現した。

他の国より早く、長崎にイギリスが領事館を開設した。最初の外交官となったのはペンベルトン・ハドソンであった、地域の行政機関との交渉のために、１８５９年６月１３日にやって来た。彼は妙行寺に部屋を借りた。が、既にこの年の８月には、彼に替わってジョージ・エス・モリソンが、東山手地区にイギリス領事館の常置の建物を建築し始めてい

た。第１２番地。中国においての外交の仕事の後に長崎にやって来たジョージ・モリソンは直ぐに日本の幕府との交渉に取りかかった、交易の相互関係と、日本における生活のためにイギリス人への相応する条件の確定についての。

オランダ、ポルトガル、スペイン、イタリア、スエーデン、デンマーク、ブラジル、ハワイ王国－日本との交易をしたがっている－は、そこへ外交団を派遣していなかった。この役割をイギリス外交団に委ねていた、或いは、長崎に住んでいる大企業家達に。

最初のフランス領事に、企業家ケネス・アール・マッケンジイが登場した、会社「ジョージ、マセソン＆カンパニイ」の代表として長崎にやって来た。彼は同じく、会社「ペニンシュラーとオリエンタル・スチーム・ナビゲーション・カンパニイ」の地区エージェントして勤めてもいた、大浦で、第１５番家屋を借用して。最初の消防隊を１８６０年に外国人居留地に組織した名誉はマッケンジイに属している。１８６１年６月に長崎を去り、会社「ジョージ、マセソン＆カンパニイ」の長崎支社の権限を若いスコットランド人のトーマス・ビー・グローバーに与えた。１８５９年秋から支社の従業員として働いていた。グローバーは自分の個人会社を創設し、数年で身代を築き、日本の南西の藩主に蒸気船、武器、その他の商品を売った。

イギリス人のウイリアム・ジャー・アルト（１８４０年～１９０５年）は成功した商人であった。長崎と横浜が外国人に開放された時、彼は中国の税関に勤めていた。１８５９年秋に、１９歳のアルトは長崎にやって来て、２年ほど会社「アルト＆会社」を所有していた、最も成功した外国人の会社の内の一つであった、日本で営業している。彼の商業活動は多岐にわたっていた。が、基本的収入は船の輸入と軍への供給であった、同じくお茶の輸出、パラフィンと樟脳油。アルトの最も展望のある接触の一つは岩崎弥太郎との接触であった。土佐藩の若い実業家の。彼はアルトの援助で将来に会社「三菱」を興すことになった。アルトの倉庫や支社は昼夜にわたって交替で１００人の日本人達が働いていた、大浦に位置していた。

アルト、マッケンジイ、グロバーの会社ははかなかった時代に、グローバーの会社に勤めていたフレデリック・リンガーによって１８６８年に創立された会社「フォルム・リンガー＆カンパニイ」は第２次世界戦争まで仕事を続けた。大浦の第７番地に支社を構えて、企業家は輸出業を行った、お茶、石炭、海産物、タバコ、植物蝋の。その後、彼は様々な職種に事業を拡大した：銀行業、保険、海運業。日本、中国、朝鮮の港に支社を開設して。同じく、会社は製粉所、蒸気洗濯機、発電所を所有し、皮革加工業、港内積み卸業、トロール漁、捕鯨業に従事した。歴史家は、グロバー以上に彼に余り注目を向けなかったが、リンガーは外国人居留地のだけではなく長崎の経済的発展に大幅に寄与した、日本人の企業家達の新世代の教育にも。彼らは例えば、「ホルム、リンガー＆カンパニイ」でヨーロッパ式のビジネスを勉強した。

１８６１年４月２１日、長崎に借地を求めている全ての外国人達が妙行寺に集まった、そこにイギリス領事が一時的に席を取った。モリソン領事を集会の議長に選出した。参加者達の主課題は、外国人慰留地を管理することが出来る「市民会議」を選出することであった。会議に、イギリス人のアルトとメイエル、アメリカ人のフィールドが入った。３週間経て、報告した、それにはアイデアが書かれていた、生活の改善とビジネスの拡大についての、そして、日本政府との交渉を要求することが。後になり、市民会議は消滅した、

がこの会議は外国人慰留地の確定において重要な役割を成した、色々な国の人々を団結させ、外国人の集落を自治社会とすることにおいて。

大浦以外に、長崎の外国人居留地は更に５つの地区がある：東山手、出島、梅が崎、大浦・下り松、南山手。東山手が最も豪華な場所と見なされている。この地区は大浦に引き続いて直ぐに始まった、山の下の平らの区画にある、日本の住居と外国人村が一体となっていた。東山手は「使節団の山」とも呼ばれていた、とにかく、そこに使節団が住み、キリスト教の学習施設を配置していたので。同じように、後になって、領事の施設が幾つかあったので「領事の山」と、山の斜面に、或いは「アメリカ人の山」と、沢山のアメリカ人が居たので、そこに住みついて。

梅が崎地区は出島と大浦の間にあった。すなわち、ここにニコライ・レザノフの最初の住居があった。この地区は１８６０年に再構築された、海岸を整備した後に、１８６３年に公的に外国人慰留地となった。外国人はしばしばここを短縮して呼んでいた：メガサキと。

南山手は東山手と異なって、外国人慰留地の「南斜面」にあった。西洋の建築様式の綺麗な家屋が建築された。そこは３５区画に分割された、その価格はそれほど高価ではなかった、後になって、ここは「イギリス人の山」と呼ばれるようになった、ここに住んだのがイギリス人であったので。すなわち、この場所が後になってロシア人に好まれた。

外国人慰留地は長崎の日本人住民と政治的に、地理的に、精神的に切り離されていた故に、慰留地は自給自足を高度にまかなければならなかった。慰留地のあった全期間、特に１９世紀から２０世紀にかけてに置いて、ヨーロッパ人社会、アメリカ人社会、中国人社会の社会的断面が社会全層を現した：外交官や医者から売り子や床屋まで。日本において、外国人の大半は慣れた生活様式を選んだ、その多くの成分である、家具、衣服、食事やその他はこの国では手に入らなかった、必要な商品を新しい場所で製作することに制限があった。このように、波の平地区の岸辺に外国人慰留地の出現後、直に、屠殺場が現れた。それはヨーロッパ人に肉の供給を定期的に保証するようになった。当時、日本人は牛乳を飲まなかったし、それを購入する場所は何処にもなかった。故に、その内に外国人は牛乳の嗜好を発展させるようになった。乳製品を供給する者のの１人にロシア人企業家ナガルコフがなった。彼の店は大浦川の南岸の第３６番地の家にあった。

この地区には、明治期の初めには、大規模なパン製造設備が置かれた。フランス人企業家チャールス・トマスが従事していた。パン工場以外に、彼は第４２番地に商店を持っていた。１８７７年に彼が亡くなった後、商売はフランス出身のカナダ人ジーン・クーダーに引き継がれた。彼はその後、パン工場を第２２番地のフランス式レストランに移した。そこは長きにわたってヨーロッパ人に好まれた。

ヨーロッパ出身者達は清涼飲料水を売り出すようになった：リモナード、ショウガ入りビール、ソーダ水。主たるメーカーの一つが会社「メデカル・ハール」であった。その名称が語っていた、メーカーは薬品や医療用商品の供給のために造られたことを。１８６０年代に、イギリス人ジェームス・ガイによって設立され、メーカーは何回か所有者を変えていた。が、長年にわたり外国人居留地で信用と信頼を得ていた。会社は最初は大村の第１２番地に、その後第１１番地に。最後の所有者はウイリアム・エブンス、１９０４年９月に、会社を売却した、清涼飲料工場と一緒に、ウオーカーなる者に。その年の１２月に

は彼は会社「バンザイ・アエラテド・ウオーター・ファクトリ」を開いた。

最初は、裕福な外国人は中国人の使用人を雇っていたが、直に使用人は日本人に替わっていった、外国語が自由に使用でき、西の料理法をマスターしている。その内の１人が草野丈吉（１８４０年－１８８７年）である。彼は初めての日本レストラン（イラバヤシ亭）を開いた、そこで洋式食事を販売した、自分の家と並んで山の斜面に、神社イラバヤシ・若宮の神社の下に。レストランは極めて小さく、６席しかなかった。それで、訪問者は最初は少なかった。イラバヤシ亭で食事を希望する者は、前もって予約をしなければならなかった、所有者がその下準備をするために。しかし、直に、レストランの人気が大きくなっていった。１８６５年に、草野は常連の支持を受けて、建物を拡張し、名称も「自由亭」に変更した。が、１８７７年に、長崎に新しいレストランを開いた、洋式の。今回は町の中心に。この時期、彼は既に大阪と京都に同じようなレストランを所有していた。

日本人を洋食に親しませる役割を果たした多くの日本人のレストランは、長崎から始まった。１８６５年に、松尾清部は北京と上海に特別に向かった、フランス式調理を研究するために。長崎に戻り、ここに彼は初めてのフランス式レストランを開いた。日本人に洋式食事を提供した：洋食は栄養があり、健康に良いと見なされた。実際において、日本人は長い間食事に牛肉を用いることに抵抗した。が、１８７２年初めには譲歩した。当時、出版物が広報した、天皇と皇后の新年の食卓に、牛肉があったと。

長崎にやって来た初年には、あれやこれやで外国人は幕府の許可を受けなければならなかった。どこかにピクニックをするにも、乗馬して周囲を散歩するにも、温泉に行くにも、小浜や雲仙の。驚くに値しない、外国人が可能性を探したのは、外国人慰留地で休息や娯楽のために。その内の一つが、劇や音楽のための建物の建設であった。その建物は「オリンピック劇場」と称された。その出現とともに、愛好家グループ－長崎アマチュア劇団－が生まれた、長崎の外国人住民からなる。

１８７０年代半ばには、地方自治体ソビエトが大浦の第３１番地に、集会と劇のための新しい建物を造った。劇場完成の１年後、少なくない演出者が舞台を飾った：バイオリニストであるキチ・ボルケル、ボルケルの娘、他の地域の音楽家、移動手品師マダム・コラとアンニイ・メイ・エボト、アメリカの巡洋艦ノービイ・オルレーン号の乗組員の上演、イタリアの船マルコポーロ号とロシアの弦楽カルテットのオーケストラ演奏。そこでダンスパーテーも催された、軍艦の港への立ち寄りを口実に、慈善コンサートも。このように、１９０５年２月に、アメリカの第９歩兵部隊のオーケストラが出演した。露日戦争の犠牲者の日本基金に募金を渡した。ちょうど１年後、そこで、慈善パーテーが行われ、それからのお金は日本の東北の飢饉者のために予定された。公共会館には世界中から定期刊行物を集めているホールなどがあった。１９２３年１２月、公共会館は財政難に陥った、監督官は建物と場所の売却を決めた。これは公共会館の閉鎖だけではなく,外国人慰留地の元住人の離反も招いた、第１次世界戦争から始まっていた。地区の新しい主人「長崎教会」は、１９２５年１０月、古い建物の場所に教会を建てた、それは今でも立ち続けている。

１８５９年に港が開かれた後に,長崎にやって来た外国人にとって、大問題はホテルの数が不十分であったことである。大浦に土地を開墾して造った建物の中に、洋式の初めてのホテルがあった。外国人のホテルビジネスの創始者はカロリン・ビクスと見なせる。彼は１８６０年にサンフランシスコから長崎にやって来た。２年後に、小さなホテルを開設

した、大浦の第２５番地に「商業館」という名称で。１８６５年には、長崎の外国人慰留地に３軒のホテルがあった。ビクスの後、直ぐに、ブロデリックなる者が「東方ホテル」を開いた、イギリス人のメリイ・グリンがホテル「ベレビュー・ホテル」を建てた。後になり、彼女は横浜と神戸にホテルを開いた。

明治時代の半ばから、特に、１８９４年から１８９５年の中日戦争後に、長崎には客が殺到した。これは、第一に、太平洋航路の開設に結びついていた、長崎をホノルル、上海、バンクーバー、サンフランシスコ、北アメリカの他の港湾と結びつけている。町は国際商業の中心として発展した、同じく、自然の美しさと雲仙の温泉に近接している御陰で、旅行者の休息のために人気のある場所として。長崎を訪れた裕福な外国人達はほぼ皆は快適なホテルを希望した。結果として、１９世紀末には大浦に豪華な洋風のホテルが幾つか出現し、長崎の評判を大いに高めた。極東において生活し、時を過ごせる最も素晴らしい所の一つとして。

国際港としての長崎の発展の「黄金時代」に建築されたホテルの中で、「ホテル長崎」は素晴らしいものと見なされた、石とレンガ製の３階建て、１８９８年に下り松の海岸地区に造られた。リンゲルが主催した投資家グループの意向で。個人的な電車駅を持ち、巨大な冷蔵庫を、床屋を、高級なビール倉庫を、フランス人のコックを、高価なヨーロッパ風家具を、各部屋に電話を、湾の素晴らしい眺めを持って、ホテルは極東で最も豪華なホテルであるとの称号をものにした。前例のない快適さにもかかわらず、ホテルの費用は全く手頃であった：３ルーブル半で屋根と机を提供した。

ホテル長崎以外に、ロシア人はしばしば、「ベレビュー・ホテル」や、埠頭から数分の歩行先にあった「エブリク」に泊まった。目撃者が書いていた、我々のロシア人のホテルは主人が陽気な年老いたイタリア人であり、少しロシア語を知っていた。個人的に話すと、我々海軍の将校達の住居は稲佐の村と見なしている、海岸の近くにある。その村では老人も子供も極僅かだがロシア語を知っており、ロシア人の性格に馴染んでいた。しかし、長崎では、自分の拠点無しにはうろつき回れなかった。その様なわけで,大分昔から、ロシア人のためのホテルがエブリクであった」。

全てのその他以外に、このホテルは洋食で有名であった。「エブリクでは、食事に全精力を傾けていた。それ故、イタリア人に腹一杯食わせていた！　私はイギリス式飢餓の後に香りよりフランス料理をどれだけ食べ過ぎたか。ロシアの家では我々はそれに大いに馴染んでいた、自分の国民食以上に。なんともうまいスープを出した。エンドウの鞘のある、蕪のある、人参のある、生の野菜のある。うまい！　素晴らしい魚があった、歓喜だ、ただ残念なのはその魚の名前を忘れた。仔牛のカツレツに、コックは自分の仲間もビックリするような手並みを示した。焼いた色つきのキャベツは私の口の中であっという間に溶けてしまった。その二口目を私は喜んで口に入れた、油っこいハトが又誘惑的でなかったならば（？　＊）。パイナップル・ゼリーは同じく悪くはない。；が、私はバナナを好んだ、ゼリーさえバナナ製であったろう、もしそれが出来たならば。チーズ、通常のロクホール（青カビチーズ　＊）さえ、エブリクでは非常に美味しかった。そして、デザート！　シンガポールからやって来た、熟れた生のマブグスタンに対して何を言うことが出来ようか？　普通のコーヒーの代わりに、シベリア人の私が思い出すには、煎じたであろう素晴らしい黒いお茶を出す。」

多くのロシア人将校達は、長崎クラブで休息することを好んだ。クラブは、長崎の開港後に２年をかけて何人かのイギリス人が組織した。クラブの例にならって、外国人のために、カルカッタ、上海、他のイギリスの植民地で働いている。１８６２年初めに、クラブ会員の権利が確立され、大浦の第３１番地に常設の建物が建築された。その場所には、以前にはイギリス語の新聞「ナガサキ　シッピング　リスト　アンド　アドバータイザー」の編集局があった。クラブの最初の会員で補佐人になったのは、イギリスの商人アリトとライトでった。１８８１年、クラブはその地区の第１０番地の綺麗な２階建ての建物に移った、それを出版者チャールズ・サットンが指導した。クラブは典型的なイギリス的組織であったが、全ての外国人住民と長崎の客人達はこの場所を休息のため、友好の出会いのために利用した。ここへ入れる例外の条件は、外国の市民権と一定の財政的状態であった。クラブには読書室のある図書館、バー、ビリヤード室があった。ここではしばしば催された、ダンスパーテーやファッションパーテーが。特に、何かの祝日や有名人の出立や到来時に。その後、クラブは長崎国際クラブの模範となった、１８９９年に開設された、その会員には日本人もなれた。

長崎で,ある時、フリーメーソンの支部が存在した、１８８５年１０月５日に開設された。支部は大浦にも開設された、最初は第５０番地の家屋に、その後、第４７番地に。支部の設置者はイギリス人であった。が、時と共に、様々な国籍と信仰の代表者達が入った。彼らは定期的にパーテーや様々な催し物を企画した。が、時間とともに、支部の人気は低下していった。結局、会員が居なくなってしまったので支部を解散した。

西洋人の中で,長崎のロシア人はボーリングに親しんだ、港の開港後に直ぐに広まったものである。１８６１年6月２２日、新聞「ナガサキ　シッピング　リスト　アンド　アドバータイザー」が広馬場通りにボーリングの国際サロンの開設について広報した、日本で最初の施設である。その後、外国人慰留地の沢山のホテルにボーリング場が開設された。この遊びは流行し、後になり、長崎の南山手地区（第１０Ａ番地）にボーリングクラブが出現した。そして長年にわたり、年齢や国籍に関係なく多くの市民が親しむようになった。その様に、スポーツ的遊びが親しまれるようになった：ビリヤード、バトミントン、クロケット、その他。最も流行ったスポーツはテニス。ある時には、外国人企業家の妻達が組織した女性テニスクラブもあった。トーマス・グラバー、ナタン・メス、他のヨーロッパ人達は自宅の周りにテニスコートさえ造った。コートを遊びのためだけではなく、音楽祭、結婚式、青空の下でのレセプション、他の行事等にも使った。

ロシア人船乗り達はボート競技にも参加した、イギリス人の伝統的スポーツである。彼らは外国人居留地にその楽しみを広めた。競技は長崎湾で毎年春に行われた、湾の温和しい水面は競技者達には理想的な条件であった。一日続いたレガッタ競技には、長崎の外国人居住者が参加した、船で来ている船乗り達も。勝利者にはクラブから賞金が出された。長崎のスポーツ委員会は湾岸に特別の家屋を造った。広いベランダからは、観客達が競技を見ることが出来た。競技のプログラムは独特であった。例えば、１８７１年4月２６日、新聞「長崎エクスプレス」が書いていた、参加者達は排水量７トン以上のヨット、搭載ボート、カヌーで競技を行った。カヌーでの競技では、過去の勝利者である３２歳のトーマス・グラバーは２着であった、１０ドルの賞金は他の者がいただいた。

長崎で生活する初年には、外国人には医療を受ける２つの手段があった。彼らは国立の

病院に行くかーそこでオランダ人医者の指導のもとで、日本人の生徒が働いていた、それほど知識を持っていない、が医療知識の獲得に情熱を持っているー、或いは、船医の居る船が港に立ち寄るのを待つことになった。船の医者は、事実、熟練した医師であった、外科手術をする能力があった、が、これらの船医はまず第一に自分の乗組員の健康を計ることであった。居留地の拡大にあわせて、アメリカと他の国々の海軍は、ロシアを例にして、病院を造ることになった、船乗り達が入院することが出来る、強力な治療が期待される。仕事で長崎に留まることになった外国人の医者達は、外国人だけではなく地域の住民にも援助を示した。日本の健康増進発展に寄与をした。イギリス人の医者チャールズ・アーノルドは１８８６年に長崎にやって来て、大浦地区に個人医院を開いた。彼も国立の日本の病院で講義を行い、大いなる権威を得た、外国人居留地と同じく、日本の住民から。出身がスエーデンであり、アフリカで生活したことのあるエドワード・アムート博士は、国立病院の医院長として１８８９年に日本にやって来た、同じように個人的に、東山手地区の第１１番地の家屋で外国人の患者を受け入れた。日本人と結婚したアメリカ人の医師マリイ・スガヌマは１８９３年に、メソジスト協会の財政の援助を基にして病院を開設した。そこで外国人も日本人も治療した。

キリスト教の迫害にもかかわらず、徳川が将軍となった１７世紀の初めには、全てが継続した、治外法権の御陰で、長崎に住んでいる外国人を誰も禁止することは出来なかった、自分の教会を造り、そこで勤行をすることは。当時、違法と見なされた、自分たちの宗教に日本人を勧誘するどんな試みも、地域の住民達の宗教観を卑下することも。長崎の外国人居留地に１８６５年２月に出現した、南山手の第１番地に建設した大浦大聖堂が、初めてのカトリック教会であった。準ゴチック様式の建物はフランス人の聖職者の監視の下で日本人の大工達が造った。事実が知られている、聖堂が開かれてから数週間後、３月１７日に、浦上村のキリスト教徒達がバーナード・ペチジャン神父の所にやって来て、伝えた、信仰を分かち合うことを。この出来事は「隠れキリシタン」の存在を裏付けている、彼らの祖先は１７世紀初めに、遠い島での迫害の危険を見つけていた、２世紀にわたって信仰を保った、教会から完全に絶縁したにもかかわらずに。ペチジャンと他のフランス人司祭達は日本の法を犯して秘密裏に大浦や他の場所を訪れた、日本人のキリスト教徒が隠れていた。しかし、幕府は隠れキリシタンの存在に気がつき、１８６０年代にその対策を講じた。

外国人居留地での生活に大きな役割を果たしたのは、カトリック教の同胞愛であった。日本へ来るようにとの宣教師ペチジャンの呼びかけに応じたのは、マチリダ姉妹と４人の女性達であった、イエス赤子の姉妹結社の、１８７２年６月に自分の使命を日本でやることにした。１８７７年７月、長崎に最初のフランス人シスターのグループがやって来た。１８８０年に、彼女らは南山手に聖心女学校を設立した。それは直に長崎の名所の一つとなった。１８８６年に、学校は大浦に移転した、１８９９年まで残った、以前の地区に再び戻らなかった間、第１６番地の素晴らしい建物に。学校には、外国人の女子と同じように日本人家族の娘達も通った。

１８９２年、フランスのマリアニスト宗教団が長崎の外国人居留地に男子のためのカトリック学校（開成学校）を開設した。そのために,東山手の山の斜面の土地を購入した。１８９８年、レンガ造りの４階の建物で授業が始まった。学校の窓からは湾の素晴らしい

景色が見られた。ここで全ての子供達を受け入れた、国籍や宗教に関係なく。

プロテスタントも自分等の教会と学校を造った。中国に領事館を持っている、アメリカのエピスコパル教会は、１８５９年の公式の開港後直ぐに,長崎に２人の宗教使節を派遣した。その内の１人であるウイリアムは、日本で初めてのプロテスタント教会を開設した、東山手の第１１番地の家屋に、１８６２年１０月に。キリスト教迫害の終了後の、１８７３年に、ヘンリイ・ストウトーアメリカ変革教会の宣教師、国立日本人学校の一つで英語を教えていたーは日本人のために自宅で聖書研究の授業を行った、東山の手で、第１４番地で。直に、妻エリザベータと一緒に、若い日本人のための学校を開設した、男性も女性も。トザン学院と梅が崎女学校。寡婦でイギリス人教会の牧師であるエリザ・グッダルは東山手、第３番地の自宅で英語と編み物を女子に教えた、長崎女子学校の創立を目指して。象徴的である、第３番地が、アメリカ人の布教と啓蒙のパイオニアであるガイド・ベルベックに属したのは。他の有名となったアメリカ人の宣教師としてはジョン・デビソンがいた、メソジスト教会の会員、１８７３年に長崎にやって来た。１８７６年に,彼は助けた出島にプロテスタント教会の組織化を、長崎にメソジスト教会学校の開設する試みに着手した。その結果、１８７９年と１８８１年に、東山手の斜面に、女子のために学校（カワッスイ女学校）と男子のための学校（チンゼイ学校）が出現した、日本人の文明開化に目覚ましい寄与をした。１８９７年、この斜面の１７箇所の内、「長崎の旅行案内」を信用すれば、１３カ所を宗教学校と宣教師、教師の家で１３カ所を占めた。驚くに当たらない、東山手が「宣教師の山」と呼ばれるようになったことは。

ロシア人の商人領事、領事館の開設、ロシア人実業家

ロシア船が定期的に長崎にやって来て、ロシアの極東の商人達は確りとした足場を確保できたにもかかわらず、ここには、長い間、ロシア帝国の公的代表が居なかった。専門でないものが初めての外交官となった、商人アレクサンドル・フリドリゴビッチ・フィリッペウスであった。未知の国についての中学生の若い時のロマンチックな夢が、彼をペテルブルグから帝国の遠方の国境へと運んだ。イルクーツクで、彼は１４等官の職を得た、東シベリア管理局で。直に,彼を裁判所の代表に任命した、が、彼はそこに長居しなかった、言語の素晴らしい知識が彼を通訳とした、露米会社の。そこで若い官僚は上司の目に留まった、ペテロパブロフスク港管理部の図書館の仕事に移った。フィリッペウスは新しい所に少し勤めた、その理由について職歴のメモで語っている：「フィリッペウスは性格と習慣の軽薄さで自分の上司の働きについて、自由に考えを述べることになれていた、管理責任者に着いてまでも・・・」

結局の所、仕事を投げ出し、フィリッペウスは商人となった。最初、彼の活動の中心は長崎であった。そこでは多くの国々の商業路が交差していた。ここで、単に商品を購入し、その後、それらを極東の海に沿って配送した。長崎ではロシア人達はばらばらであり、船の船長達が装備を安く仕入れるのはどこか知らないでいることを見て、フィリッペウスは結論を出した、ここでならば彼の商業センスが要求されると。１８６８年１１月、長崎で

ロシア人の商人領事となった。南山手地区の第１７番地の家屋に、ロシアの旗がはためくようになった。ロシア政府は大変に感謝した、企業家に、交易における仲介に。そしてかれに聖スタニスラフ２等勲章を授与した（１８６９年)。フィリッペウス、ついでながら、は更に活発に活動した、ロ日貿易における情報を集め,分析することを始めた。

１８６９年初めに、仕事が要求した、フィリッペウスが長崎を去ることに。これ故。３月に、ロシア領事の職責を降りた。一時的に、会社「ウオルス＆カンパニイ」に勤めていたレームブルゲンがそれらをすることになった。同時に、領事館の住所はこの会社の住所となった、東山の手の第１２番地の家屋に。直に、政府の要請により、フィリッペウスは長崎に戻ってきた、が、それほど長くはなかった：領事の地位に,彼は１８７０年１０月から１８７１年までいた。

露米会社の商業活動の経験を思い出し、フィリッペウスは１８７０年に蒸気船カムチャッカ号を購入した、排水量１０００トンの。オホーツク沿岸での供給を開始した。最初は、アメリカ、ドイツ、中国、日本の商品をウラジオストクに運んだ。船に荷物を積み、乗客を乗せて、そこから彼方此方の港へ輸送した。北の海で航行が出来ない冬には、フィリッペウスの蒸気船はウラジオストクと日本の間の航路に従事した。当時、元司書の彼を呼んでいた、「北東アジアにおける我が海域のロシアの商業航路の創設者」と。１８８５年、実業家は小さい冊子「７等文官フィリッペウスのメモ、カムチャッカとオホーツク海の湾についての」に自分の経験を書いた。

フィリッペウスの名前は,当時は極東では良く知られていた。１８９４年１０月３０日、新聞「ウラジオストク」が評論「オホーツク海の湾について」を掲載した：「ある面では、フィリッペウスは偉人であり、崇拝の対象であり、僻地と住民の恩人である；他面では、彼は全てに打ち勝つ力の権化で、独占の造者で、我が儘な支配者ある！」　企業家については多くの伝説が語られていた、その多くは「昔話のような富の光の輪で彼の顔は囲われていた。」　事実が語っている、フィリッペウスは慈善事業に無縁ではなかった。１８８５年、クリミア戦争時に、イギリス・フランス艦隊からペトロパブロフスク・カムチャッカを防衛する際に犠牲となった水兵達の記念として、彼はこの町の彼らの墓地に寺院を建立した。アヤンに、この事業家はツングース人とヤクート人のために学校を維持し、そこへ無料で本を寄付し、優秀な子供をペテルブルグで勉強するように自前で派遣した、そこで通常冬の時期を過ごした。彼がそこへ向かった時には、向こう見ずの遊び人であった＊＊＊＊＊、すっかり元気づいた：フィリッペウスは＊＊＊＊＊＊＊＊生きた。

商人は亡くなった、１８８９年に自分の蒸気船の船室で、アヤンまで数マイルの所で。彼を知っている者皆が驚いたことには、彼は無一文で亡くなっていた、蒸気船に現金さえ残していなかった。共同出資で友人達は彼の記念墓碑を建てた、それには次のような碑文を刻んだ：

「本当に君のことは忘れない、
　国民の利益と幸福のために生きた！
　君は少なくない孤児達を幸福にした、
　君には最後の最後まで感謝する！」

フィリッペウスの後、長崎には数年間領事はいなかった。ロシア政府の要請により、１８７２年から１８７４年に、ロシアの仕事を、ドイツの領事が行った、特にロシアの水兵

達も手伝った。ロシア艦隊は１８７４年に再び長崎に現れた、第１領事となったのは若い有能な外交官であるアレクサンドル・エピクテトビッチ・オラロフスキイであった。領事館として,彼は南山手の第５番地の家を探し出した、フィリッペウスが住んでいた場所から余り離れていない、町の東部に、山の所に、海岸に下れるテラスのある。

ロシア外交官の公邸について、同時代人が書いていた：「ロシア領事館は山麓に位置していた、町の新しい区画に、大村の名称を持った、海岸に沿って主に建てられた家屋、ヨーロッパの大商人達の、若干の地元の日本人の混じっているありふれた植民地風に。ごてごてとして手のこんだ特徴で、別荘の建物を一般的に思わせる、かわいらしさと優美さを狙った。大村に全てのヨーロッパの店、中国商人の倉庫、支社、仲買業、領事館が配置された、それらは一見して識別できた、各国の旗に従って、高い旗竿に掲げられた。電報局と郵便局、イギリス風にならって西洋風に造られた、少し高く、丘の上に、庭で囲われた、緑の中から屋根とベランダが見える、様々な洋風の家がある。

ベレビュー・ホテルから我々の領事館へ行くには、狭い通りを上に登り上がる、中腹まで。庇に日本文字が描かれているカトリック宣教師寺院までたどり着き、右に曲がり、古くて大きい日陰のある庭と生け垣の傍を、この庭を囲っている、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。ここで君はもう郊外であることを感じよう、山の下に。道は君を高い基礎を持つ１階建てに導く、入口の上にロシアの国章のある家に。そこに、ロシア領事館の事務局がある、良く知られている「オフィス」の名で。建物はロシア風に建てられた、木材から切り出した彫り物と棟木のある、屋根の棟に沿って、貫通するポーチの前面に、その広場を通り抜けて、君は直接領事館の庭に行ける。オフィスには、右に、小さい中庭、そこには高い竹製の竿に３枚の滑稽なマカキが揺れている、それらの内の一つが、滑稽にも、通行人に敬意を表する。ウイスキーに手を添えて、大きな音で舌打ちをして。

それなりに小さかった我々の領事館の中庭がテラスの所に設けられている、高い壁を要塞の武器のように、セメント製の荒々しい岩から出来ている。道は、時折階段の列が中断し、壁と領事が住んでいる主屋敷の間をジグザグに進んでいる。主屋敷は１階建ての建物で、充分に広々と快適に造られている、外部のガラスを填めたガレリーから、広く見事な景色が開けている、停泊地だけではなく、様々な船が散在している、対岸の山に、アクナリ（？　＊）と稲佐の村のある、が、金比羅山に、仏教寺院のある、町の一部に、この後者の山の下に匿われている、山は周りの全てを見下ろしている。下に、海岸では、盛んな産業活動の騒音が鳴り響いている。そこでは熱気が空中に立ち上っている、真っ赤な石からの熱気で赤熱している。道路から＊＊＊＊＊＊＊ゴミが漂っている。が、ここ高台では生き生きとし綺麗なかぐわしい空気と様々な日陰の多い緑樹の山。大きな白バラの大株が自身の枝でこの家の窓に直接よじ登っている、熟した橙やミカンと一緒に。ベニオウギヤシ、サゴヤシ、月桂樹とスモモ、いろいろな針葉樹、ツツジ、木蓮、椿、杉、楓、楠（全てを列挙しきれない）は、この庭の綺麗さと豪華さを形成している。ここにはいつも充分な日陰がある、若干の涼しさも。ここは全く祖国のよう、神は知っている。何も渡さなかった、そのような詩的な幸福な片端に住み、そのような美を愛でるために！・・・

コスチレフ（オラロフスキイの後釜で、長崎でロシア領事の地位に就いたー著者）は我々を最大限もてなしてくれた、さんざん奔走してくれた、接待についていろいろと指示をした、我々が決まりが悪くなるような、我々の到来が彼を不安にしている原因となってい

ることで。
　彼が話した、我々にタバコ、様々な冷たい飲料水をご馳走しながら。
　－皆さん、私のように何年間は生活しなければならない、他人として、祖国から遠く離れて、精神的に一人として、感覚を理解するために、どんなことでも帯剣して、祖国からの真の人間を突然に見て！
　我々は質問した：
　－ここはそんなに悪いのか？　見てみよ、どんな魅力か！
　－神はそれとともに、この魅力とともに！　ここは悪くはない、神を怒らせるが・・・
　全てをそこへ引っ張る。時折､気が塞ぐ・・・ホラ！」（？　＊）
　とにかく、生活する,親しい人も無し、母国語も無し、心からの交流もなく。新聞からだけ祖国について知り得る、が、発行から２ヶ月後にここに届くので。生活する、よく言われているように、常に用心して。というのは、いろいろな西洋人がいる、親愛なる同僚のふりもしている。非合法の何か悪巧みを君にいつも教える容易をしている。君は１人ではない、君は仕事をしている、そのために君はここへ派遣された；実際において、ここでは全てが非常に大変である。」（？　＊）
　ワシリイ・ヤコブレビッチ・コスチレフ－１８８１年に３３歳で、長崎のロシア領事に任命されたーはここに長居しなかった。ルミンが彼に交替した。彼の後に、ロシア領事の職務を短い期間グリゴリイ・アレクサンドロビッチ・デボラン（１８９０年から１８９２年）とミハイル・ミハイロビッチ・ウスチノフ、１８９７年に函館から長崎に移動したが遂行した。ロシア人の大事な成員の仕事の一つは、他の外国の領事館と同じように、長崎に住んでいる外国人の利益の守護であった。特にこれは治外法権、日本の法律に対する特権の保全に触れていた。あり得る、その様な特権が外国人の手にあった。が、それは全く示さなかった、犯罪を自由に行っても良いことを。
　大国の領事館が裁判を行った、刑事犯や市民の権利侵害の場合に。領事が裁判に出席した。長崎の各領事館が警察官を雇った、彼らの使命は秩序を維持すること、犯罪の疑いのある人物を逮捕すること、逮捕者を監獄に閉じ込めることであった。牢屋は各領事館にあった。
　日本で商売をしていた者の内の一人に、ウラジオストクからの事業家であるゲオルギイ・フィリッポビッチ・デンビがいた、作家チェーホフのサハリンの知人の１人であった。作家は彼について次のように批評していた：・・・　スコットランド人のデンビは事業を行っている。もう若くはない、一見して通人である。彼は日本の長崎に自宅を持っている、私が彼と知り合いになった時、彼に言った、多分日本では秋であろうと、彼は喜んで私に提案した、彼の自宅に留まるようにと」。
　ゲオルギイ・デンビは１８４１年２月１６日生まれであった。彼の親類であるアンナ・デンビが書いていた、「彼が生まれた家は、ロンドン郊外のイスレングトンのレゲンタ運河のほとりに、現在までそのままである。私は思っていない、彼らが非常に貧乏であったとは。とにかく、私の家には父ゲオルギイ・フィリッポビッチ・デンビのポートレートが掛かっていた、油絵の。」　デンビは祖国のイギリスで素晴らしい教育を受けた。が、元々冒険主義者であった、南東アジアに出立した。ある時期には、若者はバンコックやサイゴンで生活した、その後、中国に向かった。そこから長崎へ。日本から、デンビはウラジ

オストクに向かった、若い町に住むことにして。当時、この町には数百人の住民だけであった。海産物の収獲に従事していた。帆船アレウト号を手に入れ、デンビはそれに乗ってサハリンに向かった。その海岸には沢山の昆布があった。

デンビはプロテスタントであった。非常に美人で正教徒の日本人女性、名前が森高テイ（洗礼して、アンナ・ルドリフォブナ・モネテッサ）と結婚した。彼女は、長崎から遠くはない小さい町キケツ（？　＊）で１８５３年に生まれた。裕福な漁民の家内経済は彼女に支えられていた。サハリンのモウカ（真岡、現名ホルムスク　＊）で、子供全員を生んだ：１８８０年にアルフレッド、１８８１年にアレクサンドルーテド、１８８２年にリザ、１８８４年5月２４日（6月５日）にジョージーベシ、１８８５年にジョン（ワーニャ）を。子供達は洗礼された、アニバ正教会で。

１８９２年7月３日、デンビはロシア帝国国民となった。仕事上の閃きと企業家としての指導性は、ロシア国籍を獲得し、ロシアの辺境地方に大きな利益をもたらした。同時代人達が特記していた、「デンビの名誉のために言っておかなければならない、彼は搾取者ではなかった、彼に依存したロシア人企業家のジュースを吸い取るような：充分に相手と話し合いをし、が、商売の危険を充分に説明した。（忘れてはならない、企業家全ては、流刑囚の内の農民の大部分は全く資本もなしで企業を始めた、何の保証も期待できなかった。）　彼は自分のクライアントを迷わせたり、隷属させたりはしなかった。同様な条件の下ではロシアの富豪・資本家ならば必ずやっていたような。彼らに充分な可能性を与えた、充分なエネルギーの元で、充分の足で立ち上がれるように、完全な依存性から解放されるように。」

年で職務を離れながら、デンビは旅行をたくさんした。ウラジオストク以外に、彼は函館、長崎、ホノルルに家を持っていた。１９１６年初めに、彼の喘息が酷くなった、彼はホノルルの病院に入院した、通常は休息にホノルルを訪れていたのだが。そこで、彼はその年の１１月１５日に亡くなった。彼らの息子達が彼を火葬にし、長崎に運んだ。長崎にデンビ家の納骨所があった。そこにアンナ・ルドリフォブナが既に葬られていた。

ある時、デンビと一緒に長崎にユリウス・ブリネルが現れた。ユリイ・イワノビッチーロシアではその様に呼ばれていたーは１８４９年に、小さな村メリキンで生まれた、チューリッヒから３０マイル離れている。卒業後、若者は雪のアルプスを暑い上海に替えた。そこで絹の商売に従事した。日本に少し立ち寄り、日本女性と結婚した、直ぐに子供が生まれた。しかし、若い家族の幸せは長続きしなかった。若い商人は中国から沿海州に移動し、ウラジオストク湾で交易に従事した、北朝鮮で事に関わらないまで。その年に、この国で,ある物を手に入れる計画があった、個人のビジネスの旗の下で。企ては不名誉に終わった、朝鮮を放浪した後、ブリネルはロ朝国境に移った、沿海州での仕事を継続するために。

第一級の商人であるブリネルは、１８８１年からウラジオストクに定住し、最初の５人の極東の商人の１人となった。２年後、彼は7等文官クルクトフの娘と結婚し、ロシア国籍を取得することを決めた。彼は願書に書いていた、「私はロシア帝国に定住し、ロシア国籍に入りたい、商業職を委ねられた権利を持つ。」　この件について彼を助けたのはプリアムール知事コルフである。彼にブリネルは電報で感謝していた：「ロシア国籍を得て,幸せである。目下の所、可能性はない、高官の貴君に個人的に自己紹介をする。お願いす

る、書面での感謝を受け取ることを拒否しないように、私に対する貴君の心ある気遣いに対する。」

１８９１年は全極東の生活の急変となった：幹線鉄道が起工した。この情報の３ヶ月前に、ブリネルは第２級商人アンドレイ・ニコラエビッチ・クズネツオフと一緒に新しい会社を設立した、その会社は,港で沖仲仕、倉庫の荷物の保全、その荷物の配送に従事するものであった。仕事は急速に伸びた：正確さと責務は会社「ブリネル、クズネツオフとＫ」を競争者と際だって有利にした。

ロシア人村、稲佐での最後の係留

外国人や長崎の住民の中で,稲佐はロシア村として知られていた。

「我々は叫んだ、当番の船に（日本の渡し守達は､香港と同じように､確りと見定める、今度は)、イナサ（稲佐　＊）の単語は充分であった、渡し守達が我々とわかるのには。

－稲佐？・・・ハラショー！－　彼は人当たりの良い笑い声で話した、明らかに、ロシア語の「ハラショー」の意味を我々にひけらかしながら」。

クレストフスキイーが残していた、日本にいるロシア人水兵達の日本人の生活風習についての沢山の興味を引く正確な観察を。彼は１８８０年１１月に長崎にやって来た、艦隊将軍レソフスクと一緒に：４０歳のジャーナリストは「陸軍の交際のための書記」に任命された。ウラジオストクの艦隊基地まで、彼はネアポリからスエズ運河を通り、紅海、インド洋を経て、蒸気客船に乗り、たどり着いた。４分の１世紀後に、ゴンチャロフの出張を繰り返した。クレストフスキイの軍外交使節は半年続いた、この尋常ではない出張の印象は,彼の文士としての仕事に反映された。

クレストフスキイーが書いていた、「稲佐は町の反対側にある、長崎湾の北西側に、湾の基部から遠くはない。湾岸に村が散在している、西の丘の岩勝ちの丘に。家から家にやっと狭い通りをやっと通り抜けるのは希では無い、石の階段を、コンクリート製、灰色や赤色の花崗岩の大岩の塀の脇を。それらの間にはいろいろな植物が。ここを、我々政府がこの地の住民から何年か借りている。この土地の所有者である志賀さんは我々のために小さい小屋を造った、ボートハウスと工作場と小さい病院を水兵のために。病院は２棟の日本家屋に置かれた、改造したものと建て増ししたもの。船長と船医の指導下で,我々の水兵の手で病院として要求に対応するように。もちろん、病院は小さいが、平和時にはより大きいのは要求されていない。ここで、病人の中に、我々は最近の台風の何人かの被害者を見つけた、黄海でアフリカ号が耐え抜いた：誰かが頭部を脱臼した（？　＊)、悲運な士官候補生ラコビッチ、波で船倉に投げ落とされた、怪我をし、両足がきかなくなった。が、今は少し両足は良くなっている。」

この地区は年を追う毎に、持って行った、ロシアにある小さい村のありふれた様相を獲得していった、日本の色調の顕著な混合を持った。幅広い段を持った道は山に続き、通りを形成し、両側には、木々が密生していた。基本的に家屋は１階建て。それらの内の何軒かは簡易なベランダで飾られている。店の入口には、大きな縦長の提灯が揺れていた、不

可思議な文字が一杯書かれた。が、ロシア語の看板も出迎えた：「ここは両替場所」や「雑貨屋」。高くはない塀から、花が咲いている庭と蔓が這っている壁が見える。時折、通りを灌漑用の小川が流れていた、塀の下から流れ出て。小川は気持ちよさそうにざわざわ音を立てて流れていた、いろいろな色の砂利に沿って、シダや苔の生えた石の間を。陸の一つに、充分に大きな２階建ての家が造られていた。看板に「ネバホテル」を付けた。このホテルを船乗り達は「冷たい家」と呼んだ。それなりの根拠があった。理由は明かであった。ホテルをある日本人家族が経営していた、例外的にロシア人のために。入口の上に貼り付けられた特別な板がこれを警告していた、日本語、ロシア語、英語で書かれた。：「ここへはロシア人将校だけが受け入れられる。」　ホテルには、ビュフェとビリアードがあった、上の階には、広い椅子付きのバルコニーがあった。そこから停泊地、町、対面している山々の素晴らしい眺めが見られた。

ロシアの水兵達は稲佐に造った。ボートハウスと風呂に、持っていた全てのお金を使い切って。病院の建設には、もう資金がなかった。建築の完遂を大公アレクセイ・アレクサンドロビッチのロシア人墓地への寄付金が助けてくれた。病人のために２階建ての建物が造られた、その内部は確りしていた。建物は竹の格子に漆喰作りであった、柱に確りと固定された、その屋根は瓦であった。病人用の下着類、ガウン、家具には金銭を予約で集めた、水兵達は無関心でいなかった。特別な活動を、コルベット艦バヤン号の中尉ベルホフスキイが示した。１８７５年から１８７６年に、彼は同僚達から３００ドルを集めた。が、この金額では不十分であることに気がつき、友人達と持ち寄りで、残りの金額を借金した。全ての建築に、大きな名称「ロシアの港とロシアの海軍工廠」を与えた。

海軍省は「海軍工廠」に年に３８３ドルを割いた。１８７６年に、その内の２２３ドルは借金の支払い、６０ドルは保険に、６０ドルは守衛に使われた。残りの４０ドルが修理に残った。これらの金額は極めて不十分であった、特に、１８７６年から１８８０年に、病院が「海軍工廠」に従属し、同じく資金を要求したことを、もし考慮すれば。残念ながら、彼はそれらを残りの理由で得た。これは彼を、全ての衛生上の要求の遵守から完全に維持することをさせてくれなかった。台所と鍛冶場が同じ部屋にあった。防水布がしばしば病院の脇で乾されていた。ロシア領事館は水兵達を助けるようにした、寄付金を期待して。が、寄付金はかなり希であった。

長崎のロシア人の状況は、最初の滞在と比較して結構確りとしてきたにもかかわらず、幕府との誤解が時折起こった。複雑化の基本的原因は不安な国際状況であった。何度か水兵達は岸に機雷を運んだ、原則的に禁止されている。その後、若干のアメリカと日本の新聞が書いた、ロシア人が稲佐で指示した、ロシアと同じように。大砲を設置したい、そして、長崎を脅したいので」。

その内に、ロシア人は確りと稲佐にしがみついた。その理由は少なくは無い。一つは、水兵達はこの地を良く知っていた、他の地のように密に立ち並んではいないこと。他の点では、将校達は岸で休暇を取る水兵を容易に監督することが出来たこと。領事に任命された後直ぐに、オラロフスキイは水兵達に提案した、稲佐から領事館の付近に移るようにと、ロシアの建物を一カ所に集めるために。海軍司令部は同意しなかった、この場所にはロシア人に多くの思い出があること引用して。１８７５年、海軍省は領事オラロフスキイと太平洋の艦隊司令官に任命されている海軍少将プジノに全権を与えた、稲佐にもう一地区を

借用することを。彼らはこの件について、１０年間の条約を締結した、稲佐の長老アレクサンドル・シガ（後述されている　＊）と。

彼についての興味ある観察をクレトフスキイが残した：「病院の視察において、我々は中庭に出て,見回した：中二階の窓から、隣り合っている日本家屋の、屋根に吊されていた、換気のために、飾り筋の付いた市民の礼服が。この兆候に,クドリンが気がついた、そこにはアレクサンドル・アレクセービッチ・シガ自身が住む、正教徒の日本人、ペテルブルグで数年間日本領事館で書記・・・　志賀さんは３０歳位の若い人物であり、着る物も立ち振る舞いもヨーロッパ式に完全に慣れていた。彼はロシア語を上手に話し,そして書いた。多分、我々は同等な日本人の生活の多くの振る舞いの、生きた,高度な解説者として、彼を利用している。いろいろな場合で出会っている、無意識に我々に問題を引き起こしている：例えば、シトー（何）？　タコエ（どんな）？　カーク（どのように）？　パチェムー（何故）？　その他」。

１８７８年８月、長崎にクリッパー艦クレイセル号がやって来た、この船は世界一周航海をし、太平洋艦隊に組み入れられた。海軍大尉コンスタンチン・ニコラエビッチ・ナジモフがその船を指揮していた。彼は極東において新人ではなかった：１８６１年から１８６２年に、コルベット艦ノビック号に乗って、バルチック海から太平洋にやって来た。函館で勤務し、ピョートル大帝湾（ウラジオストクの外湾　＊）の作図に参加した、クリッパー艦ガイダマック号で当直指揮官として。１８６４年から１８６６年に、ナジモフはコルベット艦バガチリ号に乗って日本にやって来た。それに乗って、クロンシュタット（サンクトペテルブルグの西方にある港　＊）に戻った。バルチック海を航行した、１８７５年にクレイセル号での任務を受けるまで。

日本に滞在中、クレイセル号の乗組員達は一度ならず殊勲を揚げた。１８７８年１１月、日本海の短い航行の後、コルベット艦バヤン号と一緒に長崎に戻り、船員達は難破した小舟から３人の日本人を救助した。その月に、ロシア船の乗組員達は日本の蒸気郵便船ゲンサイ丸の火災の消火を手伝った。１１月２５日、クレイセル号の乗組員達は同僚を稲佐のロシア人墓地に埋葬した、３３歳の補給係のコンスタンチン・カシンを、アメリカのスクーナー艦レインジャー号の酔った水兵に殺された。葬式には、クレイセル号の船員以外に、アメリカ領事、レインジャー号の船長が参加した、同じく２隻のイギリス砲艦の乗組員も,当時、港にいた。１２月２日、殺害の件の調査が終了し、陪審員の裁判所は殺人者である、水兵ウエブに判決を下した、絞首刑の。

クレトフスキイの追想記の御陰で、当時墓地がどのようであったのか触れることが出来る：「その後、ロシア人区画で我々は花、シュロ、マツ、他の植物を見つけた、墓の上に献げる。墓は総数で６０台、正教会の十字架のもとで葬られている、全ては我々水兵と数人の将校の。１８７５年に亡くなったフェドル・イワノビッチ・カルリオニンの墓碑はいつも生き生きとした花の束で飾られている、地元の日本人が進呈した、彼を本当に敬っているという記憶。スキッパー艦イズムルド号の海軍少尉ウラジミル・パブロフスクの墓がある、１８６６年に亡くなった、船体工兵である少尉ニコライ・ブラディキンの・・・我々同郷人の親類や友人であった、稲佐の地に埋められた、多分、知るのは楽しいであろう、ロシア人墓地は、我々の日本人の友人達による常時の思いやりのある墓の世話により、墓地は綺麗な状態に維持されている。日本人達は不断において、墓への道を整備し,雑草を

焼き払っている。小木を切り,ロシア人の墓を花束で飾ることは珍しくはない、地域の寺院に住んでいる彼らの僧侶達は,故人の弔いにお経を読み、自主的に我々の墓でお経も上げている。特徴は極めて感動的ある」。当時、稲佐には、ロシア人墓地の２番目の区画が出来ていた、そこには、将校達が葬られた。パブロフスクとブラディキンの墓はそこにあった。スクーナー艦エルマク号に勤めていた少尉ブラディキンは１８７７年４月に亡くなった、２９歳であった。

１８７８年１２月５日、クリッパー艦クレイセル号は上海に向かった、長江の河口入口で香港へ向かうように命令を受けた。そこで船乗り達が越冬することになった。長崎に彼らは１８７９年３月に戻ってきた、今回は日本の港に少し長く滞在することになった。ここで、ロシアの船乗り達はパスハ祭と皇帝の誕生日を祝った。４月には、日本政府の許可を得て、クレイセル号は日本の内海を訪れた、外国船による初めてのことであった、船には、海軍少将シタケルベルグが乗っていた。イツキ島では、古い修道院の修道士が我々水兵のために例祭を行ってくれた。３日間の停泊中、クリッパー艦は沢山の小舟に取り囲まれた、島の友好的な住民の乗っている。

１８７９年、稲佐のロシア人墓地に、２基の墓が追加された：クリッパー艦ガイダマック号の水兵ピョートル・マカロフと船ネルプ号の副船長アレクサンドル・ヌムマ。

１８８０年３月６日、日本で１年半を過ごして、クレイセル号はロシアへのコースをとった。しかし、５月に、アレクサンドリアに立ち寄った時、極東に戻るようにとの命令を受け取った：中国との関係が緊張したために、政治状況が変わってしまった。交渉における成功を期して、ロシアは太平洋に艦隊を集結させることに決めた、海軍中将レソフスキイの指揮下で。夏には、ここに２０隻を集結する予定とした。

７月２１日、クレイセル号は長崎に碇を降ろした。そこからウラジオストクへ移動した。９月に、クリッパー艦は沿海州知事である海軍少将エルドマンを乗せて、海岸に沿っての航行を遂行し、守備隊と哨所の査察を行った。１０月、クレイセル号の乗組員の内の下士官が、１８８１年３月１日までの休暇が取れることになった。船には交替の乗組員がやって来た、クリッパー艦は長崎で修理に入った。漸く１８８１年春になって,船は日本を旅立った、ロシアへ帰還するために。夏の末に、クロンシュタットで初めての世界一周を終了した。

１８７９年から１８８０年、クリッパー艦ジギト号は長崎に停泊した。その指揮官デリブロンは新しいドックを利用し、亜鉛の外板を銅のものに変えた。乗組員の御陰で、風呂と幾つかの船室が修理された、が、病院までは手が回らなかった。１８８０年クリッパー艦は、海軍少将レソフスクの合同艦隊へと太平洋を航行していった。この年の夏は非常に暑かった、乗組員の一部は体調不良に陥った。海軍大佐ナジモフの指揮するフリゲート艦ミニン号に病人が出た：船は１８８０年６月８日にやって来た。海軍少将シタケリベルグはこの船に自分の旗を渡した、ナジモフを旗艦艦長に任命して。ネアポリとアレクサンドリアでの長い滞在の後、機関員は総員作業と暑さで疲労困憊した、多くの水兵は梅毒に苦しんだ。同じように,長崎では、梅毒の多くの発生があった、暑さのため、伝染病の爆発が心配された。

直に、艦隊に巡洋艦アジア号が加わった。この船は海軍少将アスランベコフの指揮下で香港からやって来た。船は修理が必要とされていた、船をドックに入れた。船の全病人を

医者グロバツキイは岸に送り出した。病人のための糧食を巡洋艦から運んだ。船では直ぐに消毒作業が行われた：全ての船室で集めたガラクタを一掃した。

その夏に、レソフスクの艦隊での勤務のために長崎に、クリッパー艦ナエズドニク号（指揮官は海軍大尉コロゲラス、将校２１名、下士官６９名）とラズボイニク号がやって来た。クロンシュタットからの航海期間は殆ど１０ヶ月間に及んだ。６月１７日に、日本の停泊港に最初に、ナエズドニク号がやって来た。航海時、この船の乗組員達は暗礁から離れるために援助を示した、アメリカ艦隊の旗艦アイロン・ジュク号とコルベット艦チャンピオン号の。長崎で、クリッパー艦は海軍少将アスランベコフの隊列に組み込まれた。７月２２日、船はウラジオストクに移動し、そこから日本の沿岸の偵察任務に向かった、海軍少将シタケルベルグの指揮下で。レソフスキイが骨折した後に交替した。シタケルベルグが次のようなメモを残していた、「ナエズドニク号は全ての面で素晴らしい船である。帆での航行：上手回しでは８ノット、横風では１０ノット、正横後の風では１２ノット：蒸気での航行：２基の蒸気では８ノット、３基の蒸気では１１ノットから１１．５ノット、４基の蒸気では１３ノット」。　ラズボイニク号が８月６日、長崎に投錨した。乗組員達は３週間で長い航海後の力を回復した。８月２９日、ウラジオストクに向かって移動した。

大量のロシア船の長崎への寄港で、稲佐の病院は危機的に小さすぎた。医者と司令官との話し合いの後、岸に病院を即席に開設することが決まった。幸運にも、区画の所有者である志賀さんが簡単で，いこごちの良い納屋をただで譲ることにしてくれた。委員会－場所の視察のためにシタケルベルグの指示で任命されたーは見てぞっとした。かって住み慣れて手入れの行き届いていたロシアの村が変容したものであった。「稲佐における全ての我々の建物の当時の感じの悪い様相、その回りの庭を荒れるにまかせて、乱雑で、我々の所有している区画の土地全部を支配している、信用をつかみ取っている目撃者の１人の言明に従い、集まった委員に不快な印象をもたらした。その影響下で、委員会の判断による問題の解決は当時は難しかった」。

急いで，全力を傾けて，整頓を行った、１８８０年７月１３日、稲佐に最初の病人達が送られた。日本人の会社「キヘイとマロッコ」病院に台所と食堂を造り、食器を割り当てた。「供給者である日本人達は上手くやった、本当に手早く小さい家屋を建築した、台所として利用予定の、充分に大きな天幕を。そこへ、三脚、容器、机を運んできた。火をおこした。整理整頓を行き届かせながら、ロシア人の胃袋のために調理を始めた。目撃者が断言するような、素晴らしいロシア風スープ、カツレツを；これら供給者との思い違い、彼ら側からの悪用は決してなかった；食べ物はいつも大盛りで、上手かった。あり得る、医者の見立てによると、多様であった」。病人は一日に三度の食事を得た：朝のお茶、朝食と昼食、２種の料理から出来ている。各病人当たり３０セントが支払われた、船にいる場合と同じく。ブドウ酒やビールが必要ならば、追加料金が徴収された。

ナジモフがミニン号の病人のために、日本風の１５部屋の独立した分館を建てることを提案した、彼自身が設計図を書いて、請負人と全ての交渉を行った。彼は病人のために簡単だが快適な寝台を注文した。船長のアイデアに惚れて、フリゲート艦の将校達は自分を犠牲にして、寝具を注文し、準医師のための部屋を配置した。総支出に１０００ルーブル以上を必要とした。別館は記録的な速さで建築された、３ヶ月で。

「この新しい１階建ての建物は古い２階建ての病院の建物と並んでいた、その型は日本

風であり、綺麗であった；新しい建物は病院の建物としては充分に答えていなかった。床はいつも地面からある程度の高さに配置され、その屋根には特別の天窓があった、外部の空気と明かりが取り込めるようにと。しかし、屋根と床の構造の欠点は報われた、豊富さにより、家屋の２つの壁はガラス付きの可動の枠で出来ており、それらは取り出すことが出来たので、その様にして、極暑日には綺麗な空気を取り込むために、広い空間がいつも保証してくれた」。

新しい病室には、重病人を運び入れた、彼らは外科手術を必要としていた、その際、ナジモフの提案に従って、ミシン号だけではなく他の船の病人も。状況が改善されていくと、患者数が減少し、医師達は深刻さが少ない病人を小病院に搬送するという提案の命令に言うことを聞くようになった、健康の全般的な改善のために。指揮官達は大分前から気がついていた、岸では、船より水兵達の健康回復は極めて早いことを、そして、支出が大幅に減ることを。

長期の航海でかかった病気が治療で回復するのに､伝染病と闘うのはより困難であった。医療報告で特記していた：「金星（梅毒の隠語　＊）は何処でも水兵達に気前よくな分与しない、長崎のように」。船では規律を維持することは簡単であった。が、岸での自由行動においては、水兵達は将校から逃げ出し，勝手に行動した。病院に置いてさえ，準医師の厳しい管理にもかかわらず、－彼らは昼夜勤務し，病院を空けることはなかった－とにかく梅毒の兆候を１つ見つけた：厳しい感覚を持った素人さえ治療時にさえ、病院から逃げ出そうとした、娯楽を求めて。岸の病院にいる病人にとって、逃亡への誘惑は極めて大きかった；病院の傍に、崖の上に、女郎屋があった」。

１８８０年８月末に、船の機械の修理の終了後、フリゲート艦ミニン号に長崎からウラジオストクへ行くように命令が出された。残念ながら病人達は船に戻された。彼らの財産は領事に渡された。ミニン号のための病院は直に廃屋となった。長崎の停泊地にやって来て、クリッパー艦ベスニク号は直ぐに風呂を焚いた。多分，風呂に入りたい希望が非常に強かった、水兵達は熱中し、風呂が燃えてしまった。船医のボゴスロフスキイが書いていた、「ここに、クリッパー艦の停泊時、私は初日に船にいる病人を、稲佐村にあるロシア人病院に収容した。この病院はその時まで閉鎖されており、その鍵は領事官にあった」。

ボゴスロフスキイは病院が荒れ放題になっていることを見た：ゴミの山であった、医薬品は殆ど無かった。ベスニク号はウラジオストクに向けて出航の準備をしていた、１人の水兵が亡くなった、日射病で。他の心配もあった：長崎での停泊時、命令は気が抜けていた。結果として、水兵の何人かは梅毒の病状を示した。

長崎と日本の他の港での船の越冬時、１８８１年１月２１日、シタケルベルグは日本の皇帝の所で盛大な謁見を受けた。

水兵の新居

１８８２年、稲佐で葬式が始まった：スクーナー艦ツングス号の航海士の将校アレクサンドル・アレクサンドロビッチ・ロゴジンを葬った、１月３日に亡くなった。春に長崎へ

やって来たニコライ大主教はここで３隻の船を見つけた：ゲルツォク・エデンブルグスキイ号、プラスツン号、ベスニク号。初めて，彼は日曜礼拝式に出た。シガ（志賀　＊）と一緒に、司祭は町に沿って長い散歩を行った。彼が書いていた、「多数の寺院に驚かせられる、シガが語る、その数は百以上；それらは山の斜面にある、縁飾りのように、寺院の連続で囲まれている；私は朝にスバシの所に行った、そこから綺麗な長崎の全景が臨まれる、シガと一緒にモントシュウとゼンシュウの寺に、それらは類い希な贅沢で極めて綺麗であった。カトリック教の残物が生き返った、浦上の全てがカトリック教；町には多くのカトリック教徒。プロテスタント教徒も少なくは無い（約１００人、言うならば)、他の宗派もある。寺を見てみる：カトリック教会、２つーそこから左手に、出島には３つ（幅は９０歩、長さは３６０歩）；キリスト教の学校、同じく全宗派の。宗教間の多くの割当に気づき、ニコライ神父は考え出した、長崎に司祭を派遣することを、「権威を失わないような真剣で若くはないものを、外国人の使節としても。」　シガはこのアイデアを支持した、意気込んで。

１８８４年、長崎に元領事のコスチレフが戻って来た、１９０１年までここに住み続けた。１８８７年９月、外交官は自分の「日本の歴史に関する概要」を書き上げた。その前文で特記していた、「日本の歴史に関する日本語の原書を紐解きながら、私はあれやこれやの資料を長い間に渡って集めた。が、期待した、その内に、日本の歴史について幾つかの部門の印刷を準備することを。私は書くことの目的を立てることが出来なかった、最も短い概要さえ、日本の全歴史の。それ以上に、徳川幕府に関する全資料は日本の書庫にまだ残っており、私からかけ離れた、が、１８８６年末にその東京で印刷された資料、と我々の外務省の助力によって私によって収集され印刷された資料は、私に期待していた以上のことをさせてくるることになった」。

この時期、長崎のロシア領事館は何もしないではなかった：太平洋艦隊の船は港に常に立ち寄り続けた。クリッパー艦ラズボイニク号は１８８４年２月３日に，ホノルルを出航し、直ぐに長崎にやって来た。船長の海軍大尉ヤコフ・アポロノビッチ・ギリテブロントは既に極東に来たことがあった：１８６０年から１８６５年に、コルベット艦カレバラ号で世界一周を成していた。数年後、コルベット艦バガチリ号で日本に立ち寄った。１８８４年３月１２日、長崎にクリッパー艦オプリチニク号がやって来た。４月には、コルベット艦スコベレフ号が、クリッパー艦ネズニク号を伴って。コルベット艦の艦長海軍大尉が伝えた：「乗組員の健康は良好、病人は２人」。１８８４年７月２２日、水兵達は帝国皇帝の名の日を祝った。

１８８３年６月１日から、長崎にクリッパー艦ナエズニク号が停泊していた、その船を海軍中佐コロゲラスが指揮していた、熟練した水兵で、一度ならず日本を訪れていた。停泊時、年配の将校の海軍大尉モルドビンが重病となった、彼をシガの一家に移した。毎日同僚達が将校を訪れた、ナエズニク号がロシアへ出発する時が来るまで。その後、モルドビンをコルベット艦スコベレフ号の船医であるゴラフシキイが世話をした。その後、コルベット艦の出航後には、フリゲート艦ミニン号の若い医者であるミロナスが見守った。この船は横浜へ，向かわなければならなかったが、船長は出港を伸ばした、重病の将校を１人で残したくなかったので。１８８４年１１月の２５日から２６日の夜にモルドビンは亡くなった。ミニン号の乗組員達は威厳を持って将校を最後の航海に送り出した。

クリッパー艦ジギト号は海軍中佐カルロ・ペトロビッチ・ミレルの指揮下で、１８８５年５月に、長崎に到着した。

１０年を経て、ロシア政府は稲佐から町へ病院を移す必要性を話した。悪い近接は水兵の治療に役に立たないだけではなく、新しい病人を増やした。気前の良いクライアントを失うかも知れないと感じて。志賀は借用のより得な条件を提示した。幾つかの女郎屋を閉鎖するという隣人と約束を交わして。が、ロシア人はより適当な場所を探し出し続けた。それを見つけることを出来事が助けた。日本の会社の職員であるジョーンズが上海へ移る予定であった。ロシア人に、ロシア領事館に並んでいる自分の家とその南側の部分を買うことを提案した。建物はあまり確りとはしていなかった。が、その、周りの広い部分が引きつけた。日本人の提案を受け入れて、予約で４４３ドルを太平洋の船々の乗組員達から集めた。家屋のために６００ドルを支払った。

日本人達が住んでいた密集した区画から、購入した家屋を空き地で仕切った。ロシア人は直ぐに疑い始めた、そこに女郎屋を建築できるのかと。これを避けるために、その空き地を手に入れることが決まった。１８８６年４月１１日、領事の意見に耳を傾けたギリテブラントは言葉少なに、自分の資金で空き地の賃料を払うことを提案した、海軍省の相応の決定が出るまで。ロシア人に永年の賃貸の権利を与える，この空き地に、庭を造ることが決まった。１８８６年４月１６日、家屋は内も外も花と草木で清潔で綺麗にされた。立派な部屋の名誉の場所をキリストのイコン画が占めている､ナジモフが１８８０年７月に、自分のバラックの病院に贈呈した。直に，新しい病院に最初の患者が入院した、フリゲート艦ウラジミル・モノマフ号の水兵である。

家屋を獲得したにもかかわらず、稲佐に広場を保持することを決めた。そこに，風呂と帆と簡単な船の道具の修理工場を造ることが提案された。シガが約束した、女郎屋の閉鎖に伴う問題を最終的に解決すると。墓地は無視するわけにはいかなかった。ロシア船からの多額の寄付は墓地を正常に維持することをさせた。「この寄付から、我々の墓地に隣り合っている、剛心寺の僧侶に、褒美を支払う。その様にして、僧侶に定期的な世話をしてもらう。長崎へのフリゲート艦ウラジミル・モノマフ号の来航時、何人かの将校の苦労によって墓地の清掃が注意深く行われた。」　アルカデア隊の管長がこの墓地に残っている全てのロシア兵の墓に祈祷を施した。

新しい場所を水兵達は気に入った、町の中心に近いことも、領事館と隣り合っていることも、設備が整っていることも。１人の将校が書いていた、「我々の領事館のある場所は素晴らしい、山へ，テラスから海へ降りていける、海岸べりに。今では、長崎で場所を購入することは仕事としてはそれほど簡単では無い、というのは、領事館の領地は価格が２倍になっているので。」　大公の寄付金で、新しい病院に素晴らしいイコン画付きの辻堂を設備した。

ロシアの水兵達は長崎について多くを書いていた。日本についての素晴らしいスケッチ画と興味を引く観察は、中将コルニロフの従兄弟の甥であるアレクセイ・コルニロフのペンによっている。勤務明け前に、軍曹コルニロフは蒸気フリゲート艦ウラジミル号に乗り、シノプスク海戦で英雄的働きを示した。その功績で海軍大尉に任官され剣とリボン付きの聖アンナ３等勲章を授与された（１８５３年１１月１８日)。他の勲章は待っていなかった：剣とリボン付きの聖ウラジミル４等勲章（１８５４年１２月６日)、剣付き聖アンナ

２等勲章（１８５５年９月８日)、記銘「勇気に対して」付き金の剣（１８５５年６月２日)、その他。コルニロフは高名になった、１８５５年に、セバストポリ防衛戦で、４カ所に負傷を負ったことで、特に頭に。が、病院送りを拒否し、隊列に残ったことで。

極東へは、コルニロフは１８５８年に初めてやって来た、クリッパー艦ジギト号に乗って、第１アムール隊の。長年にわたって函館のロシア領事の指揮下にいた。これの時期について結構興味を引く記事を書いていた。１８６０年１月２５日、コルニロフはジギト号の船長に任命された、その年に、海軍大尉に昇進した。ヨーロッパに戻り、１８６２年春に、スクーナー艦サハリン号を指揮することになった。それに乗って再び日本にやって来た。年末まで、コルニロフはサハリン号とバガチリ号に乗って日本と中国の港を航行した。その後、バルチック海に戻った。太平洋を彼は再び訪れた、５５歳の太平洋艦隊司令官として。今回は極東で２年を過ごした。１８８６年１月、ウラジミル・モノマフ号を旗艦とし、それとドミトリイ・ドンスコイ号で海軍少将コルニロフは沢山のロシアと日本の港を訪れた、長崎にも立ち寄った。海軍中将に昇任し、バルチック艦隊の上級司令官に任命された後、コルニロフは長崎で艦隊を新しい指揮官、海軍中将シミットに引き渡した。ペテルブルグに向かう前に、コルニロフは日本帝国から勲一等の勲章を受章した（１８８７年８月２６日)。

海軍大尉コンスタンチン・ミハイロビッチ・ドモジロフーフリゲート艦ドミトリイ・ドンスコイの上級将校の職務を遂行していたーは自分の船と一緒に帰国することがかなわなかった：彼は長崎で１８８８年４月１８日に亡くなった、３７歳まで数日であった。この将校は輝かしい教育を受けていた、ニコラエフスク海軍アカデミー、将校水雷クラスを終了していた。彼は太平洋を経て２回世界一周航海をしていた、その岸に永久に残ることとなった。

日本におけるステパン・マカロフ

海軍大佐マカロフを、１８８５年９月１７日、コルベット艦ビチャジ号の船長に任命した。当時この船は建造中であった。残念ながら、彼はこの船を気に入らなかった、建造中を見て、マカロフは多くの欠点に気がついた。１８８６年７月１６日の機関の最初の試験後、彼は日記に書いていた、「何という哀れな指示馬力と速度、３０００ｔの非装甲船としては！　この船は航行には不適当と見なせる。が、これについて言いふらすことが私の仕事ではない。船長の仕事は船に名称を与え、全将校達に船を愛するようにし、他の船よりこの上ないものと見なすこと、性能においても」。良く知られている、マカロフはこの課題を完全にやりこなし、ビチャジ号の名前は時と共に輝かしい科学調査の象徴になったことが。差し迫っている世界一周への船の準備に将校は全てお献げた。

１８８６年７月、マカロフが数日間家族の所に行ってきた。８月３１日、ビチャジ号はクロンシュタットを出航し、極東に向かった。航海は船とその船長に名誉をもたらした。１８８７年春に横浜へ寄港して後、コルベット艦は太平洋艦隊の一員に組み入れられ、日本海のいろいろな港に寄港した。６月末に、ウラジオストクに向かう前に、船の他の将校

達と一緒に，マカロフは帝の接待を受けた。

当時の多くの船乗り達はピョートル大帝湾を余り良く知っていなかった。沢山の大小の小島があり、切り込みの多い海岸線、岩礁の沿岸を。金角湾（ウラジオストクの町が面している湾　＊）への接近を濃い霧が邪魔をした、特に春と夏には。当時、中佐ステニンの探検隊が湾の水路調査に従事した、が、海岸の確かな確定の危惧が彼らを支配しており、他への配慮を向けることが出来なかった。マカロフはビチャジ号の乗組員を探検隊に組み入れる希望を表明した。コルベット艦での教習が終わりに近づき、太平洋艦隊の司令官が船の船長の要請をかなえてくれた。仕事の開始前に、ステニンはマカロフに、ウラジオストクからトメニ・ウラ川までの基本的天文点と測地点の正確な全座標を提供した。初日には少尉セルゲーフを助手として割り当てた。通常仕事は次のように進んだ：コルベット艦は約３ノットの速度で進み、５分ごとに、船側から測鉛を投下した。当直将校はこれを厳格に行った、特別な日誌にデータを書き込んだ。１４日かけて、コルベット艦はパバロトニイ岬からガモフ岬まで測量を行った。得られたデータを基礎に、マカロフは霧の日にウラジオストクに接近するための指標を完成させた、それは長年にわたって船乗り達の役に立った。

１８８７年１１月１７日､コルベット艦ビチャジ号はウラジオストクを太平洋に向けて，単独で出航した。半年で，船は３０の港を訪れた、各港で価値ある情報を収集しながら。１８８８年3月１４日、ウラジオストクに帰港した。マカロフは時間を無駄にしないことにした。帰港してから２日後に、前年に始めていた水路観測の仕事を続けた。ポシェット海峡も。そこでは湾の１つにビチャジの名が冠されている、船の名誉として。

マカロフは極東における初めての科学組織に密接な関係を維持した、アムール地方研究協会（ＯＩＡＫ）と。それに彼は１８８７年１１月１日に加入した。特に彼は協会の会長ブッセと親交を交わした。できる限り、ステパン・オシモビッチは協会に、地図、書籍、科学的展示物を供給し続けた。１８８８年6月３０日、彼はアムール地方研究協会の博物館の起工式で感じた、ウラジオストクに博物館が必要なのか不必要なのか、という長い間の論争に決着を付けることを。この祭典は海軍工廠海岸から余り離れていないウラジオストクの中心部に市民の大衆を集めた。ＯＩＡＫ書記が銀製板上の基碑を読み上げた、その後それは石の基台に置かれた。名誉の客達は決まり通り、ハンマーで伝統的な何回かの打ち出しを行った、その後、協会の会員が繰り返した。その後、参加者全員に食事を提供した、テント内に準備した、将来の博物館に隣り合わせて水兵達が建てた。食事には懇談、話、乾杯で盛り上がった。新聞「ウラジオストク」の編集者ソログフは覚えていた、機械技師ウスチノフが１８８３年にウラジオストクに博物館を建設するアイデアがどのように浮かんだのかを、確信を話ながら、水兵達が将来の収集品として沢山の興味ある物を運んでくると。実際において、次の年には、クリッパー艦ラズボイニク号の将校達がＯＩＡＫに最初の展示物を運んできた：チュクチ人の様々な武器、骸骨、生活品。将来の博物館への助力を他の船の将校達も示した、彼らは生き生きと同意を示すことに応じた、建物の建設に。

ステパン・オシポビッチ・マカロフーソログフに良く耳を貸してーは彼の意見に完全に同調した、水兵達は博物館、協会に価値の付けられない助力を示す能力があることに。彼は席を立ち上がり、発言を求めた。カマロフが話した、「歓迎の挨拶に答えて，私は話す、

我々は、アムール地方と勤務条件が重なっている水兵である。ここは我々の第２の家である。我々は協会の成功を喜んでいる、アムール地方の研究の。停泊地から博物館の綺麗な建物を見て、思い出すであろう、我々は他人ではなかったと。この祝典は異常であると言えよう。希な一致は博物館の建設にたいする賛同を語っていた。ここで、我々は役人と一緒に工兵達を見る、商人と一緒に水兵達、市民と一緒に技師達。皆が状況の差別なく喜んで科学のために自分のささやかな寄与を献げる。これは全員の熱意の瞬間である。が、賞賛すべき熱意、賢明な熱意。」

スピーチをし、要望が鳴り響いた時、客の間に、三脚付きの大きなカメラを持った水兵がやって来た。彼の水兵帽の帯には船名「ビチャジ」号が記されていた。マカロフの指示に従って、彼は最も良い場面の写真を撮った。次の日、祝典の２００枚の写真が１０２ルーブルで売られた、それらをビチャジ号の水兵達はＯＩＡＫの会計に納めた。

夏は何事もなくこっそりと過ぎていった。１０月に、コルベット艦ビチャジ号の出航と、太平洋艦隊の他の船ドミトリイ・ドンスコイ号の遠洋航海への出港が命令された。ビチャジ号では出港の前日には沢山の仕事で溢れかえっていた。１０月４日、水兵達は帆走競走に参加した、1位を獲得し賞品をもらった、特別にサンクトペテルブルグから送られてた。次の日には、ボートレースがあった。１０月６日には、海軍クラブで、家族の別れの夕べが催された。悪天候にもかかわらず、夜１０時には、クラブは人で溢れかえった。最初に、海軍吹奏楽団の音楽のもとで、ダンスが行われた。夜の１時頃、食事に付いた。その時、水兵の名の下で、マカロフが発言した、「今日のパーテーは各将校にとっては良い思い出になろう、フリゲート艦ドミトリイ・ドンスコイ号とコルベット艦ビチャジ号の、それは彼らにとっては最後である。ウラジオストクを去って行く者は良い思い出を持っているクラブ内で過ごした良い時間の。我々は遠くに去って行くが、そこへ行っても我々は思い出さないではいられない、ここのクラブは我々にとっては第２の家であったことを。艦隊の将校達とクラブの会員達の間で交わした友好は誠意あるものであった、クラブ側から全てをやってくれた、我々がその壁に＊＊＊＊＊＊＊なるために；艦隊の将校は得きるだけ努力した、示すことを、彼らがそのような注目を高く評価することを。」

コルベット艦は９９３日の航行を行った、６万マイルより短くはない。１８８９年５月末に、クロンシュタットに帰還した後にマカロフが短い報告をしていた、「窮地に陥れられる場合－望楼からの落下、早すぎる爆発、搭載ボートの転倒或いは他の惨事、損失や碑との不虞を伴った－はなかった」。コルベット艦では、科学調査は止まることはなかった、それについての情報は詳細にほじくるように書かれた、いろいろな雑誌に。マカロフは航海士将校ブドリンの言葉を繰り返すのが好きであった：「観察したことを書く、観察しなかったことは書かない」。１８８９年６月に、マカロフはコルベット艦ビチャジ号を引き渡した、侍従武官としてのたまのたまの勤務以外には、彼は勤めから解放された。ステパンは、彼によって３年間にわたる航海で収集された、海の物理的地理に関する最も豊富な試料の処理に熱心に取り組んだ。この仕事を彼は継続した、１８９１年に彼を海軍砲兵隊の主任監査官に任命後も。将校の仕事部屋は水の入った数百本の瓶で一杯であった、海洋のいろいろな場所で、かついろいろな深さで引き上げた；土壌の標本は水理用道具と隣り合っていた。壁には表、図表、地図が吊されていた。これらの研究と，以前にビチャジ号の乗組員によってなされたものの結果は、マカロフの素晴らしい本「ビチャジ号と太平洋」

中に書かれた、この本の御陰で彼は帝国科学アカデミーの賞とコンスタンチン金メダルー帝国ロシア地理学協会のーを授与された。

海軍少将マカロフは再び極東にやって来た。そこは多くの点で彼を海軍将校として形成してくれた。１８９７年夏には、地中海艦隊の司令官となる。太平洋における深刻な紛糾化に鑑み、地中海艦隊のこの地の海軍力を強化することが決まった。艦隊は長崎にやって来た、日本との交渉の最盛期に。当時、何時でも関係が決裂しても可笑しくはなかった。自由時間を選び出し、マカロフはしばらく艦隊を停泊させ，日本の温泉で治療することに決めた。が、休息の時間においても、彼は利用法を見つけた、自分の好奇心溢れた知性と手芸の：日本人の所で勉強を始めた・・・草鞋を編む。

ー教えてください，閣下、何故その様なことをするのですか？ー　艦隊副官ジロチが質問した、将軍が見慣れない作業をしているのを見つけて。マカロフが答えた。

ー君ねえ、これは我が軍にとって極めて大きな価値を持っているよ，多分。人生で出会う、有効で教訓的なものに気づこうとしない？ー　湯治の後、勤務に差し支えはないと感じて、１８９５年7月１５日、マカロフ将軍は再び、装甲艦皇帝ニコライ一世号で旗を揚げた、２週間後、船は太平洋艦隊との合流を目指してウラジオストクへ出港した。この時には､将軍はウラジオストク市民達には優秀な海洋航海者で学者であることだけではなく、ウラジオストクに関係した幾つかの大胆な計画の発案者として知られていた。１８９５年９月１７日、ＯＩＡＫで報告をした、金角湾の凍結を阻止する人工的手段の可能性について。金角湾は冬期には船の通行が出来なかった、船には都合が悪かった。

マカロフは自分の報告を次のような質問で始めた、「湾の凍結を阻止する人工的手段は可能なのであろうか？」　報告者の意見によれば、ボスフォル・ボストチニイ海峡には温かい水の層があった、それらは上部の強力なポンプかスクリューの作用で混ぜ合わせることが出来る。マカロフが続けた、「そうならば、下層の水の上昇は、氷の表層の形成を邪魔してくれる。全ての仕事は然るべきやり方で組織することができよう。マカロフの２番目の提案は同じく金角湾に触れていた、金角湾は年々浅くなっている。ステパン・オシポビッチが話した、「湾が浅くなることは、岸の造成のための土砂の流入から起きている，或いは土砂の埠頭の建設に。もしこれらの仕事が続くならば、今後、仕事が現在まで進んできたように、深い水深の湾は近い将来には沿岸航行船だけが航行できるようになろう。人間が湾を壊し始めさえすれば、自然は熱心な助力者になる。」　マカロフはウラジオストクに綺麗で確りとした海岸を創り上げることを提案した、湾で崩れることがない、土壌製のように。彼の意見によれば、停泊地の凍結を阻止する面でも役に立つであろうと。

１８９５年１０月６日、マカロフは海軍大尉ジロチと一緒になって、ＯＩＡＫの助けを借りて素素人演奏会を組織した。集金した１３２ルーブル７１カペイカは協会の懐を暖めた。アカデミー科学のペテルブルグ博物館の方法を採用して、彼はエポフ博士と一緒になってＯＩＡＫの博物館収集品システムを開発した。マカロフの全報告のテキスト、ウラジオストク市民に行った彼の公演、今日までＯＩＡＫの図書館に保存されている、その基金を創りながら、海軍少将マカロフのある見解の衛陶製を確信しながら、彼はかって次のように発言していた：「科学の名の下で、我々の中の誰かが手に負いに、仕事の名の下で、各自がしている、もちろん、この地方の名の下で、各自が愛している、私は・・・君達、貴君達を招待する、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」。

１８９５年秋、マカロフは水路観測の仕事を継続することを決めた。「私は自分の船の内の一隻、巡洋艦アドミラル・コルニロフ号を手に入れ、それに乗ってラペルズ海峡に向かった、そこでは，良く知られているように、極めて複雑な現象が起こっている。ここの海面には冷たい水が帯になって存在している。私の本「ビチャジ号」で、様々な現象について私なりに説明をしていた、この海峡で見つけた、が、私の手元には極僅かの資料しかなかった。今回、私はこのブランクを埋め合わせた；今，手元には充分な資料を持っている、ラペルズ海峡における水の層の分布の細部を詳細にわたって解析するための。資料の最終的な解析には若干時間がかかる。しかし、全体的に言えよう、私は以前の提案に対しての大きな訂正を予見していない、以前に私が語った。」（マカロフによる強調文－著者）

１８９６年８月５日、マカロフに，日本の勲２等を賞として与えた。受賞と佩用には皇帝の許可を必要とした。許可は下りた。後になり、１９０２年３月に、この将校に、勲一等の勲章を授与した。

それよりも、運命は再びマカロフを太平洋に行く羽目にした。彼は幾つか職を変えた、組織家と思想家としての才能を示しながら。世界的名声を彼に１８９８年に与えた，砕氷船エルマク号が、その建造を彼は個人的に監督した、新しい強力な船を使用して北の氷に打ち勝つことを予定した。砕氷船は彼を国民的英雄にのし上げた。が、船は大変な試練の悔しさに耐えることを強いた。

１８９５年に、日本との不仲の予想の中で、将軍の注意は、軍事行動の場合における海軍の作戦の開発に完全に向けられた。次の年（１８９６年と１８９８年）に、艦隊を指揮して、マカロフは船の海軍力に関する自分の判断を確かめることが出来た、大砲、機雷の武装を、浮沈性と持久力のための戦いの問題を。これらの問題に，彼は注目し続けた、クロンシュタット港指揮官とクロンシュタット軍知事の行政官の地位で。彼はとにかく感じていた、彼の使命と主たる仕事は海軍力を指導することと。

彼の親友の１人がマカロフに質問した、クロンシュタットで彼の所に立ち寄った、

－君は自分の状況に満足しているのか？　とにかく，君はロシア帝国の主たる軍港の主人である。－

マカロフが反論した；

－ポルト・アルツル（中国の旅順　＊）での私の地位、そこへ私をただ派遣する、東での我々の仕事が全く悪化した時に、ゴミを掻き分ける、以前の活動でまき散らされた。－

将軍は、日本との衝突の可能性を長い間予見していた。そして知っていた、戦争を回避するには海での優位を保つことであることを。しかし、政治はペテルブルグで決められた、それに対するクロンシュタット主司令官は影響を示すことは出来なかった。それにもかかわらず，彼は海軍省の監督将軍アベランに手紙を書くことにした。その手紙で、あり得る間違いについて警告した。軍事状況のカマロフによる確かな評価は助けた、彼がちょうど極東に派遣されることを、駄目になる仕事を修復するために。海軍大将アレクセイ・アレクサンドロビッチ（・ロマノフ）は自分の命令書に書いていた：「海軍に関する皇帝の命令により、この日から、クロンシュタット港主指揮官である海軍中将マカロフを太平洋艦隊の司令官に任命する。海軍中将マカロフの以前の全ての軍功と不断の活動に思いやり、彼に自らと海軍将官員から表現する成功裏に遂行してくれる期待を、彼に皇帝が委ねた高度な課題を、海軍の名誉と愛する祖国の名誉に関する。

１９０４年２月４日、皇帝の所での応接の後、マカロフは次の急行列車に乗って戦場へと向かった。ペテルブルグでは彼に特別列車を利用するように提案したが、それについて彼が語った、「とんでもない！　今大事なのは、軍隊を遅延なく送り出すことである、特別列車はダイヤを混乱させる。」　クロンシュタットは将軍を極東に運んだ。日本との恥ずべき戦争の開始にショックを受けたロシアは、マカロフに希望を見いだした、至る所から電報がやって来た、彼の任命を受け入れようとする。彼自身は平静であった、ごく普通の出張のように移動した。ポルトアルツール（旅順　＊）への道中、２０日間かかったが、カマロフは同行した将校達と一緒になって、極東におけるロシア海軍の状況の正常化の問題を審議した。古い間違いを訂正することは遅すぎた。が、将軍は、彼らの中でただ１人、信じていた、どんな期待できない状況からでも、出口を見つける出来ると。

道中で、彼はペテルブルグへ幾つかの電報を出した、海軍の強化のために何らかの方法を採用するように要求する。が、良く知られているように、マカロフの要求の何一つも実現されなかった。２月２４日朝、艦隊司令官は旅順に到着した、一等巡洋艦アスコリド号に着座した。仕事の受領を行い、会議をし、マカロフは艦隊の船の訪問に時間を割いた。それは短くお決まり通りであった：指揮官の復命、将校と乗組員との対面、船の視察。が、それにもかかわらず、乗組員達はこの訪問を待ちわびていた。マカロフの精神的な影響は船乗り達には非常に大きかった、多くの者達は信用した：彼の旗の掲揚とともに、船は指揮官を得たことを、名誉ある仕事を行うことをさせてくれる。

マカロフは「私の艦隊」ときっぱりと話すことが出来た。今後、１万人が精神と体を彼に預けることになった。状況は芳しくはなかった。現実はしばしば船乗り達を生気にさせた：日本の機雷で船が爆破された、武力衝突で多くの不運な人が犠牲となった。海での差し迫った作戦に対してのマカロフの試みは、理解してくれない役人達としばしば衝突した。時間は残されていなかった。ペトロパブロフスク号での、将軍マカロフと彼の参謀部の惨事は、準備の最盛時に起こった、その後、艦隊は指揮官無しのままであった、明確な戦略計画もなく。

「９時４３分（１９０４年４月３１日？　＊）。信号・・・、突然心底まで響き渡る轟音がした」、生きているマカロフを見ていた証言者が思い出していた、「我々は３人でいた、海軍中佐クロウン、信号係、と私。帽子を吹き飛ばした、瞬時に机、ソファー、書庫を。全てが木っ端みじんの山となった。機構付きの文字盤は時計のケースから破りとられた。苦労して抜け出すことが出来た、甲板室から艦橋へ右の出口から飛び出した。ペテロパブロフスク号は右に大きく傾いた、急激に沈んでいった、確りした艦橋に立ちながら、支えられることがなく，どこか深淵に目のくらむような速さで落ちていった。この感覚は非常に不快なものであった。もちろん、話せずにはいられない、炎の声、水、絶え間ない爆発と全壊故に。船橋の右側に飛び出し、我々は前方を見た、炎の海を、むっとする刺激性の煙が窒息させようとしていた。ここで、私は将軍の姿に気がついた、私に背を向けて立っている。将軍を良く知ってる者達は思う、彼は前に進んだ、外套を脱ぎ捨てて、何が起こったのかを確かめるために。飛散した破片で将軍が頭を打ったり、或いは亡くなるのではないかと、予想できそうであった」。

ロシア人船乗りについてマカロフが自分の本に書いていた；「この世紀（１９世紀－著者）の初めの謎の勇者達はどこから力を得たのであろうか？　知らない、誰をひいきにし

たのかは。自分の任務に忠実である各指揮官は、不断においてそのような道を選んだ、誰も行ったことのない。既に踏破された道を進まなければならない時には、彼はこの偶然に小言を言いながら、結論を出した、彼をそのようにすることを強いた。島に出会ったならば、それを記し、図に書き込む。太平洋の島々の航路図をよく見よ、君は多くの場合に驚く、これら勇敢な船乗り達が作成した図面が何を残しているかに、彼らの注記や忠告を引用する。」　これらの言葉は正しい、マカロフに関して。

ステパン・オシポビッチ・マカロフはカトピリナ・ニコラエブナ・ヤキモフスカを妻とした、退職した技師の娘。１８８５年6月２９日、彼らの所に娘のアレクサンドラが生まれた、１８９２年4月２９日には、息子のワジムが。彼は１９１２年に海軍幼年学校を修了し、国内戦争では将軍コルチャックの所で上級中尉の肩書きで勤務した。その後、ロシアを永久に捨てた。ある時期彼は日本に住んだ、その後、ニューヨークに移り、そこで、１９６４年1月２日に亡くなった。

契約の妻

ロシア艦隊の何人かの将校達は、他の水兵とは一緒でなく稲佐に住むことを好んだ、日本の一軒家を借り、日本式に住むことを、一時的な妻をめとって。その様な家の賃料は余り高価ではなく月に２０円から３０円。この際，家主は、住居者が必要とすれば，彼に食事を提供した。町と停泊場の船との日常の連絡のために、公式の伝令や小舟が使われた。将校が個人の船を持っているのは珍しくはなかった。或いは船を月極で借りるのは，３０円で。目撃者達の証言によれば、その様にして借り出した船頭は夜昼かまわずに，主人の命令に従っていた。将校が町に長居したり、船に居たりで、船頭は指定された場所で主人を尽きっきりで待った。クレストフスキーが書いていた、「月極の船頭の各々は、独自の旗を作り上げた、主人が彼の船に気がつくようにとの口実を元に。事実は，個人的自尊心の慰みのために：私は、言う、船長の旗の下で航行している、正に「船長」として。何となれば、船頭の所では、全ての将校は必ず「船長」である。彼ら全員は多かれ少なかれ理解している、ロシア語で幾つかの単語や文章も話している。極めつきでは、必要な場合には、日本語の辞書無しで、彼らは説明することが出来る。最も、稲佐の住民の中でロシア語との出会いは全く希では無い：ロシアの船の停泊地への通常となった到来の御陰で、稲佐の「自分の」岸壁と毎日付き合いのある、ここの「ロシア人村」の住民達はロシア人と段々と慣れ親しんでいった、そして、ロシア語で説明できるように多くの住民達がなって行った」。

長崎へのロシア人船乗り達の往来における興味を引く追想記はアレクサンドル・ミハイロビッチ大公の手による、彼はコルベット艦リンダ号で航行した。彼が書いていた：「長崎港に我々が碇を降ろすと、ロシアのクリッパー艦ベスニック号の将校達が我々を訪問しに来た。彼らは日本で過ごしたことを興奮気味に話した。彼らの殆どは日本人女性を「妻と」していた。これらの結婚は公的な式を伴っていなかった。が、これは彼らが小さな家に一緒に住むことの妨げとはならなかった、上品な庭、小さな木々、小さな小川、中空橋、

造花で飾られた贅沢なオモチャに似ている。

彼らは確信した、海軍省は非公式に彼らにこの結婚を許可したと、船乗り達の大変さを理解して。船乗り達は２年に渡って家族と引き離されていたので。もちろん、付け加えておかなければならない、これら全ては長年にわたって起きていたことだと、ピエール・ロテと作曲家プッチーニが尽きることのない源を見つけたように、マダム・クリザンテムとマダム・バタフライの恐ろしいアリアから収入の抽出のために。このように、文化は世界を放浪している船乗り達のために道徳的規範を確立する事に影響することが出来なかった。

ある時、１人の寡婦－オマチ（小町？　＊）という名の女性－が素晴らしいレストランを所有していた、長崎の近くの稲佐村に。彼女を、ロシア人船乗り達は、ロシア海軍の養母のように慕った。彼女はロシア人コックを雇っており、ロシア語を自由に話した。ピアノやギターでロシアの歌を演奏した。我々を緑色のタマネギと生のイクラの入った固ゆで卵で我々をもてなした。典型的なロシアのレストランの雰囲気を醸し出すことが出来ていた。モスクワの外れのどこかのレストランのようであった。

しかし、料理や娯楽以外に、彼女はロシア人将校達に将来の日本人「妻」を紹介した。この仕事で，彼女は何の礼金も要求しなかった、思いやりでこれをした。彼女は見なしていた、彼女に出来ること全てをしようと、日本人の接客について、我々がロシアに良い思い出を持って行くようにするために。ベスニック号の将校達は彼女のレストランで食事をした、自分の「妻」を連れて。今度はこちらから、自分の愛人と一緒にやって来る、結婚の束縛から自由な。

オマチさんはこの件では良く出来ていた。我々は初めて長い時間を．彼女の所で素晴らしいロシア料理を食べた。ウオッカの瓶、双頭鷲の綺麗なラベルのある、お決まりのピロシキ、本物のボルシチ、新鮮なイクラの入った青色の小箱、氷の塊に置かれた、テーブルの中央に大きなチョウザメの肉、主人と客が奏でるロシア音楽。これら全てはその様な状況を作り出した､我々は日本にいるのであるという事を信用することが難しくなるような。

我々は好奇心を持って観察した、遊女をどのように取り扱って良いのか。彼女らは何時も和やかであった、我々の歌に参加した、が、殆ど飲まなかった。彼女らは信じられない程の理性が優っている柔和な奇妙な微笑みを示していた。彼女らの親類は、外国人との付き合いで彼女らを追放の目にあわせようとはせず、彼女らを一つの生き方と見なした、社会活動の形式の、彼女らの性のために解放された。

後になって、彼女らは日本人の男性と結婚しようとした、子供を持ち、最も贅沢な生活をすることも。一方、彼女らは陽気な外国の将校のグループと一緒になり、もちろん、条件の下で、彼らと良くするという、充分な尊敬を持って待遇した誰か将校の妻といちゃつきを妬む全ての試みは存在する習慣の破壊と見なされた。彼らの一定の世界観は西ヨーロッパの思考の何の痕跡も帯びなかった。東方の全ての住民と同じように、彼らは道徳的な純潔さ､宗教の信念を保った。彼らの目にはそれは極めて高い肉体的な純血と評価された。ヨーロッパやアメリカの作家の殆ど誰も、日本人の合理主義のこの特徴を理解することが出来なかった。蝶々夫人の傷ついた心は、日出ずる帝国に笑いを引き起こした、というのは、着物を着用している女性はそんなに馬鹿ではないので、死ぬまで夫と添い遂げると思っているので。通常、日本女性との結婚の契約は１年から３年の期間で終わった、軍艦が

どれだけ海に浮いていられるかに依存して。期間が過ぎると，新しい将校が同じような契約を結んだ、或いは、元の夫が大いに気前よく，彼の「妻」が充分な金額を切り詰めることが出来るたならば、彼女はよりを戻した。

私はしばしば訪れた、現地妻持ちの友人の家を。独身の私の立場は本当に具合が悪かった。現地妻は理解出来なかった、何故この若いサムライーロシア語で大公を意味しているーが夕方に他人の家庭で過ごすのかが、自分の快適な家で過ごす代わりに。私が入口で上履きに履き替えた時、綺麗にされている床を汚さないために、客室にソックスで入った、主人の綺麗に化粧をした唇に浮かべた不審そうな微笑みが私を出迎えた。きっと、この非常に高位のサムライは日本人妻の貞節さを試したかった。或いは，多分、彼は余りにも貧しい、妻を持つには？　彼らの目に映った。

私は「結婚」することに決めた。この事は稲佐村にセンセーションを引き起こした。日本人女性とのお見合いが行われた、彼女らはロシアの大公の主婦の役割をしたがっていた。

見合いの日にちが決まった。無駄であった、私が太めを避けようとしたことは。しかし、私の友人達はオマチさんの希望を確りと支持した、どの子にも可能性を持たせたいという、決まっている役割に適していた、コンクールに参加する。お見合いの後、盛大な祝宴をしなければならなかった、長崎に停泊している６隻の軍艦の将校達を招いて。

私の将来の「妻」の選抜は、多くの困難を伴った。彼女らは皆同じようであった。彼女らは扇子で扇いだ笑みの絶えない人形のようであった。彼女らは口では伝えがたい優雅さを持って，お茶の入った茶碗を扱った。我々の招待に、少なくとも６０人以上が集まった。我々の中の通人である将校さえ、圧倒的な優美さにどぎまぎした。私は平静に見ることが出来なかった、エベリングの興奮した顔を。が、私の笑え声は「花嫁候補」達には間違って解釈された。結局、青い花を好きであるということが疑惑を解いた；私は女性を決めた、サファイア色の着物を着た、白い花の刺繍のある。

漸く、私は自分の家を持った。実際において、大きさや家具は非常に地味であった。しかし、リンダ号の艦長は厳しかった、我々若者に怠け癖が余り付かないようにするために、我々に夕方の６時まで毎日勤務することを強いた。しかし、６時半には、我々はもう家にいた、食事のテーブルのために、オモチャのような家で。

女性の陽気さは驚きであった。彼女は決して不機嫌にならなかった、怒らなかった、全てに満足した。私は気に入った、彼女がいろいろな花柄の着物を着ることを。私は常に彼女に新しい絹の反物を持ってきた。新しい貢ぎ物を見て，彼女は狂人のごとく馬に乗って通りに走り出し、我々の隣人を呼び集めた、新品を彼らに見せるために。落ち着くように彼女を説得するのは無駄な仕事であった；彼女は自分の「サムライ」の寛大さを非常に自慢した。

彼女は私のために着物を縫おうと試みた。しかし、私は背が高かった、日本の着物で覆うのには。これは彼女に新しい驚きを与えた。私は励ました彼女の愛を私の友人に受け入れ、見とれることに疲れなかった。その様な心からの美点を持って。このお人形さんは接客の良い主人の役割を演じた。祝日毎に、我々は人力車を調達して、田圃、古寺を訪ねた。そして、通常は夕方に日本式のレストランで終了した。そこでは、彼女に深い接待をしてくれた。ロシアの将校達は彼女を冗談で「我々の公爵夫人」と呼称した。その際、現地の住民達は本気でこの呼称を受け入れた。立派な日本人達は通りで私を止めて、興味を持っ

た、私の「現地妻」に関して何かクレームがないかと。私は分かった、全ての村は私の「結婚」を見ていたことが、有名な一門における政治的成功のように。

とにかく，私には長崎に約２年間留まることになっていた。私は日本語を勉強することにした。日本の輝かしい未来は私には何の疑いも起こさなかった。というのは、私は極めて有効であると見なした、皇帝一族の１人として日本語を話せることは。私の現地妻は私に私の教師になることを提案した、少しして、日本語の文法の難しさにもかかわらず、私は少しの句を学んだ、簡単なテーマで話し合いが出来るような」。

多分、移民したような長い生活の間に、大公アレクサンドル・ミハイロビッチは時を忘れなかった、偶然ではなく彼がその様な期間残った：「この地での思いでは、私に酷い憂鬱をもたらしている、それはある時には爵位を拒否し、外国に永久に残ろうとする原因にさえなった」。

同時代人の証言によれば、ロシア人将校と日本女性の間に、合法的な結婚があった。が、しばしば別離が避けられなかった。長崎を去り、船乗り達は日本に現地妻だけではなく子供達も残した。外交官のチルキンが書いていた、「大半は全くの日本人であった、自分のロシア人の父を知らない、母親から言葉と習慣を受け継いだ。私は雲仙でのある出会いを覚えている。あるロシア人が私を孤児の娘－日本婦人が世話をしていた－を紹介してくれたことを。私に話した、娘は将軍（ロシアの？　＊）の子であった、彼と関係を維持していた。その関係は彼の自殺で途切れた。娘は非常に綺麗で魅力的な子供であった、彼女は長崎のカトリック学校で勉強していた」。

良くあったのは、ロシア人将校達はロシアから自分の妻を同行してきていたこと。将来の有名な革命家シミトー砲艦ボブル号の将校、シベリア艦隊に所属した－は長崎に妻であるデナ・シミトと住んだ。ピョートル・ペトロビッチ・シミトは大浦地区の１番地に、裕福な日本人である高岡の部屋を借用した。稲佐のロシア人居留地の住民と知り合いになった彼の妻は、海軍少尉ミハイル・スタブラカー海軍学校の同級生－の妻であるナデジダ・スタブラカと親しくつきあった。海外生活は彼女の性に合っていた、多くの者達は日本の習慣を気に入っていなかったが。部屋の借用だけでは不十分であった。燃料、水のために支払いが必要であった。家主は見なしていた、住居を暖めることは、彼の心配事ではないと。ある時、デナが契約条件全てを満たすように要求した時、家主はさんざん暴言を吐いた。デナは夫に愚痴をこぼした。それで彼は高岡に謝罪を要求した。それについて、この件がどのように変遷したか、ボブル号の船長海軍中佐モラスへのロシア領事の手紙が雄弁に物語っている、日付が１８９６年１１月１３日の。「航海船ボブル号の船長殿へ内密に。寛大なミハイル・パブロビッチ！　今日１１月１日朝４時に、私の元へ領事の在席を伴って、海軍少尉シミトが現れた、問題を持って。日本人を罰して欲しいとの、彼の妻を侮辱したことで。私は返答した、彼の妻の苦情を受け、従者達の証言を選び出した。遅れることなく英語に翻訳し、全てを日本の裁判所に送った。事件が何時終わり、被告にどのような処罰が下されるかという質問には、もちろん私はしっかりと答えることは出来ない。これは領事館の仕事ではなく，日本の裁判所の仕事であるから。この返答に不満である海軍少尉シミトは話し始めた、船から水兵達を連れ出し，彼の妻を侮辱した犯人をむち打つか、通りで彼を簡単に殺すと、この卑劣さを許すことが出来ないとして。私はシミトを留めなければならない、とにかく彼は執務に脅しをかけたので。しかし、シミトは留まっていな

かった、領事館職員の執務に不作法に振る舞った。シミトが成した脅迫は日本人による彼の妻への侮辱が原因の点から見て、もし、存在するならば、極めて哀れな後者に対して成される。彼らの遂行に対する手段を採用することをお願いさせていただきます。よろしく。領事コスチレフ」。

ボブル号の船長モラスは、何か変だと疑い始めた：普通は、そのような事件に関した海軍将校はいたことがなかった。彼らは自制することができた。彼は決めた、シミとのそのような常規を失った振る舞いは精神病の結果であると。長崎湾には、ロシア人の小病院以外に、浦上病院があった、日本人の専門家である栗本が指導していた。彼はヨーロッパの首都であるサンクトペテルブルグとパリで医学教育を受けていた。砲艦ボブル号の医者ニコライ・ペトロビッチ・ソルハの真剣な要請にしたがって、旗艦の医者で５等文官のスメツクの所で協議会を催した。医者達はシミトを入院させるように勧めた、艦隊の司令官の書面での命令に従ってなされた。１８９７年１月に、ピョートル・ペトロビッチ・シミトは１週間以上、長崎の海軍病院にいた。この間、彼を見たのは医者のアンドレイ・ドミトリエビッチ・ボロシン博士であった、水兵と将校の小病院を運営していた。

皇太子の到着

皇太子ニコライ・アレクサンドロビッチの世界一周航海は彼の教育課程の完了にあわせられた（中学校８年、大学４年、追加の１年)。アレクサンドル３世は希望した、息子が世界を知り、東から西まで全ロシアを見聞することを。ニコライ・アレクサンドロビッチは大シベリア鉄道の建設の起工式に出席しなければならなかった。皇太子の乗ったフリゲート艦パーミャチ・アゾバ号は、この航海に常時艦隊を伴っていた。その中にフリゲート艦ウラジミル・モノマフ号が入っていた。同行艦としては、適宜に、巡洋艦アドミラル・コルニロフ号、アドミラル・ナヒモフ号、クリッパー艦ジギト号、砲艦ザポロジェッツ号、コレーツ号、マンチュール号、ボブル号が参加した。

旅行はモレブナでの祈りの後、１８９０年１０月２３日に始まった。１８９１年８月４日、ツアルコエセローへ皇太子が帰還して完了した。３３歳のウフトムスキイが史料編集員となった、彼は皇太子の随員の１人となった出発の３日後に。東方に対する興味は、家族の伝統の影響により、ウフトムスキイに生まれたものであった：彼の母系は、チェスメンスク海戦の英雄、将軍グレイクの子孫であった。彼の曾祖父、海軍将軍グレイクは１８０６年－１８１２年のロシア・トルコ戦争の英雄であった。父、ウフトムスキイはフリゲート艦アスコリド号の上級将校であった。さらに、サンクトペテルブルグ大学の歴史哲学学部での勉学時に、ウフトムスキイは非常に東方に興味を持った。これらの国々の文化を勉強した、特に仏教について。

ニコライ・アレクサンドロビッチは１８９１年４月１５日日本にやって来た、ロシア艦隊の６隻を同伴して。沢山の日本船がロシアの玉座の後継者を迎えてくれた、２１台の祝砲によって。高位の客の心からの出迎えが組織された、それにはこ有栖川宮タルヒト王子が参加した。彼は１８８２年にはロシアにおり、アレクサンドル３世の即位式に参加した。

１８８９年に、ペテルブルグを再訪した時に，皇太子と親交を結んだ。

ニコライ・アレクサンドロビッチの日本訪問は非常に友好的な状況下で行われた、が、がこれは表向きであった。日本はもう無力の国ではなかった、プチャーチンが訪れた時のような。日本は軍事力を強力に進めていた。多くの日本人には帝国としての意向がつきものであった。１８９０年が境界となった。外国の強国を敬意を持って見ることを止めたときに。逆に、彼らは見なした、アジアで他の国々対して優先権を持っていると。日本はロシアの極東への拡張を不安を持ってみていた。日本の幾つかの新聞は、皇太子の旅行を、日本を自分の影響下に入れたいというロシアの願望と関係づけていた。

ニコライ・アレクサンドロビッチが長崎に滞在していた７日間、彼は随員と一緒にお忍びで町を散策した。「昼には我々を古いお宮へ招聘した＊＊＊＊＊＊、実のことを言うと、何に興味もない：先人と英雄を記念する寺院はただただひろくておおきい､派手さはなく、ついには神官の外見も（彼らのゆったりとした儀式服装と白い帯を持った黒い帽子には)。偶像はない。＊＊＊＊＊＊＊＊。高いブロンズ製の噴水と白い陶器の塔。最も幼稚な；宗教に対する欲人の関係。小さいほこらの付近には御茶屋が配置されている、小さい池を伴った、着飾った女中とともに。」

長崎の名勝地の内、稲佐のロシア人村とロシア人墓地のある仏教の剛心寺が皇太子の興味を引いた。高位の客の訪問前に墓地は整理整頓がなされていた。墓が荒廃の中にあるのを､奉行は見つけて、清浄した、当時の僧侶に約束して、彼が率先だって墓地を保存すると。そうでないと誰か他の者に渡すと。皇太子はお忍びで墓地を訪問した、その際、塀の鍵を待つことなく、それを通り抜けて墓地へ｣。墓の周りを歩き回り、皇太子はお寺に立ち寄った、岡村司祭と話をした。当時、剛心寺には４人の修道士が住んでいた。その内の年長者はアスコリド号の船長ウンコフスキイと上級将校ウフトムスキイを良く覚えていた、彼らの子供達は皇太子と一緒に世界一周航海を成し遂げた。日本へのロシアの使節シェビッチ、皇太子に同行した、ロシア人墓地のために５０円を寄付した。実際において、司祭は礼拝堂のために金を借りていた。皇太子が去った後に、修道士は特別なシートで座席を包んだ、それに利用された。

散歩の時に、皇太子と彼の随員は確信した、長崎の人々はロシア人と仲が良いことを。町では、多くのロシア風軽食堂が営業していた、特に居酒屋「クロンシタット」が水兵達の間で人気があった。随伴者の１人が書いていた､「簡単なことではなかった、明らかに、ロシア人にとってアジア人と仲良くやっていくのは。彼らの間で、意見の一致のその様な組み合わせ、存在する生活問題に関する、精神の類似性の若干の種類は常に急速に本当に密なやり方で定まる。国民的な精神物理学の外観の深くかつ根本的差異において、日本人とロシア人はお互いに兄弟のようである、ヨーロッパ人より。日出ずる国の住民達は本能的に我々に感じていた、大きな宗教的世界の一部を、それの神秘性は杓子定規的な学者と並んで、霧のかかった単語「東方」と呼ばれる、すなわち、想像の平静さの懐。そこから歴史的な舞台へ、大昔からお祓いしに出て、我々の苦界を照らしている、偉大な世界の創造者と修道士ー苦行者達は。」

長崎で客達はパスハを祝った。ホテルのバルコニーから皇太子は，フリゲート艦パミャチ・アゾバ号と面白い日本の花火を見た、黒い煙の房から風に乗って開く、小さい爆弾やロケットが、小旗や球、奇妙な人形、獣や鳥が風で散らばっている、色紙でできている。」

水兵をスペクタクルに配置した、３つの絵の内のキリスト教的生活のテーマで：「自分の頭に」、「帰宅」と「お陰様で」＊＊＊＊＊＊。

ロシア船に、有栖川宮タルヒト王子の公式訪問があった。オハト桟橋には、中将川上、進取の気性で有名な海軍少将伊藤、三宮公の秘書、式典係男爵マデンコジ、ロシア語を話す正教徒と山之内が同行した。

訪問の１日に，皇太子と彼の随員達は中野知事の公邸に招待された。ご馳走は狭いホールで行われた、屋根のあるベランダに似た：前方には（開かれた屏風のような窓の向こうに）中庭があった、殆ど植物が生えていない。我々は座る、床に足を押し込み、背中の後ろの壁に布団を敷いて。閣下には場所が割り当てられた、幾らか段のある。ご馳走の前に、食事のための漆塗りの容器と箸の付いたお膳が出される。女性の給仕（部分的に、多分、大事な場合に近くの宮廷関係者の家から）が食べ物を運んでくる、跪いてそれを客に勧める。豪華に着飾っている、正に蝋のよう、姿の外見は極めて独特：引裾付きの長い着物、高価な柄が織り込まれた、＊＊＊＊＊＊＊、羽のように。髪（カラスの羽より黒い）は確りと撫で付けられ、巻き付けられている、その際、花飾りが頭の上で歩く度に揺れている。輝く衣装は珊瑚とピンと鼈甲の櫛が散りばめられている。素晴らしい髪型、とことんまで複雑な、本当にせわしなく綺麗に床を拭く、その持ち主が寝る、机の代わりに木の小箱を下に置いて」。

午後には、大諏訪寺の見学会が催された、この寺は高台にあり、長崎の主要名所の１つと見なされている。「中庭から登っていくと、そこには礼拝者達に尊敬されている巨大なブロンズ製の馬が立っている、そこへは広い花崗岩の階段が段々となっている、所々に綺麗なポーチ（鳥居）、少し上に、（私の同行者の評価によれば）視線には素晴らしい光景が開けている：地平線は波打つ丘陵で囲まれている、湾や海を囲んでいる、あちこち、それに反射している葉の良く茂った海岸の色つき大理石で輝いている。太陽の光線さえをつまらなそうである、木々の暗い覆いの中で」。客達は新しい病院を見学した、その建設に、大公アレクサンドル・ミハイロビッチが積極的に寄与した。

知事の所で会食があった。「中野家での接待は、お祓い付きの昔からの風習にならっていた、甘くはなく香りの良いお茶、色々な甘い物、特に美味しい魚（鯛）、醤油漬けのペースト擬き、人工的に下ごしらえをした海藻（タモシラガ）、苔と根、地元産のキュウリと奇妙な外見の大根、鶏のスープ、焼いたひよこ付きの軽く切り刻んだ野鴨、美味しい豆とジャガイモ、生のタケノコ、卵付きの野菜のゼリー、米のケーキ、その他。」　料理に追加されたのは陶器に入った熱燗、米の日本式ウオッカである。ロシア人が驚いたのは、これは式典の一部であった。会食の最後には、主人がお客全員に酒を注いで回った。各人の前でしゃがみ、主人は客の健康を祝して飲んだ。その後、杯を洗い、それに新しい酒を注いだ、そして今度は客人に渡した、客人は主人の健康を祝して飲むことになる。

４月２１日、ロシア艦隊は長崎から鹿児島、そして神戸へと去らなければならなかった。出立の前に、皇太子は彼の随員達と一緒に、領事グリゴリイ・アレクサンドロビッチ・デ・ボルランの家で朝食をとった。領事は日本に６年ほど住んでいた、東方を良く知っていた。この間に彼が収集した民族的コレクション中に、大量にあった、木の標本、刀の彫り物の柄、紙と壁紙の各種、住居の稼働する壁のために日本人が利用していた、同じく、伝統的な履き物、楽器と農機具、センス用の絹製の紙と色紙、その他。１９１０年、外交官

は自分のコレクションから約３４０個の標本をクンストカメラ（ペテルブルグにある国立の民族博物館のようなもの　＊）の民族部局へ渡した。予定されていた、皇太子は約１月日本に滞在することが。しかし、大津での襲撃事件が訪問期間を短縮した・・・。

皇太子を乗せて、フリゲート艦パーミャチ・アゾバ号は何度か長崎に立ち寄った。１８９１年１２月２８日から１８９２年1月２４日まで、太平洋艦隊の海軍中将チルトフのもとでここに停泊した。１８９２年4月１２日から5月１０日まで、船は湾に立ち寄った、日本の海軍艦隊の演習の視察のために。結局、この年の夏である，７月１８日から２５日まで、ヨーロッパへ帰還する前に、水兵達は長崎に留まった。１９０６年の夏に、パーミャチ・アゾバ号の乗組員はロシアでの革命騒動に参加した。そのために、船からゲオルギエフスク旗、軍艦旗、ゲオルギエフスク十字架を取り上げた、名前さえも。ドビナ号と改名した。この名前で、船は第一次世界戦争に参加した、潜水艦の海洋基地として。１９１８年の１０月革命後、元の名前に復活した。１９１８年夏に、パーミャチ・アゾバ号はフィンランドからクロンシュタットへ戻った、上級海軍司令官の旗艦としてゲリシングフォルスへ。１９１９年8月１９日、イギリスの水雷艇の攻撃により船は沈没した。１９２５年、船を引き上げ、金属に分解した。

ロシア帝国の艦隊の船の運命は悲劇的であった。ウラジミル・モノマフ号とアドミラル・ナヒモフ号は千島海戦で犠牲となった。砲艦コレーツ号は朝鮮のチェムリポ湾で乗組員によって爆破された。ボブル号はポルト・アルツルで１９０５年に沈没した。

皇太子ニコライ・アレクサンドロビッチの旅行の詳細は、ロシアで多くの情報を得た、ウフトムスキイの回想記の御陰で我々に明らかとなった。本は6年かかって書かれた、個々別々に出版され、全部で３巻となった。第１巻は「皇太子の東方旅行、１８９０年－１８９１年」の名称で、１８９３年に出版された；２巻と３巻は１８９５年と１８９７年に印刷された、ニコライ２世の東方旅行（１８９０年－１８９１年の）の名称で。本が出版されると直ちに、英語に、ドイツ語に、フランス語に翻訳され出版された。この本には，第一にウンコフスキイのテキストを利用した、このテキストでは、素晴らしい文学的言葉が情報量と組み合わさっていた、東方の民族の歴史、習慣、宗教に関する興味深い証拠の存在とともに。訳があって、ウンコフスキイは旅行からの帰還後に、ロシア地理学協会の会員に選出された、東方研究の専門家集団にそのまま加入した。

といっても、本に対する反響は褒め称えるものだけではなかった。ニコライ主教（日本在住の正教の宣教師　＊）が書いていた：豪華な出版物、素晴らしい挿絵と極めて悪い文章、夜毎に読み，皇太子の日本訪問全てを読み上げることになる；大公はうつらうつらをうわごとを言う、日出づる国で寝覚めることが未だ上手くできない；彼は目が覚めたのであろうか、自信過剰と仏教の無知とでボーとなり。」　少なくとも、１８９１年以降に、ウンコフスキイを専門家の質として惹きつけた、ロシアと極東の外交問題の解決に、彼は広い可能性を手にした、自身の広い東方好きの視点のプロパガンダのための：新聞サンクトペテルブルグを通じて、１８９６年に手に入れた、同じく彼が指導している露中銀行と満州鉄道の管理を通して。

ニコライ・ニコラエビッチ・カラジン（１８４２年－１９０８年）の素晴らしい挿絵が、本の成功に大いなる役を果たした、彼はパリでのドレとジロの弟子、サンクトペテルブルグ画家アカデミーの自由な会員（？　＊）、ロシア水彩画家協会の創設者の１人。カラジ

ンは、ロシアのドレとして、彼をしばしば同時代人達は呼んでいた。画家としてだけではなく、民俗学の作家であり、旅行家であった。彼は軍で自分の出世を始めた、１８６０年から１８７０年に於けるロシア軍の中央アジア遠征に参加して。ロシア軍の初めての特派員・挿絵画家の１人となった、１８７６年から１８７８年に、雑誌「世界の挿絵」に挿絵としてレポルタージュを発刊した。ロシアや外国の定期出版物がカラジンの絵を掲載した：「ニバ」、「絵画による概説」、「北」、「ウエバーランドとメー」、「グラフィック」、「イラストレーション」、「イラストレーション　ロンドン　ニュース」。１８７４年から１８７９年、カラジンはロシア地理学協会の探検に参加した、中東への。１８９０年から１８９１年、彼はインドを旅行した。これにより，多くの詳細が良くわかるようになった。ウフトムスキイの「東方旅行」－全部で３巻－に対して、カラジンの挿絵は豊富であった、７００以上。

ウフトムスキイの文章は意外な挿絵を伴っていた、写真の原板に書き写す方法で造られた。それは非常に少ない、出版された「東方旅行」の３巻で、全部で６枚の写真。この説明は非常に簡単である：皇太子の随員の中に写真の専門家がいなかった。往時は、写真が一般的になっていなかったので、ニコライ・アレクサンドロビッチの旅行に、画家のニコライ・ニコラエビッチ・グリチェンコ（１８５６年－１９００年）が出向された。彼はクロンシュタット海軍学校を修了し、軍艦で航海し、装甲艦クレイゼル号で世界一周を成し遂げていた。１８８５年－１８８７年に、グリチェンコはサンクトペテルブルグ絵画アカデミーで勉強し、その後パリへ。１８９４年から、海軍省の公認画家となった。ニコライ・アレクサンドロビッチとの旅行時､グリチェンコは水彩の風景画と海洋画を沢山描いた。それらは艦隊が訪問したエキゾチックな国々の自然を銘記していた。それら作品の内の約００枚が国立ロシア博物館に保存されている。

大化学者の孫娘

ニコライ・アレクサンドロビッチの随員の中に、兵曹長ウラジミル・ドミトリエビッチ・メンデレーフ（１８６５年1月２日－１８９８年１２月１９日）がいた。学者メンデレーフの息子である。海軍学校を修了後、彼は１８９０年3月１２日から、フリゲート艦パミャチ・アゾバ号に勤務した。多くの船乗り達と同じように、ウラジミルは長崎で日本人妻を持った、港での停泊期間中だけ婚姻関係を持つという約束を結んで。ロシア人の船乗りに対する日本女性の愛着は強いものがあった。彼との間に子供を儲け、関係を継続する希望を失わなかった。明らかに，ウラジミル自身は彼女の意向に同調しなかった、日本人女性の手紙で監視されるという、ウラジミル宛の、１８９３年4月６（１８）日付けの（手紙の正書法（？　＊）が守られていた－著者)。

「私は貴方からの手紙を耐えられないほど待っていた。漸く，私が貴方の手紙を受け取った時、私は喜びの余り手紙に抱きついた。その時の幸せはいかほどか。志賀さんが私の所にやって来て、貴方の手紙を詳細に私に読んで聞かせた。私は貴方が元気であることを知りました。私は1月１６（２８）日、夜１０時に、娘を出産しました。神の御陰で赤ん

坊は健康です、私は赤ん坊に富士山にあやかって、オフジと命名しました。沢山の人からオフジはお土産をもらいました。彼らは私達のオフジを見て、赤ん坊は貴方に良く似ているといっています。カボチャを真二つにしたようと（日本語では、瓜坊二つに割りし如し。ロシア語では、２つの雨粒の如しー著者）。これによって私は本当に安心しました、貴方に関する陰鬱な噂。最近、私は手にしました、志賀さんの尽力の御陰で、オコオさんから貴方が送ってくれた２１円５１銭を；これには貴方に感謝します。私の許可の前日に，すなわち1月１５（２７）日に、私の母が亡くなりました。本当に悲しいです。貴方が日本を去ってから、誰からのお金を受け取っていません。その間、私の母は病気で寝たきりでした、結局母を埋葬することになりました。娘が生まれました、これらで出費が重なりました。私は誰にもお金を頼めません。そういうことで、私はペテロフさんに頼まざるを得ませんでした。きっと、彼の所にもお金はありません。というのは、彼は私に１０円を３回にわたって貸し付け、１０円を娘のためにくれた。こうして、私はペテロフさんから４０円を得た。貴方が長崎を去って以来、私は時計、指輪、その他を質に入れ、知人から２００円余りを手に入れた。貴方から一度も手紙を手にできないでどれだけ悩んだか、貴方に説明することは出来ない。我々日本では、新生児のために祝日を祝います、赤ん坊に新しい着物を着せます、教会を訪れます、赤ん坊と知人と一緒に。親類と知人を食事に招待します；これら必要な金を私は手にすることが出来ません。こういうわけで、私は知人を前にして本当に恥ずかしいです。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊、私は再婚したくはありません。そういうわけで、母が亡くなったと、私は赤ん坊と一緒に貴方をただ待っています。母が亡くなったので、私は実家に戻らなくてはなりません。家を買い、そこに住みます。私と赤ん坊は貴方を、貴方の手紙を待っています。私は貴方に送りたい、直ぐにでも、私たちの娘の写真を。が、今は未だしていません。が、次の手紙を送ります、手紙を書いたり、私にお金を送ったりするときは、いつも志賀さんを通じてです。私と娘は貴方の健康を祈っています。貴方が私達を忘れることなく、或いは貴方は私達の力であるために。

貴方の貞節なタカ。志賀が翻訳した。長崎、１８９３年4月6（１８）日」。

ドミトリイ。イワノビッチ・メンデレーフが孫娘が生まれたことを知った。彼は毎月、日本円を送った、保育のために。１８９４年7月１８（6）日，長崎で書かれた手紙で語っている：

「親愛なるドミトリイ・イワノビッチ、長い筆無精を許してください、健在でいますか。私達は可愛い我が子のオフジとともに健康です。オフジは歩けるようになりました；この際、＊＊＊＊＊＊を同封します。この返答として貴方のポートレートをお送りください。ウラジミル・ドミトリエビッチから私は去年の１１月に手紙をいただきました、９３年9月２４日付けの、巡洋艦パミャチ・アゾバ号上で書いた。その時から既に時が過ぎ、彼は何も書いていない、彼の友人を通じてさえ、彼らはしばしばオフジを訪れていた。ワロージャから何の言葉も得ていない。このように長きにわたって、ワロージャについての知らせがなくて、私は大いに苦しんでいる。これ故、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。私の愛するワロージャについての情報を私にくれるならば。返事をお願いします。心から貴方の健康を願っています。貴方に献身します。

敬具　タカ秀島。」

タカは秀島家の出身であった、長崎近郊の住民達には良く知られた家族であった。特に佐賀の隣の県では。１８９３年４月６（１８）日の最初の手紙から、分かる、オフジはその年の１月１６（２８）日に生まれたことが。フルゲート艦パミャチ・アゾバ号で、ドミトリエフは１８９４年１０月９日まで勤務していた。彼は長崎を１８９２年４月と５月に訪れた。フリゲート艦が太平洋にいた時に（１８９０年６月１２日－１８９２年１０月３０日）。これ故、ウラジミルはタカと知り合いになることが出来た、皇太子と一緒に長崎を訪問した時か、１８９２年４月から５月辺りに。誰かが長崎で噂を広めた、タカの赤ん坊の父親はウラジミルではないと、これ故女性は非常に喜んだ、彼女の話した時に、赤ん坊が非常に彼に似ていると。１８９８年、メンデレーフは退役した、財務省下の航海教育に関する査察官の地位を得た。が、その年末に、インフルエンザにかかった、元に戻らなかった。１８９８年１２月１９日の彼の死亡後、秀島タカとロシアの関係が途切れた。ある説が存在する、彼女と娘は東京での地震時に亡くなったとの。

ボランテア

長崎の停泊地では、沢山の船を見ることが出来た。旅行家ビノグラドフが書いていた、「長崎の埠頭は極めて賑やかである。到来者達を直ぐに驚かせる、小舟や人力車は極めて丁寧で，安い価格で長崎の何処でも連れて行ってくれる。最初は人前で乗り物に乗るのは不快であることがヨーロッパ人を驚かした。が、彼らは直ぐに慣れた。馬車に乗って彼らは時々大声を上げた。ヨーロッパ人地区には歩道と電灯があった。日本の道には、小さい砂利が播かれ、踏み固められていた。夜毎、石油ランプが点いていた。家屋は木と土壁で出来ていた。屋根は瓦か金属。多くの家屋には庭があり、花のあるこった花壇があった、同じく果樹も：スモモ、ミカン、レモンなど。

わずかの家屋に、店舗と工場があった。行商人は全ての通りをせかせかと歩き回っていた、簡単な商品を呼びかけながら。が、ここには混乱と忙しさはなかった、中国人地区には典型的な。その様な印象が得られている、ここの人々全員が通りに追い出されているような、必要もないのに、生活のための戦いもなく、何かの祭りのように。全群衆は祝日のような雰囲気にあり、気持ちのより笑顔でない者は１人としていない。もし、時折、粗暴な声を聞いたならば、思ってかなわない、この声の主はヨーロッパ人のものと。日本人はどんな状況下でもその様には振る舞わない。日本人は何時も自分の感情を抑え、紳士的に振る舞う。通りで酔った日本人に出会うことはない。見かけることはない、ここでは不埒な欲悪さを、売春婦が付きまとうことを。例えば、ポルトサイドや他の港町のように。日本人は自由を愛する。が、この愛は自由のところで、知られた境界に移っていない。日本人は自由を利用する。それが他人の自由の邪魔をしない限りにおいて。自分の個人の人間的長所を認識し、日本人は他人のこの長所も敬っている。

外国船の指揮官は特に岸に居ようとはしなかった：１８８０年代半ばには、上海や香港での豪華さや住環境は、長崎より極めて上等であった。各艦隊の代表者達は岸の小さい

区画を賃貸した、そこでは自力で船の設備の特別の修理をすることが出来た。ロシアの船乗り達に、度々問題が起こった、長崎での停泊は必要ではないのではという。それにもかかわらず、ロシア船は立ち寄り続けた、好きになった湾に。１９世紀末に、軍艦と並んでしばしば巨大なボランテア船であるペテルブルグ号とニジニイ・ノブゴロド号が碇を降ろした、同じく、ロシアの蒸気船や商船も。

ボランテア船団の誕生年は１８７８年である。帝国協会本部が、ロシアの商業航海の協働のために、戦争を危惧し、高速蒸気船の獲得と、このための署名の予約に乗り出した時である。寄付はあっという間に集まった：ある者はコペイカを持ってきた、ある者は１０万ルーブルの大金を。９月２０日までには、３百万ルーブルが集まった。ハンブルグ・アメリカ株式会社は、この金で、最初の３隻の海洋蒸気船を購入した：ロシア号、モスクワ号、ペテルブルグ号、各々の排水量は約３千トン。それらは海軍に組み入れられた。が、ヨーロッパ戦争の恐れが通り過ぎたので、３隻は再び委員会に渡された。委員会はこれらの船を利用することが出来た、トルコから祖国へのロシア軍の移送のために。

ウラジオストクのボランテア船団事務所を，１８８０年春には、ウラジミル・アフリカノビッチ・テレンチェフが率いた。海軍省の快適な部屋ではなく、揺れる帆船の甲板で出世をした。彼は広い海洋教育を持った素晴らしい将校であった、沸き立つ情熱と沢山の知識を持った、他の将校達が持っていないような。１８７７年半ばに、サンクトペテルブルグ、ホノルル、日本への航海を成し遂げ、海軍大尉テレンチェフは長崎に立ち寄った、砲艦ゴルノスタイ号に乗って、その船を指揮していた。聞く所によると、将校達はゴルノスタイ号での勤務を極度に恐れていた。同僚の記憶によれば、テレンチェフはある意味で、矯正施設に変えた：将校の内の誰かが何時も拘留されていた、職務の遂行において。話していた、かってオホーツク海の航行時、船長は全ての将校達を拘留した、職務の未遂行でだけではなく。ただ１人の将校ビャジリンスキイだけが残った、順番で当直勤務に出た。当時、彼は上司から大目玉を食った、が、テレンチェフは自分の習慣を変えなかった、その後も。太平洋についての彼の素晴らしい知識は彼を助けた、この地域でのロシアの商業航海の調整において。

ボランテア船団の蒸気船は商業目的でも利用した。サハリンの流刑囚に荷物を運んだ。ウラジオストクへ軍事品その他の荷物を運んだ。そして逆も。実際において、１８８０年－１８８１年から２０世紀初めまでの期間にはモスクワ号、ペテルブルグ号、ウラジボストーク号は中国との複雑な関係で、レソフスク将軍の太平洋艦隊に組み入れられていた。１８８３年に、艦隊管理部は海軍省に引き渡した、１８８６年２月２４日、皇帝は承認した、ボランテア船団についての一時的条例を。それにはその目的が示されていた、オデッサと東の海洋の港の間の至急で郵便の商品と乗客の連絡を確保することの、国の商業の発展に寄与することの。

１８９３年に、ボランテア船団にさらに８隻の蒸気船が加わった。その際、オリョール号とサラトフ号は長さが約４００フート、排水量が約８０００トン、エンジンは１万馬力、速度は約１９ノット。それらの数値はイギリスや他の国々の優秀な巡洋艦と比較することが出来た。極東への定期路線への奉仕でロシアに大きな効果をもたらし、ボランテア船団の蒸気船は戦争時には、軍用船として任務に就くことが出来た。それは、１９０４年に起こった、露日戦争の開始時に：イギリスで創られた１３隻の蒸気船とボランテアは軍務に

組み入れられた。それらは第２太平洋艦隊の活動を保証した、同じく、中立国の船の監視も行った。

長崎のボランテア船団の代行機関は１８９６年夏に開かれた。それをニコライ・クレイが監督した。彼は自分の支所を大浦の第４７番地の家屋に置いていた。１９０２年１２月に、モイセイ・アキモビッチ・ギンツブルグがクレイの代わりとなった。モイセイは「モイセイ・ギンツブルグ株式会社」の社長であった。より儲けのある条件を提案していた。ギンツブルグの兄弟達は１８９３年に日本に移住した。長男は横浜に住み、船の偽装に従事していた、年下の弟は芸術作品を購っていた、長崎からそれらを運んでいた。

１９０６年初めに、戦争が終了した時、艦隊は長崎に戻ってきた。大浦の第５０番の家屋を使用して，ギンツブルグの商社はエージェントとして機能していた。ギンツブルグ自身は長崎に戻っていなかったにもかかわらず。１９０９年３月に、ギンツブルグ株式会社の長崎支所は閉鎖された。が、ロシアボランテア船団の代理店－アズベレフが管理していたがーは以前の住所に残った。第一次世界戦争の開始（１９１４年７月　＊）から、ボランテア船団の船は再び動くようになった。１０月革命、内政干渉と国内戦の後、多くの蒸気船は他国にいた。ソビエト政府は裁判を通してそれらの船の帰還を実現した。１９２２年、ボランテア船団はロシア商船団の名前で復活した、。１９２５年、ソビエト商船団に組み入れられた。がこの時期には長崎の代理店は閉鎖されていた、ロシア船はこの港に立ち寄ることがなくなっていたので。１９２６年初めに、長崎商工会議所が、ロシアとの商業関係を復活する試みに着手した。が、それは上手く行かなかった。

アントン・チェーホフの友人

長崎のロシア人墓地の中の墓の一つはボランテア船団の船医アレクサンドル・ビクトロビッチ・シェルバクのものである。青年期に，彼は既にボランテアとして働き始めていた、幾つかの戦役を経て。サンクトペテルブルグ医療外科アカデミーを優秀な成績で修了し、シェルバクは赤十字隊に勤めた、セルビア・トルコ戦争に参加した。トルコ人とのある小競り合いで、彼は負傷し、チェルノゴリアに残留した。直に、ロシア・トルコ戦争が始まった。シェルバクを赤十字協会の医療静養所に真っ先に送った、皇太子アレクサンドル・アレクサンドロビッチ隊の。１８８０年－１８８１年、医者はアハル・テキンスコイ探検隊に参加した、そこでは彼の監督下になった、幾つかの衛生の栄養の場所が組織された。同時代人の記憶によれば、彼は何時も、緊急医療を要求する所にいた。

遠征の印象を紙に書き残すことを，シェルバックは医療活動の開始時から始めていた。チェルノゴリアから彼は新聞「声」に特派員通信を書いていた。大分遅れた視察を元に２冊の本を出版した：「チェルノゴリアとトルコとの戦争、１８７７年－１８７８年の」と「アハル・テキンスカヤ探検、オコベレフ将軍の、１８８０年－１８８１年における」。後者の本は最初は新聞「秩序」の特派員報告として日の目を見た、１８８０年－１８８１年に。遠征から帰還した後、シェルバックはアレクサンドロフスク病院の上級医師として指名された、サンクトペテルブルグの労務者達のための。ある時、彼は政治に熱中し、「ネチャエフ事件」に関して投獄された。

ボランテア船団の船医として、シェルバックは何度もサハリンへ。シベリアの奥地への流刑囚と一緒となった。流刑囚達と話し合い、サハリンにおける彼らの生活を見聞し、彼は「新時代」のために、ルポルタージュ「サハリンへの手紙」と「中国海における流刑囚達と」を書いた。これら以外に、流刑に関するシェルバクの幾つかの記事が「流刑通報」に載った。社会評論家シェルバクに、軍部と懲役は叙情的なスケッチをもたらしている、彼の記事中で、沢山の興味を引く民俗学的観察に出会える。

シェルバックはチェーホフと、ペテルブルグ号の船医の時に、蒸気船の上で出会った。ウラジオストクからオデッサは１８９０年１０月１９日に航路が結ばれた。チェーホフが当時書いていた：「シェルパック医師と知り合いとなった。私からすると，この人物は素晴らしい人である。彼が働いていたそこでは，皆が彼を好きである、私は彼と親交を交わした。昔は彼には悪魔がはまり込んでしまうカーシャ（粥　＊）があった（？　＊）。」

良く知られている、チェーホフは何の公的な命令が無くして自費でサハリンに行ったことが、新聞「新時代」の証明書だけを持って。プリアムールの知事と主刑務所管理所長は彼に許可しなかった、政治流刑囚と会い話をすることを。が、彼は自己責任でこれを行った。ヨーロッパに戻り、彼らの手紙の束をサハリンから運びんだ。その際、彼をシェルバクが助けたことは明かである。５０日以上彼らは航海を共にしており、密接に付き合った。チェーホフはシェルバクより１０歳若かったにもかかわらず。２人の医者の付き合いは文通を通じて継続した。チェーホフへのシェルバクの手紙は非常に謙虚で明けっ広げであった。それから判断すると、シェルバクはチェーホフに相談をしていた、ある時、シェルバクはチェーホフに自分の本の出版について、スボリンを通して奔走してくれるように頼んでいた。チェーホフは喜んでこの依頼をかなえた、しかし、本は出版されなかった。シェルバックは資料集めで作家を助けた、写真を送った、サハリンのドゥイスカヤ電報局の局長パブロフスクの。チェーホフは替わってシェルバクに本を送った。

人生の最後の年には，シェルバクは咽頭と舌のガンにかかった。１８９４年9月９日、航海時に，彼は亡くなった、長崎で、４６歳で。

初めての探検、ウラジオストクでの長崎県人

公式の露日関係が出来上がると、日本に初めてのロシア領事にゴシケビッチがなった。その時、ヨーロッパの図面に従って建造された日本船が初めてロシアに向かうことが決まった。ゴシケビッチが１８６１年3月１２（２４）日に書いていた：「日本政府はこの年にニコラエフスクへここで建造された船を派遣することを決めた。この派遣の目的は沢山あった。自分等の将校に海洋の実践の経験を持たせること、港湾の人や水先案内人の様子を観察すること、河口の様子を見ること，その他には日本と我らが東の港の間でどのような商業が可能なのか等を。私は日本政府を信じさせた、この探検の目的達成のためには我が国側から全面的支援を与えると、何の秘密もなくして。」　領事は自分の通訳見習いのフェドル・カルリオニを日本から派遣した。

１８６１年5月２５日、スクーナー船カリタ丸が函館を出航し，アムールへの航路をと

った。その船の船長はミスノ・シウドアイであった。第１将校はタキダ・愛三郎、第２将校はフチタ・修馬、第３将校はキタオガ・健三郎、第４将校はイオゲセニ・シキパツロウ。第１航海士はエビノセ・エシロ、第２航海士はカチオ・右衛門、医者はフカシオ・オスン。船員は２７名であった。同じく、船には２人の日本人企業家が乗っていた。彼らは絹製品、漆器、黄銅製壺、木製品と焼き物、茶器、絵、お茶、武器、蝋燭、日本酒、乾燥した海産物、その他の商品を持参していた。

この短い航行は、日本の建造における最初の独立した経験に少なくない欠点を露わにした。日本人達は非常に喜んだ、クリッパー艦ストレロック号が彼らの船をニコラエフスクに案内した時に。そこで、彼らは直ぐに船の修理をすることを要請した。修理無しには帰国することは出来なかった。日本人達は貴族会議の建物に腰を下ろした。その整備に役人が従事した、特別委任を受けた、プリモルスク地方の軍知事ワシリイ・コンスタンチノビッチ・ボデスコと建築家レオンチェフの。

ロシア人は面目を保ち、充分に歓待をした。１８６１年６月２６日、立派なホテルで盛大な会食が行われた、そこでは毎晩音楽が鳴り響いていた。総額で２５０ルーブルの支出は饗応の盛大さに一致していた。その時、露日の地方同士の交渉が行われた。それにはロシア側からアムールスキー会社代表のアレクサンドル・ワシリエビッチ・トゥピシェフ、ウラジミル・ワシリエビッチ・ラニン、同じく、露米会社代表も。商業問題以外に、国境の件に日本人は興味を持っていた。ロシア人達は注意を向けた、日本の代表達は非公式にし知りたがった、サハリンに関してのロシア側の意向を、同じく、この島におけるロシア人基地の配置と村落について。ロシア人は話した、来年に、アニワ湾に船を派遣するであろうと。日本とロシアの間に生じている問題を検討した。

交渉は確りと進んだ、若いカルリオニは通訳としての職務の対応が悪かった。これに関して、シベリア艦隊参謀部が自分の通訳のドイツ人のクハを割り当てた。ロシア人は日本人に素晴らしいカービン銃をプレゼントした、同じく、生の魚、リキュール、他の食料品も提供した、ジャムも含めて。

１８６１年１０月２０日、長崎からウラジオストクへ、アメリカ国旗を着けた最初の商船が到着した。この船は蒸気船セントルイス号であった、長崎の会社ワルシの所属の。船長はシベリア艦隊の軍艦のための供給品を持っていた。彼は同じく情報を集めたがっていた、ナマコと昆布についての。海岸線にある、その収獲を始めるために。当時の湾の管理責任者ブラチェックが書いていた、「船の到着を利用して、私は金の続く限り、雄牛を買いあさった。２２日、この船は蒸気を吐きながら出港していった。この船には、ワルシ自身ー極めて教養があり，好人物のアメリカ人であるーが乗っていた。彼らと過ごした２日間は鬱憤を晴らした、地域と中国語の研究に完全に没入して。」

１８７１年夏、ウラジオストクへオランダ電話会社の代表が電話線の施設のためにやって来た，ウラジオストクー長崎ー上海間の。ロシア政府は、この会社のためにアレウトスカヤとポシェトスカヤ通りの間の大きな地区を提供した。そこに小さい電話局とテニスコートのための広場を作った。１８７１年８月、ウラジオストクにスクリューフリゲート艦アフリカ号と軍用輸送船トルデンスケリド号がやって来た、この会社がチャーターした。アフリカ号には、ケーブルと特殊な器具が積まれていた、海底にケーブルを降ろすための。８月５日、電話局からアムールスキイ湾への導出により，新しい電話線の施設が始まった。

この後船は外洋に出て、長崎への航路をとった。

日本のロシアとの交易は、基本的に、ウラジオストクを通して行われた。既に１８７０年代の初めに、ここへ長崎から最初の商船がやって来ていた。輸出の基本的な品物は石炭であった、それほど良質ではなかったが。このように、１８７３年、石炭を蒸気船クリエル号が運んだ。時折、上海からウラジオストクの航路に、小型の蒸気船バイカル号が従事した、シェベレフ所有の。１８８６年、他の会社と並んで、日本の会社「日本郵船公社」がロシア沿岸への航路を始めた。日本人は長崎とウラジオストクの航路に蒸気船高千穂丸を宛てた、この船は修理後に乗客に快適な乗り心地を提供した、他の船より。日本へ運んだロシア製の商品の中に、良くあったのは，石油、更紗、帆布、油、塩漬け魚、タバコ製品とワイン。しかし、それらの量はたいした量ではなかった。日本人は沿海州に地元のお茶を輸出しようとした、が、ロシア人はそのお茶を好まなかった。

善隣友好関係の確立において、大きな役割を果たしたのは、人それ自身であった、特に，長崎出身者の島田であった。彼は１８８５年にウラジオストクに現れた、若干１５歳の時であった。翌年には、ニコラエフスク・ナ・アムールに去り、そこで商売に従事した。この日本人は正教徒となり、ピョートル・ニコラエビッチと名乗った。時が経って彼は会社「シマダ株式会社」を立ち上げた、会社は大成功を収めた。シマダは沢山の店を所有した。ロシアと日本の漁業関係の企業の間の仲介者の役割も果たした。長年にわたり、１９４５年に長崎で彼が亡くなるまで、彼はルーリの漁業会社と共同した、特に、島田はルーリを助けた、日本による満州占領時に。当時、「リューリとシマダ」と称する会社を共同経営した。

１８９６年３月、鉄道建設のために日本人労働者がウラジオストクにやって来た。ウスリースク鉄道建設に関する仕事の長ビャゼムスキイと請負人角賢三が契約を交わした。全員で１１３０人の日本人は熊本県出身者であり、日本で既にその様な仕事に就いていた。彼らの到着を日本領事館が出迎え，彼らを指導した。日本人の簡易な服装はロシア人を驚かせた、日本人の遠慮深い振る舞いも。日本の商社の代理人がこれについて注記していた：「新聞の情報欄記者を驚かせている外見のこざっぱりさは何も驚く物ではない：労働者の衣服はその地域の気候条件から形成されている。全ての労働者達に新しくより暖かい衣服の心配をすることは、経済的理由から、もちろん、同じ材料で同じ裁ち方の衣服がより都合が良い。具体的な秩序と申し分ない礼儀の遵守と長所は、他国へやって来た人々において、極めて本質であり、自制することを強いられ、＊＊＊＊＊＊＊推奨することを欲している。」

とにかく、礼儀の遵守にもかかわらず、夏には日本人労働者達は騒動を起こした、食事と俸給に不満を述べて。長崎の新聞「ライジング　サン」が、これに関して記事を出していた。混乱の首謀者を逮捕し、日本のエージェントの管理下に置いた。日本に彼らを送り返した、そこで、警察が彼らを処置した。

１９０３年末に、ウラジオストクに２９９６人の日本人が記録されていた。その内の１５８６人が男性、１４１０人が女性。家族数は１８２世帯。基本的に彼らは簡単な店を開いていた、商品販売、或いは、注文による日常の世話を。日本人の多くは洗濯屋をしていた、４２軒。日本人の写真館は６軒。日本人はウラジオストクでは良い写真屋と見なされていた。写真屋の仕事はそれほど儲けはなかったが。写真屋はしばしば開店されたが、そ

れだけ直ぐに閉店もされた。ウラジオストクで色々な時期に働いていた写真屋の大半は長崎出身者であった、森、内藤、野尻、池田、大下、島崎、山口、上野とその他。　彼らの内の一人について、新聞「ウラジオストク」が書いていた、「我々には数多くの素人のカメラマンがいるのにもかかわらず、彼らは大量の収獲を手に入れている。時が経つ毎に。ここでは写真の費用が安くなっている、すなわち、撮影の値段が低くなっている。カメラマン以外に、写真を加工する職人が現れた。この技能は，良く知られているように、我々の隣人である日本で特に発展した。これ以外に、そこには多くの特殊な職人が居た、写真のポートレートを大きな布地への加工に従事する、それらを油絵の具で塗ったり、着物の刺繍したり。」

売春行為が極めて広がった。「１９０２年１２月での統計データによると、売春宿に３８４人の女性と７４人の男性が数えられた。このように、淫乱な生活をする者達は４５８人に達し、ウラジオストクにいる日本人の内の１３％に達した。売春宿に住んでいる３８４人はウラジオストクに住んでいる日本人女性の内の２７％に達した。疑いなく、その様な大量の日本人の売春婦は、ウラジオストクの日本人地区での生活のいかがわしい側面をなした。日本からの新しい売春婦達の流れは、幸運にも、極めて止まった、淫乱の目的で女性が外国に出国することを日本政府が厳しく禁止した御陰で。」

１９０７年、ウラジオストクに住んでいる３１７人の日本人の内、３００人が長崎出身者であった。残念ながら、対策にもかかわらず、彼女らの大半は売春婦の仕事をしていた。当時、貧しい農村（長崎地区でも希では無かった）の娘達は日本の「輸出商品」の一つであった。彼女らをしばしば「からゆきさん」と呼んだ。「外国からやって来た」ということを意味していた。日本民謡の研究者達は、「浦塩節」の歌詞を引用している、そこで歌われている：「おロシアは怖いし、マンザ（中国人　＊）は臭い、粋な日本人は金がない。」

現代の研究者である倉橋正直の意見によれば、「浦塩節は示している、日本の売春宿は日本人を受け入れなかった、彼らは多くは貧しかった；彼らと会うためには、女性自身が主人に支払った。同じように明らかである、日本人の売春婦は、社会の最低階級層に属していたにもかかわらず、中国人に対するロシア人の軽蔑的な関係を分かち合っていた。後になり、浦塩節は他の地方でも歌われるようになった、特に、満州、東南アジアの各国で、この、歌詞に変更はあった、国に応じて。

ウラジオストクに住んだ日本人は、他の歌も歌った、１９世紀の６０年代には。外国の船乗り達の間で流行った：「ジョンキネ、ジョンキネ、キネ、キネ、キネ、ジョンキネ、（長崎、横浜）ナガサキ、ヨコハマ、クピー、ママ、ルスキーシオン。」　歌詞の最初の部分は日本の原詩と殆ど同じならば、日本の歌詞「テンキナ節」の変形に、それは伴っている、＊＊＊＊＊＊の１つを、２番目の部分は日露のチャンポンであった、そこには日本の有名な港の名前が入っている、ロシア語を伴いながら、特に、日本風に歪められて。長崎ではこの歌は流行った、ロシア人の中で、彼らの日本人妻の間で。思うに、当時、同じような歌詞は少なくなかった、それらを日本だけではなく，ウラジオストクでも歌った。

海軍病院

長崎の軍の小病院は通常は１１月に開かれた、ウラジオストクの艦隊が冬の停留地としてやって来た時に。そして、３月１日に閉鎖された。病院には、病気の水兵以外に、しばしば市民も入院した。その時には、日本人の入院費用は外国人として１昼夜で３ドルした、結構高価であった。これ以外に、ロシア人の病人の大半は、町の病院で日本人の病人と一緒に居ることを好まなかった、ロシア人とは似ても居なかったので。更に嫌ったのは、通訳がいなかったことである。これ故、ロシア人は軍病院に入ることを指向した。

１８９４年－１８９５年に、アポロン・エブギラフォビッチ・チェレムチャンスキイが病院を運営した。サンクトペテルブルグ軍医療アカデミーを修了し、彼はバルチック艦隊で１２年間勤務した、１８９１年に３０歳の医師が極東に移動するまで。ウラジオストク海軍病院の上級医局員になり、チェレムチャンスキイは極東で初めて腫瘍除去手術に成功した。その結果を南ウスリスク地方の医学協会で報告をした。日本へは、彼は大きな希望を持って渡航した：彼は日本の医学を知りたい希望だけではなく、このエキゾチックな国も見たかった。

チェレムチャンスキイが書いていた、「海岸の軍の小病院は全てにおいて良く整っていた。病人は充分の数の下着を持っていた、良好な給食を、必要な時に風呂を、とにかく水道が通っていた。遂には、状況は、病人の水兵は自分の同胞達と一緒にいられた、病気の治療には極めて良い効果がある。病人の食糧は日本人の供給屋「キルへとコ」に委ねられた。その際、一食分の準備は小病院にある食堂で用意された、医師の監視の下で。コックと食堂従業者は供給者に雇われていた。兵卒の一食当たりの費用は３５セント、将校では７５セントを供給者は支払っていた。兵卒の通常の食事内容は：朝８時－お茶とパン。１２時に２皿の昼食（シーかスープと熱いもの－肉、カツレツ、魚）。３時にお茶。夕方６時に夕食、３皿の昼食と同じ、お茶付きで。

将校には朝食と昼食がある、各々４皿の。それ以外に朝は瓶入りの牛乳、お茶は昼は何時でも。医師の指示に従って、弱っている人や病人、絶食が必要な人のために、特別食が用意される。定食以外に、兵卒には、医師の見立てに従って、卵、牛乳、ブドウ酒、ビールが指定される、そのために、供給者は余分の支払いを受ける。

長崎海岸病院の運営者は市民の治療も受け入れている。病人の受け入れの費用がからないように努力を惜しまない。フランス艦隊の病人はロシアの軍医に依頼した。「ウラジオストクと南ウスリースク地方の住民にとって、日本は、特に長崎は、連絡の良さとその近接の御陰で、素晴らしい療養の地である。穏やかな気候は、病人に良い影響を与える、呼吸器官の慢性病、腎臓病を持っている。色々な種類の温泉の沢山の存在は沿海州地方から多くの病人を惹きつけている、病気の治療法を探している、日本での鉱泉水の利用という。・・・　神経系が悪化した人、脳の疲労のある人、一般的に神経系の不調のある人は、平穏な気候の素晴らしい日本で、自分の病気の安静と治療に取りかかっている。日本は神経系の病人には有益に作用する。同じような病人の個々の意見によれば、彼らは日本に来て生き返った。その通りだ！　ウラジオストクから日本にやって来てほんの３日、何という天候の違い、この独特な国における何という環境と印象の新鮮さ。環境の変化と日常仕事からの解放。その様な病人にとっては最高の薬。」　病院を通してのチェレムチャンスキイの仕事時には、その様な病人は約６０人いた。

医者としての職能の水準には疑問を挟むまでもなかった：全ての軍医はそれなりの教育を受けていた。少なくとも，時折、彼らの知識も長崎の好適な自然も助けとはならなかった。稲佐のロシア人墓地には新しい墓が出現した。クリッパー艦ウラジミル・モノマフ号の機関兵イグナチイ・シャブリンは１８９０年３月２８日、巡洋艦パミャチ・アゾバ号乗組員ハンス・ベリマンは１８９１年に長崎泊地で水死。１８９３年、海洋ボートオトバジュニイ号射手指揮官ドミトリイ・アブラモフが死亡。翌年に、ロシア人墓地にアストロモフ大佐を埋葬。アドミラル・ナヒモフ号の２４歳の水兵イワン・パシュチンは約１週間にわたり病に伏す。１８９５年1月１９日の夜、彼は病院で亡くなった。解剖を行い、チェレムチャンスキイが説明した、彼は腎臓を病んでいたと。その年、フリゲート艦ミニン号の火夫チチリンが亡くなった。、

１８９５年の秋、巡洋艦クレイセル号がウラジオストクに来航した時、その船長であるチモフェーフ中佐は病気になったように感じた。最初、彼は不快を湿った秋の天候のせいにした。が、血を伴った咳をするようになった。将校は病院に向かった。そして、司令部に、短期間の休息を願い出た。少しして、海軍省管理局から長崎に１月の休息の許可を得た。チモフェーフは上級将校ダビッチ中佐に船の指揮を委ねた。１０月９日、日本の同行する船に向かった。長崎へ、チモフェーフはヘトヘトになりながら、漸く将校用病院にたどり着いた。医者が一時的に不在であったので、病院は全力で応対できなかったが、準医が対応した。彼は砲艦マンチュール号の船医に伺いを立てた、その時長崎の停泊地にいた。残念ながら、医師の助力はもう将校には必要がなかった。

チルトフ中将、太平洋艦隊司令官、は報告書に書いていた：「停留地にマンチュール号が泊まり、この日ボランテア艦隊の蒸気船オリョール号が到着した御陰で、それに司祭が乗っていた，亡くなった司令官をそれなりの葬送で葬った。外国船全てが哀悼を示した、アメリカ船の音楽は稲佐に遺体を迎え入れ、墓地まで伴った：棺には水兵の隊列が伴った、全ての船から棺に花束が贈られた。」　１１月６日、クレイゼル号の指揮はベクレミシェフ中佐がとった。

下級兵士の患者の大半と、将校の何人かは梅毒に罹っていた。医師は疑った、日本においては同胞の売春婦の健康を誰も気にかけていないことを。船医の提案に従って、ロシアの司令部は一度ならず要請を行った、日本の政府に状況を管理するようにと。しかし、これは梅毒の罹患を低くすることにはならなかった。ロシア人の医師は日本人の同僚に援助を申し出た：売春婦の検査の委員会の仕事に参加するようにと。ロシア人医師が驚いたのは、検査に参加した彼らは非常に慎重に振る舞ったことに、女性にわずかな病変が見られた場合に，詳細な再検査をした事に。ロシア人水兵の検査も行われた。検査で明らかとなった、彼らは非合法の売春婦の接待を受けていたことが、彼女らは長崎には少なくいた。政府は梅毒とと戦ったが，無駄であった。

ロシア人墓地に，初めてのロシア市民の墓が出現した：アレクサンドラ・ミハイロフスカヤ（１８８８年1月２２日死亡)、６ヶ月のバレンチナ・マクシモバヤ（１８９０年1月１３日)、５ヶ月のニーナ・テゼンコ（１８９５年)。多分この人達は、水兵の妻や子供であろう：将校の幾人かは、冬に彼らを、家族を日本に伴ってきていた。

１８９５年１２月１３日、死が１人のロシア人将校を連れ去った：２等級巡洋艦ジギト号の船長の中佐カール・ペトロビッチ・ミレル（１８４０年6月３０日生まれた）を。こ

の船乗りの過去には、数多くの遠洋航海があった。１８８２年から１８８３年に、当時まだクリッパー艦であったジギト号の海軍大尉ミレルの指揮下で、海軍少将チェビシェフの艦隊の一艦として地中海を航海した。１８８５年２月、世界一周航海時に、将校は将校は海軍中佐に任官した。マゼラン海峡を通過し、艦は太平洋に入り、ウラジオストクへの航路をとった。１８８５年の残りを，彼は韓国と日本の港の間を航行した。

１８８６年、ジギト号はチュコト海で危険な仕事に取り組んだ。同時に、艦は水理観測にも従事した。移動には水兵達は充分なる準備をした。同時代人が思い出している：「帆、索類、船用具類の大きな荷物が甲板上を塞いだ。船首甲板には牛のための仕切り。ボート置き場には羊のために船大工が作った柵。雄鳥と鴨の入った駕籠。上級将校達は不快感なしには見ていられなかった、クリッパー船の美人のような、しゃれた姿と綺麗さと秩序差で秀でていたものが、農村の宿屋と化しているのを。」　課題の遂行後、ジギト号はクロンシュタットに去って行った、数年後に再び極東に戻るために。ミレル海軍中佐にとって，この航海は稲佐のロシア人墓地で終了した。

１８９５年１２月２２日、朝８時、長崎の停泊地に、巡洋艦パミャチ・アゾバ号が到着した、海軍中将チルトフが座乗していた。停泊地で、彼は巡洋艦ザビヤカ号とクレイゼル号、水雷艇ウスリイ号とシンガリ号を見つけた。１２月３０日には、砲艦マンチューリ号がチェムリポからやって来た。チルトフが書いていた、「キリスト生誕記念日には、いつも通り、全艦船にモミの木が立てられ、演劇が開催された。」　海軍少将アレクセーフの旗艦ウラジミル・モノマフ号の乗組員は他の水兵達と一緒に祝日を祝うことが出来なかった：船は１８９６年1月５日に、長崎に到着した。

新年は変化で始まった。１８９６年1月１日、パミャチ・アゾバ号で、海軍省管理局から電報を受け取った：チルトフと海軍少将マカロフをバルチックに派遣した、前者は第２艦隊の上級司令官として、後者は第１艦隊の上級司令官の代理として。パミャチ・アゾバ号の船長であるチュフニンを海軍少将に任命した。

温泉での休息

ウラジオストクの多くの住民達は日本の温泉の有効性について知っていた、噂にではなく。それら温泉の利用の事始めはロシアの船乗りから始まった。彼らは長崎に立ち寄り、越冬でそこに止まった。ロシアの旅行案内書で明らかとなった、「日本の温泉の治癒力は我々の辺地では良く知られていた、多くの住民達はそこにあこがれ、日本で湯治をすることを。幸運な者はこの温泉に入ることが出来た、何度も、湯治場の設備の悪さにもかかわらずに、そこを訪れた者はまた来ようと努力した。」

新聞「ウラジオストク」が少なくない資料を公刊した、長崎の温泉に献げる、日出づる国の訪問の全般的印象について。記事の作者が自分の名前を明らかにするのは何時もではない。が、我々はその謎解きをすることは出来る。確りしたデータをもとにすれば。ニコリスク村の農民であるペレグリン・ワシリエビッチ・ボスクレセンスキイが新聞「ウラジオストク」の創刊記念日に、自分の村についての記事をその新聞で公表した。彼は結核の

療養をしに長崎に出かけた。が、温泉は助けにはならなかった。１８９６年3月１１日、ボスクレンスキイは５５歳で亡くなった。息子は彼を長崎に葬った。知られている、沿海州の地域研究者は最後の日まで日記を付けていたことが。もしそれが保存されていたならば、多くの興味あることを我々に知らせたであろう。

他の郷土歴史家であるミハイル・イワノビッチ・ドミトリエフは、１８６５年１０月１４日に生まれた。ウスリースク鉄道の建設に参加した。ある時期、彼はアナディリスク地方長官グレブニツキイの助手となった。１８９２年に2度、4月8日と7月２１日に、アムール地方研究協会で「チュコト地方」について報告講演をした。資料は出版するように勧められたが、活版印刷所がなかったので、手書きで出された。報告の一部分は新聞「ウラジオストク」に掲載されたが。ドミトリエフは療養で日本に出かけた、が効果はなかった。彼は１８９７年に亡くなり、長崎に葬られた。全く明らかである、日本についての詳細な印象記は、ドミトリエフの手によるものである、１８９６年に新聞ウラジオストクで公刊された。

「回り一帯の耕作地は素晴らし一情景をもたらしていた。様々な形状と色彩のこれらの緑の絨毯は雄弁に物語っていた、ここでの農業の繁栄を。丘と山は、あちこちで全く奇妙な輪郭の、農業の形態のパノラマの美を成し遂げている。ここでは、道は非常に良い状態にある。ロシア人が自分の国で馴染んでいるような、道の凸凹は全く見えない。所々に、結構な距離離れて土盛りがある、或いは、逆に、数サージェントの高さの切り立った崖の間に穴がある。日本人の働き好きの手によって造られたこれらの道は我慢強さに驚かせることを強いている。その我慢強さがこれらをなした。地方の電信線を見ると、我々の祖国の電信線の前に彼らの優位性に気がつく。我らの電信は、欠陥故に、しばしば故障で使えなくなる。日本人をそれを予見して、欠陥を除去している。ここでは、各電信柱は避雷針を持っており、多くの場所でケーブルの接続。この御陰で、電柱は損傷からより守られている、雷雨や強風のような時に。我々のロシアより。この道を進むと、良く小さな家屋に出会う。その上最優先に，確りした清潔さが目に飛び込んでくる。ここでは、多分、色々な衛生委員会の活動は必要とされない。住民自身が清潔さと几帳面さを持って自然になれている。」

日本での療養や休息の旅行は何の困難も、たらい回しもない。ウラジオストクの日本領事館は、希望者全員に喜んで日本のビザを与えている。長崎へは軍艦に乗って何時でもたどり着ける。日本の恵みの空気を呼吸するためにやって来たロシア人でごった返しは、地味な企業心に溢れている日本人には、そのままではなかった。目撃者が書いていた、「元高利貸しの内、先見の目のある企業家は長崎の町の家屋所有者となった、そしてホテルを開業した。誠実さが欠損しており、実は、その様な仕事は儲かる部門であった、商売はそのようなものであった。

多くのロシア人が訪れた温泉の内の一つが、嬉野の大村落（現佐賀県？　＊）であった。大浦湾岸に位置している、小さい村トリツがそこへの道の最初の分岐点であった。そこから蒸気船で更にスノキ（彼杵？　＊）へ進んでいく。嬉野ではホテル「大村」に訪問者達は泊まる。その建物の極近くに風呂がある。「２階建ての木造の離れ屋がある、ヨーロッパ様式の。番号付きの風呂が収まっている、２つに区分されている。幅が２アルシン（１アルシン＝約７１ｃｍ　＊）、長さが３アルシンの風呂は磨かれた灰色の大理石で外装を

施されている。風呂は開いた栓の助けで湯が満たされている、パイプに付けられた、各風呂の壁に沿って別々に配管された。が、そこにある栓で空に出来る。お湯の温度を変えるために、冷水が流れる特別のパイプが備わっている。温泉源自体はこの建物の近くにある、そこには水がパイプを通して流れ込んでいる。建物と並んで，風呂は庇を構えている、庇の下に広い風呂がある。線源からの湯は結構熱い、１秒も手をそれに入れて我慢することが出来ない。この場所は花崗岩で囲まれている、仕切り用の格子の扉、鍵がかかっている。朝から夜まで人が絶えることはない。男女の区分はされていない：年齢や性別に関係なく人々は詰め合っている、風呂は人の体の詰め合わせと化している。」

これらの不具合にもかかわらず、ロシア人達は風呂の構造には満足した、その時には彼らの食事は全く作らなかった「日本料理は様々な魚や野菜から主に出来ている、肉があるとはいえ。しかし、これら全ては国民的味で準備されている。ヨーロッパ風の味では全くない。それ以外に、とにかく小盛りである、提供された食事を食べるのに努力を要する、満腹感なくして席を立つことになる。お茶は日本風が提供される、それには馴染めない、無条件に、その時には拒否さえする、その後、この不味いものを試してみる。」　先人の体験から、温泉から出たロシア人は大量の缶詰を取ることを好んだ。

泉源では、しばしば盲目の按摩師が働いていた。ホテル「大村屋」の客のために、他のホテルでもそうであったが、旅回り芸人達がショウを開催していた。「演芸の場所－広さは充分な部屋；観客は壁付近に座った、部屋の中央には日本女性の踊り子、頭に円盤と茶碗を持って、自分の文化を発揮している。観衆はジッと息を殺しその動きを追った、時折人の声を失い、獣のうなり声のような叫び声を。機敏であった、種々の演技をして、頭から各種の品を落とさないで。その様な演技の遂行で踊り子が、拍手喝采を受けるのは希では無かった。」

時折、嬉野を一週間訪れ、ロシア人達は隣接する温泉地である武雄に向かった、人力車に乗って。そこへの２時間の行程は綺麗な農村風景の中での不思議な旅行であった。「この地方は結構確りした町であった、大きさもさることながら、良く整備されていた。浴場は嬉野よりも大きかった。浴場はある立派な通りの行き止まりの建っていた、通りの両側に、旅館が連なっていた、沢山の人々が訪れていることを証明していた。

旅館の部屋の様子は綺麗な日本様式であった、洋式らしい特徴は、外国人のために部屋に机と椅子があった。風呂の綺麗さときちんとしていることは、それ以上を希望することをさせてくれない。風呂の後には、日本のお茶が振る舞われる、部屋で・・・

ホテルの部屋への女中の呼び出しのために、呼び鈴はない、これは手を打つことに変わっている。ホテルの主人が偶に見にやって来る、女中と一緒になって支払いの説明をする、費用に基づいた内容も含んで。町の外れには沢山の工場と鉄道線がある、国の奥に向かっている。武雄のホテルは大きくて、３階建て、豪華さから若干の自惚れも。例えば、正確に言える、窓には、床から１アルシンの高さにある稼働の屏風の、花の模様のある曇りガラスが差し込まれている。綺麗な木の天井には漆が塗られている、廊下さえ暗い漆で塗られている。家屋への入口で靴を通常脱ぐ御陰で、室内は驚くほど綺麗に保たれている」。ロシア人は特記している、もし嬉野を外国人が訪問していないならば、武雄で彼らにたくさん出会うと。

他の温泉である雲仙への旅行、多くの時間を要した。最初は、人力車に乗って、長崎か

らモギ（長崎中心から南西方向に長崎半島を横断した港町の茂木？　＊）まで行く、結構大きな村落、湾岸に位置している。そこから，蒸気船で小浜（雲仙市の港町　＊）まで行く、雲仙に近接している村。波止場の近くに，２軒のホテルがある。そこには蒸気船に乗り遅れた者達が止まることになった。長崎から茂木に散歩がてらに海を伝って特別に来る人もいる。この地域は素晴らしい景色なので。ホテルの内の一つはその内装で、ヨーロッパを思い出させる、そして、従業員が英語だけではなくロシア語も少し話す。これは多くのアメリカ人やロシア人達が、毎年ここへやって来ていることで説明される。島原半島に接近するにつれて、遠くに著名な雲仙岳を見ることが出来る。この壮大な景色は、回りの山々の小ささでより引き立った。強い干満は埠頭への蒸気船の接近を難しいものとした。船は埠頭から数サージェントの所に碇を降ろした。訪問客へのサービスで，沢山の小舟がやってきた。波止場には通常、沢山の群衆が群れていた：ある者は知人と出会い、他の者は宿泊者を探す、更に他の者は好奇心からやって来ていた。

目撃者が書いていた、「小浜は結構大きな村である。村は小浜半島の海岸にひっそりと存在していた、片側は急峻な崖、他方は海の波に洗われている、この地域の住民達には監禁されているかのよう。村がある土地全体は、その周りと同じく奇妙な台地と崖からできている。火山の爆発後に形成された。これらの見たことも無い地域の形状から判断すると、古代における世界の大変動による事は明かである。その結果に、現在の大衆は納得している、自然の秘匿されている力について。

ズミヤホテルは埠頭にあった、そこから海や回りの素晴らしい景観に親しむことができた。小浜にはアルカリ性の温泉がある、効き目のあるこの温泉に入ることができる。木製の風呂は下の階にあり、板塀で囲まれている、光を入れるために、曇りガラスの窓がある。浴室の綺麗さは模範的であり、主人の世話好き、年配の老人、何か例外的である、比較して、先に生きていた人と、これら全てに対して、更にもし付け加えるならば、我々の他の同国人に近い生活をしていることを、一般の大変なその様な生活は多かれ少なかれ平静であろう。」

通常、風呂は朝から夜まで湯が満たされている、しかし、ロシア人は、付近の日本人村の住民と同じように、海岸で直接、自然の恵みを利用することに慣れている。海岸に沿って、余り距離が離れていなく４つの泉源があった。満潮時にはそれらは海水の下となり隠され、干潮時に出現した。そのたび毎に，２，３人の人がやって来て、穴から海水を汲み出した、そこには鍵がかかっていた。穴が温泉で満たされるまで待つことになっていた。その後、それに入浴した。直ぐに、飛び出し、海水に飛び込んだ。それほどこの泉源が熱かった。ロシア人は日本人の我慢強さには驚いた。他の国の住民と違って，５０度の温泉を日本人は味わっていた事に。

小浜から雲仙までは、ヨーロッパ風或いは日本風の駕籠でたどり着けた、乗馬でも。駕籠かきは普通に編まれたヨーロッパ風の椅子を提示した、２本の竹竿の両側に固定された。椅子の脚の所に、座っている人の足のための小さい板が結びつけられていた。道沿いの村落は少なくなっていった。時折、植生の疎らな山間にひっそりと存在する２，３軒の家屋が目に飛び込んできた。初めは雲仙は訪問者には悩ましかった。遠くからきつい硫黄の匂いがしていた。匂いは泉源に近づくにつれて強くなっていった。村の近くでは地面から噴き出している蒸気の騒音が聞こえた。何か壮大で異常な恐ろしい感覚が増大していった。

そこには植物はなかった、一帯は噴出した蒸気からの熱い硫黄の沈殿物で覆われていた。これ故、地面は奇妙な形状の廃墟を思わせた、全体の様子は陰気さを強めていた農地がなかったので。住民は農業に従事していなかった、日本人の勤労欲にもかかわらずに。旅行案内書は警告していた、この地の訪問においては、熟練したこの地の案内人が必要であると：「硫黄噴気孔などは２ベルストに渡っている．熱水は時折１０フィートも噴き出す。」

雲仙について，同じく火山についての世紀初の旅行者の印象、その力は尽きない、その現在の姿を確認した：以前にあったような大きな危険を起こしていないにもかかわらず、大惨事の噴火の繰り返しの可能性について考えさせることを強いた。目撃者が書いていた、「火口は時折地震や地下の衝撃を思い出させる。この年の６月２５日から２６日の深夜２時頃、その様な衝撃が聞かれた、地面の身震いがすごかった。建物は揺れ動いた。ホテルで寝ていた人々は目が覚め、ベットから起き上がり、朝まで寝付けなかった。その様な衝撃は、はっきりと感じられるような、ここでは年に５回ほど繰り返されている。：これには地域の住民達は慣れており、特に注意することはない。」

雲仙の名称は浴場のある３つの村の総称である。山の南麓にはコジゴク（小地獄？　＊）村がある。ここには比較的弱い泉源がある。名前は「小さい地獄」を意味している。新聞ウラジオストクが書いていた、「風呂のための湯は、近場にある沸き立っている沼から引き入れている、そこでは最も大きな：その長さは約１０サージェント、最も大きな幅は２サージェント。永遠に続く、沸き立ち、吹き出す沼の蒸気の泡のその大きな様子にもかかわらず、その湯は他の全ての泉源より極めて弱い、大量の硫化水素で全く硫酸を含んでいない。」

「小地獄には、２軒のホテルがある、一つは古くて良好、もう一つは少し悪い；日本人には常宿がある。多くの日本人達は雲仙に泊まることを好んでいる。シニア（新湯？　＊）と小地獄には彼らはわずかである。そこには家屋は１５軒から１７軒。古いホテルは山麓にあった、住民はそれより下に・・・　。共同浴場には、湯は１サージェントの高さから落ちている、病人も健常者も全員が共同浴場に浸かっている、熱い湯の流れを自分の背中にかけている。仕切られた共同浴場と並んで、小さい浴槽のある個室がある、１人で入りたい人のために。が、それは殆ど空である。一般において、人々は若干の休息を持ちながら，一日中入浴している。」

小地獄から徒歩で１５分から２０分の所に、シニア（新湯？　＊）村がある。そこは１９世紀末には、６軒だけがあり、全て訪問客のための旅館となっていた。その内の１軒を元ロシアの役人であったガリチャニンなる者が経営していた。彼の死後、事業は日本人に移った。目撃者が書いていた、１軒だけが訪問者には我慢できたが，残りは快適さは欠如していた。が、必要性のために提案されたものに満足するようになった。新湯には、３つの泉源があった。その内の最も強力とみなされたのは「新しい湯＝シンユ」であった、硫酸を多く含んでいた。給浴設備、小地獄のそれには劣っていた、は２つ：ヨーロッパ人のために一つ、仕切られた木製の風呂でできている。もう一つは日本人のために、２つの広い岩だらけの浴槽を持った。男性と女性のための共同風呂。

数年後に、ここへロシア人が来た時には、大いに変わっていた。新聞ウラジオストクの編集者の証言によれば、「２０世紀初めには，ここには既に１５軒の家屋があり、その中の５軒がホテルであった。その中で良いのはウンゼン、タカキ、シンユ。残りの２軒は小

さかった。各ホテルは自身の浴場を持っていた。それ以外に、共同浴場があり、両性のために板で仕切りされていた。」　地域の住民達はロシア人の購買者に自分の商品を売っていた。多くは長い杖を購入した、新湯の住民の１人が特別の木の根から作った。それらを長崎と同じように自分の村でも売っていた。長い杖は高くはなかった、が、丈夫で綺麗であった。新湯から小浜での道中に、写真屋があった。そこでは地域の情景の写真を売っていた、写真屋の主人は何時も写真撮影に呼び込んでいた。

北側斜面に、大規模な泉源から余り離れていない、ほかならぬ雲仙自身、小さい村落があった。ジボリドの説明書で「大地獄」として記載されている。そこから新湯までは徒歩で６分から７分。それらを小さい丘が分けている。丘は墓地になっていた。大きさからすると，村は小地獄と新湯の中間にあった。そこには１０軒ほどの家屋と、寺の残骸があった。１６３７年に島原でのキリスト教徒の蜂起時に破壊された。日本人のための大きな旅館と２つの浴場があった：一つはヨーロッパ人のための、もう一つは地域住民のための。ヨーロッパ人のための快適なホテルはここにはなかった、しかし、部屋を借り出すことはできた。２つの泉源からの湯の酸度は新湯の源泉に近かった。が、１つは鉄分が多かった、もう一つの湯はそれほどでもなかった。

この移住地に近づくと、遠方から、高い所から、峡谷に分散した、一連の家屋が見える、大きな柱、モクモク登る蒸気、熱い泉源から立ち上っている、山の緑の中に拡散している。段々接近すると、遂には、狭い谷に入り込む、うねった特徴をした、その間を小川が流れている、その中で清水と温泉が混じり合っている。硫黄の匂いを感じ、特に、泉源の方から風が吹いていると。沸騰している水の沢山の小川のせせらぎと蒸気のうなり声を聞き、地球の中心から吹き出してくる、＊＊＊＊＊＊＊。谷間と山の上地は所々露わになっている。特に、泉源の周りが、生石灰を思わせる。谷間の土地の所々は草で覆われ、家畜の餌に供されている。所々家や狭い庭に小さい庭園が。山の斜面は余り高くはない針葉樹で覆われている、葉の多い低木やヒバと混じり合って。それらは我々のところでは部屋の装飾として植木鉢で育っている。庭にはバラや他の花が咲いている。この場所より少し南には、個々の農民の畑がある。丸みががっている山の頂上は同じく密の藪、草地で覆われている。それらの間から様々な大きさのゴツゴツした黒い岩が突き出していた。」

４月初めは、山では未だ寒かった。が、５月に近づくにつれて、雲仙にはロシア人が集まり始めた、ウラジオストク、ウスリースク、プリアムール、イルクーツクからさえ、病気の快癒を求めて、シベリア生活の厳しい条件下で患った。「５月１日には、ここの３か村で生活している我が祖国の同郷人は６０人を数えた。この数の中には２０名の船乗り達も入っていた、長崎の兵舎からやって来た。訪問者の大多数は雲仙に、その後、新湯と小地獄にやって来た。一般的に、一時的な住民の生活面は大きな相違で特徴的であった：１人でホテルで生活する、２人か３人一緒に；他の例は同じく１人でホテルに、が、幾つかの家族が一緒になったグループが、家主のいる家を間借りする、長崎から食料品と生活用品を取り寄せながら。雲仙には幾つかの店があった、そこでは食料品、様々な小物、飲み物を売っていた。同時にそれらの店では立ち飲み屋も営業していた。

村には大きな浴場がある、削った裸石で囲まれた、深さは２アルシン。浴槽は男性と女性のために木のしきりで２つに分割されていた。その上には、簡易の木造の建物があった、ベンチがある。湯は近くの泉源から竹のパイプで流されていた、止まる事なく、余分な分

は穴に流されている、湯温を常に＋３２度に保つために。入口は閉じていなかった、入浴者達は脇から見ることができる。日本人達はここには全く寄り集まらない。」

軍医が雲仙に注目した。最初は、泉源での水兵の治療が唯一の目的であった。が、１８９７年に、太平洋艦隊司令官のアレクセーフがペテルブルグからの許可を得た後、雲仙に直ぐに２０人の患者を派遣した：３人はリュウマチ病み、２人は胃腸、残りは梅毒。彼ら全員は新湯で生活した。彼らにチェレフコフ医師が同伴した、彼は後になって、「海軍選集」の医療追加部分に論文「日本におけるロシア人の療養地としての雲仙」を発表した。６週間にわたる水兵の療養の結果は考え通り目覚ましいものであった：リューマチは完全に治癒した、梅毒患者では梅毒の外見が消えた、胃腸患者では病が癒えた。例外なく全員は体重が増えた。後になって，彼らが私に話した、「乗組員達は模範的に行動した：何の不満の様子も地域の日本人住民に引き起こさなかった、そこで生活している他のロシア人側にも。後者達は驚いていた：”彼らは水兵ではない、学寮の女生徒のようだ！”。」

その後、太平洋艦隊とシベリア艦隊の水兵達は雲仙の村に来るようになった、そこでは彼らのために家屋を借用した。納入業者を通じて食糧を得て、彼らは自炊をした。ここでは、水兵達は回りに良い印象を与えていた。雲仙で療養中の何人かのロシア人水兵達が泥道にはまり込んでいる馬車を見かけた。彼らはそれを引き出すことができた。が、見ると馬は全く弱っていた。彼らは馬を村まで引いていき、大切に世話をした、持ち主が現れるまで。

「全快したいという切なる願い、”温かい湯”の効用ある作用への深い信頼、全ての状況、それらの中に我々身内の病人達が住んでいた：彼らが目にした不思議で恐ろしい現象、大地の深奥から飛び出してくる泡の塊、たっぷりと流れ出す熱水の流れ、うなり、口笛のような音とシューという音、遠方からでも聞こえる、これら全ての壮大な恐ろしい自然は単純な人々の想像では思いもつかないことであった。多分、少なくない役割はここで果たしていた連帯保証の役割も。それらは結び合っていた；全員が各自のための、各自が全員のための責務を；同じく、我々将校の存在。艦隊からの大半の将校は雲仙にいた、当時８名。」

雲仙を訪れた他のロシア人が書いていた、「豊富な泉源、明らかに、尽きることはない。しかし、訪問者のための良好な施設の不存在は、多くの改良を希望することを強いた。泉源から湯を浴場に導く方法は、半ば腐った樋と竹で、結構長い距離を、明らかに状況を示していた、賃借人は投下資本の回収にだけ気を取られ、訪問者達の生活の改善についての要望を全く発揮していないことが、全ての住民に毎年大金を与えているのに、ホテルの所有者に、泉源の賃借人と同じく。個室の浴槽の建物は外見では全く物置である。その内装は全く悲惨である：建物に窓がないのでほぼ真っ暗。その様な不整備の結論として、各部屋に木の箱がある、それは最初は嫌な感じをもたらす、時と共に黒ずんでいく、この棺桶のような箱は浴槽である。」

温泉の訪問者に対する不満は日本の住居が醸し出している。ロシア人の意見によれば、家屋は寒い季節を生き延びることを全く予見していないことである。雲仙への旅行の最適な時期は４月、５月と見なされた、その時期は晴れで霧のない日にちが続いていた。逆の場合には、訪問者は、「燻る炭のある火鉢の回りに座り、綺麗なインクで書かれた数値を何度も見直す、帰還期間を示している；屏風を見る、そこは濃い霧、火口から吹き出す噴

煙と一緒になった、むき出しの山の頂上を太陽に暖める可能性を与えない。」しばしば、療養中の訪問者達は寒さに凍え，風邪をひいた。夏には、雲仙を訪問したロシア人の気分は暑さと湿気で最悪となった、この時期には、温度はウラジオストクより高くなった。日本語を知らないので、病人の誰も日本人の医者にかからなかった。温泉にはロシア人の医者はいなかった。病人の水兵に同行してきた軍医にかかるには、みっともないと思われた。

雲仙の各泉源の湯は成分が極めて異なっている。それは治療で訪問してくるロシア人だけではなく、医者にも知られるようになったのはそう昔のことではない。偶々な事であった、雲仙での不思議な回復について耳にしたウラジオストクの医者が，自分の患者にそこへ行くように勧めたのは、実際にはそこをよく理解しないで。地域の湯の特性の未知下で、時折多くの者達が浴場を乱用した故に、稲佐のロシア人墓地に新しい墓が出現した。残念なことに、熟練した医者が不在であったので、雲仙の訪問者で亡くなったのは１人ではなかった。亡くなった内の一人が一級商人イワン・ロマノビッチ・レベデフであった。彼はイルクーツクで１８４８年6月２４日に生まれた。若い時から、お茶の販売を生業とした。１８６６年3月２２日から、中国の漢江やその他の都市に住んだ。レベデフは１８８６年７月１５日、雲仙で亡くなった。

長崎の回りの温泉が知られるようになるにつれて、その設備は段々と良くなっていった。目撃者が書いていた、「源泉から直接に、ホテルの至る所に水道管を施設する。その様にして、充分な量の冷却水を得るために。残り全ての、多分、問題はそれほど将来ではない、最も良い助けなのにもかかわらず、この場合にはー競争、あるホテルでは１人のロシア人コックを住まわせた、これによりそこへ多くの客を惹きつけるために。」

プリモリエとプリアムールの住民の増加とともに、長崎にロシア人の療養所を設置するアイデアが生まれた。新聞ウラジオストクが書いていた、「注目すると、毎年政府が多額の金額を消費していることに、この地方での軍務のグループの療養を推薦する型で。１回だけの支払いが数万かは知らない。とにかく、ここへの訪問者、病人、休息し、自分の健康を回復したがっている。この地方へ再び残り続けた、その場所に新しい軍人を再び呼ぶことはしないで。今しているように。」　残念ながら、ロシアの行政機関はこの呼びかけに注目しなかった。

19世紀末：ロシアからの初めての民間人移住

長崎はロシア人の中に急速に愛着を獲得した。彼らは地域住民との友好溢れる関係に歓喜した、素晴らしい自然にも。植物学者スゼフが書いていた、「蒸気船が日本の沿岸に接近した時、世界で最も綺麗な長崎湾に入港する時、旅行者の視線を、山の多い島の絵に描いたような素晴らしい光景が楽しませる。トルコ色の海から突然に飛び出し、独特な綺麗な松林の。この森の中で、多彩に見える、ラテライトの崖錐とエメラルド色の植物が、小麦の山の斜面に規則正しく階段状に続いている。谷間は通常では田圃や他の栽培植物で占められていた。平野は確りと耕されて、菜園のごとくに。それらは果樹で回りを取り囲まれている、その中に、通常はマンダリン（ミカン)、アペリシン（オレンジ)、柿、琵琶、

漆の木、ハゼの木（その実を搾って蝋を取り出せる　＊）が。」

外国の代表団は通常は長崎に土地を買うか借用した、そこに倉庫や住居を建てるために。１９世紀末には、町を訪問した外国人達は、外人用アパートにおかれたホテルに滞在しなければならなかった。もし誰かが警察への通知なしで外人に住居を提供したことが知られると、外人に対して直ちに罰金が科された。実際において、水兵達はホテル内に自分の部屋を持つことを好んだ。停泊が短い時には、彼らは船に留まった。停泊が伸びる場合には、彼らは住居を借りた。

「主要な商業通りにある看板が私を驚かせた。看板は日本語とロシア語のものであった、所々で英語の看板に出会った。ロシア語の看板の単純さが驚きであった。例えば、”信頼できる靴屋”、”早い仕立屋”、”亀と象の皮の職人”。ロシア語の看板の内容を私はすぐに理解した。人混みの中で，私は結構ヨーロッパ人に出会った、彼らは殆どロシア語で話していた。」　ウラジオストクの旅行案内パンフレットが請け負っていた、「夏には，この町を沢山の外国人が訪れている、その中に、我々の沿海州地方からのロシア人が少なくは無い。ここには、太平洋艦隊の船に乗っている、我々の将校の家族が住んでいることは珍しくはない。ここから、多くの人が周りにある温泉での療養のために出かけている。」

統計によると，２０世紀初めにおいて、長崎での最大多数の外国人社会はロシア人であった：１４２人。基本的には、これは企業家と海軍に関係した人々であった。ロシア人病院に、医者のボロシンが勤めていた。長年そこに勤めていた彼の同僚であるエメリヤノフは、退職後に、長崎に残ることに決めた。彼は商社支所を開いた、医療品の注文を取り扱った。エメリヤノフは商品をドイツとロシアに注文することを選んだ。彼の意見によれば、日本の物は品質が劣っていたので。会社「ナパルコフ」を創設した牛乳屋ゲオルギイ・ナパルコフは沖仲仕の仕事をするようになった。彼は日本の正教会を大いに助けた、この慈善活動に対して金メダルを授与された、スタニスラフ・リボン付きの。ホテルの所有者コマロフ（メイン・ホテル）、ムリホフスカヤ（ナガサキ・ハウス）、リシェフ（ベレ・ビュー・ホテル）、長崎で自分の仕事を持っていた同じく商人のクラコフ。

ロシア出身者の何人かは、日本人との結婚後、ここに定住するようになった。ボルマンは１８９６年５月１日、２３歳の小浜出身の伊藤キクと結婚した。当時、彼らは南大和の１８番地に住んだ、長崎での最初の領事館の建物と並んで。１９０６年、ボルマンはロシア東アジア蒸気船会社のエージェントに任命された、その支社は大浦の４７番地の家屋に置かれた。

ボルンホルトはレックス捕鯨会社のエージェントを勤めた、インクベルはメス会社に、フェドロフは東中国鉄道会社のエージェントとして、オリガ・ルダコバはクルナウ会社で働いた。

長崎に，自分の代表機関を持っていた、太平洋捕鯨会社のエージェントである男爵グゴ・ゲンリホビッチ・ケイゼルリング（１８３３年－１９０３年）は。１８９３年に海軍を退職し、ガイダマック湾に住み、そこに捕鯨会社を設立した（１８９４年から）。知られている、この企業家はウラジオストクのアムール地方研究協会の会員となり（１８９７年１０月２１日から）、遠洋航海学校の名誉委員会に入った、同じく、極東における漁業研究協会の共同設立者となった。

１８９６年夏、長崎の下り松地区に、大きな商店が開かれた、そこではロシア人に商品

を売っていた。基本的に，それはアルコール、特に、クリミアワインを、同じく砂糖とタバコを、それらは今日まで日本では手に入れられない物であった。商店は南クリミア出身のブホンコフの所有であった。商売は基本的にロシアの水兵とヨーロッパ人を目当てにしていた：地域の住民達は、自分たちの国民的飲み物である酒をロシアのワインに変更することができたのであろうか？

長崎に住むことに決めた、退役したあるロシア人水兵は、商売をすることにした。馬を購入し、その愛好家達に乗馬を提供した。全ては上手く行った。が、ある時、酔っ払ったアメリカ人の水兵が馬を疾走させ、大人の日本人を圧死殺した。裁判の審査、罰金と他の罰が初心者の企業家の全財産を食ってしまった。そして彼は全てを失った。

１８９７年、ウラジオストクの芸術家であるムルスキイが、２人の芸術家を招待し、彼らを長崎に連れて行った。長崎でロシアのスペクタクルを開催しようとした。彼らは町のロシア人の住民だけではなく，日本人にも人気であった、芸術を大いに愛する。目撃者達が記録していた：「日本人の主たる娯楽－演劇、これはここでは特権階級だけのものではない。例えば、ろしあのように。本来の意味で一般向きで国民的なものである。演劇は全ての者に手厚くドアを開いている、とにかく入場料金は微々たるもの。ついに、ここでは演劇は町の例外的な属性を提示していない：それらを、私に伝えたように、各村ごとに見いだすことができる。上演は朝に始まり，夕方に終わる。筋立てはほとんど歴史的、状況と演技は真実性を持ち、現実の完全な幻覚を引き起こす。劇場の客は家でのように自制することを遠慮しない：場内で飲食し､茶を飲み、ぺちゃぺちゃ喋っている。」

それと同時に、若干の芸術家は少なくは無い心配事と不快感を呼び起こした、ロシア領事館の職員に。「長崎のロシア人住民は、やって来た芸術家にウンザリした。彼らの各々、特に「良くさえずる小鳥たち」、ここで下敬樹を手に入れたがっている、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。まず先に領事館へ行く、支援のために、チケット販売での、見てみよ、ホールは一杯、しかし歌は・・・ロシア語で結構である。２日前、ボリスカヤなる芸術家がコンサートを行った。一杯集まった。最初の幕間まで、どうにか観衆をやり過ごした。２番目の幕間までは、ホールの人数は半分となった。２幕の後には、たった一人の水兵だけが残っていた。が、出演者達はこれに何も気を取られなかった。ただ外出時には顔にペンキを濃く塗った。・・・芸術家は良くアルツールへ行ったものだ－長崎でのコンサート、逆に行き－再び長崎へ行きコンサート；思うに、そこには乳牛（金づるのこと）が住んでいる。勘弁してくれ、芸術家さんよ！」

長崎は本当に良くあらゆるペテン師の隠れ場所であった。誰もロシア人の「公爵」や「大公」なる者と知己とならない保証はなかった、金を借りてそのままトンズラした。ウラジオストク新聞が特記していた、「まことに、長崎は急速に移り変わった。種々のロシア人冒険者達のゆりかごに。それはもしかしたら、歴史の頁に入るかも。が、＊＊＊＊＊この人物は、多分、ファイル「同国人のけしからぬ不正な行為について」に入った。もし、そのような人物を、我々の東部の警察が規定したならば、多分、長崎での再度散歩は彼には困難となろう。通常の人々の大半は、外国で自分の市民のために恥ずかしがることはなかった、もちろん、長崎住民の現時点以上の良好な尊敬と信頼を利用して。次のようなことになった、店ではロシア人をほとんど悪口で迎える、いつも一人の購買者を恐れ、２，３人の売り子が取り囲む、万引きするのではないかとの・・・　不快だ、皆さん、不名誉

だ！」

正教の司祭の中でさえ、長崎にやって来た、良い行いで際立っていない人に出会った。ニコライ大主教が日記に書き留めていた、ベニアミン神父の手紙からの印象を：「ロシア人司祭の醜悪な振る舞いに不平を言っている、通りで酩酊している、集まった群衆が喜んだことには。言えよう、これは初めてのことではない、のような恥辱を禁止する手段を講じなければならない。」

その後、１８９９年7月１７日に、日本に住んでいる外国人は公的に登録された、領事館と船で仕事にやって来た。今後、全ての外国人は日本の法に従って生活することになった。日本の警察は7月２１日に初めて外国人を逮捕した、条約の施行の４日後に。この歴史的な人物となったのは、酔っ払いのアメリカ人船乗りであった。人力車の車体を破損したことで、その時損害を賠償することを願い出た。彼を番屋に護送した、すっかり酔いを覚ました。

長崎に住んでいるロシア人達は団結しようとはしなかった。ちょっとだけ日本に滞在するロシア人と関係しようとする熱意は彼らの方からは感じられなかった。同時代人のその様な証言が残っていた：「長崎には我々の同胞達が少なくは無かった、長年日本に定住している。私は彼らの共同を期待した、特に、私に迫っている外洋についての助言と指示にもかかわらず、来訪者に対する彼らの行動とまなざしにより近く観察してがっかりした。」

ユダヤ人共同体

ユダヤ人達は１８６０年代に長崎にやって来た。外国人租界の端に、ホテル、酒場、商店、その他の建物を開いた。彼らはロシアからの出身者だけではなく、他の国、オーストリア、ルーマニア、トルコの出身者もいた。多くの者は長崎で自分の選択を止めた、長い放浪の後で、様々な港湾都市を回っての、経済的裕福さと偏見からの解放を探しての。彼らの人数は長崎の発展とともに増加していった、商業都市としての。１８８０年代に、ロシアからのユダヤ人、基本的にオデッサの出身者、が長崎に移住してきた時、ここには既にユダヤ人社会が存在していた。最初の知られているミニヤン（ヘブライ語を起源とするユダヤ教徒の小さい集団名　＊）は１８８９年に創設された。翌年には長崎に初めてのシナゴク（ユダヤ教の教会名　＊）が設立された。世紀の狭間には、この港湾都市に、日本で最も大きなユダヤ人社会が存在した。１９世紀末には、その人数は約１００人であった。この数の中には若干の日本人を含んでいた、ユダヤ教に改宗した、国際結婚の結果として。

ユダヤ人達は基本的に大浦と梅が崎地区に住んだ。彼らは主に商業に従事した、ロシアの商船と軍船の供給に、この港にしばしば立ち寄った。多数は大きくはないレストランやホテルを持っていた。それらは基本的には、下り松川沿いにあった。ガブレンはロシアホテル内のレストラン「ナガサキ」の支配人であった。

ユダヤ人社会の最初の活動家の１人がルビン・ハスケル・ゴリデンブルグ（１８３９年－１８９８年）であった、ルーマニアのベッサラビア出身者であった。そこは当時、ロシア帝国に組み入れられていた。日本へ，彼はシベリア経由でやって来た、他の兵士グルー

プと一緒に脱走してきた、自分の意志に反してロシア軍に動員されたので。日本海の沿岸まで達し、ゴリデンベルグは山東省青州に向かう漁船に落ち着いた。そこで、彼は保護を受けた、ドイツのパスポーをももらい、ベッサラビアのドイツ系住人と見なされて。日本では企業家としての可能性が悪くはないということを耳にして、ゴリデンブルグはドイツ出身者として長崎に向かった。そこで，ホテル業や商業に従事した。港にやって来た、外国の船乗りのために居酒屋のあるホテル（たいていは１軒で）を開いた。

彼は商売を始めた、「世界の国旗」という名の居酒屋で。店は南山手の山麓にあった。そこにはイギリスからの裕福な商人達が住んでいた、下り松の４２番地に。建物は２階建てで、居酒屋の上階に住居ががあった、そこに自身が住んだ。２０年の間に、１８７０年代半ばからの、ハスケル・ゴリデンブルグは梅が崎と下がり松川の所に色々な企業を所有した：ホテル「ガルバリデ・イン」、「ブリタニア」、「ゴラド・ハンブルグ」、「スナゲル・イン」、「プリンツ・ウエルスキイ」、「シャムロク・イン」、商業ホテルと旅行者用ホテル。１８８０年代半ばに、ゴリデンブルグは長崎に隣り合っている小浜村のイデ・キタという日本人と同棲した。１８８８年、彼らの間に娘のレナが生まれた。その後、息子２人、１８８９年にアルツル、１８９１年にはヤコフが。１８９４年１０月、ハスケルとキタは自分たちの関係を法的に認めた。ヨーロッパ人と日本人女性の恋愛関係と同棲関係は当時は極めて流行っていた、結婚と違って。ハスケルとキタの結婚は初めてであった、多分、唯一であった、長崎でヨーロッパ人と日本人女性の登録された結婚では、外国人移住地が存在していた時期には。

経済的に裕福であったにもかかわらず、家族は社会的な差別を受けた、地区で圧倒的なイギリス人とアメリカ人の住民達から。その際、２つの理由から。一点ではハスケル・ゴリデンブルグはユダヤ人であった。他の点では、日本人と結婚し、彼女を子供達の母親とした。もしゴリデンブルグ家の成人がこれに耐えて生きることが出来るとしても、子供達は隣人であるアメリカ人とヨーロッパ人の彼らに対する悪い関係に非常に苦しんだ。後になって、アルツル・ゴリデンブルグが思い出し語っていた、彼の生活は非常に大変であったと：「彼らは我々に対して軽蔑と横柄を持って関係してきた。我々は毎日用心しなければならなかった。我々の白人の隣人達は我々をじろじろと見回していた、自分達の社会に入れなかった。我々は本当のはみ出し者となった・・・。私はこれを不公平として受け入れた。彼らに対するうらやみはちっともなかった、若干の隣人は贅沢な生活をし，子供達を地区の学校での勉強に送り出していたにも関わらすに。私は注視していた、彼らは自宅のプールで泳ぎ、綺麗な庭園での草地でパーテーを開催し、ヨットで乗り回し、クラブでテニスをしていることを。

ビジネスはユダヤ人の企業家に悪くはない利益をもたらした。金をシナゴク（ナガサキ・ベス・イスラエル・シナゴク）の建設に振り分けることを彼にさせてくれた、１８９６年９月に梅が崎の１１番地に建てられた。シナゴク建築の他の発起人はジグヌント・レスネル（？　＊）であった。夫人のキタもシナゴクで働いた。後になって、アルツル・ゴリデンブルグが思い出していた、母親は子供達のために全てを犠牲にした、彼らをユダヤ教のもとで教育したことを。彼女は子供達にユダヤ料理の仕方も教えた、両親の死後に、子供達が民族の伝統を守ることができるようにするために。彼女はユダヤ教の戒律を厳しく守って家政のやりくりをした。

１８９８年１１月７日、短い患いの後に、５９歳でハスケル・ゴリデンブルグは自宅で亡くなった、下り松４２番地の。キタは３人の混血の子供と残された、ドイツ国籍の、同じく家族のビジネスとともに。ビジネスは継続しなければならなかった。事実が証明している、彼女は上手く仕事を処理できた、ビジネスは花開いた、子供達はフランスのカトリック教会学校「カイセイ」で勉強した。レナは上海のカトリック使節団のペンションへ、そこで彼女はカトリックに改宗した。

２年間､アルツル・ゴリデンブルグは有力なユダヤ人商人であるレスネルの所で働いた、長崎を去った時までは，身の振り方を決めかねていた。１９０４年に、レスネルの養子であるペルシアと一緒に、彼はヨーロッパに向かった、より良い生活を求めて。海を渡って，彼らはマルセイユにたどり着いた。そこからベルリンへとたどり着いた。そこで、レスネルの援助で彼らは輸出会社で見習いとして落ち着いた。数年経て、アルツルはアメリカへ出発した：彼を親類の兄弟が招聘したのである、マサチューセッツ州のフォルリベルに住んでいた。そこで彼は名前をゲルデンと変更し、週に４ドルで看板を書くようになった。５年後、アルツルは西の州に移動し、弟のヤコフを呼び出した、男性用理髪所に臨時で落ち着いた、インヂアナ州のバルパライソ大学で勉強した。

２人の若い移民者達がアメリカで生活を立ち上げている間、彼らの母と妹は長崎に残っていた。１９００年頃、キタは日本人の男性と再婚した、そして息子を産んだ。日本式ではリエと呼ばれたレナは、１９１３年に、同じくキリスト教徒で日本人である桜井学と一緒になった。キタは兄弟達に金を送った、アルツルとヤコフは結婚に出席した。これが彼らの最後の日本への旅となった。アメリカに戻り、アルツルは画家として働き、ヤコフは－この時点で名前をジャック・ゴルデンに変えた－勉学を継続した､ミシガンスク大学で。直に２人は結婚した：ジャックは１９１４年にミルボク出身のラウラ・ゴルドベルグと、アルツルは１９１６年にシカゴ出身のハンナ・テイロルと。ジャックには３人の子供が生まれた（１９１６年にロレイン；１９１８年にルシリ；１９２０年にゲイル)。これらの年の間には、アルツルとハンナの間にも子供が生まれた（１９１６年にジェイン；１９１８年にロベルト：１９２１年にはルフィ)。１９１７年に免許を取得し、ジャックはミシガン州で歯科医として働いた。アルツルはシカゴ地区で、ペンキ屋の請負人として成功した。

日本で住んでいるレナと学の所には，１９１５年から１９２０年の間に、４人の子供が生まれた（丈治、エミコ、進、誠)。その後、彼らは大連、満州に移った。そこで学は交流部署で政府の高いポストに就いた。１９３３年、家族は東京に移った、そこで大きな家に住んだ、ハスケル・ゴリデンブルグの金を元に建築した。キタも家族とともに東京に移った。１９３６年に亡くなるまでそこに住んだ。

第２次世界戦争は、アメリカに住んでいる若いゴルデンブルグの生活を困難とした。特に､ジャックとアルツルには大変であった､彼らの父はドイツのパスポートを持っており、母は日本人であったので｡ジャック・ゴルデンブルグの娘達の内の一人が思い出していた、父は全てを抹消しようと努力した、１９４１年１２月に、両親と関係している、日本がパールハーバーを襲撃したということを耳にして。家族はデトロイトに住んでいた、日本人と間違われた中国人を撲殺した町である。初めだけではなかった、遂には、戦争はゴルデンブルグの子供達に災いをもたらした。アルツル・ゲルデンの娘の内の一人がアメリカ軍

の兵士と結婚した。その部隊は沖縄に配置され、原子爆弾攻撃の後に，長崎に派遣された。女性は地獄を味わった、その様子を見て、彼女の父の故郷に残されている。

レナ・桜井はというと、彼女は素晴らしい日本語と立ち振る舞いを身につけて、日本人社会に容易に溶け込んだ。彼女の外国出身について知っている者は極僅かであった。家族にとって幸運であったのは、恵美子の娘が１９４０年にアメリカから戻ることができたことであった、そこで３年間を過ごしていた、若い人のキリスト教団体の一員として。アルツル・ゲルデン、ジャック・ゴルデン、レナ桜井は１９５５年にハワイで再会した。４年後、ジャックが亡くなった。アルツルはそれに続いて１９７６年に、レナは１９８０年に。彼らの腹違いの兄弟である忠正－日産モーターの中央研究所所長－は１９７２年に日本で亡くなった。彼の息子であるハジメは１９３１年に生まれた。１９５５年からプリンストンで勉強し，その後、ドイツのハイデルブルグで、日本には戻らなかった。筑波にある高エネルギー国立研究所で仕事をするまで。

１９７４年に、ハスケルとキタの３人の孫達は日本に到着した。東京で家族と会い、長崎の叔父のお墓を訪れるために。この時、未成年時に仕事を探して長崎を捨てたアルツル・ゲルデンは、８６歳の老人になっていた。彼は娘と姪に探すように命じた、ユダヤ人社会が残っているかどうかを。特に彼は知りたがった、シナゴグがどうなったのかを、女性達が、長崎からユダヤ人達が消えてしまった秘密を解き明かすことができることを期待した。彼は知らなかった、ユダヤ人社会は東アジアの他の港に移ってしまったことを、上海や横浜に、政治的なこと（露日戦争、第一次世界戦争、ロシア革命）や、経済的なこと（大恐慌が原因で)。彼の親類を探し出した。シナゴグの跡にはラーメン屋があった、隣の家屋の住人は朧気に覚えていた、建物とそこに住んでいた人々について。坂本の国際墓地のユダヤ人区画で、彼は叔父の墓を見つけた。それ以外にユダヤ人社会の生活の痕跡はなかった。それについてはアルツル・ゲルデンが自分の回想記にはっきりと書いていた。今日、ハスケル・ゴリデンブルグとキタの孫と曾孫は日本とアメリカの色々な町に分散している。

ユダヤ人社会の他の知られている活動家として、ロシア出身のヤコフ・フェルドシュテインがいた。彼は長崎に妻のマリヤと一緒に１８９０年頃にやって来た。この時に、ユダヤ人コロニーがここで形を持ち始めた。沢山の商店、ホテル、飲み屋が、大浦の北部の梅が崎の辺りにユダヤ人によって開かれた。初年度は、ヤコフとマリアは友人のユダヤ人の会社で働いた。個人的な儲かる家「ブリタニイ・イン」の開設のための充分な資金の調達ができていなかった。１８９２年７月、４２歳のヤコフは突然に病み，亡くなった。彼を長崎に葬った。夫の死は最初の計画を変えなかった。マリアは進取の活動を続けた、収入の家を開いた、川に玄関の向いている、大浦の１５番地に。仕事は本当に上手く行った。時と共に，マリアは家を修理し、それを「ビラ・ホテル」と改名した。が、成功に満足したのは長くはなかった。当時、長崎での部屋の灯火は基本的に石油ランプであった。マリアのホテルでは、多数の他の家屋と同じように、ランプ、灯心、石油の保管用の部屋があった。１８９６年８月１９日、主人マリアの甥達とヤコフ・バイダック、彼の両親は外国人移住区に酒場を有していた、そこにマッチを持って入り込んだ。彼らが石油缶の当たりでマッチを擦ったのは充分にあり得る。そして、爆発が起こった。子供達は火に囲まれた。マリアは爆発音を耳にし、倉庫に駆け込んだ。彼女はこどもの火を叩き消そうとした、が、

彼女自身の服が燃えだした。４歳のヤコフ・バイダクと３６歳のマリア・フェルドシュテインは重い火傷で亡くなった。坂本の国際墓地に葬られた。

長崎の若干のユダヤ人は正教を受け入れた。例えば、ペレリ・ゲルショブナ・カバトニク、町にホテルを所有していた。

１８９４年、裕福なロシア人企業家と金融資本家ギンツブルグ（１８５１年生まれ、１９２０年頃死亡）の資金を元に、新しいシナゴグが建てられた、そしてユダヤ人墓地の土地を獲得することができた。１９０１年、ユダヤ人慈善団体が創設された、１９０２年、アメリカ・ユダヤ人協会の支部が開設された。「当時、ギンツブルグはそれほどの人物ではなかった。が、銀行の所有者であり、大商人であり、旦那であった。彼を金持ちにした露日戦争後に、彼は何をしたのであろうか。が、重要なのは彼の「資質」: 手の不浄さ、狡猾さ、図々しさ、おべっか、政府当局に対する、は満開となった。ギンツブルグは私を輝かしい顔と図々しい笑顔で迎えた。

ところで、君の蒸気船会社はギンツブルグ無しでは上手く行かなかったのでは？

この投機師は第３者のように自分について語ることが好きであった。皇帝政府との話し合いにおいてさえ。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。海軍の将校達が彼に渡した手形はいつもちょうど良いときに拒絶された。ギンツブルグの書類カバン＊＊＊＊＊＊＊にもかかわらず。しかし、いつでも出世の階段から蹴落としすることができた。

露日戦争（１９０４年－１９０５年）の開始とともに、多くのユダヤ人達は長崎を捨てた。が、シナゴグは未だ残っている者達のために役に立っていた。シナゴグの建物と全財産が売られた１９２４年まで。これは長崎から最後のユダヤ人が退去した時と一致した。第２次世界戦争の後、シナゴグの建物は壊された、その中にあった若干の儀式用装具は、後になって見つかり、東京のユダヤ人団体に渡された。最近の、長崎では、元ユダヤ人団体については、国際墓地のユダヤ人区画の墓のみが面影を保っている。

露日戦争時、アメリカの大銀行－ユダヤ人が所有者である－がクレジットの提供をロシアに拒否し、日本への大規模な財政援助を示した。このように、銀行トラスト「クン－レフ」を主導していたシッフは、１９０４年に、日本政府代表団と同意書に署名した、日本に５百万フントのクレジットの提示に関する。５月１０日には更に総額１千万フンとのクレジットを提示した。「クン－レフ」は最初の外国銀行となった、日本政府にクレジットを提供した、戦争遂行において。日本の外務大臣であった高橋の追想記に、シッフをこのような行動に駆り立てた事についての言及がある：「ロシアに関する異常な反感、自分の民族に関しての。彼は単純に憤慨した、ロシア政府の態度に、自分のユダヤ人住民を持っている。」　シッフは初めての外国人であった、日本帝国側からの特別な敬意を得た。

長崎－ロシアの極東人のための「故郷」

１８９４年～１８９５年における中国との戦争における日本の勝利後と、１８９８年のスペインとの戦争後のアメリカによるフィリッピンの占領は、長崎に異常な発展をもたらした。湾には商船や客船、石炭の艀、軍艦が溢れた。船の船長達はしばしば不平を漏らし

た、埠頭の近くに碇を下ろせないことに。長崎の人気の他の面は雲仙の温泉に近接していることにあった。裕福なヨーロッパ人、アメリカ人のための夏の保養所である、上海、香港、他の港町に住んでいる。外国人の租界地の通りには、ホテル、様々な会社の支所が増えた。そして、多国籍の団体が花盛りとなった、以前には全くなかった。長崎は同じく定常のベースとなった、太平洋のロシア艦隊の越冬のための。ウラジオストクと関係するようになった、捕鯨業や船舶航行その他の共同会社を通じて。町の住民は極めて増大した。領事館の職員、外国の会社の職員、商店の所有者、特に、ロシア人の商人達により。

第一に、長崎は積み替え基地であった：ロシアの船にとっては、ここは休息、簡単な修理、装備の充足のために好都合であった。１８９７年には、長崎に停泊中に、クリッパー艦クレイゼル号をここで修理することができたし、４月にはこの船はウラジオストクに向けて出港した。ここでの停泊では、船に練習船としての仕事が待っていた、新兵教育のための。１８９９年夏、ホノルルに立ち寄った後、２等巡洋艦ラズボイニク号が長崎に立ち寄った、海軍中佐ヨシフ・ワシリエビッチ・コソビッチの指揮下で。これは新船であった、抹消したクリッパー艦の代わりに作られた。コソビッチは熟練した将校であった、１０年前に太平洋を航海した、クリッパー艦ジギト号の当直指揮官として。長崎には、船は短時間滞在した：７月初めに、船はウラジオストクに到着した。

ウラジオストクの旅行案内書で指摘していた：「我々には長崎港は大きな価値を持っている。そこには既に１万人のロシア人がやって来た、ロシアのヨーロッパ部から、ポルトーアルツールから。大事なことはここで療養することであった。ここには沢山のロシア人達が不断において生活している、それについては沢山のロシア語の看板が証明している。身寄りのない人々のための家もある。ここでは沢山の日本人達がロシア語を話している。湾の対岸には稲佐のロシア人村と呼ばれている所がある。そこには船乗りや平民の恒常的な安息の場所がある、そこではロシア人と日本人の混血の子供達が走り回っている。」

ああ、稲佐は他の点でも安息の地である。１８９６年、クリスマスの時に、ロシア人墓地に、イワン・パブロフを埋葬した、巡洋艦ルリク号の船員。この年の２月９日、２５歳のニキタ・バルフォロメビッチ・ドゥトフが亡くなった．１８９８年には、２人のロシア水兵が亡くなった：ロシア号のイワン・シュニンとシブチ号のアレクセイ・セバスチヤノフ。翌年には、巡洋艦ルリック号は乗組員３人を減らした：アレクサンドル・パポフ、マクシム・プロホロフとアレクセイ・ワシリチェンコを。巡洋艦パミャチ・アゾバ号では、２人が亡くなった：オムゼレ・マウゴレエイとフィリップ・(？)。砲艦コレーツ号では、損失を被った：ウラジミル・ポドパルコフとニコライ・エメリヤノフを。

マリヤ・イワノブナ・トロイツカヤは１８９８年７月１日、３８歳で亡くなった。１８９９年には、県の書記で２９歳のドミトリイ・イワノビッチ・ボロセビッチと３歳のゲオルギイ・スクラトフが亡くなった。ミハイル・イワノビッチ・オブチンニコフ、ベトルガ出身の２８歳の市民、ニコライ・グリゴリエビッチ・ラグリン、リリスク出身の３５歳の市民が、１９００年１２月１１日の同日に亡くなった。彼らに何があったのかは、未知である。ただ知られている、ラグリンの墓をセメンキイナが建てたことは。

長崎で亡くなったロシア人を稲佐のロシア人墓地に葬るのは何時ものことではなかった。何人かは祖国に運んだ。例えば、ウラジミル・パブリノビッチ・ピヤンコフの遺体をウラジオストクに運び、パクロフスキイ寺院の墓地に埋葬した。彼は結核の療養に長崎に

やって来ていた。しかし、病気は重く，明らかに手遅れであった。彼は１９０３年２月２８日に亡くなった。

新しい世紀を，日本は外交政策の大変革で迎えた。１８９４年７月に、イギリスにいる日本大使である青木秀三は、１８５６年の英日条約の見直しについて、イギリス側との交渉に成功した。１８９４年７月１６日、ロンドンで条約の修正が署名された、５年後に条約が発効するとの。それは、治外法権の終了を規定し、関税設定の日本の権利を復活させた。イギリス側はそれに変わって条件を持ち出した、イギリスの企業家が日本の何処でも旅行し，生活し，事業を行うことができる権利を。直ぐに、イギリスをアメリカ、フランス、その他の国々が支持し、同じように条約の改定を。このようにして、１８９９年７月１７日に、世界における日本の状況と、日本に住んでいる外国人の立場を大変更した。

「長崎プレス」が書いていた：「今日、７月１７日は日本の歴史にいて、新しい歴史の始めを示している、日本は大いに驚かした，ヨーロッパ文明の急速な適応において。進歩的政府の活動努力は成功で飾られた。今日、日本は東方における第一の民族となった。そして、ヨーロッパ人を日本の法律に従属するようにすることが出来た。古い条約の機能は停止した新しい秩序を外国人に適用する、今日本に住んでいる者達と，ここへその内にやって来る外国人達は恐れることはないであろう、全てが変わったことを。」　治外法権の期間の終了と外国人居留地の廃止は順調に進んだ。というのは、前例のない経済的盛況－長崎が体験しているーは、その湾への外国船の寄港の直接の結果である。しかし、この後に長崎の居留地は非公式に存在し続けた。外国人住民とその独自の基盤をそのままにして：長い期間の慣れにより、その住民達はここで大きな安心感を感じていた。

外国人居留地の閉鎖後、各団体の仲介者により、長崎国際クラブとなる運命となった（何が？　＊）。当時、それは大浦にイギリス人男性クラブのようなものとして設置された。数年後、外国人の出会いのために例外的に前もって決められた。日本人はそこへは、客か従業員としてだけ出入りすることができると。「セイヨウテイ（西洋亭）」での、１８９９年８月１日の初めての国際交流に、１２５人の日本人、５人の中国人、２０人のヨーロッパとアメリカの代表者達が出席した。４年後に、クラブはレストランとパーテイのためのホールと一緒に、出島の新しい建物に移った、極めて象徴的であった。すなわち、出島は長い間に渡って日本にとって唯一の西洋世界との窓で、唯一の場所であったので。そこで日本人は西洋人と出会うことができていた。新しい場所での最初の出会いは１９０４年１１月１０日に行われた。それにはクラブの７６人が出席した、様々な国籍を持っている。パーティは楽しく賑やかであった。クラブの代表でもある町の長は、毎月のパーティの計画について話をした。そして請け負った、日本側がクラブの仕事を全てに渡って援助することを。その後、アメリカの大使ハリスが話を続けた。最初彼は参集者達を酷く陽気にさせた、情報でもって、彼をこのクラブへ代表者達の通訳として招聘したという。その後、大事な話に移った，期待を話ながら、クラブでの食事と出会いが良いことをもたらすことを。誰も遠慮することはなかった、素晴らしい食事、団らんの中で食べきった。その後、クラブでのパーティは定期的に行われた、パーティは長崎を訪れた外国人に取っての寄る辺となった。クラブの会員は町の経済と文化に多大な寄与をもたらした。

２０世紀の最初の年、露日戦争の開始までは、長崎のロシア人の最盛期であった。好都合な不凍港である長崎のこの港は、長きにわたってロシア船が親しんできていた。ポルト

・アルツル（旅順で中国の遼東半島の大連近傍　＊）の獲得後、極東における船の中継点となった。様々な国の船で溢れる港の中に、青色の十字架のあるアンドレーフスク旗を掲げた船によく出会えた：ロシア船は定期的に長崎を訪れていた、ウラジオストクやポルト・アルツルへの航行中に。町では露中銀行、慈善艦隊のエージェント、東支鉄道支社、ケイゼルリング男爵の会社、他の企業の支社が働いていた。露中銀行の長崎支店には、しばしば東方大学の学生達が実習にウラジオストクからやって来ていた。特に、ここで少し働いた、レオニド・アレクセビッチ・ボゴスロフスキイが、１９０７年に日中学部を修了した。この学生は東方の美徳と仏教の問題を研究していた。この課題に関する彼の作文－彼が長崎で書き始めた－は銀メダルを獲得した。

始めは、ロシア領事館は町の南部にあった、南大和地区に、海岸線から２番目の通りに。門の上には双頭の鷲と看板「ロシア領事館」がよく目立っていた。領事館の建物は既にかなり古くなっていた、事務部のために隣り合った建物を借りていた。古い家には、日本人の召使いが住んでいた。町の全ての部分と同じように、山腹は段丘で分割されていた。領事館の隣の段丘には領事の住居があった、共通の門がそれらを連結していた。ロシア政府は長崎の役所と覚え書きを交わしていた、領事館のために新しい建物を建築することについて、然るべき地位以上の。しかし、・・・上手く行かなかった。

案内書が伝えていた：「長崎の町には８７の通りがある。商売にとって、それらの内で最も賑やかで適しているのは次の通り：東浜町。ここには大きな商店がある、例えば：谷口時計屋、金、銀、ニッケルメッキ時計を販売している、ヨーロッパ風の、同じくアメリカ製も、時計用具も。谷口商店の隣には、帽子商人の町田、彼の所には全ての帽子がある、外国から運んできた、季節物、高品質の。西橋町には常設のバザールがある。そこでは様々な商品が展示されている、例えば：服、下着、陶器、鉄製品、銅、白金、金、銀製品、同じく、銀や金をメッキしたガラス製品、茶道具、その他。バザールには輸入品を取り扱っている商人もいるーミゾタ。彼の所には，トランク、長持ち、シガレットケース、ナイフ、ハンカチ、ナプキン、紙、その他。」

「丸山町には、福佐屋菓子店があり、そこでは、甘い物各種を売っている。例えば：糖蜜菓子、アーモンド、ピローグ、キャンディ、その他。丸山小山の広場にはレストラン福屋がある。幾つかの広い部屋から出来ているその高い建物は広場にある。そこから、町全体の生き生きとした様子を感嘆することができる。福屋では、ヨーロッパ式の料理を準備している。その穴蔵にはブドウ酒、シャンパン、ロシアのウオッカ、生野菜が納めてある：キャベツ、アスパラガス、タマネギ、その他の野菜。」

シドクイ町通りには、時計商人の馬場が住んでいた。彼は懐中時計、壁時計、最新の時計を販売していただけではなく、銀の鎖や金の指輪も。時計職人の島谷は時計の修理や金や銀製の時計鎖の加工の注文を受けた。亀の甲羅や象牙の製品は、ロシアの極東からの客は自前で持つことを好んだ、仕事の優雅さと繊細さで秀でていた。案内書には商店の住所が出ていた、例外的に高品質の製品を販売している：「本物のべっ甲と象牙細工、混ぜ物なしの」、金を交換するには梅が崎の守屋両替商を勧めた：「その店では何時でも、紙幣を硬貨に換えることができた、ロシアのを日本のに、その逆も。」

もし、前述の情報が、休息や療養で長崎に旅行する人に役に立つならば、極東のロシア人の内の仕事関係の人には案内書の他の頁が役に立つ。そこでは、役所、銀行、商業団体、

教育施設が紹介されていた。例えば，税関は梅が崎にある、埠頭のところにも同じ名前が。税関には幾つかの部局があった：書類の審査のための、商品の評価の、税の徴収の、物品の保管の、その他の。税関の近くに、郵便局があった。そこには、梅が崎には、蒸気船会社「郵船会社」の支社があった、他の似たような会社「商船会社」、出島町通りに。

商社「三井物産会社」は大浦に自分の支社を開いていた。会社は主に石炭の商売をしていた、石炭は三池炭鉱から得ていた、福岡県にある。同じく、この地方と外国の産物を商品としても。本社は東京にあった、日本の町や外国に幾つかの支社を持ってもいた。

商社「キヘイ会社」、その支社は川島町通りにあった、ロシアの軍艦に糧食を提供していた。商社「ヤーハラダ」も産物の当てになる供給元であった。とはいえ、この時期には船の補給とサービスは結構儲かる仕事であった。それに長崎では多くのものが従事した。目撃者が書いていた、「電報局から，我々はサンチオンガ（？　＊）、古い売弁（中国人商人のこと　＊）へあたふたと出かけた。彼らは必要なもの全てを蒸気船に乗せ提供した。彼らのところには改革前の時期の古い日本の武器がある；古い貨幣、彼らによって採取された新しい漆、＊＊＊＊＊＊＊＊＊、古いもの；陶器、墨、絹、甲羅、遂には、＊＊＊＊＊＊＊。彼は食料品、石炭、水を供給することができる；が、もし君が余分に支払いたくなければ、彼の所から何も手に入れられない。しかし、彼はどんな簡単なことでも引き受けてくれる、何時でも直ぐにやってくれる、他の者達より繊細に。」

１９００年３月２６日、長崎の停泊地に、１等巡洋艦アドミラル・コルニロフ号が碇を降ろした、海軍大佐ペトロフの指揮下で。パスハ祭で東京に派遣されていた。その前に１人の新兵が逃亡した、が、警察の御陰で彼を捕まえ，船に戻すことができた。１９００年４月７日、上級者を長とした６人の将校達が、東京の宮殿広場で催されたレセプションに招待された。それには皇帝自身が参加していた。招待者の中には、外国使節団の団員達と他の国の将校達がいた。アドミラル・コルニロフ号の船長はレセプションに出席することができなかった、脱臼していたので。が、数日後、神戸で彼は皇帝に出会った。ロシアの巡洋艦はそこに４月１５日到着した。４月１７日、日本の艦隊が到着した。巡洋艦浅間号に皇帝が乗っていた。その日の１２時に、祝典の食事会が行われた、それにロシアの指揮官を招待した。

１等巡洋艦パミャチ・アゾバ号は１９００年１２月２０日に、長崎にやって来て、停泊地に何隻かのロシア軍艦を見つけた：巡洋艦ウラジミル・モノマフ号、ザビヤク号、ラズボイニク号とガイダマック号。パミャチ・アゾバ号の指揮官である海軍大佐フォン・ニデルミレルが伝えた：「町で，停泊地では祝日である。全ての工場、支社、店は休業している。全活動のその様な完全休業は２日間続く。」　熟練した機械工のアレクサンドル・ヤコブレビッチ・ビャリガ（１８４８年１２月１２日生まれ）は自分の５２歳の誕生日であるクリスマスまで待てなかった。１９００年１１月１５日に亡くなった。ロシア人墓地に、新しい墓が追加された、墓碑「太平洋艦隊の友人で同僚に」を持った。

ロシア人歩兵と水兵の中での特に多い犠牲は、ボクセルスク蜂起（？　＊）の後であった。１９０１年1月３０日、２等下士官の機械工ヤン・ミヘレフ・ベゲが艦隊の砲艦ペテロパブロフスク号から去った（１８７８年７月２０日生まれ）。中東鉄道の保安警備隊のミトロファン・パツァンが１９０１年４月９日に亡くなった。長崎での療養にロシア兵を送った、中国の砦、タク要塞の奪還時に負傷した。ニコライ大主教が書いていた：「我ら

が若者よカットなれ！　傷が何ものか！　他の者達には同じように要塞を＊＊＊＊＊、殆ど誰も、同じく占領した日本人にも、砦、全部で５人の戦死者と負傷者。彼らのうちの一人が死んだ中尉。」　このように、１９０１年１１月２９日、タク堡塁の奪取の際に１９０１年7月４日に負傷したアレクサンドル・ステプチェンコが亡くなった、海軍砲艦コレーツ号の甲板長。

同じ年の１９０１年に、組立工のセリベリストフが９月１７日に、遠洋航海の航海士で２９歳のミハイル・イワノビッチ・マトロソフが１１月２２日に、大型装甲艦シソイ・ベリキイ号の火夫のイワン・ロデオノフが１２月１２日に亡くなった。

１９０１年、長崎に停泊中に、巡洋艦ルリック号で、脱走の件が記録された：罰金刑中の水兵であるアレクサンドル・マカロフに、陸での休暇を取らせたが、船に戻らなかった。１週間彼を探索した。が、優しい処置であったにもかかわらず、見つからなかった。巡洋艦の指揮官は司令部に知らせた、彼を脱走者として。その後説明された、この水兵は犯罪を犯し、そのために、彼を日本の法律で裁いたと。

同じ年に、巡洋艦ウラジミル・モノマフの乗組員が救助者の役割をするということがあった。イクツキ島付近で岩礁に乗り上げた蒸気船ウスリ号の救助に、船は向かった。巡洋艦の船員達は乗客、郵便物、トランクを救出した。長崎に曳航し、それらを蒸気船オリョール号に引き渡した。

巡洋艦バリャク号の乗組員は１９０２年をシンガポールへの接近時に向かえ、2月２日、船乗り達は香港に到着した。東シナ海の１０日間の航海の後に、１３日の正午に、長崎に碇を降ろした。バリャク号の長崎への到着の１日前に、旅順の装甲艦は旅順を出港した：太平洋艦隊の旗艦ペテロパブロフスク号とポルタワ号。バリャク号が修理中の間に、長崎に装甲巡洋艦グロモボイ号がやって来た、太平洋艦隊の海軍少将クズミッチの旗艦旗を掲げて。２月２２日、グロモボイ号が公式にバリャク号に太平洋艦隊の旗艦旗を渡した。ちょうどその日に、２隻の巡洋艦は長崎を出港した：グロモボイ号はウラジオストクへ、バリャクは旅順へ。

途中で、クジミッチが全力走行試験を提案した。グロモボイ号は困難なく、目標の１９ノットを達した。バリャク号は速度記録に挑戦した。しかし、２０ノットで既に、軸と軸受けの異常加熱が見つかった、振動と衝撃も伴った、故障が明らかとなった。旅順に到着する時、巡洋艦は１０ノット以上の速度を出せなかった。太平洋艦隊の指揮官で海軍中将であるスクリドロフは検査を命じた。

１９０２年、稲佐に新しい墓が出現した：装甲艦シソイ・ベリキイ号の指揮官デニス・コキン（1月５日）、巡洋艦グロモボイ号の水兵エフィム・ペトロフ（３月８日）、コサック部隊のダルジャップ・バルギノフ（４月２８日）、１４等文官の退役者フィリップ・コトリャルスキイ（６月９日）、装甲艦ペレスベット号の機械工フェオドル・ドマシェフ（７月３１日）、蒸気船アルグン号の火夫フランツ・ペテルソン（１１月１日）、ハバロフスク出身の技術者ミハイロフ（１１月２３日）、装甲艦ポルタバ号の水兵チモフェイ・ムラビエフ（１２月８日）。１９０３年、蒸気船シルカ号の火夫ワシリイ・スミルノフ（1月１７日）とクバンツンスキイ艦隊乗組員の９等文官インノケンチイ・イワノビッチ・ゴルノスタエフ（１１月８日）

正教区

長崎には、ロシアの軍艦が何時も滞在し、大きなロシア人共同体があったにもかかわらず、この町には、正教会は長い間なかった。ロシア人は１８８３年に教区を作った。最初のロシア正教の司祭の１人であるパブロ・モリト神父を、ニコライ大主教は次のように特徴付けていた：「お喋りで、風で揺れるような軽薄な性格。」　その後、司祭となったのはチト・ウエハラ（上原　＊）。彼が解職された後、長い間共同体は牧師無しでやっていた。長崎のロシア人達は正教の司祭の不在を残念がっていた：「約３００人のロシア人がいた、船以外に；そこで治療中の多くの病人が亡くなっている－誰かが弔う。」

ニコライ主教が日記に書いていた、「私は非常に陰鬱である。パスハ祭のような大事な日に、我らの正教徒はキリストの慰め無しに残される。直ぐに、私は決めた、ベニアミン神父をそこに派遣することを；一つは、彼らのために、もう一つは、使節団グループの施設のために。」　とにかく、主教は領事コスチレフに電報を送った、質問を持って、長崎の教区のパスハ祭に司祭がいる船が期待できないのかという。否定的な返事を得て、他日に彼はベニアミン神父に伝えた、新しい任務について：大斎期の６週間は既に過ぎ、ためらいの時間は残っていなかった。

１９００年３月３１日、ベニアミン司祭は長崎での勤めに出発した。ニコライ大主教が書いていた：「彼は宣教使になり得ない、これは明々白々だ。；しかし、長崎のロシア人教徒には司祭が必要であった－何故かそれを我慢している。」　とにかく、ベニアミン神父は課題をやりこなした：「長崎に住んでいるロシア人に注意を振り向け、充分な同情で迎え、１年間で多くはない寄付を集めた。大変な条件下で現存する教会を建築した。」
教会は南山手の１５番地の家に置かれた、ロシア領事館に並んだ。海軍病院の中庭に。そこにたどり着くためには、横町を曲がり、山へ少し登っていく必要があった。教会を通りから見ることができたにもかかわらず、初めての人は入口にたどり着けないことがままあった、もし、道を案内してくれる人と出会えなかったならば。

「極小さな教会、木製の５と５サージェント或いは少し大きいか小さいか。その内にそこに辻堂が現れた、多分、霊安室、最近増築した、そして教会を造った。木製のイコンの壁、暗い茶色の塗料で塗られた。金メッキはない。明らかに、大半のイコン画は東京の宣教師の中の日本人によって描かれている。聖人の肖像は、我々の村の教会の像に似ている。教会には、聖歌隊の右の席に、聖アポストル・パベルの本当に巧みに描かれたイコン画だけがある。壁には、小さい枠の幾つかのイコン画が吊されている、所々に聖像入れの、明らかに受難者の。寺院には玄関部はない、中庭からドアに入っていく、直接教会へ。

教会の建設において、海軍兵達からの不満がなかったわけではない：太平洋艦隊指揮官である海軍中将スクリドロフは憤慨した、教会に病院の辻堂を引き渡したことに。これが理由で、彼は病院長のボロシンを交替させさえした。実際には、辻堂を少し修理し内部を綺麗にした。日本では、その年に、教会を好きな祈りの家と呼称することになった。教会のイコンの壁はベニアミン神父自身が造った。イコン画は長崎からの日本人であるアレクサンドル・山田が描いた、正教を受け入れた。これは初めての日本人であった、ベニアミ

ン神父が洗礼をした。聖パーベルのイコン画をイリーナ・山下が描いた。合唱団は船乗り達が形成した、病院で療養していた。教会は約１００人を収容することができた。が、２０人より多くない人々がやって来た、基本的には女性。

ベニアミン神父は宣教師の教会を造ることを提案した。が、それは海軍病院の領域内にあった。祈祷式は古代スラブ語で行われていた、日本人達はそこを訪れなかった。それ以上に、正教教会に並んで、２軒のカトリック教会があった。然るべき建築家の大きな３階の建物。そこにペンションがあった。本当の教会の開設には、サンクトペテルブルグの府主教の許可が必要とされていただけではなく、それに外国の全ての教区が属していた、少なくない金も。ベニアミンの要請に従って、領事コスチレフは報告書を外務省に送った。その書類で、教会建設の資金を出してくれるように頼んだ。領事の職務に、ガガリン卿が就いた時、ベニアミンは彼に向かった。彼はこれについて頼んだ、東京の公使アレクサンドル・ペトロビッチ・イズボリスクに。

新しい教会の建設について、大論争が起こった。以下の通りであった。教会の場所は事業家ギンツブルグの寄進で準備された。彼は提案した、建設費を支払うことを。が、領事のガガリン卿とイズボリスク公使は見なした、異教徒からその様な貢ぎ物は相応しくはないと。ニコライ大主教が書いていた：「彼、イズボリスクはペテルブルグからの指示に従った、地域の宗教当局にこれについての意見を問い合わせて。私は何のためらいもなく答えた、受け入れはできるし、しなければならない。全くその様であった、我々はここの寺院で毎日、異教徒からの寄進を受けている、寺院を訪れ、寺院に金を投げてくれる。全くその様であった。ペテルブルグにミシンスク家屋－その上階にクレストフ教会があるーを建築しようとしたプチャーチン伯爵は、５０００ルーブルの金を要求して、ユダヤ人のシチグリツから受け取ったのは。」

教会での金の集まりは非常に酷かった、とにかく、寄付は段々と少なくなっていったので。少なくないスキャンダルが起こった。奉加帳を山師達が色々と利用したということである。ある時、これに外務省が口出しを出さざるを得なかった。知られている、長崎への教会建設において、ニコライ二世が５０００ルーブルを寄付したことが。ロシア領事館、正教会は１９３２年に閉鎖された。この時、新しい教会は造られなかった。そして今日、長崎の正教の最初の一歩として、剛心寺中のロシア人墓地の正教辻堂だけが思い出となっている。

アレクサンドル・ガガーリンの「海の家」

長崎に外国船員達の憩いの場所を造ろうという最初の試みを、１８７４年３月にイギリスの教会が実現した、「船員クラブ」という名称で。その後、「読書とコーヒーの部屋」が出現した。３番目が最も成功した試みであった、アメリカの船乗り達、退役軍人達、プロテスタント達によって実行された、１８９４年から１８９６年に日本に住んでいた。結果として、エビングトンの大変なる努力の御陰で、１８９６年２月３日に船乗り達のためのキリスト慈愛の家が開館した。最初は、そこには部屋が９室あり、１６人が入れること

を予定した。が、その後、３５００円を使って、家を拡張した。１８９７年１２月に、そこには１２部屋があり、寝床は３４個、２つの浴室、２０席の食堂、大きな病室キャビネットと図書室。この家を造っての１０年の終わり頃には、家は９０人の宿泊を受け入れていた。が、これでは不十分となっていた。長崎に、同時に２隻以上の軍艦がやって来た時には。町には、時折、１０００人もの船乗り達がいることになった。その後、数ヶ月間にわたり船が１隻もいないこともあった。１９０５年１１月、慈愛の家に、アメリカの船ヅムバートン号の船員達が憩いの場を見つけた。サンフランシスコからニコラエフスクに航行中に、ロシアの沿岸で遭難した。大変な努力で、将校と船員達は長崎までたどり着いた。イギリス領事が彼らをそこで案内し、彼らを迎え入れ、暖めてやった。慈愛の家は最も長生きしている事業であった：それは機能していた、船乗り達の家の名の下で、殆ど太平洋における軍事活動の開始まで、１９４１年の。

船乗り達のためのロシア人の憩いの場所、或いは船員の家は、長崎に出現した、アレクサンドル・ガガーリンの御陰で、ここで３年に渡り領事として勤務していた、露日戦争までの。新聞が書いていた、「露中銀行の援助により、我々にとってこの問題の価値を知って、多くの我々貧しい同胞と商船の船乗り達に対する心痛を持って、あれこれの理由で一文無しでいる、船乗りの家の建設のために土地を買った。ロシア人がいる、他人にはいこごちが良くない、わずかの支払いで、必要な場合には借りて、ねぐら、机を持つこと、確りした暇つぶしが、堕落させる行動を避けた、多数のヨーロッパ人のたまり場での。今日まで、我が同胞は様々な理由でそこへ落ち込んでいた。その所有者の良心的でないふんだくりのありふれた犠牲者となっていた。」

船乗りの家の詳細な記述を、新聞ウラジオストクの編集長ニコライ・レメゾフが我々に残していた、長崎への旅行を行っていた。「事務所でパスポートの査証の時、私は親しくなることができた、領事のガガーリン公爵と。我々はその後、彼の愛する「船乗り達の家」の見学に向かった。それについては、我々は去年に新聞ウラジオストクに書いていた。ガガーリンのアイデアは素晴らしい成功と建設の速さを示した、羨むほどの。素晴らしい節度、エネルギーと能力がガガーリン公のアイデアを成し遂げた、多くの親しいロシア人のいる。このために資金が要求され、その後、駆け足の遂行と＊＊＊＊＊＊＊、ぞんざいではなく見せるために、基本的に、確りと。ガガーリン公の個人的大きな名誉をなし、彼の活動に感謝を引き起こす。友人だけではなく、敵のところでも、私は個人的にそう信じるようになった。もちろん、私はこの全体的声に同調しただけではなく、より大きく発見しなければならなかった。実際において驚いた：秋に思い立ち、春には既に確りと成し遂げていた、官金が１コペイカも無いのに；そして、また。」

船乗り達の家は領事館の傍にあった：そこから南に、次の通りに。それは２階建ての木製の建物であった、同じようの増築を持った、領事館のように。しかし規模が小さい。家屋には、増築に伴って各階にベランダが設けられた。そこからは湾とそこへの入口が手に取るように見えた。家屋の周りには、小さい庭があり、そこを庭園にする計画であった。北側にある入口からは広いロビーに入れた。そこから絨毯が敷き詰められている階段で２階へ。１階には、入口に直接に繋がっている、支配人の部屋、右にはビリヤードがあった。そこには、食堂と図書館が配置されていた。そこには主にロシアの新聞が置かれていた。特にウラジオストクの。それらはここへ無料で送られてきていた。外国の新聞は領事館か

ら。図書館の本はそれほど多くは無かった：長崎でロシア文学に触れるのは難しかった。町にはロシアの図書館がなかっただけではなく、ロシア語に関する本も無かった。船乗り達の家のための最初の書物は、ニコライ大主教が提供した。壁には皇帝と皇后の肖像画が吊されていた：パトロンからの贈り物。そこにはオルゴールもあった。

船乗り達の家の２階には寝室があり、２５人以上が利用ができた。が、特に必要な時には、より多くの人を受け入れることができた。ある時には、ここに８０人が生活していた。増築部分には、台所と女中のための部屋が設けられた。上階には、準医師と看護婦の部屋があった。家では、模範得手な秩序が維持されていた。宿泊費は１日に、食事を入れて５０カペイカであった。

船乗り達の家の建設と維持のために、安くはない費用が必要とされた。慈善家の探索は定常的に行われた。これには保護者会が従事した。ウラジオストクにおける寄付金をウラジオストク港指揮官の海軍少将ガウプトが集めた。日本では、資金集めにニコライ大主教が加わった。彼は自分の日記に書いていた：「長崎領事のガガーリン公が書いている、彼が着手した船乗り達の家は殆ど出来上がっている、最近その増築を考慮している、ロシア人の子供達のために長崎にロシア人学校の建設も。それと一緒に、日本人と通訳の教育のために。；この件に助言を請う。」

船乗り達の家を完全に地域での寄付で実現した。ニコライ二世－長崎への教会のために５０００ルーブルを寄付した－は船乗り達の家のために同額を寄付した。新しい建物の整備のために、ミハイル・ミハイロビッチ・ベセルキン海軍大尉は多くのことをなした。イズボリスク公使の妻によって催された、東京での慈善コンサートは２０００ルーブルの巨額をもたらした。彼女は約５００通の招待状を書いた。それにロシア人だけではなく若干の日本人も喜んで応じた。残念ながら、船乗り達自身の反応は余り良くなかった。

１９０２年１月初め、長崎の建物の内の一つに、看板「ロシア人学校」が出現した。これは日本での初めてのロシア語学校であった、ニコライ・ワシリエビッチ・マシュケビッチが開いた。学校の清めの儀式はベニアミン司祭が行った。ロシア語が第一外国語であり、それに日本人達が親しんだ。１８６１年、函館のロシア領事館の職員であったイワン・マホフが「ロシアのイロハ」を編集し、印刷した。冊子の一部は長崎に運ばれ、そこで日本の４０人ほどの子供達がロシア語を勉強した。

長崎の住民の中に、ロシア語に対する興味の拡大に大いなる役割を果たしたのはアスコリド号の停泊であった。ここにロシア語の学校の開設の試みは一度ならず行われた。領事のガガーリン公爵がその設置を計画した。が、色々な理由でそれをすることが出来なかった。非常に希であったが、ロシア人が家庭教師をすることがあった、７，８人の生徒を前にして。ある時期、長崎高等商業学校でパポフが授業をした。

マシケビッチはノボロシスク大学の法学部を修了した。学業の後、彼はオデッサでリシェリエフスク実家学校で数学の教師として働いた。その後、約１０年間にわたりハバロフスクで授業をした、未だ日本に移っていなかった。学校用の場所を見つけることは簡単では無かった。ロシア人との関係は既に悪化してきていた。「学校に関して、副知事との話し合いが興味があった。そこで、副知事が話した、内緒のことだが、日本人の間には、イギリス人によって広められ支えられた信念がある、一度日本人が正教を受け入れると、彼はロシア国民となり、それ以上日本のために何もしない。」　この偏見にもかかわらず、

マシケビッチは本望を遂げた、ロシア人学校を開くことができたのである。多分、学校は露日戦争時に閉校された。

タメナサ本屋では、主に英語、ロシア語、ドイツ語、フランス語の本と雑誌が売られていた。最初の露日会話本の一つとして、長崎の通訳タカスが編纂した、日本語の研究指導書も売っていた。序文で、著者が書いていた：「隣り合う国家間の友好と商業の関係の要求の充足のためには国民同士の会話を発展させる必要がある。私の作成した、この本はこれに納得するものである。出版者の意向に従い、日本語を研究することを助ける目的を持っている。多分、それは満たしてくれない、語彙不足と表現の不完全さを研究者に。とはいえ、それは取得には役に立つ、日本語のイロハを。そして教師無しで自学することを容易にしてくれる。」

ロシア語の視点からすると、本は批評に絶えられない、間違いが多すぎるので。それにもかかわらず、会話集はロシア人のところで多くの質問に使用された：温泉への旅行において、それなくしてはかなわなかった。時と共に、職人達は多くのロシア語を覚え、ロシア語で説明することができたにもかかわらず。序文で語っていた：「人々のお互いの理解がなくしては、簡単な友好も交わせなかった。相互の研究はとにかく言語の研究から始まる。それ故、この学習書の出版が追求している目的は、各自の深い思いやりを鼓舞することである、日本とロシアの間で相互の簡単な友好の構築。」

沿海州のИＰＧＯ（？　＊）の長であるルベンツォフー日本地理学会の正会員ーは一度ならず日本と朝鮮で報告をし、ロシア人のために内容豊富な「日本の案内書」を準備した。その中に、長崎についての情報があった。ロシア人の在所についての言及も：「稲佐山、別命、ロシア山、標高１３００フント、山麓にロシアの海軍病院がある。」

専門家が指摘していた、「旅行案内書では、指導書のように、まず第一に、ロシア語がなっていない、が、旅行案内書は日本を良く知らない者達に興味があった。それは日本の名所を紹介することに努めていた、素晴らしい挿絵を持って。本当だ、我々はこれに関係した方が、それらと例を取り入れ、我々のために沿海州に限らず何らか似たようなものを発行することは。多分、そこはしばしば旅行者が訪れるようになった、そこには少なくない、日本よりは、興味を引く、自然と生活の絵の意味で。」

新世紀の最初の年に、長崎は商業港として最盛期を迎えた、石炭の基地、造船の中心としても。が、露日戦争の開始とともに、全てが徹底的に変わった。１９０４年２月、日本政府は町に戦時法を適用した、戦場に町が近い故に。湾の入口に、機雷を施設し全ての沿岸の通信を追跡した。陸上での町の進入路には、軍は監視所を設置した。長崎にやって来る全ての商船に対して、疑いがかけられた。それで、港は次第に空となって行った。町の経済は完全に衰退していった。ホテル、レストラン、バーは空となった。ロシア人の企業家、同じく、ロシアと仕事をしていた者達（露中銀行、ギンツブルグ会社、その他）は長崎の支社を閉鎖するか、イギリスの会社に管理を移した。元外国人居留地に残っていた外国人達は、段々と去っていた、日本人に自分の家を売って、運命の気ままさに支社や店を放棄して。

戦争の終了とともに、長崎の企業活動が再開した。が、昔通りの条件とは行かなかった。

日本式レストランとロシア式ホテル、日本女性の愛情

長崎にロシア艦隊がやって来た年には、既に、ロシア風レストランがあった。最も知られていたのがレストラン「ボルガ」であった。稲佐の志賀の鳩割石にあった。その所有者は著名なオマツ（師岡マツ）であった。かって長崎の有名な芸者であった。基本的にロシア人船乗りを相手にした建物に住んでいた。レストランの状況はヨーロッパ風であった、テーブルと椅子を持った、ロシア料理を提供していた。が、レストランは古い日本風の家の中にあった。これが建物に東洋風を付け加えていた、外国からの訪問者達に人気のある。

ニコライ二世が長崎を訪問した時に、オマツと親しくしたことが知られている、当時彼女は芸者であった。その独特なポートレートを保っていた。自然の大きさの人形を、日本を出航前に、皇太子に著名な職人である川島甚平２代目が贈呈した。思われる、この贈呈品は日本の皇帝の依頼によって準備したものと、大津での事件後に。が、それは余りにも非公式さを持っていたので、甚平が人形を送るということに決まった。ニコライは職人と出会った、１８９１年４月２８日に京都郊外で。そこに甚平の工場があった。職人は燕尾服を着てニコライを出迎え、フランス語で説明を行った。

彼らの知友はその後も続いた：後になって、甚平を賞することになった、宮廷の名誉納入業者として、更に後になってスタニスラフ勲章で叙勲した。甚平の作品は玉座の皇太子に深い感銘を与えた。次のようなことがあった、騎乗の武士が、逃げる犬に矢を放つ情景の模様の絨毯はニコライ皇太子への明治天皇の別れの土産となった、何となれば、この土産の意味は大津での悲惨な事件後に生まれた。絨毯は特別な縁飾りを持っていた、皇帝の紋章である日本の菊とロシアの双頭の鷲の図柄が入っている。甚平の最も著名な作品はハーグの平和宮殿の行政会議ホールの装飾となった。それで「日本の部屋」と呼ばれている。

すなわち、レストラン付きの小さいホテルは、ロシア人将校達の避難所となった、冬の長崎での停泊時に日時をつぶす必要となった。或いは、休息や修理のために、この港で滞在する。しばしば、ボルガ号のように、元の芸者達が彼らの面倒を見た、訪問者の好みや愛着を良く知っている。目撃者が書いていた、「このように、稲佐は成長し変化していった、一つの大きな施設に、ホテルの名がオマツ、オチエ、フクダ、その他の：この施設の普通の売春宿との差は次の点にあった、稲佐では仕事は家族関係で行われていた、すなわち：各客は一時的に妾を持つ。仕事は通常は仲介を経て、認可のもとで終わる、愛らしいオマツさんの、結構しばしば終わる、クライアントの旦那にとって惨めに、彼らは一生の「娼婦」から去ることになる。ロシアの船乗り達は日本のこの有名な場所を手に入れ守り抜くことができた。そこへ彼らは療養や休息にやって来た、艦隊での重労働から。外国人の誰もそこへは入らない、もし入ったとしてもうまくは行かない。ロシアの船乗り達は他の外国人より極めて受けが良く好まれてもいた。彼らは明けっ広げであった；なけなしの金をはたした、私の気質だけが邪魔をしない。ポケットを裏返す毎に、可愛いオマツさんは親身となってくれる。」

他の詳細な証拠も保存されていた、日本のホテルでロシア人将校達の暇つぶしがどのようなものであったかの、ロシア式で。「ペテルブルグから太平洋艦隊へやって来た中尉を探し出して、母からの手紙を携えてきていた、私は知ることとなった、友人達がそれをオ

イヤさんへ持って行ったことを。そこへ行く羽目になった。私は彼が完全に酔っているのを見つけた、彼は大きなホールに座っていた。ビールまみれのテーブルに背中を、壁に顔を付けて。壁には高価な枠の中にニコライ二世の大きな写真が吊されていた、自筆付きの、「可愛いオイヤさんへ、記念に」。テーブルの回りには、海軍の将校達が座っていた、制服のボタンを外して、汗だらけの赤ら顔をして、眠たそうな目をして。何人かの膝には、髪のもつれたほろ酔い加減の日本人女性がいた。色々な言語のざわめきと酔っ払いの高笑いがあった。友人の中尉は胸を手で打ち、ヒステリックに叫んだ：

－私はどこに居るのだ、教えてくれ、私は何処に？・・・　もし、清浄な場所に居るならば、が、何故、酔った日本人女性が酔った将校の膝に座っているのか？・・・　もし、私が売春宿に居たとすれば、何故ここに我らの皇帝のポートレートが吊されているのか？・・・　何故？・・・酔っ払いの涙は彼の顔を伝って流れ落ちた。」

とはいえ、他の時がやって来た。ロシア船は長崎で越冬しにやって来て停泊した。ホテルは空になり、ロシアの船乗り達の肖像画の蜘蛛の巣を誰も払わなくなった、ホテルの壁を飾っていた。ロシアの新聞の頁には、日本や日本人に宛てて不快な発言を見かけるようになった。例えば、その年には、マカキという単語がありふれるようになった、刊行物は全く支持していなかった、正しいことであるが、にもかかわらず、日本人を侮辱するということを。その頃に、ロマンチックな出来事が起こった。八百屋の１７歳の娘が、ロシア船に野菜を供給していた、ロシア語と英語を話しながら、ロシアの船乗りと仲良くなった。出会った時から、彼らはお互いに愛し合った。船乗りは聞いていた、日本人の妻以上の物は何もないと。そして知人に日本の女性と結婚することを相談した。そして自分から彼をオマツさんに紹介した。彼女はしばしば仲人を引き受けていた。他のホテルの主人のように。早速、八百屋のところへ行ったが、断られた：日本人は娘を妾として渡したくはなかった。話は本当の結婚であると彼に説明した後に、同意にこぎ着けた。日本の風習にしたがって全ては厳格に進んだ。結婚式まで、新婚夫婦は希に、わずかの時間だけ会うことができた。ある時、台風時に、娘は会いに行けなかった、花婿は溜まらなく不安となった。目撃者の言葉によれば、彼の様子は笑いと同情を同時に引き起こした。翌日に、彼が好きな人を見た時、喜びはいかほどであったか：彼らの再会は、お互いに２０年間会っていなかった者達の再会に似ていた。

漸く結婚式の日がやって来た。オマツさんの家はヨーロッパ風であったので、急いでそれを日本風に変えた：畳を敷き、家具を片付け、座布団を敷いた。結婚式には、長崎の上級の芸者達を招待した。夕方７時に、花嫁がやって来た。手の込んだ髪型、綺麗な着物を着て、帯を巻き。ヨーロッパの品々で、ダイヤモンドのブローチとイヤリングは彼女を美しくしていた、それらは細紐で取り付けられていた。娘の耳を突き刺せないので。彼女の顔は愛と幸福で輝いていた。芸者達が料理を出した。「新郎が新婦と結婚の杯を交わさなければならない時がやって来た。新郎は少し顔が火照っていた、新婦もより顔が火照っていた。明かであった、新婦が扇子をより激しく振るようになったので。新郎が新婦を助けた。在席している女性達はこれを非常に好意的にとらえた。戦争まで残り１年であった。・・・

他の有名な日露レストランとして、ベスナ（春　＊）があった。その所有者は道長エイであった。将来のロシア皇帝が長崎の夜をそこで過ごした。彼女は１８６０年に、漁村に

生まれた、天草島にあった。１２歳で両親を失い、彼女は親類のところで育った、長崎から余り遠くはない町の茂木にホテルを所有していた。７年間娘は子守の手伝いをした。女中になった、ボルガでの仕事をするまでの間。魅力的で社交的なので、レストランの来訪者達にエイは気に入られた。主人はこれを利用した、ロシア人将校クラブでの仕事に彼女を指名して。このクラブはレストランに並んで開かれていた。その後、娘の生活はロシア人とロシア語に長く付き合うこととなった。

上海への何度かの旅行で、エイはロシア領事と彼の妻と懇意となった。彼女は彼らに競馬に一緒に行くことを提案した。そこで、彼女はついていた：彼女は賭けに成功し、大金を手にした。１８９３年１２月、道永エイは儲けた金でヨーロッパ風のホテルを建てた、名前は「ベスナ（春）」の。ホテルは稲佐の海岸から余り離れていない綺麗な高台にあった。ホテルには風呂とトイレ付きの２０部屋、大ホール、ビリヤードとヨーロッパ料理のレストランがあった。開所式とパーテーで、来客はエイの外観の変化に気がついた：彼女は妊娠していた。翌年の５月に息子の孝を出産した、道永エイは子供に父が居ないことを全く気にしなかった。断固とした意志を持ち進取の気性のあった彼女は、子供を１人で育てることに狼狽えなかった。当時は日本では、独身の母親の状態や仕事で独立している女性は居なかった。何時も日本の女性は役割に満足していた、「なにかの光を反射している月」のような。

ベスナは、ボルガと同じように、ロシア艦隊の将校達に休息場所と住居を提供することで、大いに儲けた。エイの人気と名誉は段々と高まり、船乗り達は彼女を「ロシア海軍の日本の母」と呼んだ。ビジネスの最盛期は１９００年であった。その時、エイはホテルを新しい建物に移した、同じ稲佐にあった、山の斜面に沿って少し高い所の。その内に、精神的な持病を引き合いに出して、彼女はベスナの管理を自分の職員に渡して、小さな日本式旅籠屋を開いた。その旅籠屋は、山の頂上に建っている神社の古木に快適に収まっていた。高い所から湾と町の家々が見えていた。エイの静かな生活を露日戦争が破った。

１９０３年６月、ロシアと日本の緊張した関係が増大した。ニコライ二世は日本に軍事大臣クロパトキンを派遣した。帰国する時、大臣は長崎に立ち寄り、道永エイのホテルに数日間滞在した。あり得る、東京での冷たい受け入れの感傷を和らげるために、著名な女性に彼は慰めを求めたことは。この時、長崎湾に、もうロシアの旗は見えなかった、ベスナは稲佐の他の似たような施設と同じく、空っぽであった。他の国籍の泊まり客を待っていた。

１９０４年２月８日、日本艦隊が、旅順の太平洋艦隊を捕縛した。湾港を封鎖し、ロシア海軍に多大な損失を負わせた。露日戦争が始まった。道永エイと友人達の悲しみやいかに。彼らの幸せな状態は２国間の良好な関係に依存していた。１９０５年１月初めに、ストッセル中将は旅順を日本に引き渡した。１月１４日、彼は警備隊の監視下で長崎に、フランスの郵便蒸気船オーストラリアン号で護送された。彼をエイのホテルに監禁した。急な上り坂は、太っているストッセルにとって容易ならぬ経験であった。エイは彼の段上りを手伝った。ホテルで中将は３日間を過ごした、ヨーロッパに送られる前の。

戦争時：稲佐の新墓地

１９０４年の元日は偶々に天気晴朗であった。日本人は習慣にならって、数日間にわたって新年の到来を祝った、訪問したり客を受け入れながら。世界では全くいがみ合うことはなく、火薬の匂いもしていなかった。「新年の訪問が住民の間で続いている、３日間連続して。ヨーロッパ人は初日で終了する。新年、これは日本人の唯一の祝日である、彼らは特別に祝う、１人残らずに。この日には多くの人はへべれけになるまで飲む。各家には、入口か応接室に容器付きで整理机を置く、それに訪問者の紙札を置く。原住民が民族服で着飾っているのを見るのは面白い。その時、彼らは一列になって自分の紙札を配る。通常は、各々は沢山用意しておき、それらを自分で配らなければならない。」

実際において、当時、元気な日本人達ができるだけ沢山の親類や知人を祝福しようとしていた時、ロシア人租界の中で、古いしきたりで生活している、矛盾が見られた：全ては何かを待っていた、見せかけの陽気さで恐れを隠しながら。戦争が間近に迫っていた、が、ロシア人達はその準備をしていなかった。直に、長崎で、ロシア蒸気船を拿捕するようになった。最初に、シルカ号を拿捕した、この船は修理のために１月６日にここへやって来た。この船を停泊地で直接出迎えた。その後、マンチュウリア号を拿捕した、機械工場のドックで修理中であった。その後、蒸気船ムクレン号の番となった。「その様な予想外の拿捕はロシア人租界に大騒ぎを引き起こした。同じように、若干のヨーロッパ人達の間にも。多くの者達が上海に逃げた、最も近い中立の港として。日本政府のその様な行為は皆を驚かせた：新聞報道から判断して、土曜日の、すなわち、日本の最後通告に対する、ロシアの返答待ちの最後の期間に指定された６日の。宣戦通告が予定された、不満な返答の場合に、突如として・・・」

露日戦争の期間、長崎のロシア人達の関心をフランスの外交官達が示した。ロシア人が再びここに現れた。が、自分の意志ではなかった。日本政府は、長崎における長年にわたる歴史的滞在を無視し、この町を軍事捕虜の配置のための中心の一つにすることを決めた。稲佐は再び活気を取り戻した：稲佐を経由して、捕虜となったロシア兵の波が移動した。月を追う毎にその数が増えていった、戦争がロシアにとって屈辱的な結末へ転がっていくようであった。収容所の代わりに、ロシア兵を日本人の家庭に配置した、軍事史で前例のないことであった。捕虜に町を散策することが許された。夕方には、地域の商人達は剛心寺の境内に、捕虜の娯楽のために、売店や小さい射的場を用意した。軍事捕虜の容易ではない生活を、ポルトーアルツール（旅順　＊）からの第４東シベリア師団の司祭らが和らげた、彼らは自ら日本の捕虜となっていた。

戦争のロシア人捕虜達は長崎をどのように見たのであろうか？　「町には、巨大な家の建築物と造船所が隣接していた。湾は人々の声で騒がしかった、稼働中のウインチが音を立てていた、商船の多数の煙突から煙が上がっていた。様々な国旗を掲げて停泊している大きな商業蒸気船の間で、小さい日本の船が機敏にせかせか動いていた。それらの各々は屋根のある漆塗りの船室で輝いていた、建てかけ式の船首で飾っていた、何か首を伸ばした水鳥に似ていた。

町に対向して、長崎湾の北西側に、岩だらけの丘に、ロシア海軍に良く知られている稲

佐村の畑が広がっていた。戦争までの長い期間、ロシア政府はここに土地を借用していた、そこにボート小屋、作業小屋、病院を造っていた。それらの施設を、海軍会議が管理した、好意的なハウスキーパーの天津さんが面倒を見ていた。施設には、ビリヤード室、在庫豊富な図書館があった、その内壁は将軍や将校達の肖像画で飾られていた。丘の一つには、ネバホテルと称した２階建ての建物がそびえていた。

・・・石の埠頭から、その階段は海に直接下っていた、町はヨーロッパ風のホテルとレストランで始まっていた。ここの広い通りには、日本の民族服である着物を着た日本人達と一緒に、アメリカ人、ドイツ人、フランス人、ロシア人、中国人、黒人と出会えた。色々な言語が飛び交っていた。ヨーロッパ風の住居の向こうには、ズッと木造りで軽い日本風の家屋がぴったり寄り添っていた。２階建ては多くはない。が、その際には、２階は住居に、１階は店に使われていた。店の前面は昼に解放された、看板はないがそこで何を売っているのかは分かった：亀の甲羅の製品、模様のある扇子、素晴らしい日本の陶器、多色の絹。次のような印象が生まれた、狭い通りを散歩することができるのであろうかと。が、出店では日本の手芸品や工業製品を見ることができる。幾つかの家屋や寺が山の斜面や畑の丘に沿って散在していた、町に装飾的な見晴らしを与えていた。

レストラン、茶屋、隠れ処では音楽が鳴り響いていた。興奮させる音のもとで、見せかけの喜びで興奮している船乗り達がいた、遠洋からやって来た、日焼けし、あらゆる緯度の風に吹きさらしとなった。特に、出歩いていた、喜んで、ロシア人達は。将校達は、下士官、兵卒も同じく、捕虜としての生活を止めた。後になってかららは知ることとなった：彼らは大声で歌った、悪態をつき、何の希望もなく、文字通り、彼らにとって大祭がやって来た、人力車に乗って外出した。」

この記述は出来事からである、ノビコフ・プリボイの小説「ツシマ（対馬　＊）」における。将来の作家の大学となった、バルチック艦隊に一兵卒として召集された、日曜学校は、地下サークルと関係した、非合法文学と予防拘禁所。政治的視点は最終的に第２太平洋艦隊の対馬航行で仕上がった。対馬での艦隊の壊滅において、ノビコフは捕虜となった。そこで、彼は個人的な印象を書き残しただけではなく、他の水兵の話も書き留めた。彼は軍事捕虜の雑誌「日本とロシア」のために記事を書いた。

後になり、彼は日本について次のような文章を残していた：「８ヶ月半、私は捕虜で居た。結局、熊本の収容所に残り、解放の日を待つことになった。我々は鉄道で港湾都市長崎に運ばれた、そこでは既に我々をボランテア艦隊の蒸気船ウラジミル号が待っていた、岸壁に係留されて。我々の輸送列車は、収容所の軍隊の移送のために特別に準備された広々とした所に停車した。しかし、蒸気船は数日間未だ港に停泊したままであった、生きている荷物を抱えながら、条件が整うまで。乗客は主として、水兵と１２人の海軍と陸軍の将校達であった。

我々は１９０４年１０月２日にロシアを後にし、１９０６年１月末に帰国した。我々の機嫌を取るために、皇帝政府は長崎での我々の滞在中に、我々に陸上勤務俸給と９ヶ月間の海軍給与を与えた。捕虜で居た時は航行中と見なされた。各自は大金を手にした。蒸気船では、なめし革の半外套、防寒長靴、毛皮帽を得た。もし餌場と見なさないならば、これは国庫からの最後の支給であった。我々は初めて、自分たちが自由の身であることを幾らか感じた。・・・　長崎湾では、蒸気船は不定期間止まり続けた。これは兵団を不安に

した。ロジェストベンスキイのところで衝突が起こった時から、彼らの怒りは燃え上がっていった。出来上がった状況はこれを後押しした、火災を風が助けるように。

海軍大佐ステマンはロシア海軍病院に居た、捕虜受領に関する海軍省からの委員会の委員として。日本政府に対する彼のメッセージは明らかに、完全に成功した。ボロネジ号での夕食会に、長崎から警察署長がやって来た。ロジェストベンスキイと彼の司令部の要員との会合において、彼は極めて愛想が良かった。自分の非常の任務を彼は遂行した、特別な歓喜をもって。日本人にとって、これは予想外の出来事であった。対馬で撃破され、侮辱されたロシアの将軍は日本人に対して地位を隠さないだけではなく、逆に何度も振る舞った、彼らに軍事援助を願いながら。自分の下士官以上に彼は敵を信用していることは明かであった。最も上品な表現で、英語で説明しながら、警察署長は怒れる将軍を宥めた。」

実際には、蜂起はなかった、ロジェストベンスキイ将軍自身の虚栄心が原因であった、「彼は腹を立てた、船で彼に捕虜の名誉を与えてくれないことに、彼を私的の服にさせていたことに；＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊海軍を破滅させたと非難するようになった。；彼は怖じ気づき、日本の警備隊に頼った。その後、船に 70 人警官が派遣された、２隻の水雷艇がボロネジ号の舷側にやって来た。しかし、（将軍ウラジミル・ニコラエビッチ・）ダニロフ花が崎にやって来て、警察と水雷艇を退去させた、捕虜の代表者達と交渉をして。そして分かったのは、彼らは蜂起を考えておらないことが、将来においても。」

長崎に居た捕虜の多くは重傷を負っていた。稲佐のロシア人墓地はあっという間に満杯となった。しかし、露日戦争期間における最初の墓の一つは全く戦争には関係がない。子供のであった：１９０５年、ここにロシア人将校の１歳の息子ミハイル・ムリベルグを葬った。その後、ロシア軍艦の水兵の遺体が現れた。巡洋艦ルリック号、ドミトリイ・ドンスコイ号、アブロラ号、装甲艦アドミラル・ウシャコフ号、シソイ・ベリキイ号、オスリャビャ号、オリョル号、その他の艦船の。特に、１９０５年５月１４日～１５日の対馬海戦後に沢山の墓が付け加わった。墓の一つに、１９０５年５月５日に負傷で亡くなった巡洋艦ドミトリイ・ドンスコイ号の船長である海軍大佐レベデフを葬った。彼の同じ隊の仲間が書いていた：「将校と乗組員の証言によれば、イワン・ニコラエビッチ（・レベデフ）は戦闘時に重傷を負った：弾頭が彼の太股の回りの肉を剥ぎ取った。彼は甲板室に運ばれ、そこから命令を出し続けた。全ての希望が失われた時、彼は吸い込み弁を開けて、船を沈没させるように命令した。それは実行された。岸に向かう最後のボートに彼を移した、彼は命令した、大量に流れ出る自分の血でキャンバスの一部に赤い十字架を描くように命令した、それを上陸地点に立て置くようにと。日本人が無力の者達を攻撃しないようにするために。ズッと乗組員達を元気づけ、冗談も言った、その内に自転車に乗ることもあるかも知れないなどと。長崎に移送後、彼は出血多量で亡くなった。アーメン、多数のロシアの英雄の内の一人、その名は残る、司令部における保護の不足により無名のままである。」

５月１５日の朝、ダジェレット島付近で、対馬からウラジオストクまでの中途の、巡洋艦スベトラーナ号と水雷艇ビストリイ号が敵の巡洋艦の包囲網に入っていた。戦闘で、スベトラーナ号の艦長である海軍大佐シェイン、上級将校ズロフ、他多数、全員で１６７人が亡くなった。残りの者達は沈む船から助かろうと、海中に飛び込んだ。スベトラーナ号の上級航海士将校である海軍中尉ウラジミル・ウラジミロビッチ・デヤコノフは戦闘時、重傷を負った：砲弾の破片が彼から腕をもぎ取った、彼はスベトラーナ号とともに沈むこ

とに決めた、が、彼にそうはさせなかった。「操舵室と信号室から何人かが海に投げ込んだ、自分の直属上官である航海士デヤコノフを。これは海事に関わっている船乗り達の基本であった、全船員のおきにいり。彼らは我慢できなかった、この人物を沈没していく船に残すことに。彼の抗議にもかかわらず、彼はコルクのマットレスに包まれ、船外に放り出された。流されながらも、彼らは彼を海に捨てなかった。」

５時間ほど過ぎて、水中に居た多くの者達が疲労と飢えで水中に沈んでいったとき、大きな２本煙突の船が出現した、日本の救助船アメリカ丸であった。この船は未だ生きている者達を引き上げた、それらの中にデヤコノフがいた。目撃者の追想によれば、彼は小型ボートに自身で乗り上がる力を未だ持っていた、この時、彼は船鍔に肩からはみ出した骨で。日本船の医者は混み入った手術をすることを拒否した、デヤコノフは沿岸の病院に送られた、そこで手術が行われた。が、クロロフォルムのために眠れなかった。船乗り達は軍隊式栄誉礼を受けて長崎に葬られた。

デヤコノフの全人生－３２歳足らず生きた－は海洋でのことであった。バルチック海、地中海、大西洋、北極海と太平洋。２０歳で士官候補生のデヤコノフを海軍少尉に任命した。１８９４年から１８９５年の日清戦争時、ロシア軍は日本の同盟軍であった。中国人蜂起者に対する戦いにおいて、旭日６等勲章で彼を叙勲した。１８９７年１２月６日、勤務良好で、デヤコノフは海軍中尉に昇格した。直に、彼を一等航海士にし、北極海の水路探検隊の一員とした、１８９８年に組織された。彼は探検隊長の補佐となった、北極を熟知していた少将ビリツキイの。彼らには大きな仕事が待ち構えていた、バレンツ海と紅海の。極の条件下で行われた２つの航海は船乗りにとって大事な学校であった。探検隊は詳細に調べた、ノーバヤ・ゼムリャの海岸を、マトチキン・シャル海峡とユゴルスキイ・シャル海峡を、バイガチ島を。１８９９年～１９００年における天候の不順にもかかわらず、全ての課題を見事に成し遂げることが出来た。デヤコノフの名前は地図に残った。ロシア政府は将校で極地家のデヤコノフの偉業に驚き、彼を聖スタニスラフ３等勲章で叙勲した。ストックホルムでは、彼にスエーデンの聖オルフ勲章を授与した、フランスでもレジョンドヌール勲章で。

探検終了後に、デヤコノフ中尉は昇格した、１級巡洋艦スベトラナ号の上級航海士将校として。この職務は、将校として最後のものであった。艦隊副官クリジジャノフスキイが自分の日記に短く書いていた：「デヤコノフ中将が５月１６日、病院で怪我と左腕の切断で亡くなった。」

１９３０年、対馬海戦から２５年を経て、パリの軽食堂ビアラに、元ロシア人将校達が参集した、著名な戦闘の参加者達が、追想のために。退役した海軍中佐セルゲイ・ネビャロフスキイ－巡洋艦スベトラーナ号の元機関士－がデヤコノフを追想した：「航海術に愛情を持った航海士、素晴らしい海軍将校で、隊付き将校、言語学者で旅行家、専門家以上に５大陸とヨーロッパに知見を有していた、真の紳士であった。デヤコノフはその様な人物であった。」

対馬海戦は、海軍省の技術学校の卒業生、フェドル・アンドレイビッチ・ヤコブレフにとって最後となった。１８７２年６月６日生まれである。１８９４年から１９００年、彼は極東を航海した、砲艦ボブル号と巡洋艦ルリック号に乗って。露日戦争を、彼はバルチック海で向かえた、１９０４年から彼はそこで装甲艦アドミラルグレイク号で船の機械工

として勤務していた、その後、水雷巡洋艦パサドニク号に。１９０５年、ヤコブレフにキャピタン・コルプスの称号を授与した、湾岸防衛装甲艦アドミラル・ウシャコフ号の上級機械工に任命した。」

長崎の「意思」

ニコライ司祭が自分の日記に書いていた、「長崎には、アナーキストの巣窟がある。」

実際において、少なくは無いロシア人が住んでいるこの町に、政治グループが作られた。その活動は現体制に反抗するものであった。革命家にとって仕事をするのに最適の場所であった、とにかく、ここには沢山のヨーロッパ人の団体があった。その団体の多くの会員はロシアの内政に不満であった。政治的活動、特に新聞の印刷が露日戦争時に特に発展した。とりわけ、雑誌「日本とロシア」を発行した。その印刷において、重要な枠割りをルセリ・スドジロフスキイが演じた。

政治活動とロシアのテロ組織への参加による逮捕を避けながら、スドジロフスキイは妻と一緒にアメリカに移民し、サンフランシスコに住んだ。そこで、彼は医療業務に従事した、新しい名前、ルセリで。直に有名となった、司祭アレウトスキイとアリャスキンスキイ・ウラジミルの同性愛傾向を公表したことで。次のようなことであった、司祭は子供を誘惑した、彼らをロシアから連れ出した、教会合唱団の歌のために。司祭ウラジミルはドクトルに破門を告げた、が、事は広く知られるようになった、ロシアと同じようにアメリカでも。司祭は呼び戻された。

その後、ルセリ・スドジロフスキイは妻と一緒にハワイ島へ去った。そこで彼は同じく戦いの場を見つけた：アメリカとロシアで、アメリカへのハワイの併合に反対する抗議を明らかにした彼の論文が出現した。彼の和解しない立場はハワイ人に気に入られた：ハワイ人は彼をハワイ議会の議長に選出さえした。しかし、元革命家はそれほどの政治家ではなかった、ハワイ島に民主政府を打ち立てようとするための戦いの彼の方法は彼の仲間の支持を得られなかった。ルセリは引退を強いられた。そして、直にハワイを去った。上海に去り、彼はシベリアの収容所の武装襲撃を組織することを決めた。しかし、これを露日戦争が邪魔をした。ルセリは新しい計画を生み出した：ロシアの陸軍兵と海軍兵の中に、革命のプロパガンダの拡散のために、戦場に出向くことを。

ホノルルに戻り、彼はオペラ劇場のホールで公演をした、ロシアと日本の戦争について。現地の住民を興奮させた問題は、どちらが勝利するかであった。ルセリが書いていた：「地域の砂糖の億万長者で大農園主の興味は、モラルだけではなく、全アメリカ人の興味、ロシアの専制を長い間に渡り横目で見ていた、は地域的であった。：大農園の労働者の大半は日本人であった。この不満な要素に日本の同情と援助の共感を呼び起こすことは都合が良く好ましいことであった。階級差無しの日本人自身の興味と状況について、話すことは何もない。結局、オペラの大ホールは満員で、聴衆はよく聞き入っていた。聴衆に私は事実を述べた、ペテルブルグにおいて宮廷の召使いに対する日本の代表団のけしからぬ大無礼の。朝鮮への侵攻は全く正当化されない、大森林開墾地の獲得の目的を持った、ロシア

の高級官僚による利用の興味がある。そのトップにマリア・アレクサンドロブナ（アレクサンドル二世の妻　＊）がいた。全てを話した。しかし、私の結論を期待していた者は少なかった：この衝突の勝者は小国の日本である、騎士のように軽蔑するように投げられた手袋を受け止めた。誰も期待していなかった、何故ならば、巨人と子供の力関係－ダビデとゴリアテーは余りにも明確であったので。ロシア自身において、全世界において、少なくない人々がいた、他の視点でこの件を見ていた、道徳的、精神的な視点からかたるように、私は全く一人ではなかった。我々は未来に基礎を置いていた、過去ではない。」

講義の成功は全ての期待を越えていた。寄付名簿によれば、６万ドルもの大金が集まった、日本の援助のための。もちろん、ルセリは考え込まなかった、日本が中国に進撃したように、ロシアにとは。彼は知らなかった、数１０年後に、日本の飛行機がパールハーバーを爆撃するということを。元気づけられ、彼はパンフレット「ロシア軍の将校へ」を書いた、１９０５年初めにニュヨークで出版された、エスエルの印刷所で。その年の５月、ルセリはホノルルにいる日本大使に要請した、長崎に旅行するためにビザを発行してくれるようにとの。アメリカ人ジャーナリストのケンナンの提案がきっかけとなった、日本にいるロシア人捕虜の中で説明活動に従事している、日本政府に許可されて。ニューヨークのロシア自由友好アメリカ人団体がジャーナリストのルセリを候補者として推薦した。

１９０５年５月５日、ハワイの首都の新聞に声明が出た：「至急に出国する必要から、家屋を安く売ります。独立したコテージ、ロシア風のベランダ付きの２階建て。」　１９０５年６月半ば、ハワイ議会の元議長は日本に到着し、長崎を訪れた。そこで、帝政に対する戦いを継続した。露日戦争時と戦後の最初の年に、日本の町々に、ロシア人の出版事業の新しいセンターが出現した。ロシア語の出版物が急速に広まった。１万人の軍事捕虜達は手にした、本、冊子、正教の代表者による定期刊行物を、ロシア人団体の、王朝の、社会民主主義の、社会主義者の、革命家の。

実際において、日本における自由なロシア人の言葉の全ての火元はルセリの活動と関係していた。彼は基本的な組織者で発起人となった、長崎、神戸、大阪に近いハマデルの収容所、その他の場所におけるロシア人出版物の発行と拡散の。１９０６年の春、長崎におけるロシア人の政治的移民者のグループによって出版者「意志」が創設された。その目的として、ロシア人の団結が宣言された、政治的視点を乗り越えて、政治的作品の出版と拡散、移民者に物質的な援助を示すこと。同じ名称の新聞の頁で、情報が公刊された、政治状況について、ロシア人移民の生活条件について、フィンランド、イギリス、アメリカ、日本、その他の国における。１９０６年９月まで、党外の組織のものであった（編集者バデツキイ）、その後、社会革命党の組織となった（編集者オルジフ）、１９０７年まで存在した。

ボリス・ドミトリビッチ・オルジフは熟練した革命家として日本にやって来た、若い時に政治に夢中になった。「１７歳のオルジフーその後にオムスク実家学校の生徒となったーは流刑囚の地位の活動家と親しくなった。そこには当時、政治流刑囚の逃亡を助ける組織があった。それに彼は参加した。この御陰で、オルジフは流刑について大いに知ることになった；彼は分かった、どんなことに誰が参加したのか、何処へ、何時誰が流刑されるのかを。彼は充分に調べた、パスポートの仕事の技術を、そして、上手にパスポートを造った、シベリアの各地への移送のために、本の綴じ目にお金を。逃亡の手伝いに関する彼

の助力は非常に貴重であった。」

グループ「人民の意思」に、オルジフはオデッサで１８８１年に加入した、ノボロシア大学の物理数学部の学生の時に。１８８４年、逮捕の恐れから非合法状態に入り、彼は隠れて、党「人民の意思」の再建の取り組みをした。崩壊と逮捕の後にばらばらであった人民の意思のグループを一つの組織とし、団結させることに彼は成功した。その組織を彼は１８８５年まで指導した。が、その後、オルジフは逮捕され、シリセイブルグスク要塞に監禁された。１０年間の監禁を経て、彼は同志に秘密裏に赦免願いを出した。その後、極東への流刑で追放された。オルジフはサハリンとウラジオストクに住んだ。１９０５年には未だ日本に移住していなかった。

ルセリ・スジロフスキイは出版者「意志」に積極的に参加し、そこでは政治パンフレットを印刷していた。１９０６年から１９０８年の間における出版は不定期もので３０種に及んだ。それらの中には小冊子、本、選集、アルバムがあった。その印刷数は１２万冊にも及んだ。檄文と宣伝ビラの印刷数は１９０７年１０月には１８．７万冊に達した。「意志」の出版冊数は、極東の全てのロシア人の印刷所をうわまった。印刷物の発送地図は沿海州、プリアムール、満州を含んでいた。上海のロシア郵便局を通して、１１０人の荷受人達が帝国の３０の町々でそれを受け取っていた：サンクトペテルブルク、ワルシャワ、バクー、その他。１９０７年３月から、「意志」は本の出版の役目を果たした、エスエルの極東支部の代理としての。

１９１０年には、革命家の長崎グループは殆ど崩壊した。その会員の中に噂が届いた、ロシア政府、日本と良好関係を修復している、は彼らの引き渡しを要求したがった。その通り、日本はもうこれら革命家を必要としていなかった。東京では全く欲していなかった、隣人の体制が変わることを。それどころか、日本人の中に、「左派」が居着くことを。

長崎にズッと滞在していたオリガ・ニカノロブナ・ドミトリエバは、１９０７年８月３日に亡くなった。稲佐の彼女の墓に、墓碑銘が刻まれた：「稲佐への最初の政治的移民者、同志より。」　この町に、ルセリは妻のレオカデアと娘のマリアを葬った。日本から彼はフィリッピンに移った。そこでも彼は大いなる活動の間を見つけた。彼は科学的で哲学的な記事を書いた。土着民のために病院を開院した。その後、図書館を。「ウスリースク新聞」を通じて、日本人とフィリッピン人の生活と風習をロシア人に紹介した。ロシアにおける１０月革命の情報は、日本にいるルセリを襲った。喜びと情けなさが彼の心を一杯にした：来たるべき事に関する喜びと、荒れ狂っているロシアからはるか遠くにいるという情けなさ。その年に、ルセリはレーニンに手紙を書いた、その中で、ロシアの労働者の勝利に歓喜を表していた。１９１８年、似た手紙を彼（ルセリ　＊）からボルガの同胞達が得た：「君達は１０月に偉大な革命を成し遂げた。もし、反革命者達が君達を押しつぶせないならば、君らは空前の社会を造りだし、コミュニズムを造りだすことになろう・・・

君らは何と幸福なことであろうか、私は君らとともにいたかったし、新しい社会を造りかった。」

１９２０年９月、ルセリは中国の天津に移り住んだ、そこで彼は医療業務に従事した。彼は社会活動を続けた。１９２１年１０月１４日、彼をロシア飢餓援助委員会副代表に選出した。彼は元政治流刑囚協会の常任会員となり、論文を書いた。それについてセレブレンニコフが書いていた、「高齢の老人である彼は感じが良く生き生きとした人物であった、

ロシアや全世界での出来事に大変な興味を持つことを止めることはなかった。彼の意見によれば、ロシア人民の無学と無知を土壌にボリシェビズムが育った、同じくロシア人に固有で過度のアルコール依存。ルセリは明らかに、明確なアルコールの反対者であり、それを非常な社会悪と見なしていた。」

ロシアでの１０月勝利行進にもかかわらず、ルセリは祖国には帰還したくはなかった。思うに、勘が元革命家を欺さなかった：懲役囚協会の彼の友人の殆どがルビャンカの地下で喰わされたか、或いは強制労働収容所（Гла́вное управле́ние исправи́тельно-трудовы́х лагере́й（ГУЛАГ））に最後の安住の地を見つけたか。ルセリは当時では典型的な理想主義者であった、彼は大切に一番よく信じた、人間にあるものを。隣人を助け、彼らに全てを与えことを、自分がすることが出来る、彼は自分の義務であると見なしていた。明らかに、これはハワイ人の運命を軽減したいという彼の希望に添ったものであった。そして、ロシアにおける異説の人を支持することも。ルセリの考えと理想を彼の論文中にその表現を見いだした。それらは人生の最後の年に少なくなく公刊された。しかし、回想録まで手が回らなかった、多くのものがこれについて彼に要請したにもかかわらず。

ルセリの若い同志であるノビコフ・プリボイは１９０６年に古里に戻った。ペテルブルグでの権力の追跡を上手くかわしながら、彼は文学と革命の宣伝に従事し続けた。元船乗りはルポルタージ「１９０５年３月１４日の大型装甲艦ボロジノ号の破滅（水兵の話)」、「１９０５年３月１４日の大型装甲艦オスリャブ号の破滅とその乗組員について」を公刊した。冊子「狂人と無益の犠牲」と「他人の罪のために（対馬海戦の２つのレポルタージュ)」で、１９０７年に偽名のザテルチイで書き上げた。ノビコフ・プリボイは対馬海戦において海軍上層部を非難した。記憶に残る戦いについて、彼は同じく論文「パスハの出会い」（１９０９年）と「死の抱擁の中で」（１９１０年)、その他で話をしていた。２つの冊子は直ちに没収され、政府によって発禁となった。著者のノビコフは偽名で隠されていたが、イギリスに逃げざるを得なかった。そこで彼は鍛冶屋、事務屋、船乗りとして働いた、革命の宣伝を継続しながら。１９１２年から１９１３年に、彼はゴーリキーの招聘により、カプリに住んだ。一連の書き物を公表した、海軍での勤務条件、水兵の特徴、人の運命、戦争による不虞者についての。これらの大半は本「海軍の話」に入れられた、１９１７年に出版された。１９１３年、作家は半合法的にモスクワに戻った、「モスクワの作家による本出版」で主筆として働いた。が、第一次世界戦争時、妻と一緒にセムスキイソユーズの病院列車に勤めた。これは著作に新しいテーマを与えた。

オルジフは１９１０年に、妻と３人の子供と一緒にチリに移住した。そこで１９３０年に、ロシアとソ連について、スペイン語で幾つかの本を出版した。

戦後

露日戦争後、長崎のロシア人共同体は再び大きくなっていった。ポリャノフスキイ大使の主張によれば、１９０６年にはここには約３５０人のロシア人が生活していた。ここへ

のロシア船の寄航が復活した。「１７日の昼の１２時に、長崎に到着した。錨を落とすと直ぐに、我々の船の回りに商人と彼らの商品を載せた多数の小舟が我々を取り囲んだ。錨の処理が終わると、彼らに船に乗り込むことが許された。そして直ぐに、甲板には、木製の出店が現れた。様々な生活必需品が出現した：タオル、細めのシャッツ、靴、様々な小物、ミカン、アルバム、菓子、象牙細工、絹、その他沢山。商売は気勢があった。船乗りの内の何人かは船員を辱めた、商人達の信じやすさと単純さを利用して、商人達のところから商品を掠め取って。その後、日本人達は船員に注意するようになった。その後、一列に並ぶようになった、そして、窃盗は無くなった。

長崎は大きな湾の周りにある綺麗な町である、この町は何時も蒸気船の来訪者と帰還者で溢れていた。町の回りには高い火山がある、殆ど頂上まで耕されている。視線を向けると、高い文化を見ることができる、大変な苦労と情熱で手に入れた。この地域は非常に綺麗である。気候は常に適度で暖かい。湾は非常な賑わい。残念ながら、私は町に行けなかった。町については、外見とそこを散歩した友人達の話から判断するしか無かった。戦争までにここへ来ていた者達は主張している、商品は以前の２倍高くなっていると。が、ロシア人に対しては極めて安く売ってくれていると。明かである、日本では、労賃が下がっていることは・・・　２２日にバガチリ号は長崎から出港した、２３日には我々のグロモボイ号が。

戦争までに、長崎の正教会を建築することが出来なかった。ガガーリン公爵は計画だけを立て、ニコライ司祭に送っただけであった。自分の日記に書いていた：「教会の見かけは綺麗であるが、地震のことを考えるとその様な計画は不適格である：あちこちでの修正が必要である。が、何処で資金を、誰がそれをするのか？　けれども、我々の意見は、空しく響く。教会は計画中である；公爵は教会の建設に１万２千円持っている。が、私の意見では、これでは足りなすぎる。」

ところで、長崎やその付近に住んでいる正教徒の住民にとって、常勤の司祭が要求されていた、特に教会の祝日のために。ニコライ大主教は、時折、そこへ司祭の誰かを派遣していた。若い司祭のアントニイ神父（出自は日本人　＊）を選出する間は。彼は１８７４年１月１７日に、長野県の松代の村に生まれた、著名な武家に。洗礼を受けるまで高井牧男の名前であった。牧男少年は１０歳であった、松代に修道司祭であるパベル（ニイズマ、日本人　＊）がやって来た時には。彼は正教徒の日本人の中で素晴らしい布教者の一人であった。パベル神父の説教の影響で当時、多数の地域住民達が洗礼された。その中に高井家の全家族もいた。直に村へニコライ（カサトキン）司祭自身がやってきた。彼は日本人の正教徒家族を訪れ、２人の息子ー明と牧男ーを、東京にあるロシア宗教使節団の正教セミナールルへ派遣するように提案した。セミナールを修了し、アントニイ・牧男は１２年間、本郷教区で勤務した、東京主教座教会から遠くはない、彼が３１歳になった時、彼はベラ・鹿島と結婚した、東京の女性宗教セミナールの生徒であった。夫婦は６人の子供を育てた。

露日戦争の開始から、日本にロシアの戦争捕虜が来るようになった。ニコライ司祭は日本政府の許可を得て、捕虜のところへ、精神の癒やしと援助のために日本人司祭を派遣した。アナトリイ神父は特に心配した、しばしば捕虜のところへ出かけて。戦後に、感謝の印として、アナトリイは元捕虜から頂いた、対馬海戦で沈没したウラジミル・モノマフ号

からの奇跡者ニコライのイコン画を。このイコン画は一人の将校の御陰で生き残っていた。彼はこのイコン画を胸に抱いて船から脱出した。イコン画を救うことが出来たのである。

１９０６年、アントニイは主教ニコライによって、司祭の位に叙聖された。直ぐ後に、長崎のロシア領事館の敷地内の正教会の主任司祭に任命された。１９０８年３月２０日（４月２日）、ニコライ大主教が日記に記していた：「長崎からアントニイ高井神父が書いている、信仰を教えた３人を彼らによって洗礼したことを。これは最初の果実である、そこでの彼の布教の。書いている、教えを聞いている者達が未だいると。神よ助けたまえ！」

高井神父は苦難の週とパスハ祭を教区の信徒と一緒に上手くやっていると。寺院は人で一杯であった、彼は臨時の天幕を張った、希望者達全てを受け入れるために。ニコライ大主教が書いた：「明らかに、ロシア人信徒は幸せである、そこに司祭がいるので。だが、日本人達は敬虔な奉仕と謙虚さを褒め、愛している（？　＊）。」

高井神父はほぼ４０年に渡り長崎の教区を管理した。心のこもった牧師の仕事に対して、父親らしい慰めに対して、ロシアの戦争で示した。彼を叙勲した、飾りのついた胸に付ける十字架で。司祭の最も貢献したものの内の一つが次のことである、長崎に滞在中に、亡くなったロシア人戦争捕虜の遺骨の入った３６０個の骨壷を１カ所に集め、稲佐の広大な墓地に葬ったことである。

時折、日本の海岸にロシア人水兵の遺体が流れ着いた、１９０５年５月に亡くなった。それを見つけると、日本人達は丁寧に埋葬した。その様なわけで、至る所にロシア人の墓が出現した。公式な情報によれば、その様な自然発生的な埋葬地は約１００カ所。これらはロシア人戦争捕虜収容所があった松山と他の地付近以外であった。日本政府は領事マレフスキイに呼びかけた、遺骨を１カ所に移すことを。その時、大主教ニコライに質問を出した、「教会側に障害はないのであろうか、墓を掘り返し、骨を写すということに。これに大主教は答えた、「水兵達の遺骨を１カ所に集めることに対する障害はない。もし、墓が現在の場所にそのまま止まるならば、それらは捨てられ、忘れ去られるであろう。」

軍のエージェントであるサモイロフ陸軍大佐は日本にある全てのロシア軍人の埋葬地を回り、遺骨の移送計画を立てた。日本の軍は至る所で大いなる敬意を持ってそれを受け入れた。大使と日本の軍部が一緒になって、ウラジミル・コンスタノビッチはロシアの軍人を３つの墓地へ移送することに決めた：長崎へ、松山へ、大阪付近の浜寺へ。正教区がある点がそれなりの理由でもあった。基本的な埋葬は長崎で行われた、共同墓地では石造りの納骨所で。松山では、所有している埋葬地に４つの墓を付け加えた、浜寺では７つ。長崎の墓地には海軍省の指示に従い、記念碑「英雄の水兵へ」を建てることが決められた。

日本の海軍省と陸軍省は、再埋葬を日本の費用で行うことを提案した。が、それに感謝しつつ、ニコライ二世はロシアの費用で行うことにした。それにもかかわらず、日本政府は再埋葬に参加することを拒否しなかった、相当の敬意を持ってそれを実現するよう、全ての手順を組織した。サモイロフ陸軍大佐は記録した、「涙が出るほど感動的。」基本的な再埋葬を長崎のロシア人墓地で行った、前の場所には名称板だけを残して。このようにして、同胞の墓地に、１９０５年に亡くなった１６０人の遺骨がやって来た。様々な理由で、７９人の兵士の名前は未知であった。

長崎の多くの住民達は、稲佐のロシア人墓地での同胞の墓と記念碑の開幕の荘重な儀式に参加した。彼らはラスパポフ領事に仏式でも行うことを提案した。予想に反して、１９

０９年９月１４日－１７日の昼は快晴であった。時間がとれなかった－１０時には既に墓地での会合が既に予定されていた－ことで、ロシア領事館傍の小教会での祈祷式を行うことが出来なかった。稲佐に、小さい蒸気船が派遣された、２つの豪華な花束を持ったボートを曳航して。ニコライ二世からのが一つ、もう一つは日本にいるロシア大使からのもの。航路は長くはなかったにもかかわらず、ちょっとした出来事が起こった：予想外の波でボートがあわや沈みそうになったのである。上手く入ったが、帯付きの花束は少し水に濡れてしまった。

墓地の入口前に、兵隊からなる栄誉隊が並んだ。ここに、日本の将校や役人達が大人数集まった、長崎知事を首班として。祝典用の着物を着た日本女性達は本当に綺麗であった。長崎のロシア住民は小グループであった。彼らの傍に、正教徒の日本人達が。

大使の到着とともに、祈祷式が始まった、ニコライ司祭、大使館の教会の司祭ピョートル・ブルガコフ、長崎の司祭であるアントニイ高井神父、輔祭のリボフスキイと大阪の副輔斎のモイセイ川村が執り行った。聖歌「神と助けたまえ、神の僕」のもとで聖水の振りかけを大司教ニコライが行った。その後、厳かに教会葬が行われた。大変上手に歌った、ブルガコフ、リボフスキイ、ゾズリャ、長崎の住民達が、強く素晴らしい低音を出して。出席者の全員の手には、クリスチャンも、異教徒も、蝋燭を灯していた、前もって配られた。福音書を読み上げた後、ニコライ大主教は短い弔辞を述べた、それで亡き者の名を込めて。「英雄に幸あれの」言葉の元、３発の銃声が鳴り響いた。

祈祷式の終了後、花輪を献げた。墓への最初のものとして、ロシア皇帝からの花が置かれた。その後、大使からの、日本の陸軍大臣と海軍大臣からの、東郷将軍の、日本の各階層から大量の花が。記念碑は正に花で埋め尽くされた。この後、大使と全ての日本人達は剛心寺に向かった。そこで、荘厳な仏式の法要が行われた、平和教会（ワゴカイ？　＊）の会員によってもうけられた。その挙行のために、長崎の大半のお寺の僧侶が参集した。後になって、司祭ピョートル・ブルガコフがこの法要の様子を文章にして公刊した。

昼に、長崎のロシア領事館は豪勢な昼食を提供した、それには６５人が参集した。ニコライ大主教は食事までにシガを訪れることが出来た、墓地から直ぐに彼の所に出発していた。食後、何人かのロシア人の長崎人を訪れた。司祭は正教徒の小さいグループと一緒にお祈りをした、アントニイ高井神父のところに集まっていた。簡単な説教もした。夕方７時に、ラスポポフ領事が自分の公邸に客を招いた。特にニコライ・アレクサンドロビッチがニコライ大主教の面倒を見た：彼は妻と離婚することが全く出来なかった、大主教に離婚を急ぐように切にお願いした。彼は彼に自分の２６歳の花嫁であるマーシャを紹介した。

夜遅く、ニコライ大主教は東京に旅立った。見送り人で駅は溢れかえった。アレクサンドル・アレクセービッチ・シガは特に感動的に見えた、自分の師に同行しながら彼は泣いていた。今回が大主教ニコライの長崎の最後の訪問となった。彼らは再び相まみえることは無かった・・・。

稲佐のロシア人墓地への改葬はその後も続いた。１９１１年に、豊橋の市民墓地からここへ低い身分の士官であるロシア人の墓を移した、その後、静岡から将校の遺骨を。パニヒダ（祈祷式の一種）をアントニイ高井神父が執り行った。多分、予定外の出来事があった。改葬と見なさなかった、露日戦争後にロシア人墓地に基本的に市民を葬ったことを。２１歳のウリヤナ・コバレンコは１９０６年１０月９日に亡くなった。１９０７年に、イ

シャコフ・イワン・プロスベトフの商社の従業員（２月１９日死亡)、東清鉄道（ＫＢЖД）のブヘド駅からの従業員イワン・ゼリンスキイ（３月２１日死亡)、朝鮮人ニコライ・ツアイ（８月１０日死亡)、タシ・アブラモビッチの娘（１０月１８日死亡）の墓が出現した。１９０９年、稲佐の墓地に２人が葬られた：蒸気船タンボフ号の乗組員グリゴリイ・フレブコ（４月１２日死亡）とクラブデイ・タラチン（１１月１９日死亡）を。蒸気船オリョル号の上級船員アルセンチイ・シツクンは１９１０年1月２８日に亡くなった。蒸気船キエフ号の３等助手フェドル・トルコチを１９１１年１２月１２日に葬った。数ヶ月後、蒸気船オホーツク号の船長ウイルヘルム・カクチンが１９１２年3月１９日亡くなり、長崎に永久に残ることとなった。わずか後に、ここにタイシア・ソリャンニコバヤの墓が出現した（１９１２年5月１８日死亡)。１９１３年、セルゲイ・ズバイコフ（２月５日死亡）とアンドレイ・ソロビエフ（５月２４日）の葬式が行われた。１９１５年5月１７日、更にロシア人社会の１人の代表者であったアルノルド・ロゼンモンが、人生を終えた。長崎の司祭アントニイ・高井の２歳の娘エカテリーナの墓が最後の埋葬となった。この子は１９１８年7月１３日に亡くなった。

ロシアからの出身者達は他の墓地に葬られた。特に、坂本国際墓地のヨーロッパ人区画に。そこにはデンビの安置所がある：彼はホノルルで亡くなったが、彼の遺骨は長崎に運ばれ、妻と並んで埋葬された。川野神父が追悼祈祷を行った。葬式には長崎の古老達が参加した：ポポフ、ナパルコフ、アンクヂノフ、その他が。

長崎－「さよなら」

ウラジオストクの整備と船舶修理基地の強化の進展とともに、ロシア船が長崎に立ち寄ることが段々と希になって行った。目撃者が書いていた、「我々の船が去って行くと、長崎は２級の町に変わっていった。町の唯一の見世物は三菱のドックであった。が、そこは郊外であり、長崎湾の反対側に位置していた。町での生活には何も無かった。貿易も産業の価値も無くなっていった。それ以外に、長崎は汚かった、そのカナルからバザールへの入口では、魚や果物と他のゴミからの甘い匂いが何時も漂っていた。町では、英語の週刊新聞「ナガサキ・プレス」が出ていた。素晴らしい神戸や東京の新聞を手にしているので、読むことは無かった。」

ロシア人船員達がいなくなって、彼らのサービスのために造られていた商店は損害を受けた。１８９６年に、下り松に造られたブホンコフのロシア商店は、最終的に購買者を失い、その所有者は今後如何するか考える羽目になった。１０中８，９（？　＊)、ブホンコフは葡萄栽培をすることに決めた。１９０８年、ウラジオストク町議会の許可を得て、彼は１２年間に渡って土地を借用した、セダンカ駅近くのシベイツアリイ地区に。彼の指導の下で、大規模な仕事が行われた：１ｍの深さまで土地を掘り返し、全ての石を取り除き、近くの森から腐植土を運んだ、段々畑を造った。葡萄は裸地だけでは無く温室でも育てた。結果は驚きであった。フランスから取り寄せた、黒のフランケンタリ種と白のツアイト・セドミングは素晴らしい味であった、一房の重さが殆ど２．５ｋｇもあった、しか

し、上手く行かなかった。というのは、葡萄のスタボリスク種の２２５本の挿し木から３０本しか得られなかった。ブホンコフは原因として、大量の粘土質の酷い土壌にあると見なした。その時、彼にアイデアが生まれた、地域の野生の葡萄を利用するという、接ぎ木の材料の種として。これは庭師に完全な成功をもたらした。葡萄以外に、イワン・ブホンコフは多種の果樹を育て、果樹園を増やした。イチゴ、黒イチゴ、マリーナの苗木を、彼は同じようにフランスから取り寄せた。

露日戦争後、ナガサキのロシア領事館を６等文官であるジノビイ・ミハイロビッチ・ポシャノフスキイが主管した、これまで朝鮮で領事館を主管していた。ポシャノフスキイは１９０９年まで長崎に滞在し、その後、キョニスベルグでの領事として彼を移動させた。そこで外交官は第一次世界戦争開始まで働いた。

１９０９年の短い期間、レベデフが彼の代わりをした、その年の夏の間横浜へ領事として去らなかった、ロシア人墓地に同胞の墓を造るという最初の仕事を組織することが出来た。その盛大な開闢式を他の領事が執り行った、ラスポポフ、１９０９年７月から１９１２年２月まで働いていた。彼については次のような追想が残されていた：「当時、極東通のラスポポフが我々の領事であった、強烈な個性で挙げ足とり屋、非常に優しい主人、心から彼に近づく人との関係においては。しかし、気前が良い、何か彼のシンパシーに値しない芳しくない形容辞に（粘り強く話好きな助言者）。彼は喫煙をせず、甘いものに目が無いもの凄い甘党、ロシアから送られてきた。喫煙者が巻きたばこの匂い無しではやっていけないような。不断においてポケットにキャラメルを持っていた。」

妻との離婚がラスポポフにとっての大きな問題となった。この件は数年にわたっていた。彼は大いに信頼しているニコライ大主教にさえ書いていた、「絶望の手紙を離婚についての；自殺するとか、あれやこれやの戯言を書いている。」　大主教は彼に何の助けもできなかった、ただ仕事の加速についての要請を皇帝にするよう助言した。

１９１２年初めに、ラスポポフに長崎からの退去が迫っていた、シンガポールでの主領事としての、そこには正教の司祭はいなかった。彼は最初の結婚の束縛から自由になった。ニコライ大主教を口説き落とした、彼と花嫁を早く戴冠してくれるようにと、宗務院が規定している。外交官の要請に譲歩して、長崎で結婚式が行われた。が、ここにおいて、大主教は厳しく警告した、ラスポポフと彼の若い妻マーシャに。宗務院が規定している期間の３月までは彼らは別居していなければならないと。その後、ラスポポフはロシアには戻らなかった、移民となり、パリに住んだ。１９３０年、元外交官はストロゴフの偽名のもとで２冊の本を出した、本「アジアについて話す時・・・」の内容とそのスタイルは、東の国についての記憶と話に富んでいた、作家クプリンに感嘆をもたらした。彼は個人の責任で本に序文を書いた。この本には、以下のような章がある：「日本にて」、「１２世紀の２人の偉大な日本人」、「シァムについて」、「マレーについて」、「朝鮮について」、「東の略図」。

２番目の本「１９４０年に何があったのか。地獄への客として」は、２つの空想小説からなっていた、１９２０年代末に書かれた。それらの内の一つは著者の考察を基礎としていた、第一次世界戦争とベルサイユ和平の来たるべき結果についての。長崎の元領事であったラスポポフの人生最後の年の情報は未だ見られない。が、彼の伴侶マリア・アレクサンドロブナについては知られている。彼女は１９６７年５月に、フランスの町メントナで

亡くなったことが。

長崎の領事として、4年間にわたり、アルテミイ・マルコビッチ・ビボチェフが勤めた。ノボロシア大学の法学部を修了後、彼は１８７５年に勤務に就きながらウイーンとレンベルグ（現ウクライナの町　＊）で勉学を継続した。ビボチェフはオデッサ管区裁判所と外務省の官士となった、ハンブルグの副領事に指名された、シンガポールの領事（１８９０年から)、トリエスト（１８９５年から)、ケーニスベルグ（１８９７年から)、シンガポールの主領事に（１８９７年から)。

１９１１年2月に、５８歳の外交官を、長崎の領事に任命した。ここで彼は4等文官に昇格した。その後、サンフランシスコで勤務した。ビボチェフは国内戦争時、ウラジオストクでオムスク政府の外交代表者となった。国内戦終了後、彼はサンフランシスコに戻った。アメリカの銀行で役人として働いた。全般的な仕事に従事し、新聞「新しい夜明け」に記事を書いた。元外交官は９３年間生きた。追悼文が伝えていた：「ビボチェフはアメリカの市民権を取らなかった、ロシア人として亡くなることを希望すると声明して。素晴らしい知性と記憶を有して、彼は面白い話し相手であった、生きている百科事典としての自分の役割の・・・」

ビボチェフの後に、長崎にビタリイ・アレクサンドロビッチ・スコロヅモフが勤めた。外交官としての仕事を、彼は北京のロシア大使館で始めた。その後、東京の大使館に勤めた。長崎で副領事としてスコロヅモフは1年間だけ滞在し、その後、韓国へ去って行った。この頃彼は日本人と結婚した。夫妻には3人の娘がいた：イリーナ、マリアとエカテリーナ。国内戦終了後に、外交官は神戸に住んだ、そこでロシア人団体に大いなる助力を示した。

ロシア人旅行者達は長崎を訪問し続けた。このように、１９１３年夏に、約８０人がハルピンを経由してウラジオストクに入った。そこから長崎や東京へ向かった。彼らはシベリア鉄道の極東での生活への影響を視察したかった、ここへの移住の将来性について、中央地方からの。同じく、ロシアの極東部の開発への日本の経済的役割を説明すること。

第一次世界戦争の初めから、昨日の敵であった日本人達はロシア政府に伝えた、ロシア軍に義勇軍を派遣したい意向を。特に、ロシア側に立っての日本の参加の可能性について質問を、函館の副領事がプリアムール州知事に出して。上級指導部はこの質問を軍管区の参謀部の指揮官達の検討に回すことを決めた。これについて認められた、一般的権利に相当して日本の義勇軍は武装をすることが。１９１６年5月、ロシア軍で勤務したいという申請書が退役中尉の獣医師から送り届けられた、　シュハチ小池（１８８１年2月２１日生まれ)、露日戦争に医者として参加した。１９１７年には長崎に少なくない外国人達が住んでいた。特に、ロシア出身者達が。彼らはロシアと他の国々との間で、交易仲介者として大事な役割を果たしていた。

１９１７年春に、ロシアで帝政崩壊の後、アメリカ大統領ブドロ・ウイルソンと他の高位の者達がケレンスキーの臨時政府の支持に関する戦略をとった。目的は、レーニンとトロッキーを首班としたボリシェビキに政権に就くことをさせないことであった。ロシアに２つのアメリカ使節団を派遣する計画が立てられた：ルートミッションと鉄道ミッションと呼ばれた。

ルートミッションーその指導者であるアメリカの元秘書官（エリフ・ルート）の名を持

ったーは新しいロシア政府に道徳的支持を示すために、ウイルソンによって指名された、その設立後の１週間後に。それ以外に、それは説明しなければならなかった、どのような援助がロシアに要求されているのか、その同意の代わりに、ドイツに反対してアメリカの同盟国に説明をする。ミッションの人員には、政府役人と同じようにビジネスの指導者達も入っていた。１９１７年６月にロシアを訪問することに関して、ルートミッションの提案の中に、宣伝の展開があった、アメリカとロシア人の相互理解に関する。この手段の内の一つとして、青年キリスト教会の支部の創設があった。

鉄道使節団の課題はロシアの輸送問題の解決であった。特にシベリア鉄道の仕事に関係した。基本的に技術的な。これら２つの使節団は世辞的な陰謀を持っていた。鉄道を守り、その機能を改善することを提案しながら、アメリカ政府はこの地域における日本の支配を予防することを期待していた。ウラジオストクへの同盟国の荷物の安全を保証しながら、ロシアと同盟国にドイツに対する戦いの手段を保証もする。最終的には、新しいロシア政府に民衆に喰わせることを助ける。

アメリカの鉄道アドバイザー使節団をジョン・Ｆ・スチーブンスが主宰した。使節団は６月末にロシアへやって来て、５０日ほど滞在した。使節団の課題はロシアの全鉄道の比較展望を準備し、その技術的設備と管理の改善について提言をすることであった。第２鉄道使節団の成員に、ロシア鉄道会社の、３１６人のアメリカの軍事関係技師が入っていた、セントポール（ミネソタ州）とフィラデルフィアからの、陸軍大佐ジョージ・エマーソンの指揮下で、アメリカの大北部鉄道の主管理者の。これは軍事支隊であった、が、市民資格を持って、ケレンスキーによって雇われた、シベリア鉄道に沿っての当直のために、臨時政府の個人から。ロシア鉄道会社は１９１７年１１月１８日にサンフランシスコからアメリカ輸送船「トーマス」に乗って出発した。１２月１４日、ウラジオストクへのその到着時には、レーニンとボリシェビキは既に権力を打ち立て、もうアメリカの援助を必要としていなかった。とにかく、アメリカ人達の食糧などが尽きてしまった、彼らは１２月１９日に長崎に戻った。彼らは滞留は数日とするつもりであった。が、港に８ヶ月間留まった。それ以前に、使節団の全員は祖国は送られた。

初めは、早急の出発を期待して、技師達は長崎港に停泊しているトーマス号に止まっていた。エマーソンと日本政府の基本的な心配は彼らの仕事を見つけることであった、このやむを得ない停留時に。陸軍大佐は全員にロシア語の授業に出席するように強制した、青年キリスト教会に作られた。日本の鉄道局はアメリカ人に無償で日本全国を旅行することを許可した。熱心に長崎一帯を散歩したり、ダンスホール、長崎クラブ内の捨てられたボーリングホールを再開した。滞留が長引くことが明らかとなった時、技師達は長崎と小浜にあるホテルに分散した。基本的には、彼らはスポーツして時間を過ごした。時折、野球はサッカーで地域のチームと試合をした。彼らのために、講師を招聘した、長崎の住民によって寄付された１００冊ほどの本と雑誌を持ってきて、食事やその他のために手話の講義を催した。時折、団員は地域住民を喜ばせた、長崎の客としてジャズコンサートを催して。新聞「長崎プレス」は注目した、青年キリスト教会の建物で、１９１８年２月１５日に行われたコンサートは赤十字の後援のもとで行われたと。

最初のグループの出立の前に、定員の内の１１０人の技師達は２月２７日～２９日に、ハルピンに向かった、そこからウラジオストクへ。長崎市は彼らのために別れの晩餐会を

催した、レストラン福屋で。その後、演劇に招待した。残りの団員は直ぐに出発するはずであったが、数ヶ月が過ぎ、アメリカに帰還する命令を受け取った。１９１８年４月２日、２５人が「日本のエンプレス」号に乗って長崎を離れた。それに続いて、４月１５日には、残りの者達が「アジアのエンプレス」号と「チャイナ」号に乗って。長崎には、未だ１００人ほどが残っていた。予想外の出来事が起こった。極めて複雑な状況が：ウラジオストクにチェコ軍団がやって来た。

この時期、ロシア領事館に、アレクサンドル・セルゲービッチ・マクシモフが勤めていた。神戸での勤務後にここへやって来た。長崎に彼はほぼ１０年間居た：１９１５年６月から１９２５年２月まで。彼は既に領事館の仕事をソビエトの外交官であるザハリイ・リボビッチ・テル・アサツロフに渡していた。彼は領事館を南大和の５番地の家屋から、大浦の４番地の家屋に移した。マクシモフは日本に残った。テル・アサツロフが不在の時には再び領事館の職務をになった。前の建物に訪問者を受け入れて。テル・アサツロフの運命は平穏では無かった：彼を日本のスパイとしてカレリアで銃殺した。

外交関係構築後の１年は、全てのソビエトの外交官は全てスパイであった。優秀なソビエトの軍事スパイは、ユダヤ人のアスコフであった。初めは、彼はエスエルの党員であった。その後、コミュニストになった。１０月革命後、アスコフは赤軍に義勇兵として入隊した。その後、キエフで党の仕事に就いた。ブルジョアから奪い取った財産の管理委員会の委員となった。１９１９年から１９２５年、フルンゼ冠称軍事アカデミーの東方学部の日本語科で勉強した。更に、キエフの外交研究所を終了し、アスコフはある時期、キエフの国民経済研究所の学部長として働いた。未だ外交官の隠れ蓑をまとった軍事スパイでは無かった。彼は長崎と敦賀で領事の秘書とした働いた、神戸では副領事、主領事として。１９３０年から１９３３年、アスコフは赤軍参謀本部の第４局（諜報の）の命令下にいた。同時に、人民委員会の外務省の印刷物に関する報告者であった。１９３３年、連隊コミッサールであるアスコフを、参謀本部第４局の第２部の部長代理に任命した。１９３３年から１９３７年、彼は日本におけるソ連邦全権代表部の第一秘書であった。彼をモスクワに召喚した時、アスコフは４０歳であった。そこで逮捕され、直ぐに銃殺された。

ロシアの移民達の最後の係留地

警察の情報によれば、１９２９年５月１９日において、日本には１４７７人のロシア人がいた。その内の８００人が男性で、６７７人が女性。ロシアからの出国者としてユダヤ人やタタール人を含んで。ソビエト権力に同調しているのが男性５３２人と女性４６７人。白軍側は４７８人：男性が２６８人、女性が２１０人。基本的に、ロシア人は東京と神戸に住んだ。長崎には、日本の警察の情報によれば、ロシアでの国内戦の終了後、１００人少し越えるぐらいの移民者達が生活していた。彼らはばらばらで、何の社会的組織も作っていなかった。しばしば、長崎は彼らにとって他の国への中継港となっていた。

稲佐のロシア人墓地にある墓の記銘は、この町に安息の場所を見つけた者の証拠を与えている。７３歳のエカテリーナ・マカロブナ・フェドセーバは１９１８年２月１９日に亡

くなった。その年の１１月には彼女の５５歳の息子であるワシリイ・グリゴリエビッチ・フェドセーフが亡くなった。多分、長崎の企業家の家生まれであったアレクサンドラ・ペトロブナ・アンクデノーバは４１年生きて、１９１９年１２月１９日に亡くなった．長崎の古老であったゲオルギイ・パブロビッチ・ナパルコフは１９２０年８月２６日ここで亡くなった、６９歳で。

ロシア人墓地には、２人の将軍が葬られた：海軍少将ウラジミル・ニコラエビッチ・キタエフが１９２０年１月３日に６４歳で亡くなった。同じ名称を６２歳のニコライ・アンドレービッチ・エグノフが持って、１９２４年１０月１８日に亡くなった。多分、彼の早すぎる死亡の原因の１つが、１８歳の娘アンナを失ったことであった。彼女は１９２３年１月に人生を終えた。

全てのロシア人移民には雰囲気が待ち構えていた。多くの者達は祖国への早期の帰還を夢見ていた。が、年を追う毎に、希望を失っていった。ロシアの元市民にはその年々を生きていくのは簡単では無かった。日本語を知らず、彼らは希に良い仕事を見つけることが出来た。公共機関に就職することは実質的に不可能であった。若干はロシア語の教師として収まった。が、ロシアに対する特別な興味は日本人は持っていなかった。が、ロシア語の研究は彼らには苦労であった。民間企業に就職するためには、英語や日本語の知識以外に紹介が必要とされた。この際、技術的能力が贔屓された。ロシア人女性は仕事を探す際に大きな成功を得ることが出来た、男性より：彼女らは速記者、秘書、女給仕、売り子、製帽工、女裁縫師として落ち着いた。女家庭教師として彼女らを採用した：家に西洋人を抱えることはステータスと見なされていた。しかし、多くの場合には、ロシア人には日本人より少額しか支払わなかった、同じ職種でも。

圧倒的なロシア人、約９０％、は日本での仕事を行商で始めた。彼らは時計、金属製品、衣服を商った。が、しばしば全員が織物を売った。当時日本で良く知られるようになった、「切り売り」なる単語が出現した。織物の行商人をその様に呼んだ。服の縫製のために、「切り布」を使用することが出来た。掛け売りする材料を風呂敷や鞄に詰めて、彼らは売れる所にそれを運んだ：施設や、会社や、工場に。特に熟練した切り売り屋は良く知っていた、何処の誰のところを伺えば良いかを。彼らは僻地の村での出来事を利用し、朝鮮人労働者達に簡単な織物を供給することが出来た、鉄道建設で働いている、服を新しくすることを決めた。

行商人の仕事は大変であった、特に夏の極暑下では。徒歩で、或いは自転車で何キロも進まなければならなかった。購入者を信用させ、彼の疑いを克服するために、それなりの能力が必要とされた。これは簡単なことではなかった、言語の知識の不十分さを伴って。ロシア人が自分の購入者とどのように打ち解けたのかは、驚きに値する。ヨーロッパ人の外見が助けてくれたのは、確かである。時折、彼らは東京や大阪に商品のために出かけた。そこでは、比較的大きなロシア人団体を通じて確りとした商業関係を持っていた。希な休日にそこにやって来た、基本的にはクリスマスやパスハ祭に、商売が休みとなる。

「切り売り屋」の中で流行っていた歌：

「ニホンクニーシマジマ（日本は島々の国）
北海道から対馬まで・・・
１００マイルを歩いた、

埃にまみれて進む」

例えば、次のようなことがあった：ゴミを吸い込み、切り売り屋は島々の国を１００マイルも歩いた。北海道から対馬まで・・・。日本人の商人達は、ロシア人の切り売り屋の大変な仕事に敬意を持って接した、彼らの苦労と機知を尊敬した。彼らは日本人より日本の地理を知っていた、日本の文化の本当の理解者であった。残念ながら、彼らの中には1人の熱狂者もいなかった、見聞したことを書くような。仕事が上手く行くと、彼らは店を構えた。そこで妻や母親が商売をした。家族はより密接に結びつき、町の近傍で商売をすることを好んだ。何時でも子供の教育が問題となった。多くの場合、彼らはほったらかされた。一日中仕事に従事している親の幾分かは知り合いに子供の面倒を見てもらうように依頼した。が、希ではなかった、ほったらかされるのは。偶然では無かった、ロシア人墓地に子供の墓が少なくないのは。１９２０年7月２０日、パベル・ミュレルの赤子で生後半年になっていなかった。ボーリャ・グルシュコ（１９２６年1月２６日）とココチカ・クズネツオバ（１９２３年8月１２日－１９２８年1月２１日）は子供として亡くなった。長崎にはロシア人学校は殆ど無かった、移民者達は外国の学校に子供達を送ることを好んだのである。そこならば外国語を勉強することが出来たので。特にこれは娘で著しかった。ロシア人達は夢想した、それ相応の教育を受けた娘達が外国人と結婚することを。

７月から８月には、商売は暑さ故に休業した。彼らが話しているように、ロシア人はあちこちの別荘に行くことを好んだ。基本的には、海に近い所へ。そこで比較的安い部屋を見つけることが出来た、町よりズッと安く。圧倒的なロシア人達は日本家屋に住んだ。が、それをロシア風に整えることを好んだ：ベット、机、角にはイコン画。ロシア人の生活風習は日本の生活風習に一致した。彼らは米を食した、生やマリネ風にした野菜も、同じく魚も。とにかく、ロシア人には旅ではそうしなければならなかった。彼らは旅館や温泉で宿泊することになった。唯一の息抜きはヨーロッパやアメリカからの映画であった。その御陰で、彼らは多かれ少なかれ英語を学ぶことになった。

政府は移民を助けなかった。が、彼らの活動の邪魔をすることは無かった、もしその活動が妨げにならなければ。住民の大半はロシア人に対して平静であった、敵対心を持っていたにもかかわらず。大いなる同情心を彼らは他の外国人のところで見いだした、一緒に維持しようと努力している。政府には、移民者達は特別の場合にだけ問いかけた：何らかの許可を得ること、書類を延期すること、同じく、例外的な状況において、彼らを裁判にかけた時、証人や被告人として。

法の関係において、ロシア人は他の外国人と平等であった、１点だけ違って、：自分たちの外交官に問い合わせることが出来たが、ロシア人はこの可能性を奪われていた。日本人の通訳はロシア語が下手であることが問題となった、この点が更なる問題ともなった、ロシア人は政府に援助を頼むのを急がなかったという。移民者達は国際連盟の１年間のパスポートを持っていた、その期間が終了する、が、この問題を政府は見て見ぬふりをした。

初めは、行商は非常に儲かる仕事であった。多くのロシア人達がこの仕事に就いた。時と共に、行商に、中国人や日本人が現れるようになった。彼らはしつこくは無く、値段を非常に下げることもした。他の面では、この時代、町には、その後、村にも、更には僻地でさえ、商店が出現した、同じような品目を持った。これらの問題にも関わらず、ロシア

人達は段々と日本での生活に馴染んでいった。

数十年経過して、長崎にロシア人のセンターとして建物フォルダ・シェルビニナがなった。イギリスの市民権を持っている、アフロ・アメリカネッツ（混血のアメリカ人？　＊）であるリチャード・フォードが東インドから日本にやって来た。長崎にやって来て、１８７０年頃、大浦の４２番地の家屋に、リチャードは沖仲仕の会社を開き、船への補給に従事した。外国人の間によくあったことだが、フォードは日本人女性と結婚した、千葉サワという名の。１８７９年、彼らのところに娘クリスチーナが生まれた。日本人よりは黒人に良く似た。　リチャード・フォードは南山手の２２番地に西洋風の家を建てた。この家は将来において若干のロシア人団体にとって特別な役割をなした。ロシア人技術者が家の設計をした。家には、部屋が９室と個別の台所と風呂があった。家には広いテニスコートが備わっていた。

商売は成功裏に拡大していった。リチャードは神戸に移り、そこからウラジオストクへ。多分、ここに当分、彼は住みつくことに決めた。クリスチーナはウラジオストクの学校に入学し、好成績で終了した。後になって、多くの者達は驚いた、彼女が本当に上手くロシア語を話すのに。クリスチーナはそれ以外に良くロシア文学を理解していた、詩が非常に好きであった、ロマンチックな少女であった。少女が若い船乗りであるシェルビニンに恋をしたのは驚くことではなかった。彼の経歴は未だはっきりとは分かってはいない。直に、パクロフスキー教会で結婚式が行われた。この少し前に、クリスチーナは正教を受け入れた。少しして、若い家族は長崎に移った。シェルビニンは船の船長となった、ウラジオストクと長崎の間を航行する。クリスチーナは二人の子供を生んだ、娘と息子を、子育てを彼女の両親が助けてくれた。

リチャード・フォードは、１９０３年４月１６日に、８５歳で亡くなった。彼を長崎の坂本国際墓地に葬った。その後、クリスチーナは夫を失った。夫は自分の船で亡くなった。ウラジオストクの海軍墓地に葬った。クリスチーナは夫のことを非常に悲しんだ、その後結婚しなかった。彼女は自宅で母親と一緒に生活し続けた、自宅は本当のロシア風の家に変わっていた、ロシア語を話す者達には、もてなしが良く、解放されていた。革命まで、クリスチーナは定期的に夫の墓を訪れていた、が、その後それは出来なくなった。

長崎のロシア人社会で最も目立っていた人物の１人が、キラ・ヤコブレブナ・クズネツオーバであった、彼女はシェルビニナ（・クリスチーナ？　＊）の所で部屋を借りていた。クズネツオーバは中国で有名なロシア人お茶商人の家族と関係を持っていた。素晴らしい音楽教育を受けており、彼女は音楽の授業を行っていた。１９２８年1月２１日、彼女は娘のココチカを失った。キラ・ヤコブレブナ・クズネツオーバは１９３８年9月１１日、４４歳で亡くなった。

１９３６年、大陸からやって来たニュースが、長崎に住んでいる外国人達を不安にした。この年、日本は満州を占領した、国際連盟の反対にもかかわらずに。中国との戦争を準備した。中国との戦争の引き金となったのは、１９３７年7月７日の北京の盧溝橋（英名マルコポーロ橋　＊）での事件であった。１９３７年末には、北京、天津、上海、南京が日本によって占領された。イギリスもアメリカも軍事行動に誘い込まれなかった、が、日本はヨーロッパの国との関係について軽蔑を隠す試みさえしなかった。１９３７年秋、中国でイギリスの大使が殺された：彼は汽車に乗って出かけた、その汽車が日本の飛行機から

銃撃された。揚子江が爆撃され、アメリカの水雷艇「パナウ号」が沈められた。

戦争の準備は長崎で顕著であった。ここに軍事工場が出現した、軍の注文を遂行することに向けられた。このように、造船会社「三菱」は完全に軍事体制に移行した。１９３８年、ここで、最も大きい軍艦の内の一つである「武蔵」の建造が始まった。計画は極秘であった。建造物を外国人、日本人にさえ見られないようにするために、ドックは全面囲われた、工場に隣り合っている通りには憲兵が立った。工場の近くを通り過ぎる船の乗客さえ、甲板から立ち去ることを強いられ、黒いカーテンの掛かった船室に降りていった。毎月、沢山の若者達が徴兵された、鉄道の駅には「万歳」の声が鳴り響いた。彼らが指定地に出発する時には。長崎港で、中国への兵士の出発時には、沢山の生徒達が呼び出された：生徒達は埠頭に整列し、旗を振った。市民は救国の戦時グループや労働隊に殆ど登録され、日本人の戦時精神は中国における日本軍の勝利と政府の約束でかき立てられた、開始した戦争は帝国主義の抑圧から日本人を解放し、「大東アジアの繁栄」へ導くとの。

当時まで長崎で支配していた、平和、友好、相互理解の雰囲気は消えてしまっていた。まだ仕事を縮小していなかった外国企業は閉鎖を余儀なくされた、日本がドイツとイタリアと協定を結んだ後には。ドイツ軍は１９４０年９月に、ポーランドに侵攻した。外国人達は急いで長崎を捨てた。この時閉社した会社の中には、１８６８年からあった「ホルム＆リンガー会社」。会社の創業者の長男フレッド・リンゲルは自宅で５６歳で亡くなった。疑いなく、ストレスが突然の死亡を招いた。会社を閉鎖せざるを得なくなり、長崎と全ての関係が絶たれるという。フレッドの弟シドネイはこの時期、日本から出て行けた。が、彼の息子のワーニャとミハイルはスパイの嫌疑で逮捕された。後になって、彼らは国から脱出することに成功した、インドでイギリス軍に合流するために。長崎の元住民であった多くの他の者達と同じように、シドネイ・リンゲルと彼の妻は上海で状況の変化を待ち続けようつとした。が、この町に到着すると日本軍が彼らを逮捕し、彼らを中国に設置した収容所の一つに送った。そこに彼らは終戦まで居ることとなった。日本に、シドネイ・リンゲルは１９５２年に漸く戻った、日本政府により戦時に凍結されたお金を取り戻し、財産を売却するために。

戦時に長崎に残留した若干の外国人達は、非常な苦労を味わった。第一に、食糧と燃料に。この件は東京にいる甥宛に出した、クラバ・ワカの手紙に記されていた：「物の品薄は本当に酷い。ここ数日間は、長崎では使用できる木炭が無い。沢山の荷物が船に積まれ、汽車が町に向かっているのだけれど。石炭の全部は農林省によって購入されている、バケツ一杯誰も手に入れることができない。翌月には彼らは言う、その配給が始まると、しかし、私は聞いている、配給は充分にはほど遠いと。卵がまた長崎から完全に消えた。私は２ヶ月以上食べていない・・・私は疑問に思っている、長崎の卵がどこへ行ってしまったのかと。ジャガイモは長い間店では見ていない。全てが困難となってきた。しかし、私は知っている、我々には選抜の余裕はない、困難に耐え、これを政府の政策の１つとして全てを受け入れること。」

スパイ捜査が先鋭となった。以前には積極的に外国人と共同したり友好を深めていた長崎人に対して尾行が付けられた。彼らが会ったり話したりした人物全員を記録に留め、その後、その内容について尋問をした。

１９４１年１２月８日（日本の暦で）、日本はイギリス、アメリカ、オランダに宣戦布

告をした。その日に、パール・ハーバーにいるアメリカ艦隊に不意打ちを行った。以前は、連合国に対する戦争に参加するという脅かしであった。：日本軍は香港、シンガポール、東アジアの他の地区を征服し始めた、ヨーロッパの保護下にあった。

ロシア人は殆ど長崎には居なかった、長崎は日本の軍の前身基地であった。長年ここに住んでいた者は例外であった。サマラ出身のヤシコフ一家はその例であった。セメン・ニコラエビッチ・ヤシコフは１８９６年２月１５日に生まれた。白軍部隊と一緒に、彼はハルピンにやって来た。大変な尽力の結果、彼は妻である２３歳のアレクサンドラ・ドミトリエブナと１歳のイワンを中国に呼び出した。多くの移民と同じように、家族の長は日本での出稼ぎに従事した。１９３２年、彼は下関に到着した。この時には既に、彼には２才のバレンチナがいた。若い方の娘リューバが３歳になった時、家族は下関から長崎に移った。イワンは７歳で、日本の学校に入学した、そこを成績優秀で卒業した。１９３６年６月１４日、長崎で、娘のジーナが生まれた。１９３７年、イワンはハルピンに出て行き、そこで結婚した。

時と共に、長崎にいるロシア人の痕跡は段々と消えていった。年長のヤシコフが日本人に語っていた、「無駄だ、君がロシア領事館の場所を借りるのは。」　ロシア領事館のあった土地に建築をしていた。

当時、全てのロシア人移民者は何の書類も持っていなかった、全く無権利であった。実際において、アレクサンドラ・ドミトリエブナはどんな場合でもソビエトのパスポートを隠した。

ある時、１９３９年に、長崎に白軍の将軍がやって来た。彼は日本全体にわたってロシア人を訪れた。間接証拠である、アメリカかソビエトロシアのために情報の収集において彼に疑いをかけ始めたことの。セメン・ニコラエビッチを最初に逮捕した。地域の警察の知り合いが直ぐにこれについてヤシコフに伝えた。当時、彼が住んでいた家の傍で、日本の警察がデヤコフの知人を連れて行った。

直ぐに、警察は捜査を行った。アレクサンドラ・ドミトリエブナは心臓がどきりとした。ソビエトのパスポートはぼろ切れで包まれ、床と机の間にオモチャと一緒に置かれていた。彼女は思い出した、彼女の娘の人形の中にワーニャのカメラがあることを。これは充分な証拠となった、ロシア人移民をスパイとするのに。少しして、警察は理解し、ロシア人の仲間はずれを放免した。

第２次世界戦争の終焉が近づいてきた。爆撃機の飛行を予告するサイレンが日本中に頻繁に鳴り響いた。他の町と違って、長崎は絨毯爆撃を殆ど受けなかった。１９４５年８月９日早朝、長崎に警戒警報が鳴り響いた。が、８時３０分頃には止まった。人々は避難所から出てきた。新しい一日を始めるために。その時、空に突然に明るい爆発が煌めいた。数秒後、爆発音が鳴り響き、突風。アメリカのＢ－２９が日本に２番目の原子爆弾を投下した、湾の上空で爆発させた、長崎は消滅した。南山手地区は爆心地から５ｋｍ以上離れていたにもかかわらず、爆風によって窓は壊され、家屋全部の屋根が飛ばされた。暑い夏の天空に、長崎の北部の上に、原子爆発のキノコ雲が昇った。５日後の、８月１５日、皇帝は歴史的な声明をラジオで出した、降伏について。

この町の他の古老であるアレクサンドル・ワシリエビッチ・デヤコフは戦後に亡くなった。資材不足のために、墓石は準備できなかった。妻と一緒に埋葬した。妻のオリガ・ナ

ザロブナ・デヤコバは１８９４年６月２２日に生まれた、１９４５年５月９日に長崎で亡くなった。

長崎のもう１人の古老である７６歳のステパン・イワノビッチ・シリャエフは１９５４年５月４日に亡くなった。

長崎の著名なロシア人の住民はアラディエフ家であった。ニコライ・パブロビッチ・アラディエフはハルピンから日本人の妻を連れて長崎にやって来た。彼の子供達は素晴らしい教育を受け、日本語を良く習熟した。例えば、息子のコンスタンチンは日本からロスアンジェルスに去って行き、そこでエンジン機械工町立専門学校を修了した。日本語とロシア語の学士号を取得した。ホノルルに移住し、妻をめとり、イオラン（ホノルル）の学校で日本語教師として勤めた。

戦後、全てが変わった。思想対立を持つ冷たい戦争が、ソビエトロシアとの友好関係の多幸感を変えた。移民者は今後どうするか決めることが必要となった：市民権を取ることが必要となった。当時、ソビエトのパスポートを思い出した。この書類はロシアの避難民の状況を複雑にした。移民者がソビエトの市民権を持っていることが知られると、直ぐに解雇された。

ロシアの移民者達が一つにまとまれるのは、正教教区であった。長崎では、高井・アントニイ・牧男が勤めを継続していた。彼はしばしば日本の南部を訪れていた。台湾、朝鮮、満州の散在した正教徒団体を。儀式を行い、精神的に信者を元気づけて。１９４１年、軍事政府は、教会があった長崎の土地を徴発した、教区を新しくせざるを得なかった。しかし、それはほんの２年間だけであった。１９４５年の原子爆弾のもとで完全に燃え尽きてしまった。アントニイ神父と彼の母親は重傷を負った。彼らは長崎を去り、医者の息子のいる東京へ移るしかなかった。最初の３年間は、アントニイはベットに寝たきりであった。がその後、皆が驚いたことに、彼の様態は段々と良くなっていった。長崎を訪れることが出来るほど丈夫になった、九州の島々、日本の南部の他の場所を。自分の教区の信者達を訪れに。

１９４６年３月末、日本の宗務局はモスクワ総主教管区との接触を復活することを決めた。ニコライ神父（大野）をトップとしている日本の信徒衆はアレクセイ一世を総主教とすることにした。これにもかかわらず、アメリカの占領軍下にあった日本の正教信徒の多くは１９４７年初めに、アメリカからのベニアミン神父を総主教とし、アメリカの教区の所管に入った。モスクワ総主教の信者として残った者達を、ニコライ神父とアントニイ司祭が主宰した。彼らは東京の寺院に並んで寺院を建てた、前にロシア人学校があった所に。

１９５４年、ニコライ（大野）神父はアメリカの教区の管轄に移った。アントニイ神父はモスクワ教区の東京支部の唯一の牧師として残った。１９５７年８月に日本を訪問後、ミハイル・ゼルノフ司祭を、彼の斡旋で、聖なるアレクセイ総主教の前で、日本におけるモスクワ教区の司祭として認めた。が、アントニイ神父は主司祭の位を与えられ、司祭に任命された。１９６２年８月、ロシア教会の招請に従って、アントンには若干の同胞達と一緒にソビエト連邦を訪れた、そこで多くの司祭や素晴らしい教会の活動家達と出会った。アレクセイ大主教はアントニイ神父を熱く出迎えた、彼と父のように会談した、日本における教会について。ウラジミル２等勲章を授与した。帰りに、アントニイ神父は聖地を訪れた、彼をエルサレムのベヘヂク大主教が迎えた。

１９６５年に、教区は資金を集めた、墓地のための土地を獲得するために。その購入のために総額の大半を寄付した司祭に敬意を表して、墓地に「アントニイ高井」の名称を与えた。アントニイ神父－ニコライ（カサトキン）大主教によって叙聖された聖職者の内の最後であった－は６０年以上教会に真心を持って勤務した。日本のニコライ主教と同時代人として確りとした関係を保って。彼は大きな権威と信徒達の愛を利用した。ロシア人の信徒達は彼を「我々のお父様」と呼んだ、出来事があった、日本人達が彼をロシア人と見間違えるという。そして知って驚いた、アントニイ神父が武家出身であることに。司祭アントニイ高井は教区の将来の存在を保証することが出来た、期待できる後継者－司祭ニコライ（佐山）－の手に譲って。１９６７年、東京と日本の主教に叙聖された。彼は１９６６年１月３日に亡くなった、人生９２歳の終わりに。

長崎でのロシア人の存在の総計を試みた最後の１人が、イワン・セメノビッチ・ヤシコフであった。長崎に戻るにおいて、彼は大変な苦労をした。ソビエト軍がハルピンに達した時、彼は最初に逮捕された者の１人であった。その後、長期の北での収容所送りとなった。監獄から彼は鉱山に送られた。ヨシフ・スターリンが亡くなった時、大分手心が加えられた。日本語の素晴らしい知識がイワン・セメノビッチを救い出した。この時期、捕虜の日本人は少なかった。

監禁から出た時、彼は赤十字を通じて、日本の親類からの手紙を手にした。ヤシコフは日本に去りたかった、が、彼を放さなかった。彼は１９６５年の１２月に漸く母を見た、彼女がロシアにやって来た時に。

イワン・セメノビッチ・ヤシコフは１９７０年の夏に長崎にやって来ることが出来た。彼は親類と１月過ごした。この時に、彼は野口隆国（？　＊）のメモを整理し補足した。彼はハルピンでの仕事でロシア語を良く知っていた。祖国に戻って、日本人はロシア人墓地の同じような計画を立てた。イワン・セメノビッチは子供の時からロシア人の墓を良く知っていた。これ故に、情熱を持ってこの仕事に取り組んだ。

イワン・ヤシコフは１９８４年２月１１日に亡くなった、カラガンダ（カザフスタンの町　＊）で。

結びに替えて：
長崎での日記から、或いはロシア人による名所巡りの30日間

1日目（2007年8月10日）
「旅行－長崎－90年」、と「祖国の岸への帰還」

京都の猛暑に苦しみ、別れの手を振り、急行列車の冷房のついた快適な客室に姿を消した。＊＊＊＊＊＊、新幹線は日本の南に向かって疾走した。頭に、ウラジミル・ビソツキイの歌詞が浮かんできた：

彼は船長、奴の生まれは－マルセリ。
論争や、ざわめき、喧嘩を避け、

タバコを吸い、きついビールを飲む、
長崎の女性に恋をしている。

この歌の主題をロシア人の船乗り達がロシアに持ってきたということだ。歴史に若干の証拠が残されていた、彼らは長崎の女性を好きになったということが。もし長崎の女性の血統を辿ると、ロシア人の血の混じった人を見つけることが出来よう。長崎におけるロシア人の歴史を、私は究明しなければならなかった。

客車の窓の向こうでは、手入れの行き届いた野原が飛んでいった。南に近づくにつれて、その様子は大きく変わっていくように、私には思えた。日本では、わずかな土地さえ無駄にはしない、農業のために利用できるような。小さな島さえ例外では無い。そこでは岩だらけの海岸を耕すことさえしている。しかし、日本では収獲のために、森を犠牲にしているということを意味してはいない、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。野原を誰も監視していない．収獲の盗みがないからである。鳥が果物に舌鼓を打とうとするような。羽毛で覆われたこそ泥から果樹木を守っている、確りとした網で。

列車は間断なくトンネルに潜った、山を穿った。停車駅毎に、客車には段々と客がいなくなっていった：入口に孫を連れた日本人の年配者達、仕事での出張者達が駆け込んだ。彼らは我々の旅行者と良く似ていた。脇をさっと通り過ぎる風景を見ながら、長崎を初めて訪れた時を思い出した。１９９０年に、そこで、国際展示会「旅行－長崎－９０年」が開催された。極東汽船からメテレフ－ロシア側からの展覧会の長－が地理学会の沿海州支部に日本での展覧会に手前の珍品を提供した。もちろん、我々は同意した、が、学会のために金銭の援助を得たかった。返答としてメテレフは少しいらだって語った：

－全ての施設は自分の展示物を無料で公開する。とにかくこれは自国の威光に関わっている。我々は人物にだけお金を払う、展覧会の開会時に自分のコレクションを持っている。選択しなさい、君に何が大事なのかを、学会の組織のために例外扱いする用意がある。

学会はお金を本当に必要としていた。選択は塾考無くしてなされた。本当である、私は今残念なのは、チャンスを失ったのは、日本での３ヶ月間のこの面白い展覧会行う、その組織化に祖国で少なくない時を費やしたにもかかわらずに。しかし、当時、数日間長崎に滞在することが出来た。私はほんとに好きである、日本の南のこの町を。海や山が、非常に良くウラジオストクと似ている。私はそこへ再びやって来る、今回は、基金の研究補助金を得て。

小さい旅行案内書を開き、読み切った。長崎の住民は約４５万人であり、町の面積は３４０平方キロメートルであった。密集はしていない、が、長崎は産業の中心の一つと見なされている、海の産業と密接に結びついた。町の財政の収入部分の重要なのが旅行である。ここには沢山の名所がある、特に、１９４５年の原子爆弾の攻撃に関係した。それ故、長崎は平和の象徴と見なされている。これら全てはロシア語の旅行案内書で語られている、日本で出版された。残念ながら、この町におけるロシア人の存在については、案内書には何も語られていなかった。

ようやく、駅に。客車のいこごちの良い席から客は音を立てながら立ち上がった。終わりの無いリボンが陸橋に沿って吊されていた。私は急いだ：時間が迫っていた。部屋の鍵のある事務所－この月にぎりぎりに借りた－は３０分後に閉じる。地図から判断して、そ

れは余り遠くない所にあったにもかかわらず、危険を冒したくなかった。それ故、タクシー乗り場に急いだ。日本では良くある通り、人の良さそうな若い運転手は、手を広げて抱擁で私を喜んで迎えた。とはいえ、このロシア式表現は日本では場違いである：ここでは抱擁はしない、握手さえ希である。日本式親切の表現は、お辞儀であり、多くの尊敬の言葉である。

事務所へ、仕事の終了の５分前に行けた（タクシーだったので！）。手続きを待った：アンケートを書くこと、書類のコピーを取ること。

－貴方の印鑑を押してくれないですか？－　丁寧な秘書が私に尋ねた。

印鑑は日本の住民の公的な証拠となるものである。印鑑は直径が１ｃｍから１．５ｃｍの楕円形をしている、小さい棒の端面に固定されている、木、象牙、水晶、その他から作られた。この小物は文化の創造物である。通常は、各家では実印を持っている、文字通り「本物の印」を示している。特別な機関で登録するに必要とされる。それを利用する、公的な書類の場合や重要の郵便物の場合に。所有者の名前や苗字のデザインは細かく作られる、偽物を作るのが難しいように。日常の利用の利用のために、日本人は「認印」を持っている、登録されていない。それでは簡単な漢字の組み合わせが表示されている。名前や名字の漢字を特徴的にした、我々流では頭字（イニシャル）か。その様な認印は文具店で簡単買うことが出来る。もちろん、君の名字が日本で広く使用されていればだが。日本人の家では、その様な認印を幾つか所有している、大事ではない公的な処理に使用する。例えば、書留を受け取るためなどで。

９０日以上この国に住む外国人は、登録をするために、個人の認印を得る必要がある。私はそれを持っていた。が、今どこにあるのか、荷物の中か？　ちんたらしているのに気づき、理解した秘書は頷いた。２分後、私の手が認印として役に立った、特別なワックスに浸した（指紋押印　＊）。全ての手続きに５分かかった、地域の地図と一緒に私に鍵を渡してくれた。

再びタクシー。図を調べて分かった、住まいは遠くはないことが。ウラジオストクと比べると、この距離はウラジオストク駅からオルリンナ火山までの経路と同じ程度。実際には、道は火山の斜面に沿って曲がりくねっているが。火山は長崎には少なくない、終わりがないようだ（？　＊）。多分、更なる移動の疲れと自分の住み家を得る焦りがあった、そこに一月住むことが迫っていた。

本当に突然に町は黄昏となった、闇が急速に濃くなった。家々はお互いに同じように見えた。タクシーの運転手、５０歳の人、ある散歩の時停車した、暗闇の中で手を振って語った、私の家はその辺りにあるが、車はそこへは行けないと。全く知らない所でタクシーを降りたくは無かった。多分、私の不安を感じて、運転手は車から飛び出し、前もってカウンターを切って、通行人を探した。いわなければならない、日本には或ることが存在している、私が見た所では、非常に混み入った住所システムが：地区には、通りが無い時がある。家の番号さえばらばらである、その建築時期に従っているので。これ故、未知の町で必要な住所を探す出すことは、神経過敏のものにとって問題外。地区の住民でさえ全部は知っていない、どの家が何処にあるのかを。言えよう、警察と郵便局だけがこのもつれに通じているだろうことが。この時間は誰も居ない。が、希に出会った通行人は肩をすぼめるだけであった。３０分後に、優しい運転手は人を見つけた、必要な家を示し、私にそ

れについて喜んで教えてくれた。私は彼にチップを上げようとしたが、彼はきっぱりと拒絶した。支払いは車のメーター代だけ。

電子キーでドアを開けた。明かりを点ける、新しい驚き：電灯が点かない。通りの明かりで照らされている入口の所に、仕様書の束の入った包みを見つける。それらの内の一つに、私に役に立つ情報を見つける：まず第一に、ナイフスイッチを入れなければならないことを。完全に真っ暗な中で、それは何処に見つかるのか？　壁のあちこちを探すこととなった、少しずつずらしながら、小さな廊下を。明かり下で他の書類を調べた。そこでは、間借り人に明るい時に部屋に立ち寄るように助言をしている、「問題を起こさないために、隣人を不安にしないために」と。妥当な助言ではある、が、唯一の列車が夕方に長崎に到着する場合には、どうしたらよいのか？

ついでながら、隣人について。ナイフスイッチを見つける試みにおいて、私は隣人のそれについて聞こうとした。家全体を見回して、一つの部屋にだけ明かりを見つけた。呼び鈴を押すと、女性の声がした。が、残念ながら、私は彼女から何の情報も得ることは出来なかった。彼女は私のことを理解出来なかったようだ。ドアを開けないで、早く話を終わりたがっていた。ここに滞在中の最初のロシア人には、日本人は鍵を開けなかった。ロシア人は気づいた：「日本では人間の労働と責任を大切に敬っている。日本ではドアの鍵さえ。もし要求されるならば、その場所でだけ、隣が外国人である。が、国内では、殆ど鍵は無い：その必要は無い。」　時が変われば、習慣も変わるということか。

部屋は快適であった、我々の部屋のように全ての諸設備を持って。廊下には、冷蔵庫、電子レンジ、新しいオーブンを持った炊事場があった。風呂場には、シャワー以外に浴槽もあった。小さい部屋は西洋風に整備されていた。机、椅子、ベットの代わりに柄の上に寝床。コンパクトで快適。テレビを通じてインターネットに接続、エアコンは８月の蒸し暑さから救ってくれる。

急いで荷物を紐解き、店を探しに出かけた：空きっ腹に何を求める？　再び曲がりくねった道を進み、希に出会う通行人の助けを得て、小さい店に出た。遅い時間にもかかわらず、店はやっていた。品数は多くは無かった。が、夕食と朝食用の簡単な食品を。

漸くほっと安堵の胸をなで下ろした。目的は達成された、完全に野外調査に没頭していた。これは一見して、次のように見える、歴史家には仕事のために充分である、図書館や古文書館での本が。地域の散策なしに、大分過去の出来事が起こった、歴史の匂いが感じられない。すなわち、充分に過去を書くことは出来ない。

2日目（8月11日）
町との出会いと祖先との出会い

朝になって気がついた、私の家が一つの火山の頂上にあることに、長崎湾を取り囲んでいる。自分は、山の行者である山伏のようであった。実際において、ここは他人の存在を妨げていた。家の周り、上も下も、斜面に沿って、大小の多数の家屋が張り付いていた。明るい快晴の日のもとで気分は良かった。やりたかった、ちんたらしないで、長崎におけ

るロシア人の存在の探査に出かけることを。近くの十字路に、バスの運行表が吊されていた。それに乗って中心に行くことが出来た。が、地域の住民達はそれを無視し、山麓に切り開いた道や階段を歩くようにしていた。地図をよく見ると、それに従った、正しいことが分かった。良く整備された階段に沿って５分ほど手入れの行き届いた家の傍を駆け下り、地図でのように生き生きとした庭のある、墓地が隣接している古い寺の、賑やかな通りへ。

まず初めに、駅。そこには町の情報センターがあった。愛想の良さそうな女性が名所の詳細な地図を無料でくれ、話してくれた、そこまでの行き方を。私に最も関心のあったのは悟真寺にある外人墓地であった。分かった、そこは結構近いことが。

－貴方は駅でバスに乗れます。そして橋を渡るとお寺に行けます。

稲佐のロシア人村についての質問については、長崎の通人は驚いて頭を振った。

まあいいさ、彼らなしでやって行う。駅から通りは私を湾に導いた、金角湾に良く似た。この類似はより強くなった、現地の海上輸送の駅まで行った時、最先端の様式で建設された。ウラジオストクのように、ここではランチや小さい船が行き来していた。埠頭には乗客の行列が出来ていた、乗船待ちをしている。幾つかの埠頭は観光ルートに充てられて。それらの内の一つの埠頭では、真っ白のランチが準備完了であった。漸く切符を買うことが出来た、埠頭まで行ける。船乗りがもやい綱をほどく所であった。

もちろん、湾岸は過去を思い出させることはなかった。要塞のような何の軍事施設に気づくことはなかった、ロシア人の船乗り達が書いていたようなものは、石組みで作られ、芝で覆われた。今は時代が違う！　著名な作家であるイワン・ゴンチャロフが１８５３年９月９日に日記に書いていた：「我々は興味を持って、湾の素晴らしい岸に見とれた。その傍を通過した。私は再び悔しさから自分を守ることが出来なかった、現地を見て、自然が自ら自分を造りだした。人間に自分の創造的な手を添え、奇跡を造りだす機会を与えるために。そこでは人間が何もしていない。ほら丘が、緑色の、気持ちの良い、が、何か不十分：それは白い列柱を頭に抱かなければならない、或いは回りにバルコニーのある別荘で、公園を、緩斜面に沿って駆ける小道を。あそこ、轍に、下り坂、海へ埠頭への道がある、好都合。そこでは蒸気船が汽笛を鳴らし、人々が蠢いていた。ほら、高い山の上には、修道院が建っている、塔とドームのある、金色の、遠方で杉で出来た十字架が輝いている。ここには共同店舗がある、それらの前には木製のマストを持った船がひしめいていた。（・・・）　我々は目を信じなかった、灰色でみすぼらしい１階建ての家の密集した塊を見て。私が町の延長を予想した遠方には、何もなかった：何もない海岸、少女達、幾つかの、多分、漁師小屋。海峡が終わっている岬に、ちんけな砲兵陣地、低くて長い建物が、兵舎に似た。岸に不格好で大きなボートがしがみついている。全てが隠されている：家、船、通り、が、民衆は隠れることなく、全くあけっぴろげて歩いている。」

全ては徹底的に変わった、我々の巨匠は地方を知らなかった。回りの火山には好感の持てる建物がテラスを持って配置されていた、密の緑の庭園と公園で囲まれた。ここでは、手の込んだ建築様式の多種多様性は目立っていない、横浜や神戸で目にするような、長崎の建築物は目を楽しませてくれる。海岸に沿って、ここには、かって、歴史的観点から、全くの最近、ロシアの船が停泊していた。今では、至る所クレーン付きの確りした埠頭となっている。長崎は日本における最大の造船の中心地。会社三菱の埠頭が際立っている、そこでは、大型のコンテナ船、バラ積み貨物船、タンカー船の建造が行われている。或る

掲示に気がついた、会社サハリンのためにそれを建造しているとの。時代の交流・・・
ほら、稲佐、ロシア人村、古い写真で良く知ることができる。そこでは、私の判断によれば、最初のロシア船の修理のための埠頭があった、２隻の日本の警備艇が見えていた。数隻の大きな船が泊地に係留されていた。湾の両岸を繋いでいる大きな橋の下を通過した。ウラジオストク市民はその様な橋を夢見ている。ランチのスピーカーではアナウンサーの元気な声が響いていた、名所を説明しながら、我々のランチが通過する所の。小島が現れた、昔そこから最初の日本人キリシタンを岩に投げ落とした。この出来事について、ゴンチャロフが書いていた、「長崎で「イリュストラチァ（挿絵？　＊）」が出版される時には、必ずこの石を描く。パテンベルグも、クリシイ、他も、小さいふさふさした島。テキストで語っている、パテンベルグからは決してキリスト教徒、ローマ教会の司祭を投げなかった。それで、その様に島を呼んだ。とにかく、投げた所は存在する：お子は辺り一帯切り立った崖、高さ１０サージェント以上の。東側からだけ、いうならば縁のように、岸、日本人が踏み固めた小道、砲兵陣地を置いた、普通通り、それを隠した。頂上に珍しい松林を植えた。それから山となる。私が書いた通り、頭の形をしている、そこでは髪が逆立っていた。一般的に、日本人は珍しい木々を自分の山に植えることを好む。偽のバラを突き刺した復活祭の円形のケーキのようにそこを歩き回る。クリシイ島ではスペイン人を決して殴り殺すことはなく、商品を積んだ彼らの船も焼くことはなかった。疑いなく、そこには何らかの素晴らしいパビリオンになろう；他の何かにとっては島は小さい。」
古老は全く正しかった。日本人のカトリック教徒は宗教使節団と一緒になり、教会を作った、山の頂上に。そこから海に最初の教徒を投げ捨てた、明らかに大きな白い彫像のある見晴台がはっきりと見える。私にはある考えがあった、ここに、数世紀前に、日本は世界への窓を持っていた。しかし、ピョートル大帝が全力でもってヨーロッパへの窓を切り開いたならば、日本は逆に、中国を見習って、壁を造ったであろうとの、外国の影響から自身を守るために。実際において、忘れてはならない、日本は北への「黒い道」を持っていた、それを経由して密輸で商品を手にしていたことを。説が存在している、日本はサハリン（樺太）を通じて中国と不法な交易を行っていたとの。サハリン人達は今度は最近の沿海州と関係を有していた、日本人がサンタンと呼んでいた、そこから特別に綿織物を手にしていた、それは仏教の僧侶の帯や着物にために極めて価値が高かった。
一日中、私は長崎の中心をぶらついた、この伝説的な町の空気を充分に吸い込もうとした。唯々家に戻ることだけを考えた、足が大変疲れた。が、突然目にした、中央通りを日本人達が列をなして進んでいるのを、肩に担いでいるのを、様々な大きさで構造がボートのようなものを。直ぐに思い出した、フリゲート艦パラーダ号の一部を：
「それは我々の脇の水上を疾走する：なんとも小さい、沢山のもので飾られ、様々な色彩をしたボートのオモチャ？
－これは彼らの儀式です－１人が話した。
－違う。これは単なる迷信の風習である－他の者が話の腰を折った。
－占い、よく見なさい、どのように航行しているか；彼らは幸運を試している。
－いや、ちょっと待って下さい－誰かが話し始めた。－ケンプフェルの所で話す・・・
－単なるオモチャ：子供達が動かした－叔父さんがぶつぶつ言った。
この意見は全ての学者の批評より正しくはなかったのか。が、ここには、全ての些細な

ものが独特の特性を帯びていた。」

思い出された、朝に、私の一時的な住居の周りの小路を見ると、気づいた、日本人の一団が船の周りを回っているのに。それに車輪を付け、灯火で飾りながら。その時には、私はこれに特別な意味を感じなかった：休日に日本人が手で造ることが出来る、そんなことはどうでも良い。が、今では朝に見かけたことは特別な意味を得た。その通り、これはお盆であった、本来の仏教の祝日！

一般的に、伝統的に、魂の追善は陰暦に従って７月の中旬に数日間行われる、その時には伝説によれば、死者の魂は自宅に戻ってくるとか。しかし、近年では、この祝日は殆ど８月中旬に行われる。この日には、多くの日本人は故郷に戻り、先祖の遺骨に頭を下げる。死者の魂を１３日の夕方に招待する、１５日の夕方か１６日の朝方に、あの世に戻る。この期間、仏式の勤行をする、灯火を灯し、花火を上げる、死者の魂に家への道を示すために、墓地で接待をする、亡くなった人のために準備した。特別な踊り「盆踊り」を行う。

立ち止まり、よく観察した、今日この祝日をどのように祝っているのかを。長崎全体から海岸へと色鮮やかな行列が合流した。各グループには古い船の独特の姿があった。各船は上手に飾られていた、紙製の灯火、植物、花で。船の甲板室や舳先には、あの世に旅立った人達の写真と名前があった。若干の者達は大きな日本船の模型を造った、その船は車輪に乗せて動いた。それらは民話の鳥に似ており、無くなった人との出会いに向かわせる。一つのグループは同じ着物を着ていた：亡くなった者の名前が書かれた。行列は止むことのない耳をつんざく爆発音を伴っていた、クラッカーや花火のはぜる音の。回りには煙が立ちこめた、観客達は耳をふさいだ。

行列参加者達を観察するのも面白い。彼らの内の何人かは＊＊＊＊＊＊＊行列への準備の過程で酒をたらふく飲み、リズミカルな行列は直ぐに＊＊＊＊＊＊。彼らは最初から速度を速め、その後、自分の大きな船とともに回転をした、急停止した、クラッカーの一斉射撃をしながら。祝日の観客や他の参加者達の誰もこれに何の不満も漏らさないのは興味を引く。逆に、皆が心から喜んでいる。かなりの酔っ払いがいるにもかかわらず、それは目立たない。実際において、多数の警官が用心していた。明らかにアルコールで熱くなった男性連中が度を超して陽気になった時、自分たちの船が蛇行するようにんった。それを止め、元に戻るよう呼びかけていた。抗議の証として、日本人が箱に入った花火に火を付けようとした。が、直ぐに警官がそれに気づき、危ないオモチャを投げ捨てた。事件は２分もかからず治まった。

海岸に近づくにつれて、群衆は密集した。直ぐに暗くなった、船には沢山の灯火がともった、忘れることが出来ない光景！　人々の流れは特設の埠頭に向かった。イワン・ゴンチャロフの時代には、ここから船が長い航海へ旅立った、そこで、亡き人の魂が彼らを迎える。今は、埠頭で、記念の船の道は終わった。それらを特別のグループが受け入れた、写真を取り戻しながら。遠くはない所に場所があった、祝日のここの参加者達からの花と進物が集まっている。台には大きな山が既に出来上がっていた、花束や何かの巻物や船の模型を持った人々が進んでいた。東京の仏教寺院の一つで、死者のための祈祷を聞いたことを思い出した、それを読み上げた、私の同郷人の魂に向かいながら、長崎の最新の埠頭で見つけた。私には思われた、この祝日に臨在した事は私を彼らに近づけたと。

3日目（8月12日）
稲佐の旧ロシア人村と悟眞寺

地図を見て、稲佐まで歩いて行くことにした。町を本当に知るには歩きに限る。駅の右側から離れ、湾の方へと向きを変え、橋へ向かった、浦上川に架かっている、長崎港に行ける。脇では、何か建設工事がなされていた。日本では、

工事は通行人や交通機関の邪魔を全くしないのがその典型的な特徴である。もし道の修理が必要な場合には、工事は深夜に行う。昼には、工事機械は通常は分離帯で「休息」している。橋には、快適な歩道があった、あっさりした模様で飾られた。昼は暑かった、橋の上の弱い風は心地よく冷やしてくれた。上から見えた、湾は当時のものと比較すると極めて小さかった、ここにはかってロシア船が投錨していた。良く知られている、日本では土地を確保できないので、海に港を確保したことが。

稲佐の殆どの山の斜面には、小さい家が密集してひっついていた。海岸に近づくにつれて、階数が増えていった。２軒の高い家屋が、町の側から稲佐の様子を遮っている。湾に沿って高速道路が延びていた。最初の極東の旅行案内書には、日本について特記していた：「稲佐山、別命がロシア山、は高度が１３００フィート、麓にロシアの海軍病院があった。」　近くの火山の斜面は、日本で良くあるように、コンクリートで固められている、が、所々、自然石が敷き詰められ、人工的に木や草が植えられている。金次第か・・・

本当のところ、若干心配であった、ロシア山に近づきながら。心臓がどきどきするのを感じた。ある時には図書館や古文書館に立ち寄り、ある時は、この伝説的な場所の歩道で歴史の匂いを吸い込んだ。日本人が語っている、「（知識の）道は山の頂上に導く。しかし、その達成は疑わしい、最適な道を進んだのか。」

その道を、折良く、私は進んでいるのか？　少し右側をとり、狭い小道に沿って、昇り始めた。５分ほど歩いて、私は元ロシア村へ。その様に１９世紀の終わりにはこの場所を命名していた。家屋は様々であった。ある入口には、スクーター、モペット、バイクがひっそりと置いてあった、極めて小さい、ここでは大きいのは具合が悪い。昔からの広く動くドアが残っていた。好きなようにそれを開けることが出来る家のように。その幾つかは靴屋や八百屋の入口となっていた。ノックして聞いてみた、かってここで生活していた私の同胞人についてご存じなのかと。

地図から判断すると、剛心寺と外人墓地までは直ぐ近く。ヨーロッパ風の特徴のある日本人と出会った。多分、彼にはロシア人の血が流れている？　彼にロシア語で「コンニチワ」と話しかけたかった：「ありがとう」、「素晴らしい」と同じように、かってはこの単語は稲佐のロシア人の住民達は良く知っていた。

最初のヨーロッパ人は、１５７０年から１５７２年に、長崎にやって来た。彼らを南蛮人と呼んだ、文字通り「南の野蛮人」。彼らはキリスト教思想を持ち込んだ、ついでに古い寺を抹消した。神主や仏教徒の司祭への襲撃事件が頻繁となった。日本人達は他の宗教には寛大であった、が、分からなかった、キリスト教が何故日本の宗教に過激な立場を取

るのかを。これを知って、善導寺・チクド寺（福岡県）の年配の司祭ゲンコ・オチョ（１５５２年－１６２６年）は１５９６年に長崎に行った、キリスト教徒を制止し、仏教の価値の復興を目的として。彼は稲佐山に登った、修道士の小道具を持参して。彼に従っていた、２人の司祭が、中国からの、オヨカウとチョーキツセン（元ゴソーゲン）が。彼らがこの寺院を造ったとか。

ほら、典型的な日本の寺院の豪華な屋根がちらちら見えた、標識「剛心寺通り」。頭に文章がひらめいた、この場所の最初のロシア人が書いたという：寺院は南向きであった、病人は一日中太陽の日を一杯に浴びた。長崎では１０月には太陽は雲で陰ることが亡かった。町の騒音と空気の悪さから遠く離れた所にある、そこでは空気の綺麗さに気を遣うことはない。遂には、朝毎に下の町に横たわる霧の上にあり、寺院は衛生条件の幸運な組み合わせとなっている。」

剛心寺は正に太陽で満たされ、高い所から賑やかな港が見える。寺院に行く途中、地区の警察署があった。思い出される、アスコリド号のロシア人船員の死者を葬ったのが最初の日本人警察であったことを。寺院の主門は森の中にあった：大修理。著名な石の階段は殆ど跡形もない、その階段を上り下りした、１００人足らずのロシア人船乗り達が。すなわち、ここには、上の段に、長いポールに、ロシアの旗がはためいていた、停泊地からも見える。そこには、日本の警察の番所、通訳と役人の家があった、その後、ロシア人の病人をお日様で暖めた。今は、駐車場になっていた。

寺院に外人墓地があることが有名となった。ここに最後の安住の所を見つけた、中国人、ポルトガル人、オランダ人、ロシア人、アメリカ人、ドイツ人が。１６０２年に、初めて中国人を葬った、その後、オランダ人を、その後に、ロシア人（１８５８年から）と他の外国人（１８５９年から）を。今日まで、中国人の祭壇が保存されていた、コンクリート製の杯、その両側に１ｍほどの高さの２本の柱。

寺院を左にしていくと、石の小路は直接ロシア人墓地へと導く。僧侶を不安にしないようにして、直ぐにそこへ向かった。墓地を訪れる準備をして、それの前に、インターネットで調べた、著名な作家であるボリス・アクーニンとの面白いインタビューを見つけた。大半の読者は彼を探偵小説で知っている。それ以外に私は彼を「墓の歴史」で思い出した。残念ながら、その本には、長崎の墓地については何の記述もなかった。長崎の墓地は歴史における少なくない証拠を提供していると私は思っているのだが。この件についての若干の説明がインタビューにある：

「ボリス・アクーニン：・・・この墓地のために、特別に長崎に飛んでいった。しかし、私にはこの墓地は適していなかった。というのは、墓地にたどり着いた時、理解し感じなければならない、これが本当の墓地であり、私の本に役に立つのか立たないのか・・・長崎の墓地で、私は感じなかった。

ＢＢＣ：何故？

ボリス・アクーニン：これを説明するのは私には難しい。分かっていよう、墓地は私には全く役に立たないことを、確りと保存され続けている。というのは、そこには、あるていどまで、存在している、強烈な匂いが、悲しみの、不幸の、仮に話せば、死体の、全ての興味を引く匂いを打ち負かしている。私はその様な墓地からは極力逃げ出す。私には必要である、墓地が古くて、多かれ少なかれ捨てられ放って置かれていることが。その様な

墓地には、特別な淀んでいる濃い歴史の空気が存在している。そこでは、時間は他のテンポで進んでいる。私はこれを直ぐに感ずる。長崎の墓地では、私はこれを感じなかった。何故かは私は知らない。多分、そこでは歴史的セクションが現代のものと入れ代わっているから。そこには多数のロシア人区画がある、多数の船乗り達が葬られた。長崎にはロシア海軍の基地があった、そこには露日戦争での多くの捕虜が葬られた。しかし、これでは不十分である。」

このインタビューは、私には少し驚きであった。ボリス・アクーニンは、日本研究者として、日出ずる国の歴史を良く理解していなければならないので。横浜の外人墓地は彼は気に入った、そこには外国人と異教徒を継続して埋葬していたにもかかわらず。稲佐のロシア人墓地は既に長い間機能していなかった、誰もそこには埋葬されていない、隣り合った所も。多分、文献が間違いを犯している、その崇拝者を少し喜ばしている、何か恐ろしい墓地の歴史が、長崎のロシア人と関係した。

恐怖から道を間違い、迷ってしまった。年配の夫婦から道を尋ねることにした。彼らは温和に無駄話をしていた。

－教えて下さい、ロシア人墓地を？

私を驚いて見つめ、老人は手を振った：

－１００歩ほど直進し、十字架のある白い建物があります・・・

鍵の付いた鎖で閉じられた潜り戸は、私を不安にさせなかった。ロシアの最後の皇帝がここで柵を乗り越えたとすれば、この方法を無視しないことに私は決めた。私には分かった、約２０年前にここへ初めて訪問した時から、ロシア人墓地は何にも変わっていなかった。その時、私は印象を報告書「平安あれ！」に書いた、墓地の修理への基金の募集を始めることを最後に呼びかけた。残念ながら、誰も応答してくれなかった。私の礼金は編集局で姿を消した、この目的に提供された。

過去１５０年に渡る事実を私は思い出した。フリゲート艦アスコリド号の長崎での１０ヶ月間の停泊中に、強烈な伝染病コレラが猛威を振るった。その結果、町では７００人以上が亡くなった。日本人の遺体は町にそのまま転がった。伝染病にかかったロシア人の数は同じく急増した、稲佐の墓地のオランダ人区画にはもう空き地がなくなった。新しいロシア人区画を設けることになった、オランダ人区画の少し上に。現在は、そこには３００以上の墓がある。正教の鐘楼のドームは遠く海から見られる、灯台のように。

木々の濃い影が起伏のない墓の列を覆っていた。「永遠の木々」を書きたかった。が、木々の数は少なすぎた。回りは結構手入れされていた。蝉の声と鳥のさえずりは、ここに眠る場所を見つけた死者の魂を思わせる。火山から湾が望める、手にとるように。直ぐに思い出した、１世紀前のロシアの船のように、湾を後にし、ロシア人墓地に最後の安住の地を渡した。ウフトムスキイが思い出していた、「下級役人の墓碑は、外見では将校のよりは大分小さい。記念碑は殆ど無い。埋没した物の一つの上にだけ優美と考えついた外された錨が置いてある。」後になって、それにもかかわらず、オベリスクが出現した、が、錨はどこかへなくなってしまった。私は一つだけを見た、函館のロシア人区画で。「アスコリド号の乗組員」の墓標は遠くからは棺に似ていた。多分、日本人の石工に注文を出しながら、ロシア人船員達はそれに特別なことを提案することが出来なかった、基礎として図案化された棺を採用した。函館の墓地では、私は同じように見た、横浜の墓碑とは少し

異なっているのを。

ソビエト時代には、この墓地を、有名な作家であるダニール・グラニンが訪れた。後世の人々に次のような文章を残した：「幾つかの墓標の端が欠けていた。私は奇妙に思えた。

－十字架は何処？－私は管理人に質問した。彼の剃った頭がお辞儀をした。十字架は原爆で壊されていた。町は下方遠くにあった。が。爆風はここまで到達した。爆風は死者に襲いかかった。この古いロシア人墓地には一本の十字架も残されなかった。」

ソビエトの作家は間違っていた：原爆の破壊力はここまで到達はしていなかった。が、十字架は改鋳に回された。もちろん木製でないものが。１９９１年４月、稲佐の忘れ去られていた墓地をソ連邦の初代大統領ゴルバチョフが訪問した。すなわち、その時、ロシア人墓地で、大修理が行われた。実際において、そこかしこで、大急ぎで修理がなされた。

墓地の入口に、墓地の図面のある金属板があった「長崎のロシア人墓地の墓の配置図」。全てロシア語であった。が、明らかに、ロシア名の翻訳は日本語からなされたものであった。大凡予想された、この証拠を配置されている墓が反映している。私の手にはタイプライターで打ったリストがある「長崎のロシア軍人墓地の記念碑の名簿」、ここへの私の最初の訪問時に、剛心寺の僧侶からもらった。色あせた草の中のスタンドの向こうに、約２０基のコンクリート製の墓が、３段になって配置されていた。時の経過が分かった。大半には何の墓碑も見えなかった：墓は完全に苔に覆われていた。至る所忘却の痕跡、実際において、所々に昨日の祝日の花火の痕跡。日本人達はここへやって来た、外国人の死者を思い出して、彼らは忘れられていないと。

墓を一つ一つ回り、死者の得られた情報を比較する試みをした。直ぐに見つけた、私の手にしているリスト墓の配置がスタンドのデータと一致していないことを。私は予想外のことで腰砕けとなった：如何したのであろう、どうして取り違えたのであろうか？死者を取り違えるのはあってはならなかった。リストの作者の間違いを避難することは早過ぎよう、とにかく、ロシア人墓地の２段目と３段目の墓についての情報は全く同じであった。

よろしい、勘定しよう：１８個の墓石の配置は図に合っている、が、２０個は違っている。それ以外に、更に４つの墓標があった、最初の説明書にはなかった。同様で目眩がした、が、適当な時まで検討を脇に置くことに決めた。当面じっくりと見ることを。２段目には、そこにはかって、辻堂が建っていた、基本的に将校の墓碑がある、が、一般人の墓もある。３段目には、露日戦争時の記念碑が沢山。明らかに、セメントと金属で造られた若干の十字架は最近造られた。幾つかの記念碑は、日本人に特徴的であるのを見た、古い円柱の形の。

再び下り降り、儀礼用の潜り戸と並んで石の塊を見つけた、基台の上に、２つの図案化した船体製の。記念碑には穿かれていた：「この墓地に葬られているロシア人水兵の記念として、１８５８年から始まった。山村の住民に感謝。この墓地を保存してくれている長崎に。１９９０年１０月１日。この記念碑はソ日協会、海軍省と剛心寺支援長崎委員会の参加の下で造られた。」　私は思い出した、１９８９年に日本は積極的にロシア人水兵の記念碑の設立と、その資金の調達を声明したことを。台座設立の費用を引き受け、記念碑の上部分の設立に参加するようにソビエト側に提案した。この記念碑は「旅行－長崎－９０年」の展覧会時には既に出来上がっていた。私は非常に残念であった、この出来事を見逃したことを。残念・・・　当時記念碑の回りに植樹した、椰子と檜は、既に、広く枝を

伸ばしている。

4日目（8月13日）
刺青はあったのか？

昨日の晩と同じように、毎朝を、墓地の墓の配置の分析に費やした。インターネットでさんざん探索したが、何の意味ある情報も見つからなかった。モスクワの歴史愛好家グザノフの論文に出会うことが出来るのか、彼は編纂した、「露日戦争１９０４年－１９０５年のロシア側参加者のリスト、日本で亡くなり、長崎の墓地に埋葬された」を。何も残っていない、稲佐にもう一度出かけよう。（？意味不明　＊）

通りをぶらついた、かってロシア人達が住んでいた所の。湾に降りていった。手には、ロシアレストラン「ボルガ」の古い写真のコピーを持っていた。日本の基準では大きな２階建ての建物、湾の岸の所にあり、海側に石垣を巡らした。もちろん、何の期待もなかった、この建物が保存されているとの。が、昔の時代にもう一度没頭したかった。とにかく、古い場所を思い出させるような物を何も見つけることは出来なかった。その代わり、広く盛り土した道に沿って進んでいくと、湾に沿って曲がりくねっている、小さいレストランに気がついた。我々はそれを「ザベガロフカ（＝軽食堂）」と呼んだ。昼食時には満席となった。苦労して空き席を見つけた、回りの会社の労働者達の中に。回りでは、このような企業ではありふれた話で持ちきりであった、未曾有の暑さ、低賃金や家族の問題などの。

係りが近づいてきた、決まり文句を持って：

－注文は決まりましたか？

少し困らせかった、「スミルノフカ」のワイングラス付きのボルシチを注文した。しかし、日本人は冗談が分からないように見えた。それ故、海鮮料理で我慢した、長崎料理として昔から有名であった。

そのうちに、私の頭に歴史上の事実が浮かんできた、信じようと信じまいと。最初、この歴史について、私は英語で記事を読んだ「刺青　道長エイとニコライ二世」を、その記事の著者はブリアン・ブルク・ガフネイなる者であった。添えられた経歴から判断すると、極めて異常な人物であった。彼は書いていた、皇太子ニコライは東方を気に入り、日本の訪問時には、何でも試そうと決めていた。その国で彼が出来ること全てを。ロシア人墓地の訪問後、ニコライは稲佐で食事をした、ロシア人と昔からビジネスをしていたある料亭で。皇太子のテーブルを道永エイが給仕していた、少しロシア語で話しながら。将来の皇帝はこの女性に質問した、日本では非常に綺麗な刺青を彫っているのは本当かどうかと、そのことについては彼は旅行案内書で読んでいた。日本の刺青は、彼の概念では異国のこの上ない土産であった、極東での旅行から、それを持って帰りたかった。ブリアン・ブルク・ガフネイが書いている通り、翌日には、パミャチ・アゾバ号に長崎の最も腕の立つ２人の彫り師を招待した、道具を持たせて。数時間後には、ニコライの肩に色鮮やかな龍が美しく見えた。

１８９１年５月２日夕方遅くに、ニコライは自分の仲間とギリシア王子の仲間と一緒に

稲佐にボートで向かった。そこではエイさんが既に待っていた。彼女は豪華な晩餐の準備をしていた、ベランダに電気を付けて。その後、若者達は「ボルガ」に向かった、そこで食事をし踊り、ビリヤードをした。その後、ニコライとゲオルグは近くの裕福な家屋で夜を過ごした。長崎の歴史家である古賀十二郎を引用して、著者は書いている、エイさんはロシアの皇太子とベットをともにした、彼の長崎訪問時に。１８９１年５月５日、パミャチ・アゾバ号は長崎港を出港した、エイさんの胸にはダイヤモンドのネックレスが輝いていた、多分彼女にニコライがプレゼントした。

後になって、この歴史を私はロシア語で読んだ。著者は充分に詳細にウフトムスキイの本からの情報を述べていた、が、追加していた：「岸に降り立ち、ニコライは人力車に乗った。土産を買った、彫り師の所で時間を過ごした。日本人の彫り師は世界で最高と見なされていた、色つきの彫り物技法を有している。ニコライは最初の人物ではなかった、ヨーロッパの君主達の中で、日本の彫り師の処理を受けた中で。１８８１年イギリスの王子アリベルトとジョージが横浜で刺青をしていた。日本人には、本当の驚きであった。日本では、犯罪者に刺青で印を押していたので、それでもって最下級の者であることを示した。しかし、皇族である御仁の気まぐれは満足することになった・・・　パミャチ・アゾバ号に２人の彫り師が現れた。彼らの内の一人がニコライに仕事をした。もう一人は彼の従兄弟のゲオルグ・グレチェスキイに、ニコライがこの旅行に同伴していた。ニコライの右腕を龍の像が飾った、黒の体、黄色の角、赤い腹、緑の手足。彫り師の船への訪問は秘密であったにもかかわらず、この情報－ロシアの玉座の後継者の腕で龍が美しさを誇っていたというーは印刷物で広まった。」

この公表には、同じく以下の事が注目された。パスハ祭の後、訪問の公式プログラムは非公式に変更されたことが。ニコライはゲオルグと一緒に、レストラン「ボルガ」を訪れた、そこで主人は客達に２階に上がり、女性と交歓するよう提案した。この時の若い女性については知られている、が、今日まで歴史家達は論争している、どちらがどの女性を選んだかと。ニコライとゲオルグは朝４時に船に戻ってきた。

この出来事には、他の著者が語っている続編がある。１９２０年代の半ば頃、６５歳ぐらいの背の高い女性が夕方に、弁天湯の女湯に入った、稲佐の曙地区にあった公衆浴場の。彼女はノリのきいた木綿の黒っぽい着物を着ていた。手には、タオルと石鹸の入ったたらいを持っていた。一見して、地域の普通の老婦に似ていた。多分、成功した商人の妻か退職した先生のよう。が、無造作にピンで留めた長い灰色の髪は年に合わない滑らかな首を明らかにした、所作で彼女は主人に挨拶をし、自分の黒い漆塗りの下駄から足をそっと抜いた、それで女性と分かる、台所よりは市場や典型的な住民の多くの生活で目にする、典型的な長崎の住民の。

－しばらくぶりですね、－優しく銭湯の主人は彼女に挨拶をした。

－そうでしたね、－女性は返事をした、脱衣室の輝くほど綺麗な藁の絨毯に進み出ながら。

－私は風呂が大好きです。が、帰宅するのに山登りが大変なのです。私は老けました・・・

最後の言葉は、色っぽい微笑みを帯びていた。その意味は全く逆であるような。

－そんなことは全くないよ、道長さん、貴方は何時も全く若い！

着物を脱ぎ、網駕籠に女性は几帳面に着物を畳入れた。それを床に置いた。今や、彼女はすっぽんぽんとなった、右腕の上腕部の包帯を除けば。彼女が浴槽の部屋に近づいた時、そこから３歳ほどの少女が出てきた。少女は包帯に気づき、聞いてきた：

－怪我をしているの？

少女の母親は少女をしっと追い払い、失礼をわびた、女性に軽くお辞儀をして。が、微笑みを浮かべながら、風呂に入った。彼女が見えなくなった時、母親が少女に話した：

－あの人がおエイさん！　彼女に話しかけては絶対にいけないの！

ある移民者の記事で、６０年から７０年前に出た、読むことが出来た、東京で露日混血の１人の青年が舞踏会で輝いた、彼は大公の１人の私生児である息子と思われた。実際において、その古い記事の著者は気づいていた、これは楽な稼ぎの試みであったことに。その様な例は少なくなく見いだせる古今の歴史において。いわゆるアナスタシア王女のような例（ロシア革命で１９１７年にニコライ一家全員が銃殺された中で、末娘のアナスタシアだけが生き延び西ヨーロッパで生きながらえた、という説　＊）もある・・・

5日目（8月14日）
オランダ人墓地と志賀家の墓地

朝に始まった雨は、急速に止み、空は段々と明るくなっていった。偶にぽつりぽつりと空から降っていたが、僅かな通行人も傘を閉じるのを急いでいなかった。町の図書館に立ち寄ろうと、私は家を出た。が、気持ちは稲佐に行こうともがいていた。弱さで自分を罵りながら、最近ロシア語が聞けていた場所に行く誘惑に負けた。

時間を節約するために、バスに乗った。その後、急いで橋を渡り、既に馴染みの石段で、剛心寺に駆け上がった。今回は、古いオランダ人墓地を見ることに決めた。それについてはクレトフスキイが書いていた：「今回は、稲佐のロシア人墓地を訪れた、村の西端にある。ここでは、一つの「神の畑」（？　＊）で日本人、オランダ人、ロシア人の区画が連なっている。日本人の墓は綺麗に花で飾られている：各墓には花束が大きな竹製の器に生けられている。墓は横型も縦型もある；あるものは銘が刻まれ、柱状のものには石製の素晴らしいブッタの像が際立っている､深く沈思黙考している死者の中で沈思黙考している。

オランダ人区画では、訪問者の目は何の妨げもなく綺麗に並んでいる墓の列を滑るように動く。自分の銘でお互いに特徴的な。ここには、十字架も、花も、記念碑もない。一つのモニュメント以外は、あるイギリス人の墓の上に立てられた。」

日本の便覧の御陰で、私は既に知っていた、この区画にロシア人の墓があることを：すなわち、そこからロシア人の埋葬が始まっていた。訳があって、かってはこの所を船乗り達は「アスコリド号の墓地と呼んでいた。フリゲート艦アスコリド号の船乗り達は運が悪かった：乗組員の内の約２０人が長崎で亡くなった、更に、函館と下田にも墓があった。

大きな木戸があった。鍵付きの。高い塀は一見するとそれを乗り越えることが出来なそうであった。が、我々には駄目ではなかった。少し山登りの経験があり、壁をよじ登り、その後、地面に飛び降りた。幸運にも、誰も傍にはおらず、日本の秩序の明確な違反に気

づかれなかった。

普通の石碑は高い草が茂っていた。若干の墓は確りと修復されていた。が、大半は記銘を見分けるのは難しかった。我々の英雄の墓が。最初の墓には、明瞭な銘が：「聖なる神、アーメン。ここに神の僕であるグスタフ・ジチを葬った、ロシアのフリゲート艦アスコリド号の補給係の。１８５８年１０月７日死亡した。３６歳。」　同じような記銘がシドル・ポチンの墓にもあった。２６歳で１８５８年１０月９日に亡くなった、とアンドレイ・ボロジンの。２つ目の銘には、結構手間がかかった、文字と数字を解明できるまでに。何枚もの紙で土をこすり取り、文字の違いを確認しようと。が、分かった、２人のアスコリド号の乗組員は同じ日に亡くなったことが。石碑の下には、フェドル・イワノフが眠っている、３１歳の船乗り、１８５８年１０月２０日に亡くなった。墓の上には、大きな枝を持つ木が広がっていた、多分、思うに、ロシア人船乗りの埋葬時に植えられた。

多分、近傍に、フリゲート艦パラーダ号の船員ボリソフの墓があるはず、不幸な事件で亡くなった。この墓地の絵のある古い冊子に、正教の十字架の墓の列を見ることが出来る。すなわち、予想することが出来る、その墓はどこかに残っていると。クルゼンシュテルンが指揮していたナデジダ号は数ヶ月停泊していた。この船の乗員は１人も亡くなっていなかった？　早速サンクトペテルブルグへ移動し、海軍古文書館で引っかき回そう！

オランダ人墓地の少し上の方に、ロシア人の墓と全く並んで、志賀家の墓を見つけた、長崎でロシア人に助力をしたとして知られている。この家族の御陰で、ロシア人の船乗り達は何十年もここで生活していた。今回は、日本の法を破ることはなかった：この区画の木戸は開いていた。志賀家は大友豊後（現大分県）藩主の分家であった、大友の土地の没収後に長崎に移住した。長崎の歴史の早期から、志賀家の代表は村長を務めた、長崎の町を作り上げた、１１世代の継続において、志賀チカノリ家長（？　１６２２年）から始まった。一族の代表の内の一人が、１９世紀半ばにロシア人との交流の確立に大きな役割を果たした。彼の長男であるチカトモ（１８４２年－１９１６年）は１９世紀後半に、ロシア語の著名な通訳となった。彼は稲佐でロシア語を勉強した、海軍将校ムハノフの所で。１８７７頃に日本の外務省を退職した後､志賀チカトモは人生の終わりまで長崎に住んだ。彼は正教を受け入れた、洗礼によりアレクサンドル・アレクセービッチの名前を受けた。

日本人の通訳と志賀家の全員に感謝の意を示し、稲佐の散歩に向かった。何か奇妙な感覚が私をとらえた。今日の稲佐の様子は、昔のロシア人達が見たのとは全く違っているのにもかかわらず、そこには日本の記念板があった、昔のロシア人の存在を思い出させる。目的もなく回りの小道を散策しながら、思い出すように努めた、ロシアの船乗り達がこの地で何を見たのかと。今日では、私の回りは普通の町の地区となっている、長崎の中心部から若干離れている。それを「住宅地」と呼んではいけない、中心は目の先にあるからといって、それ以上に感ずる、活気のある場所から結構離れていると。この地区ではゆったりとした生活が行われている。商店では売り子が君をおっくうそうな目で見回す。何故ここを外国人がぶらついているのかと思って。通りのど真ん中で、老人達が立ち話をしている。家のドアが開いていていて履き物が見えている、玄関に置かれた。質素な住居。路地は無計画に配置されている、１つは上の方へ、もう一つは横へ、どの路地も極めて狭い、通行人二人が辛くもすり抜けられる、肩がぶつからないで。車のために、特別な道が延びている、山に沿って曲がりくねりながら。それを進んでいくと、不意にお寺に出会った。

これがカミリオン（？　＊）ではないのか？　ロシア人船乗り達が留まった。誰にも質問できない、とにかく寺院は完全に造り変えられている。その基礎には太くて大きな梁が見える：ここではしばしば地震が起こっている。

幾つかの場所を記憶していた、古い記述によれば女郎屋があった所。もちろん、今日ではそこは健全な住民達が住んでいる。そこには竿に衣類が干されている、衣類にはロシア人将校の制服はない。この地の古物店を見るのも結構、が、回りには食料品店や果物屋がある。過去を思い出し、時を回る旅人のように感じながら、ロシア人の造船所と病院があったに違い場所に向かった。ああ、残念ながら跡形もない。何隻かの小舟が小さい運河の岸に係留されている、その回りには家がひしめいていた。そこかしこで鍛冶屋を見た。岸壁に腰をかけて想像した、かってはここには日本の小舟が止まっていた、停泊地に向かう「キャプテン」を待っていたと。

私を少し嫌なことが待ち受けていた：靴が持ちこたえなかった。褒めそやされた日本製のノリは１日しか持たなかった。分かった、毎日、長めに巻き付けよう。もちろん、店に行き、安い靴を買うこと。が、何故だか、その様な靴での野外調査を終了したかった。その靴で土を踏むことになる。もう夕方遅い、針と糸で武装し、自分で思った、かってここでロシア人船乗り達が自分の靴を直したように。

6日目（8月15日）
ロシア領事館とその財産の探査行

今日は、町のある部分に向かうことにした。かって外交館があった場所である。今日まで幾つかの建物が残っていた。イギリス領事館は長崎の文化財産と見なされている、それは１９４１年まで機能していた。その後、この綺麗な２階建てのレンガ館に、科学博物館が置かれた。１９９６年以降、美術館として利用された。建物は政府によって保存されている。

最初のロシア副領事館を、商人アレクサンドル・フィリペウスが南山手１７番地の家屋に開設した。これは直ぐに商業代表部となった。その地区には基本的に外国人達が住んだ。最初の公式のロシア領事として、１８７６年にオラロフスキイがなった。ロシアの外交官は同じ番地に住んだ、５番地の家に。その建物は長期にわたってロシア領事の住居となった。１９２５年、ソビエトの外交官テル・アサツロフはこの地区から大浦の４番地の家屋に転居した。多分、南山手の古い建物は１９３２年まで領事館に属していた。

インターネットでの情報によると：「日本の長崎の住民達はロシアに保証を支払っている、土地請求に対する拒否に対して、１９１７年の１０月革命までロシア帝国の領事館があった。対応する平和協定は火曜日に締結された、町の裁判所で。２０００年に、ロシア側は要求を持って裁判に訴えた、土地の所有のロシアの権利の復活の、１８７５年から１９１７年の革命まで、ロシアの領事館があった。登録された書類が証明している通り、ソビエト連邦に所属していた。約１５６０平方メートルの土地についてである。ロシアは主張している、その利用に対して金銭を支払うことを、或いはそこに住んでいる人がそこを

解放することを。今日の協定は、争いの土地の半分少しにだけ触れている。予想されている、残りの区画の運命を決めるであろう協議は、今年の夏の終わりに行われると。」

ロシア領事館の写真のある綺麗な葉書を見つけた、古い葉書のアルバムの中で、前もって長崎の本屋で購入していた。テキストの編者と著者はともにブルケーガフネイであった。片方の手にアルバムを持ち、他方の手に地域の地図を、回りの家々を注意深く観察した。通りから通りを歩数で計った。が、古い写真に似た場所を全く見つけられなかった。そして、嬉しいことに、似た場所に気がついた：接岸に適した壁の一部分、階段の跡のある。建物自体は、残念ながらもうない。太陽で熱くなった石組みに手で触れ、時を感じた：何年も前に、ここに、私の祖先達がやって来た・・・

7日目（8月16日）
貴方は誰ですか、オキニさん？

このアベックは私の注意を引いた、電車に乗るやいなや。青年は少し不格好で、少し猫背、眼鏡をかけて、自分の連れ合いをじっくりと見ていた。再び私には思われた、この日本人は少し違って見えると、彼の同胞の大半より。彼の顔には、ヨーロッパ人の特徴が微かにちらりと見える。それ以外に、通常は若い日本人達は自分らの関係を全く漏らさない、時折手を掴む以外は。風習の相違に私が考え込んでいる内に、若者達は下車した。そして、私は彼らの秘密の謎を解けなかった。

バレンチン・ピクリの有名な小説「＊＊＊＊＊＊＊＊＊」のページをめくっていて、幾つかの驚きの事実を見つけた。小説の主人公である水兵ココフツェフは長崎で、レストラン「ロシア」の持ち主であるゴルデイ・イワノビッチ・パホモフと出会った。彼は直ぐに述べた：「君と同じく、私はボルホフスキー出身である。正にお坊ちゃん！　君の叔父の農奴として育った。そこで小姓を勤めた。彼が日本へ出港した時、私を奉公のために連れて行った。＊＊＊＊＊＊＊＊我々は函館に航行して行き、そこで私は我々の領事館で料理女を見た・・・＊＊＊＊＊＊。パホモフが妻の太い腹を示した。パブロ・セメノビッチのところへ行った。彼の足下へ：花嫁は目を付けられていたということである。私を前の状態に保つことは出来ない、そして離せ。」

函館における最初のロシア人企業家についての情報が思い出されると直ぐ、彼の墓を横浜の外人墓地で見た。コルニロフ将校は自分の従卒と一緒に函館にやって来た、が、従卒無しで日本を出立した：１８６２年に、一等水兵ピョートル・アレクセーフが１３年間の軍務を終了し、予備兵として去る資格を持った。違った階級に属していたにもかかわらず、長年の勤務は将校を従卒と結びつけた。召使いはイワノフスコエ・トベルスコエ県の彼の領地の出身であった。彼らは一緒に黒海艦隊で勤務した。２人ともシノプスク海戦に参加し、軍の勲章をもらった。一緒に、ジギット号に乗り、彼らは函館にやって来た。長い塾考と自分の上司との相談の後、３０歳の水兵は退役し、日本で商売を始めることに決めた。日本で、自立できる大きな可能性があった。それ以上にアレクセーフは日本語を上手く話せていた。１８６３年末に、退役した水兵は函館に最初のロシア人のホテル「ニコラエフ

スク」を開設した。１年後、１８６４年１０月に、函館で初めてのロシア人の婚礼が行われた：ゴシケビッチの女中であるソフィア・アブラモブナがピョートル・アレクセーフを夫とした。婚礼はニコライ神父が執り行った。

困難にもかかわらず、日本における最初のロシア人企業家の商売は少しづつ拡大していった。アレクセーフはニコラエフスクとウラジオストクへ旅行をした、ロシア船が帰港する全ての港に立ち寄った。時と共に、函館の可能性が小さくなっていることを理解して、そこでの仕事を止め、領事館と教区とともに彼は日本の首都に移った、東京に最初のロシアの建物の請負人となった。が、残念ながら、ピョートル・アレクセーフは長生きしなかった：酷い風邪が、ロシア人の天才の寿命を縮めた。彼は１８７２年１０月２６日に、江戸（現　東京）で亡くなった。夫の死後、ソフィア・アブラモブナは大使館の教会の家政婦となった。教区の助けにと、寡婦は遺産として受け取った金銭の一部を寄付した。アレクセーブナの最期の年は、ロシア公使スツルベの子供達の世話となった。

驚くほど、が、作家は重要な歴史的事実を多かれ少なかれ自分の小説で書くことが出来る、通訳シガの経歴を含んで。ピクリの小説の主人公は横浜の火事では勇敢に火消しをしている、実際において、ロシア人船乗り達は一度ならず長崎での火事との戦いで勇敢さを示した。もちろん物語に大屋さんは出ていた：「女性の着物をダイヤのブローチが飾っていた。ロマノフ王朝が管理しているダイヤモンド基金からの。７年前に、大公アレクセイ（アレクサンドル二世の息子）はフリゲート艦スベトラーナ号に乗ってウラジオストクまでやって来た；長崎を訪問し、彼は大家さんを抱きしめた。これが、この娘さんの出世の初めとなった、開発で今や自分を同じように裕福となっている（？　＊）。」　ここで、バレンチン・サビチは事実を少しすり替えている、とにかく、皇太子ニコライ大公の兄弟の日本女性との愛情関係について良く知られている。

ピクリの本を初めて手にした時、いつか長崎を訪れることを、思ってもみなかった。しかし、作家はここに全くいなかった、自分の面白い叙述は沢山の記憶に基礎を置いていた、軍務でここに住むことになった、或いは旅行で訪れた人の。このようにして、ロシア領事チルキンの追想から我々は知ることになる、かって長崎の郊外で、ロシア人に知られている大屋さんに出会ったことを：「大屋さんの所は充分に居心地の良い高くはない部屋があり、旨い食事も。彼女の旅館は長崎から雲仙にやって来た者の馴染んだ所であった。大屋さんは素晴らしい女性であった。彼女は若くはなかった（約６０才）。彼女の顔は昔の魅力の跡を帯びていた。決して美人ではない、皆が誇張して語るような。彼女は将軍達との内密な関係をひけらかしていた。そして、何時も泣いていた。彼女の子供、可愛い息子に、同僚達が勉強を教えないで、子供の疑惑の出生を絶えずからかうので。１９２２年に、妻と一緒に朝鮮のモギ（？　＊）を訪れ、私は大屋さんの息子に会った、立派に成長し２０歳余りの確りした若者に育っていた。」

オニヤーオヤーオキニ（？　＊）・・・　小説中では多くのことは真実とよくよく似ている。長崎のロシア人墓地に２人の将軍が埋葬されているのは偶然ではない。

Д・И・メンデレーフの孫との出会いは私を平静にしなかった、彼は同じく日本の歴史に興味を持っていた。シガが翻訳してくれた手紙は証明していた、著名な化学者の息子、В・Д・メンデレーフは日本を捨て、タキ秀島との関係を維持した。が、Д・И・メンデレーフは毎月彼女に子供の養育に相当な金額を送った。これはもう「契約に従った妻」で

はなかった。娘とその母親のその後の運命は不明である。２通の手紙と写真以外に、何の書類も見つかってはいない。政則が記録していた、「オリガ、ウラジミルの妹、が自分の回想記に書いていた、娘は母と一緒に東京での地震で犠牲となった。タキとの何らかの関係がウラジミルの死亡後に残っていたことを示しているのではなかろうか？　「東京での地震」とは何について話しているのであろうか？　大地震は、１９２３年にあったのだが？

しかし、これは信用できない。第一に、私が思うに、メンデレーフ一家との関係は完全に断絶していた、ウラジミルの死後か、露日戦争時にか、Д・И・メンデレーフ地震の死後に。第二に、１９２３年の地震については世界が知っているにもかかわらず、疑いがない、一般人の死亡についての情報を日本からロシアへ伝達することは、それどころか、革命後の最初の年に。第三に、１９４６年にオリガが追想記（１９４７年に出版）を書いた時、彼女は既に７８歳であった。これ故私は考える、地震時のタキと娘の惨事についての歴史は、実際には、彼女には論証できる推量では全くなかった。」

まことに、愛には国境はない、が、相愛の人の心を通じて国々は結びついている、ということである。

8日目（8月17日）
消えてしまった島－出島

長崎を訪れた人皆が、出島のオランダ館に行くことを自分の義務と見なしている。空のもとのこの博物館は、海外と日本の最初の接触の記念として開かれた。１６４１年に、ポルトガル人とその家族を追放し、日本の鎖国を宣言した２年後に、オランダの東インド会社の代表は彼らの商館の移動の命令を受けた、人工島への。１６３５年に徳川将軍の決定によって造成された。この場所は２００年以上にわたって、ヨーロッパからの商人達の定常的な生活場所となった。１８５８年に、通商条約の署名と、部分的に居留地が設けられた長崎の開港後に、ヨーロッパ人達はこの島を放棄することが出来た。ロシア人の長崎の記録から私は知った、かってロシア人達はこの日本で初めての外国人商館を火事から助けたことを、火事は商館を完全に燃やす恐れがあった。

今日、島には殆ど何も残っていなかった。１９世紀末に、町のこの部分に大規模な土地改良事業が始まった故であった。それにもかかわらず、１９２２年に、日本政府はもとオランダ商館の場所を歴史的名所として公告した、町の再構築の計画の更なる遂行は多くのオリジナルなオランダ式構造物の破壊に導くとして。が、島自体は初期の形を完全に失っていた。１９７８年１０月に、長崎市は出島の復活を宣言した。が、約１０年が過ぎて、漸くこの計画が実現し始めた。発掘により古い基礎の残骸を見つけた、また、大量の建築資材も、オランダ商館の住民達の生活の真相を明らかにする。１９９５年に、それらに御陰で、商館の門が復元された、以前の場所ではないが、出島のポールのコピーが立てられた。歴史的場所の復元の最初の段階は２０００年に終了した。その時は４００周年記念の時であった、日本に最初のオランダ船が立ち寄った、島に、日本とオランダとの通商関係の確立の。

出島の訪問者のために、商館長と船長の部屋、元長崎国際クラブ（１９０４年設立)、台所、２軒の石造り倉庫、海の門が開放されていた。それらは写真、写生画に基づいて復元した、何となれば、これらの建物の何の痕跡も残っていなかったので。更なる計画では他の建造物の再建が予定されている。例えば、石橋、当時島と町を結んでいたものである。出島復元の最終期日は２０１０年。その時には、島が１９世紀初めにあった姿となる予定である。

復興の継続において、日本人達は大きな難題に出くわした。昔の通りに、扇の最初の姿であった出島の周りを水で囲うためには、長崎川の河床と幾つかの町の通りの変更を必要とした。これは実の通り多くの時間と金を必要とする。が、町はこれを実行する。長崎を文化と平和の都市としようとする意向において、出島の歴史的価値を理解している。

博物館の見学後、湾岸に向かった。快適なコーヒー店の列は海に向かってドアが開いていた、海にはヨットやボートの列が。一つの小さな喫茶店は古いオランダ帆船の上に位置していた。もちろん当時ものもではない、今日造ったものである。甲板に冷えたビールを持って座り、旧オランダ商館を愛でる、昔のロシアの村にあった姿の。

9日目（8月18日）
グラバー公園と蝶々夫人

最も訪問すべき１つを提案するならば、、出費が少なくて済む長崎の名所の１つはグラバー公園（グラバー亭）である。これは一目で分かる例である、日本人が過去を大事にするという。これ以外に、小さい可能性を利用している、歴史的場所と旅行者の誘致のために。

スコットランド人のトーマス・ブレイク・グラバーの名前は、最初のヨーロッパ人の貢献時代のシンボルである、日本の発展における。彼は２１歳であった、１８５９年９月に上海から長崎にやって来た時には、商社の代理人として。３年して、グラーバーは自分の会社を設立した。会社の仕事はあっという間に上向いた。時がついていた：日本の長い鎖国が終了していた、幾つかの港が外国との交易のために開かれた。日本人に蒸気船、武器、他の商品を販売し、数年で商人は財産を蓄えた。１８７０年に祖国のスコットランドから、日本にグラバーによって輸入された船の内の一つ、１５００トンの「リュウジョウ（龍驤＊）丸」が、明治における新しい帝国艦隊の最初の軍艦であった。

グラバーの功績は、新しいヨーロッパの技術を日本人に教えたこと、日本にイギリスの専門家を相談員としての招聘に助力したことにある。彼の援助により、長崎に、日本で初めてのドックが造られた、同じく、最初の現代的な炭鉱が高島に開かれた。将来の造船において、石炭の採掘は日本の近代化において重要な役割をなした、長崎の経済の主要な部門ともなった。すなわち、グラバーは長崎の外国住民と高島の間に最初の電話線を施設した、長崎の沿岸に沿って鉄道線を施設した。日本で最初の灯台の設置のためにスコットランドから技師を雇った。日本の青年をイギリスの大学で教育出来るようにするために、少なくない努力をした。

１８６３年、南山手地区の山の斜面に、大工の小山秀之進がグラバーに素晴らしい家を造った。家は湾の上にそびえ立った、商売の成果の象徴のように、外国との交易の重要性の。交易は日本を封建国家から強国に変えた。外国の商人のために予定された、が、日本の職人の手で造られた、日本の材料から、建物は日本とヨーロッパの文化の影響の象徴であり、グローバル化の新しい時代の始まりであった。

１８７０年に、グラバーの商社は破産した、が、スコットランド人は日本に残り、自分の能力を発展する日本の企業への適用することを見いだした。１８７７年まで、彼は長崎に住み、その後、会社三菱の相談員として東京に移った。彼は日本のビール会社の立ち上げに参加した。明治政府は国に対する彼の貢献を認め、１９０８年に、日出ずる国の２等勲章を授与した。当時は考えられない出来事であった！　グラバーは１９１１年に亡くなった、長崎に、坂本国際墓地に葬られた。

グラバー亭から余り離れていない所に立っている、他の石造りの建物はイギリスの商人であるウイリアム・アリタのものであった。南山手の１４番地にある彼の家は、グラバーと同じ職人が造った。しかし、今回は、ヨーロッパと日本の様式を組み合わせるという注文主のアイデアを実現した。グラバー亭はもう一つの建物としても有名である、マダムバタフライ（蝶々さん）の家として。そこでの展示物はプッチーニの同名のオペラについて話をしている、主役の日本人演技者の。家屋は全く劇場と、オペラで演じられている出来事と関係はない。グラバー自身の恋愛の歴史は全く対比されるものである。オペラの台本と違って全く悲劇ではなかった。商人の妻ツルー蝶々さんの同じようにーは彼の家に非公式に入った。が、後になり、夫婦関係は法的に認められた。彼らは並んで葬られた。

一般として、蝶々さんの題材は一度ならず繰り返された。フランス人作家ピエール・ロッテイ（これは偽名、本名はロイス・マリイ・ジュリアン・ビアウド、１８５０年－１９２３年））の小説「マダム・フリザンテマ（お蝶夫人？　＊）」がある、１８８７年に書かれた。ロッテイは１８８５年に日本にやって来た、フランス海軍の船ラ・トリオムファンテの海軍大尉として、長崎に２ヶ月間滞在した、７月から９月まで。基本的に本の題材は日本人妻であるオカネさんとの共同生活の様子が書かれていた。本の中では、彼女はオキクさんの名で呼ばれていた、文字通り「お菊夫人」として。

博物館「グラバー亭」は１９７４年に長崎に開館した。ヨーロッパ式スタイルの建物の保存を目的に、明治時代に立てられた。それとともに、日本人のヨーロッパ人との最初の接触の記憶として。これに町の資金を振り向けた。グラバー亭の所に、幾つかの西洋風の建物が追加された。それらは町のあちこちに残っていた建物であった。長崎の町の再計画に従って持ってきたものであった。それらを解体し、グラバー公園に移した。それらは重要文化財として指定された。

湾を見渡せる素晴らしい庭園。この場所のエキゾチックな過去は、グラバー公園に多くの旅行者を惹きつける。その人数については、長崎の旅行会社は上手くいっていると考えている。統計学者が語っている、最大の訪問者数は１９９０年であった、その時には博覧会「旅行－９０年」が行われていた。通常では、公園は毎年約１７５万人が訪れていた、基本的には夏の時期に。分析者は見なしている、この名所は段々と生き尽くしてきている、とにかく公園では、何も考えられていない、日本人の若い世代を惹きつけてくれるようなものは。この課題を考慮中である。

10日目（8月19日）
アスコリド号の墓地で、観光ガイドの役割とは

太陽光線－近くの屋根から潜り込んできている－が私の窓をのぞき込んでいた、朝早くに。野外探査には素晴らしい日！　再びロシア人墓地に向かうことにした：推測を確かめようと焦らなかった、古い計画と彫られた銘板の不一致が＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊と関係していることを。

ぴょんぴょん跳びながら、山を下り、数分で、町と橋を通り抜け、稲佐の道へ。再び閉じられている潜り戸を通り抜け、都合の良いことに、それに並んで壁から数個のレンガが転げ落ちていた。昨日は、目が痛くなるほど注意深く、ロシア人墓地の２つの銘板を調べた。それを条件づきで３つのレベルに分けて：古いか或いはアスコリド関係で、公的で露日戦争時期か、或いは移民関係か。

実際において、彫られている記銘は完全に日本の本からの物であった、そのコピーを私は手にしている。いまや、説明する必要がある、何故そうなったのかを。古い計画と比較しながら、私は思う、アスコリド号乗組員は４列の墓であった、が５列。最後の列の墓は全体的に綺麗には配置されていなかった、戦前のメモで示しているように。大混乱で頭がぼうっとなった！

紙を広げた、柵の向こうで若い人影がちらちらするので。どこから判断しても明かだ、墓地に対する大きな興味を持っているのは、が、近づくのにリスク無しで。それにもかかわらず、写真撮影に慣れていた。

－君達はどこから？　何故、立ち寄らないの？－　最初、彼らに日本語で問いかけた。が、その後、若者のヨーロッパ人的顔に気がつき、英語で。

多分、母国語で済ませることが出来た。モスクワ人のグリシャ（グリゴリイの愛称　＊）は日本語を勉強している。彼は背が高く少し不格好。が、モリコは上品な日本娘、言うことが出来る、お人形さんみたい、将来の言語学者。２人は京都から、休暇中に長崎を訪問することに決めた。見たところ、仲間を通じての、恋人同士。

始めは、我々は松山の道後温泉に出向いた、お互いに邪魔をして、学生達が話をした。

－知っている、露日戦争時、あそこに約６０００人の軍事捕虜がいたことを。地区の墓地を訪れるように我々に助言した。そこには９８基の墓がある！　知っていますか、日本人の石碑を配置した、石碑が北を見ることが出来るようにと、ロシアが位置している。我々は見なした、これは天からの啓示であると、長崎を訪問することに決めた。墓の敷居の向こうへは行かなかった、というのは、潜り戸の所の掲示板を読んだからである：同伴者無しにしないように！

これはすなわち読み書きが出来て、遵法であれということ。これは日本ではありふれたことである、定められた規則に従うこと。しかし、少しして、グリシャとモリコが柵の私の方にいた。我々は元気に印象を分け合った。私の同行者達は喜んだ、私がこの墓地の歴史に取り組んでいることを知って。そして質問攻めにした。不本意にも、ガイドとなるこ

とになった。自分の話を初期レベルから始めた。アスコリド号の乗組員達が最後の係留地を見つけたことを。

－見て、これはロシア人墓地の最も古いカ所。ここには約２２基の墓がある。私が思うには、ここに強力な爆弾が落ちた。

－多分、これは原子爆弾の跡？

－私は思わない、この墓地の破壊は、原子爆弾で生じたものとは。想像してみてくれ、ここから爆心地までは結構遠い、地形を考慮しなければならない。しかし、忘れてはならない、原爆以外にここには通常の爆撃があった、それが少なくない破壊の原因となった。ほら、組立工セリベリストフの記念碑を反対側からここへ移した、それには記銘が残っている：「１９０１年９月１７日死亡」。ここで、爆弾の破片の確りした痕跡が見て取れる。これは火夫ワシリイ・スミルノフの墓標である、蒸気船シルク号の：名前の殆ど半分は破損している、死亡日を識別するのは難しい－１９０３年１月１７日。その代わり、セメントの十字架は確りしている。それを大分年月が経てから立てたのは明かだ、この墓地の大半の墓の十字架と同じように。良くわかる、十字架は型板で造られているのは、綺麗に並び立っている。

アスコリド号の乗組員の幾つかの墓碑板は良い状態で残っている、全ての墓碑銘を簡単に読んだ。他の場合、修理で、墓碑銘は漆喰を塗られていた。墓には簡単で平らな墓碑板が残された。モリコがロシア語で叫び声を上げた：

－オー、この墓碑銘は確りと分かる：「父と息子と聖霊の名の下で。ここに神の僕であるナザル・シルヤノフの遺体が埋められた。ロシアのコルベット艦パサドニック号の第５労働隊職人。１８６０年７月２９日死亡、４５歳。」　もう１５０年も経っている！

女性は悲しみを込めて、日本語で朗読した：

彼らの運命は本当に羨ましい！

気ぜわしい世界から北へ

桜が山で咲き始めた（＊＊＊＊　マルコフ）

－再び、君の愛する人バーシャ、－彼女の同伴者が言った。

モリコが控えめに目を伏せた、が私は続けた。

－彼は我々ウラジオストクでは非常に人気があった。彼の詩の地方の翻訳者さえいる。

そして、私は思い出した、翻訳の文章を、タチヤーナ・ブレスラベツの：

光線は花の中で輝き失う。

明日はやって来るのか？－

答えよ、イトスギ１本・・・

ついでに、パサドニック号の歴史を友人に話した、その船長は対馬を占領したがっていた。我々は一緒に墓を巡り歩いた、墓の記銘を解読しながら。

－見て、退役した１４等文官であるフィリップ・コトリャルスキイの墓碑は良く保存されているのを、１９０２年６月９日に亡くなった。君はどう考えるのか、彼はここへ仕事できたのか、それとも治療でなのか？　ほら更にもう一つ：「県の書記ドミトリイ・イワノビッチ・ボロセビッチの遺体がここに葬られた。１８９９年３月１日に、２９歳で亡くなった」。

－彼は私より６歳年上だ！－　モリコが叫び声を上げた。

－見てごらん、何が書かれているか：「熱烈に愛している妻と友人から」。－これらの言葉に、モリコはグリシャにぴったりと体を寄せた。

－思うに、彼女にとって何という悲劇であろう！。

時折、基銘を解読するのは困難であった：湿った海の空気はそれなりの仕事をしている。それにもかかわらず、蒸気船アルグン号の火夫であったフランツ・ペテルソン（１９０２年１１月１日死亡）の墓碑の言葉は充分にはっきりと読めた。同じように、装甲艦ペレスベット号の機械工フェオドル・ドマシェフ（１９０２年７月３１日死亡）の墓は良く保存されていた。ついでながら、よく見えた、金属製の正教十字架は、多くの墓で、最近造られ、お互い同じ形の。巡洋艦ウラジミル・モノマフ号の機械工イグナチイ・シャブリン（１８９０年３月２８日死亡、３７歳）の墓には十字架はなかった。なぜ？　興味が湧いた。

中国における義和団の蜂起（１９００年　＊）の時、長崎に野戦病院が置かれた。素晴らしく勇気ある勤務をした、３１歳の騎兵曹長で２個のゲオルギイ勲章の叙勲者ミトロファン・パツァンが。彼は１９０１年４月９日に負傷で亡くなった。彼の連隊はオベリスクを建てた。記念碑は爆撃で損壊した、記念碑は他の場所に移された。その後、記念碑は地面に倒れた。その代わり、装甲艦ポルタワ号の水兵チモヘイ・ムラビエフ（１９０２年１２月８日死亡）の石碑は確りしている、碑銘を読み出すのは容易である、ありふれたコンクリートに書かれたものであったが。

クリッパー艦イズムルド号の２５歳の水兵イオン・ロゴジン（１８７２年８月２６日死亡）の墓は２つに割れていた。それに並んでオベリスクが、小型軍艦オトバジュニイ号の射撃長である３０歳のドミトリイ・アブラモフの、１８９３年３月１７日に亡くなった。伝説的な艦船ビテヤジ号とグリデン号の水兵の墓・・・　が、ここに何人のアスコリド号乗組員が葬られたのか！

ポーランド人のボレスラフ・フロリンスキイ－１９０３年５月１０日に亡くなった－の墓の所に立ち止まった。私の埋葬者のメモ帳には、この名前はないことが分かった。彼についての情報は同じく未だ分かっていない。当時、日本には少なくないポーランド人の革命家達がいた。多分、彼はそれらの内の一人であったろう。

－多分、他の墓地か、らここへ移送したのではないだろうか？－　グリシャが予想を話した。

まあ、それはあり得る。１８９８年７月１日に亡くなった３８歳のマリア・ペトロブナ・トリツカヤの石碑は良好な状態にあった。その墓には十字架も残っていた。が、それにはめ込まれていたイコン画は落下していた。

－ここには誰が寝ているの？－　モリコが質問した、庭を持った高い基台を示しながら。そこには荒削りした石で出来た４本の四角柱が立っていた。丸い石製の帽子を瘤状に冠している。何の銘板もない。如何したことやら？

私はメモ帳を覗き込んだ：これは数少ない内の一つであった。この区画での唯一の将校の墓でないならば。少尉ニコライ・ブラディキンがスクーナー艦エルマク号に勤務していた。そして、１８７７年４月６日に２９才で亡くなった。記念碑の背面に、同情者の誰かが墓銘の代わりに紙製のイコン画を貼り付けた。長崎にはしばしば、志願の蒸気船が立ち寄った。時折、乗組員がこの岸に最後の安住場所を見つけた。例えば、船乗りアルセンチイ・シュツクンは１９１０年１月２８日に亡くなった。彼のオベリスクには、確りとした

碑銘が残った、「志願の蒸気船オリョール号とキエフ号の同僚から」。明かだ、葬式の時、この２隻は長崎に泊まっていたことは。良くあった、葬式の費用は、港にいた全ロシア船から集められたことが。ロシア人墓地には異教徒も葬られた。巡洋艦パミャチ・アゾバ号の２７才の水兵オムゼル・マウゴレイの墓がここにある、１８９９年１２月２１日に亡くなった。彼の墓に２つの言語の墓銘がある：ロシア語とアラブ語。

見学時、グリシャとモリコは私の後ろを歩いた、手を取りながら。説明に聞き惚れていた。しまいには、我々は段の所に腰掛け、感じの良い墓地を見回した。１００年もの樫の木が時の試練に耐えていた、半分ほど腐っていたが。多分、爆弾がこの木を真二つにした？

－また来る？

－もちろん・・・

若者達は長崎の他の名所の見学に急いだ。が、私は墓地に留まった、存在の無情について少し考えることがあって。

11日目（8月20日）
諏訪神社、フセボロド・クレストフスキイが見たもの

残念ながら、長崎には正教会はない。同郷人の眠れる魂に献げる蝋燭を立てる所がない。その替わりに、有名な諏訪神社がある。長崎を訪問した人が必ず訪れなければならない所と見なされている。この町を訪れたニコライ皇太子、全てのロシア人達がこの神社を訪れた。この神社は私の宿所から余り遠くはない、隣の火山の斜面にある。徒歩で２０分余り。

日本の神社の大半の発生は、神話の迷信、歴史的出来事、或いは大地の神による創造についての伝説、或いは神々の種類に関係している。しかし、諏訪神社の場合には特別である。この神社はキリスト教に対抗するものとして生まれた、他の日本の神社とは違って。１６３４年から１６８５年の間、この神社は幕府の直接の支持を得ていた。特に、１６１４年までは、長崎は格別にキリスト教の町と見なされていた。大人数の信徒衆がポルトガル人神父の力でここに造られた。１５７１年から、宗教の説法を行った。彼らは大成功をなした、キリスト教を信ずる特権階級、武士、ヨーロッパから持ってきた商品の商人に対して。これらの商品の中に、火縄銃があった。国内の力のバランスを特に変化させた、キリスト教を受け入れた封建領主の有利に。長崎でキリスト教は花咲いた、この時期の日本の武家政権、徳川幕府が武器の輸入を自分の支配下に出来ていなかった、国からカトリックの宣教師を追放していなかった時期。この後、幕府はキリスト教の信徒衆と戦った、国の西部に、長崎の回りに集中していた。この際、大弾圧を行った、国の宗教である神道の古い価値観への復帰の大宣伝を行い、島に寝付いている仏教への。

長崎の住民は他の何ものにも留まらなかった、新しい神社とその活動を受け入れるような。年を追うに従って、キリスト教は市民の記憶から消えていった。神社は慣れ親しんだ祭礼の遂行の場所となった、子供の誕生、成長の祝い、悪霊の追放、その他の神道の伝統と関連した。何回かの大洪水、破壊的な台風、伝染病、特に１８５６年の火災、諏訪神社の財産の大部分を焼失させた。にもかかわらず、神社は徳川時代を穏便に生きながらえた。

寺院の神主達は成功した、外国人から少し遠ざけて地域の住民達を守ることに、多かれ少なかれ。何らかの原因でこの目的が達成できなくなった時、切腹をした、１８０８年に起きたような、イギリスの船フェートン号が湾に立ち寄り、大砲で脅かした時、食糧をよこせと。

作家フセボロド・クレストフスキイが神社について記述していた：「諏訪神社に導く階段は、長崎で最も古くて最も記念となる建造物となるものの一つである。階段は正確に削られた大理石の角材から出来ている、脇は同じ大理石の縁石で縁取られている、基台の石と同じ、上部が同じ１０アルシンの幅の。下方には、最初の段と同じように、大きな大理石の鳥居が立っている、２本の円柱を持つ、高さが８アルシンの；円柱の間の通路の幅は４アルシン、が、石で出来ている上部の飾り物の長さは１０アルシン以上。ここから、君は遠景に見ることが出来よう、幾つかの同様な大理石の鳥居を。各々の広場を高さで飾っているが、なだらかな階段。それらの脇には、石から彫られた独特な形状の灯籠が立っている。台座は古い記銘で飾られている。階段を上がっていくと、これらの門が君を何処へ連れて行くのか分からなくなる。神社自身はどこか上の方にある、濃い木々で、時折巨木で完全に隠されている。階段の両側には小さい広場が、色々な木造の小屋、鐘楼、礼拝堂、小店が座を占めてる。大きな手すりとテラスに造られた、荒石から出来た、小さいツタ植物で覆われた。これらの個々の大きくはないテラスには、何の対称性もない。が、非常に綺麗、あるものは高く、あるものは低く、あるものは脇に、或いは角に、小さい石の階段によって結びついている。君は気がつく、個々の小屋、小庭、花壇、さらさら流れる滝のある、立派な石碑のある墓地、それらの上に広く枝を伸ばした曲がりくねった松。が、主堂は大木の葉で未だ見えない、その中で、階段自身が見えなくなってしまいそう。これらは木の巨人：松、西洋杉、日本の杉、椿。その中で各々の木－３００年は下まらない－７００年以上、はこの神社全体の悠久さと素晴らしい美を形成している。

しかし、ほら、我々の目の前には、更に最後の階段が、なだらかの段差の、８６段ほど進んだ。漸く、我々は最高段の庭に。その端に沿って、階段に向かって両側に隣接し、長い石製の手すりが伸びている、直角四角柱の。この手すりの上には、柱の上に木製の格子状の渡り廊下。我々の目の前には、広い庇の屋根が広がっている、神社の主門の模様付きの彫り物のある木製の切妻庇、金メッキされ、彫り物に緑青、朱、紺青と簡単な絵の具で描かれた。これらの門の後ろに、前の堂がある。それらの真ん中に、古い青銅の像が見て取れる、聖なる馬の、自然の大きさの、有名な白変種である白い馬。伝説によれば、その馬に乗せて京都へ運んだとか、善良な従者達がブッタを。

我々は最初にこのお宮を取り囲んでいる外の回廊を見に立ち寄った。ここには、特別の枠に、木製の小さな板がはめ込まれている。長さが約１０インチ、高さが約２インチ；それらの各々に、名前らしいのが書かれている、神社のために寄付を行った者達の。ここの小板は数十枚らしい、古代ロシアの軍隊でなければ（？　＊）、日本人の宗教への無関心を決して証明していない、それを我々に信じさせたがっている、ヨーロッパの作家の一部は。考えてはいけない、寄付への動機が見栄ではないかと：これら簡単な削られた小板に、何の絵の具、漆、装飾もなく、寄付者の名前だけを書いている（男性でも女性でも）。しかし、肩書きと寄付額は表示されていない。一人は１０００ルーブルを、他の者は幾らかの銅貨を出している。が、彼らの名前は寄付をした順序に並んでいる。壁には、半分伝説

上の英雄の像が吊されている、主にその愛国主義で賞賛されている、同じように絵画も、祭典の行列や大きな祝賀のエピソードを表している、それらは毎年須賀神社で全住民達によって挙行されている。更に、海を航行する船、少女の像もある、役に立つ神に色々な道具を持って歌や踊りを提供する芸人の役割で。船の絵は、須賀神社に、船主や漁師達が持ち込んでくる、航海に出かけようとする、自分の船が海の神様である弁天様の御加護を得るようにと。ある信心深い人は鹿の角１組さえ寄付した。もし、現代のヨーロッパの概念が適用されるならば、考えることが出来る、伴侶が亡くなった場合には、これは喜びの貢ぎ物である。：日本においては、東方全域と同じように、角は力と権力の象徴である；これ故、サムライの古い甲でこれに出会うことは希では無い。

右の渡り廊下に、歯痛に効果のある独特な方法を見つけることが出来る。我々は本当に驚いた、大きな木製の楯を見つけて、色々な場所に信心深い格言や祝詞が書き込まれた、小さい厚紙製の太鼓が散りばめられた、高さが１インチで直径が２インチの。各々の太鼓は脇に金色の紙を貼られ、底で木製の楯に固定されている、祈りの言葉の上やその下に；その上部の円形部分は白くて細い紙で確りと張ってある、内側にお守りを入れた。お守りとは何か内密の願いを書いた小さな紙のこと。ここで最もおかしなこと、楯は噛み砕かれた紙の痰の跡が無数にある、それは板にくっつき、その上で乾く。我々の学校時代を思い出した、良く知られた遊び「かみタバコ」を。紙片が軽くならないうちに、この紙片を唾と一緒にして黒い机にはき出した？　生徒はペン、鉛筆、或いはパンにはき出した。。これは歯痛に対する魔法の方法であった。歯痛に病む人は神社にやって来て、当直の神主から巻紙を購入する。それには魔法の祝詞が書かれている。この紙を持って、木の楯の所にやって来る。しかし、それを決して開かない、神よ守りたまえ、そこに書かれていることを読まない。受難者はそれから紙を掘り出し、それを噛み始める、同時に楯に書かれている祝詞を順序よく読みながら。彼は最初の祝詞を３度読んだ；この時にはもう口の中の紙片はくちゃくちゃとなっている、太鼓を狙うだけになっている。最初の祝詞に貼り付ける、それに上手く唾を付ける。もし、目標に上手く命中し、太鼓の表紙に穴を開けることが出来れば、歯痛は去って行く；が、もし不成功ならば、魔法の紙から新しい小片を引き裂き、それを噛み砕き、次の祝詞を３度読み、その後、次の太鼓に目標を付ける；不成功ならば、３度目を繰り返す、以下同様。成功しない間は。しかし、実質的に、そうなるか。神主に相談する必要がある。彼は確りと教えてくれる。

右側の渡り廊下から、青銅の馬を見に堂の中を進んだ。その両側に沿って、かなりの距離後ろに下がり、高い台座の上で１組の大きな灯籠が美しく見える。堂の中央、馬の後ろに、大きな聖堂の壺が立っている、古くて見事の鋳造製の。底には祝日毎に献呈された香が灯される。これら全ての名所を見て、我々は主堂に続く広い石段に向かった、同じように木製のあばら屋である、地面から２ｍほど高くなった木製の床の上にある、回り全面が開放的なベランダのある、底には幾つかの木製の階段がある。お堂のための基台となっている床は、桁の構造から出来ている、全体的に、それが極めて綺麗で透けて見える様子を与えている。特に、独特で、厳しい条件付きの形状をこの堂－あばら屋の竹の屋根がもっている、比較的非常に高く張り出し部に斜めに少し高く天井の桁に横たわっている。その様にしてベランダ全体を覆っている；それは更に優れている、そのトラスの上の端は頂上から外に出ている、対照的に溝状の分岐点で、ローマ数値のＶ或いはスラブ語の形で、１

本の小さい丸太の上端に沿って立てられた、両端を一様に削られた、心棒に似た。」

諏訪神社の初めてのロシア人の訪問者によって、我々に詳細な記述が残された。ここで、記述を何の省略もなく引用する、当時の神社がどのように変更されたかを、現在の旅行者達に示すために。ついでながら、神社の変化は極めて少ない。日本人は注目に値すると見なしている、原子爆弾の爆発時、諏訪神社は実際において破壊しなかった、その時、著名な浦上大聖堂やそれに隣り合っていたカトリック教の建物は爆心地にあった。正に、神社は神の御加護にあった！

戦後、長崎人の神社に対する愛情は更に強くなった。神社は破壊された町の中で美と心地よさの島となった。人々はここにやって来た、力を借用するために、悲しみと苦悩に対する保護を見つけるために、新しい仕事に祝福を求めて。諏訪神社の価値は今日まで失われてはいない。神社の神官の１人が発言していた、「ここは基礎である、その上に将来の世代が生活を構築していく」。

12日目（8月21日）
私が骨董屋で探したものは？

数え切れない火災と第２次世界戦争時の酷い爆撃にも関わらず、日本では少なくない古い物件が保存された。特に、「ノミの市」を訪れた時に目に飛び込んでくる。それは良くしばしば、寺院の近くで行われている。そこでだけ、見られる：古いアイロンや鍵からユニークな芸術作品まで。白状する、機会があれば、古い物品の人を惹きつける世界に没頭することに努力したことを。そして、ロシア人の移民に関係したようなものを見つけることに。この目的を持って、骨董屋を覗き込んだ：そこには、古い日本の匂いが保存されている。現代の物品では感じられない匂いが。

その様な骨董店を一つを訪ねたことを書いたクレストスキイの追想記から抜き書きをしないことに耐えることが出来ない：「我々は敷居の所で靴を脱ぎ、少し高いゴザの上に登った。最初の部屋で、日本の芸術の完全な展示物に目移りした。そこには、漆塗り、青銅器、陶器、骨製のミニチュア、色々な武器があった。例えば、甲冑と楯、槍と矢、上級の侍の刀、短刀（切腹するための）、柄に象眼が埋め込まれた短刀。自分のコレクションのために、私は買った、４５円で日本刀を、殆ど同じ。骨董屋はため息をついて我々に苦情を語った、古武器の価格は今までに結構安くなってしまったと。政府が軍を西洋式に再編成し、武士に２本差しを禁止したので；この種の武器にヨーロッパ側からの問い合わせは全くなかった」。

現在では、特別な許可が必要とされている、日本からその様な侍の武器を持ち出すためには。その様な武器はもう店にはなく、その様な希少品は記憶の彼方に。日本人自身がその様な武器を全世界で探している、それらを買い戻し、自国へ持ち帰るために。骨董商の小さい部屋は基本的に古いタンス、箱、仏像で占領されていた、簡単に言って全てガラクタ。そこには最近誰もやって来ていない。

ついでながら、沢山の古い日本の物品がロシアの保管所にあった。１９８９年の展覧会

の準備中に、私は何度もそれらの物品と出会った。残念ながら、亀の甲羅製の有名な物品を見ることが出来ただけであった、長崎へのロシアの旅行者が欲しくなり買ったものであった。それについての話は各々の追想記中で見つけることが出来る。その内の１冊で読むことが出来る、「工房芸匠（？　＊）は小さい４部屋から出来ている。そこで、１０人から１５人が働いている。時折２０人が、急ぎの注文に合わせて。工具は全て手製、極めて単純。ノコギリ、カッター、キリ、カンナ、コンロ、砥石、石盤、研磨用粉、幾つかのスタンプ、これが全て。状況から全く結論を出せない、ここから素晴らしい、時には驚くような魅惑的な物が生まれているとは。店に立ち寄った。芸匠は私に極々小さい自分の商品を見せた、ビックリする値段を決めて；ついには、アルバムに。そこでは沢山の写真が目立っていた、購買者の。特に、ロシア人船乗り達の。アルバムを何度も見直して、我々は芸匠の所有の見学を終わり、主人と別れた。店から出て、私は感じた、メキシコドルでの結構なまとまった金に安心を。その代わりに＊＊＊＊＊＊で、亀の甲羅の小さな彫り物の軽い箱となった。」

長崎では、職人エミロー江崎（現在、長崎の江崎べっ甲店がその後裔らしい　＊）が有名である、１７０６年に発端した。それはエキゾチックな材料からの作品の出品に特化されている。亀の甲羅である：女性用櫛、タバコ入れ、ブローチと他の日常品。自分の作品に対するロシア人船員達の興味に気がつき、職人はロシア船の模型の製作を行った。基本的に将校達の注文を受けて。長崎に立ち寄った船長ルフマノフが書いている：「黙っては見過ごせない、職人江崎の有名な亀の作品を。かの職人は亀の甲羅からいろいろな物を巧みに造りだしている：模型、船のシルエット、可能な贅沢品。船の模型は正確な縮尺と驚くべき細密さで際立っていた。職人は何の些細なことも避けなかった、ロープさえ薄い亀の糸から造りだしていた。これは高価となった。船の模型は高官への進物ために注文された。それらは文句なしに博物館級であった。しかし、船の微細な模様の入った亀の甲羅のタバコケースは充分手の届く価格で売られていた。自分の船の模様の入ったタバコケースを持っていることは船乗り達の大いなる自慢であった。エザキはそれに専念した。しかし、注文された図柄やシルエットを実現するために、船の図面を得ること、船を計ること、細部を図にすることが必要であった。最後の目的のために、エサキはロシアの太平洋艦隊の船の上をぶらつき回った、巻き尺、縮尺定規、製図用具を持って。エサキは殆ど例外的にロシアの船乗り達の所で仕事をし、彼らの多くに掛け売りをした」。

将来の皇帝ニコライ・アレクサンドロビッチ（・ロマノフ）は日本訪問時に、エミロー江崎の会社に亀の甲羅製品を注文した、この航海に参加した全ての船の、乗組員達への感謝の印に、苦労をかけたことに対して。２０隻の船の模型が造られた、ロシア帝国海軍の、３隻の日本の民族船も。１８９７年、皇帝ニコライ二世は海軍博物館に１３隻を寄贈した、それらは今日まで保存されている。日本人の職人の他の作品は、個人のコレクションとなっている。長崎での博覧会で、中央海軍博物館は４つの模型を展示した：パミャチ・アゾバ号、ドミラル・ナヒモフ号、コレーツ号、ボブル号。

13日目（8月22日）

坂本国際墓地とデンビの墓

眠りから覚めるやいなや、パソコンの前に座った。お決まりの手順の前に、もう一度長崎の地方のサイトの一つを見ることに決めた。同じく、電子ジャーナル「ペレクレストク（十字路　＊）」も。大分前に、そこで情報に出会っていた、長崎のデンビ家の何人かが家族用納骨所に葬られているという。デンビの家は現在までウラジオストクに健在であるが。ひょっとして、納骨所が残っている？　剛心寺のロシア人墓地の墓の名簿には、それについての何の言及も見つけられなかった：この墓地には、基本的には軍人が葬られた。坂本国際墓地（浦上駅の東方約４００ｍ　＊）に立ち寄ったら、何か？

慣れた急な小路に沿って、山から駆け下り、３番電車の停留所に直ぐにたどり着いた。電車は私を乗せて長崎を回った。電車は一見して、ウラジオストクの電車より少し古く見えた。が、電車にはエアコンがあった、これは暑い場合には大事である。街角の電子温度計は確りと３５度を指示していた！　森町の停留所で降り、山を少し登った、自動車を避けながら。日本では歩道は大きな中央通りにだけに伸びている。他の通りでは道端に甘んずるしかない。実際において、日本の運転手は極めて丁寧であり、歩行者を努めて避けて通るようにしてくれる。赤信号で道路を横断しようとする、命知らずに対してさえブレーキをかけてくれる。ついでながら、その様な違反者は基本的に外国人である。

問題なく、坂本墓地を見つけた：町の至る所に、名所とそれらまでの距離を示す掲示板があった。いつも通り、結構大変であった。実際において、日本人の墓地と違って、この墓地には埋葬者の親類達は殆どやって来ていない。道は墓地を２つに分けている。入口からの右側には、大きな壁が建っている、墓地の歴史を語っている。この墓は浦上山里（現在の坂元町）に造られた、大浦らの最初の国際墓地の１８８８年の閉鎖後直ぐに。ここには第２次世界戦争終了まで、外国人が葬られた。現在、坂本墓地には約４４０台の墓がある、国籍が１６種の人達の。入口には花で埋め尽くされた永井孝博士の墓がある、長崎医科大学の助教授の。１９４５年の原爆の直後、彼は人々の救助に身を献げた。原爆の照射のために、この医者は長く生きられなかった、１９５１年に４４才で亡くなった。ここから爆心地までは手で届くほど、２ｋｍはない、沢山の墓が原爆で被災した。

門の右にイデシュ語の看板が：「永遠の家」。ここにユダヤ人区画がある、３０ほどの古い墓のある。長崎のユダヤ人社会は最も大きなものの内の一つであった。ナデリスキイ、フェリドマンニ・・・　基本的に、ロシア帝国の西部の出身者達。このブロックの後ろに、イギリス人、アイルランド人、アメリカ人の墓地がある。アメリカ人のが一番広い、その墓には、奇妙な簡潔な看板が：ＵＳＡと番号。多分、最初の墓標は太平洋戦争時に破壊された。完全にあり得る、他のことが：墓はアメリカ占領軍の兵士のもの。フランス人区画に、１９００年の義和団の乱時に中国で戦死したフランス軍人の最後の安住地を見つけた。私は見つけた、ごく最近に誰かが熱心に墓標の掃除をしたのを、名前が分かるようにと。時が、さらにより大きく天候が墓には無慈悲である。

ロシア人の墓の不存在に少し心が痛む。出口に向かって進み、生の花のある少し新しい墓に出会った、ロシア語の記銘のある：「フリスチナ・ロチャルドブナ・シェルビニナ。１８７８年１２月２４日－１９６６年9月２３日。安らかな眠りを」。直ぐに分かった、

ロシア人と結婚した子の女性に、ロシアの移民達が最後の道を案内したことが。並んで、彼女の父リチャルド・フォルドの墓が、１９０３年４月１日に７５才で亡くなった。周りを見回し、ここに眠っている人達に心から挨拶を送った。

道を横断し、墓地の２番目の所に行った。そこで私は刈りたての草の匂いに出会った、ここで、中年の女性がゆっくりと仕事をしていた。この所に、同じくヨーロッパ人区画があった。それは最初の区画より２倍ほど大きかったが、そこには全部で五基の墓があった。直ぐに、気がついた２つの言語での記銘のある墓に：イディシュ語とロシア語：「ここにミラ・ナウモブナの遺体を葬った、１８９７年３月３日に２１才で亡くなった、天然痘で。安らかな眠りを。親友。」　長崎は大分前から、異分子にとっての避難所であった。「人民の意思」はここで大いに活動した。

他の墓碑の下には、基本的に、オデッサの出身者達が眠っている。もう重要なものは見かけることがないと見なして、グローバーの墓に向かった。グローバーは日本における有名な外国人の活動家の１人であった。ある墓の周りの半壊した囲いに私の視線が向けられた。よく保存されているオベリスクに、知っている名前を見つけた。心臓がどきりとした：それはデンビの家族納骨所であった。昔のウラジオストクの企業家として有名な。

デンビは１８７０年に長崎に現れた、当時、捕鯨業に興味を持っていた。ここで彼は正教徒の日本女性と結婚した、キリスト教に改宗した後、アンナ・ルドリフォブナのロシア名を得ていた。彼らは並の原通り（？　＊）の２５番地に家を持っていた。が、家族の多くの時間はサハリンとウラジオストクで過ごした。デンビ夫妻には４人の息子と１人の娘がいた。

１９０９年１２月２７日、アンナ・ルドリフォブナは突然に亡くなった。この時、彼女は長崎に居た、娘と一緒にオーストラリアに向かっていた、そこで、冬を過ごしたいと欲していた。夫は７年間妻より長生きをし、１９１６年１１月１５日にホノルルで亡くなった。彼の遺体は長崎に移送され妻と並んで葬られた。ここに、娘のリザ・デンビも眠っている。１９１４年、彼女はスコットランド人のエドワルド・ゴルドンと結婚した、長崎と函館のイギリス領事の。直に、彼をホノルル領事に任命した。そこで、若夫婦に、１９１６年に息子のジョージが生まれた（多分、仕事を祝して名付けた）。家族全員の最大の悲劇は、赤ん坊が生まれた７週間後に、リザが腹膜炎で亡くなったことであった。これら全てについて思い出した、記念碑と密着しておかれている石の門の所の墓の所に腰を下ろして。何時もは人のいない墓地に、私がいることに日本人は興味を持った、草を刈っている。彼は私の所に近づいてきて挨拶をした。私がこの墓標の歴史を良く知っていることに気づき、非常に驚いた。

－ここには、祖国人達は殆ど来ない、長い歳月が経った、墓地が機能してから。そして戦争があった！－彼は話した。

彼は沈黙して私と並んで立った、私の同郷人を偲びたいかのように。

14日目（8月23日）
平和公園と原爆の記憶

原爆博物館（原爆資料館）では、大きな展示物で、爆撃機ボーイング２９が広島と長崎に爆弾を投下した様子が示されていた。ここには、７万人以上の人々の証言が集められていた。博物館はアメリカ人の参加の下で創られた、これは多くの日本人に不快感をもたらした。彼らは人々に展示物を渡したくはなかった、爆撃を正当化し謝罪をすることを拒否している人々に。しかし、館長伊藤達也は同胞人達を説得することが出来た、博物館設立の重要性を。長崎市長である本島均は今度はアメリカ人に条件の下で共同することを約束した、博物館の展示物は訪問者に考えを注ぎ込むであろうと、原子兵器の完全禁止の必要性の。最初、博物館は一時的に設置された、１９９６年に、決まった住所を獲得するまで、広い公園のついた平屋の建物として。展示物以外に、そこには図書館、会議室、映写室がある。

博物館に展示されている写真の一つは、１６才の谷口純輝の骨まで焼けた背中を見せている。原爆は爆心地から約２ｋｍの所にいた彼を捕まえた、住吉地区で郵便配達をしていた。写真は病院で撮影された、原爆の他の犠牲者と一緒に運び込まれた時に。この写真には興味を引く歴史があった。１９６８年に、７１才のアメリカ人ジョー・オドンネルがこの博物館を訪れた。彼は１９４５年９月に、アメリカ海軍のカメラマンとして長崎で働いていた。少年の写真を見て、彼は思い出した、どのような状況下でそれをなしたかを。生きていることを知って非常に喜んだ。博物館員は原爆の２人の目撃者達の出会いを設定した。そして、お互いに約束した、全力で核兵器禁止の戦いをすることを。

運命の皮肉か、原爆の中心地から余り離れていない所に、日本での最大級のカトリック浦上教会が建っていた。１９２５年に設立された、６千人の信徒を収容できる。当然のごとく、教会は抹消された。戦後直ぐに、日本人のカトリック信者のために、臨時の避難所を建設した。１９５９年１１月に、新しい教会を建築した。それは元の場所に立っている、日本の開国後に、フランス宗教使節団が日本人の信者達と出会った所に。

博物館と並んで、平和公園がある。それは戦後直ぐに、爆撃の犠牲者の追憶の中で荒廃していた。後になり、修復された、日本人と他の国の住民達によって集められた資金のもとで。ここで再びロシア人の頁。チェルノビリの惨事後、長崎に、沢山の医者がやって来た、長崎大学医学部での研修のために。日本人の医者は人の治療の多くの経験を持っていた、放射線で被曝した。その経験を喜んで分け与えた。

私は見学し、心に刻んだ、平和公園の全体を。立ち去ろうとした時、中年の日本人が私に近づいてきた。上手な英語で、彼はシャッターを押すように頼んできた、有名な平和の祈りの記念碑を背景にして。

－お宅はどこから？－　耐えきれず、私は彼に質問した。

－多分、驚きのことでしょう。私はホノルルから来ました、先祖の冥福を祈るために飛んできました。私の父は長崎生まれでした。が、若い時にハワイに出て行きました。私は真珠湾の爆撃をよく覚えています、そこで彼は機械工として働いていました。日本の爆弾は直接に工場に命中しました、私達は彼の遺体さえ見つけることは出来ませんでした。戦争は私達の大家族を分断しました。私を入れて、何人かを権力は特別収容所に送った、それはアメリカ大陸にあった。同郷人のある者達はあの手この手で日本に渡り、合衆国に対して戦おうともした。知っている、１人は戦死した、関東軍の兵卒としてソビエト国境付

近で戦い。知り合いの一部はアメリカ軍への志願兵となった。長崎へのアメリカの爆撃で、私の叔父２人、叔母、数人の姉妹が犠牲となった。戦争はかような惨事として私の家族に降りかかった。話し相手は悲しそうに終わった、少し猫背になって、明るいハワイの花束を記念碑に持ってきていた、ハワイから携えてきた。

15日目（8月24日）
士官区画と礼拝堂の視察

お決まりの台風が接近しているのだが、長崎を去る日は間近だ。好天の時間を利用する必要がある。再び、慣れた経路に従って、今の山から稲佐の他の山に向かった。ロシア人墓地への通り道で、稲佐のロシア人村に献げられたプラスチック板を見かけた：口ひげのあるりりしい船乗りが着物姿の色っぽい日本人娘と一緒に草に気楽に横たわっていた、御茶屋の前の。予定では墓地の２段目の視察であった、そこは自分は将校用と名付けていた。が、その前に、綺麗な石製の辻堂を見ておきたかった、聖ニコライ・ヤポンスキイの。それは次のように造っていた、正教の十字架を持った円形屋根を、長崎の停泊地から見ることが出来るように。私は既に数日間辻堂の周りを回っていた、隙間から覗いた、しかし、その３カ所の入口は全て閉じられていた。プランには記されていた、内部には、見ておくべき２つの墳墓があると。剛心寺の日本人達を不安にさせることになるか。草刈りをしていた日本人は私の質問に顎で指し示した、家屋の方を。

－呼び鈴を押しなさい、返事があります。

人の良さそうな若い日本人女性が出てきた。扉を開けて欲しいとの依頼に対して、彼女は理解しているよとお辞儀をし、小さい鍵を差し出した。その札には、日本語「ロシア人墓地」が書かれていた。控えめな反論に対して、私は辻堂の鍵は欲しいという、彼女は再びお辞儀をし、誰かを呼んだ。直ぐに、敷居に中年の女性が現れた。優しい微笑み、知的そうな顔。司祭ソンノエ・キズの後家さんであった。

－これはこれは、貴方は私の亡くなった夫を知っていましたか？！　私はソビエト連邦に行ったことがあります。レニングラードからオデッサに旅行をしました、カフカスも訪れました。私は大いに気に入りました・・・

辻堂を見せて欲しいという願いに、話し相手の女性は残念そうに話した：

－残念ながら、何の手助けも出来ません。私達は何度かそれを開けようとしました。が、扉が錆びており、扉は開きません。

私のがっかりした様子を見て、彼女は鍵を差し出した：

－もしよければ、自分で試してみたら・・・

ドキドキしながら、扉に近づいた。実際において、最初の試しは上手く行かなかった：扉は微かな音さえ立てなかった。腕まくりをし、力を込めた。結構手間をかけた後、鉄は微かに動いた。その後、きしみ始めた。遂に、嫌々ながら開いた。内部は殆ど空っぽであった。十字架の形に作られた小さな窓を通して光線が漏れていた。辻堂は昔航行していた船のブリッジの片鱗を思い出させた。確りと漆喰が塗られた壁、セロファンで覆われた机、

蝋燭の台、角に手提げ香炉。過去がここに残っているよう。あり得る、過去がこの状態で私を待っていると決めたのかと？

床の、南の入口の敷居の所に、記銘のある板を見た：「ゲオルギイ・アレクサンドロビッチ・モルドビン。クリッパー艦ナエズドニク号の上級将校で中佐が１８８４年１１月２６日に亡くなった。」　北の入口の所には、他の板が：「アントニイ・ドミトリエビッチ・バラノフ。クリッパー艦ベスニク号の上級将校で中佐が１８８７年１２月２４日に亡くなった。」　彼らの墓標を偶然に見ることができた。永遠に残された記念館！

壁には、３枚の簡単なイコン画が吊されていた：木に貼り付けられた絵、この上なく単純な。私は裏側を覗き込んだ。最初、埃以外に何もなかった。中央のキリストのイコン画の防御（？　＊）に英語が書かれていた：「この聖ニコライの辻堂に、１９９０年１０月２１日のこの日曜日、長崎で勤行が行われた、府主教ピチリムと長司祭アルカヂエによって、その場にはロシア人と日本人が在席した。」

ピチリム大主教、船乗り達の大いなる擁護者は「長崎－旅行－９０」の国際博覧会に参加した、ソ日協会本部の共同議長として。彼の許可を受けて、博覧会での展示物には、教会の必要物品とイコン画が含まれていた、１９世紀末から２０世紀初めに、ロシア海軍の太平洋艦隊の船にあった。今や明らかとなった、辻堂はとにかく聖ニコライ、船乗り達の保護者に敬意を表して呼ばれた。が、後になって、日本の正教会はそれを呼ぶようになった、最初の正教の聖人、大主教ニコライ・ヤポンスキイに敬意を表して。イコン画の所から素早いトカゲが飛び出してきた。その目に、私は読み出したような気がした：「まあいいさ、満足した？　今日の所はこれで充分！」　とにかく、今日は充分だ、明日も見よう！

ロシ人船乗り達を覚えようと少し立ち止まった。

私の沈思をグリシャとモリコが遮った、花束を抱えて近寄ってきた。

－こんにちわ！　私達は一晩中眠れなかった、貴方が話したことを考えて。各お墓は人間の悲劇を隠していると、私達は疑ってはいない。それ故、花屋に立ち寄り、この花を買いました。

若者達に辻堂の歴史を語り、綺麗な大理石の記念碑を示した、カトリック寺院の形をした、南側に、湾に面して設置された。並んで壊れた十字架が横たわっていた。記銘が知らせていた、ここにイワン・ロマノビッチ・レベデフが葬られていると、１８４８年6月２４日イルクーツクに生まれた、第一級商人である。１８６６年3月２２日に、キャフタ（バイカル湖の近く　＊）から出て、その時以来キエフに住んだ：漢口や他の町に。日本の雲仙で終わった、１８８６年7月１５日に。他の記念碑が詳細な経歴を伝えていた。

－さて、北へ行こう。そこには、ミハイル・ミュリベルグの子供の墓がある。子供は高々２ヶ月間を生きたに過ぎない、１９０５年1月４日に亡くなった。苗字は珍しい、インターネットで､エブゲニイ・ペトロビッチ・ミュリベルグ少尉についての言及を見つけた、第１２東シベリア狙撃師団の、皇太子の。彼を１９０４年１０月２４日に、聖ゲオルギイ４等勲章で叙勲した。多分、彼はこの子供の父親か？

少し離れた所に墓標があった、コンクリート製で、よく保存されている、その上の墓碑もよく。それは証言していた、ここに３７才の装甲艦ナバリン号の上級機械兵であったニコライ・ワシリエビッチ・グリゴリエフが眠っていることを、１８９９年9月４日に亡くなった。並んで、もっと興味を引く埋葬が：４６才のアレクサンドル・ビクトロビッチ・

シェルバクー医者、中東の航海と１８７７年から１８７８年のロシアートルコ戦争の参加者である。彼はチェーホフの知人であった。１８９４年9月9日、旅行時、シェルバクは長崎で亡くなった、喉と舌のガンで。痩せたモリコは４面体の柱（？　＊）にやっと上り、本を冠として頂いている、記銘を読むために、残念ながら、水だけではなく、時も石を削っている。

３１才の中尉ニコライ・トセリの墓に、堂々とした大丸石が見えている、１８８１年２月４日に亡くなった。かって頂上に取り付けられていた十字架は飛び去った。明かだ、誰かがそれを復元しようとしたことは。が、全く上手く行かなかった。十字架は墓にもたれかかったままになっていた。日本語の案内書中の写真には、この十字架はそのまま写っている。ついでながら、シェルバクの墓では、大理石製の十字架は同じように壊れている。それは何時の出来事だったのであろうか？

３９才で海軍大佐ニコライ・アレクサンドロビッチ・アストロモフの墓、１８９４年４月５日に長崎で亡くなった、も少し壊れていた：小さい壁龕にイコンがない。それに並んで１人の子供が葬られていた、２才のアレクサンドラ・ミハイロフスカヤ（１８８８年1月２２日死亡)。驚きであった、金属製の墓碑が保存されていたのは：全く予想することが出来た、戦時にそれを改鋳に回したことが。よく保存されていた、コンスタンチン・ミハイロビッチ・ドモジロフ、フリゲート艦ドミトリイ・ドンスコイ号の３７才の上級将校の埋葬地の祈念碑が、１８８８年4月１８日に長崎で亡くなった。並んで十字架を持った小さい大理石の墓碑が、ミハイル・イワノビッチ・ドミトリエフの。彼は１８６５年１０月１４日に生まれた、ウスリースク鉄道の建設に従事した、１８９７年8月３１日に亡くなった。ほぼ確実である、この地誌研究者が長崎について幾つかの論文を公刊していたことは、無署名で。

見事に彫られた碑銘を持ったごつごつした石が埋葬地について語っている、コルベット艦リンダ号の火夫下士官ロベルト・ブラウンの。冬の航路で１８８８年5月１８日に亡くなった。石の下の土地が沈んでいた、多分、少し干し草が、遺体を見ることが出来そう。少し離れて、３８才の東シベリア狙撃連隊の佐官ワシリイ・ウラジミロビッチ・ベイランドの墓、１９０２年１０月２３日に亡くなった。

区画の片隅に、確りしたコンクリート製の祈念碑が建っている：この墓は２級巡洋艦ジギット号の船長で４５才の海軍中佐カール・ペトロビッチ・ミレルの。祈念碑は脇を向いているように見える、基本的に墓地の墓碑が湾の方向を向いているにもかかわらず。逆に、メモに納得する、クリッパー艦イズムルド号の海軍少尉ウラジミル・パブロフスキイ（１８６６年に亡くなった）の墓に違いないと。これがそうなのか確かめようがない：表のない墓碑、右の墓でも同じ、そこにはカルニオリンが眠っているに違いない。知られている、彼は日本に１８５８年にやって来た、クロンシュタット海軍の少年兵として、函館の最初のロシア領事館の館員として。彼は１８７５年8月２０日に３０才で亡くなった。

近くに、４面体の頂上を持った祈念碑が立っている、その十字架は失われている。ここに、３５才の中尉ピョートル・ペトロビッチ・ノジコフが眠っている、巡洋艦ラズボイニク号に勤務していた、露日戦争までそれほど離れていない時に亡くなった。エレナ・ワシリエブナ・アンドレバヤの墓の頭部は壊れている、ドン軍団のウルビンスキイ、コサック村出身の。彼女は突然に２３才で亡くなった。墓の記銘で、親類が詳細に伝えることは必

要と判断していた：「１９０７年６月１０日朝９時に発病した。６月１７日から１８日の夜３時１２分に亡くなった」。

－彼女は移民だったの？－モリコが質問した。

－いや、きっと将校の妻であった。長崎へのロシア人移民は後になってからだ。それもそれほど多くはなかった。残念ながら、私は正確な数についての書類を未だ見つけていない。この段に、ロシア人移民の３７才のパベル・スタニスラボビッチ・コストコの墓、１９４１年８月２１日に亡くなった、がある。多分、将校の埋葬の中に空き地を見つけた・・・

個人の航海士フェドル・イワノビッチ・クダコフ（１８６２年生まれ）の墓には、２基の壊れた錨と言葉「覚えておいて、神よ、彼の心を」が。彼も最盛期に亡くなった、１８９７年７月７日に。残念ながら、彼らの死因を突き止めるのは難しかった。死の病が誰かをこの墓地へ導いた、誰かを偶然が。が、若干の者達は生に別れを告げた。家を離れての長期の生活、容易でない海上勤務が心に痕跡を残した・・・

パレード用入口の潜り戸付近に、私達は戻ってきた、墓地を回って、一つの祈念碑も見かけなかった。が、何も信じられない、ここに全く墓がなかったことを。多分、すなわちここに爆弾が落ちた？　若い同伴者に疑問を伝えた。同意して、友人は頷いた、残っていた花束を近くに墓に置いた。黙祷した、各自の言語で。

16日目（8月25日）
日本の名所について

長崎を愛した私の同郷人をよく理解するために、長崎の名所を注意深く見学することにした。日本の旅行案内書が伝えていた、造船と漁業と並んで、観光が町の重要な収入源であると。実際において、去年は、ここへ、以前より極めて少ないアメリカ人がやって来ている。日本人自身の観光の愛着は変化を被った。もし、以前に彼らは基本的に自国での旅行をしていたならば、今では多くの者は外国を旅行することを好んでいる。それにもかかわらず、他の町の住民達は今まで、原爆記念日に長崎を訪れている。この時には、ホテルはすし詰めとなり、宿所を見つけるのは極めて難しい。

年を追う毎に、古い建物が消滅し、それとともに、古い港のたぐいなき色調も失われていることに、市に不安をかき立てている。町は段々と普通の観光地に変わっている。古い長崎の愛好者は見なしている､個々の無事に残っている名所にだけ期待してはならないと。例えば、グラバー公園、崇福寺、眼鏡橋に。１９７７年、村田昭久教授は長崎総合科学大学の建築学部と一緒に長崎の中心部と隣接地区に、３７８もの古い木造建設物を数えた。数年後、彼は見いだした、それらの内の３分の１（１０７件で３１％）は取り壊され、住居や他の現代的な建物に置き換わっていることを。しかし、無事に残っている物さえ、大半でその初期の外見を失っていた。教授が書いていた、手すりや狭いバルコニーー町の中心でいろいろな祝日の行進を眺めることが出来るーを持った古い建物は、長崎にとって特徴的であった。それらの保存の手段を講じなければ、町は観光客にとって魅力を失ってし

まうと。

長崎の歴史はヨーロッパとの貿易と密接に関係していた：１５７０年に、長崎を貿易港として開港した、外国人に許可を出した、基本的にポルトガル人に、商品の交換のためにここに立ち寄ることを。この事により、長崎は日本にキリスト教を浸透させる窓となった。１５８７年に、豊臣秀吉はキリスト教を広めることを禁止する決定を行った。2月５日に、京都、大阪、堺から連行した２５人のキリスト教徒を死刑とした。彼らの中に、６人の外国人司祭もいた。彼ら全員を西坂の丘に磔とした、これが日本におけるキリスト教迫害の始めとなった。１８６２年に、ローマ法王ピイ９世が苦難者達を聖人の列に加えた。１９６２年に、長崎でのこの出来事の１００年を期して、２６聖人のブロンズ製の記念碑が創られた。淺浮き彫りは刑死したキリスト教徒を描いている。彼らは侮辱より死を選んだ、キリストのために。彼らの名誉として、浦上聖堂が建てられた、未だに２６人の受難者の教会と呼ばれている。

キリスト教の受難者の最初の記念碑は、カトリック教の大浦教会であった、フランス人の司祭プチジャンによって１８６５年に建設された。ここには少なくは無いキリスト教の聖物が保存されている、その一部は日本におけるキリスト教の迫害を取り上げている。教会の内部に立ち入るためには、３００円を支払う必要がある。この教会はゴチック様式の日本では結構古い木造の建築物である、フランスから運んだ綺麗な窓を持った、国によって保存されている。それはグラーバー公園から歩いて数分の所にある。この寺院についての言及は１９世紀の多くのロシア人旅行者達のメモ中で出会える、それから余り離れていない所に、ロシア領事館があったので。

寺院の周りの小通りをぶらつき、ガラス通りで立ち止まった。そこで素晴らしい土産を見つけた！　本当に沢山のガラス工芸品を、ヨーロッパの芸術の。この芸術を日本人は徳川時代にものにした。製品の値段は２５０円から１０万円以上と様々。ごく小さな中西川が流れている長崎の古い区画に、散歩できるカ所が多い：静かで狭い横断歩道、綺麗な石盤で確りと舗装された、独特の造形と綺麗な花壇を持った。東方風に、風変わりな石の橋が小川の両岸を連絡している。特に素晴らしいのは眼鏡橋である。その支持部と欄干部は水に反射し、巨大な眼鏡の枠のように見える。多分、１８７４年１月に、海軍中佐シャフロフを船長としたコルベット艦バガチリ号の船乗り達はここで大火事の消火に参加し、町を救った。

17日目（8月26日）

大浦国際墓地　　（長崎港の東岸、グラバー園、大浦天主堂に近接　＊）

私は長い間､凶暴な革命家ニコライ・ルセリア・スジロフスキイの運命に興味があった。私はサンフランシスコの古文書館で彼の痕跡を探した、ハワイ諸島の彼の元農場で、同じく、ホノルルで。そこにはハワイ議会の初代大統領カウカ・ルキニの家があった、ハワイ人達がルセリと呼んでいた。この冒険主義者の経歴について、解明を試みた、古文書館のわずかな資料を研究して、現在、ロシア連邦の国立古文書館に保管されている。ルセリ・

レオカヂイの妻が長崎に葬られていることを知った。しかし、何処に？　それなりの参考文献を掘り返して見つけた、大浦の国際墓地がそれらしいと。他の国からの出身者達が住んでいた地区に隣接している。それは開かれた、１８６１年にイギリス領事館が日本政府と交渉を始めた後に、外国人居住地に並んで国際墓地を開設することについての。１８８０年代末まで、満杯にならない間。今日、そこには２８３基の墓がある。最も早い埋葬は１８６１年6月２１日に行われた。

この墓地は旅行案内書には示されていない。これを見つけるために、駅に駆け込み、案内所の女性と交渉することになった。最初は、彼女らは自分の参考文献をぱらぱらめくり、肩をすぼめた。が、遂に努力の結果求めていた物件が見つかった。５番の電車に乗って、終点まで行った。長崎では典型的な狭い通りを若干の人々が行き交っていた。今日ではこの地区は大浦の名前で知られている。その建設は１８６０年の夏に始まった。外国との貿易のために日本の開国後直ぐに。そこは外国人のために予定された所であった。段々と地区は栄えていった、沢山の家屋が建ち並び、ヨーロッパ式で造られた、自前の港「ブント（？　＊）」も持って。

案内板が川上町の方向を教えてくれた、そして私は目的地にたどり着いた。語ることは出来ない、この墓地が旅行者達に好まれる場所の一つに数えられるかは。墓地は若干廃墟のように見える、正面には鋳造した金属格子が残っているが。墓地は何段かで出来ている、５段か６段で。墓をゆっくりと巡り歩き、墓碑を注意深く観察した：突然に、ロシア出身者の最後の安住の場所を見つける。幾つかの墓標は驚くほど似ている、稲佐のロシア人墓地で見たものと。コンクリート製の大きな板、それに確りと漆喰が塗られている。明かである、これら全ては同じ職人の手で造られたのは。

全ての段は、空っぽのように見える。多分、墓は存在している、が墓標が残らなかった。木か他の当てにならない材料で造られた？　フォレスト、グレイ、フェルソン・・・　誰が彼らを今覚えているのか？　再び、稲佐と同じように、沢山の錨。直ぐに分かった、海の港にあったものであることが。錨が刻み込まれ、墓の石のブロックの上に名前ステファン・マノグを持って。船乗りだ！　同じようなオベリスクは３台数えた。男性の彫像を持った高い台に注意が向いた。スコットランド人の海軍技師が自分の同僚の記念としてそれを建てた。祈念碑の周りには、青色の帆が描かれた綺麗な花瓶に生け花が。アメリカ人水兵の墓には独特な祈念碑が、１８８５年に亡くなった、２人の人物像、片手を頭の後ろへ、他の手を柱の後ろに。

墓地の調査をする誰もが知っている、墓碑銘がどれほど大事かを。墓碑銘は多くのことを語ることが出来る。墓の一つに書かれていた、ここにドイツ領事の秘書コーリング（１８５０年１１月１２日－１８８８年4月１８日）が葬られていると。この国の外交官達はしばしばロシア帝国の代表団の職務を遂行していた。デンマーク人のコーネリス・フォックは３３才で、長崎医学病院学校の校長となった。１８８１年２月の死亡が輝かしい出世を中断させた。更に１人の有名人。イタリア人歌手アゴスチノ・パグノニ、彼の名前は絵は多くの音楽愛好家に知られている。１８８４年、彼は７０才で長崎で亡くなった。思われる、長崎の地方研究者は、多くの人々についての興味あることを話すことが出来たと。

コンクリート製の錨、図案化した波、十字架の形をした舵輪。幾つかのオベリスクや碑銘で更に何かを読み出すことが出来る、が、何年かしたら、全ては永遠に忘れ去られる。

多分、日本人は埋葬者の登録をした、ここに誰が眠っているかを書き留めて？　ない公算が大きい。言ってはいけない、全く秩序が支配していると：しばしば、壊れた漆喰の破片でつまずく。国際墓地の上の方に日本人墓地が見える。それらは、いつも通り、理想的な状態にある、全く分かる：それらを親類達が世話をしている。

残念ながら､私はニコライ・ルセリア・スジロフスキイの妻の墓を見つけられなかった、他のロシア出身者達のも。全てに哀悼の意を表して述べた：「安らかに眠れ！」　そして、大浦、下り松地区を散策に向かった。湾から大浦川の南岸まで延びている。下り松という自分の名前の通り、下り松は川に沿って松の木立があるに違いない。かっては、ここに、長崎ホテル､香港銀行と上海銀行の支店があった。これらは大きくて綺麗な建物であった、西洋式に建てられた、町の名所でもあった。

18日目（8月27日）
嬉野温泉

新聞ウラジオストクには、１９世紀末から２０世紀初めまで、長崎の歴史の頁のロシア人についての言及が少なくなかった。日本への旅行を前にして、全ての綴じ込みファイルに目を通し、そこに温泉についての多くの報告を見つけた。そこへは富裕な市民達が休息に出かけていた。特に武雄（たけお　＊）と嬉野（うれしの　＊）に、長崎から余り離れていない所に位置している。武雄は蓬莱山の麓にある小さい町であり、１２００年に及ぶ歴史を有している、昔から肌を滑らかにする水を自慢にしている。この地域は綺麗な焼き物の製品でも名が知られている。嬉野では、熱水が砂岩の割れ目から流れ出し、お茶も栽培している。約６０軒の旅館、泉源の周りに造られた、は通年で、愛好者達に熱い温泉を提供している。

過去に書いていた、「武雄での生活は非常に賑わっていた、早朝から夜まで、風呂に行く人と戻る人の波が続いていた。旅館は来客が途絶えることはなかった。通りの人波は深夜のみだけ途絶えた。夜になると、演奏家達が出現し、通りを彷徨し、寂しい節回しで自分の楽器から音を出す。その単調さでウンザリする。

昼には、通りの様子は様変わりをする。曲芸師、子供の踊り子、年配の日本人の朗読家が出現する。後者達は、日に何度か旅館の近くの広場に現れる、女性を伴って、多分、自分の妻。彼ら２人は一日中歌うように朗読する、小さい冊子を。

旅館の女中は､嬉野では武雄と同じように女性､それも素晴らしく若い女性。武雄では、説明と会話に関しては、外国人の状態は比較的に楽であった：若干は英語で話すので。」

今日、古い温泉で何を見つけるのか？　往復の切符を２７５０円で購入し、朝９時にバスに乗った、夕方に帰宅することが出来る。大型で快適なバスには、３人だけの乗客であった。前の方の座席を選び、バスがどのように進んでいくかを追跡することにした。運転手は、いつも通りにネクタイをし、確りとした制服を着て、不断に時計を見ていた。時刻表を破らないために。日本では､何時も時刻通りに運行する。これは多くの場合において、生活を助けてくれる。

私の座席からは道が手に取るように見える。道に沿って、几帳面に刈り込まれた茂みが延びている、町の境界から大分先に進んできているにもかかわらず。絵に描かれている様な風景。雨がぽつぽつ降り始めた。４５分後、大村の町がちらりと見えた。厚い黒雲が豪雨でもって襲いかかった。左には海、椰子。道路は山道、バスはしばしばトンネルに入り込む。連続する３つのトンネルには驚いた、各々は約７００ｍ。トンネルは理想的に滑らかに舗装されていただけではなく、日本の何処でもそうであるが、よく照明されていた。電話さえあった。

嬉野へ、温泉への非常に綺麗な道路で。私が立ち寄った時、常連客は私を見分けなかった。豪華な着物を着た受付の女性は、私を頭から足まで覗き、町の地図を示し、温泉への道を簡単に教えてくれた。料金は非常に安かった。が、玄関では予想外のことがあった。

－私の所には、石鹸はありません。

この注言は決してくじけさせなかった：結局の所、私は綺麗になるためにやって来たのではなく、昔と現在の印象を比較するために来たので。多くの部屋は２つに分けられていた：今では希である、男性と女性が一緒に風呂に入ることは。薄い仕切りのために、女性達の声が聞こえはするが。壁のモザイク画は、太鼓の音楽付きでの茶会を描写している。窓は鳥居の形をして通りに面している。通りは静かで、再び雨が強くなっていた。上の方には畳付きの休憩室がある。下の方には食堂が。多分、昔は全く違っていた。１００年前にはウラジオストク出身者達は嬉野にないことを残念がった、熟練した医者の手助けが。が、現在ではここには医療センターがある。思わず考えた、私の同国人達はここへ休息と治療にどのようにやって来たのかと。薬効のある水が病気から救う、という期待して誰かが自らを慰めたのか。残念ながら、長崎の墓地の石碑は逆のことを語っている・・・　ロシアの問題、将来のロシアについての争論はどこか遠くに残された。私には思われた、我々の英雄達が今にも温泉のドアを開け、入浴するように。立ち寄らなかった・・・

嬉野の観光図には、キリスト教墓地が示されていた。私は探しに出かけることに決めた。紙の上では非常に近いように見えた、行動の範囲内と思われた。出会った人に聴きながらそこへ行けるだろうと。段々と町から離れていった。旅行者、日本の旅行案内書を信じてはならない、道を通りがかりの人に尋ねてはならない！　日本人は何時も注意深く耳を傾ける、が、何も知らないとは、決して白状しない。「知らない」と言わないために、大分遠くを伝える。墓地までたどり着けなかった。最後のバスに遅れることを危惧して、町に戻った。長崎での夜をメモの整理に従事した：ばらされた事実資料の山は考察と分析を要求した。

19日目（8月28日）
ヤシコフを探して、警察署への「連行」

昨晩、広大なインターネットのサイト「親類を探す」で、掲示を見つけた、私が興味を持った：「従兄弟の兄弟姉妹を探す。彼らの名前は、クラブジア、リュボフ、ワレンチナ、ジナイダとイワン。彼らは日本に住んでいた、長崎に。知られている最後の住所：長崎、

南山手、２２番地。ヤシコバ・クラブジア・セメノブナ、１９４１年生まれ、７０年代に大使館で働いていた、１９８４年まで、何時もモスクワに来ていた。その後、連絡が途絶えた。チェルニャエバ（ヤシコバ）・ワレンチナ・イリイニチナ。モスクワの博覧会で最後に見かけた」。

ヤシコフ家の苗字を私は知っていた、この一家の家族を見つけるのは簡単では無かった。これ故、私は朝から長崎の警察署に向かった。日本の警察とは良く懇意になっていたので、知った、彼らは何時でも手助けの準備が出来ていることを。サイトはヤシコフ家の最後の住所を教えてくれた：南山手２２番地。厳しい住所システムが存在しているロシアやアメリカで家を探すことは、特に苦労をすることはない。日本では、全く違う。通りには名称がない、家の番地はその配置に全く対応していない。その起源は封建時代に遡らなければならない。当時、家屋は藩主の住居の周りに配置された。日本人自身が認めている、郵便局員と警官だけが必要な家々への道をこっそり教えることが出来ることを。

－その通り、その通り－　感じの良い女性が語った、警察署で。

－今、こっそり教えます！・・・

残念、最初から上手くは行かなかった。更に２人の勤め人がこっそり教えてくれた、ついでながら、制服を着ていないで、民間人の。彼らが上手くやれないことを見て、更に２人の男性警官が近づいてきた。１人はコンピュータの所に座り、もう１人はネット電話をかけ始めた。

－その通り、私はその様な名前を思い出す。彼はロシアから？

電話も地図の注意深い精査も無駄であった。女性はヤシコフ一家が住んでいた地域の警察に電話をすることにした。新しい質問が始まった：何時、誰が、何故・・・　その後、返答があった：

－いいえ、ここにはその様な人達は住んではいない・・・

予想外に、ことは公的な展開となった。私にソファーに腰を下ろすように促した。直ぐに私の所に刑事、中年の男性が近づいてきた、その外見が語っていた、彼は機関と関係していると。笑みがなく個性のない顔をした人物、若干生気を失った目をした、が、貫くような鋭い眼差しを持った。思い浮かんだ：大島（？　＊）。再び質問。刑事は全てを書き留めた、その後、私の書類を要求した。粗忽者、日本での生活のための登録証を持っていなかった。明日持って来ることを約束した、が耳にした：

－君の旅館に行く方が良いであろう。

やって来た。私の相棒は部屋にはいなかった、が、注意深く登録書を確認した、直接当たってみないでその番号を書き留めた。最後に、大島さんは約束した、ヤシコフ家の究明に努力すると。多分、私は疑っていたが、何かが分かるであろう。日本の警察に、その様な探査は必要なのであろうか？。

20日目（8月29日）
再びロシア人墓地へ：
3番目の区画、露日の恋愛の話

それ故に、私の頭の中はヤシコフ家のことだけであった。朝から、稲佐の墓地へ、地味な碑銘を持った祈念碑へ立ち寄った：「ここに神の僕であるセメン・ニコラエビッチ・ヤシコフの遺体が眠っている。１９５８年１０月２７日死亡。年齢６２才。１８９６年２月１６日に生まれた。チェレムシャン村」。燈明と萎れた花は語っている、誰かがこの墓を訪れたことを。ヤシコフの写真を見ると、人が良さそうで微笑みを持った顔、ロシアの農民の。それと並んで、もう一つのロシア人の墓。オベリスクには赤色をした正教の十字架。日本の風習では、これは示している、墓は生前に建てられたことを。多分そうであろう。長崎の古老であるステパン・イワノビッチ・シリャエフは１９５４年５月４日に、７６才で亡くなった。

蝉のせわしないなき音、鳥のさえずり・・・　お互いに邪魔をしていそう、何かを知らせている、人の目から隠れて。といっても、それら無しに、全ての心を感ずる、ここに残っている人達の、祖国を遠く離れた、永遠に。

－漸く着いた。－　背中の方から、グリシャとモリコの声がした。手には、再び花を両手で抱えていた。

－今日はなにから始めようか？

大きな椰子の所から始めた、この墓地で最も綺麗な墓の内の一つを殆ど覆っている、アンクデノバヤの。１９１９年１２月１９日に長崎で亡くなった。日本人の彫刻家は大きな大理石の十字架で２つの人物像を分けていた：髭のあるロシア人男性、大きな錨を持っている。そして、日本女性、着物姿で肩に鳥が止まっている。基台には墓碑銘が綺麗に見えている：「徳の高い人であった、悪徳には慈愛で応じた」。アンクデノバヤの名前には、長崎におけるロシア人年代記で一度ならず出会った。

この墓の右側に、２基の無名の墓石が見える。近くには、２つの同型の地味なオベリスク：海軍省の少将ニコライ・アンドレービッチ・エグノフは１９２４年１０月１８日に６２才で亡くなった。彼の娘、アンナ・エグノバは１９２３年２月１５日に１８才で亡くなっていた。確りとした祈念碑はゲオルギイ・パブロビッチ・ナパルコフの墓を飾っている、彼は１９２０年８月２６日に６９年の人生を終えていた。歴史的資料から分かる、長崎に沖仲仕会社「ナラルコフ＆コー」があったことが。

番号２０９～２１５の墓は、一列に並んでいる、同じ鎖で囲われて。ここに、露日戦争の犠牲者が横たわっている。語るのは難しい、これらの墓が始めからこの場所にあったのか、それとも他からここに移されたのかは。ニコライ司祭の日記で、この出来事についての証拠に出会える。特に、彼はチクミ村－島根県の境港から余り離れていない－の無名の将校の墓について書いていた：「ムメ武田（医者の妻）・・・は自己負担で彼のために高さ６フィートの石から出来た祈念碑を建てた。彼女がこれをする時、近隣の住民達はこれに関係することは都合が悪かった：あざけるように、軽蔑するように。しかし、今ではこれは全く変わった：埋葬者達に花やお菓子、供物を持ってきている、神道の墓地でなされているように。何が理由なのか？　歯痛に悩む人は見つけた、ロシア人の埋葬者はこの病を治してくれることを－そのためのそれを尊敬する。ムメ武田が語っている、そこから遠くない、ノイ村に更に２人のロシア人が葬られ、ノナミ村には更に１人。彼女は彼らのために墓を造りたがっている、もし彼らが長崎に移されないならば。言うことが出来よう、

更に、２つか３つの墓を見つけることが出来ると」。

大理石のオベリスクは伝えている、エカテリナ・マカロブナ・フェドセーバは１８４５年１１月７日に生まれ、１９１８年２月１９日に亡くなったことを。並んで、ワシリイ・グリゴリエビッチ・フェドセーフ、多分、息子、（１８６３年３月１日－１９１８年１１月１１日）、数ヶ月間母より長生きをした。この名前は著名な文学者で海洋画家で船長ドミトリイ・ルフマノフのメモで出会える：フェドセーフはロシア人の機械技術者であった。１５年前に、病気で志願艦隊のある蒸気船から下りた。長崎に住みつき、日本女性を妻とした。彼はセバストポリ造船工場の組立工から「普通の人間」となった、これを隠さなかった。日本語と英語をよく話せるように勉強し、良く自分の専門と修理業を知っており、日本の船舶修理工場とロシアの軍船と志願船の船長との間の仲介業に従事した、長崎でドック入りし修理を要する。彼は悪くはない生活をした、自分の庭付きの家を持ち、町を隅々まで知っていた。ある夕方、フェドセーフが私の所に現れた。この人物は４５才であった、だいぶ白髪となったブルーネット髪、アメリカ風に刈り込んだ口ひげを持って、大声であった」。

フェドセーフ家と並んで、ハバロフスク出身者のセルゲイ・ニキフォロビッチ・ズバイコフ（１９１３年２月５日死亡）、その後ろに、タイシア・クズミニチナ・ソリャンニコバ（１８９７年１０月２８日－１９１２年５月１８日）。１９１２年３月１９日、長崎で蒸気船オホーツク号の指揮官で遠洋航海の船長ビリゲル・イワノビッチ・カクチン（１８６８年５月２日生まれ）が亡くなった。墓碑銘「眠れ、我が友よ、不平を言わず、将来の再会を待て」は妻か女友人が書いたようである。

大きな丘の上に、露日戦争時の友軍の墓。その上に４本の木、乱雑に植えられた。更に並んで、幾つかの目立つ埋葬、当時の。１９０５年５月１４日－１５日における対馬海戦で亡くなった、艦隊の装甲艦シソイ・ベリキイ号の上級医師ベニアミン・ニコラエビッチ・ポドベドフ（１８６６年１０月７日生まれ）と機械技師兵団長、湾岸防衛の装甲艦アドミラル・ウシャコフ号の上級機械兵フェドル・アンドレービッチ・ヤコブレフ（１８７２年６月６日生まれ）。１級巡洋艦ドミトリイ・ドンスコイ号の船長海軍大佐イワン・ニコラエビッチ・レベデフは１８５０年８月１２日に生まれた。対馬海戦で、夜に重傷を負った。他の乗組員と一緒に島に運んだ、直ぐに彼は捕虜として亡くなった。朝には巡洋艦は沈没した、旗を降ろすことなく。

千島海戦で受けた傷で、１９０５年５月１５日、１級巡洋艦スベトラーナ号の上級航海士将校海軍大尉ウラジミル・ウラジミロビッチ・デヤコノフが亡くなった（１８７３年１２月２１日生まれ）。１９９９年夏、日本人の鈴川雅久と松竹秀夫が彼の墓に祈念碑を建てた。この本の著者はこれに参加した。私にとって海軍大尉デヤコノフは単なるロシア海軍の将校ではない。ロシアは素晴らしい極地探検員を失った、勇気があり確りした人物を。彼の名前は生きており、各地の名前として生き続けよう、バイガチ島の岬の名前、バレンツ海とカルスコエ海との接点の名前として。

１９８５年に函館（北海道島）で、ビタリイ・グザノフの本「白ロシアからの長い旅路」のプレゼンテーションが行われた、日本語で出版された。その時、日本の外務省は著者に日本の港を訪れる可能性を提示した。ロシアの軍艦が停泊した。翌年に、再びグザノフは日本を訪れた、が、他の目的で：軍人墓地の状態を視察すること、そこに埋葬された、水

兵、兵士と将校、１９０４年－１９０５年の露日戦争に参加した。墓地は２９カ所。最も大きなものは長崎に、大津の泉、松山と函館。これら全ては放置された状態にあった。モスクワに戻り、グザノフは残されている資料を調べた、ロシア人の兵士の本当の名前を復活するために。この面倒な仕事に３年かかった、そして成功裏に終わった。モスクワで、各々の墓のために銅板を準備した。そして、１９９８年から始めて、全ての墓地を然るべき見栄えとした：復元し修復した。長崎にある古い海軍墓地の修復の資金は、ビタリイ・クザノフの手紙によるロシア大統領とロシア政府への訴えの後、割り当てられた。が、松山、泉大津の墓地のロシア人の墓は、自分たちの力で修復することになった、日本の社会団体と地域の役所の参加の下で。長崎で、グザノフは日本人の友人である鈴川と一緒になって、海軍大佐レベデフ、巡洋艦ドミトリイ・ドンスコイ号の船長、海軍大尉デヤコノフ、巡洋艦スベトラーナ号の上級航海士、達の祈念碑を復興した。というのは、原子爆弾の爆発による爆風がそれらを吹き飛ばしたので。

私は私の若い同行者達に興味深い歴史を話した。

－君らは話した、長崎の前に松山を訪れたと。そこの捕虜収容所に、水兵のレインガルトがいた。海軍学校の後、彼は直ぐにポルト・アルツル（旅順　＊）にやって来た、そこで砲艦オトバジュニイ号に勤務した。その後、満州沿岸警備中隊を指揮した。１９０４年１０月初めに、ある堡塁で彼は負傷した。その後捕虜に。日本人は軍事捕虜を特別厳しくなく面倒を見た：彼らは収容所の近くを散歩することが出来た。が、定時にはそこへ戻ってくること。ある時、温泉で２１才の若者が１６才のお花と知り合いとなった、日清戦争で犠牲となった軍医の娘と。彼らはお互いに愛し合った。この感情は軍事捕虜にとって特典として記載されていなかった。直に政治権力は愛し合う２人を逮捕した、ある期間彼らは監獄で過ごした。彼らにとって幸運なことに、ロシア人の軍事捕虜に対する体制が直ぐに緩和された、１９０５年１０月に、ポーツマス条約が批准された。中村（？　＊）が書いていた、レインガルトとお花はロシアへ行きたがった、がその後日本に戻ることを。しかし、娘の母親は、レインガルトと娘の結婚と娘のロシアへの旅行にに反対した。１１月１４日、ロシア人将校は花子と別れざるを得なかった、しかし、ウラジオストクへの短期の滞在後、レインガルトは貨物船で日本に戻ってきて、お花を訪れた。今回は母親は結婚に同意することが出来ていた、が、レインガルトが彼女に支払う条件は２万円であった。将校は「妻を買う」ことに納得できなかった。それに、当時彼にはその様な大金はなかった。しかし、お花への彼の思いは募るばかりであった。１９０６年２月、休暇を得て、レインガルトは再び日本に向かった。今回は、彼は娘の母親を説得することが出来た。彼らは神戸で結婚した。しかし、軍の命令に従って、レインガルトは長崎からクロンシュタットへ直ぐに向かうことになり、花子と別れ別れにならざるを得なかった。多分、ここのどこかで彼らは別れた、－私は話した、稲佐の方向を手で示しながら。

－それで、その後彼らはどうなったの？－グリシャは興味をかき立てられた。

残念ながら、今のところ情報はわずかしか知られていない。知られている、レインガルトはニコラエフスク海軍砲術アカデミーを修了した。第一次世界戦争では、彼はバルチック海で戦い、海軍大佐となった。国内戦終了後に、リトアニア軍に志願兵として入隊した、高級軍学校で講義をし、ベテラン連盟に参加した。プリバルチクへのソビエト軍の到来後、レインガルトを逮捕した。彼は１年ほど牢獄で過ごした。言うことが出来よう、何かの奇

跡で彼は解放された、そして、北ドイツに去った。そこで、バルチック航海学校で教授した。この将校は１９４８年に突然亡くなった。

－まあ、何という歴史！－　真理子は両手を軽く打ち合わせて、少し遅れて語った：

－が、日本の文学では他の出来事が書かれている。露日戦争の英雄の１人が広瀬武生将校であった。彼はロシア語の勉強に非常に取り憑かれていた。この目的を持って、彼は１８８７年にロシアへ向かった。そこで１６才のアリアドナヤ・コバレフスカヤと出会った。彼らはお互いに愛し合った。が、残念ながら、軍務が彼を祖国に呼び戻した・・・

グリシャが同伴者の話を遮った：

－私も下田の本「ロシアにおける広瀬武生」を読んだ。補足することが出来る。君の好きな英雄はロシア語を勉強した、諜報員に従事するために。この将校は戦略的な地区を沢山訪れた。ついでながら、海軍少将の娘であるアリアドナ以外に、彼にはロシアに他の仲の良い女性がいた。広瀬が本当に彼女を愛していたならば、彼女を連れ出すことは出来た！

モリコは相手に手を振り始めた：

－私は知っている、彼は君の気に入らなかった、軍務が愛を上回っていたために。

彼女は私に向かって付け加えた：

－私達はこの結論について始めて口論した。実際において、これはただ一度のことであった。

口論に割り込む時であると理解し、話した：

－日本に旅行する前に、私は沢山の本を読んだ。特に、ポルト・アルツル（旅順　＊）での戦争に関する本を。その中で、レインガルトの偉業について知った。本にはこの日本人将校のついての情報があった。広瀬は１８９７年から１９０１年までペテルブルグでの日本の海軍武官であった。露日戦争時、彼は日本の閉塞船団を指揮した。広瀬船長は日本の国民的英雄と見なされている、人並み外れた勇気と、エネルギーと自己犠牲において。旅順湾の出入り口の阻止時に、日本人兵卒の救助において彼は犠牲となった。

－２つの運命、更に歴史を語ることが出来る・・・

私は友達に話した、日本人女性タケについて、著名な化学者メンデレーフの孫として生まれた。多分、彼女の亡骸はこの辺りに埋葬されている・・・

再び、難民の墓。オリガ・ナザロブナ・デヤコバ（旧姓はファタロバ）はフバリンスク（ロシア？　＊）で１８９４年6月２２日に生まれた、１９４５年3月９日に長崎で亡くなった。夫もここに葬られた。墓には古くなった造花が。

鉄枠の木戸は簡単に開いた、囲いの中の墓に立ち寄ることを招いているように。墓はキラ・ヤコブレブナ・クズネツオバヤ（旧姓フロポニカヤ）の。彼女はペテルブルグで１８９４年１０月２７日に生まれた、長崎で１９３８年9月１１日に亡くなった。並んで、この家族の墓。ココチカ・クズネツオバ（１９２３年8月１２日－１９２８年1月２１日）、マリヤ・アンドレーブナ・オブセリナ（旧姓はクズネツオバ）は天津で１８７９年1月１７日に生まれ、１９１４年8月２２日にフランスのモントルで亡くなった。が、長崎の墓地へ約１年後の１９１５年5月１５日に改葬した。墓は草ぼうぼうだが、造花が備えられている。

ウラジミル・グルシュコは１９２６年1月３日に亡くなった。「眠れ、我が子よ、眠れ、お前とはもう会えない、思いがけない墓が私達を引き離した、眠れ、死において永遠の平

穏を」。ウラジミル・ニコラエビッチ・キタエフは海軍省の少将。１９２０年1月３日に６４才で亡くなった。彼の兄弟であるセルゲイ・キタエフも船乗りで、著名な日本の浮世絵の収集家。オリガ・ニカノロブナ・ドミトリエバは１９０７年8月３日死亡。墓石に書かれていた：「長崎への最初の移住者、友人達より」。残念ながら、歴史には必要であった、ここで同じ区画に葬むることが、忌まわしい体制を打倒したがった者、新しい秩序を避けた者を。

－オー、最近の花が折られていた！　しかし、日本人が萎れた花を評価すると君は知っていますか？－　モリコは叫び、綺麗な３行詩を読んだ：

特別な魅力がある
これら、嵐でしわくちゃになり、
萎れた菊に（マクロバヤの＊＊＊）

隣り合っている墓には、傷んだてっぺんを持つ柱が立てられていた。イワン・ニコラエビッチ・ゼリンスキイは日本での治療にやって来た、中国から。１９０７年3月２１日に３０才で亡くなった。ウリヤナ・イワノブナ・コバレンコの所にも同じような柱が、１９０６年１０月９日に２１才で亡くなった。ニコライ・イワノビッチ・ツオイは１９０７年８月１０日に亡くなった。ロシア語と並んで、朝鮮語での碑銘が。

－さて、６つの高い土台を見よう、何処の日本の墓地でも良くみっける。碑銘はわかりにくい。２つは、困難だが、読み出せる。残りは時間とともに削り取られている。これは古い中国人の墓地の残骸。

－私達は沢山のこと知り得た！　さて、違ったやり方で、私達の全体の歴史に関係しよう・・・

退去の時となった。私達はアドレスを交換し合い、メールを出すことを約束した。グリシャとモリコは、抱き合いながら出口の方へ向かっていった。私はこの若い人達に心から幸せを望んだ・・・

あるこの世界に
一本の花が、－
それは目には見えない、
がそれは萎れている、
が跡もなく萎れている、－
花を愛せよ！

グリシャとモリコの露日の愛の花が萎れないことを願った。

21日目（8月30日）
木村さんとのつき合い

朝、パソコンに向かっていると、ドアのベルが鳴った。そこに大島刑事が立っていた、満足した様子の顔をして。以下の事であった、日本の警察はいたずらに時間を消費しない。私はヤシコフ家の探査を諦めようとしていたが、

－ヤシコフ家を見つけることは出来なかった。が、ヤシコフを知っている木村さんの住所がこれ。

彼は直ぐに電話のダイヤルを回して、私に受話器を渡した。他方の端で。可愛い女性の声がした、彼女はヤシコフを知っており、長崎におけるロシア人の情報を差し上げることが出来ると。大島さんの助けにより会合を約束した：警察の建物で１１時３０分に・・・

結構焦っていた、予定した時間までの大分前に何があるかと。しかし、明らかに、木村さんは差し迫った会合に期待をしていた、同じく急いでいた。彼女は直ぐに外国人女性に気づき、私を呼び止めた：

－アミル（本書の作者　＊）さん？

私の同伴者（女性）は４０年前にロシアに惚れていた、が今は彼女は既に７０才、見栄えはそうではないが。ソ日友好協会でロシア語を勉強した。どうしてロシア語を勉強したのかとの質問に、彼女は答えた：

－ロシアの芸術と文化を気に入っている。今では、沢山のことを忘れたが、かって、私は長崎におけるロシア人女性について原稿を書きました。君は興味がありますか？－

－もちろん？！　もちろん！－

分かった、木村さんは長崎の興味を引く女性に関する選集の作者の内の一人であることが。彼女は女性の通訳マリヤ（１９２０年－１９９６年）についての概説を書いていた。マリアとは長崎に始めてやって来た時に私は知り合いとなっていた。余り背が高くはない女性で、冷静で知的な目をしていた。名前だけが記憶に残っており、ロシアの苗字は知っていない。彼女は何時も控えめであった。私達は一度だけ談笑した、日本人達が我々代表団をレストラン「ハルピン」での食事に招待した時に。運命は彼女を長崎にほったらかしにした、彼女はそこに残った。今では私は同情している、当時長話をすることを切り詰め、彼女の人生や先祖について耳を貸さなかったことで。とにかく、マリアは日本人の中で亡くなった、ロシア語を分からない、ロシア文化への馴染みのない。彼女を神道の風習で埋葬したと、私は推量している。

木村さんとの話し合いで、しばしばロシアの苗字がちらちらした：シェルビナ、クズネツオバ・・・　もし私がそれについてもっぱら人の噂で知っていたならば、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。私達は直ぐに印象を交わし合った、旧友のように、長い間の別離後に出会った。私が長崎市立図書館で少し働く予定であることを耳にして、私の同伴者はそこへ一緒に行くことを提案した。そうした。最初私達は書士に本を見せてくれるようにお願いをした、剛心寺とその有名な墓地に関する本を。２冊あった。最初の本は何も興味を引く内容ではなかった。２冊目が、詳細な図のついた参考書であった、非常に興味を引いた。

－複写したの？－

－問題はない。１頁１０円。－

希少本「ウロシイ（？　＊）」が私の興味を引いた。が、分かった、この本は研究部局の貴重品財団に保管されていることが、長崎市立博物館にある。そこへの途中で、私達は博物館の近くでレストランを見かけ、そこで食事を取った。スープはボルシチの味を思わせた。私達の話題はロシアについてであった：タカエ司祭について、長崎のロシア人社会に残った物について。私の話し相手は語った、しばしばロシア人墓地を訪ねており、ロシア人作家シェルバク（？　＊）の経歴を知っていると。

研究部局で、短いアンケートを書いた後に、長崎における最初のロシア人の接触の歴史についての何冊かの貴重本を注文した。本が出てくるまで待機しながら、棚にあるアルバムを見ていた。それらの中に少なくは無いロシアの本に気づいた。大きな日本のモノグラフが私の興味を引いた、著名な写真家上野に献げられた。彼の仕事の中に、ロシア人将校達の写真があった、長崎を訪れた。

その間に、薄い画用紙に貼られたニコライ・レザノフの肖像画を私に持ってきてくれた。ロール状に巻かれ、筒入れに保管されていた。私は驚いた、細部まで綿密であることに、日本人の絵描きは侍従の儀礼服の姿を描いていた。その後、更に私に幾つかの希少本を運んできた、ロシア人と日本人の最初の出会いの歴史に関する。この図書館には、ニコライ・レザノフが作った日本語辞書のコピーが保管されている。知られている、彼は熱心に日本語に取り組んだことが、ナデジダ号に乗り組んでいた日本人の内の一人「ヘデ・キセレフ」と一緒になって。彼は彼を手伝った「レクシコン（辞書　＊）」の作成において。この共同作業の結果は、２冊の原稿となった：「短い露日ハンドブック」と辞書、５千語以上を持った。後になって、レザノフはそれをイルクーツクの航海学校へ寄贈したがった。現在では、原稿の本物はサンクトペテルブルグの科学アカデミー古文書館に保管されている。急いで全ての本と原稿を見て、必要な頁を複写した。

平日が終わりに近づいた、バス停まで木村さんを案内し、私は心から親切な援助者に感謝の意を示した。私達の出会いはもう一度示した、郷土研究者と歴史の無欲の愛好者は何時でもお互いが助け合う準備が出来ていることを。

22日目（8月31日）
ニコライ・レザノフの痕跡について

直に長崎を去らなければならないことで、少し気が滅入っていた。町に慣れることができた。多分、私達の間に話切れていないことが残っていた？　全く目的もなく、古い家屋をぶらつきに出かけた、少しでもロシアの記憶が残されているような。最初は、山の頂上に登った、ウラジオストクの鷹巣山に似た、そこからは長崎が手のひらにあるように見える。もう一度、そのウラジオストクとの似ている所に驚いた。稲佐には少し煙がかかっていた、チュルキンのようであった。遠くに格好の良い橋が見えた。下山し、気がつくと、最初のロシアの使節ニコライ・レザノフが短期間住んでいた場所であった。長崎の最初の訪問時には、ロシア語で花束を受け取った、委員会（？　＊）によってだされた、長崎の外国旅客船での歓迎パーテーで。「ようこそ」の歓迎のすぐ後に、情報の標準の一セットのある普通のテキストが出てきた。しかし、最後の頁には次のような文章があった：「ロシア人によって発射された気球。１８０５年に、ロシアの使節レザノフは日本で始めて打ち上げた、紙製の気球を。この様子を見学しに、沢山の人々が集まった」。

長崎は昼の暑さで蒸せていた。明るい青空には雲１つない。頭の上で何かがちらちらするように私は感じた。多分、ロシアの双頭の鷲の描かれた気球のの陰のような、２００年以上前に、この地の上空で勢いよく上昇した。直ぐに思い出した、次の様子が。ここでロ

シア人船乗り達はせかせか動いた、自分等の原始的な装置の発射のために火を焚き付けながら、町の上空高く上がっている球を見て、地域住民達は魅了された様なことが。あり得る、すなわち、この出来事が日本人を突き動かしたことが、ロシア人との交渉のより活発な継続へ。どんな場合にも、それ（？　＊）は相互関係の確立に重要な役割を担った、偶然ではない、大分経ってから、日本人が小さい４面の石碑を忘れられぬ場所に建てたのは、気球の飛行を記念する。歴史的な出来事についての予告はロシア語でなされた。この唯一のロシア語の銘は、長崎で見つけることが出来る。並んで、金属板に、若干の他の名所についての情報、ロシア人と関係した、稲佐のロシア人墓地に類した。私は長崎へのロシア人の訪問した場所を描き始めた、が、止めた：プラン（？　＊）は略図以上であった。地図はだいぶ時代遅れであった：町の様相は急速に変わっている。

２００年で、周りの地域は驚くほどの変化を受けている。１８５９年に、ここに税関の建物が開かれた。１８６５年に、グラーバーが初めての鉄道を建設した。岸を堤防で埋め立て、湾を狭めた。今では、海に行くまでは容易ではない、以前は、明らかに海は直ぐ傍であった。５番電車が停留所に近づいてくる。それには何人かの老人達が座っていた。病人の建物である病院は全く傍にある。私の前には、８階建てのホテル「ニュー・タンダ」が立っている。私は予想する、ホテルの利用客にはより都合が良いだろうと、最初のロシア帝国の使節よりは、彼はこの岸に感じていたであろう、「塀付きの駕籠」のように。

日本では多くの者達はニコライ・レザノフを否定的にとらえていた。南クリルと南サハリンにいる日本人住民への襲撃の侍従の指示は全てに罪があった。流行作家司馬遼太郎が指摘していた：「レザノフは政府の関心に従わなかった。政治的陰謀の結果として「帝国公使」の政令を受けて、彼に委ねられた委託の中から、自分の利益となることにだけ彼は熱中した、これにおいて日本側を欺しながら（もし宿願が成功するならば、良く稼ぐことが出来ようーそんなことはわけない！）」。それにもかかわらず、日本のピクリ（？　＊）に同意することが出来ない、それは一様に黒色で塗った、北の隣人を受け入れることを日本が拒否してきた古い歴史を。それには、多くの不明な点がある。もちろん、日本人はロシア人の訪問に対応することが出来る、「タタール人より悪い招かざる客」という決まり文句に従って。当時は、多くの者は日本沿岸への接近の本当の動機を理解していなかった、「北の乱暴者」の。その後、フボストフとダビドフが南サハリンとクリルで悪さをしでかした。これら簡単では無い関係の残存物は今日でも残っている：ロシアと日本の関係は理想からほど遠い。私には思われる、両国の活動家達は過去の文化事物の理解が不十分であったと、そして現在でも。いつも、自分の野心の証拠を探している、多分、全ては極めて簡単・・　当分、タタール人顔の私は更なる理解に出かけた、長崎におけるロシア人の頁の、そして、町の風景を楽しみに。

23日目（9月1日）
食事。日本人を理解出来るのか

食事まで、一心不乱にパソコンのキーを打った。インターネットで検索をした。残念な

がら、長崎におけるロシア人について、新規で興味を引く物を何も見つけられなかった。
今日は、少し町の遠い地区へ散歩に行くことにした。時間を節約し、力をセーブするために、電車で出発した。乗客は多くはなかった、座席は空いていた。ついでながら、日本の公共輸送機関では、年寄りや障害者に対する敬いの原理が厳しく守られている。「障害者、妊婦、年配者のため」という掲示のある座席に座っていた疲れた日本人が、この範疇の人を見かけて、直ぐに立ち上がったことに、気づいた。バスや電車の圧倒的多数は特別な装置を備えていた、障害者の乗り降りを容易にするために、車いすの者の。運転手は常に周りに気を配っている。
７０才の口まめな男性が隣人となった：
－どこから？　おー、ロシアから？！　ここは気に入りましたか？　何をしているのですか？－
私が長崎のロシア人歴史を調べていることを知って、隣人は元気づいた。
－私はそれについては全く知りません、ここ生まれなんですが－　彼は話した。
－しかし、露日戦争については、もちろん読みました。ついでながら、良く覚えています、原子爆弾が爆発した日を。その時には、沢山の人が犠牲となりました。これを思い出すのは辛い・・・－
残念ながら、話好きな日本人は直ぐに下車していった。ついでながら、日本全土をほぼ回って、私は注目した、日本の住民は極めて礼儀正しく、外国人に優しいことに。しばしば、私は地図を理解しないで、通行人に道を尋ねることがあった、彼らは急いでいるのだが、何時も立ち止まり、私の質問に答えてくれた。実際において、次のようなことがあった、彼らが全く違った方向に私を向かわせたことが、行きたい方向ではなく。かって、日本人の同僚と歩いていた時、気がついた、道を知ろうとする彼の試みは同胞にその歩みを遅らせることを強いらないことに（？　＊）。最上の場合でも、彼は否定的な返答を得た：「知らない」。その様な無関心は私を非常に驚かせた、私の質問に、何時もは助けようとしてくれるのに、彼にはそうではなく、返答した：
－きみは、外国人、君の前では「自分を失いたくない」。残念ながら、気づかざるを得ない－　私の相手は付け加えた、
－時折、私の同胞達はお互いに尊重し合わない、我々が期待しているようには・・・－
日本の文化、特徴、振る舞い、日本人の相互関係については沢山の本が書かれている。それらを読んで、明らかにすることが出来る。いろいろな場合において、日本人がどのように振る舞うかを。しかし、標準は存在しているが、いろいろな状況によって修正されもする：養育によって、教育によって、移住地によって、その他。とはいえ、これは日本人に限ったことでは無い。
知らない人に対する礼儀正しさと敬意は、よく見かけられる。似た興味を持っている同僚達が日本人に援助の希望を伝えることが全く出来ないような時に。次のような場合が少なくないことに気づいた、公的な招待の旅行が、確りした予定表のある昔の旅や毎晩の飲酒に変わった時に。もし人が日本に個人的目的を持って行くならば、注意を向けられずに残される危険がある、助けも得られず。特に、これに競争が居合わせるならば。
日本ではどこでも、ロシアの格言である「自分の規則で、他の修道院に入り込むな」を思い出し、類似の日本の知恵を見習う必要がある。それは次のような内容である：「もし

隣人の理解が悪いならば、隣人とは少しだけ近づきになれ」。日本の伝統や現実の理解は本質的に、日出ずる国への訪問を容易にしてくれる。相互理解を大いに助けてくれよう。ヨーロッパ人は明かりを求め、大きな窓の家を建てている。彼らは光に近づくために、椅子に座り、机を利用する。日本では、反対に、もし太陽を避けられない場合でも、太陽の下で日焼けをしたがらない。これ故、天気の良い日には、日本人の大半は長袖の着物を着用し、手袋を填め、日傘の下で避ける。

実際において、日本においては、生活空間は極めて狭い。一つの部屋で、日本人は寝て、食べて、仕事をし、休息もする。このために、理想的な綺麗なゴザは畳、床に敷かれた。もちろん、これは足の綺麗さの要求を招く。これ故、住居に入室する時には、小さい空間があり、そこで靴を脱ぐことが必要である。確りとした規則があり、この際、靴を整頓しなければならない：必ず出口に向かって！　きっとこれは天災の場合に備えてであろう：出口でグズグズしないために。

多分、日本人において、土下座をする習慣は必要性から生まれた、低くお辞儀をする、低い戸口に行き着くために、或いは踵の上に座るという習慣から。年配者の前や、客の前で立っていることは、彼らの習慣に従えば、失礼に当たる。これ故、客を迎える時には、日本人は床で低くなる。床に座り、深々とお辞儀をする。地面に着くのではないか？

私は予想する、大きな人口密度がこの伝統に痕跡を残したと。昔から、日本人は可動の壁を持った家を建てた。その御陰で生活空間は直ぐに変形することが出来た。現代の家屋は他の構造を持っているが、持っている部屋の最大の利用の原理は以前通りである。これは日本人に住居問題の解決をさせてくれる。多くの人は満足している、我々が鳥籠と呼んでいるのに。大きな面積を夢想さえしていない。、

もちろん、現代の日本の若者達の生活原理は、極めて異なっている、年輩の人達に特有の物とは。全ての若者達には、ニヒリズムと古い権威に対する拒否が支配している。それにもかかわらず、私の見たところであるが、これはロシアと同じ形態ではない：先祖の尊敬という長い間の伝統が語っている。しかし、他の国と同じように、日本人の古い世代は若い人達の間の自殺者の増加とセックスへの大きな関心を心配している。

残念ながら、私はタバコへの日本人の愛着を完全には理解していない。彼らは良く喫煙する、スパーマーケットの商品展示場から離れていない喫茶店でも。多くのスナックやレストランも煙が充満している。小公園について話すと、休憩時間に多くの機関の事務員達がそこへやって来る。実際において、煙の充満した部屋ではエアコンが作動していることは悪くはない、これ故、喫煙者達は周りから余り叱責を受けることがない。最近では、どうやら、喫煙の状況は良い方向に変わり始めているーヨーロッパ人の影響下で、日本人達はそれをまねようとしている、宣伝の結果で。

他国の文化はその料理を通じて非常に簡単に理解出来よう。日本で生活していると、結論に行き着く、日本の食事は単純ではないと。長崎の料理は独特である、国際的な接触の発展の結果、料理は西洋的特徴を結構に取り入れた。それ以上に、すなわち、長崎から始まった、多くの食品の日本への拡散は、以前には日本人は試しもしなかった食品を：パン、チーズ、牛乳、ブドウ酒。長崎に、初めての外国人、ポルトガル人がやって来た時に、彼らの日本人妻や女中はヨーロッパ風の食べ物を準備した。その後、司祭や使節の影響下で、キリスト教の日本人信者達は海外の料理の伝統を素早く自分のものとした。ヨーロッパ人、

「南蛮人」－彼らをその様に日本人は呼んだ－の文化は、少しづつ少しづつ親しまれていった、この文化をより進歩的として取り入れ、それを決まりとすることさえ試みた。

今日、ロシアの大きな町に、日本料理のレストランを見かけることが出来る。レストランの来客を惹きつけている、早くて、異国風が、日本料理の味より。何となれば、昔から知られている、日本では最重要視されるのは、食糧の新しいやり方だけではなく、食事様式の美的な満足も。とはいえ、日本人自身の意見によれば、ロシアで提供される彼らの料理は日本らしさにはほど遠いと。ついでながら、日本におけるロシア料理でも同様なことであることは希では無い。

西洋では見なしている、交流の最善の手段は会話である、が、日本では食事と。昔は自宅に客を招くことは、特別な出来事と見なされていた。主人は本物の宴会を準備した。その時には平日には簡単な食事で満足した。長崎での最初の応接時には、充分な歓待を行った、言うならば、日本人は恥をかきたくなかったので。

会食の日には、沢山のレアリア（事物）が関係する。日本料理の通人達は強調する、料理の準備と仕上げにおいて、５つの味（塩味、甘み、旨味、酸味、辛み）と５つの色（黒、白、赤、緑、青）の調和を守ることが大事であると。これについて思い出す必要が、会席料理のレストランを訪れる時には：君の前に信じられぬほど引きつける優雅に沢山の料理を配膳する。が、君はテーブルから立ち上がる､軽い空腹を感じて。

懐石は文字通り「懐（ふところ　＊）の中の石」を意味している。この言葉は小さい熱せられた石の名前から発生している。僧侶は就業時に長時間にわたる瞑想時に腹にその石を抱いていた。次第に、この用語は質素なもてなしを示すようになった、茶会を前にして客に提供する：汁入りの茶碗、少量の海産物、木製の皿の上の野菜、同じく酒。食事と容器は季節に合っていなければならなかった。今日、会席料理のこれらの決まりは厳しく守られている、豪華な長崎のレストラン「花月」やほかの似たような所では。事実上、簡単な食事はここでは珍味に変わっている。例えば料理を取る、食欲をそそる「口取り」。これら我々のザクースカのような物では全くない、食品の一式、漆塗りの皿に綺麗に盛り付けられた。説明しよう：サラダ・酢の物：一切れの野菜と海産物、生か或いは煮物、酢の味付け、塩の、砂糖の、醤油の、ゴマ種の。一食分は極めて小さい：瞬きをすることは出来ない、これら美味しい物が皿から消えてしまいそう。

前菜の後に、ご飯、汁、マリネード漬けの野菜が出てくる。普通の食事は５２００円から１００００円まで。が、１１０００円より安く夕食することは出来ない。木製の柱と天井の下に梁のある内装のレストラン、１８１８年に作られた、は想像を驚かせる。私が興味津々に見回していると、ボーイが近寄ってきた：

この地の伝説に従うと、有名な明治維新の活動家である坂本龍馬がかって食事の時に、喧嘩に割り込んだ。刀を抜き、彼は力一杯にこのレストランの柱の１つを切りつけた。その痕跡を今日まで見ることが出来る。

私を歴史的な場所に連れて行ってくれた。私は説明を聞いて、礼儀として舌打ちをした（？　＊）。しかし、その様な所で食事をすることは、歴史屋にはとてもではないが手が出ない。同胞人の誰かが招待してくれないものだろうか、日本の地で裕福となった。

日本の一般人達は昔から食事に満足していた｡それを急いで作るだけではなく安く作る。そのようなものとして、蕎麦、天ぷら、寿司があった。それらは商品台で簡単に売られ、

かつ手早かった、食べるのも簡単であった。寿司と天ぷらの準備のために、長崎湾からの生魚が利用された。特に日本では、長くて太い褐色の麺である蕎麦が広まった、卵とデンプンを添加したそば粉から準備された。それを熱いスープで食する、或いは冷たい料理としても、細かく刻んだネギやその他の薬味を追加して。

蕎麦と違って、小麦製であるうどんは細くて色は輝いている。それは我が国の麺に似ている。もし貴君が忘れていなければそれを準備してみよう。日本のうどんのためには、粉と水を混ぜ、かき回し、長い帯状に切り出す。そして乾燥させる。うどんはしばしば熱くして食する。どんぶりに入れ、ネギを振りかける。この際において、通常はうどんを汁に少し浸す、特別の陶器製の小壺に入れられている。

数ヶ月間にわたって、長崎にやって来る辛い極暑は、市民達には熱い汁を拒否させる、それを冷やした形とする。その様にして、小麦粉から作った細くて白いパーミセリ：素麺が夏に、水を入れた大きなガラス製の器に氷も入れて売られている。カットした果物や野菜も添加して。言えよう、冬には熱いスープで素麺を食する。何とまあ頭の良い判断であろうか！

麺の独自の形であるラーメンは中国が発祥である、そこから、江戸時代末に長崎に伝わった。明治維新の後、麺は日本の殆どの港に広まった。最初は中国人の家で売られた。現在は麺は至る所で半製品の形で売られている、短時間で料理を準備することが出来る。昔から、日本には、麺を食する特別な方法が広まっていた。どんな日本人も馴染んでいる。箸で麺を掴み、それを汁に浸し、その後、大きな音を立てて口ですする。不慣れていないと、このピチャピチャ音は不快感を与える。が、その内に慣れていき、日本人より悪くはなくやれるようになる。

日本で生活していると、寿司は避けられない。これは一般的な名称である、一般的な料理の。形を整えたシャリに魚、貝、蟹、卵、野菜、チーズ、煮物を載せたもの。成分は小さいご飯の柱（にぎり）の上に置かれる、或いはご飯と一緒に海苔の中に包まる。或いは簡単にご飯と混ぜる。寿司の変形は沢山ある、それらの名称も。それらを味付けする、酢で、塩で、砂糖で、日本酒で。普通は醤油とワサビで食する。寿司を売っている小さいレストランや店は寿司屋と呼ばれる。１人分は通常は２貫からなる。箸を利用することは出来る。が、手で簡単に食べられる。薬指と人差し指と中指でにぎりを持つ、噛みつく前に、それを醤油につける。にぎりを２回か３回かむ。寿司店で注文したこの食品は、通常では結構値段が高い。が、長崎や他の町でも安いレストラン「回転寿司」が広まっている。そこでは種類別の寿司を色分けした皿にのせ、可動コンベア上に展示している。その両側に座っている来客は、気に入ったものを取ることになる。食事の終わりには、店員が請求書を見せてくれる、空になった皿を数えて。

全世界に広まり、様々な国で人気を獲得しているのはテンプラ（天ぷら）である、衣をかぶせた魚、蟹、野菜を注意深く焼き上げたもの。この食べ物は、長崎に初めて現れた。良く聞きなさい、仏教徒の１人がここに野菜を取り入れた、中国式で焼いた。が、この食品の名前は１６世紀にポルトガル語か、スペイン語か、イタリア語を借用した。

日本料理を味わった多くの者は思っている、野菜付きの肉スキヤキ（すき焼き）、麺のラーメンとカレーライス（カレー付きのご飯）は典型的な日本料理であると。しかし、これらの料理は日本にとっては比較的新しい、ただ味が日本風に近づけただけである。

昔は、中国文化と仏教の影響下で、日本人は全く牛肉を食べようとはしなかった。それ以上に、牛は労働力と見なしていた。しかし、日本へのヨーロッパ人の到来とともに、好みは変わっていった。１６世紀末に、日本語に、ポルトガル語の vaca（牛）から「ワカ（ポルトガル人の食する肉を当時の日本人はそう称した　＊）」の言葉が入り込んだ、「雌牛、雄牛」を意味する。ヨーロッパ人の住まい付近のレストランが牛肉入りの料理を提供し始めた。日本人自身は最初は珍味と見なした、非常に高価であった。１７世紀初めにおけるキリスト教の禁止以来、日本で牛肉の利用とパンを焼くことを禁止した。権力の意見によれば、それらはキリスト教の習慣に関係しているとのことで。しかし、その後、長崎は日本で唯一の場所として残った、異国の影響下に開かれた。ここでは、ヨーロッパの食事の伝統が代々受け継がれていった。その後、１８５９年に、日本は開国し、全ての人がヨーロッパの文化を学び取ることを渇望するようになった。長崎での料理方法は全国に広まっていった。グラーバー公園のレストラン「ジユウテイ（自由亭）」の前に立っている記念碑に書かれているのは偶然では無い：「日本におけるヨーロッパ料理の揺り籠」。

長崎で、私はある異国風の料理を気に入った、魚肉を半円柱形状としたレピョーシカ如きのものを。日本人はカマボコとそれを呼んでいる。魚肉は木の板の上に置かれている、蒸されるか軽く焼かれている、表面が褐色の表皮となっている。テーブルに出される前に、レピョーシカは薄切りにされる。しばしば、カマボコの上部は色づけされている、色の組み合わせは日本人には成功の象徴として理解されている。

長崎で結構な食堂を見つけるのは難しくはない、日本の他の町にもあるような。中華料理屋は最も安く、ここでは数は少なくは無い。日本人の知人の助言に従って、私は時折、良く知られている「コウザンロウ（高山楼）」に立ち寄った、新地町通りにある。このレストランは中国風の麺「チャンポン」で知られている、それは野菜の入ったブイヨンである、同じくギョウザ（餃子　肉入りの焼きペリメニ）も入った。現地の料理人を正当に評価しなければならない：彼らは素晴らしい料理を提供している。最も安い西洋料理店の１つと見なされている、「カルダ」は。そこではイタリア料理が客をもてなしている。約５０種のピザと２０種のパスタ。

歴史的名所当たりのレストランに立ち寄るように努力した：突然に、私のヒーローと関係した（？　＊）ものを見つける。ある時、夕方遅くに、レストラン「デジマ・ワルフ」にちょっと立ち寄った、湾に近接した所にある。大きな木製のテラスは客で一杯であった。町は街灯で照らされていた、港には誰もいなかった。私は隅っこに席を取り、サク（酒）を持って来るように注文した。私は白状する、日本のアルコールには自分は詳しくないことを。が、私はこの日本の飲み物がすっかり気に入った。酒は奈良時代（６４６年－７９４年）に初めて出現した。現在では、統計によれば、国内には２４００以上の会社が米からのアルコール製造に従事している。これらの会社からは多種の酒が出荷されている。時折、具体的にどれを選択するか難しくなる。国民的飲み物の中で、酒はアルコール度が１８％－１９％である。酒は通常では５０℃ぐらいに温める、が、冷やでも飲む。昔から、酒は神道と関係した飲み物と見なされ、しばしば宗教的儀式に供された。祝日には、酒を神に捧げる：それを飲み、一緒に食することは祈祷式の一部となる。

よく、酒は１．８リットル入りの瓶で売られている。が、時折、それは樽に入っている。カビツキイが書いている、「酒の入った藁を巻いた樽が歌舞伎（伝統的な国民芸術の公開

場）劇場の入り口を、多くの祭典の行事を飾っている。そのような樽を開ける儀式が立案された。何人かの大事な客、木造のハンマーの長い竿を掴む。在籍者達の歓声のもとで、上蓋を壊す。その後、皆で酒を飲む。・・・どこの国でもあるように、地域産アルコール飲料は或る秘薬と見なされ、その一定（死に至らない！）の利用は長寿を保証し、思考を活性化し、体を柔らかくする。そこから、思わせぶりの敬意、それをもって祭日の食卓を囲む。酌をする人に自分の空の器を差し出す、器を満杯にするようにと。これ故に、日本人の待ち構えている伝統的なポーズに驚くことはない、君の器をアルコールで満たすことを申し出てくる。彼は必ず待っている、君がテーブルから自分の器を引き離さない間。そして、慇懃にそれを少し持ち上げ、＊＊＊＊＊＊＊。この手順は国民的エチケットとして確りと腰を据えた。・・・次のように断言できる、以前は家の妻は客を受け入れ、或いは、自分の夫の世話をやく、夫の器に瓶から酒を注ぐ、懐で暖めた。」

日本では、同僚や友人達と飲み交わす、友情や結束を固めてくれるものと彼らは見なしている。若干の者達は気がついている、日本人はよく飲む、ヨーロッパ人やアメリカ人よりも。その際、直ぐに酔っ払う。見なされている、コップ５杯で人は酔うと見なされている。アルコールを大量に要求されるのにもかかわらず、日本では酒の狂信者は嫌われている。

オランダとポルトガルの商人達から､初めて日本人達はパンについて知ることとなった。ポルトガル人から処方箋を借用した。彼らはその様なパンをカステラと呼称した。現在では、単語と生成物は変化した：カステラは菓子製品の変種を示している、ケクス（干しぶどう入りのバウンドケーキ）に似た。これはその生まれから長崎の土産となった。長崎駅の商業施設の菓子店「フクサヤ」に立ち寄ると、菓子の多さと種類に驚かされる。ウラジオストクのために、その土産を買おうという気持ちがちらちらさえした。が、その後、振り切った：日本を回り家にたどり着くまでは、味付け菓子はホンの欠片だけが残る（？＊）。

長崎の方言には今日まで、当時のポルトガル語が結構残っている。例えば、ポルトガル語のパオからパン、ビドロからビードロ（ガラス）。実際において、今は第２の概念が大幅に広がっている、ガラス工芸品において。ポルトガル語のボロからは、日本の他のケクスの名前マルボロが生まれた、アルヘロアからキャンデーのアルヘイト。ポルトガル語のビスソイトから日本語のビスケット、等々。

ロシア人の移民達も日本料理に影響を与えていた。まず第一に、パンの人気の拡散に。ロシア出身者達は最初のパン屋を開き、ピロシキを焼いた。ソ連邦から帰還した日本人戦争捕虜達はロシア料理の宣伝に一役を買った：彼らはロシアレストランを開いた。その様なレストラン「ハルピン」を、私は何回か訪れることが出来た。西洋風、中国風、日本風料理と並んで、そこにはロシア料理があった、特に、「ボルシチ」の名の。今日まで私は分からない、何故日本人は甘い味の非常に濃い野菜スープをその様に名付けたのか。メニューにピロシキ（惣菜パン　＊）があった。ピロシキは第２次世界戦争前に、日本のレストランでも提供されていた。しかし、日本風ピロシキはロシア風ピロシキとは全く違っている。日本ではピロシキは殆ど焼いて作る、詰め物としてタマネギ入りのひく肉と「ハルサメ（春雨）」を用いる。日本人は、外国人から借用した他の料理においても、自身において大いに内容を変更した。それ故、結論できよう、他の国の料理の伝統は日本において

は日本風に会得されたと。

熱狂的なロシア人旅行者は質問する、長崎の何処で一番良い買い物が出来るのかと。第一に、私は基本的に中央商店街「浜野町」を訪れることを勧める。ここは短時間で回るのは難しい。ここには沢山の商店と商人達、最新のブチック、カフェー、薬店、その他が多数ある。注目して良い、通年で、そこでは様々な大売り出しが行われていることに。長崎の住民や多数の旅行者が結構利用している。

24日目（9月2日）
地区の墓地について

出立の時間が近づいてきている。残りの日々をぞんざいにしないために、若干の地区との別れを急ぐことにした。最初に、風頭公園（長崎駅の東南東約１ｋｍ　＊）に向かった、そこは宿舎から余り離れていない。山を登り上がると、そこには坂本龍馬の大きな像がある、明治維新の時の有名な侍である。もう一度町を一瞥する。太陽は既に稲佐山（長崎駅の西方約１ｋｍ　＊）の向こうに隠れた、その斜めの日差しは木々のてっぺんに金色のハイライトを残していた。長崎は手のひらの上にあるように私の前にある。素晴らしい光景に満足し、私は山の反対側に行くことにした。そして出会った・・・一つの大きな町、亡者の町に。この斜面には幾つかの墓地があった。予想するのは難しくはない、ここで寝ている人達は、生前には私の同郷人と出会っていたであろうことを。

野外調査に従事している歴史家の殆どは、多くの時間を墓地で費やしている、自分の英雄達の最後の安住地を探しながら。私はこれに少なくない時間を振り向けた。そのため、幾つかの町で、私はその町の有名な名所より、その町の墓地へ行く方法を知っている。日本、特に長崎では、特別な出来事である。町をより良く知るために、山を下り、いろいろな経路で戻るように努力した。私の道がごく小さい墓地らしい所を通過する度に、その墓地は住居と完全に穏やかに隣り合っていた。知られている、日本ではこの１００年の間に土地の不足となり、死者の仏教の伝統は火葬を採用するようになった。このように、現代の日本の墓地はわずかな土地に様々な石碑が群れをなすようになった、時折に極めて凝ったものも、それらの下に亡骸を納めている。目立っているは、各石碑は花を生けるための凸凹の特別なカ所を有していること。我々が摘んで適当に花束にしたような簡単な花束ではない。

花のアレンジであるイケバナ（生け花）の文化の人気はだいぶ昔に日本の国境を越えて、世界に広まった。花、小枝、その他の材料で出来た優雅な作品は相変わらず皆の注目を惹きつけている、美に目のない人の。この文化の形態の正確な起源は知られていない。が、寺の祭壇を飾るという伝統と関係があろう、壺に大きな花束を差した、６世紀に、中国人から借用した。これはスタイルの一つーリッカ（立花ー花を立てること。現在では華道の１派　＊）ーの始めとなった。それは古典的で最も格式が高いものと見なされている。一般的に、その様なアレンジにおいては、若干の木や花を利用する、中央の枝の周りの背景を造りだすために、幾つかの補足を行う。立花スタイル、この試みは自然をミニチュアで

証言することである；その様な生け花をコンパクトな庭園と呼ぶことが出来る。それは良く墓地の現実に溶け込んでいる。そこにはいろいろな形の墓石がある。墓石はこれらの組み合わせで生き生きとしている。子孫が先祖を思いやっていることに驚くだけである。花と言えば、これは人のためだけである。ついでながら、生きていてはならない。最近では、絹製の人口造化が良く出現している。それらの造化は目には本物のように見える、が、萎むことはなく、日の下で色あせることもない。

応用文化の特別な形である生け花は１５世紀半ば出来上がった。８代将軍足利義満（１４３６年－１４９０年）は文化人相阿弥（？１４７２年－１５２５年）と一緒に立花の複雑な作法を簡素化した、新しい生け花の形式を作った、名称「セイカ（生花)」を得た。ある者はそれを「テンチジン（天地人)」と称している。最も出来上がったスタイルは三角形の組み合わせである、３つの規則を基に作られる：主要（天）と、補助（地）と、従属（人)。幾つかの生け花の学校はこれらの規則を他の名称で呼んでいる。これらの規則に依存していない好みのアレンジは「死」と見なされる。時折私は日本人に気がついた、彼らは自分の家族墓の当たりをせかせかと動き回らないで、掃除をし飾る。通りから見えた、彼らはこれにより先祖に対する特別な敬意を強調するだけではない、が、この時間を先祖と共にしている。

１６世紀末に、アレンジの更に自由なスタイル「ナゲイレ（スローイン、投げ入れ)」が現れた。その出現は茶室の建築と関係していた。茶の儀式の主人によって、花の公式の組み合わせがより小さくなることによってそれが飾られた。後になり、いろいろな流派の学校が出現した、花のアレンジに各種の方法が取り入れられた。それらは２つの様式に分けることが出来る：公式のものと自然のものに。

組み合わせを構築する際において、花の固定にはいろいろな方法を利用している：木の栓、挿し木か針金。ついでながら、その価値は花より小さくは無い、それらが置かれる容器がある。これは一般的な用語「カキ（花器)」を意味している、それは花のための花瓶、駕籠、容器等を意味している。寓意的には、それらは「チ（地)」である、そこに「人工的な手段」によってあれやこれやのアレンジが置かれる。

何か特別な組み合わせを持つ手の込んだ花瓶に気づくたびに、誰もそれを連れ去ろうとしていない事に驚く。先祖の記憶は他人にさえ、各日本人にとってタブーである（？　＊)。かって、記念碑の代わりに驚くほど繊細に造られた犬の大理石の彫像を見かけた。遠くからは私には思われた、その犬が頭を振っているように。近づいて、触るのにはリスクがあった：とにかく頭は動いた、このような人工物を設置した、充分に権威のあるギャラリーの所有者達は、墓地に、よく考えなかった、それはどこへでも走り去ることができると。もちろん、時間と忘却の痕跡を日本人の墓地は帯びている。が、しばしば、苔むした石碑においてさえ、荒廃の痕跡は目立っていない、その様相は良く語っている、尊敬すべき先人について良く語っているのが。

私をしばしば驚かせた、日出づる国におけるロシア人の墓の保存状態が。墓の大半は露日戦争時に関係している。宗教では日本人は中国に似ていそうである、が、墓に対する関係は若干異なっている。ロシア人の墓の保存状態は、勝利者の特権？　多分、Ｂｃｅ　ｄｅｌ　ｂ　ｔｏｍ、ｃｔｏ、私達はそれにもかかわらず隣人？！

その間に、曲がりくねったコンクリートの道は私を連れて行った、過去へ、私にそう思

われた。墓石の１つで読み出した、ここに長崎元奉行が埋葬されていることを。彼は１８０８年にイギリスの船フエートン号を見逃した。かわいそうな人、彼は切腹した。

墓地を後にして、私はごく小さい小屋のある路地に入っていった。内庭には立ち寄れなかった、どのように飾られているか見れなかった。が、ようやく、壺に普通の花、盆栽、と生け花。が、最も自然なアレンジであるナゲイレ（投げ入れ）。このスタイルの組み合わせにおいて何の人工的手段も、ワイヤーやクリップも使われていない。花を特に確りした花瓶にアレンジしている、それを軒の下に吊している。これらの組み合わせにおいて、自然の直接のまねをしないようにしている、が、象徴的な反映を、あれやこれやのその状態の。

もちろん、長崎にはモリバナ（盛り花）のスタイルは流行っている、ヨーロッパとの接触の影響を反映している。日本がヨーロッパ諸国との交流を確立した後に、そのスタイルが生まれた、日本人住み家の変化が招いた。アレンジのための容器の選択において、表現の本質と自由は盛り花において特徴的である、基本において。第一に、３つの規則があるが：天地人。その様な組み合わせの独特的な特徴となっている、平らな容器の使用が。その内側に、金属針付きの基台がある。花や枝を差す。

花のアレンジの仕方は数が多い。言うことが出来よう、現在まで３００年以上も続いている各生け花の学校はそれぞれ独自のスタイルを持っている。それらのスタイルは若干の現代の要素を取り入れた過去の伝統に支えられている。もちろん、時間は全く足りていない、日本文化を良く理解するためには。そこでは神道と仏教の見方が極めて奇妙に入り交じっていた、国の複雑な歴史と地理とも関係して。もし、日本人が古代から自然の大変動において死を迎え入れる準備が出来ていたとしたならば、驚く必要があるのか？　死は日本人を全く驚かせなかったことを、戦闘時において。石の単純さに日本人は永遠を見いだしている、そこに心が隠されている、自然への接近、生命の鼓動・・・・

25日目（9月3日）
神社とお寺について

１日に２回、自分の部屋から野外調査に出向いた。部屋に戻ってきた、どこかのお寺の傍を通るようにして。山の斜面全部にお寺が散らばっていた。多くは小さいものであり、山を取り囲んでいた。寺の領地を通り抜けないと他の寺に行けないことも。当時、イワン・ゴンチャロフは気づいていた：「我々の概念に従って、寺は全くの寺である、と思ってはいけない。周りだけではなく、家屋を支配している建築関係において。否、我々流では、これは百姓屋、他のより少し大きい、少し高い屋根を持った、あるいは、時の経過で灰色になった大きな東屋、古くて荒廃した庭を持った。当然だ、ケンプフェル（？　＊）がそれら多数の寺を数えたのは：高い所に沢山ある；望遠鏡なしには見られない、岸に近づけるであろうか、我々がこの湾でしたように」。

沢山の寺は印象を作り上げている、日本人は本当に信仰深い民族であるとの。実際には、それらを全体として宗教的と見なせるのであろうか、彼らはしばしば仏教の、神道の、キ

リスト教の寺院を訪れ、各自の家に祭壇を持っているにもかかわらずに。直に、これは古い国民的伝統となった。統計が証明している、いろいろな宗教の信者数は日本の住民数の２倍であることが。このように多くの人達は幾つかの寺院を訪問している。

昔の日本人は、スラブ人と同じように、自然を崇拝していた。自然現象を亡き人の意志と考えていた。国家の創設後、日本人は神々を体系化した。そのトップがアマテラス・オオミノカミ（天照大神）。このようにして、段々と宗教のシンドウ（神道）が形成されていった。

通常の神道の寺院であるジンジャ（神社）は幾つかの建物からなる：神社の主要な建物は（ホンデン）本殿、ハイデン（拝殿）。同じく、聖なる門としてトリイ（鳥居）、清浄を象徴している。見なされている、それらの御陰で、神社内は何の不浄も入れないと。鳥居は、神道と仏教の違いの基本的な違いの１つである。

１８８０年に日本を訪れたクレストフスキイが書いてた、「とにかく、鳥居の存在は、聖なる場所に接近したということの必須の指標となっている。これは聖なる門である。聖なるものを拝みたい通行人はそれをくぐらなければならない；鳥居は厳格な形状を持っている；違いは大きさ、材料である。形には違いはない。鳥居は大半は木製である、時折石製、時折ブロンズ製或いは銅板をかぶせたもの。その聖なる場所の意義と富次第である。鳥居は２本の柱から出来ている。少しお互いに傾き近づいて立っている。上のある高さには２本の横棒が連結されている。その内の下の横棒は、真っ直ぐで平らで、２本の柱を貫いている。上の横棒は少し太く、両端は空に向かって少し曲がっている。自らそれを飾っている。横棒の間には、約２フィート弱の隙間がある。鳥居の大きさによるが、両方の真ん中に、角形のものがある。それには時折板が固定されている、模様があり彫刻された石の枠の。そこには解説文か祝詞らしいものが書かれている。幾つかの社或いは礼拝堂、いくらかの綺麗な小さな林に似た孤立した場所、古い枝の多い木、泉、崖或いは石、苔と這うような植物で覆われた場所は各自必ず自分の鳥居を持っている。とにかくそれらは宗教或いは鬼神上の伝説と関係している。鳥居の力で、それらの場所は聖なるものの崇拝或いは迷信深い恐れの対象となっている。希では無い、聖なる場所へ連続した鳥居が導いていることが。無意識に思い出させる、ヨーロッパ人の旅人に、ギリシアの神殿の門のアイデアを。

神社の重要な違いの１つがもう一つある。稲藁製のロープであるシメナワ（注連縄）。入口の前に吊され、清新さを具現化している。このロープには、白い紙の房ゴヘイ（御幣）が固定されている。神社の入口で悪魔を妨げる。その様なロープで新年を前にして飾る、若干の日本の家では。しばしば、神社では預言書を販売する、オミクジ（お神籤）という。それは文字通り「神の宝くじ」を意味している。小さい紙片に、預言の短い説明が書かれている、成功や病気などの不幸の程度を示す。神社を訪問する皆は神道の神に個人的な願望をお願いすることが出来る。

宗教の神道は複雑な発展の経路を辿ってきた。１８６８年の明治維新の後、第２次世界戦争の終結まで、神道は国家思想であり、日本の全国民にとって、信仰に関係なく必須のものであった。ロシア移民の中で、満州に住んでいた、日本に占領された、時々、深刻な不満が生じていた：正教徒は断固として自分の寺社でアマテラスを賞賛することを拒否された。

幾つかの神に頭を垂れている神道信者と異なって、仏教信者の主たる対象はブッタである。多くの日本人は規則のごとく毎朝、ブッタのために家庭祭壇にご飯と水を献げ、祝詞を唱えた。長崎の勧善寺は仏教の支派である西本願寺に属していた。この宗派はかってウラジオストクに日本流の礼拝堂を開いていた。

ゼン（禅）は本質において仏教である、ゼンシュウ（禅宗）という。禅宗はゼンナ（禅那）の言葉からの略語である、サンクリスト語であるｄｈｙａ：ｎａからの転写、で「瞑想、塾考、集中、その他」を意味している。最初、禅仏教はインドで生まれた。自己鍛錬の方法と規律として。自分を内部から調べることとして。初めて禅仏教の思想と日本人との出会いは７世紀のドショウ（？　＊）修業僧による。が、数世紀が流れた、その教えが日本人に広がるまでに。布教者の主張によれば、禅仏教を、仏教の他の異種として理解してはならない、禅仏教は全ての宗教の根源であるので。これにおいて、その道の通は主張する、禅は哲学であり、宗教の上に立ち無神論の特徴を帯びていると。

この経過に、深い沈思黙考が特徴とされる。それは鋭敏な瞑想でもって達成される。この際において、認識の道は間違いや罪から解放される、苦悩からさえ。その様な頭脳の明晰は個人の直感の助けによってだけ獲得することが出来る。が、何の内部的なものの影響下ではなく、ここには救世主の思想の場所はない。結果の達成のためには、瞑想の特別な方法が必須である、足を交差させた。それはザゼン（座禅）と称する。禅仏教は日本の文化や芸術に大きな影響を与えただけではなく、日本人の特徴にもそれなりの。

仏教寺院である大音寺をちょっと見ることにした。かってフセボロド・クレフトスキイ（？　＊）が記述していたのと同じの。「気がつくと我々は屋根付きの主門の入口の前に来ていた、主殿を取り囲んでいる。ここに個別の小堂がある、そこに格子窓の向こうに木彫りのブッタ像を見る、蓮の花の台座に座っている。いろいろの色に塗られた偶像、何か聖人や英雄らしい。その様な小堂と並んで、ゴザの網の下で頭を剃った年配の僧侶が売り台でお守りと護符を売っている、首に吊す、いろいろな数珠、受胎のシンボル、中国の織物からの優しく描かれ左右に開かれるリンゴや杏の優雅な形に隠された（？　＊）、生け贄の蝋燭、喫煙用の煙管、薄い餅、薄い紙製の様々な聖なる絵、救済の書と祝詞。

主玄関の聖なる門、神社と同じように、金箔や絵の具で豊富に飾られた、非常に優雅な木の彫り物で：何かの葉、花、花輪、龍、その他。柵の内側には、主堂の所には、長寿の木々、諏訪と同じような；それらの間に、特に、大きな日本松が目立っていた、曲がった幹を持つ、へんてこりんに、更にはファンタスチックに外に曲がった枝を持って。言えるであろう、これは人工的な手段で成されていると、木が未だ若い時に。中庭の道は大きな石英板で確りと舗装されている。中庭の残りの場所は細かい砂利で綺麗にならされている。至る所素晴らしく綺麗であり、全く理想的。諏訪と同じようにここの中庭は、石を削った大きな灯籠と人の長より高くて大きな古いブロンズで飾られている。喫煙者と朝鮮の１組の虎、石の台座に座っている、堂への通路を守っている。その様な虎の彫刻－狛犬といっている－は最初、朝鮮から運ばれた。そして、日本の寺社に広まった、朝鮮半島の有名な征服者である女王チング（神功皇后　＊）によって。その図像は円紙幣で見ることが出来る、政府銀行東京によって発行された。

・・・漸く我々は大恩寺の前に至った。当直の僧侶が階段を降りてきた。我々がこの仏教施設を見たがっていることを知って、案内をしてくれることを喜んで提案してきた。私

は寺の外観をじろりと見回した。もちろん、建物は木製、少し高い基台の石の上に立てた、前方に突き出している、＊＊＊＊＊＊、それは石の階段にポーチのように基礎を置いている、４本の並んで立てられる木の柱の列に。高くて大きな屋根、灰色の円柱の瓦、様々な装飾を持った、次のように積み重ねられた、これらの瓦は連続した列をなしている、節のある竹のように。自身の湾曲した斜面と少し盛り上がった凸部により広く覆っている、それを囲んでいる渡り廊下とともに建物全部を、詳細では完全に独特なタイプと芸術的に作り上げられたスタイル、完全に独自の美しさ、日本以外では決して出会えない。角には、両側に沿って正面階段、聖なるシュロが植えられている。上の方では、屋根の後ろから高い杉と広く枝を張った松が覗いている。すばらしい、綺麗、快適、全体が一体となり調和した静寂を醸し出している。認めてやらなければならない、寺の場所は、本当に詩的に選ばれていると。

案内の僧侶は私達に親切に提案した、寺院の入口のところで靴を脱ぎ残しておくようにと。その後、脇の扉の一つから寺院の内部に入っていった。板張りの床、この上なく艶々し、漆が塗られた、が厚く、弾力のある柔らかいゴザで覆われていた、極めて綺麗で極めて華麗なできばえの。彫刻され漆の塗られた木の柱の２列が寺院内部を縦に３つに分割していた。その内の中間の部分が側面より結構広い。分割された各部分には、正方形の金メッキされた格子に梁で分割された。沢山のいろいろな灯火が垂れ下がっている：紙製の、絹製の、ガラス製の、透かしのあるブロンズの奇妙な形の、簡単に円筒を重ねた物から球形のもの、菱形の、６角形－８角形の、チューリップ形の。それらの内の一つは巨大である；次は中間の大きさ、３番目は小さいもの、全てが明るい、が豪華に多色模様が描かれている、日本文字も、ガラスはくすんだ絵で装飾されている。これらの灯火、決まった位置にある、は部分的にグループ分けされている、確りしたシャンデリアのように、センス良くキリッとした花束、部分部分で独立して或いはペアで吊している。が、これら全ては観察すると確りとした対称性にある、その際、条件を必須として、全体として綺麗な絵となるために。

主たる祭壇は中間の区画の奥にある。祭壇の前景はいわゆる「法輪（仏教書？　＊）」と楽器が占めている、仏教勤行時に要求される。ここにはいろいろな大きさのタムタム（銅鑼　＊）、金属製皿、我々の軍事歌手が手にしているのと同じような、１組のドラ、幾つかの太鼓、非常に小さいもの－鐘に似たような金属音を出す－から、大きなもの－至る所金や染料で描かれた太鼓－まで。基台で、それらは鳴り、轟く、雷鳴のように。我々のところのチンパニーとは全く比較できない。「＊＊＊＊＊＊＊」（日本語ではリンソウ（？　＊）はどうかというと、これは同じく太鼓の一種、内部の垂直軸の周りに回転させる；その枠には聖本「＊＊＊＊＊＊」の巻物が確りと巻かれている、正に仏教の儀式。これは譜代寺の司祭長の機知に富んだ発明品である、かって中国からやって来た。各真面目な仏教徒は、この宗教のその後の師の教えに従って、毎日この「良い法（？　＊）」を読む、特にその勤行本を。それらの比喩的な言葉の中に、「法の輪を回す（？　＊）」表現によってはっきり現れている。しかし、とにかく、これは物理的に不可能である。何となれば、仏教書の注意深い読書のためには日、年を必要としない、譜代寺の司祭長、希望しないで、「良い法」の探求者はその解説者を非難することが出来、矛盾について、彼らによって打ち立てられた要求の理性のある考えを持つことを、は上手いこと有名な文句簡単な文字通

りの解釈を与えて、現実の現場で、その上純粋に機械的応用において（？　＊）。この目的を持って、太鼓型の車を考え出した、それは何回も上手く欺した、文字通り先人の要求を遂行するために。譜代寺の僧達は、自らの信心に対する褒美として、後者の程度を見ながら、後者から許可を得た、リンソウ（？　＊）を４分の１巻くことの、１巻分は本の希で、例外的な出来事、大きな慈悲の形で、車輪に１巻だけすることを許した。今日まで、これは大事な仕事と見なされている。聖書を最初から最後まで大声で読了するような。譜代寺の発明品は結構良かったので、アジア全体で仏教僧達に採用され、広く利用された。彼らにとって非常に儲かる仕事となった：僧達はリンソウの回転の権利を簡単に売るようになった、それを礼拝者に売りながら、＊＊＊＊＊＊＊＊、その他。現在では、信仰心の若干の衰退の結果、これは非常に安くなっている。信者は毎日せいぜい１０－１５セントを＊＊＊＊＊＊＊＊、いくらか多く支払う、彼に都合の良いだけ回す。」

訳注　ｒ и н с о о　この最後の「楽器」は、内側の軸を中心に回転する一種の太鼓で、「善法」と仏教の儀式の本の巻物で満たされています。

かって、有名な大徳寺に立ち寄った、ある同郷人の痕跡を探し出すために。が、私を断った：家族調書と市民調書は仏教寺院では力が及ばなかった（？　＊）、日本における個人生活の不可侵の権利故に。その時、私の注意を引いたのが並ではないキャビネットであった、その使命を理解出来なかった、説明がなかった間：これは個人的な小さい礼拝堂であった。キャビネットのドアには、家族の紋章が良く目立っている、それが属している。その内部には、先祖の名前のある板（位牌　＊）が入っている。それについてはクレトフスキーは書いてはいなかった：「主堂から、我々を小さい廊下を経て特別な別棟へ連れて行った、死者を弔っている。ここの後ろの壁のところには、横幅全体にわたって、大きくて長い椅子があった。そこから傾きの緩やかな段々が上方まで、殆ど天井まで、なんとも長い棚、下から上まで小さい位牌箱が密に並んでおかれている。この箱は高価な木材から作られている。外から見ると黒い漆が塗られている。が、内部は金メッキされ、様々な聖人の像が入っている、象牙、ブロンズ、銀、大半は木から精巧に作った。各々の位牌箱の前には小さい板に死者の名前が書かれている。

木製の階段がここから上の段に繋がっている、そこには似たような小礼拝堂がある。日本の天皇達の追想だけをしている。天皇は、神道や神の崇拝の司祭として、この国家宗教を必ず利用して何時にもかかわらず、その宗教は時代の流れと共に仏教と同化し絡み合っていった。昔から習慣があった、天皇の死後、その後家と継承者は必ず大恩寺＊＊＊＊＊にキオテク（？　＊）を送り届ける、亡くなった権威者の名の付いた石碑１組も。天皇のキオテクのほとんどは素晴らしい作品である、驚くほど繊細で巧みな仕事。これはそのような博物館である、国家宗教の、日本の芸術の。どこで更に出会えるであろうか、似たような年代順に見本の量に。

殆どの古い寺院、特に神道の、は聖なる木立あるいは昔からの庭園で囲まれている。巨木、楠、杉、豪華に花咲いている藪は、二つとない魅力をここに与えている。１９世紀から２０世紀初めに、日本を訪れたロシア人達は彼らの追想記のこれらのことを強調していた：「東京、京都、横浜、神戸、大阪、長崎、私を案内してくれた全てで、私は喜んで日

本の古い寺院を訪れ、それら庭園の素晴らしさに満足した、多様で興味を引き内容にも。これらの寺院は常に自然溢れる場所にあった、森、崖、谷川の中に、日本の植物相の最も華やかで偉大な見本の庇護のもとで。」

26日目（9月4日）
博物館の図書館と長崎の夜景

朝は、豪雨で始まった。電車に乗っての墓へは延期することになった。書類を広げるやいなや、ドアの呼び鈴が鳴った。再び、あの世話好きな警官がやって来て木村さんからの紙包みを渡してくれた。この簡単な行為は本当の別れの挨拶を示していた。彼はもう２つの言葉を学習した：「こんにちわ」と「さよなら」。我々は彼と気持ちよく別れを交わしていた。

博物館の図書館での仕事を、幸運にも雨は邪魔しなかった。長崎で発行されている英字新聞に一日を献げることとした。新聞はこの町の生活と町の外国人社会について大事な情報を持っていた。最初の外国人向け新聞である「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｓｈｉｐｐｉｎｇ　Ｌｉｓｔ　ａｎｄ　Ａｄｖｅｒｔｉｓｅｒ」を、イギリス市民であるアルベルト・ハンサードが発行した、１８６１年6月２２日に。名称が明らかに語っていた、出版の課題について：情報と宣伝を与える、海洋情報についての。公告の大半は上海であるという事実は、二次的役割を証明している、当時、長崎の外国人居留地が為していた、中国におけるより大きくて古くから続いている仕事に関して。新聞はこのように地域の情報を伝えていた、例えば、日本の初めてのヨット「ファントム」の進水について。或いは、初めてのヨーロッパ式蒸気船について、日本で作られた、スコットランド人の大工ジェームス・ミッチェルによって。新聞は週に２回発行された、１８６１年１０月１日まで、ハンサードが自分の印刷機を横浜に運んでいかなかった時まで。彼はそこで新しい出版社「Ｊａｐａｎ　Ｈｅｒａｌｄ」を設立した。

英語での次の新聞「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｔｉｍｅｓ」は１８６８年に出た。が、１年間だけ。それに替わって、「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｓｈｉｐｐｉｎｇ　Ｌｉｓｔ」が出た。この新聞は数ヶ月だけ持ちこたえた。最も継続した新聞は「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｅｘｐｒｅｓｓ」であった、１８７０年1月１５日に出現した。長崎の外国人の住民に約６０年間、１９２８年まで供された。その新聞の編集者はポルトガル人のフィロメノ・ブラガであった。彼はこれまで神戸で新聞を出していた。「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｅｘｐｒｅｓｓ」は情報を掲載していた、海運について、仕事について、銀行について、地域の課題の記事を、教会関係の通知を、編集局への手紙を。この新聞では、特に、１８７１年の初めての電信ケーブルの施設について伝えた、日本と外国を連結する、長崎から上海まで。電信の受信の開始についての初めての声明が載っていた。新聞は公然と日本政府を批判した、約３０００人の長崎のキリスト教徒の国の他の地方への追放に対して。その様にして１８７３年のキリスト教の復興を助けた。

長崎における外国人との接触が拡大するにつれて、他の英字新聞「Ｎａｇａｓａｋｉ

Ｇａｚｅｔｔｉ」、「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｓｈｉｐｐｉｎｇ　Ｌｉｓｔ」、「Ｒｉｓｉｎｇ　Ｓｕｎ」が現れた。最初の新聞で新しい変種である「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｓｈｉｐｐｉｎｇ　Ｌｉｓｔ」は直ぐに閉刊となった。「Ｒｉｓｉｎｇ　Ｓｕｎ」と「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｅｘｐｒｅｓｓ」は１８７４年５月に、一つの新聞、名称が「Ｒｉｓｉｎｇ　Ｓｕｎ　ａｎｄ　Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｅｘｐｒｅｓｓ」に合併された。毎週発行され、この新聞は長崎の外国人に供された、２０年以上にわたって、１８９７年９月まで。発行はほぼ１０００号を数えた。

１８９４年から１８９７年の間、長崎における外国人のビジネスが花開いていた時期、更に４つの英字新聞が広まった：「Ｃｏｓｍｏｐｏｌｉｔａｎ　Ｐｒｅｓｓ」、「Ｋｉｕｓｈｕ　Ｔｉｍｅｓ」、「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｏｂｓｅｒｖｅｒ」と３番目の「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｓｈｉｐｐｉｎｎｇ　Ｌｉｓｔ」。長崎で最も影響力のあるビジネスマンであったリンゲルは２つの新聞社「Ｒｉｓｉｎｇ　Ｓｕｎ　ａｎｄ　Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｅｘｐｒｅｓｓ」と「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｓｈｉｐｐｉｎｎｇ　Ｌｉｓｔ」を買い取り、それらを合併して、新しい新聞「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｅｘｐｒｅｓｓ」を日刊紙として発行した。その第１号は１８９７年９月６日に発行された。先駆していた新聞と違って、この新聞は多くの注意を向けた、地域の日常の出来事より世界的なニュースに。数年後、リンゲルはこの手抜きを訂正するように努力した、１９０４年９月に、１２頁の月刊のイラストレーション付きの出版物「Ｃｈｅｒｒｙ　Ｂｌｏｓｓｏｍｓ」を印刷し始めた。それでは、長崎とその近郊の歴史と文化についての記事を印刷した。１９０８年に、最後の第３７号が出た。

「Ｎａｇａｓａｋｉ　Ｅｘｐｒｅｓｓ」について触れると、この新聞は１９２８年７月３１日まで日刊であった。世界の経済危機と長崎における外国人数の減少が出版者に新聞の出版を強いらなかったときまで。全部で第９１１８号まで出版された。ついでながら、リンゲルの娘婿であるウイルモット・レビスは長崎における最も有名な外国人出版社と見なされていた。露日戦争時（１９０４年から１９０５年　＊）、彼はイギリスの出版者によって軍事特派員として認められていた。が、後になり、ロンドンで「Ｔｉｍｅｓ」の編集局で働いた、ナイトの称号を授与された、第一次世界戦争時（１９１４年～１９１８年　＊）にワシントンで特派員として仕事をしていたことに対して。

しばらく新聞に目を通し、博物館の見学に向かった。博物館は展示場の様な作りであった。２つの大きなホールがあった。一つのホールは芸術関係、もう一つは国際関係。地域の権力の活動について語っている、個別の展示物がある。靴を脱ぎ、ホールに入っていった。私にエアホーンを渡してくれた。それを通じて英語で沢山の説明をしてくれた。長崎を訪れたロシア人の中で、ニコライ・レザノフだけが取り上げられていた。ここには、ゲオルグ・フォン・ラングスドルフのコレクションが保存されていた、カムチャッカと日本で収集した。それと、日本での最初の大使時に彼が描いた絵も。極東で、この博物学者の素晴らしい科学上の出世が始まった。彼はペテルブルグにある動物博物館の創設者として知られている。実際において、彼はロシア語で一冊の本も出していなかった：彼の基本的な仕事はドイツ語、ポルトガル語、スペイン語、英語で陽の目を見た。残念ながら、アカデミー会員ラングスドルフのコレクションと絵画はロシア科学アカデミーにはない：学者はそれらをフレイブルグに運んだ、１８３０年代初めに立ち去ったときに。ロシアの古文

書館に、彼の大量の書類だけが残された、世界中の同僚とＰＡＫ会員との交わした。

蒸し暑い外に出て、博物館を周り歩いた。建物は古かった、長崎の最初のヨーロッパ人の住居のように思えた。特に、大きな石の基礎が印象的である、しかし、それは全ての建物と同じように、＊＊＊＊＊＊＊＊。古い建物のところに防空壕が残っていた、博物館と並んだ所に。そこに立ち寄ることが出来た、明かりが点き、乾いて、綺麗で、空っぽ。我々のところではこのような建物は何かに変えられる、と想像した。

町を少し散歩した。私は長崎を好きになった。多分、長崎がウラジオストクに似ているということだけではなく、本当によく手入れがされており居心地が良いので。それに、多分、せっかちしていない。見かけでは、ここでの生活は静かであり、せわせわしていない、空しさは見えない、耳障りなのの知り合いもない。つまり、日本人はあくせくせず、決してイライラせず、口論をしない？　多分、そうであろう。が、よそ者の目につかないのであろう。だいぶ昔に、社会生活は日本人を慣らした、自制、節度、意見の相違を回避する能力を持つように。

店の所有者達が店を閉め始めた。売り子が通りから商品を片付けた。歩道には野菜の木箱だけが残された：彼らは更に暗くなるまで働く。少し開いているドアを通して見えている、主人はここに住んでいる、商品で一杯の小部屋の直ぐ向こうに。家族全員が集まった：入口に幾つかの履き物、出口に先を向けて。部屋の奥でテレビが点いている、そこかしこで布団の端が垣間見えている。

もう私は帰宅する時間だ。山の方に向かっていたとき、叫び声を聞いた：「オー　イイオ」（？　＊）。私は見る、近くの寺から、加速して、車輪付きのボート（台車？　＊）が坂道を下に疾走するのを。頑健な若者達がボートを取り囲んで。ボートには子供達が座っている、子供達は大声で叫んでいる。写真を撮り、後を追った、考え直し、戻ってこないのではと、詳しく探れなかった、これはその様な遊びなのか。戻っては来なかった。次の寺に近づくと、騒ぎを耳にした：大きなガレージから同じようなボートを引き出した。それには７人の子供達が座っていた。子供達に船の前で日本人の大人が指示を出していた。６人が銅の大円板を打ちたたき、７人目が船尾で上手に大太鼓を鳴らし始めた。私は少し考えた、彼らは港に向かっているのであろうと。違っていた、彼らはある広場に立ち止まった。そこで下稽古らしいことが始まった。２０人ほどの剛健な若者達が４輪荷車を回した、誰かが力強く輪を回した、良くわからない。その後、２匹の赤い魚と２匹の黒い魚が出現した。大音響と歓声のもとで、それらの魚を網で捕まえようとした。

長崎の住民達はしばしば語っている、彼らの町には沢山の「サカ、ハカ、バカ」があると。つまり「坂、墓、馬鹿」。この場合、馬鹿は仕事を嫌がり、何につけわいわいしたがる者のことである。とにかく、町の行事カレンダーは１年が祝日で満たされている、次々に。祝日の内の大事なのが「長崎くんち」である。通常の宗教的な祝日である祭りは日本全土で、収獲の後に行われる。しかし、長崎くんちには最初から他の目的があった。それは反キリスト教の特徴を明確に表現するものであった。長崎で１５７１年から１６１４年まで行われていた、パスハ祭に対抗して、住民にとって何か楽しく魅力的な行事が必要となった。派手な祭りの必要性がキリスト教徒の蜂起の後に更に大きくなった、１６３７年に起こった、長崎の隣の半島島原で。蜂起は藩の度を過ぎた略奪的税によって引き起こされた。蜂起者達はキリスト教のスローガンのもとで団結した。蜂起は流血の手段で鎮圧さ

れた。幕府と神官と僧侶達は祝祭に大衆性と華やかさを付加するために大いに協力した。長崎で昔から１０月に行われていた。興味を引く、地区の公共施設の所有者達が幕府に同調したことが、若干の当惑を味わいながら、特に財政、キリスト教のモラルの拡散に対しての。

ある諏訪神社では、その様な大衆方策を行うことは困難であった。これ故、基本的な厄介事を団体に委ねた、町の衆によって作られた。当時、町にはその様な団体は１１個あった。各家は、祭りの日には自宅を開放しなければならなかった、そろいの祭り服を着た者達に。言葉を変えれば、祭りの参加者は同じ着物を着なければならなかった。そして、諏訪神社の入口に、祭日用に作られた台車を運んでいく。それに乗っている、囃子方、子供、大きな魚様のもの、鳥、伝説の生き物たちが。それ以上に、各参加者は見学者達に自分の踊りを見せつけなければならなかった。（注目して、これは１６７２年でのことに。有名なリオデジャネイロのカーニバルについてでの話ではない！）

威信の問題－着物は煌びやかで台車は豪華－は、結構市民を興奮させた。参加者達は何ヶ月も、半年も差し迫っている祭りの準備をする。働いている住民には、大きな負担となった。これ故、各区毎に７名の参加者とすることが決められた。踊り手の各グループが、７年ごとに発表の準備の負担を請け負うために。結果として、町に７７の独立した団が作られた。各団には発表の独自のスタイル、観客を魅了する独自の方法があった。長崎くんちの全参加者の中身全部を確りと知るために、７年連続して町にやってくることが要求された。

祝日まで数日を前にして、将来の行列の参加者全員は見学のために自宅を開放する。希望者全員の観覧に、装い、扇、履き物、飾り、台車を展示する。差し迫っている祭りに関係があるもの全てを。ニワミセ（庭見せ）の名のあるこの風習は、以下の事に関係している。キリスト教徒との戦い時期に、幕府の役人達が祝日の参加者達の家に立ち寄ったことに。そこに、イコンが、十字架、聖書、その他の禁止されている礼拝の物品がないことを確認するために。

年を経て、祝日を祝う日本人にオランダ人の商人達も参加するようになった、長崎湾に貿易商館を設置した。オランダ人はプロテスタントの教義を信奉していた、異教徒の中での宗教活動を規定していない。これ故、ポルトガル人商人達の追放後、町に生じた穴を簡単に埋めることが出来た。１６９０年に長崎にやって来たドイツ人の自然学者で歴史家であるエンゲリベルト・ケンピフェルが自分の日記に特記していた、「長崎くんち」へのオランダ人の参加は「頑張る伝統」となった。祭りへの積極的な参加は時と共に、中国人＊＊＊＊＊の代表者達が受け継いだ。長崎における祝日の日本的、オランダ的、中国的根源を見いだすことは簡単である、個々の踊り集団の出演を観察することで。ここには伝統的な日本舞踊が存在している、龍の踊り、古いオランダ船の模型、台車の上に組み立てられた。

祝日「長崎くんち」は３日間続く：１０月７日から９日まで。各演出は３幕に分けられている。行列から始まり、広場に笠鉾を引き出し、どこか巨大な折りたたみ傘に似た。これもまた古い伝統の影響である：各グループが出てくるときには、竹傘を広げた人が先行した、それには地区の名前が書かれている。笠鉾は地区の資格で演出する、その様相は結構複雑である。笠は刺繍と房飾りのついた龍の布地で飾られている。上から、お金、、ス

トラス（ガラス製の宝石　＊）、子鐘を付けた帯が取り付けられている。その結果、笠鉾の重さは数十ｋｇにも及ぶ。各地区の旗手は自分たちの力を誇示しなければならない、笠を保持するのは簡単ではない、音楽に合わせ、笠を揺らしたり回転させたりする。もちろん、これには大変な訓練を要する。

笠鉾の後ろに台車が続いている。しばしば台車に地区の子供達が鎮座している、太鼓やシンバルで単純な調子のメロデーをかなえながら。この音は踊り子達にリズムを与えている、台車の後についてきている。目立っている、各グループが独特の踊りと振る舞いをしているのが。ここでは、島原半島での流血の国内戦の結果が語られている：蜂起の厳しい弾圧の後、それに引き続いたキリスト教徒の追放で長崎の住民は極めて少なくなった。町には国の他の地区から移住者達が押し寄せた、他の文化の伝統を持った人々が。各地方で、各村で、それ独自で歌い、踊っていた。この違いを、長崎くんちが示している、独特な魅力を。

主たる祭りの広場は諏訪神社にある、小高い丘の上にある。その頂上まで、長い石段がある。そこには、観衆のために観覧席が設けられている。そこの席の注文は前もってしておく。良い場所を確保できない人でも、がっかりすることはない。神社の前での演出の後に、グループは町に繰り出す。駅舎、広場、交差点、橋、大きな店の前等で公演を行う。３日間、町にはチンパニーが鳴り響く、明るい色彩が溢れる。現地の商人達は土産や食品の販売での利益を計算することが出来ない。正に、長崎くんちの日々は、町の人口は３５万にも増大する、旅行者によって。

祝祭の場所として諏訪神社を選び、幕府はこの出来事を伝統的な日本の宗教と結びつけるだけではなく、町の華麗さでオランダ人や中国人達を驚かせたかった。彼らとの交易は確実な外貨を国庫にもたらした。神社の価値を強調するために、１６３８年から毎年の祝日の大事な要因となった、それに送り出した、ノウ（能　＊）の劇場公演が最も素晴らしい達成であるとして、日本の国民的文化の。

27日目（9月5日）
雲仙－日本におけるロシア人の保養地

雨。多分、これは台風の影響、情報から判断して、東京とその付近を勢力下としている。古い新聞「ウラジオストク」で沢山読み込んでいた雲仙に出かける時である。１００年前に、この保養地は、ロシアの極東地方人には好きで願望の場所の一つであった。当時、ここでしばしば香港、上海、フイリッピンにいるヨーロッパ人達が休息をとった。

昔から、雲仙の名前は熱い泉源：フルユ（古湯）、シンユ（新湯）、コジゴク（小地獄）の３つの保養地と直接に関係していた。それらは海抜７００ｍ以上の同じ山の中腹にある。１９３４年に、この地はウンゼンーアマクサ　コクリツーコーエン（雲仙天草国立公園）として宣言された。それは２５５平方ｋｍの面積を有し、長崎県、熊本県、鹿児島県に及んでいる。雲仙のある島原半島に追加して、公園は約１００個の島々も含んでいる、天草半島の周りに位置している。こんにちでは、九州における最も古い国立公園の内の一つで

ある。
杖をつきバック持ちの老いた老人はバスでは優先的に座れる。多分、長崎では親戚のところにその様に滞在した。親切な運転手はバスで乗り降りを助けてくれる、年寄りのために特別に低い腰掛けも勧めて。
突然に止んだ雨は、一片の霧を残した、山の谷間にかかっている。光景は日本の古い巻物の主題を思わせた。海は同じく霧の中。バスがトンネルを抜け出す度に、我々はそれを見ている。他の側、山側には、至る所田圃、段々の。周りを見渡す、小石だらけ、拾い組み上げた石段。素晴らしい芸術作品！　大地は赤色、過去の火山活動が物語っている。
１時間少しで、小浜に到着した。そこで老人達が降りた。海岸沿いに延びた小さい町。海岸は津波のために非常に良く防御されている。日本でよく見られているように。直ぐに移住以外で、道は丘にそって曲がりくねり始めた。段々畑は直ぐに針葉樹の森に変わった。道路のところにある看板「友好の村」に気がついた、独特な木製の彫り物に：大きな担架。多分、その様にして昔には旅行者達を温泉に運んだ。
保養所の沢山の旅館は広さ８０ヘクタールの石だらけの平地に建っている。この土地はかっては火山のクレーターであった、硫気孔、泥と水の間欠泉で満たされた。あちこちに、白っぽい生命のない土地が見えている、そこから蒸気の泡が出ている。周りはきつい酸の匂い！　年配のアメリカ人のカップルが、私の前を進み出て、叫んだ：
－悪魔の場所ではないのか？！
その通り、一見すると場所はみすぼらしい様相、聖書に何度もグスタブ・ドレ（フランスの画家　＊）のイラスト付きで記述されている。しかし、とにかく、ここは惑星において最も健康的な所の一つである。高い高度と海洋に近接していることで、温度が２７度以上も上がるのは希である。この大変に暑い時期には、東京、京都、長崎ではアスファルトも溶ける、ここは非常に居心地が良い。夏には花の群落が隣接し、木々が覆う。「悪魔の力」は時折その力を示す。１９９０年１１月、近接している火山である普賢岳、高さ１３８８８フィートの、３００年間眠っていた、が突然に目覚め、付近一帯に溶岩を流し、噴石をまき散らした。避けることは出来ず、人的被害も・・・
前の推薦書を思い出し、思案した、沢山ある温泉の内のどれに行くべきかを。覚えていた名称が目に飛び込んできた：「Ｃａｎｙｅ」（？　＊）。結構しばしばそこを訪れていた、風呂は旅館にある、多くの日本人が温泉に来るのは、１日だけではないので。しかし、私には旅館は必要がない。１０００円を支払い、内部に入ることを許された。非常に上品：無料のタオル、冷たいお茶、ひげ剃り、各種のシャンプー、これら全ては建物の堂々さを物語っていた。風呂のあるホールは小さく、１２人分。締まった部屋に３つの異なった浴槽、と天井の下にもう一つ。ほぼ３時間入浴を満喫した。ここを訪れたであろう先人達に考えを巡らしながら。
風呂から上がり、この地の墓地を探索することにした。ガリチャニノフ（？　＊）は何処に葬られたのか。付近を徘徊したが、何も見つけられなかった。その後、ある村で、煮えたぎる泉源の中で茹でた卵の商売が行われているのを見かけた。看板で語っていた、卵は健康を増進し、長生きさせると。卵を５個（３００円）買い、食べるために場所に落ち着いた。
－上手いですか？－　脇を歩いているロシアのお婆さんを思わせる老婦が聞いてきた。

長年の重荷で猫背になった背中、簡単につまみ洗いした着物で、不可欠なエプロンを着けて。

散歩中に、別の温泉に気がついた。その周りに日本人達が群れていた。ここでは、入浴に１００円かかっていた。しかし、設備は少し劣っていた。

休息の人気のある場所は島原であった、雲仙から９．５ｋｍの所にある。すなわち、ここへ長崎からロシア人達がやって来た。雲仙で駕籠に乗って。もし、乗客が小舟に乗りたいならば、乗客は素晴らしい景色を見ることが出来た、松で覆われた沢山の小島を。小島は画家の絵から降りてきたようであった。島々はツクモ（九十九　＊）の名称を持っている、「９９」を意味している。

島原の基本的な名所は、１７世紀に松倉一族によって作られた城塞である。主塔（天守閣？　＊）は１９６４年に大規模な補修を受けた。その綺麗さ、細部の精巧さ、歴史的真実性で多くの旅行者達を感嘆させている。珍品のある展示ホールには、侍が押し入り、全ての「南蛮人」－外国人を、ところ構わず切り始めている絵。博物館展示品の中に、少なくない絵がある、初期のキリスト教徒に対する迫害を描いている。

他の名所として原城、島原から３２ｋｍの所にある。すなわち、ここで、最初の日本人キリスト教徒と徳川幕府との大戦闘が起こった。その際、若干の歴史家達は事件の宗教的内幕に反論している。日本人の「ブガチョフの反乱」の原因となったのは、幕府による重税であったとして。日本人のブガチョフである天草四郎、信仰はキリスト教、最後まで城を守った。しかし、結局、幕府の１０万人の軍に対抗できなかった。後になり、見積もった、蜂起者達の３万７０００人が殺されたと。その後、異教者達の追跡がより厳しくなった。このようなわけで、この地方は「悪魔の」という名称を得ることとなった。

28日目（9月6日）
日本人と彼らの文化財、長崎の庭園を見て

私の長崎訪問は次第に終わりに近づいてきた。大事な時間は町を単に散策すること、過去を追想しながら。ついでに、この国に捕虜となった我が同国人ことについて考えること。

曲がりくねっている小道を下りながら、考えた、国民的文化が日本人の全生活の基本にあることを。その発現の詳細を理解するために、日出づる国の、いろいろな時代の歴史を知る必要がある、様々な天皇の支配の特徴を。訳があって、日本における年号はミカド（帝）の支配時期と関連して行われている、文字通り「気品のある門（？　＊）」を意味している、それはしばしばあれやこれやの時代の認識への世界へ導く。長崎では、日本人の美的要求、自然への畏敬と結びついた、生まれつきの節制、独自性と世界同胞主義、は他の国民－東方の中国、西方のヨーロッパとアメリカーの文化と衝突した。

大変な戦後の年であったにもかかわらず、日本人は直ぐに立法を行った、文化財の保存に関する、１９５０年に採用された。日本の文化財産を５種（？７では　＊）に分類した：有形文化財（ユウケイブンカザイ）、無形文化財（ムケイブンカザイ）、民俗資料（ミンゾクシリョウ）、歴史的で風景の名所、自然の記念物史跡、名所、天然記念物（シセキ、

メイショ、テンネンキネンブツ)、同様に歴史的建築物と設計（レキシテキーケンゾーブツ)。

伝統的な芸術作品を造りだす日本人の想像力は､文化的価値の特別な分野を造っている、重要文化財（ジューヨウブンカザイ）（文字通り「重要で極僅かの」)。政府によって６５種が認定された。それには焼き物、漆塗り、染色、織物、刀と人形、同じく演劇と音楽。これらの名作を造りだす人を、日本では人間国宝（ニンゲンコクホウ「生きている国民的宝」）と呼んでいる。

日本国民の文化の伝統は漢字で和（ワ）で表現することが出来る。これは調和、一致、同意を意味している。昔から、人々の調和した共同体と周りとのその調和は、実際において、日本人社会における上品なエチケットの規律として見なされている。１７条憲法（６０４年）において、摂政である聖徳太子は、表現「和」を人生においての基礎として論じた。わび（ワビ）（文字通り：一致、不十分）の原理に従って、自然との一体化において質素な生活をしなければならない、その美は精神的でエチケット的価値と一緒に生活の不十分を埋め合わせた。簡単に言うならば、日本人の評価の基準に従えば、全ての美は簡単でありふれたもの。しかし、これを理解するためには、日本人である必要がある。

日本人の美学（エステチック　＊）を理解したい人にとって更なる困難がある。日本で、中世に、幽玄（ウウゲン）（密かな優美、精錬された深み）という概念が生まれた。文学や芸術で、これは表現された、外見を単純に強調した作品で。その時、深部に深い思考を置いているように。この時期の画家や詩人は、最小の手段で時間と空間を何か無限の物を表現するやり方を利用した。今日我々は能を例にして判断することができる。

優美な単純さであるサビ（寂）（文字通りでは「錆、老化、独りぼっちに見える」）は日本的な美学の他の規範である。時折この単語は次のように翻訳される、「孤独の悲哀」、「古い物の楽しみ」、「自然の崩壊の状態にある物の静寂の美」、「手が込んでいないこと、老齢、孤独、不十分」、その他。この美的用語－同じように禅の影響下で育まれた、室町時代（１３３６年－１５６８年）に－は現代の日本人の生活に反映している：日常品を大切にする、それはその単純さにもかかわらず使い古されたように見え、長きにわたって利用されてきた。幾つかのお茶碗を私は長崎の店で買った、そこでは全て中古品を売っていた｡サビいう単語は詩でも利用されている：有名な俳人である松尾芭蕉の俳句を思い出せ。

（訳者による脚注）わび・さび（侘《び》・寂《び》）は、慎ましく、質素なものの中に、奥深さや豊かさなど「趣」を感じる心、日本の美意識。美学の領域では、狭義に用いられて「美的性格」を規定する概念とみる場合と、広義に用いられて「理想概念」とみる場合とに大別されることもあるが、一般的に、陰性、質素で静かな…-Wikipedia

日本を訪れた者全てが、この国の綺麗な公園に感嘆する。庭園や公園の芸術において、日本人は同等ではなかった。彼らは庭の構築の有名な職人、イギリス人やフランス人の所から良いとこ取りをした。これに自分の国としての伝統を付け加えて。単語であるニワ（庭）に、彼らは全く他の思いを込めている、我々、或いは､言うならば、イギリス人以上に。我々にとって､庭とは第一に場所である、果樹や灌木のある、菜園でもある。が、日本人にとっては、美的観察の場所である。これ故、庭の区割りの時の基本的な要求は、

自然に対する本質的な調和、日本人の生活の本質である。この根源は禅、すなわち、仏教にある。そこでは、自然との精神的な接触が高く評価される。この際において、日本人は学んだ、自然の偉大さを限られた空間の中に移すことを。それの出現を閉じた枠内に圧縮するように、自然を象徴的なやり方で描写しながら。そこから、幾つかの木々、灌木、石が必要となる、自然の意義と無限性を予想するために。

残念ながら、私は茶会に出ることはなかった。お茶の大家と関係を作れなかった。が、私は茶室における作法が気に入った。特に、その周りのチャテイ（茶庭）。それは次のように仕上げられる、茶会は最大限維持される、伝統的な精神に、古さと簡単さと一体化、自然との。石の段、小川或いは滝、石灯籠、常緑樹或いは花の咲く灌木。これら全ては手段を象徴する、特別な雰囲気の中で。それに茶会の参加者達は満たされなければならない。

その際、茶庭だけではなく、日本人の家屋にある小さい庭さえしばしば考えを抱かせる、日本人は美の感覚をできるだけ発達させているような。長崎の個人の家屋の側の狭い通りを歩きながら、柵の向こうを覗くことが好きである。その度に、驚きが止まない、日本人名入念に、非常に綺麗に本当に小さい土地さえ利用していることに。その様な小庭で、主人は好みの風景をミニチュアで作り上げることに精を出している、公園芸術の本当の傑作を見ることが出来る。

長崎の歴史はよく示している、明治維新の後、日本は西の文化とその達成をがつがつと吸収したことが。他面では、長年かかって日本開国を得たヨーロッパ人達は、未知の国の研究に確りと従事することが出来た。ロシアの研究者や東方研究者達は長崎を通して日本へ入国した。日本の文化の伝統の古さと不屈性は彼らを驚かせた。それらは日本人の日常生活に見られ、ヨーロッパ人の価値観とは極めて異なっていた。ロシアの旅行家であるボルコンフスキイが書いていた、「この文化には見ほれてしまう。自分の家に持ち込み、そこで生活することは殆ど不可能である、ヨーロッパの雰囲気に慣れたロシア人にとっては。見ほれる、が自分の種族の根源で満ちていることに。」　多分、これは当然である：異国に取り囲まれている中で自分の文化に信を置いている、同時に、日本の生活様式、風習、行事の特性を理解しようと努めながら。ロシア人移民の例はそれの裏付けである。

夕方、頂上の一つによじ登った、私の借宿に隣接している。参謀本部の中佐ベニュコフの印象を思い出した：「町の通りは正常である。多くのカ所では板で真ん中を舗装している。必要な所では、幅広い石の階段を持っている、家屋間を移動するための。高い所にある。町の周りの丘には寺社が散在している、庭園と墓地の中で絵のように散らばっている。遠方の山の頂上は永久林或いは個々の木のグループで覆われている。その様な頂上の一つの金比羅山から、希な景色が開けている、となりの長崎湾、大村湾、その他の湾に。下方に、長崎沿岸に、出島が見えている、ニーデルランド（旧オランダ名　＊）オランダ人の商館の長期にわたる滞在で知られている、現在ではオランダ人によって作られた、が、既にヨーロッパ風に。」

上方からの長崎湾の景色は極めて惹きつける、手がカメラに伸びてしまった。あまり喜べない。気に入った景色を確り心に刻みつけようという普通の希望はスパイ活動と見なされ、逮捕されることがあり得るということは昔から避けられないということで。とはいえ、火のない所に煙は立たず：ミハイル・イワノビッチ・ベヌコフは日本にやって来た、諜報情報の収集のために、日本の官憲も同じような目的でロシアにやって来ていた。結局、こ

れは露日戦争で勝利することを彼らに助けてくれた。

29日目（9月7日）
「アーメン」、墓地での最後の日

私は書きたかった「墓地へ行く、仕事として」を。が、語っておいたほうが良い、長い間の知人達との出会いにについて。今日は特別な日、稲佐との別れ。再び階段を下り、中央を抜けて、橋、ようやくロシア人村。可愛い娘さんと出会い、優しい笑みを浮かべて挨拶をした。よくわかっている、何故ロシア人船員達が稲佐の娘に惚れたのかが！

以前の通り、ゆっくりと狭い通りを進みながら、家屋、中庭、小庭を覚えるように努めながら・・・。主人が花に水をかけている。洗濯物を干している。シャッツを着ていない老人、簡素、我々流では室内パンツ、が道を横切る。全くそっくりの村、がロシアのではない。道すがら､花の露店に立ち寄った、そこで豪華な花束を買った。その後、食料品店へ、長崎特産の酒一瓶のために。この習慣はキリスト教徒と関係がないにもかかわらず、ロシアでは普通に行われており、故人を追想する。小さい骨董店の脇を通り過ぎ、そこに立ち寄ることにした：そこに何かロシア人の物があるのではないか。笑みに溢れた娘は頭を振った：

－ありません、そのような物は全くない、が、ロシアの古い貨幣がある・・・

これらの貨幣はこの地方のロシア人の歴史と関係があったのであろうか？　私はそれを調べることを止めた。その代わり、古いブロンズ製の茶碗が､極めて優雅な仕事の龍の描かれた、注目を惹いた：多分、ここの娘はそれを用いて､良い匂いの飲み物を自分のロシア人の友に注いだ。

低くお辞儀をし最大限の感謝の気持ちで、花をお寺の娘に手渡した。返答として彼女は私に鍵を差し出した、ロシア人区画の潜り戸の。もう一度墓の側を歩き、別れの言葉を述べた､そこから決して抜け出すことができない人たちに。草の香を吸収するように努めた、コオロギの鳴き声、ダグボートからの長い警笛、湾から届く。崎原先生の言葉を思い出した：「彼らが君を日本へ連れて行った！」　ありがとう・・・

履き物を脱ぎ､裸足で歩いた。草は驚くほど柔らかかった。太陽で暖まった石から、気持ちよい暖かさが漂う。もし目を閉じると、自分がロシアの大地に居るように感ずる。石の階段に座り、酒瓶を開けた。一口ぐいと飲み、ここに寝ている同郷人に思いをはせた・・・。私は彼らのエネルギーと記憶を感ずるのか？　なんとも！　墓標、伸びたコケ、私から過去を追い払う。かっては各墓標の所に人々がうごめいていた。時折人々は多かった、船乗り、艦隊の高官を葬ったときには。他の死者は最後の道に誰も伴わなかった、例えば、かわいそうな人－移民。運命の意思によって日本に投げ捨てられた。頭の中で､私は旅行を成し遂げる、１９４１年当時の、ここに爆弾が落ちた。、４５年には原子キノコ雲が立ち昇った。

動こうという気が全くなかった、座り続けた、歴史の声に注意しながら・・・　至る所に傾いた正教の十字架が見えていた。それらの代わりに、所々に古い船の武器の砲身が立

っていた、時が経つにつれて壊れていった。白くて才能を持って設計された辻堂を見る。いつかその作者を見つけるのか？　その上､この墓場は誰かの最後の埠頭となったことを、私は極僅かしか知らない。沢山の問題が、答えなくして残っている・・・。しかし、時間は進んでいる、ロシア人の過去の探査をし続けなければならない、日本の他の地に保存されている。

自分の部屋に戻った時には、全く暗くなっていた。ほぼ１時間かけて部屋の整理をし、荷物をまとめた、人は何とも早く見回り品を整理するものか！　更に時間をかけて、総計を出すことに費やした、同じく、神戸での現地調査の計画も、出発することを予定している。

30日目（2007年9月8日）
さようなら、長崎よ

早起きして、長崎をもう一度散歩で楽しむことが出来たであろうにもかかわらず、積み重なっている荷物がその無理さを暗示していた。多分、これで良い：「長い見送りは余分な涙を誘う（＝見送りもほどほどに)」

道中、ゴミ箱に靴を捨てた：よく持ちこたえた、殆ど毎日靴を修理していた！　電車に乗って、鉄道の駅に着いた。自分の日記に記念スタンプを押した：日本では何処の駅でもその駅の記念スタンプを置いてある。客車に乗った。汽車はゆっくりと動き出し、段々速度を増していった。私は心で、気に入った町に手を振る、知られている歌の歌詞を口ずさむ：

・・・船長は航海に出港する、

長崎の娘を見ないで。

ああー、私にはロシア人船乗りのロマンチックな出来事の痕跡に出会えなかった。が、これがどれだけ大事なのか？

後書き

東京に戻って、直ぐに、リュボビ・セメノブナ・ヤシコバーシベツを探す努力をした。電話で元気な声を聞いた。長崎でヤシコフ家の痕跡をどのように探したか、若干支離滅裂で説明をする。

－もちろん、私は喜んで貴方に会い、全てを話す。モスクワ総主教管区の教会での日曜礼拝に来なさい

私は１９８９年に、初めて、この教会を訪れていた、長崎に海軍省の代表と一緒にやって来た時に。この教会は見た目は普通の家屋のようであった。ここに教会があるということは、正教の十字架を持った門が語っていた。私はそのような小さい教会を訪れることは少なくなかった、遠くの外国でうち捨てられた。その素朴さから、それらは華麗で派手な

ロシアの教会とは全く違っている。が、それらには何かがある、目では見てはならなく、ただ心だけで感ずるものが。多分、これは苦悩と心の病である、故郷から離れている者達の。どれだけのならず者達が、祖国への帰還を夢見て教会で祈ったであろうか！　もちろん、現代の信者にはこの感覚は未知であり、彼らは悲劇的な昔のロシア人移民とはかけ離れている。しかし、彼らにとっては、正教教区はロシアへの近接さを具現化している。

ミサに遅れてきた者達が入り口に群れていた。私の脇を、きちんと人をどかし、金髪の女性が行った。脇を見ながら、誰かを探しているようであった。この人がヤシコバ。一束の蝋燭を買い、それに火を付けて、健康のため、亡き人のために蝋燭を立てた。

－なんとも素晴らしい、我々が出会えたことは。－ミサの終了後に、彼女が語った。

－どこか脇に座りましょう。私は貴方に沢山の写真を持ってきました・・・

ヤシコバの話の後、全員が自分の場所で立ち上がり、説明した（？　＊）、何故幾つかの墓標を移したのかを。ロシア人墓地の端の潜り戸付近に、小さい空き地があった。そこに戦時中に、小さい防空壕を造った。多分、神経質な日本人は予想した、アメリカ人は自分の同盟国の墓地を爆撃しないであろうと？　運命の皮肉か、ここに爆弾は落ちた。が、幸運にも、ここには誰もいなかった。ヤシコバは気づいた、ここには人骨が転がっていると。多分、この理由について、剛心寺の僧侶である木頭義昭が提案していた、この場所に船乗り達の記念碑を建立すると（？　＊）。

その後、私は何度も（リュボビ・セメノブナ・　＊）ヤシコバと会った。彼女は本当の宝物を示してくれた、長崎におけるロシア人についての証拠の。私は日本の慣用句を思い出した、「一期一会」を。それにしばしば日本の研究者達が出会う。ヤシコバが私に話した、クリスチナ・リチャルドブナ・シェルビナヤについて、彼女は１９６６年９月２３日に亡くなった。彼女は彼女の遺体をウラジオストクに移送するように遺言した、夫の遺体と並べて置くために。当時、日本でソビエトの船乗り達に出会った時には、彼女は常に彼らに話した、シェルビンの墓がある所、花を献花するように頼んだ・・・　当時これは不可能であった、友人達は彼女を埋葬した、先祖の区画に。クリスチナの要望に従って、墓碑の記銘はロシア語でなされた。クリスチナの娘は医者の勉強をして、フランスに住んだ。彼女には金髪の息子が生まれた。祖母の意見では、ロシア人の叔父に良く似ている。息子は、シェルビニンの名を持ち続けて、アルゼンチンに移っていった、そこで画家となった。シェルビナヤのロシアの家は、面積が５００分（？　＊）、２０年前に壊した。長崎市は、クリスチナの世話をしていた日本女性の相続人にて提案した、それを受け出して、旅行者の名所のようなものとすることを。最初は彼女はしたがらなかった、が、急に思いだした時には、既に遅かった・・・。残念、この家は元ロシア領事館の傍にあり、この町でのロシア人の滞在の記念となるものであった。シェルビニナヤの記録が何処にあるか、不明のままである。

その後、私はインターネットのサイトに接続することを再び試みた。ヤシコバについて検索するために。が、そこからは何の明瞭な情報を得ることは出来なかった。

長崎に関する私の最後の仕事は、モスクワ総主教管区の東京教会の司祭であるニコライ神父との会談であった。聖ニコライ辻堂の鉄の扉が殆ど開かなかったことに、私は愚痴をこぼした。司祭は直ぐにロシア大使館と連絡を取り、そこで修理費用を工面することが出来た。

長崎で課題とした問題に対する若干の解答は、東京への途中で見つけた。そこで関西地方のロシア人の頁に出くわした。関西は神戸、大阪、京都を含んでいる。しかし、これは他の歴史・・・。、

伝記辞典

アレクサンドル・ミハイロビッチ・ロマノフ（１８６６年４月１日、チフリス－１９３３年２月２６日、フランス)。大公、大公妃クセイニア・アレクサンドロブナの夫、皇帝アレクサンドル３世の娘の。コルベット艦リンダ号で世界一周を遂行し、日本に住んだ。ロシアに＊＊＊＊＊＊＊軍航空学校の創設者の内の一人。フランスに移民し、ロシア軍飛行士同盟、パリ将校集会所、親衛隊員連合会の名誉代表。

アレクセイ・アレクサンドロビッチ・ロマノフ（１８５０年1月２日－１９０８年１１月１日、パリ)。アレクサンドル二世の４番目の息子。３才で､親衛隊員となる。更に３年後には、第２７艦隊の長に任命される。海軍大尉（１８６６年)。フリゲート艦スベトラーナ号の上級将校、世界一周旅行を遂行（１８７１年－１８７３年)、寄港地は北アメリカ、南東アジア諸国、中国と日本。そこから１８７２年１２月５日に、ウラジオストクの港外投錨地に到着した。ボスホル・ボストッチニュイ海峡の厚い氷で、金角湾には入れなかった。スベトラーナ号は長崎に戻った。氷が消えるのを待ちながら、大公は数ヶ月間海で生活した、中国、フィリッピン､日本の港に立ち寄って。フリゲート艦スベトラーナ号は再びウラジオストクに１８７３年４月２７日に到着した、ロシアの太平洋艦隊の一員として。

アスコフ・アルカデイ・ボリソビッチ（１８９７年－１９３７年)。ソビエトの軍事スパイ。連隊コミッサール。１９１８年からボリシェビキ党員。ユダヤ人、チェルニゴフ生まれ。エスエル党の一員であった（１９１５年－１９１７年)。１０月革命後、赤衛隊員。１９１８年－１９１９年、チェルニゴフでビリシェビキ地下活動に。その後、キエフで党活動に。ブルジョアから取り上げた貴重品の受領と発送委員会の委員となる。１９１９年ー１９２３年、赤軍内で政治将校を勤める。１９２０年代に、キエフで外交研究所を終了、キエフ国民経済研究所の進学予備校の学部長となる。１９２３年－１９２５年、フルンゼ冠称軍事アカデミーの東方学部の日本語学科の聴講生。学習終了後、外交官の隠れ蓑のもとでの軍事スパイ（長崎と敦賀で大使秘書、神戸で副大使、主大使)。１９３０年－１９３３年、労農赤軍（ＲＫＫＡ）の参謀本部第４局の配下となる。と同時にＨＫИД（Ｈａｒｏｄｎｙｊ ｋｏｍｉｓｓａｒｉａｔ ｉｎｏｓｔｒａｎｎｙｈ ｄｅｌ ＣＣＣＰ（ＨＫＩＤ ＣＣＣＰ ｉｌｉ Ｎａｒｋｏｍｉｎｄｅｌ)） の印刷物での報告者、市民学校で講義をした。１９３３年、赤軍参謀本部の第４局の第２部の長補佐に任命される。１９３３年－１９３７年、日本におけるソ連邦全権代表部の第一書記。内務人民委員部（ＨＫＶＤ＝Ｎａｒｏ´ｄｎｙｊ ｋｏｍｉｓｓａｒｉａ´ｔ ｖｎｕｔｒｅｎｎｉｈ ｄｅｌ）の組織によって逮捕され、１９３７年９月に銃殺。死後の１９５６年に名誉回復される。

アスランベゴフ・アブラーミイ・ボグダノビッチ（１８２２年9月２０日、モスクワ－１９００年１２月７日、サンクトペテルブルグ)。海軍少将で太平洋艦隊司令官（１８７９年－１８８２年)、バルチック海から極東まで世界一周航行を完遂。艦隊でホノルルを訪問（１８８１年)。海軍中将（１８８７年)。クリッパー艦プラスツン号の乗組員が記録したオホーツク海とサハリン島に彼の名前が冠されている（１８８２年)。

ビリレフ・ニコライ・アレクセービッチ（１８２９年－１８８２年5月２４日、サンクトペ

テルブルグ)。海軍幼年学校修了（１８４７年)。１８５４年９月から１８５５年３月の負傷まで、セバストポリ防衛戦闘員。第３堡塁の前哨地を指揮、敵軍陣地への夜間攻撃の成功で賞賛を受けた。その内の一つで、１８５４年１１月９（２１）日に、ゼリョンナヤ山地区で、２人の将校と数人の兵卒を捕虜とした。英雄的行為に対して、聖ゲオルギイ４等勲章、聖ウラジミル４等勲章、金星の武器で叙勲した。行った軍事作戦の成功に対して、海軍大尉に任官され、侍従武官の任命を持った、そして、聖アンナ２等勲章を授与した。侍従武官（１８５５年)。戦後、バルチック艦隊の裁判所に勤めた。１８５９年－１８６３年、コルベット艦パサドニック号を指揮し、日本と中国への遠洋航海を実施した。１８６３年－１８７２年、フリゲート艦オレク号の艦長。海軍少将（１８７２年)。１８７２年から退役。

ボゴスロフスキイ・レオニド・アレクセービッチ（１８７７年８月１日、ノボゴロドスカヤ県チェルノフスキイ郡－？)。司祭の息子。キリロフスク神学校（１８９２年)、サンクトペテルブルグ神学校（１８９８年)、ウラジオストクの東方学校日本中国学部（１９０７年）を修了した。東方学校修了時に当たって銀メダルを授与される。＊＊＊＊＊＊でケイゼルリング捕鯨会社の支配人（１９０３年)。日本人軍事捕虜の通訳。朝鮮のロシア大使館にて生徒で通訳（１９１１年－１９１７年？)、東京（１９１２年)。ＯＰＯ（？＊）会員、「アジア通報」で記事を出版。東方のモラルと仏教の問題を研究。

ブルガコフ・ピョートル・イワノビッチ（１８６１年－１９３１年１０月１０日、バークレー、アメリカ)。オルロフスク神学校（１８８３年)、サンクトペテルブルグ神学校（１８８８年）を修了し、神学修士。サンクトペテルブルグで神学、ギリシア語、ラテン語、ロシア語、歌の教師、（１８８３年)。イサーク寺院で聖歌合唱団団員（１８８８年－１８９０年)。ベルゴロドフスク神学校管理人助手（１８９０年から))。ウラジオストクの学校で神学教師（１９０１年７月２１日から)、司祭の位を受ける（１９０１年９月１６日))。ポズドネバヤと結婚した。東京のロシア大使館での司祭（１９０６年から)、ロシア人学校で、ロシア語、文学と歌を教授し、その後、日本人学校でギリシア語を。日本の文化に興味を持ち、日本の学校に入学し、それを２年で終了した。日本の軍学校でロシア語を教授。１９２４年に、妻と一緒にアメリカへ移民し、カリフォルニアのバークレーに住んだ。２人の息子を育てた。バークレーにおける聖ヨアンノフスク教区の創設者の一人。アメリカのコリマのセルビア人墓地に埋葬された。

ブホニコフ・イワン・テ（１８３０年代末）－？)。南クリミア出身者。長崎で商店を所有（１８９６年夏に開店)。基本的にロシアからの品を販売：クリミア産葡萄酒、砂糖、タバコ。露日戦争後、商店を閉店し、ブドウ栽培に従事した。ウラジオストク市議会の許可を得て、１９０８年に、セダンカに土地（約２ｈａ）を１２年間借用した。大規模な品種改良の仕事を行った。ブドウ以外に、果物類を育成した。

ブツォフ・エブゲニイ・カルロビッチ（１８３７年－１９０４年)。東シベリア総督の下で、外交部門での書記（１８５６年から)；中国との愛琿条約締結交渉に参加（１８５８年)。ロシア外務省役人（１８５８年から)。中国と日本における外交と領事の機関の職員（１８６２年－１８７３年)。中国への公使、ギルスと一緒に露中ペテルブルグ条約に署名（１８８１年)。退職（１８８３年－１８８４年)。トルコへ（１８８４年－１８８９年)、イランへ（１８８９年－１８９７年）ロシアの公使、「スエーデンとノルウエーの王の宮廷

で」（１８９７年－１９０４年)。妻はエレナ・ワシリエブナ（旧姓クレイメノバ)。

ベニアミン。修道院長。１９００年２月３日、日本に到着。長崎教会に勤務（１９００年－１９０３年４月１９日)。

ベニュコフ・ミハイル・イワノビッチ（１８３２年６月２３日、リャザンスク県プロンスク郡ニキトスコエ－１９０１年６月１７日、パリ)。コンスタンチノフスク砲兵学校修了（１８５０年)、参謀本部ニコラエスクアカデミー修了（１８５６年)。東シベリア総督の参謀部に勤務し、ロシアと中国の国境線の確定に関するプリアムールとプリモリエの探検を遂行（１８５８年)。中国と日本への出張を遂行（１８６９年)。人生の最後の年をパリで過ごした。ハバロフスクとウラジオストクに恩恵を与えた。彼の名前はハバロフスク地方の村とプリモリエの川に冠されている（１９７２年までーアホベ)。

ベセルキン・ミハイル・ミハイロビッチ（１８７１年１１月－？)。海軍少将、巡洋艦ボロジノ号の指揮官、海軍参謀本部に出向された；ロシア・トルコ戦争時、ドナイスコードブルジャンスク地区で指揮をとった；機雷施設艦アムール号の船長、大公アレクセイ・アレクサンドロビッチの副官。

ボロシン・アンドレイ・ドミトリエビッチ。医者。長崎の水兵と将校の小病院の院長。

ブリフ・パベル・ニコラエビッチ（１８４３年1月１６日－１９０９年)。海軍学校修了（１８６２年)。海軍中佐、巡洋艦ラズボイニク号の指揮官として、長崎にやって来た（１８８８年)。

ビボドツェフ・アルテミイ・マルコビッチ（１８５３年６月２４日、キシネフ－１９４６年１月２４日、サンフランシスコ)。ノボロシスク大学の法学部修了後、ウイーンとレンベルグ（リボフ（ウクライナにある町　＊)）で勉強を継続。１８７５年に軍務。オデッサ管区裁判所職員で外務省職員（１８８０年から)。ハンブルグで副領事、シンガポールで領事（１８９０年から)、トリエスタ（１８９５年から)、ケーニスブルグ（１８９７年から)、シンガポールで総領事（１８９７年から)、長崎（１９１１年から)、サンフランシスコ（１９１５年４月６日－１９１７年)。４等文官（１９１４年８月６日から)。ウラジオストクで、オムスク政権の外交代表となった（１９１８年)。銀行の役人、一般の仕事に従事した、新聞「新しい夜明け」に記事を投稿した。ロシア国民組織の合同委員会の最初（１９２５年１０月２０日から）と名誉（１９２６年５月１１日から）代表。

ガガーリン・アレクサンドル・ア 長崎のロシア領事（１９０１年－１９０４年)。長崎に海軍会館を開設。

ガルフィリド（偽名：グラゴル、セルゲイ・ガリン）・セルゲイ（１８７３年８月２２日、モスクワ－１９２６年)。元海軍将校。日本で生活した。毎日新聞「ウスリースク新聞」の編集者兼発行者（１９０６年８月７日から)。サンクトペテルブルグへ出発（１９０７年１月)。本「露日戦争」は没収された。

ギリテブランド・ヤコフ・アポロノビッチ（１８４２年９月２９日、ニジニイ・ノブゴロド－１９１５年５月１４日、パブロフスク)。海軍幼年学校修了（１８６０年)。海軍少尉（１８６２年４月３日)。コルベット艦カレバラ号で世界一周航行中（１８６０年－１８６５年)、極東を訪れた。海軍大尉（１８６５年４月４日)。極東への２度目の航海をコルベット艦バガチリ号で上級将校として成し遂げる（１８７１年８月９日－１８７５年７月２７日)。海軍大尉（１８７５年１月１日）（？　＊)。クリッパー艦ラズボイニク号船

長（１８８３年２月２１日から)。その後、フリゲート艦ウラジミル・モノマフ号の船長（１８８５年４月８日より)。海軍中佐（１８８５年２月２６日)。太平洋で艦隊指揮官（１８８３年－１９００年)。水路管理局の長（１９０３年－１９０７年)。将軍（１９０７年)。対馬海戦における状況説明のための調査委員会代表。彼の名前はピョートル大帝湾の島に冠された（１８６３年)。

ギンスブルグ・モイセイ・アキモビッチ（１８５１年－１９３６年)。ユダヤ人商人、日本での沖仲仕会社所有者。露日戦争時に特に活躍。自分を犠牲にして、脱出手段の無かったロシア人達を旅順から避難させた。「将校達はギンスブルグに絶大な信頼を抱き、ロジェストベンニイ将軍の指揮下の艦隊の遠洋航海時に装備の調達を依頼することにした。彼に委託した仕事は見事に完遂された。この仕事に対して、ギンスブルグは叙勲し、４等文官となった。」　１９０４年に、サンクトペテルブルグに移った。１９１９年に、移民し、パリに住み、慈善活動に従事した、特に船乗り達を助けた。

ゴリデンベルグ・ルビン・ハスケル（１８３９年－１８９８年)。ルーマニアのベッサラビア出身者。ロシア軍に動員された後、シベリアに派遣された。そこから他の兵達と一緒に脱走した。日本海の沿岸に到達し、漁船に落ち着いた。チングショウ（？　＊）でドイツのパスポートを得た。日本で起業した（長崎でホテル業と貿易業)。妻は小浜のイダ・キタ。子供：娘のレナ（１８８８年)、息子のアルツル（１８８９年）とヤコフ（１８９１年)。彼の結婚は初めてであった、多分、ユダヤ人と日本人の登録された結婚としては唯一。

ゴンチャロフ・イワン・アレクサンドロビッチ（１８１２年６月６日、シンビルスク－１８９１年９月１５日、サンクトペテルブルグ)。モスクワ大学スラブ語学科修了。プチャーチンの秘書の資格で、極東への旅行を遂行（１８５２年－１８５７年)。南プリモリエの最初の探検隊の参加者。

ゴシケビッチ・ヨシフ・アントノビッチ（１８１４年、ミンスク県－１８７２年１０月５日、リトアニア)。サンクトペテルブルグ神学校修了（１８３９年)。１８３９年８月９日、北京へのロシア宗教使節団に参加、そこで天体観測と気象観測に従事、植物相と動物相の標本を採取、それらをサンクトペテルブルグの動物博物館に送った。ロシアへの帰還後、プチャーチンの領事館で中国語の通訳を任ぜられた。下田条約締結に参加した。日本人の橘高斎の援助のもとで、最初の露日辞典を造った、デミドワ賞をもらった（１８５７年)。外務省アジア局の勤務員、その後、日本における最初のロシア大使（函館)。

ゴシケビッチ・エリザベータ・ステパノブナ（１８２１年？－１８６４年９月５日)。ヨシフ・ゴシケビッチの妻。日本についてフランス語での論文の著者。

グリゴラシ・イワン・マトベービッチ（？－１８８６年３月１６日、クロンシュタット)。クリッパー艦ナエズドニク号で世界一周航海を達成した（１８５９年－１８６３年)。スクリュー船ソボリ号の上級将校（１８６５年－１８６６年)。海軍大尉、スクーナー艦ツングス号の船長、その船で長崎に立ち寄った（１８７２年)。

グリツェンコ・ニコライ・ニコラエビッチ（１８５６年－１９００年)。クロンシュタット海軍学校修了、軍艦で航海し、装甲艦クレイセル号で世界一周を遂行した。１８８５年－１８８７年に、サンクトペテルブルグ画家アカデミーで勉強し、その後、パリへ。１８９４年、海軍省の公式画家。１８９１年に皇太子のニコライ・アレクサンドロビッチと一緒に

世界一周航海に参加した。膨大な海洋画を描いた（それらの内の約３００点が国立ロシア博物館に保管されている）。

デ・ボラン・グリゴリイ・アレクサンドロビッチ。外交官で民俗学愛好家。長崎でロシア大使（１８９０年－１８９２年）。本の作家「この世を：旅行の記録。.第一部（？　＊）：スペイン、エジプト、セイロンとインド」（サンクトペテルブルグ、１８９４年）。

デリブロン・カ・カ。クリッパー艦ジギト号の船長、１８７９年－１８８０年に長崎に寄港。

デンビ・ゲオルギイ・フィリポビッチ（１８４１年2月１６日、ロンドン－１９１６年１１月１５日、ホノルル）。中国、日本、ロシアの極東における企業家。ウラジオストクに財産を所有していた。船アレウト号で海産物の収穫に従事。セメノフと一緒に会社「セメノフとカ」を設立。妻は正教徒の日本女性メリ・モリタカ（アンナ・ルドリフォブナ・モネテサ）。長崎の坂本国際墓地に妻と一緒に正教に従って埋葬された。

ドミトリエフ・ミハイル・イワノビッチ（１８６５年１０月１４日－１８９７年4月３１日、長崎）。アナデルスク地方長グレブニツキイの補佐。ウスリスク鉄道の建設に従事。郷土史に関する本の著者。

ドモジロフ・コンスタンチン・ミハイロビッチ（１８５１年4月２日、ノブゴロドスク－１８８８年4月１８日、長崎）。海軍幼年学校修了。フリゲート艦とコルベット艦ギリャク号でバルチック海で演習航海をする（１８６８年－１８６９年）。海軍士官候補生（１８７１年4月１７日）。１８７１年－１８７５年に、世界一周航海。海軍少尉（１８７３年7月１０日）。ニコラエフスク海軍アカデミー聴講生（１８７６年１０月２０日より）。海軍大尉（１８７７年1月１日）。ニコラエフスク海軍アカデミーで試験に合格した、アカデミーコース修了者に対する徽章の帯用の権利を持って（１８７９年3月８日）。将校機雷クラスの聴講生（１８７９年9月１３日から）。浮き砲台「クレムリン」の主計士官（１８８０年－１８８１年）。同じ職務を、フリゲート艦ドミトリイ・ドンスコイ号で（１８８１年１０月２１日から）。フリゲート艦ドミトリイ・ドンスコイ号の上級将校の職務を完遂（１８８４年１０月２１日から、１８８７年7月２７日から）。稲佐のロシア人墓地に埋葬。

エグノフ・ニコライ・アンドレービッチ（１８６２年－１９２４年１０月１８日、長崎）。１８８３年から兵役へ。将校（１８８８年）。海軍省関係の少将（国内戦時）。

エラギン・レフ・ペトロビッチ（１８４１年7月１日、カルガ－１８７８年１２月１６日、サンクトペテルブルグ）。海軍幼年学校修了（１８６０年）、ニコラエフスク海軍アカデミー修了（１８６６年）。海軍大尉（１８６５年4月４日）。１年間の科学的出張で海外へ（１８６８年2月２０日から）。その後、プルコフ天文台で天文学と高級測地学に関して実習。船に乗り、水路学、天文学、測地学に従事、極東で（１８６９年－１８７５年）。海軍大尉（１８７４年1月１日）。サンクトペテルブルグのノボデビッチ墓地に埋葬される。彼の名前はルスキーとアスコリド島の岬に冠されている、日本海の北西沿岸にある。

エンドグロフ・イワン・アンドレービッチ（１８１２年１０月２３日、トベリスク県－１８７１年6月１９日、サンクトペテルブルグ）。バルチックと地中海艦隊で勤務（１８３０年－１８３７年）。クリミア戦争に参加（１８５４年－１８５５年）。１８６３年1月1日、海軍少将に任官。艦隊の指揮官（１８６４年－１８６５年）。長崎に立ち寄った時（1

８６４年)、コルベット艦バガチリ号に旗を掲げた。
ザレススキイ。医者。函館と長崎でのロシア人病院の長。
ジボリド・フィリップ（１７９６年－１８６６年)。医者で自然研究者。出島のオランダ租界の医者として１８２３年にやって来て、長年、長崎に住んだ。プチャーチンの相談役。日本の自然、地理、歴史、文化、芸術の資料を収集した。本「ニッポン」（１８３２年）で、日本についてヨーロッパ人に紹介した。本の著者「日本の旅行、日本帝国の記述、＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」。
カズナコフ・ニコライ・イワノビッチ（１８３４年－　)。ニコラエフスク海軍アカデミー修了。ロシア・トルコ戦争時、ニジネドナウ艦隊を指揮。クロンシュタット湾の主指揮官、クロンシュタット軍領事。将軍、侍従武官長。海軍省相談員
カラジン・ニコライ・ニコラエビッチ（１８４２年－１９０８年)。画家、旅行家、作家、民俗学者。軍人として出世し始めた、ロシア軍の中央アジアへの遠征に参加して（１８６０年代－１８７０年代)。パリで絵画を学んだ、サンクトペテルブルグ芸術アカデミーの自由参加者、ロシア水彩画家団体の設立者の１人。ロシアにおける最初の軍事特派員－イラストレーターの１人：１８７６年－１８７８年に雑誌「世界のイラスト」で絵の報告を公開。同じように公開、「ネバ」、「絵画の展望」、「北」、「ウエバーランドとメール」、「グラフィック」、イラストレーション」、「イラストレーション・ロンドン・ニュース」、その他で。１８７４年－１８７９年、ロシア地理協会の探検隊に参加、中央アジアへの。１８９０年－１８９１年、インドを旅行。ウフトムスキイの「東方旅行」を図解した（７００図以上)。
ケイゼルリング・グゴ・ゲンリホビッチ（１８３３年－１９０３年)。公爵。海軍大尉、退役（１８９３年)。極東で捕鯨会社を設立（１８９４年から)。ウラジオストクの遠洋航海学校の保護者会会員（１９１１年1月２７日)。アムール地方研究協会（ＯＩＡＫ　Ｏбщество изучения Амурского края）会員（１８９７年１０月２１日から)。極東における漁業研究協会の共同創設者。
コロゲラス・レオニド・コンスタンチノビッチ（１８３９年5月１８日、ベッサラビア－１８９６年2月１０日、アテネ)。海軍幼年学校修了。１８５９年－１８７１年、シベリア艦隊に勤務（蒸気コルベット艦アメリカ号、輸送船ヤポネッツ号、マンチュール号、砲艦モルシ号)。スクーナー艦ボストーク号船長（１８６８年－１８７１年)、砲艦ソボリ号船長、クリッパー艦ナエズドニク号船長。（１８７９年－１８８５年)。海軍少将（１８９２年)。最終年に装甲艦エカテリナ二世号船長。
コスチレフ・ワシリイ・ヤコブレビッチ（１８４８年－１９１８年)。サンクトペテルブルグ大学東方学部修了（１８７４年)。函館と長崎でロシア総領事。サンクトペテルブルグ大学講師。
クレストフスキイ・フセボロド・ウラジミロビッチ（１８４０年2月１１日、キエフ－１８９５年1月１８日、ワルシャワ)。サンクトペテルブルグ大学歴史哲学部で勉強。作家活動。レソフスクの書記として日本を訪問。出張で極東に滞在、ウラジオストク訪問（１８８０年)。
コルニロフ・アレクセイ・アレクサンドロビッチ（１８３０年5月２６日、トベリスク－１８９３年5月１４日、ペテルブルグ)。海軍中将コルニロフの又甥。海軍幼年学校を修了し

て、黒海で勤務。１８５３年、常規フリゲート艦オデッサ号でシノプス海戦に参加。海軍中尉。１８５４年－１８５５年、セバストポリ防衛で殊勲を立てた。１８５７年8月１２日、クリッパー艦ジギト号に転船、第１アムール艦隊の一員として極東に移動。函館でロシア領事館に勤めた（１８５８年－１８６０年)。１８６０年４月３日から、太平洋艦隊の一員。海軍大尉（１８６０年１０月１７日)。１８６１年1月１５日、上海からクロンシュタットへ出立。スクーナー艦サハリン号船長（１８６２年３月１２日から)、それに乗って長崎へ、その後、コルベット艦バガチリ号に勤務。日本と中国の港に寄港。海軍少将（１８８２年8月３０日)。１８８５年１０月２２日から、太平洋艦隊の指揮官。将軍（１８８８年)。彼の名前は日本海の港に冠されている。

クルゼンシュテルン・イワン・フェドロビッチ（１７７０年１２月８日、レベリ（エストニアのタリンの旧名　＊）－１８４６年8月１２日、レベリ)。海軍貴族幼年学校修了。英国の船で実習（１７９３年－１７９９年)。海軍少尉（１７９８年3月２７日から)。スクーナー艦ナデジダ号でロシア初の世界一周探検隊を指揮し、素晴らしい地理と測深の研究を行った。沢山の採集も行った。ペテルブルグ科学アカデミーの正会員（１８０３年)、名誉会員（１８０６年)。地理研究に対して、デミドワ賞を授与される（１８３７年)。彼の名前は１５箇所の地理点に冠されている。

クジメンコ・M・C　長崎への「慈善艦隊」代表（１９２１年－１９２２年)。

クマニ・ミハイル・ニコラエビッチ　海軍少尉、クリッパー艦イズムルド号船長。

ラングスドルフ・ゲオルグ・ゲンリヒ（グリゴリイ・イワノビッチ）（１７７４年4月６日、ドイツ－１８５２年6月１７日、ドイツ)。ゲッチンゲン大学修了（１７９７年)、そこで公開審査にパスした。クリュゼンシュテルンの探検隊に自然科学者として参加し、スクーナー艦ナデジダ号に乗って、コペンハーゲンからペテロパブロフスクまでの航行を完遂(１８０３年－１８０５年)。途中、北海道のアイヌ人を調査し、カムチャッカ、アリューシャン列島、アラスカで標本を収集。植物学の院生（１８０８年)、動物学（１８０９年9月)、帝国科学アカデミーの動物学に関する特別会員（１８１２年から)。彼に敬意を表して植物に彼の名を冠した：葦草の一種＊＊＊＊＊＊＊＊。

レベデフ・エブゲニイ・フェドロビッチ（１８７９年1月１４日、イシムスク－１９２５年以降)。教師の息子。イシムスク神学校修了（１８９３年)、トボリスク神学校とウラジオストクの東方学校日本中国学科を修了（１９０６年)。装甲艦ポルタワ号での戦闘参加者（１９０５年)。東京で学生（１９０６年)。ムクデン（奉天、(瀋陽の旧称)　＊）のロシア総領事館で通訳（１９０７年)。大連の総領事館で書記（１９０７年－１９１２年)。短期間、長崎で領事の職務を遂行（１９０９年)。函館で副領事（１９１３年－１９２５年)。露日漁業関係に従事。雑誌「ロシアの極東」の共同者（東京、１９２０年)。日本で死亡、他の情報によれば、南アメリカで。

レベデフ・イワン・ニコラエビッチ（１８５０年8月１２日－１９０５年5月１５日)。海軍大佐、１級巡洋艦ドミトリイ・ドンスコイ号の艦長。１９０５年5月１４日－１５日の対馬海戦で受けた傷で死亡。稲佐（長崎の）のロシア人墓地に埋葬された。

レソフスキイ・ステパン・ステパノビッチ（１８１７年8月２３日、フランス－１８８４年２月２６日、サンクトペテルブルグ)。海軍大尉、フリゲート艦リンダ号の船長（１８５３年－１８５５年)。アメリカに派遣された艦隊を指揮（１８６３年－１８６５年)。海

軍省の長（１８７６年－１８８０年)。将軍（１８８１年）

リトケ・コンスタンチン・フェドロビッチ（１８３７年8月２５日、サンクトペテルブルク－１８９２年9月１７日)。伯爵。フリゲート艦アブローラ号に勤務（１８５３年－１８５５年)。貢献で海軍少尉（１８５４年１２月１日)。ペトロパブロフスク・カムチャッカ防衛戦に参加（１８５４年)。フリゲート艦アスコリド号に勤務（１８５７年－１８６０年)。功績で海軍大尉（１８６０年8月１６日)。砲艦ゴルノスタイ号の艦長（１８６６年－１８６７年)。回想記の作者。彼の名前はアムール海峡の岬に冠されている。

リハチェフ・イワン・フェドロビッチ（１８２６年１１月３１日、カザン－１９０７年１１月１５日、パリ)。海軍幼年学校修了（１８４２年)。海軍大佐。太平洋で各種艦船で勤務（１８５０年－１８６１年)。太平洋艦隊指揮官（１８６０年から)。海軍中将（１８７４年)。彼の名前はアナデルスク湾とピョートル大帝湾の岬に冠された（１８６２年)。

ルベンツォフ・Ａ・Г　地方研究者。旅行案内書の作成者。プリモルスクＩＲＧＯ（Ｉｍｐｅｒａｔｏｒｓｋｏｅ Ｒｕｓｓｋｏｅ Ｇｅｏｇｒａｆｉｃｅｓｋｏｅ Ｏｂｓｈｅｓｔｖｏ　帝国ロシア地理学協会　＊）の管理者。日本地理学協会正会員。日本と朝鮮で報告書を出版。

ルンド・ロベルト・アレクサンドロビッチ（１８２８年3月１日、フィンランド－１８７５年１１月、サンクトペテルブルグ)。海軍大尉。コルベット艦バリャク号の船長（１８６４年－１８６５年)。その船で長崎に立ち寄った（１８６４年)。

ルフマノフ・ドミトリイ・アファナシエビッチ（１８６８年、サンクトペテルブルグ－１９４６年)。軍学校、航海学校で勉強。遠洋航海の船長。１９０３年に、最初の本「海の物語」を公刊。極東の海へ航海。長崎で「慈善艦隊」の海の代理人。

マカロフ・ステパン・オシポビッチ（１８４８年１２月２７日、ニコラエフ－１９０４年3月３１日、旅順)。ニコラエフスク海軍学校修了（１８６５年)、シベリア艦隊と太平洋艦隊で勤務。著作「北極海と地中海の水の入れ替えについて」で帝国科学アカデミー賞を授与される（１８８５年)。コルベット艦ビテヤジ号で出張し、太平洋で研究を行う（１８８６年－１８８９年)、それにより、科学アカデミーとＩＲＧＯ(**帝国ロシア地理学会**)から受勲される。ＩＲＧＯの仕事に精を出した、論文を出した。科学アカデミーの科学手段を利用して、エポフと一緒になってウラジオストクの博物館のコレクションのシステムを立案した。将軍。露日戦争に参加。ウラジオストクの太平洋海軍学校に彼の名が冠されている。

マクシモフ・アレクサンドル・セルゲービッチ　外交官。長崎におけるロシア領事（１９１５年6月－１９２５年2月)。

マシケビッチ・ニコライ・ワシリエビッチ。ノボロシア大学法学部修了。オデッサの実科学校で数学を教授。その後、ハバロフスクに１０年。１９０２年1月初め、長崎に、日本における最初のロシア人学校を開設。露日戦争時閉校。

メンデレーフ・ウラジミル・ドミトリエビッチ（１８６５年1月２日－１８９８年１２月１９日)。化学者メンデレーフの息子。海軍学校修了。１８８４年から、艦隊に将校として勤務。１８９０年5月１２日から１８９４年１０月９日まで、フリゲート艦パミャチ・アゾバ号に。１８９０年6月１２日－１８９２年１０月３０日、フリゲート艦と共に太平洋に。１８９８年に退役。大蔵省における航海教育の査察官。この年の末に、インフルエンザで

死亡。１８８０年に、アソフスク・ダムの建設のアイデアを提出、ケルチ海峡閉鎖方による、黒海艦隊の基地設営のために。ダムの計画を著作「ケルチ海峡堰き止めによるアゾフ海の水位上昇計画」で公刊した（１８８９年)。海洋輸送の開発計画を発案した。サンクトペテルブルグの文学者の橋に埋葬された。

メルツアロフ・ドミトリイ・ワシリエビッチ（１８２７年－１８９４年、ガッチナ)。フリゲート艦スベトラーナ号の高級船医。長崎にロシア人沿岸病院を設立（１８６０年－１８６１年)。バルチック艦隊の旗艦医師（１８６５年から)、１８８３年－１８８６年、クロンシュタット海軍病院主任医師、湾の医療部門の長（１８８３年－１８８６年)。

ミレール・カール・ペトロビッチ（１８４０年6月３０日－１８９５年１２月１３日、長崎)。海軍大尉。２級巡洋艦ジギト号の船長。海軍中佐（１８８５年２月２６日)。稲佐のロシア人墓地に埋葬。

ナジモフ・コンスタンチン・ニコラエビッチ（１８３８年1月１９日－１９０４年4月３０日)。海軍幼年学校修了。１８６２年８月から、コルベット艦ノビク号に乗り極東へ、函館で勤務、ピョートル大帝湾の地図作成に参加。１８６４年９月に、コルベット艦バガチリ号に乗り長崎を訪問。１８７５年－１８８１年、クリッパー艦クレイセル号の船長、太平洋艦隊の一員として世界一周航海を完遂。１８７８年、それに乗って長崎へ来訪。

ナジモフ・パベル・ニコラエビッチ（１８２９年6月２７日－１９０２年１２月１１日、サンクトペテルブルグ)。海軍幼年学校修了（１８４５年)。ポシェット湾にノブゴロドスク哨所を設置（１８６０年４月１２日)、最初の調査を行う。海軍中将（１８８９年８月３０日)。太平洋艦隊司令官、ＯＩＡＫ(アムール地方研究協会）の博物館の開設に参加（１８９０年９月３０日)。サンクトペテルブルグのボルコフスク墓地に埋葬。彼の名前は、浅瀬（１９７２年までーチュハルド)、岬（１８９１年）と半島、ピョートル大帝湾の。

ナパルコフ・アレクサンドル・ゲオルゲビッチ　長崎の古老ナパルコフの息子。長崎への「慈善艦隊」のサブエージェント（Ｓｕｂａｇｅｎｔ)。

ニコライ（世界では）カサトキン・イワン・ドミトリエビッチ）（１８３６年８月１日、スモレンスクー１９１２年２月、東京)。サンクトペテルブルク神学校修了（１８６０年)。函館の領事館司祭（１８６１年７月２日から)。日本への最初のロシアの宗教使節団の団長（１８７０年４月６日設立)。主教（１８８０年)。大主教（１９０６年４月)。聖人の列に加わる。著書多数、特に翻訳書。

ニコライ・アレクサンドロビッチ（ロマノフ）（１８６８年５月６日、ツアルスコエ・セローー１９１８年７月１６日、エカテリンブルグ)。アレクサンドル三世の長男。世界一周航海を遂行し、日本に立ち寄った（１８９１年)。最後のロシア皇帝（１８９４年１０月２１日－１９１７年３月２日)。

ノビコフ－プリボイ（匿名；本名はノビコフ）・アレクセイ・シリチ（１８７７年３月１２日、タンモリスク県マトベーフスコエー１９４４年４月２９日、モスクワ)。農家に生まれる。バルチック艦隊の水兵として勤務（１８９９年－１９０６年)。露日戦争（１９０４年－１９０５年）時、対馬海戦に参加。１９０６年から作品を発表する。最初の選集「海の物語」は１９１４年に募集で排除された（１９１７年に出版)。革命活動のために皇帝権力によって迫害された、亡命生活をした（１９０７年－１９１３年)。長編歴史物語「対馬」

は素晴らしい作品（第１部－２部、１９３２年－１９３５年；第４版１９４０年、ソ連邦国家賞、１９４１年)。労働赤旗勲章とメダルを授与された。

ノボシリスキイ・アンドレイ・パブロビッチ（１８３７年１０月２８日、サンクトペテルブルク－１８８１年9月１１日まで、サンフランシスコ)。海軍幼年学校修了。海軍大尉（１８７０年1月１日)。クリッパー艦フサドニク号を指揮し、極東海を高校（１８７３年－１８７９年)。海軍大佐（１８７９年)、太平洋艦隊の旗艦艦長（１８８０年－１８８１年)。日本から帰還し、サンフランシスコと死亡、そこで埋葬。

オラロフスキイ・アレクサンドル・エピクテトビッチ　外交官。長崎の最初のロシア領事（１８７６年)。

オルジフ・ボリス・ドミトリエビッチ（１８６４年１１月２１日、オデッサ－１９５６年、チリのサンチャゴ)。商人の息子。トムスク実科学校修了（１８８１年)。「人民の意思」の参加者。逮捕時、武器で抵抗を示した（１８８６年)。無期強制労働に断じられ（１８８８年)、シリセリブルグに置かれ（１８８９年－１８９８年)、その後、東シベリアに流刑、ウラジオストクに住んだ。大衆向けの詩とバラードの作者。ＯＩＡＫ（アムール地方研究協会）の正会員（１８９９年9月１４日)。日本へ移民し（１９０５年)、長崎で雑誌「意志」を編集した（第１１号から)。１９１０年、妻と３人の子達と一緒にチリへ移民。

ポリャノフスキイ・ジノビイ・ミハイロビッチ　６等文官。朝鮮、長崎におけるロシア副領事（１９０６年－１９０９年)。ケーニスベルグで領事（１９０９年－１９１４年)。

ピルキン・コンスタンチン・パブロビッチ（１８２４年１２月２６日、サンクトペテルブルグ－１９１３年1月１２日、サンクトペテルブルグ)。海軍幼年学校修了（１８４１年)。フリゲート艦アブローラ号で海軍大尉としてカムチャッカまで航行（１８５３年－１８５４年)。クリッパー艦アブレク号を指揮（１８６０年－１８６５年）し、長崎に寄港（１８６４年)。太平洋艦隊指揮官（１８６９年－１８７１年)。海軍技術委員会の長（１８８８年から)。将軍（１８９６年)。

ポポフ・アンドレイ・アレクサンドロビッチ（１８２１年9月２２日－１８９８年3月６日)。海軍幼年学校修了（１８３７年)。海軍大佐（１８５６年8月２８日)。第２アムール艦隊指揮官として極東に派遣される（１８５８年－１８６０年)。海軍少将（１８６１年4月２３日)。太平洋艦隊指揮官（１８６１年－１８６４年)。将軍（１８９１年)。

ポシェット・コンスタンチン・ニコラエビッチ（１８１９年１２月１日、フィンランド－１８９９年4月２６日、サンクトペテルブルグ)。海軍幼年学校修了。海軍少尉（１８３６年１２月２４日)。海軍大尉（１８４９年１２月６日)。著書「軍艦の武装」に対して皇帝の贈り物とデミドア賞を授与される（１８５０年)。プチャーチンの特別任務の将校（１８５２年－１８５４年)。稲佐のロシア人村の最初の視察に参加（１８５４年1月)。海軍少将で長崎に２度目の訪問をする（１８７２年)。海軍中将（１８６８年1月１日)。国会議員（１８８８年)。帝国科学アカデミー、ＩＲＧＯ（Ｉｍｐｅｒａｔｏｒｓｋｏｅ Ｒｕｓｓｋｏｅ Ｇｅｏｇｒａｆｉｃｅｓｋｏｅ Ｏｂｓｈｅｓｔｖｏ　帝国ロシア地理学会）名誉会員。彼の名前はニュータウン、ピョートル大帝湾の湾、泊地に冠されている。プジノ・オレスト・ポリカルポビッチ（１８１９年2月２４日、ノブフォロドスク郡－１８９１年6月３０日、ノブゴロド)。海軍幼年学校修了。太平洋で船団の指揮者（１８７

５年－１８７７年)。海軍中将（１８８２年)。

プチャーチン・エフィム（エブフィミイ）・ワシリエビッチ（１８０３年１１月８日、ノブフォロドスク県－１８８３年１０月１６日、パリ)。海軍幼年学校修了。海軍大尉（１８２８年２月２２日)。何度か戦闘に参加。勤務優秀に付き海軍中将（１８５１年４月)。１８５３年に、フリゲート艦パラーダ号で中国と日本に派遣される、通商条約の締結のために。朝鮮と沿海州の海岸線を調査（１８５４年４月－５月)。１８５５年1月２６日、日本と下田条約を締結、通商と国境に関する。１８５７年、中国に出張、臨時公使と全権大臣の肩書きで、１８５７年１２月２４日、東海艦隊指揮官任命を持った管理運営コミッサールに資格を変更。蒸気コルベット艦アメリカ号に乗って中国への途中で、聖ウラジオストク湾と聖オリガ湾を開いた。１８５８年6月１日、中国と天津条約を締結、１８５８年８月７日、日本の江戸で条約に署名。遺体は中国に移送され、キエボーペチェルスカヤ修道院に埋葬。彼の名前はあちこちの岬に冠されている、皇帝湾（現在のソビエト湾)、ベーリング海のプロビデニヤ湾の。またピョートル湾の島にも。

ラスポポフ（ロスポポフ（匿名A. ストロモフ）・ニコライ・アレクサンドロビッチ。外交官、東京でロシア大使館に勤務、朝鮮、長崎、シンガポールでは領事館に。パリで出版した著書多数。晩年をフランスで過ごした。

レザノフ・ニコライ・ペトロビッチ（１７６４年3月２８日、サンクトペテルブルグ－１８０７年３月１日、クラスノヤルスク)。家庭教育を受けた。砲兵隊に勤務、その後、親衛隊のイズマイロフスク連隊へ。露米会社の設立者の一人。日本への公使の使命を持った侍従、初めてのロシアの世界一周探検隊の指導者（１８０３年6月１０日)。１８０４年９月２４日、長崎に到着、１８０５年４月６日、カムチャッカへ出港。

レメゾフ・ニコライ・ウラジミロビッチ（１８５５年5月、カザン－１９１５年１１月１４日、ウラジオストク)。ウファ古典学校の測量査定官コースを修了（１８７３年８月)。ウファ県執行機関の土地測量局の職員（１８７６年４月１日から)。ウスリースク鉄道建設に関する仕事の長の事務部の記録係（１８９１年２月２０日から)。新聞「ウラジオストク」の所有者、公的には１８９３年２月２３日に職務に就いた（１９０６年２月に閉刊)。ウラジオストクにスキデルスキー質屋を経営した。

リムスキイーコルサコフ・ボイン・アンドレービッチ（１８２２年7月１４日、オルロフスク県－１８７１年１１月４日、イタリアのピサ)。海軍幼年学校修了（１８３８年)。海軍大尉（１８４３年４月１１日)。スクーナー艦ボストーク号を指揮し、サハリンの西側海岸、ネベリスク海峡、アムールの潟と河口の作図に従事（１８５２年－１８５５年)。稲佐の最初のロシア人村の視察に参加（１８５４年)。彼の名前はピョートル大帝湾の島に冠されている。

ログリャ・イワン・グリゴリエビッチ（１８３８年1月２０日－？)。海軍大尉、スクーナー艦アレウート号艦長、それに乗り長崎に立ち寄った（１８６６年)。

ルッセリースジロフスキイ・ニコライ・コンスタンチノビッチ（１８５０年１２月３日、モギレフ－１９３０年４月３０日、天津)。大学の医学部を修了。ブカレストで公開審査にパスした（１８７７年)。ロシアで非合法政治活動に従事。アメリカ市民（１８９２年５月９日から)。ハワイ議会議長（１９０１年)。退職し、上海へ去る。シベリアの収容所への武装襲撃を組織したがって。アメリカ人ジャーナリストであるケンナンの提案に従

って、日本に向かった、ロシア人軍事捕虜の中で説明活動に従事した（１９０５年)。新聞「意志」の出版者で編集者、パンフレットを印刷した。フィリッピン、天津で生活（１９２０年9月２３日から)、医療活動に従事した。ロシアにおける飢饉者達の援助委員会の副代表（１９２１年１０月１４日から)。元政治流刑囚協会会員。死後、残された書類はプラハに送られた、その後モスクワに。

サモイロフ・ウラジミル・コンスタンチノビッチ（１８６６年9月７日－１９１６年2月１日)。ポルタバァ幼年学校修了（１８８４年)、ニコラエフスク技術学校、ニコラエフスク参謀本部アカデミイー修了。参謀本部陸軍大尉、プリアムール軍管区に勤務。陸軍大佐、日本での軍事エージェント（１９０３年から)。露日戦争の参加者。長崎のロシア人墓地にの兵士の遺体の搬送を実現。少将（１９０９年)。極東に関する書籍の著者。

シガ・チカトモ（１８４２年－１９１６年)。長崎の村長の家で生まれた、１９世紀後半にロシア語の通訳として知られた。１８７７年頃、日本の外務省を退職した後、長崎に住んだ。正教を受け入れ、洗礼でアレクサンドル・アレクセビッチの名を受け入れた。

シモダ・ピョートル・ニコラエビッチ（１８７０年8月５日、長崎－１９４５年8月１７日、朝鮮)。日本人の企業家。ウラジオストク（１８８５年から)、ニコラエフスク・ナ・アムーレ（１８８６年7月２１日から）でビジネスを行った。正教を受け入れた。会社「シモダ＆コ」を設立。

シンケビッチ。コルベット艦ボエボダ号の船医、長崎に海軍病院を設立（１８６０年)。

スコロドモフ・ビタリイ・アレクサンドロビッチ（１８８０年5月５日－１９３２年6月９日、神戸)。北京のロシア大使館の館員（１９０６年－１９０７年)。東京で学生（１９０８年－１９１４年)、神戸で領事（１９１４年、１９２３年－１９２５年)、長崎で副領事（１９１４年－１９１５年7月)、とフサン(釜山？　＊)で(１９１５年－１９２３年？)。神戸の外国人墓地に埋葬。

スタルク・オスカル・ビクトロビッチ（１８４６年8月１６日、グロドネンスカヤ県－１９２８年１０月３０日、ヘルシンキ)。海軍幼年学校修了（１８６４年)。海軍大尉（１８７０年1月１日)。クリッパー官アブレク号で極東に移動し（１８７１年－１８７２年)、他の船に勤務（１８７４年－１８８９年)。スクーナー官ボストーク号を指揮し、長崎に寄港（１８７７年)。若い艦隊司令官で旅順司令官（１８９８年から)。中将で井併用艦隊司令官（１９０２年－１９０４年)。

シタリツキイ・コンスタンチン・ステパノビッチ（１８３９年9月１４日、ポルタワ－１９０９年１１月１１日、ポルタワ県？)。海軍少尉に昇進して海軍幼年学校を修了（１８５７年9月１３日)。日本海、オホーツク海、ベーリング海の調査に従事（１８６６年5月１４日－１８７１年8月１７日)。１８６８年のマンゾフスク戦争に参加したことにより、聖ウラジミル４等勲章を授与される、剣とリボン付きの。極東の水路研究に対して、リトケ冠称の金メダル。海軍少将で退役（１８９０年)。

スゼフ・パベル・ワシリエビッチ（１８６７年１０月３０日－１９２８年6月１２日)。ウラルのオチェルスク鉱山の理事。野戦軍での勤務中、プリモーリエと満州で標本を採集（１９０５年)。植物の形態学と系統学講座のアシスタント（１９１８年)、ペルミ大学教育学部の植物学講座教授（１９２４年)。科学論文を５０以上公表、その中で最も重要なのが「ペルミ県境におけるウラルの植物相の概要」、これは国の指導的植物学者の高い評価

を得た。講義をした：「博物館学」、ウラルの植物の分布図」。ロシア植物協会のペルミ支部の組織者の内の一人。

タカイ・アントニイ（洗礼まではマキオ）（１８７４年1月１７日、長野県松代－１９６６年1月３日、東京）。１８８４年に改宗。ニコライ神父の勧めで、東京でロシア宗教使節団の正教セミナールで勉強。１２年間の学習を遂行して、東京主教座教会から遠くない本郷の家屋で教区の教育活動者の資格で働いた。長崎で約４０年間、長崎で正教教区を指導した。司祭、日本におけるモスクワ総主教教会管区の管長。妻はベラ・カジマ、東京の女性新神学セミナールを修了した。

テルーアサツロフ・ザハリイ・リボビッチ（１８９０年－１９３８年）。ソビエトの外交官。カレリアで銃殺された。

テレンチェフ・ウラジミル・アフリカノビッチ（１８４０年１２月１０日－１９１０年5月１６日、ウラジオストク）。１８５６年に海軍に勤務。スクーナー艦ツングス号の艦長（１８７２年）、砲艦ゴルノスタイ号艦長（１８７３年－１８７８年）。慈善艦隊エージェント、海軍少将で退役（１８８０年から）。

ウンコフスキイ・イワン・セメノビッチ（１８２８年3月２９日－１８８６年8月１８日、＊＊＊＊＊県コズロボ）。海軍幼年学校修了。第８艦隊の乗組員に海軍少尉として指名される（１８３９年１２月２１日）。海軍大尉（１８４５年4月１５日）。海軍中佐（１８５４年2月１０日）。１８６０年5月１６日、「熱心な勤務に注目し」、世界一周航行におけるフリゲート艦アスコリド号の指揮にたいして、聖ウラジミル３等勲章を授与、海軍少将に昇任（１８６１年6月２８日）。ヤロスラブリ軍総督に任官。１８６６年１０月２８日、海軍中将に昇任。モロガ、ヤロスラブリ、リビンスクの名誉市民。彼の名前はアスコリド海峡の岩礁に冠されている。

ウスチノフ・ミハイル・ミハイロビッチ。長崎のロシア領事（１８９６年から）。

ウフトムスキイ・エスペル・エスペロビッチ（１８６１年－１９２１年、ロシア）。極東への旅行で、皇太子ニコライ・アレクサンドロビッチに同行した（１８９０年－１８９１年）。ＯＩＡＫ（アムール地方研究協会）の会員（１８９１年5月）。露中銀行の理事長（１８９６年－１９０３年）。新聞「サンクトペテルブルグ公報」の編集長。

フェドロフスキイ・ミハイル・ヤコブレビッチ（１８２５年１１月7日、サンクトペテルブルグ－１８８１年1月２５日、パリ）。海軍幼年学校修了（１８４０年）。海軍大尉、コルベット艦ノビク号船長、この船で長崎に寄港（１８６０年）。海軍中将（１８８１年）。サンクトペテルブルグのスモレンスク墓地に埋葬。

フィリッペウス・アレクサンドル・フリドリゴビッチ（１８２８年－１８８９年）。サンクトペテルブルグで中学校修了。東シベリアの主管理局の役人（１８５１年6月から）：裁判代表委員、通訳、カムチャッカ県知事本部の図書館員。企業家（１８６３年から）。輸送機関「カムチャトカ」の所有者。ペテロパブロフスクーカムチャットスキイでイギリスーフランス戦争で亡くなった戦士の墓地に寺院を設立。長崎における最初のロシア人商業領事。この活動により、聖スタニスラフ２等勲章を授与（１８６９年）。露日交易に間する情報を収集。極東におけるロシアの交易航行の設立者。オホーツク海で船上で亡くなった。アヤンに葬られた。

フルゲリム・イワン・ワシリエビッチ（１８２１年3月１１日、ホンゴラ、フィンランドー

１９０９年9月２１日、同じところ)。露米会社で働いた（１８５０年－１８６４年)。輸送船タデヤク号と帆船クニャジ・メニシコフ号の船長、それらに乗って長崎に寄港（１８５３年－１８５４年)。稲佐のロシア人村の初めての視察に参加（１８５４年１月)。プリモリスク地方の軍知事（１８６５年－１８７０年)。

チェレムシャンスキイ・アポロン・エブグラフォビッチ（１８６１年－１９０５年)。サンクトペテルブルグ軍医療アカデミー修了。バルチック艦隊に勤務(１８８８年－１８９０年)。極東に転居（１８９１年)。ウラジオストク海軍病院上級医局員。極東で初めて腫瘍の除去の手術に成功。その結果を、南ウスリースク地方の医者団体の会議で報告をした（１８９３年８月２５日)。長崎沿岸病院の長（１８９４年－１８９５年)。南ウスリースク地方の医者団体の代表（１８９７年－１９０２年)。ＯＩＡＫ(アムール地方研究協会）の長（１８９７年－１９００年)。

シャンツ（フォン）・フリドリッヒ・セバスチヤノビッチ（１８３６年１２月１７日－１９０７年１１月３０日)。フィンランドの貴族出身。海軍幼年学校修了。１８５９年から極東へ航行、１８６１年－１８６２年に最初の日本の水兵の教育に従事。海軍大尉（１８７９年１月１日から)。１８７１年3月１５日、クリッパー艦アブレク号の船長に任命される（１８７７年（？　＊))。海軍中将（１８７８年1月１日)。

シャフロフ・Д・П　海軍中将。コルベット艦バガチリ号の船長（１８７４年)。

シェストノフ・ニコライ・ヤキモビッチ。プリモルスカヤ地方の収税士（ニコラエフスクーナーアムール、その他）（１８９７年－１９０４年）と南サハリンで（１８９８年－１８９９年)。植物学者、日本で植物標本を採集（１８８０年）と南ウスリー地方で（１９００年)。

シェルビニナ・クリスチナ（１８７８年１２月２４日－１９６６年9月２３日、長崎)。ロシア人船長の妻、ウラジオストクに埋葬された。

ヤシコフ・イワン・セメノビッチ（１９０２年－１９８４年2月１１日、カラガンダ)。稲佐のロシア人墓地における埋葬者一覧の編者の１人。

長崎のロシア人墓地の墓標（2007年に作成）

２２０人以上が列記されている（何と多いことか！！！。翻訳省略）

文献目録

多数あり　（翻訳省略）

目次

著者より
先史時代、オランダの勧告
ニコライ・レザノフの失敗、イワン・クルゼンシテルンのナデジダ号
フェートン号事件
エフイム・プチャーチンの成功
アスコリド号の墓、お寺での碇泊
碇泊、ロシア病院の整備
戦争の前触れ、対馬
繁華街を離れて
日本でのミハイル・ベヌコフ
帝との会見
バガチリ号、長崎を救う
外国人居留地
ロシア人貿易商、領事館の開設、ロシア人実業家
ロシア人村、稲佐での最後の係留
水兵の新居
日本におけるステパン・マカロフ
契約の妻
皇太子の到着
大化学者の孫娘
ボランテア
アントン・チェーホフの友人
初めての探検、ウラジオストクでの長崎県人
海軍病院
温泉での休息
１９世紀末：ロシアからの初めての民間人移住
ユダヤ人共同体
長崎－ロシアの極東人のための「故郷」
正教区
アレクサンドル・ガガーリンの「海の家」
日本式レストランとロシア式ホテル、日本女性の愛情
戦争時：稲佐の新墓地
長崎の「意思」
戦後
長崎－「さよなら」
ロシアの移民達の最後の係留地
結語の代わり：長崎での日記より

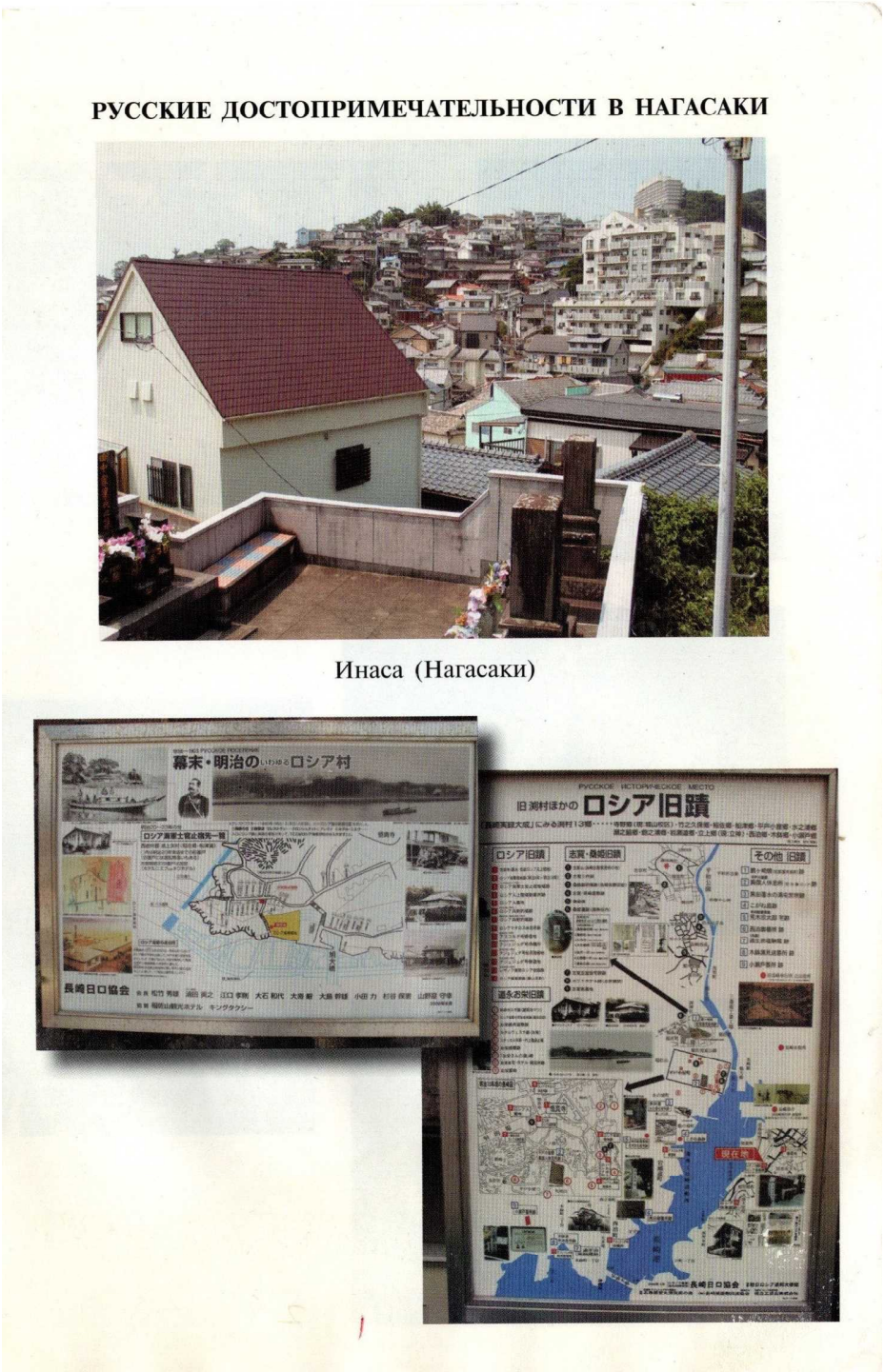
１日目（２００７年８月１０日）　「旅行－長崎－９０」、「母なる岸」へ帰還
２日目（８月１１日）　町での付き合いと「祖先」との出会い
３日目（８月１２日）　稲佐の旧ロシア人村で､悟眞寺で
４日目（８月１３日）　入れ墨があったのか？
５日目（８月１４日）　オランダ人墓地と志賀家墓
６日目（８月１５日）　ロシア領事館とその所有物の探査
７日目（８月１６日）　あなたは誰ですか、オキニ（？　＊）さん？
８日目（８月１７日）　消えた出島
９日目（８月１８日）　グローバー庭園と蝶蝶婦人
１０日目（８月１９日）　アスコリド号船員墓地と旅行案内人の役割
１１日目（８月２０日）　諏訪神社、ブセボロド・クレトフスキーは何を見たのか
１２日目（８月２１日）　骨董品店で私は何を探したか？
１３日目（８月２２日）　国際墓地坂本、デンビの墓
１４日目（８月２３日）　平和公園、原爆碑
１５日目（８月２４日）　将校区と辻堂を見て
１６日目（８月２５日）　日本の名所について
１７日目（８月２６日）　大村国際墓地
１８日目（８月２７日）　嬉野温泉（佐賀県　＊）
１９日目（８月２８日）　警察署においてのヤシコフ、プリボードの調査
２０日目（８月２９日）　再びロシア人墓地について
２１日目（８月３０日）　木村さんとの交流
２２日目（８月３１日）　ニコライ・レザノフの痕跡について
２３日目（９月１日）　食事、私たちは日本人をどのように理解したか
２４日目（９月２日）　地区の墓地について
２５日目（９月３日）　神道について
２６日目（９月４日）　博物館の図書館と長崎の夜
２７日目（９月５日）　雲仙、日本におけるロシア人の保養所
２８日目（９月６日）　日本人、その文化的価値、長崎の小庭園を見ながら
２９日目（９月７日）　「安らかに」、墓地での最後の日
３０日目（２００７年９月８日）　さよなら長崎！
後書き

付録１　伝記辞書
付録２　長崎におけるロシア人墓地の石碑
文献目録

２０２４年１１月２６日校正完了

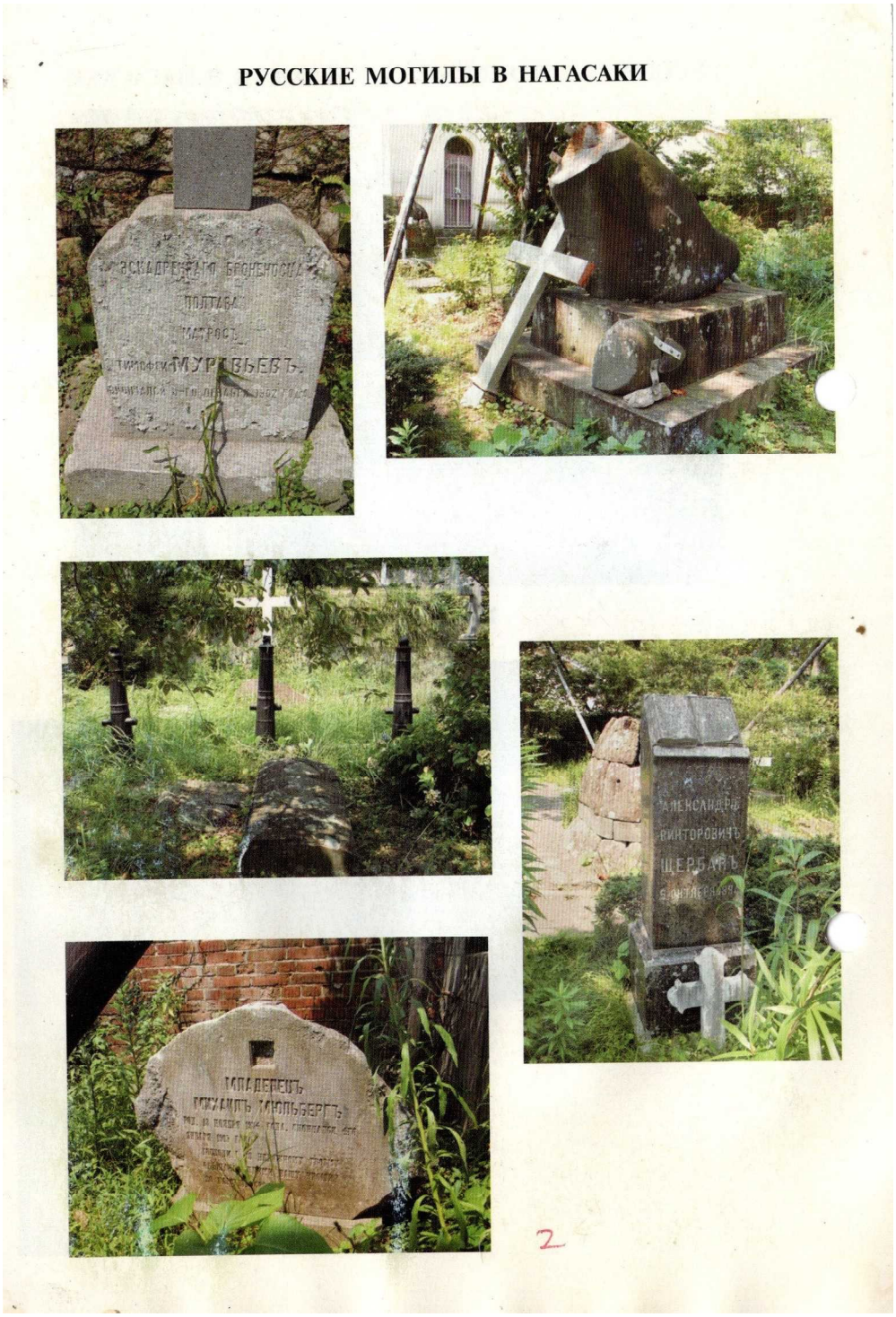
写真

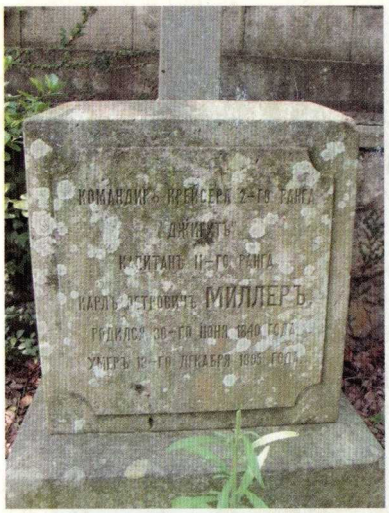
長崎のロシア人の名所



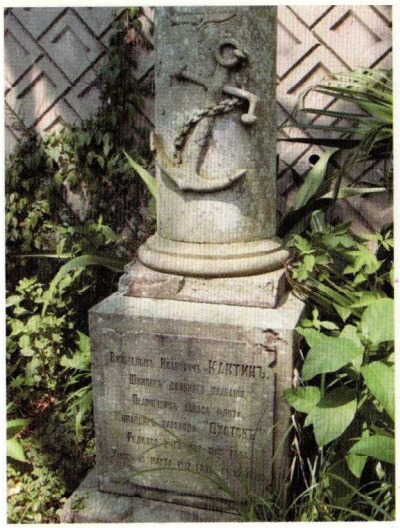
稲佐（長崎）

長崎のロシア人墓地

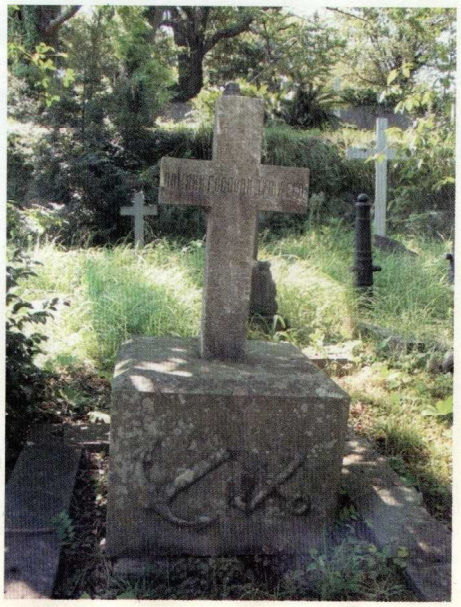

РУССКИЕ МОГИЛЫ В НАГАСАКИ
ПОЛТАВА
МАТРОСЪ
МУРАВЬЕВЪ
АЛЕКСАНДРЪ
ВИКТОРОВИЧЪ
ЩЕРБАКОВЪ
2


КОМАНДУЮЩІЙ КРЕЙСЕРА 2-ГО РАНГА
ДЖИГИТЪ
КАПИТАНЪ 1-ГО РАНГА
КАРЛЪ ЯКОВЛЕВИЧЪ МИЛЛЕРЪ
РОДИЛСЯ 26-ГО ІЮНЯ 1849 ГОДА
УМЕРЪ 12-ГО ДЕКАБРЯ 1905 ГОДА

3



4



5

УНЗЕН

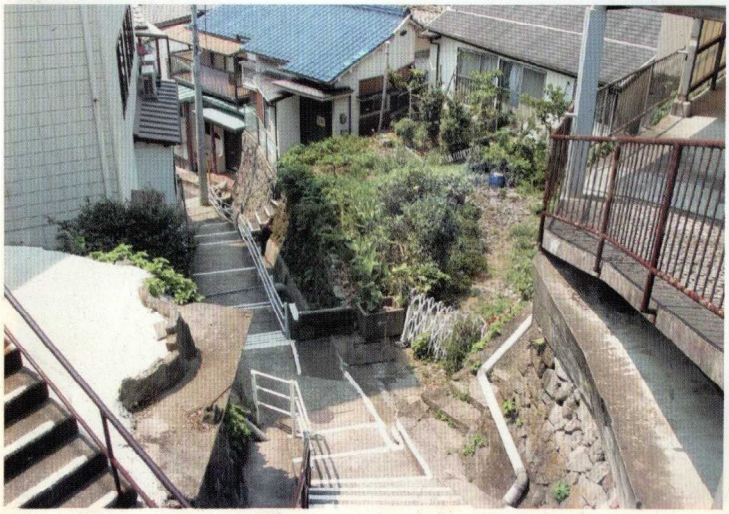
6

Нагасаки, мост Очки

長崎、眼鏡橋

悟眞寺

ХРАМ ГОСИНДЗИ



Лестница с храма Госиндзи 8

悟眞寺からの階段

長崎の遠望

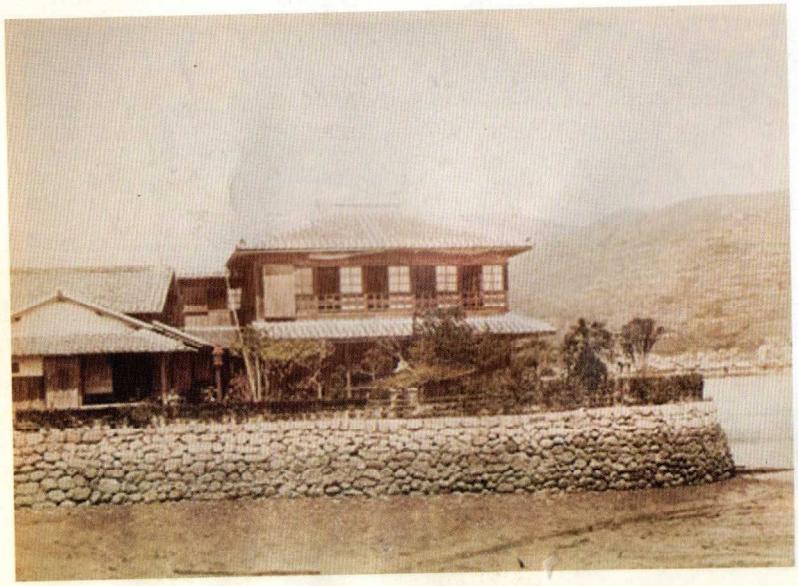
Общий вид Нагасаки

Около этого места находилось Российское генеральное консульство

この辺りに、ロシア総領事館があった

長崎の通り、１８７０年

Улица Нагасаки, 1870



Ресторан «Волга» 10

レストラン「ボルガ」

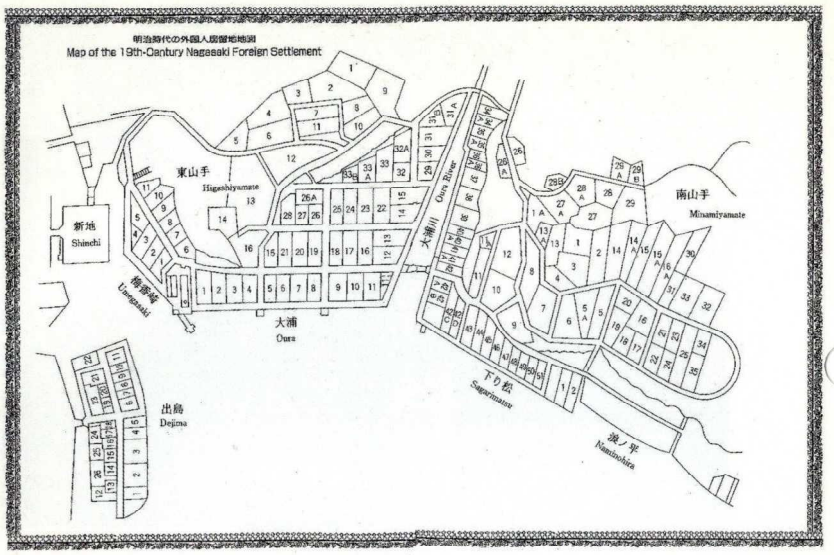
シェルビナ（女性　＊）

Х.Р. Щербина

Надгробие Х.Р. Щербиной 11

シェルビナの墓

長崎の外国人村の地図



План иностранных поселений в Нагасаки

Еврейское кладбище в Нагасаки 12

長崎のヨーロッパ人墓地

長崎に居たロシア人達。ロシア人墓地にて。中央に司祭セルゲイ、

Русские в Нагасаки. На Русском кладбище, *в центре* епископ Сергей

Настоятель Русского храма в Нагасаки

Отец и сын Менделеевы

13

長崎のロシア教会の司祭。　　メンデレーフ父子

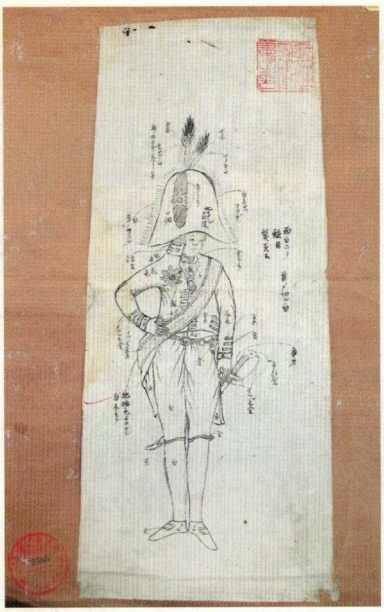
ロシア人の墓碑、２０世紀初め。

Русские могилы, начало XX века

Благодарность жителям Нагасаки за сохранность русских могил

ロシア人の墓の保存に対する長崎住民への感謝の祈念碑

ニコライ・レザノフ



Николай Резанов
1804年 長崎へ

Около этого места находилась резиденция 15
Н.П. Резанова

この付近に、レザノフの公邸があった

オランダ人村（出島　＊）の模型

Макет голландского поселения

Голландское кладбище 16

オランダ人墓地

本書は、著者が日本の財団から研究助成を受けて、日本で一年間の実地研究（二〇〇六～七年）を行った際に収集した資料と、日本、ロシア、アメリカ等の図書館の所蔵資料から得た事実を基に執筆したものである。「日本のロシア人」研究書シリーズの第二作目である本書は、二百年以上に及ぶロシア人の長崎滞在の歴史を初めて記述し、長崎におけるロシア人コミュニティーについて著している。日露の隣国友好関係に関する多くの情報は、時間が経過し喪失してしまっていたのだが、著者は、それらの失われていた情報を復興しようと試みたのである。十九世紀に出版された回顧録やアーカイブの資料を広く活用した結果、本書は、歴史学の業績たるに不可欠である真実性が付与されたものとなった。本の構成は、年代順に概説形式となっている。著者は、ニコライ・レザノフやエフイム・プチャーチンのような歴史上著名な人物だけではなく、多くの無名なロシア人についても語っている。長崎で日本人女性と結婚したロシア人もいる。長崎の地に終生留まった人々の名前が、この本には記されているのである。それ故、著者はこの本を、「ロシア人、長崎での愛と死」と題したい想いである。収集資料すべてを綿密に分析し出来上がった本書は、日本南部のロシア人の存在について扱った類を見ない参考文献といえる。それに、資料収集の間に筆者が綴った実地調査日誌も興味深い。稲佐（長崎市）のロシア村住民の詳細を明らかにした一冊である。

裏表紙